なにわ・大阪文化遺産学研究センター 2006

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

ごあいさつ

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターは、今年で２年目を迎えました。2006年３月９日には、センター棟が無事に竣工式を終え、研究員一同、新しい研究環境のもとで今年度のスタートを切ることができました。

今年度は、昨年よりも研究行事および調査活動が増加し、祭礼遺産、生活文化遺産、学芸遺産、歴史資料遺産の４つの各プロジェクトの研究員は、大阪府下へ出かけ、その調査成果をまとめる日々が続きました。同時に、各プロジェクトの枠組みを超え、相互に意見を交わしながら「文化遺産学」の方法を模索し続けています。

2006年度の主な研究行事としては、計７回の研究例会と「近世大坂の学芸」・「中・近世大坂の寺院と歴史資料遺産」の２回のNOCHSレクチャーシリーズ、地域連携企画第２弾「八尾安中新田植田家の文化遺産」のほか、初の試みとして「天王寺舞楽の魅力」「お茶と茶釜～千里庵へのいざない～」の２回にわたるワークショップを開催いたしました。当センターが主催するワークショップは、地域の人達に、今に残る大阪の文化遺産を実際に鑑賞し、体験し、感じていただく機会を提供することによって、われわれ研究員も含め、文化遺産への理解を深めるという意図のもとに実施しています。

また、10月には第１回外部評価委員会を開催し、３人の外部評価委員により、当センターの調査・研究活動について客観的なご意見を賜る機会を得ました。

３年目となる2007年度には、文部科学省の中間審査を控えており、センターの活動も正念場を迎えることになります。われわれは、今後も「何が文化遺産なのかを構想し、その研究の方途を模索し、構築していく」という当センターの基本的な研究姿勢を大切にし、より一層尽力をしてまいる所存でございます。

最後に、当センターの活動に対してご理解を寄せていただいております関係諸機関および関係者の方がたに厚くお礼を申し上げます。

2007年３月

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

センター長　髙　橋　隆　博

●目　　次●

ごあいさつ…… なにわ・大阪文化遺産学研究センター・センター長　髙橋　隆博（ｉ）

【特　集】
関西大学120周年記念行事シンポジウム
基調講演「日本のなかの大阪文化遺産」…… 髙橋　隆博（１）
第三回NOCHS文化遺産学フォーラム「まちづくりと文化遺産」
基調講演「まちづくりと文化遺産」…… 神野　直彦（12）
パネルディスカッション

【研究ノート】
「伊勢長島藩主 増山雪斎の文人交流 ―『独楽園賀詞帖』に見る―」…… 有坂　道子（*1*）
「寺社境内および周辺における「にぎわい」に関する基礎研究
―研究の目的と方法 ―」…… 妻木　宣嗣（53）

【調査報告】
「ボストン美術館所蔵上方絵目録」…… 北川　博子（85）

【資料紹介】
「大阪の河川と海港の文化と文学（稿）
―地域学・地域文学論資料収集の一作業―」…… 鶴崎　裕雄（*15*）
「横山桂子『露の朝顔』－江戸の武家女性が見た大坂と上方」…… 藪田　　貫（*83*）

【新収資料紹介】……（129）

【研究センター日誌】
・センター全体の活動報告……（133）
・各プロジェクトの活動報告……（142）
P.D.（142）／祭礼遺産研究プロジェクト（146）／生活文化遺産研究プロジェクト（152）
学芸遺産研究プロジェクト（158）／歴史資料遺産研究プロジェクト（162）
・2006年度会議報告……（166）
・長期インターンシップ実習……（167）

【外部評価委員会】……（169）

【研究センター通信】……（172）
①NOCHSメール目次　②『難波潟』目次

【センター紹介記事】……（177）

【研究員名簿】……（181）

英文目次（裏表紙）

特　集

関西大学120周年記念行事・シンポジウム

【基調講演】

「日本のなかの大阪文化遺産」

髙橋　隆博（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター・センター長／関西大学文学部教授）

髙橋　隆博センター長

皆さんこんにちは、髙橋でございます。（拍手）東北地方の山形県生まれで、山形育ちの私が、なにわ・大阪をお話することに、皆さん方は違和感をお持ちになるでしょうし、私自身も不思議なめぐり合わせを感じております。ただ、大阪に住まいをしてずい分と年月を重ねておりますので、大阪のことを、大阪の文化を理解しようという気概だけは持っているつもりでございます。恐縮でございますが、少しの間、東北弁におつき合いいただきたいと存じます。それにいたしましても、私どものこのたびの催しに、こんなに大勢の方がお見えになるとは思いもしませんで、驚いているところです。ありがとうございます。この会場の定員は1,000名ですが、申込みの段階ですでに超過いたしまして、300人ほどの方がたにお断りいたしております。大変申し訳ないことだと、お詫び申しあげねばなりません。

時間がそれほどございませんので、本日のテーマ「日本のなかの大阪文化遺産」についてお話を進めてまいります。ところで、文化遺産について研究することを文化遺産学と命名しましたが、これは私どもがはじめて提唱いたしました名辞です。特許をとっているわけではありませんが、ゆめ勝手にお使いにならないように、ご使用の際は、私どもの了解を得ていただきたいと存じます（笑い）。じつは文部科学省が進めております私立大学高度化推進事業のオープン・リサーチ・センター整備事業（研究補助事業）に採択された「関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター」（平成17年度～平成22年度）の申請文書の中で文化遺産学という名辞をつかったのが最初です。

昨今、文化遺産という言葉がさかんに使われています。周知のことですが、これは1972年のユネスコ（国際連合教育科学文化機関）第17回総会において、世界に貴重な自然遺産であるとか、文化遺産であるとかを護っていこうとする条約、すなわち「世界遺産条約」（世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約）が採択されて以後のことです。ちなみに世界遺産に登録されている日本の文化遺産は、「法隆寺地域の仏教建造物群」「姫路城」（1993年）を最初とし、清水寺や平等院、上賀茂神社など京都の14の寺社からなる「古都京都の文化財」（1994年）、「白川郷と五箇山の合掌造り集落」（1995年）、「原爆ドーム」「厳島神社」（1996年）、東大寺や春日大社など6寺社と平城宮址、春日山原始林からなる「古都奈良の文化財」（1998年）、栃木県の日光東照宮や輪王寺などを中心とする「日光の社寺」（1999年）、「琉球王国のグスクおよび関連遺跡群」（2000年）、高野山と熊野三山（熊野本宮大社や熊野速玉

大社、那智大社)、吉野金峰山などを含む広い地域におよぶ「紀伊山地の霊場と参詣道」(2004年)などです。

私たちがどうして、「なにわ・大阪文化遺産学研究センター」を構想したのかといいますと、関西大学は吹田市にございます。なにわの地に、大阪にある大学です。なにわ・大阪の水に、土に、なによりもなにわ・大阪の人びとに育てていただいた大学です。関西大学を縦軸に見ても横軸に見ても、「なにわ・大阪」とは不可分の関係にあります。しかし、虚心坦懐に振り返りますとき、これまで120年の長き歴史を刻んできた関西大学が、はたして「なにわ・大阪」を対象にした研究を積極的に行ってきたのか、「なにわ・大阪」に責任を果たしてきたのかといいますと、必ずしも万全であったとは言い切れません。これまで120年も育てていただいた「なにわ・大阪」に、何がご恩返しになるのかと考えましたとき、「なにわ・大阪の文化遺産」そのものを研究の対象にすべきであろうと結論するにいたったわけです。そしてその成果を、社会に還元し、さらには次の世代に繋いでいこう、そういう役割を果たそうということで「なにわ・大阪文化遺産学研究センター」を立ち上げたわけでございます。

そこで先ず、足元の文化遺産を、つまり大阪の文化遺産についてあれこれと考える前に、関西大学の文化遺産を振り返らなければいけません。そうしますと、なによりも先ず末永雅雄先生(名誉教授)に指を屈しましょう。いうまでもなく先生は、昭和63年度の文化勲章受賞者で、押しも押されもしない日本考古学界の重鎮でございました。歴史学者の文化勲章受賞者としましては、東京大学の坂本太郎先生に次いで2人目の受賞でした。「壁画のカビ」問題で連日のように報道されている「高松塚壁画古墳」といえば、網干善教先生(名誉教授)ということになりますが、「壁画発見」で日本中の話題をさらったあの発掘調査(1972年)は、末永先生の指導のもとに行われたものでした。もちろん末永先生と網干先生とは、太い絆で結ばれた恩師と弟子の間柄です。網干先生もまた日本考古学界に大変大きな功績を残された先生で、関西大学が創立100周年を記念して行ったインドの祇園精舎址の発掘成果は、まさに世界考古学界に打ち立てた金字塔です。口惜しいことに、網干先生は今年の7月29日にお亡くなりになりました。考古学界にとっても大きな損失ですが、関西大学にとっても悔やみきれない痛手です。

いささか年月を経過しておりますので、忘れかけられておりますが、関西大学の誇る約1万6,000点もの考古資料は、もとは毎日新聞社の本山彦一元社主が蒐集していました考古資料で、これが末永雅雄先生のご尽力によって関西大学に入ったわけです。ですから、末永先生のお力がなければ、関西大学の考古資料、すなわち博物館資料は存在しなかったことになります。この一事だけでも、末永先生は関西大学に大変大きな功績を果たされたことになります。じつは私も末永先生にあこがれて関西大学に入学いたしました端くれで、大きな学恩にあずかり、かわいがってもいただきました。礼儀作法にとりわけ厳しい先生でございましたけれども、実は優しい一面もございました。その一例をいささか紹介させていただきます。

高松塚古墳発掘とその後に関することですが、未曾有の発見となった極彩色壁画の今後の保存措置については、先生は国にゆだねるべきとの決断をされました。まさに無私の大英断でした。その時のことが末永雅雄編『壁画古墳　高松塚』の序文に末永先生が述べておられますので紹介しておきます。

> 「学生の調査日誌を見ると、発掘の努力を重ね、これを愛し、調査を続けたが、次第に自分たちから遠ざかり行く悲しみを書いたものがあった。それほどまでに高松塚古墳を愛する感情を持って、愛情を持って調査に努力していたかと驚いた。今これを書きながら、なお胸が詰まる。しかし、この偉大な資料の個人的財産とは異なることを考えれば、すべてを挙げて国家処理に移し、保存と調査研究の万全を期して次代の日本国民に伝えるべきである」

感動的な文章です。末永先生は、学生一人一人の顔を思い浮かべながら、調査日誌に目を通されておられたことがわかります。おそらく末永先生は、この文章をお書きになるとき涙していたに違いない、私はそう確信しております。学生に対するこうした眼差しといいますか、愛情といいますか、人間教育といいますか、これが関西大学の学風であります。これこそある意味での大きな文化遺産なのです。もちろん学問的業績の蓄積も文化遺産ですけれども、こうしたことはもっと大切なことです。

それから、有坂隆道先生（名誉教授）を挙げなければなりません。先生は日本洋学史の泰斗でございましたが、平成16年６月18日、鬼籍に入られました。痛恨のきわみです。先ほど偉そうにも「なにわ・大阪文化遺産学研究センター」は、私たちが提唱したものだと声高に申しましたが、じつは昭和35年に有坂先生はすでに「大阪文化研究所」を立ち上げておられるのです。それだけではありません。研究誌『上方文化』を発行しているのです。残念なことに、資金のことなどもあってこの画期的な『上方文化』は、続刊をのぞむ声しきりの中、５号で中断のやむなきにいたりました。有坂先生はほとんど私費を投入して発刊していたようで、資金面のことなどからの中断であったとお聞きしております。

有坂先生は、「大阪文化研究所」設立について、『上方文化』にこのように述べておられます。少し長くなりますがこれも紹介させていただきます。

「今、私たちを取り巻く日本の現代文化の状況を振り返ってみると、そこには我々が真剣に再考しなければならない問題がはっきりあらわれているように思われる。その中でも、最も深刻な問題は、我々が自己の存在理由につながるものとして自覚できるような自分たちの文化を、果たして持っているだろうかという強い疑問を否定することができない。現在いろいろな媒体の発達のおかげで、私たちは有形・無形の文化的商品の洪水の中に置かれている。しかし、それらは多く雑多な、細切れにされた文化の破片であり、私たちの生活の背骨をつくり、それに肉づけしていく目的に奉仕するような性質のものとは思われない。そういった現代的な文化の氾濫は、主体を持った人間の喪失、郷土や祖国と結びついた市民精神の喪失と表裏の関係を持っているのではないだろうか。私たちが大阪文化研究所を設立し、機関誌『上方文化』を刊行する基本的な目的は、まず、自分たちの文化を育てるべき土壌を明らかにし、かつて日本民族文化の先進地域であった上方に検証のフィールドを求め、ほかならぬ我々の物の見方、感じ方、行動の仕方のうちに伝わり、しみ通っている重要な文化的諸要因を新たに発掘することである」

これもまた、先ほどの末永先生に比肩するほどの格調高い文章です。ですから私たちの「なにわ・大阪文化遺産学研究」は、有坂先生がすでに40数年前に興された「大阪文化研究所」の系譜にあるということになりましょう。

もうお一人、薗田香融先生をあげねばなりません。先生は日本古代史学界の牽引者でございます。もちろん、先生は和歌山市にご健在で、ご活躍中です。和歌山市には、万葉の歌人山部赤人が「和歌の浦に　潮満ちくれば潟をなみ　葦辺をさして　鶴鳴きわたる」と詠んだ風光明媚な和歌浦があります。そのもっとも和歌浦らしいところといえば、妹背山や玉津島、不老橋あたりで、不老橋から東の名草山をのぞむ静かな入り江は、とりわけ美しい景観をなしているところです。ところが和歌山県は、あろうことか不老橋の東側の海中に、80メートルものコンクリートの車道橋「新不老橋」建設を計画しました。着工したのは1989年５月23日のことです。

薗田香融先生は、和歌浦の景観を保存するための住民訴訟を和歌山地方裁判所に起こしたわけです。訴訟の要諦は何かといいますと、「一般市民は、歴史的景観を享受する権利がある」ということに尽きます。歴史的景観を市民が享受する権利あるという訴えは、裁判史上初めてのことなんです。残念ながらこの訴訟は原告団の敗訴になりました。その後、文化庁は、まったく久しぶりに文化財保護法を改正いたしまして、景観法をつくりました。ただし、文化庁は歴史的景観のかわりに文化的景観という文言にしているのです。敗訴になりましたけれども、これ以後、「歴史的景観」と言葉がさかんに叫ばれるようになり、文化財保護法の改正をもうながしたという意味では、薗田先生の投じた一石は、きわめて大きいものがあったといわざるをえません。

その頃、つまり「和歌の浦訴訟」のときには、薗田先生はもちろん現職の関西大学の教授で、原告団団長でございました。おうかがいしますと、夜となく昼となく、相当のいやがらせがたびたびであったとお聞きしております。しかし、決してそれに屈するような先生ではありません。お体はどちらかといいますと小柄な方で、いつもにこやかな表情をされているのですが、まことに豪胆で、慧眼の歴史家です。

時間の関係もありますので、わずかお三人の先生だけの紹介に留めますが、こうした先生方の遺され

たことが関西大学の文化遺産であって、その精神こそが関西大学のDNAといえましょう。私たちの「なにわ・大阪文化遺産学研究センター」は、こうした先生方のDNAを受け継いで行こうと肝に銘じているところでございます。私たちは、こうした先生方が築きあげてこられた文化遺産を大切にし、将来に受け継いで行きたいと念じております。

これまでご紹介しましたのは、関西大学の「文化遺産としての人」に焦点をあててお話させていただきましたけれど、次に調査研究の対象とすべき関西大学の「文化遺産としてのもの」に移したいと存じます。

さきほどの末永雅雄先生のところで触れました「本山考古コレクション」（重要文化財12点をふくむ１万6,000点）をあげねばなりません。その中には藤井寺市国府遺跡出土の12点の重要文化財を含んでおります。これは特筆すべきことで、全国の大学博物館の中にあってまことに希有なことであります。

つぎに泊園文庫があります。漢学者の藤澤南岳先生が、文政８年に大坂淡路町につくりました漢学塾泊園書院の漢籍類を内容としております。この漢籍類が、昭和26年に関西大学におさまることになり、これを契機として関西大学東西学術研究所が設置されたわけです。

そして、図書館に架蔵される鬼洞文庫があります。この中には、大阪関係の引札やかわら版などが入っており、これらはまことに貴重な資料です。

さらには、東京教育大学教授から関西大学に迎えられた津田秀夫先生が蒐集されましたおびただしい量の近世古文書がありあます。これは関西大学文学部の古文書室に収蔵されており、現在は目録の作成、解読作業など、整理を進めているところです。

また、図書館に収蔵されている「上方役者絵」の版画類もきわめて貴重です。「上方役者絵」については、本日シンポジウムのパネラーの１人としてご出席のイギリス・ロンドンSOAS大学教授ガーストル先生がご専門としている分野でもあります。浮世絵といいますと鈴木春信や葛飾北斎、安藤広重といった江戸の浮世絵師たち、版画作品を思い浮かべますけれども、大坂にも大変すぐれた浮世絵師がいて、浮世絵を世に出していたことをすでに大阪の人びとさえも忘れ去っているのが現状で、まことに寂しいかぎりで残念なことです。幸いにして関西大学図書館は「上方浮世絵」を所蔵しております。「なにわ・大阪文化遺産学研究センター」では、「上方浮世絵」のうちから役者絵を特集した出版物『上方役者絵』を『なにわ・大阪文化遺産学叢書Ⅰ』として本年の３月に刊行いたしたところです。斯界からは高い評価をいただいております。以上紹介しましたのが、かいつまんだところの関西大学が所有する「文化遺産としてのもの」です。

与えられております持ち時間が少なくなってまいりました。少し先を急がねばなりません

そこで、はじめに掲げました「文化遺産学とは何か」という話に戻りたいと存じます。さきほどから文化遺産学は私たちがつくった新しい名辞だと申しましたように、それの学問的体系などは構築されているわけではありません。文化遺産学の話の前に、少し文化についての話をいたします。学生たちに「文化とはなんだろう」「何が大阪の文化だろう」と聞きますと、決まって「タコ焼き」「道頓堀の蟹や河豚などの飾り物」、それに「阪神タイガース」「アメリカ村」と、たいがいこんな答えが返ってきます。コンパなんかで梅田あたりに出かけましたら、露天神つまりお初天神ですね、あのあたりに行って、「ここが近松門左衛門の世話物『曾根崎心中』の舞台となったところだよ」、「あれは大坂内本町の醤油屋平野屋の手代徳兵衛と北の新地の天満屋の遊女お初とが曽根崎天神の森で情死した事件をもとに近松が脚色した物語でね、あのあたりを蜆川が流れていたんだよ」といっても、興味があるのか、ないのか、ただ聞いているだけで、彼らには近松の作品が大阪の文化に結びついていないのかもしれません。あるいは漠としすぎているのかもしれません。これは、大学も大いに反省しなければならないことで、大学だけでなく、小学校から中学校、高等学校の児童・生徒たちに大阪の歴史や文化をしっかり教えてこなかったことにも関連しているのかもしれません。自分たちの住んでいる地域の歴史や文化を教えないのは、まったくの手抜かりです。

さて「文化とは何か」です。大変難しいテーマですが、すでにアメリカのイエール大学教授ラルフ・リントンという学者がじつに明解に定義しております。彼の著書『文化人類学入門』（東京創元社）を私なりにまとめてみますとこのようになります。「文化は、２人以上複数の人間が共有する生活様式」

であると。ですから、山奥で１人だけで住んでいて、特殊な技術で生活していたとしても、あるいはいささか変わったものを残したとしても、それを文化とはいわない。なぜなら彼以外の人がそのことを知らないし、その技術が彼以外に共有されていないからです。

文化には、ありとあらゆるものが内包されています。まずは言葉がそうです。さまざまな生活器具を作り出す技術がそうです。住宅などの建物があり、生活様式があります。寺院・神社があり、その法会・祭礼があり、芸能があり、学芸があり、地域の組織があり、さらには食べ物とその加工技術・保存の技術があります。これらすべてが文化遺産学の対象となります。まさにあらゆるものが文化なのです。

ですから、まずは「何が文化遺産なのか」を模索しようとする柔軟な発想こそが肝要なのです。まずはそのことが文化遺産学の第一歩ということになります。次に、それの研究の方途を構想すること、つまりどのように調査・研究を進めていくのかということです。これが文化遺産学の２番目の課題になります。３つ目は、そうやって調査・研究した成果は、決して大学内だけに留め置いてはいけません。地域の人びとにこれをお返し申し上げ、まずはその地域の方がたに認識していただき、理解を深めてもらうことです。いわゆる社会還元です。ですから社会に還元することが文化遺産学の目標です。以上のことが私たちが考えました「なにわ・大阪文化遺産学研究」の構想です。

いちがいに「なにわ・大阪」といいましても広範囲におよびます。そして、それぞれの地域には、それぞれの歴史性と文化力が堆積しております。それがまたその地域の文化的な特質ともなっておりますし、それが地域性です。私たちはそれぞれの地域の文化的特質を深く知らなければなりません。その文化的特質こそ、まずは地域の住民の方がたが共有し、さらにはそれを将来に継承していただくような方策を提示する、これが社会貢献、地域還元ということになるだろうと思います。文化遺産というのは、決して過去の遺産などではありません。将来を展望するにきわめて有効な文化資源だと位置付けなければなりません。私どもが考えております文化遺産学というのはそういうことでございます。

しかしさきほども申しましたように、大阪といっても茫洋としており、大変広いです。そこで、何かを核にしなければ文化遺産学の研究は前に進まないわけですので、私たちは幾つかの研究のプロジェクトをつくりました。いわゆる研究の組織のことで、これを四つの班（①～④）にいたしました。

①は「祭礼遺産研究プロジェクト」です。寺院の法会や神社の祭礼の研究ということになります。天神祭とか四天王寺の聖霊会（国指定の重要民俗文化財）、あるいはたとえば大阪の夏祭りなどを対象にするグループです。その②は「生活文化遺産研究プロジェクト」です。生活器具や生活様式、伝統的な技術やなにわ野菜などがその範疇に入り、たとえば東大阪の鋳物技術や天王寺蕪や勝間南瓜、吹田慈姑などの野菜もその対象となります。その③は「学芸遺産研究プロジェクト」です。ご存知のように、たとえば酒造業を営む傍ら書画骨董の蒐集家、そして文人画家として知られる木村蒹葭堂を例にあげるまでもなく、大阪には、わけても江戸時代に展開した学問の蓄積がありますし、浄瑠璃をはじめとしますさまざまな芸能がありますので、それらが対象となります。そして④が「歴史資料遺産研究プロジェクト」です。古文書や古絵図・古地図、拓本、あるいは絵馬などもその対象になります。

こうしたものが主に集積されている場所といいますと、やはり大きな街道の結節点であり、信仰の場であり、また地域の中核となっている寺院や神社ですね、四天王寺とか、大阪天満宮とかに代表されるでしょう。天神祭にいたしましても、大事な神事、つまり鉾流しなどの船御渡と陸御渡があり、儀式があり、供え物があり、飾り物があり、町の住民の参加があります。祭りと地域住民の相関関係もそこに見えるわけです。

それでは、当センターのこれまで１年間の活動状況について簡単に触れさせていただきますと、と申しましても実質的には昨年の６月からのことですが、これまで二回のフォーラムを行い、それぞれに大きな成果を得ましたが、とりわけ私たちが感銘を受けたのは、第２回の文化遺産学フォーラム「大阪と沖縄の文化遺産」のときに、琉球大学の高良倉吉先生がお話しなさったことです。第二次世界大戦で沖縄は連合国軍に完膚なきまで武力で掃討されたわけですが、「この沖縄の戦争によって、沖縄の文化

遺産の何が失われたかがわからない」という発言です。これほど衝撃的なことはありません。沖縄の人びとにとって、「何がなくなったのかわからない」ということほど悲劇的なことはありません。たとえば技術というものは、一端途絶えてしまうとなかなか復興できませんが、技術を伝える人びとが生存してさえおれば復活できるのですが、建築物や器物は、ひとたび失われますと、再びもとに戻りません。高良教授は、「だからこそオーラル・ヒストリーということが大事になってきます」と、強く提言しています。オーラル・ヒストリー、伝承、言い伝えですね。「なにわ・大阪」に関するさまざまな伝承もまた「なにわ・大阪文化遺産学」の大切な研究テーマということになります。

なお、フォーラムに関して付け加えますと、今年の10月、芦屋美術博物館と提携して「大坂画壇」をテーマにしたフォーラムを行っております。

また私たちは、地域連携ということを考えております。昨年の秋に、大阪の藤井寺市にあります道明寺天満宮の御協力をいただき、同宮を会場に最初の「地域連携企画」を講演会と展覧会の２部構成で実現いたしました。関西大学博物館が所蔵しております本山考古資料の中に河内国府遺跡から発掘された遺物が相当数ございます。この国府遺跡（藤井寺市）は、大和川左岸にありまして、大正年間に発掘調査が行われた遺跡で、いくつかの人骨も出土したこともあって、当時は連日のように新聞紙上をにぎわしております。かなり以前の発掘調査ですので、藤井寺市民の方がた、遺跡の近くにお住まいの方がたは別としまして、あまりご存知ないのが実情です。藤井寺市内で発掘されたものは、まずは藤井寺市民が認識しなければいけないというのは私たちの考えでありますので、それならばこちら側から出向いて、国府遺跡から発掘された遺物を会場に運んで展示し、地域の人びとに見ていただこうということで、この「地域連携」を企画いたしたわけです。あわせて当センターの美術史の先生が「渡唐天神画像」について、考古学専門の先生が「河内国府遺跡」について講演会を催したところ、約300人ほどの地域の方がたにお集まりいただきました。感謝いたしております。同時にこの「地域連携企画」にいささかの自信めいたものが仄見えきたこことも事実でした。

そこで、第２回目の「地域連携企画」を、本日この会場に八尾市文化財行政のご担当者が来ておられますけれども、八尾市と連携して行いました。JR八尾駅の近くに、江戸時代に安中新田の会所になった居宅がございます。大きなお屋敷と建物です。現在これを所有されておられる植田家が、そっくりそのまま八尾市に寄贈されました。建物は登録文化財となっております。しかも、掛け軸類や書籍類、河内木綿、民俗資料などもすべて含めての寄贈です。植田家のまことに高邁なお心に、頭を垂れるほかはありません。

八尾市と関西大学とは協定を結んでいることもあって、文化財についての調査を当センターが行うこととなり、これまで進めてきたところです。そこで、植田家の文化財のおおよそについて、まずはこの地域の人たちに安中新田の歴史や植田家のことなどを知ってもらおうということで、八尾市と連携しながら実現したのが第２回目の「地域連携企画」でした。地域の約60人ほどの方がたが参加していただきました。

私ども「なにわ・大阪文化遺産学研究センター」では、フォーラム、地域連携、そしてワーク・ショップを活動の柱としており、今年の５月、天王寺楽所雅亮会の全面的なご協力をいただきまして、「なにわ・大阪文化遺産学研究センター」の建物内で行いました。一般市民の方がたにご案内しましたところ、じつに多くの申し込みがあり、申し訳ないことですが、お断りするのに苦慮したほどです。当初はセンターの前庭で行うべく、野外に舞台を設けていたのですが、あいにくの小雨模様となり、やむなく会場をセンター内に移したのですが、会場（定員約80名）は立錐の余地がないほどの盛況となりました。

当センターの活動の柱に、これまで紹介いたしましたフォーラム、地域連携、ワーク・ショップ、それにレクチャー（講演）があります。その第１回目に、「なにわ・大阪の神社」を取り上げ、第２回目には「京野菜VSなにわ伝統野菜」というタイトルで行いましたところ、野菜を栽培しておられる人、料亭の主人、野菜を現材料とした菓子や焼酎の製造業者など、さまざまな方がたに参加していただき、大変な盛況ぶりでした。当センターでも、二坪ほどの小さい野菜畑をつくっておりまして、田辺大根や

天王寺蕪、玉造黒門越瓜などを栽培いたしております。

当センターの研究成果物としては、さきほど少し紹介しました『文化遺産学叢書』を順次刊行していく予定でありますし、年間の活動報告としましては、年度末には『年報』を発行するとともに、『難波潟』、そしてレクチャーの内容を活字化した冊子『Occasional paper（オケーショナル・ペーパー）』、それに『NOCHSメール』を発行しております。NOCHSとは、「なにわ・大阪文化遺産学研究」の英文頭文字をあてた名称です。

いつも反省はしているんですが、本日も前半に時間を取りすぎてしまったようで、いよいよ持ち時間がなくなってしまいました。最後に一つだけ申しておきたいことがあります。それは文化遺産を護って行こうとするとき、そして将来につないで行こうと考えるときの要諦とは、一つに「地域」、二つに「人」、三つ目に「技術」ということになりましょう。そして、この三つに通底していなければならないことは「きずな」です。地域の人びとによる「きずな」が何よりも大事なことですが、地域の外側の人びとがその地域に向けられる眼差しも重要なことです。つまり「内のきずな」と「外のきずな」の結びつきです。たとえば、現在の道頓堀界隈はかつての面影はありません。昔は歌舞伎や浄瑠璃を観劇し、非日常的な料理を味わう「規矩ある大人の街」であったが、今や「奔放な若者の町」となっています。文化は、その時代、世相を色濃く反映していくものですから、その良し悪しを、あるいは優劣を判定したところで、ほとんど意味をなしません。しかし将来、道頓堀川の河畔を、あるいは町並みを、そして景観をも取り込んだ「道頓堀の文化景観」を展望するのであれば、道頓堀界隈の人びとだけの発想と努力だけではなく、道頓堀の外側からの眼差しが大切なことです。消極的あるいは間接的なことかもしれませんが、その街を育てていこうとする姿勢が必要になってきます。これが「外のきずな」です。大変難しいことですが、一人一人に突きつけられた課題であるだろうと思います。

ちょっとどころか、すっかりと雑駁な話になってしまいました。申し訳ございません。私は前座でございますので、これからの第２部パネルディスカッションの方がはるかに興味ぶかい内容になるはずですので、これで私の拙い話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

パネルディスカッションの様子

第３回NOCHS文化遺産学フォーラム
「まちづくりと文化遺産」

（共催：株式会社りそな銀行）

【挨　拶】

沢村　真人

（りそな銀行地域サポート本部・
りそな御堂筋ビジネスソリューションプラザ所長）

関西大学様と私どもりそな銀行は、ちょうど二年前、一昨年の11月に地域社会への貢献を目的とした包括連携協定を締結致しました。すでに、皆様ご存知のとおり、大学には科学技術分野だけでなく、人文科学分野まで広範にわたり豊富な知的財源や人的資源がございます。一方、銀行には個人のお客様から、中小企業、大企業に至るまで、多くのお取引先を…お取引をさせていただいております。この協定は、こうした大学と銀行がその持てる資源をうまく活用しあいながら、大学と銀行が地域社会の発展のためにできることは何かを考えていこうというもので、今回の文化遺産学フォーラムにつきましても、こうした連携の一環として取り組ませていただいたものです。

すでに、皆様ご承知のとおり、近年企業経営を取り巻く環境は、大きく変化してきております。効率優先の工業社会から、精神的な豊かさが重視される社会に転換する中、企業の社会的責任というものが大きくクローズアップされ、民間企業といえども、これまでのように単純に効率性を追求すればよいというものではなくなってきております。いかに地域と共生し、共に歩んでいくかということが重要な問題となってきております。私どもりそな銀行は、平成15年５月の公的資金注入以降、「りそなの再生は地域の皆様からの支持なくしては、成し遂げられない」との信念のもと、従来の本部指導ではなく、より地域社会の皆様に近いところで運営を行う「地域運営制度」というものを導入致しました。これは、それぞれの営業現場が地域住民の皆様の声をしっかりと聞き、地域の皆様に愛される銀行になるには、どうしたらよいかを考えて運営していこうというもので、これにより、今日後ほどご紹介させていただきます、「REENALプロジェクト」のほか、「神戸南京町応援キャンペーン」や「四条畷市の商店街活性に向けた取り組み」など、従来の銀行では、考えられなかったような地域限定のさまざまな取り組みをしてまいりました。

沢村　真人氏

今回のセミナーでは、こうした地域とのつながりを文化遺産という視点で見直してみようというもので、私どもとしましても、これまでの取り組みをさらに進化させていく上で、非常によい取り組みだと考えております。また、いろいろな問題を一緒に考えていくことは、当社が目指す地域に愛される金融機関への第一歩として、非常に大切なことだというふうに考えております。

これまでの関西大学様との取り組みのなかで、銀行と大学というものは、連携の仕方によっては、取引先に対するさまざまなソリューションの提供や地域社会への貢献ができるのではないかということに気づき始めてまいりました。りそな銀行の社内におきましても、こうしたこれまでにない新たな大学との取り組みを先駆け的なケースとして、今回の関西

大学様との連携についても認知されてきておりまして、いろいろな大学様のほうから、関西大学様との関係ようにうちともやって欲しいとかですね。いろいろなお申し出を受けるようになりました。今後も、関西大学様との取り組みが、他大学やほかの金融機関にとっての、ひとつのモデルケースとして広がっていくよう、さまざまな取り組みを行っていきたいと考えております。

それでは、今日のセミナーをお楽しみください。ありがとうございました。

【挨　拶】

髙橋　隆博

（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター・センター長）

こんにちは、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターのセンター長を仰せつかっております髙橋でございます。今日は、大変寒うございまして。そんな中、大変大勢の方にお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。

本日テーマに掲げております文化遺産という言葉がしきりに使われだしたのは、1972年、パリで開かれたユネスコの会議で採択され、世界遺産条約が締結されて以来のことです、文化遺産、そして自然遺産、これを包括して世界遺産といい、全世界的にさまざまな活動展開しております。日本がこの世界遺産条約に参加しますのは、世界遺産条約が締結されてから10年遅れてのことです。これには理由がありまして、日本には昭和25年に制定されました文化財保護法があり、文化遺産と自然遺産の指定と保護については、この法律でカバーできると、当初はそのような判断が働いていたと聞いております。

髙橋　隆博センター長

文化遺産という言葉は、昨今ずい分と言い慣らされてきましたが、文化遺産学は、おそらく聞きなれない言葉かと存じます。それもその筈で、これは文部科学省がすすめる研究補助事業（私立大学学術研究高度化推進事業のオープン・リサーチ・センター整備事業）に、関西大学が申請しました文書の中で、はじめて使った名辞なのです。それでは、文化遺産学とは何を考え、研究するのかと申しますと、確たる理論体系ができあがっているわけではありません。まずは、「何が文化遺産か」を発想し、模索することがその第一歩になります。陸上競技の三段跳びにたとえますと、ホップです。文化遺産といっても実に多岐にわたります。ですから一つひとつの文化遺産について「どのように調査・研究を進めていくのか」、つまり研究の方策を構想することが、次のステップということになります。そして、その調査・研究の成果、あるいは見通しを社会に公開することが大切です。つまり社会還元がジャンプということになります。私たちは、文化遺産学をこのようにとらえているわけです。その一環としまして、平成17年度には「大阪の文化遺産」ということで第１回目のフォーラムを行いました。昨年の秋に、「大阪と沖縄の文化遺産」というテーマで第２回目のフォーラムをさせていただきました。

本年は、東京大学教授の神野先生から基調講演をいただき、第３回目の文化遺産フォーラムを企画させていただいたわけでございます。どうぞ、第２部のパネルディスカッションもございますので、お楽しみいただくというのは語弊があるかもしれませんけれど、興味を持ってお持ち帰りいただきたいと念じております。

なお、この会場の後ろ側にございます写真パネルは、大阪を代表する郷土史家牧村史陽先生のご遺族から、数百枚のガラス乾板を頂戴いたし、それを焼き付けたものです。牧村先生ご自身が、大阪市内、大阪府内のあちこちを写真に撮られました。そのごく一部を持って参った次第です。少し工夫しておりますのは、牧村先生が撮られた場所と同じような場

所、定点観測というわけにはいきませんが、ある場所の「昔と今」というコンセプトで、二つ合わせて展示をしております。

いまひとつ、平成17年度にスタートしました「関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター」のこれまでの活動状況の一覧をパネルにして、展示いたしております。どうぞご休憩の際にご覧になっていただきたいと存じます。まことに簡単ですが、挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。

【基調講演】

「街づくりと文化遺産」

神野　直彦（東京大学大学院経済学研究科・経済学部教授）

神野　直彦氏

東京大学の神野でございます。よろしくお願い致します。本日、このような席にお招きに預かりましたことを、関西大学のご関係の皆様方をはじめ、多くの方々に感謝する次第でございます。ご紹介がありましたように、私は財政学を専攻しておりまして、真理を探究する研究者の端くれでございますが、今年研究者として吃驚したことは、真理を多数決で決めるのかということです。皆様ご存知のとおり、冥王星は太陽系の惑星かどうかというのを多数決で決めて否決して、冥王星は太陽系の惑星ではないと決めたわけですね。冥王星は、皆様ご存知かと思うのですが、プルートというギリシャの神の名前をつけております。プルートにちなんで私たちは、人間が作った最大の毒といわれているプルトニウムというのも、これプルートにちなんで名づけております。なぜなら、プルートというギリシャの神は、富の国の神、豊かな富の国の神であると同時に、死の国の神でもあるからです。私たちは今、富の国か死の国かの分かれ道に差し掛かっています。分かれ道のことをcrisisと申しますので、分かれ道は危機の時代でもあるということですね。今日私は、「今私たちは、歴史の大きな分かれ道に差し掛かっている」というところからお話をさせていただいて、「まちづくりと文化遺産」というテーマに答えていきたいと思っております。

（配布資料を見ながら）最初に、スウェーデンの環境の教科書から、スウェーデンが誇る芸術家ステイーグ・クレッソンの言葉を引いておきました。「第二次大戦後、スウェーデンは豊かな国となり、人々が『繁栄』と呼ぶ状況を生み出した。私たちは、あまりに簡単に幸福になりすぎた。人々は、それは公正であるか否かを議論した。私たちは戦争を回避し、工場を建設し、そこへ農民の子どもが働きに行った。農業社会は解体され、私たちの国は新しい国になったが、人々が本当にわが家にいるといった感覚をもてたかどうかは確かではない。1950年から60年に至る10年間に、毎日300戸の小農家が閉業するというスピードで、農業国スウェーデンが終焉した。

人々は大きな単位、大きなコミューン…コミューンは市町村です。市町村を信じ、都市には遠い将来にわたって労働が存在すると信じた。私たちは当然のことながら物質的には豊かになったが、簡単な言葉でいえば、平安というべきものを使い果たした。私たちは新しい国で、お互いに他人同士となった。小農民が消滅するとともに、小職人や小商店が、そして、病気のおばあさんが横になっていたあの小さな部屋、あの小さな学校、あの子豚たち、あの小さなダンスホールなども姿を消した。そういう小さな世界はもう残っていない。小さいものは何であれ、儲けが少ないというのが理由だった。なぜなら、幸福への呪文は〈儲かる社会〉だったからだ。」スウェーデンは、大きくここで儲かる社会から舵を切り返そうというふうに致しますが、私たち日本もここに指摘されているような状態に陥っているということは、皆さんもご存知のとおりでございます。

先ほど、りそな銀行の沢村所長がお話になっていらっしゃいましたが、今の国民意識調査によりますと、日本国民の６割がですね。もう物の豊かさはい

いから、心の豊かさが欲しいと言っているのです。依然として物の豊かさだといっているのは３割にしか過ぎません。しかも、私たちは幸福への呪文が儲かる社会だということに縛られて、いまや新しい国でお互いに他人同士になっている。2004年に行われた内閣府の国民の安全・安心に関する特別世論調査では、日本の国民は「もうすでに日本の国は安全・安心の国ではない」と答えています。その理由の第一に挙げられているのは、少年非行、引きこもり、自殺といった社会的な病理現象が多発しているということです。日本の自殺現象は、すでに先進国型ではなくて発展途上国型になっております。日本の自殺の特色は、これまでは50代、60…50代で、特に男性が多かったというのが特色だったのですが、現在では発展途上国型、つまり子どもが自殺をするという状況に陥っているわけですね。

（資料を見ながら）「対人社会観の比較」というのを資料として掲げておきましたので、ご覧いただければと思います。日本と韓国とフィンランドの大学生について意識調査をしたものです。第一の問い「ほとんどの人は他人を信頼している」。について、日本の大学生は“そう思う”“ややそう思う”と肯定的な回答をした大学生は３割を切っています。しかし、フィンランドの大学生はですね。“そう思う”“ややそう思う”を加えて、肯定的な回答をした大学生は７割を超えているわけです。さらに三番目を見ていただきますと、「この社会では気をつけていないと誰かに利用されてしまう」。これに対して、日本の大学生で肯定的に答えをした人間は８割に達しておりますが、フィンランドの大学生では３割を切り…２割を少しオーバーした程度ということですね。「この社会では気をつけていないと誰かに利用されてしまう」という人間観を前提にして社会をデザインすると、市場を動かすのにもお金がかかります。取引コストと申しますが、相手を信頼しないんですから、何度もチェック入れないと取引できないわけですね。こんなのは官がやろうと民がやろうと同じことで、取引コストが膨大にかさむ。“ほとんどの人は基本的に善良で親切である”。との問いに対して、フィンランドの大学生は、８割を超える大学生が肯定的な回答をしているのに対して、日本の大学生は、その半分の４割にも満たない大学生しか肯定的な回答をしていないということです。

今、アメリカモデルに対抗して、ヨーロッパが地域経済の復活路線として進めているキーワードは“social capital”。人間の信頼の絆ですね。これは社会資本と訳しますが、人間の信頼の絆のことを言っております。ハーバード大学のロバート・パットナムが、どうして北イタリアの地域経済は発展するのに、南イタリアの経済は…地域経済は発展しないのだろうかと調べてみたら、北イタリアにはコミュニティーが残っていて、人間の信頼の絆がある。ところが、南イタリアには人間のコミュニティーが崩壊し、人間の信頼の絆が残っていない。したがって、南イタリアは経済発展しないし、北イタリアは経済発展するのだと明らかにしております。皆さんもご存知のとおり、国際競争力のランキングでいつもトップを走り続けているのがフィンランドですが、日本は国際競争力がそれほど高い国ではなくなってしまったということです。

私たちは今、人間の信頼感を失い、国民の多くが社会が崩壊していくのではないかという不安に怯えているというのが現状ではないかと思います。それは私たちが20世紀の後半から21世紀にかけて歴史の大転換期、分かれ道に足を踏み入れたからだと理解していただければと思います。歴史の大転換期には必ずローマ法王がレールム・ノヴァルムをお出しになります。私のレジュメの最初のところを見ていただければと思いますが、二つのレールム・ノヴァルムと書いておきました。レールム・ノヴァルム「新しきこと」「革新」とかという意味でございまして、ローマ法王が世界の司教に出す回勅です。勅令を回す、回勅というものですね。昨年の４月にお亡くなりになりましたヨハネ・パウロ２世が1991年にレールム・ノヴァルムをお出しになっていらっしゃいます。この時、私どもの東京大学経済学部名誉教授の宇沢弘文先生に相談なさいました。どういうレールム・ノヴァルムを出したらいいのか。その時、宇沢弘文先生は、すかさず次のような副題をつけようと提案されました。それは「社会主義の弊害と資本主義の幻想」という副題であります。ヨハネ・パウロ２世の祖国はポーランドで、ポーランドが社会主義の非人間的な抑圧から開放された瞬間に、なんでも競争、なんでも市場と言い始めて非常に不幸な結果に陥っているということを憂いて、お出しになったレールム・ノヴァルムでございます。

私たちは、この前いつ、歴史の大きな大転換を超えたのかといいますと、19世紀後半です。ちょうど軽工業の時代が終わりを告げて、重化学工業の時代に転換していく時期でした。歴史の転換期はいつも大不況ですので、“great depression”という不況に喘いでいました。1873年にウィーンの株式市場が暴落し、その後1896年まで、世界的に物価が下がり続けるという大不況でございました。その100年前、ちょうど1891年に、レオ13世がレールム・ノヴァルムをお出しになっていらっしゃいます。そのレールム・ノヴァルムには副題がついておりました。それは「資本主義の弊害と社会主義の幻想」という副題であります。この大不況で倒産が相次ぎ、失業者が巷に群れをなしている。資本主義の弊害というのは、明らかになっているのだけれども、それは社会主義になれば解消されるのだと説くものがいる。しかし、それは幻想にしか過ぎないというのが、レオ13世のレールム・ノヴァルムの趣旨でございました。

昨年、お亡くなりになったヨハネ・パウロ２世は、この二つのレールム・ノヴァルムを踏まえて、私たち歴史の大転換期に生きる者に対して、次のようなメッセージを残されています。それは、「資本主義と社会主義を超えて、人間の尊厳と魂の自立を可能にする経済体制は、いかなる特質を持ち、いかなる方法で具現化することができるのか。」という問いであります。私たちのように、この歴史の峠、歴史の大転換期とも言うべき峠に生きる人間が答えなければならないのは、こうした、ヨハネ・パウロ２世の遺言のように残されたメッセージに答えるということだろうと思います。

私たちはどういう歴史の峠で、何が行き詰っているのかといえば、それは工業社会が終わりを告げているということです。重化学工業が行き詰まりを始め、重化学工業を基礎に成り立っていた国民国家も終わりを告げようとしている、そういう時代に来ているのだということだろうと思います。重化学工業を引っ張っていた自動車は、あと20年か30年すれば、この地上から姿を消すことになります。それは、石油がなくなりますので、欲しくても無理ということになるわけです。気の利いた自動車会社は、いまや自転車を作り始めているというのは、皆さんもうご存知のとおりです。BMWは28万円の自転車を出しておりますし、ポルシェは56万円の自転車を出し、つい最近ではメルセデス・ベンツが34万円の自転車を出していることは、皆さんもうご存知のとおりであります。これからの時代はどういう時代なのかということについても、誰もが分かっているわけですね。これまでの重化学工業の時代が終わりを告げて、知識や情報やサービスを産業の機軸とするような産業構造が出来上がってくる時代になるということですね。こうした歴史の大転換期を乗り越えるに当たって、「私たちはそれぞれの国民が持っている特色を生かしながら、希望と楽観主義を携えてこえよう。」とスウェーデン政府は国民に訴えておりますが、希望と楽観主義を携えて渡るということが、重要なのではないかと思います。

私たち日本人はどういう点に特色があるのかということですが、それは明治時代に開国と共に多くのヨーロッパの人々が日本にやってきますが、その多くのヨーロッパの人々が日本人を見て、日本人に対する印象記を残しています。その印象記の中でもってですね、日本人の特色として指摘している点が３つあります。１つは「優しさ」ですね。日本人というのは、どうしてこんなに優しいのだろう。それから、もうひとつは「謙譲」です。どうして、日本人は自己主張しないで、譲ってしまうのだろう。３番目は「心のゆとり」ですね。どうして、日本人はこんなにも心のゆとりを持っているのだろう。この３つはいずれも、今日本人が失わなければならないと感じていることです。優しさなんかを持ったならばモラル・ハザードが働くぞ、譲ったならば競争に負けるぞ、ゆとりを持ったら効率化は達成できないのでしごけ、というふうに考えているところですが、ヨーロッパの人々はそこに日本人の特色を見出していました。

さらにもう一つ、ヨーロッパの人々の残した印象記でどの印象記も指摘している、日本で見受けられる現象がございます。それはですね、日本の子どもたちはどうして笑っているのだろう。日本の町には、どうして子どもたちの笑顔が溢れているのだろうということですね。これも、今失いかけました。先ほどお話を致しましたように、国民世論調査では日本の国民が一番心配しているのは、少年非行、引きこもり、自殺なのですから。子どもたちの笑顔が消えたということですね。私は、終戦直後に生命を

もらいましたが、第二次世界大戦直後、昭和30年の高度成長が始まる時期でも、日本はまだまだ貧しい社会でございました。お砂糖を輸入することすらできず、子どもたちがお酒屋さんでざら紙に砂糖をようやく買って「ああ、甘さっていうのはこういうものか。」というような貧しい時代でございました。しかし、町には子どもたちの笑顔が溢れていました。子どもたちは、二つの木陰のもとで生きていた。一つは、もちろん自然が作り出す木陰ですね。もう一つは、人間の作り出す絆の木陰です。この人間の織り成していく温もりの中で、子どもたちは育っていたわけです。最近、３丁目の夕日という、当時、つまり高度成長期になろうとしている貧しい社会ではあるけれども、まだまだ子どもたちが人々の温もりの中で育っていた時代を懐かしむという漫画が爆発的に売れているようですが、そういう時代だったわけですね。

経済学は、儲けることがよいことだと教えたことは一回もありません。今の経済学者というのは、たぶん勉強してないからだと思いますね。経済学者は常に金を儲けるということは、あまりいいことではないと教えてきました。経済学というのは、アングロサクソンの非人間的な支配に対する反発から生まれました。スコットランド人アダム・スミスが創り出し、スコットランド人ジョン・スチュワート・ミルがそれを引き継いだわけですが。アングロサクソンの植民地支配に喘いでいた、スコットランドの叫びが経済学でございます。私が大学に入学するちょうど前の年ですが、東京大学の総長をしていた大河内一男先生は、東京大学の卒業生に対して、偉大な経済学者ジョン・スチュワート・ミルの有名な言葉を引用して卒業生たちに「諸君らの任務は、この社会で貧しい人々のために努力をすることだ」と訴えました。その有名な言葉というのは「太った豚になるよりも、痩せたソクラテスになれ」という言葉ですので、経済学者はいつも「太った豚になるな、痩せたソクラテスになれ」と教えてきたわけですけれども、これが失われつつあるということです。

私たちが今、抜け出そうとしている工業社会は、どういう社会だったのかといえば、スウェーデンでは子どもたちに、今までの工業社会というのは「強盗文化」だったというふうに教えております。「強盗文化」とはあらゆるものを、欲望の赴くままに自分のものにしてしまう傾向が支配的な文化だと言われております。文化とは何かということですが、文化とは人間の生活様式のことを文化というふうにいます。これは広辞苑でも何でも引いていただければ、文化というのは人間の生活様式だと出てきます。これはculture。cultivateは耕すことですので、私たちの持っているものを発展させていくことですね。これをcultureと我々は言っているわけですね。educe教育も同じことですね。education、educeは引き出すことですので、子どもたちを育てる教育も、子どもたちが持っているものを引き出してあげること、と言っております。

文化とは生活様式だというお話を致しましたが、この文化を失うと地域の経済も衰退をしてしまいます。皆さんもご存知のとおりに、日本の食糧自給率は1960年には、ドイツもイギリスも日本も60％だったのですが（エネルギー自給率でとるか穀物自給率でとるかというのは、いろいろ難しい話でありますが）ヨーロッパはほとんどの国が100％。ドイツもイギリスも100％を越えております。日本は今、エネルギー自給率で40％ぐらいでしたか。穀物自給率は、30％から20％になってしまうという状態に追い込まれているわけですね。これは、文化を崩したからです。生活様式を崩したからです。穀物自給率というのは、人々が食べるものに対して、何パーセントを自分の国で作っているかという話ですが、文化を崩すと自給率は落ちます。つまり、パスタとか、訳も分からないものを食べ始めると、分母の食生活が変わりますから、分子がいくら頑張ってもだめなんですね。ヨーロッパの穀物自給率が高いのは、そういう文化を守っているからです。それぞれの地域社会で季節性、それから地域性のあるものを食べるわけです。何月にはどういうハーブティーを飲み、何月にはどういう物を食べるのか、季節性と地域性が決められて食べ物が成り立ちます。フランクフルトソーセージというのはフランクフルトでしか食べませんので、ほかの地域では食べないわけですね。その地域社会で採れるものを食べ、その地域社会で採れるもので生活をしていくと、その地域社会での生活様式が残ります。

そうすると例えば、フランクフルトで新しい産業が起きた。すると、一極集中するようなことはありません。なぜならですね、フランクフルトで新しい

産業が起きた。賃金が上がった。周りから働きに行く。そうすると、フランクフルトでの賃金は上がるのが緩やかになるわけですね。当然ですが、労働の供給が増えますから。ところが、もともとの地域社会の中にその地域での生活を支えている産業が残っていると、その産業の賃金が上がりますから、当然のことながらバランスよくそこで人口が止まるわけですね。人口の流失が止まって、バランスよくなります。したがって、文化を崩さないヨーロッパでは、人口が一極集中をするということはありません。文化と生活様式を崩せば、必ず一極集中します。

文化を崩しているか、崩していないか、それを見るのは実に簡単です。街並みを見ればいいわけです。文化を崩しているところというのは、近代的な建物が乱立しているところですね。近代的な建物というのは発展途上国と日本にしかありません。発展途上国も日本も一極集中をして、人口がどんどん集中しています。バンコク、マニラ、東京と見ていただければ分かりますが、文化を崩して生活様式を崩すから、どんどんどんどん一極集中が止まらないような形で出てくる。ヨーロッパに行っていただければ、皆さんご存知のとおり、ヨーロッパには近代的な建物は建っていません。ミュンヘンなどは、第二次世界大戦中に爆撃をされ、すべての街並みを崩されますが、その割れたくずを集めて、全部前と同じ街並みにしているわけです。生活様式を守っているわけですね。もちろん状況は変わります。したがって、状況に対応するように今まで自分たちが持っている生活を時代の変化に合わせて変えていく。中はハイテク化するわけですね。中はハイテク化しながら変えていくということをする。その文化を守った所が一極集中をしないで、地域は地域として産業循環が残るということになってくるわけです。

もし、先ほども言いましたように、文化を崩せばその地域社会の産業循環も、さらに生活も崩されていくということになります。今では「あなたの足の大きさは何文ですか？」と聞かれて、自分の足の大きさが何文だって答えられる人は、ほとんどいなくなっているんですね。それどころではなくて、吃驚するのは「文」というのは足の大きさを表す単位であるということも知らない。しかも、足の大きさを例える「文」というのは、昔のお金の一文銭をいくつ並べたのかということで決まるということを知っている人については、もう皆無に等しくなってしまっています。日本では靴を履いてはいけないんですね。高温多湿ですから、だいたい水虫になってしまう。なので、下駄か草履を履かなくてはいけないので、ああいう履物を作っているにもかかわらず、生活様式を失ってくると、その地域は衰退していくことになるわけですね。今では、子どもたちは、靴を入れる箱のことを下駄箱と言うのは知っているのですが、どうして下駄箱と言うのか分からなくなっているという状態になっているわけですね。生活様式を崩せば、必ず画一化した商品には、これはグローバルで決まりますから、その地域での産業は死滅していくということになってしまうわけです。

（資料を見ながら）それで、こうした文化ということの重要性を説明するのに、スウェーデンでは子供たちに次のように教えております。人間の欲求には、そこに書きましたように「所有欲求」と「存在欲求」がある、「所有欲求」というのは、自然を所有することによって充足される欲求である、つまり、物を持つことによって欲求される欲求である。私たちは「所有欲求」によって豊かさを実感することができる。しかし、もうひとつの欲求があって、それは「存在欲求」だ。「存在欲求」というのは、人と人とのふれあい、人と自然とのふれあいの中で充足されていく欲求である。私たち人間は、「所有欲求」が満たされると豊かさを実感します。しかし、「存在欲求」が満たされると幸福を実感することができると教えております。あなたの一生をもう一回…生きてきた道を振り返ってみなさい。自分が幸せだなあと感じたのは、両親とのふれあいとか、愛する人とのふれあいの中で感じたでしょう。物を持ったときに感じたのではありませんよねと。こういうふうに、教えているわけです。「存在欲求」と「所有欲求」というのは、肉体と魂、心と物質と言い換えてもいいかもしれない欲求です。

貧しさとは何かということですけれども、貧しさというのは物がないことではない。これは、アフリカのセレール人の言葉でありますが、「貧しい、貧困だということは、衣服がないということではない。孤独であるということだ。」と言われています。貧困というのを規定するのには、いろんな要素があります。物が奪われてしまっていることも貧困にな

りますが、人間と人間の関係も奪われてしまっているということも貧困に陥るということですね。日本は今、相対的貧困率では世界で最も貧困の国に入っておりますので、物の貧困もそれから心の貧困も、つまり孤独の中で貧困が陥っているという状態になってますから。両方を味わうことができるような社会になってしまったということですね。

子どもたちにスウェーデン政府は次のように教えています。今、ひとつの時代が終わろうとしている。先ほども言いましたけれども、工業社会が終わろうとしている。工業社会というのは「存在欲求」を犠牲にして、つまり人間と人間とのふれあいとか、人間と自然とのふれあいとかという幸福を犠牲にして、「所有欲求」という物を持つ豊かさだけを充足しようとした社会なんですよ。これからの私たちの社会というのは、人間の人間的な欲求である「存在欲求」を充足するように生きていくことができるようになるのだと教えております。

（資料を見ながら）２ページ目の４番目のところに「文化による地域再生」と書きましたが、今ヨーロッパの地域開発で合言葉として唱えられているのは「サスティナブル・シティー」です。持続可能な都市。この持続可能な都市ということには、二つの意味が含まれていて、それは文化と環境による地域の再生ということですね。工業社会によって汚染された大気、工業社会によって汚染された水。つまり、工業社会によって汚染された環境を良くし、同時に工業社会が成立する前に持っていた私たちの生活様式をもう一度発展させようということです。簡単に言ってしまえば、国民国家が成立する前に持っていた生活様式。国民国家が成立する前に持っていた文化を発展させ、国民国家の成立というのは、工業社会と同じですから、工業社会が成立する前に私たちが持っていた生活様式と、工業社会が汚染してしまった私たちの生活環境を復活させることによって、地域再生をしようと考えられるようになったということです。

私たちの生活様式は、元々はさまざまな文化的な活動と労働が統合されていました。労働をするときには、いつもお祈りをし、歌を歌っていたわけですし、食卓を前にして私たちはいつも、収穫への感謝と賞賛の歌を歌い、食事をしました。さらに、母親が子どもたちを呼び集めるときには、呼び寄せる牧歌を歌い、子供たちを集めていたわけでございますが、そうした生活様式、文化というものを見失い始めてきたのが工業社会です。私がやっております財政学がドイツで成立したころ、ドイツでは地政学という学問が成立します。その地政学によりますと、自然には顔がある。それぞれの地域の自然には、それぞれの地域の自然の顔がある。これを私たちは景観と呼んでいます。日本の景観とちょっと違いますね。景観…もう少し定義すれば、自然景観と言ったほうがいいかもしれません。それぞれ自然には自然の顔があって、それの顔…つまり景観がある。私たちの人間の生活は、それぞれの地域の自然の顔に合わせて、生活様式が成り立っているわけです。そうした目に見えるもののことを生活様式と言っておりますので、文化・生活様式というのは生態系に合わせた生活づくりだと考えていただければいいかと思います。私たちは、こうしたものを“slow up and come down”というふうにそこに書いておきましたが、ゆっくりと作り上げていくということが重要ですね。今日、なにかパンフレットなどを読ませていただきますと、落語のお話がでてきますが、落語というのは皆さんもご存知のとおり、安楽庵策伝という浄土宗の僧侶が、浄土宗の教えを広めるために作り上げたものが落語ですので、落語というのは非常にゆっくりした笑いのわけですね。刹那的にすぐ笑わせるという現在のことではなくて、文化というのは、非常にゆっくりとした笑いをもたらしていたわけです。

地域のそれぞれの発展を、地域の生活様式を復活させることによって発展させる試み、これがヨーロッパで展開をし始めているわけであります。それは、工業社会が終わりを告げて、知識や情報やサービスの時代になったということと対応していると言っていいかと思います。例えば、ヨーロッパの工業地帯アルザス・ロレーンの中心地ストラスブールは、皆さんもご存知のとおり、町にLRTという次世代型の路面電車を引いています。この路面電車は芝生の上を走りますので、もう道は芝生になっているわけですね。で、町の中には、当然自動車は入れません。日本人は道という感覚が分かりませんけれども、道というのは人間が交流する場ですので、ヨーロッパであれば道と道が交錯すれば、そこは必ず広場になっている。道はどんどんカフェでもなん

でも、出ていってかまいません。なぜなら人間が交流する場だからです。自動車は、人間が交流する権利を侵さない限りにおいてしか進入をすることができませんので、町の中の道は人間が交流しますよね。だから、町の中の道には自動車を通行させません。そして、道と道を、町と町をつないでいる道は、これは人間があんまり交流しませんよね。だから、自動車の通行を認めましょうと。町の外側にパーク＆ライドで駐車させて、町の中はLRT。それからあとは自転車。こうした街づくりをし始めると町の商店街は衰退すると言われていたのですが、実はやってみたらストラスブールは世界的な商店街になってしまいました。それは、町の商店街っていうのは、自動車で走り抜けられるよりも、自転車で町の商店街を歩いてもらったほうが物がよく売れるという、当たり前の事実にようやく気づき始めたということですね。

ゆとりの教育とかなんとかと言っても、私たちは子どもたちにゆとりの空間を作ってあげなければならないのですが、道というのは子どもが遊ぶ権利を持っているところで、子どもが悪戯書きをしたり悪さをしたり、創造性を育むためにいろんな遊びを工夫したりする場、それが道なのです。日本では、子どもたちに道で遊んではいけませんというふうに教え、権利を奪っているどころか、全国津々浦々、子どもたちが学校へ行くのにさえ、道を命懸けで渡っているという、変なことが起きているということになってしまったわけです。今のような街づくりをストラスブールもしたら、どういうことになったのかというと、「ああ。住むんだったら、あのストラスブールで住みたい」と言って、ストラスブールに人がどんどん集まってくるようになりました。今は、重化学工業の時代ではありませんので、工場を誘致してもだめなんですね。

皆さんもご存知のとおり、ヨーロッパの議会、EUの議会はストラスブールに設置されることになりました。さらにフランスのエリートを養成するENAですね。高等行政学院、これもストラスブールに集まるようになりました。ストラスブール大学の大学生の数は、いまや５万人になっておりますが、人口23万人ですから優秀な学生たちがみんな集まってくるようになりました。ルイ・パスツールの生まれた町ですから、ルイ・パスツール研究所には、優秀な人材が「ああ、あの町に住みたい」と集まってきてバイオが盛んになり、グーテンベルグの町ですので、さらにさまざまなハイテク産業やなんかが興り始めてくる。工場はなくてもですね、知恵を出す人々が集まってき、知恵を出す人々が育っていくようになる。つまり、住みやすい町にすると「ああ、この町に住みたい」。その町の文化、ストラスブールの文化…アルザス・ロレーンのドイツでもフランスでもない文化が復興してくると、その町に人々が集まってくるようになるという時代になってきたということですね。産業構造が変わってますから。

さらにもう一つの工業地域は、皆さんご存知のとおりルールという工業地域ですが、ここにはエムシャー川という川が流れていますけれども、このエムシャー川をエムシャー・パーク、まるで公園のように、つまりルールの伝統な街並みを全部復活させる。そこに人々が住み始める。で、もちろん町の中には自動車を入れませんので、ルール伝統の街並みが復活して、まるで公園のようにする。そうすると、工業に汚染されたルールの水・大気をよくしつつ、したがって車は入れません。環境とルール伝統の文化を復活させることによって、地域興しを始めた。そうしたならば、そこに人材が集まって、さまざまな新しい産業が生まれ始めるという形になってきたということです。

もう一つ例を挙げさせていただければ、今ヨーロッパが注目をしているのはキューバです。キューバは皆さんご存知のとおり、1991年ロシアが倒れると、ロシアから入ってきた石油が入ってこなくなるのです。さらに、アメリカが、嵩にかかって経済封鎖をかけますから1989年から91年にかけて輸入が20％になってしまうのです。そうすると、閣僚は全部、車を使いませんので自転車通勤です。それから、町の空き地は全部緑にして畑にしないとだめになってしまうのですね。さらに、地産地消とかって言わなくていいんですね。地産地消しないと死ぬので、地産地消せざるを得ない。それから、有機農業とかいう必要もありません。化学肥料を輸入できませんから。それから、医薬品、科学の医薬品が輸入できなくなりますので、徹底した教育によってお医者さんをたくさんつくって自然治癒させるような方向にもっていかざるを得なくなって、文化が花開き

始めます。つまり、アメリカで最も古い文化であるキューバの文化が復活し始めるわけです。伝統の文化を復活させないと、生活様式を復活させないとと。その結果、キューバは光り輝き始めます。現在、成長率６％。さらに、平均寿命は延びに延びて、今アメリカを抜いたと思います、南北アメリカで最も平均寿命の長い国になり、かつ経済成長率、日本が好きな経済成長率でいっても、現在５％の高度成長を誇っておりますから、完全にそうした方向が良いということになっているわけでございます。

（資料を見ながら）４番目の最後に書きましたけれども「発展なき拡大」ということを書きました。発展というのは何かということですが、発展というのはdevelopですね。developというのはenvelopeの反対です。envelopeというのは、封をするという意味ですね。包む、封をする。封をする反対の封を解くということがどうして発展なのかといえば、発展というのは、内在しているものを解きほどしてあげるということを発展といいます。卵が幼虫に、幼虫がさなぎに、さなぎが成虫に…これは発展したというわけですね。木でもそうですね。種が芽を出し、芽から茎が出て…これは発展した、或いは、成長したといいます。しかし、外からの圧力で変形する、pressure圧力でもって形を変えていくことは発展とはいいません。内在的なものでないものは、発展とはいわないのですね。木が机に発展したとはいいません。外からの力で強引に変えるもの、これ発展とはいわないのですね。日本の教育も盆栽教育なのです。日本の教育というものは、盆栽って皆さんご存知のとおり、曲がりたくもないのに針金でもって強引に曲げていくわけですね。ああいうことを教育だと日本は思っているのですが、スウェーデンなどの教育は、それは教育とはいいません。教育というのは、その人間が伸びたいようにどんな枝ぶりでもいいですよ、あなたの好きなように枝ぶりを伸ばしなさいという栽培型といいます。盆栽型ではなくて、栽培型。人間が伸びたいように伸ばしてあげる。では、教育は何をするのか。教育は肥料をあげたり、伸びたいように伸びることを阻害するような害虫がつかないようにしてあげること。これが教育ということになるわけですね。私たちの地域の発展を見てみると、どうもその地域内の産業循環や生活様式を崩して、発展なき拡大をやった。そうすると、工場やなんかが全部海外に安い賃金求めて出て行ったときに、何にも残らなくなってしまう。その地域固有の生活様式も賃金も残っていないような状況に追いやってきてしまっている。発展なき拡大をやってしまった。これと決別をする時期が来た。これが文化による地域発展ということになるのだということですね。

（資料を見ながら）最後に、５番目に「４万時間の夢」ということを書いておきました。私たち人間は、自然に拘束されている必然から自由になろうとして生きてきました。この４万時間という言葉は、私が大学生の頃にジャン・パウル・フーラスティエという未来学者が書いた本が『四万時間』という本です。４万時間というのは、これから21世紀の初頭、2030年ぐらいになると、労働時間が一生涯で４万時間になるという本でした。４万時間というのは、週５日労働して一日６時間労働をする。週30時間労働をする。そうすると35年間働くと、生涯労働時間が４万時間になる。人間は自然に働きかけて労働をして、人間に有用なものに変えていくという労働をしなければならいのですが、自然に拘束されている時間が４万時間で済むようになる。ところが、21世紀の初頭には、全生涯時間は、平均寿命が、85歳ぐらいになって（これはもう実現しているわけですが。）、70万時間になる。労働時間は４万時間になる。ただし、人間は外なる自然に戦いを挑む労働時間は４万時間になるのですが、内なる自然、生理的な欲求を満たさなければなりませんので、睡眠時間やそれから食事のための時間に一日10時間取られる。そうするとそれが、一生涯で30万時間になる。あと残った36万時間はどういう時間になるのかというと、人間が人間としての欲求を満たしていける、さっき言いました「存在欲求」を満たしていけるような時期になる。その時には何をやるか。文化活動をやるのですね。それまで、王侯貴族しか楽しめなかったような行為を人間はするようになるでしょう。一つは、ヴァイオリンを奏でたり、ピアノを弾いたり、絵を描いたり…文化活動をどんどんするようになる。もう一つ重要なのは、日本でいうNPO。ヨーロッパではアソシアシオンでね。お互いの助け合いのために、無報酬で行うような活動もそこに入ってくる。もちろん人間が、人間として楽しむようなものになってくるというふうに、そういう社会が

21世紀初頭には成立する。しかも、ジャン・パウル・フーラスティエは「この４万時間に一番最初に到達する国。それは、日本だ。」と予言しました。

この間、この『四万時間』という本を出した朝日新聞の人が来て、「先生は、いつも４万時間、４万時間と言っているけれども、日本が最初に４万時間になると言いながら、どうもなりそうにない。どこで狂ったのか…歯車が狂ったんでしょうか。」という質問でしたので、もう一回この『四万時間』という本を読んでみると、一部・二部・三部と別れていまして、二部が「1985年」という章でした。1960年に書かれた本なのですが、人間は1985年までは、生活水準を引き上げるために全力を尽くして経済を運営する。しかし、1985年になると生活水準を引き上げるということではなくて、生活様式…先ほど言いました生活様式は、文化だとお話ししました。生活様式を充実させる方向に、量から質に変えていくという転換をするのだと書いてあったのですね。1985年に日本は、世界で一番豊かな国になりました。一人頭の国民所得でアメリカを抜き、国民所得で第二位。世界第二位になります。スイスが上にいますけれども、人口の多い大国では、最も豊かな国に躍り出たのが1985年です。この後、日本はアメリカに叩きに叩かれるのです。プラザ合意でもって、430兆公共事業をやるとかなんとか叩きに叩かれて衰退をしていくのですが、この時、日本が最も豊かになったときに、生活水準から生活様式に変えていかなければならなかった。

工業の時代が終わり、大量生産・大量消費の時代が終わって、多品種少量生産の時代になる。物は、より使いやすいもの、より優雅なもの、より長持ちをするものを作るようになる。私たちは、自然に働きかけて物を作るときに、自然に存在する物質量に知識を加えて物を作ります。知識・情報・インフォメーション。informは、形を与えるという意味ですから。物を作るときに、例えば、鉄鉱石から鉄の鏃を作るときに、私たちは自然に存在する物質量に知識・情報を与えて、形を与えて物を作るわけですね。これから知識社会になっていくと、物の作り方が大きく変わり、例えば、心臓のペースメーカーを作るときには、鉄の鏃を作るときよりも、自然に存在する物質量に加えて、膨大な知識と情報の量を使って作るようになる。膨大な情報や知識を加えることによって、私たちは自然に存在する物質量をわずかしか使わないで、物を作るようにしようとする。それは、自然が崩壊するからです。自然がもうもたなくなるからです。自然がもたなくなるので、私たちはそこに情報と知識を加えて、知識や情報を多く使うことによって、可能な限りセービングしようとする。これが４万時間制に入っていくことだというふうに言っております。

文化ということを考えてみると、工業社会での文化というのは、私たちは市場でお金で買っていました。芸術は、みんな金で買っていたわけです。しかし、簡単に言ってしまえば、それは「代理人文化」。代理人のやっている文化だと言われています。つまり、文化労働…芸術にしろ何にしろ、専門家だけがやって、その専門家がやる文化労働を買う。素人が買うというやり方だったのですが、そうではなく「代理人文化」が終わりを告げて、私たち自身が文化を創り上げる人間になっていく。「観る」文化から「する」文化と書きましたが、「観る」から「する」。市場で購入してただ観客として、演劇や或いはスポーツや芸術を楽しむということから、私たちが参加する文化へ。それから、これまで大量に使用していた「量」から「質」に変える。「量」から「質」に変えるもの、それが情報であり知識であるわけです。それで、そうした文化が発達をしてくると、地域興しが変わってきて、工業社会では、生産をする機能をその地域に集めてくると、人が集まってくるという地域興しだったのですが、これからの知識社会・情報社会では、生活しやすい場を作ると、それが磁石のような磁場になって人々が集まってくるということになります。それが４万時間の夢であり、文化による地域再生の方向性なのではないかと思います。

最後に、私は人々が競争するということと同時に、私たち人間の社会にはお互いに助け合っていくという領域がうまくかみ合っていないと機能しないということを考えてもらうために、スウェーデンの中学校の教科書、『あなた自身の社会』の中から「子どもと家族」というページで終わらせていただいておりますので、お手元の「子どもと家族」というところを見ていただければと思います。

「私たちは、学校、職場、余暇活動などで、さまざまなグループに属しています。しかし、私たちに

とって最も大事なグループは、それがどんなタイプであるかにかかわりなく、家族です。」次の段落を見ていただきましょうか。「家族の中にあって、私たちは親近感、思いやり、連帯感、相互理解を感じます。」２行飛ばさせていただきます。「家族にあっては、私たちはありのままでいながら、受け入れられ好かれていると感じることができます。たとえどんな馬鹿なことを言ったりしてもです。そういうことは、その他のグループでは決してありません。」といって、ドロシー・ロー・ホルトになっていますが、ノルトです。ノルトの間違いです。子どもの詩を載せております。学者は人まねができないので、私は一年前の２月に皇太子殿下にこの本を差し上げて、この詩を朗読しましたら、殿下は大変感動されて５日後のお誕生日の記者会見で読まれていらっしゃいます。あの、私が真似したんじゃないということだけですが。スウェーデンでは、ポスターは規制されておりますけれども、この子どもの詩を、児童虐待を監視する組織がピンク色のポスターでこの詩を掲げています。スウェーデンに行かれて、ピンク色のポスターを見たら「ああ。あの詩が載っかっている。」と考えていただければと思います。「批判ばかりされた子どもは　非難することをおぼえる　殴られて大きくなった子どもは　力にたよることをおぼえる」。よくヨーロッパで、子どもがいたずらをすると母親が人前で子どものお尻をパーンと叩いて、次の瞬間口づけをするという光景を見かけることがありますが、スウェーデンではそれはありません。母親が子どものお尻を叩いた瞬間に、その母親は逮捕されるからです。児童虐待法違反。それは、殴られて大きくなった子どもというのは、力に頼ることを覚えるからですね。「笑いものにされた子どもは　ものを言わずにいることをおぼえる　皮肉にさらされた子どもは　鈍い良心のもちぬしとなる　しかし、激励をうけたこどもは　自信をおぼえる　寛容に出会った子どもは　忍耐をおぼえる　賞賛を受けた子どもは　評価することをおぼえる　フェアプレーを経験した子どもは　公正をおぼえる　友情を知る子どもは　親切をおぼえる　安心を経験した子どもは　信頼をおぼえる　可愛がられ抱きしめられた子どもは　世界中の愛情を感じとることをおぼえる」。スウェーデンでは、子どもにどれが正しいということを教えませんので、課題の４のところ

フォーラム会場の様子

「あなたは詩『子ども』のどこに共感しますか。」左下ですね。「激励や賞賛が良くないのはどんなときですか。この詩は、大人にたいして無理な要求をしていませんか。両親が要求にたいして応えきれないのはどんなときか、例を挙げましょう。」と考えさせていることです。

まとまりのないお話になったことをお詫び致しまして、私のつたない講演に変えさせていただきます。どうもありがとうございました。

プレゼンテーション①

川口　良仁

（「平野の町づくりを考える会」／全興寺住職）

平野から参りました川口と申します。私たちの街づくりは1980年に始まりまして、26年経ちますけれども…まず最初にDVDをもちまして、平野という地域、それから街づくりの様子というのを８…７分程度のDVDにまとめておりますので、それをまずご覧いただきたいと思います。どうぞ、よろしくお願い致します。

「DVD：聖徳太子の建立と伝えられるわが町平野の全興寺。随分前のこと。この町は、このお寺を中心に人が住み、道が作られ、暮らしが営まれ、文化が育まれてきました。平野郷と呼ばれるこの町は、その昔、堺と並

ぶ自治都市として広く知られていました。朱印船貿易に象徴される、先の先を見通す才覚ある商いで財をなし‥先を見通す‥‥‥‥虫籠窓、手格子に亀甲網の入った障子‥蔵などの懐かしい歴史の意匠があちらこちらに顔をのぞかせています。味わいのある美しさと共に、実際的な役割を備えた佇まいが、そこここに見られます。そんな街並みにもミニ開発と時代の波が押し寄せ、どこの国のまちかと見紛う建物が建てられてきています。そこで「こんなデザインではどうですか」とイラストで提言。落ち着いたもので業者が取り入れてくれました。

早速、ニュースでまちの皆様にもお知らせ致しました。その一方、広くまちの皆様にも呼びかけ、景観協約運動を展開。千数百枚の写真撮影を基に、平野に相応しいのか、美しいのか、利便性はどうかと53項目に選定して、わがまち独自のガイドラインを作り上げました。まず、最初にお願いしたのが、この町で一番古い商店の修景でした。イラストをもってお願いして、創建当時に戻してくださいました。江戸時代の代表的な町家の面影を色濃く残す邸宅。新築にも設計段階でお願いをしています。まちで人気一番の定食屋さんの修景。改築中にも大きく反響を呼んだ、二階建て六軒長屋の修景。比較的新しいお宅も、老人憩いの家も。威勢のいい若者たちにも受け入れられた流町だんじり小屋の新築修景と、町全体に35ヶ所の修景を見ることができました。行政側も私たちの運動に共感して、古びた道路を見渡しのいいバリアフリーで、お年寄りにも優しい理想化と標識の地表化で応えてくれました。電力会社も飛び交う電線の地中化で、広い空を取り戻してくれました。私たちのまちづくりの始まりは、27年前の昭和55年。70年近く親しまれてきた南海平野線の廃線と決まったときからです。その特異な木造駅舎の保存運動に遡ります。

しかし、保存が叶わぬとみるや、駅舎の葬式を真面目に行ったのが今に繋がっています。すっかり定着したガレージセール。着られなくなった子ども服、遊ばなくなった玩具など、家庭で眠っている生活用品が並び、人と人との交流の場ともなっています。久しく途絶えていた、平野土産も復興されました。「町がアート」をスローガンにして、アーティストと住民とが協力して繰り広げた「モダンde平野」。この商店街アートは、店に並べられている商品を額縁に入れてアート作品に見立てようとするものです。日頃見慣れた風景を、アートという切り口を通して見直してもらおうとする試みです。地下水を凍らせ、地球環境をテーマにしたアート。ここには、アーティストと一般参加者が溶け合うという、私たちの願いが実現しました。これは、「あなたも博物館の一日館長さんになりませんか」と、広く一般に呼びかけ100館の開館目標が実現しました。日頃、大切にしている自慢できる宝物など、珍しいものが展示されました。郵便局、区役所、警察、消防署と行政の参加も決まり、旧家が出した江戸時代の雛人形に人気が集まりました。ドイツ、ハンブルグのまちづくりチームや撮影班を受け入れ、こちらからもドイツのシンポジウムに参加して、市民グループ同士の交流が始まっています。こちらは、年末にお寺の階段を借りて行われる、平野弁で歌う第九の大合唱です。今後も引き続き、わがまち平野を楽しい住みよい町に育て、次の世代に手渡したいものと思っています。」

（DVD終了）

今、見ていただきました…ちょっと前半がですね。本当は歴史的なところご紹介している部分が、ちゃんと映らなかったのが残念でございますけれども。それと、音声がちょっと悪うございましたね。全然聞き取れなかったと思うので、残念に思います。まず、最初の部分がちょっと見にくかったので、簡単に平野の歴史のほうだけをご紹介致します。

平野というのは、この大阪の町ができる以前にかなりもう飛鳥時代ぐらいから交通の要街として栄えていたといわれている町でございまして、戦国時代は、濠を巡らした環濠自治都市を形成しておりました。堺と同じように、自分たちの町は自分たちで守るという、そういう形で町が守られてきたわけなんです。江戸時代は、河内木綿の集散地といたしまして、人口一万人超えておったという、そういう町でございました。第二次世界大戦に空襲を免れましたので、江戸時代の街並みが残っております。

そういう歴史的な町で、まちづくり始まりましたのが1980年。今から26年前でございます。きっかけは、南海平野線というちんちん電車が走っております。その電車の廃線に伴いましての駅舎の保存運動でございました。まあ、それからいろいろとまちづくりを進めてまいりました。（資料を見ながら）お手元のレジュメで「平野の町づくりを考える会」というチャートがございますが、それを出していただきまして、一応出発からずっと現在まで図にしておるわけなんですけども。まあ、まちづくりと言いましてもいろいろ要素があります。まとめてみますと「ハード」。所謂、入れ物作りというものがございます。それから「ソフト」。内容でございますね、中身でございます。文化とか人との繋がり。それから平野の場合は「アート」という切り口でございます。それから「伝統継承」ということで、非常にいろんな歴史的な文化遺産が残っておりますので、その伝統継承というのを一番背骨にしておるわけでございまして。総体的には「歴史を活かす町づくり」というのがテーマでございます。それで、そこにチャートにございますけども、ずっと進めてまいりまして、最後にもう結論からいいますと、まちづくりというのは、本来物を作ったり、それから人を呼んだりというイベントをするということではなくて、それももちろん大切なんですが、私たちが考えているのは、住んでいる人自身が自分たちの町を再発見する。再確認するというのがまちづくりであると考えているわけでございます。そして、初めからこういうふうなことをやっていこうというんじゃなくて、人と人との繋がりの中で縁をもちながら進めていきましたものが、これだけ現在までいろいろなことをやってきたということで。今回のテーマであります「文化遺産」というところから、主にもうひとつの資料「平野町ぐるみ博物館」というのをお出しいただきたいと思います。これは、平成５年、1993年に新たに立ち上げました運動でございます。一般的には、町づくり、村興しというふうになると、その町の歴史を示す文化センターとか、それから歴史館とか、博物館とかいうのを町の真ん中に作って、そこに歴史とか文化を集めて見せるというのが一般的でございますけども、私たちの運動の一番の特色といたしますのは、行政とか企業とか商工会とかとは一つ距離を置いて、本当に市民だけで自立してやっていこうという住民主体の町づくりというのをやっておりますので、「町ぐるみ博物館」といいましても、民間の施設、社寺、それから一般の方のお家。そのようなものを開放していただいて、無料で見ていただこうということで、現在13年目でございます。出発点のときは７つだったんですけども、現在は15ヶ所オープンしております。これは、すべて無料でございます。そして、一応その民間の施設でございますので、毎日開いているということではございません。毎月第４日曜日にだいたい全部開くということで、今月は、明日が第４日曜日ですので、明日が全部開くことになっておるわけでございます。この「町ぐるみ博物館」というのは、一つは、一番の特色は、実は観光化して人を呼ぶということではなくて、あくまでも住んでいる人自身にその町の文化・歴史を知ってもらいたい。次の世代に伝えていこうというのが目的でございます。それで、先ほど申しました、町を再発見する、再確認するということで「町ぐるみ博物館」と名づけておるという

川口　良仁氏

ことと、それから一つ一つの博物館も大切なんですけども、その博物館から博物館に行く道中を、街並みであるとか、人の出会いとか、そういうものをしっかりと感じてほしいな、見てほしいなというので、町全体が博物館みたいなものであるということです。

それから、うちはどこからも補助金を頂いておりませんので、「町ぐるみ博物館」に関するパンフレットはこれだけなんですね。これは、こちらの方で印刷をしております。印刷して、今日はお持ちしているのが…まあこれはコピーだと思うんですけども。これしかないんですね。そうすると、これで回ろうと思うとなかなか行き着かないということで、私たちのこの「町ぐるみ博物館」のコンセプトは「迷ったら探してください。探すときには人に聞いてください。」と。住民の人に聞きながら、辿り着いてほしいというのが、それが一つの大きな特色でございます。そのことによって、人とのふれあい。その住んでいる人とのふれあいをしていただきたいというのが一つ。まあ、これはお金がないからという理由でございますけども、立派なガイドをするそういう場所もないですし、それから案内書もございません。パンフレットもございません。これ一枚だけなので、聞きながら、探しながら、迷いながら行ってほしいというのが、この「町ぐるみ博物館」の特色でございます。

（資料を見ながら）もう与えられた時間はわずかでございますので、それでどのような考え方でまちづくりをやっておるかということは、このチャートの裏側の方ですね。ちょっと簡単な図を書いてございますけれども、それで見ていただきたいと思います。「誰のためにまちづくりをしておるか。」ということでございますが、まずは自分のためであると。住んでいる人自身が、その自分の住んでいる町を楽しく住んでいく。要するに、たとえ旅行に行ったとしても、戻ってくるのは自分の所です。やっぱり、自分とこの足場を大切にしてそこを楽しくしない限り、やっぱり自分が生きていくという場所を大切にしようということで、まずは自分のためにするというのが出発点であると。しかし、人間住むには、人間とは、人の間と書くわけでございますから。やはり他者…もちろん家族、友人、それから仕事、そういうものを全部含めて、他者を含めた視点というものがなければ、もちろん成り立たないわけでございます。自分のためでありますけども、それは人と共に共生していく。住んでいくということでございます。それから、もちろんそれだけでは、まちづくりはできませんので、ますますこれから、環境問題、自然の環境問題、そういうそこに図に書いてございます天と地、いわゆる自然を含めて、全体。まずは自分のため、それから他者の視点、それから天地、自然に向いていくのがいいんではないかなという感じを私たちは持っております。それから、大阪市という大都心に住んでおりますので、その自然というのが今なかなかございませんけども、それも環境問題としては非常に大切だというふうに思い、これからの課題だと思っております。

一般的には、今は「まちができて人が集まってくる」という風潮でございます。何か施設を作れば、商業施設を作ったり、大きなビルを建てれば人が集まるという発想が多いのですが、私たちは、それを一番心して思っておるのは、そうではなくて「人が集まってまちができた」と。この発想を大切にせないかんと思っております。人が集まってきてまちができたんで、まちができたから人が集まってくるんではないというのを…こういう大阪の260万都市にありながら住んでおりますけれども、それを忘れたらいかんというのが、やっぱり原点でございます。したがって、まちづくりは人づくりということで、町づくりというのは、やはり励ましあって生きていく場であるという、その自立と相互扶助。先ほど神野先生からも仰いましたけども、まさしく私たちもその以前の…日本がまだ昭和30年代といいますか、そういう自立と相互扶助がまだ残っていた。そういうのをやっぱり目指しておるような感じがいたしております。

それから、先ほどの「町ぐるみ博物館」に関して言いますと、観光ではないと。観光化しないということを表明しております。「観光」というのは光を見せる。光を見る。形を見せるというのが、主になっておるように思います。それが「観光」ということだと思いますけども。私たちのまちづくりは「感風」という言葉を使いたいなと。風を感じるということでございます。風というのは目に見えないものです。しかし、感じるものなんですね。まちづくりも、実は目に見えるものではなくて、目に見えない

ものが大切です。実は、町は目に見えないものが、非常に構成している中では大切なものであります。目に見えないものというのはどういうものかというと「歴史・文化」ですね。もちろん、これは表面に現れるものもありますけども、だいたいは埋まっておるというものが多うございます。「歴史・文化」、それから、一番ぱっと第三者が入って見えにくいのが、その地域の「人の繋がり」というのが見えにくいもんなんです。それから「音・におい」というものもあるでしょう。それから「雰囲気」ですね。その町の持つ雰囲気というのは、これはえも知れないものというのは、目に見えない。そういうものを感じてほしいなあということで。目に見えるものだけではなくて、そういう「感風」というのをまちづくりの考え方の一つ、基本にしております。この目に見えないというのは、すぐにはできないんですね。すぐに建築するというわけにはいかずに、長い歴史の積み重ねと文化と、それから人とのつながりの中で、徐々に築き上げていくものでございますので、僕はまちづくりというのは、この目に見えないものをいかに育てていくか、まちづくりというよりも、育てていくという、「まち育て」という言葉がいいか分かりませんが、そういうことだと思っております。それと、もう一つは子どもに向けての発信というものを大切に考えております。次の世代にいかに町を伝えていくか、それをどのように大人が子どもに対して残していけるかというのを一つの課題にしております。

それから、本当に時間がないので、最後もう端折ってしまいまして。これちょっと説明が難しいんでございますけども、実は大阪というところを私たちはその…本当に原点というか…場所でやっておりますので、この「まちづくりの三原則」というのをちょっと遊び心で書いております。一番、我々民間でやっている、住民だけでやっております組織で大切なのは、大阪だけしか通用しないかも分かりませんけども「おもろい」、面白いということが、もう第一のエネルギーになっておるわけですね。皆さんもお分かりのように、趣味とかそういうことになると時間を忘れ、お金を厭わずにやるということで、まちづくりも義務とか責任だけでは、僕はもう民間においてはできない…できないというよりは、やっぱり面白いということが、まず第一だと思っております。それで、面白くやるためには「いいかげん」にやらな駄目なんですね。台本に書かれたギャグは面白くないということで。面白いというためには、いいかげんにやるということです。それと、私の方の会は26年間、会則・会費・会長がないという会でございまして、お金が全くないんですね。お金がないということは、「人のフンドシで相撲をとる」ということを信条にしております。そういうことで「面白い」事を「いいかげん」にして「人のフンドシで相撲をとる」という。この三原則ですね。これは大阪…関西圏以外の方にこれを話すると、ちょっと伝わりにくい点があるんですが、この「面白い」ことを「いいかげん」に、「人のフンドシで相撲をとる」というのは、行政はできないんですね。全くこれは、行政は反対のことをせないけません。意味のあることをちゃんと手順をふまえて、それで経済的な裏付けがあって、最後にちゃんと成果をあげないかんという。民間はそれはせずに、おもろいということを土台にしているということです。

まあ、私はよく言うてるのは、私たちの民間のやっているまちづくりは活け魚料理やと。ぴちぴちの取れたてをその場で料理しておりますけども、行政なり専門家がやるまちづくりというのは、それを冷凍に入れてですね、計画をして練っておる間にまた現場に戻したとしても、それはもう味も鮮度も変わっておるということで、行政と専門家がやるまちづくりは冷凍や、と言うております。これはもう本当に失礼なことなんですけども、分かりやすいと思いまして。そういうことで進めてまいっております。一応、今時間まいりましたと思いますので、ここで締めさせていただきます。ありがとうございました。

プレゼンテーション②

中村　英雄

（徳島市・NPO法人「新町川を守る会」代表）

徳島からやってきました。朝８時に徳島を出発して、阪急三番街に着いたんが10時20分。２時間20分ぐらいで大阪へ来られます。

（映像を見ながら）私たちの会は、平成２年の３月に会をこしらえまして「できる人が、できる時に、できることを。」というような合言葉でずっと会を進めております。これが徳島市で非常に川の多いところで、上に映っているあの大きな川が、あれが吉野川です。真ん中が私たちの中心部で、こう瓢箪のようにぐるっと囲むようになってます。まあ１周６kmのところなんですけど、非常に川の多いところで、徳島市内に川の数が138、橋の数が1650余りあります。人口が徳島市で26万ぐらいです。この真ん中が、ちょうど瓢箪のような形になっておりますので、「ひょうたん島」と呼んでおります。もともとひょうたん島というのはなかったんですけど、20年…もう少しかな。25年ぐらい言うて言うてしよりますと（何回もいい続けておりますと）、行政のほうも「ひょうたん島」と言うようになってしまいました。どこの通りでも、同じ事を言うて言うて（何回もいい続けて）やっておりますと、通りも町名も変わるもんだなあと思います。今は、これがちょうど瓢箪のような形で、「ひょうたん島」というので定着しております。まあ、ここでいろんな活動をしております。

まず、平成２年３月に会をこしらえまして、非常に川の多いところですから、この川を活かしたまちづくりをしていこうということでやっております。毎月１日の日と第３土曜日にこういうような船を４隻ぐらい出しまして、だいたい約15名ぐらいが掃除してます。会員は、平成２年の３月にできたときは10名ぐらいだったんですけど、今は280名ぐらいになっています。会員が一人…個人が3000円です。法人が３万円で。会員に入ってきてくれると、私はいつも「あなたにこの川を掃除する権利を与えます。」と言っています。まあ会費も払いたいもんだけ払えということで、三年間払わなんだら、退会してもらうというようにしております。それから毎年30人ぐらいが入会してきて、20人ぐらいが辞めていくというような形です。

中村　英雄氏

ゴミもまあいろいろありまして、このひょうたん島の周りをずっと掃除しているんですけど、空き缶とか生ゴミとか、自転車もあるし、オートバイもある、ベッドもあるし。そういうような形で、だいたいものがずっとあるけど、やはり、ずっとこの10年も余って掃除しておりますと、やはりゴミの量も減ってきて、市民の川に対する愛着というのも、ものすごく変わってきたように思います。かつては、この川も非常に汚くて、BODで言ったら30ppmとか40あって、この橋を通るときにも（映像を見ながら）これ徳島駅から出たすぐの所なんですけど、臭くて魚もいなかったんですけど、今は、チヌでもヒラメでもカレイでもスズキでも、去年の６月にはかなり大きなマンボウも私が捕まえました。非常に水もきれいになってきました。

（映像を見ながら）最近では、ここ４・５年前から企業も参加をいたしまして、これは四国電力さんなんですけど、企業もこう一緒になって掃除するようになってきました。今は、地元の小学生・中学生・高校生なんかも一緒に掃除します。まあ掃除するのは、こんな船でしますので、あんまり大勢で来ますとものすごくお金がかかります。かつて200人ぐらいが掃除したい言うて来たんですけど、その時は船を30隻借りましたので60万もらったことがあります。やっぱり、掃除するのん（だけ）でも、かなりお金がかかります。こういうふうな形で、ずっと毎月１日と第３土曜日。この16年間で休んだのは、まあ１回か２回。もう相当な雨が降らん限りはやってます。台風でも来ん限りはやってます。まあ、雨が降って普通に掃除しとっても、落ちこんだら同じことですから「落ちこんだときは、一分以内には上げてくれよ。」と言うてます。今まで、10人ぐらいは川の中へ落ちこんだんですけど、今までは大丈夫でした。（映像を見ながら）まあ、新町川を、この徳島市の中心部をきれいにしていくのには、吉野川をせないかんということで、吉野川のほうへも行っ

てます。ちょうど徳島から出て、さっきのところをちょっと吉野川へ出たところなんですけど、ここは毎月第２の日曜日に朝６時から掃除してます。これも、10年ぐらいやってるのかなと思います。この後は、掃除が８時から９時ぐらいまでありまして、済んだ後は必ずうどんが出て皆で楽しむようにしてます。まあ、多いときには60名ぐらい。少ないときには10名ぐらいのこともあります。だいたいゴミの量は、ここでもやはり、夏であったら４トン車…まあ２トン車ですか。新町川のほうの掃除であったら、夏は４トン車ぐらいがいります。今頃であったら、ゴミが少ないので２トン車にいっぱいぐらい。

（映像を見ながら）まあ、私たちのこの川をきれいにしていくというのには、やはり上流をやらないかんということで、吉野川の源流のほうへ行ってます。雨がなかったときに、鮫浦ダムの水のないところがよく映るんですけど、高知県と愛媛県の境の所で森づくりにも行ってます。だいたい、これも７・８年前から行ってるんですけど、この山の大川村という村長さんに1,000年貸してくれということで、1,000年借りましてここで木を植えたりしてます。木を植えたり、間伐をしたりということで、年に６回ぐらい山のほうへ行ってます。

これが鮫浦水源の森というところで、四国の森というのはものすごく過疎化が進んで、森は非常に保水力のない山になっています。やはり、ここを間伐して、水源の森って言うんですか。やはり山からやっていかないかんということで、高知県のほうへ行きましてやっております。やはり、流域をよくしていくっていうことが大事で、自分たちの町を良くしようと思ったら、まず外のところ。やはり高知県とか、どんどん遠くの上流へ上流へっていうようなことで、よそをよくするっていうようなことで。こんなことも年に６回ぐらい、森づくりにも参加しています。

（映像を見ながら）これは、徳島の新町川なんですけど、ひょうたん号というのが最初に川巡りした船で、これは12・３年前の写真なんですけど、向こうに写ってるのが県庁で…お洒落をして乗ってくださいということにしてます。できるだけ、お洒落をして楽しく乗ってもらうと。やはり、川とか、まあ女優さんも一緒なんですけど、やはり見られて美しくなっていきますので。やはり、皆に見てもらえるような形でやってます。

（映像を見ながら）まあ、この船がちょうど10年余り前に私たちのほうで購入した船で、10年ぐらい前は毎週、毎月土・日・祭日であったんですけど、この最近５年間ぐらいは、毎日船出してます。一日５便ということで、最低５便は出しておって、多いときには、一日40便ぐらい。この前の11月３・４・５日の連休のときには、一日に500人から600人ぐらい乗りました。だいたい年間に３万人ぐらいは乗ってるんじゃないかなと思います。船はもちろんこれ無料で出してます。やはり川をよくするということは、やはり住民が、徳島市民がたくさん乗ってくれるということが大事です。やはり無料であったら市民がたくさん乗ります。だいたい乗ってる割合が、三分の一が徳島市民で、郡部の人が三分の一、県外の人が三分の一です。やはり、市民が多く乗ります。これがいいとか悪いとかよくいいますから、行政のほうも、ほんとにこの川には力を入れてくれています。

このひょうたん島を回る護岸のところでは、平成元年から平成15年までに、行政のほうでもこの石組みを造るのに150億ぐらいかけております。徳島の予算からすると、ものすごいお金がかかっているなと思います。これも、できるだけ楽しく乗るということにしています。かつてこの船で公務員の人が乗りますと紺の服とか、グレーの服が多いもんですから、海岸のほうからこれに乗って来よると難民に間違われたこともあります。今は、できるだけ、まあ船は楽しく乗ってくれというようなことにしてます。

小学生なんかも、環境教育ということで、よく参加するようになりました。かつては、この川で‥「ここへ来るのは危ないから、来たらいかん。」と言いよったんですけど、今は小学生もたくさん来ます。川の中で泳いでるような子もだいぶ増えてきました。やはり徳島市は非常に川が多いですから、この川がきれいになってきて、この川を活かしていくと、ものすごく面白い町ができてくるように思います。

（映像を見ながら）これは、何年か前の阿波踊りの風景なんですけど、阿波踊りのときも一日に600人、700人、800人ぐらいの人が乗ります。朝10時ぐらいから夕方６時ぐらいまで運行してるんですが、

阿波踊りのときなんかは、非常にたくさん乗ります。船はもう楽しんでもらおうということを一番にしてますので、普段のときであったら、夕方乗るときは、船上でワイン飲んだりシャンパン飲んだりとかいうような形で、船を楽しくして川からの町をみんなに見てもらうようにしてます。そいうことで、徳島のこのひょうたん島の景観というのは、ものすごく変わってまいりました。

（映像を見ながら）これは、車椅子に乗ってる人なんですけど、ちょっとこの上の所に車椅子専用のエレベーターがあるんですけど、やはり、こういうような身障者も月に30名ぐらいは、やってきます。目の見えない人でも船に乗りにきます。この人は特に重病の人で、船が揺れたら死にまっせ言われましてね。大変な人を乗せたんですけど、船にこの人の看護の人が乗ったのが10名くらいと酸素ボンベ何本も持って。それから陸上で待機した人が10名ぐらいで。全部で20人ぐらいで、この人を連れてきたことがありました。今、船乗せるのに専用許可をいただいておるんですけど、この時は不法係留です。不法係留のところに、いろいろエレベーターがついたりと、行政のほうでやっていただきました。

（映像を見ながら）かつて徳島市の川が汚かったときには、こんなカヌーがくることなんか考えられなかったんです。今は、こういうようなカヌーもたくさん来るようになりました。市民のほうでも、この川がきれいになったのを誇りに思うようになってきています。ちょうど今、見えいてる水際公園が、平成元年にできたんですが、この右側のところが、平成元年にできたんですけど、その時は対岸も汚くて「こんなもんが出来たってなあ…。」というような市民の声があったんですけど。今は、皆これが出来て誇りに思うようになってきました。行政のほうも「皆が、水際公園がいい、いい。」と言うもんですから、だいたい一周するのが６kmあるんですけど、今ほとんど８割くらいの護岸ができるようになっています。

（映像を見ながら）川では、こういうような形で、これは、中秋の名月のときにしている雅楽の演奏会なんですけど、これも平成元年からずっと私たちのほうでやっております。今年も10月のときの中秋の名月の時に、こういうような雅楽の演奏会もしました。この前が川になっておりますので、必ずこう川の淵で、できるだけ川を見るような形でやっております。

（映像を見ながら）これも12月になったらいつもやっているんですけど、「川からサンタがやってくる」といって、一応３万点ぐらいの品物を集めまして、それを3000の袋に入れて、12月の23・24・25日の三日間で、このひょうたん島の周りを船で配っていきます。もう川の淵は人がいっぱいで、大変になるんですが。

（映像を見ながら）これも私たちの会員の高校生たちが、こういうような船を作ります。今年も…もうこれ12・13回やってるんですけども、なかなか好評でやめれなくなって、ずっと続けております。やはり、川から船が行きますと、周辺の家でもいろんな飾り方をして、ものすごく川が楽しくなっていきます。

（映像を見ながら）この寒中水泳も、徳島の場合、昭和30年ぐらいまであったんですけど、水が汚れてきたということで中止になっておりました。40年ぶりに、これを復活をしまして、今年が12回目ぐらいだろうと思います。こういうような形で、寒中水泳もやってます。まだ、ちょっと水は汚いんですけど、してます。徳島は阿波踊りが本場ですから、最後は水中阿波踊りをしております。

（映像を見ながら）川がどんどんきれいになっていきますと、こういうような形で、ボードウォークができます。右側の所にパラソルがあるんですけど、こういうようにいろんな形でまちづくりが進んできます。ボードウォークという板張りの通路があるんですけど、これは平成７年にできたボードウォークなんが、住民のほうでお金を出して作りました。高度化資金を借りまして、約300mぐらいボードウォークを作っております。

（映像を見ながら）川のところでもいろいろ遊べるような形で、こういう浮き舞台もできています。まあ、行政のほうでも川の好きな人がおりまして、いろいろとこのような所に力をいれてくれています。これがボードウォークなんですけど、パラソルショップも今のところ件数が少ないんですが、全国にあるボードのなかで住民が作ったというのでは、なかなか少ない例なのではないかと思います。

（映像を見ながら）川がきれいになってくると、どんどん川のほうを見るようになってきました。か

つて川が汚いときには、川のほうが裏側であったんですけど、今、徳島の町も川のほうへ向いて、川を活かしたまちづくりをしていますから。まあ、そういうふうに川のほうへ向いて家が、どんどん出来てきて、それと一緒に水もきれいになっていってます。

（映像を見ながら）これは、徳島の県庁前で、このひょうたん島の一角なんですけど、ちょうど県庁前にこういうふうにヨットハーバーがあります。ちょうど知事室が三階にありまして、船で通りますとこの頃…まあ選挙が近いわけでもないんですけど、知事さんも窓から手を振ってくれてます。まあ非常に川がどんどんときれいになっていって、この上のほうが海なんですけど、町もだんだんとこう広がっていっております。

（映像を見ながら）これが青石で造ったボードウォークで、6㎞のうち約5㎞ぐらい、こういうような形でできてきました。なかなか徳島の予算でいうて、平成元年から15年までで、一応150億ぐらいかかっています。非常に水との距離が近いんです。これは、まだ潮がひいてるときですから、満潮になってきますとちょうど手で触れるようになります。大阪の川を見ていると、非常に川との距離が遠いんですけど、徳島の場合、ものすごく水との距離が近いです。だいたいここで干満差が2ｍぐらいですが、台風の時は、こういうような上にもちょっとは乗ってきますけど、非常にこう水と親しめるようになってます。

それで、市民の方も川の淵へだんだん集まってきています。私たちのほうも毎月最終の金曜日は、この川の上で、こういうような所でいつもパーティをしています。昨日がそうであったんかいな。毎月最終の金曜日は飲み放題1000円というので、通っているお客さんもみんな寄ってきて、一応飲むようにしてます。去年、今年、11月はボジョレの時で、ボジョレヌーヴォを出して50人ぐらいが集まってきて飲んだように思います。

（映像を見ながら）川をきれいにしていくということで、川からのまちづくりなんですけど。川に沿ったところでこういう公園がありますので、こういうような公園にも花を植えています。ちょうど23日にこの川沿いの公園ところで、今年はパンジーとノースポールと冬知らずですか、7500本植えてみました。県のほうの補助金が45万ぐらいあるんですけど、私たちのほうでいろんな肥料もやったりして、70万ぐらいかかってしてます。やはり、地域づくりですから、自分たちの町は自分たちで作るっていうんが、非常に大事ではないかと思っております。

やはり、これからの地域づくりは、住民の自立がなかったら、なかなかできないのでないかなと思います。この花壇作りとか、街路樹の剪定をしたりとか、肥料をやったりとか、道路に木を植えたりとか、それから川の清掃とか。私も徳島でおるときは、だいたい一年のうち300日余りは川の上におります。なかなか最初のうちは、掃除をしておっても、３年や５年のときは、「あんな変わりもんがおる。」ということだったんですけど、10年しておりますと、みんなが川のほうへ注目してくれまして、町がずっと変わってくるように思います。

石の上にも三年、川の上にも十年もしますと、ものすごく地域が変わってきて、住民に愛着と誇りが出来てくるように思います。まだまだ始まったばかりですが、これからはもっともっと、こういうふうなまちづくりで、やはり行政にしてくれって言わなくても、自分たちの町は自分たちでしていく形で進めていく。私たちNPOが住民を巻き込みながら、こういうような花壇造りをしています。イベントをするときに、大きなイベントになりますと、ボランティアの人でもやはり300人ぐらいが来てくれます。やはり、大勢でまちづくりをしていくというのが、非常に大事でないかなというように思っております。これくらいですか。まあ時間が来たようですので、これで終わらせてもらいます。

プレゼンテーション③

土居　年樹

（天神橋筋商店連合会会長）

皆さんこんにちは。ご紹介に出てきました土居でございます。天神橋筋商店街という、日本一長い商店街でございますけども、約３kmあるんですね。初めは、私は日本中でもっともっと長い商店街があるやろういうことで、あえて「日本一長いといわれ

る商店街」と言うておりましたが。もう、うちの方が長いねんという商店街がどこにもありませんのでね。恐らく、日本一長い商店街でしょう。約1,000店舗あります。

そんな長い商店街からやってきたわけでございますけれども、今日は朝から何をしてきたかというと、７時半に茶屋町という所…梅田に近いところでいろんな企業群がいっぱい集まってるところ。その茶屋町に落書きがめちゃめちゃ多い。これをなくそうということで住民が立ち上がったんですね。それで、私は商工会議所の役員もしておりますので、特にその環境問題についての委員長をやっておりますから、そちらに参りまして激励をして、次のとこへ行ってここへやってきたんです。

アメリカ村もそうなんです。実は、アメリカ村も落書きがめちゃめちゃ多かった。それが一ヶ月ですかね、100人ぐらいが毎日清掃をした。ペンキを塗り倒した。そして、アメリカ村の落書きがほとんど消えたというんです。地域住民が皆さん一生懸命やってらっしゃる。なんで地域住民がやるかというと、アメリカ村は御津八幡という大きな、古い神社がある。茶屋町はお茶屋のある鶴町という、隣には鶴が住んだという町がある。綱敷天神もそこにある。こういう大事な大阪の町をつぶしたらあきまへんで、落書きで世の中が、環境がむちゃくちゃになったらあきませんよ、そのために我々が立ち上がりましょうよと。それから、地域住民の皆さん方の心意気というか、そういうものがいかに大事かということを改めて痛感をしているところでございます。

そのあと今日は、12時から天満天神繁昌亭に参りました。それは何かというと、９月15日にオープンした繁昌亭が２ヶ月とちょっと…10日ぐらいで、３万人来たんです。ちょうど３万人目の入場者があったんです。それで、その表彰といいますか、お礼に参上したわけでございます。天満天神繁昌亭が変わってどうなったかということは、また今の時間ではちょっと語れないかも分かりませんから、パネルディスカッションのほうでも、お話をできたら有難いなというふうに思ってます。

私は、天神橋筋商店街の仕事をするようになったのは今から30年前。まだ若かったんです。30代でございました。30年間ずっとやり続けて、今日に至ってようやく皆さん方に「天神橋筋、知ってるで。」

土居　年樹氏

と。「繁昌亭ができたとこや。」いうふうに認知される。それが30年かかっています。それで、30年前はどんなんやったかっていうたら、もうボロボロでしたね。特に、私は３丁目商店街の中の３丁目でございますから。３丁目なんていうのは、アスファルトでテント張りのアーケードで実に悲惨な状況でございました。

その中で、一番最初に何をやってきたかといったら、カルチャーセンターを作ったんです。日本の商店街で初めて、商店街立のカルチャーセンターができたいうことで、大変反響を呼びましてね。その後、中小企業庁の皆さん方が、どんなもんやと尋ねてこられて「何をやってまんねん？」、「伝統ある天神祭をもっともっと大きくしたいんです。」「皆さん方が地べたでコンサートやってはるのを、それをメジャーにしたいんです。」「地域住民の皆さん方が子育ての相談に来てはる。それも、ちゃんとここでできるようにしたいんです。」「絵画展もやりたい。」いろんなことを提案をしながら、常に自らの発想で、行動で、数人の協力で15年間やりました。

それで、その後その私たちの商店街を見て「これはええことや。」「商店街に文化というと、ええことや。」と言うて日本中の商店街が空店舗などでカルチャーを始めた。しかし、国の助成金がついて始めたところは、ほとんど潰れました。それはつまり生む気持ちがないんやね。まず、助成金がありき。「そしたら、なんかやりまひょか。」「そんなん売り出しやってるより、こんなんやったら面白いかも分からへん。」「銀行の跡地ができたら、それを借りとって文化をやりましょ。」と発信はするんですけれ

ども、後が続かない。人に委ねられた文化というのは、絶対続きませんよ。皆さん。産みの親がそんなんやから理事長が変わると、育ての親なんていうのは全然関心がなくなってしまう。瞬く間に街文化が崩壊してしまうんです。そんなことがずっと続いているのが商店街です。

それで、商店街が今、日本中でどうなっているかっていうと、恐ろしいですよ、皆さん。97％が衰退、全部下り坂。それで、３％だけが繁栄してるんです。私はその３％の中に入りたいと思っているわけで、残したいと思っているわけです。そらそうじゃありませんか。もう、天神橋筋っていうのは天満の天神さんがもともとでございますから、1,100年の歴史があります。天神橋筋なんていうのは、もう江戸時代からできてる。大阪城の初代の城主の松平忠明さんが、まちづくりをしはったときに、我々の町もちゃんと作られました。寺町もでき、多くの人を伏見から呼んできたら伏見町をつくり、河内から呼んできたら河内町をつくり、そして、そこに人を住ませること。住むことも皆さん、立派な文化ですよ。人がそこに住むっていうのは。住まないと町は傷むんです。これは私の持論でございます。住まない町は、町じゃないんです。そのくらい、やっぱり住むことがめちゃめちゃ大事なんです。住むことによって、その町に愛着を感じて、その町を発展させていく。今、神野先生がおっしゃったように、発展さす。このことが、町の大きな発展の要因になってるんですよね。

それで、天神祭はどうかっていったら、天神祭そのものは、もう江戸時代からずっと続いている。その天神祭を何百年続けてきて、今でも、毎年100万人の見物者がある。それは、何なんでしょう。それは、われわれ町民が「天神祭は俺がやらな、誰がやるねん。」という祭り文化ですよ。そのエネルギーが、人を感動させるんです。イベントじゃないんです。お金を出したらできるもんじゃないんです。みんなが力を合わせて、お金も出し、力も合わせて、それこそ運命共同体で天神祭を盛りあげる。そのエネルギーが人を感動させるんだと、私は思っています。だから、その火を絶やし、消したらいかん。次のうちの息子にも孫にも、その天神祭を何とか繋いでもらいたい。そのためには、町を残していかなあかん。

町を残していくにはどうしたらいいか。今こそ、そういう文化力みたいなことが表に出てくるようにならんとあかんのです。しかし、カルチャーセンターを創った当時は、商店街の店主に「何をしてまんねん。」と言われました。「文化で飯が食えまへんで。」「文化で店が流行りまへんで。」とさんざん言われました。だけど、頑なにそれを守ってきた結果がよかったんですよね。今となれば評価されている。それが天満天神繁昌亭の建設までにつながっていくんです。

その間に考えたことは、商店街がなんでそれだけ衰退していくのよということ。商店街というと文化ですよ。商い文化であるし、町文化でもあるんです。まさに文化遺産なんです。その遺産が遺跡になったら、えらいこっちゃ。「ここは、天神橋筋の跡ですよ。」なんていう碑が立ったら、えらいこっちゃ。そうならんように残すためには、何が必要なのか。ずっとそれを考え続けてきて、それを行動に移してもう数限りない、いろんな事業・イベントもやりながら今日にきてるわけでございます。

その間に考えたことは、商店街活性化というのは、その文化を守ることです。住む文化も、それから商い文化もそうでございますが、祭り文化もそうなんです。それから、大阪の天満っていうのは、大阪での硝子発祥の地なんですね。硝子文化は、正にものづくり文化なんです。そういう文化が全部集約されて、町文化ができあがってるんです。町は商店街だけでは成り立たないんです。ものづくりだけでも成り立たないんです。いろんなものが集約されて、それの象徴的なのが大阪天満宮です。天神さんが、私たちの町のまあ守り神、象徴なんですね。

社会っていうのは、神社で会うと書くじゃないですか。そのくらい「社会の根本はそこにあるんや。」という思いで、やってきたことが繋がってきた。その中で商店街文化というのは、それだけで商店街が残るだろうか。こんな大事な筋を今から造るいうたら、できませんで。ショッピングセンターは、なんぼでもできる。あれは、文化じゃないです。あれは、商業ゾーンです。地下街は、なんぼでもできる。あれは、地下街って言ってますけど、あれは街じゃないですよ。あれもショッピングゾーン。地べたが発達、発展しないと街にならないんです。

そのためにどうしたらいいか。もう20年ぐらい前

から考えたことは、商店街だけでは街文化は完成しまへんで、ということです。もっともっといろんなものを貼り付けていかなあきまへんで、ということ。その貼り付けるのは何をしたらいいのやろうか。例えば、扇町公園という大きな公園があります。その公園はボロボロになって、古い大阪プールがあった。そんなん、辞めてもらったほうがいいんやないか、公園整備をして、公園らしくしてもらったらいいんじゃないかな、といういうふうなことで、整備をしてもらったりする。その横に大阪市の土地が空いてたら、これ何とかしてよということになり、関西テレビができて、キッズパークというこどもの城ができます。これもやってもらった。

例えば、大川沿いでは、三菱マテリアルの工場の跡地がほったらかしになっています。「これ、もったいないやん。こんな、ええ都市の真ん中で。」「何とかしてくれまへんか。」言うたら、三菱地所さんが動いてくれはって、帝国ホテルができました。OAPができました。できよりますよ、皆さんが言えば。声を出せば、何とかなる。全部行政の力を頼らんでも、言うていけば、何とかなるんです。

JR東西線が走りました。京都から福知山まで線が走る。その下の天神橋筋の商店街のど真ん中に駅ができるんです。駅ができたら、その駅は縦横無尽に地下鉄も通ってるんです。その地下鉄の駅は「南森町」といわれます。ここに、ほとんどの皆さん方は「南森町」っていったらご存知でしょうけれども。例えば、徳島からお越しになった。北海道からお越しになった。「南森町」ではピンとけえへん。分かりまへんやん。「大阪天満宮」にしてもらいまひょ。「天満宮前」にしてもらいまひょ。三万人の署名を集めて、JRへ陳情に行きました。水臭かったでっせ、そのときのJRさんの対応は。ところが、一ヶ月前に駅ができ、その名前が「大阪天満宮」になりました。「前」も消えたんです。これは、もう感動しましたですね。まあ、天満宮の宮司が一番喜びはったんですけれども。

そのくらいのパワーで、やっぱりまちづくりを一つずつやっていく。「小さいことからコツコツと。」といわれますけれども、やっぱり目に付くこともやっていかなあかん。そういうことが、やっぱり時間がかかります。皆さん、それぞれ苦労してらっしゃいますけども、本当に時間がかかる。一つのことを信念を持ってやっていかなあかん。私は、その商店街とか天満の町を守るためには「なぜここが天満やねん。」「天満であるためには、どうしたらええねん。」という発想から入るんです。イベント屋さんが持ってきたイベントなんて、全然相手にしません。自分で考えな納得できない。だから、そのことばっかりをやってきてるから、それが成功してるんですね。

天神祭と一緒に、その前には七夕祭がある。「七夕祭りは、日本中どこでもあるやないかと。」と言われるけれども、そうじゃありません。うちには、千年前の池が三つあるんです。一つは、七夕池というんです。一つは、明星池というんです。もう一つは、星合池というんです。全部七夕に関係がある。しかも、そのうち二つがまだちゃんと残ってるんですよ。七夕は、うちが一番元祖やねんと思ってます。竹藪もぎょうさん昔はあった。今でも竹屋さんがぎょうさんいてる。こんなん、こんな町はやっぱり七夕の発祥地やというふうに思ってますから、それをどんどんやっていくと、人が増えてきた。毎年７月24・25日の天神祭というのは、７月７日から始まるものだというふうに、昔はやってたんです。そのきっかけですから、七夕祭を盛大にしようとした。

しかし、ただ単に、笹に短冊つけて願い事を叶えるという発想では、次の若者がついてこないだろう。次の若者がついてこれるようにするには、どうしたらいいのか、またいろいろ考えます。浴衣を着て、来てくれはる人たちに何か歓迎しようと。バレンタインデーがあってホワイトデーがあって、男と女の交歓の場所が二つあったら、七夕祭は、今度は両方が交歓する場所にしましょうと。天神さんの中には、スモークが焚かれて、シンセサイザーが鳴って「これが天神さん？これが神さん？」と言われるぐらいのイメージになってしまいました。そういうことが多くの若者に、新しい文化を備え付けることになるかも分からへん。そこで、昔の七夕を復活させたら、これはええことじゃないかな。そんなことで、ずっとやり続けていると、七夕の七月七日は、何万人という人が来るようになりました。嬉しいですね、これは。

やっぱり「毎年、毎年一つの事をどれだけ続けるか。」ということが一つの基本理念なんですね。う

ちの町は何をしたらええねん。どうしたら町の文化が発展するねん。天神祭は残ってる。七夕文化がもういっぺん蘇ってきた。そうすると、その延長上に天満天神さんの周りには、明治時代は８軒の芝居小屋があった、落語もその中にあった、文楽もあった、歌舞伎もあったという歴史につながるんです。それができたらええかなあと思い続けて10年ぐらい経ってますかね。つまり、芸能文化がそこにあった。天満宮の中では、芸術文化が、もともと育っている。そういうものを取り戻していったら、町は発展していくんじゃないか。ずっとそれを考えていた。するとそれが実現したんです。

それで、そういうことを考えてるとね、皆さん。今、先生もいろいろ仰いましたけれども、やっぱり文明が文化を廃れさせていくんや、と私は思ってるんです。それと、もう一つは時計の針を逆に回していったら、世の中よくなるで。明治、大正、昭和の初め、それから戦後の物がなかったとき。物がなかったときに、人殺しはそんなに増えまへんで。豊かさがこういうことになってしまってる。もう一つは町が廃れると必ず犯罪が起こるんです。健全な町の中には、おかしな犯罪は起こらないんです。そのためにも、やっぱり時計の針を逆に回していかなあかん。そしたら、昔の良さがどんどん見えてくる。その見えてくる良さを現実に合わしていったら、また町がもとに蘇るんじゃないかなあ。そんなことを今ずっと考え続けてます。

一つずつ、やっぱりやらなあきませんから。繁昌亭ができた。それが完成するまでの苦労話は、また後でお話をします。繁昌亭が出来て、その後どうなったか、街が変わったか。変わりました、皆さん。どう変わったかは、機会があれば話しますけど、やっぱりやれば変わるんです。皆さん方が熱意を持って、ここにも私と同じような年齢の方々がたくさんいらっしゃいますけど、その方々が昔の文化を呼び戻す仕掛け人になってくれはったら、ものすごいありがたい。今の40歳ぐらいのお母ちゃんが一番ややこしい言うたら怒られますけどね。子どもを殺したりなんかすることが多い。そうすると、その子どもたち、つまり、そのお母ちゃんを産んだのは我々なんです。戦後三代目で世の中おかしくなってるんです。だから、その三代目がおかしくならんように、皆さん方がもういっぺん、高齢者が発奮して世の中に文化を取り戻す動きをしていったら、また日本の社会がよくなっていくかなあというふうなことを思いながら…これで一応終わらせていただきます。ありがとうございました。

プレゼンテーション④

藤原　　明

（株式会社りそな銀行地域サポート本部
プランニングマネージャー）

りそな銀行の藤原と申します。よろしくお願い致します。りそな銀行は、３年前ほどから「REENALプロジェクト」というプロジェクトをやっております。これは「りそな」と「regional」という言葉を組み合わせた造語でございまして、「天神橋筋商店街の町おこし共同企画」もその一つでございます。

我々銀行というのは、今まで金融のお取引だけの存在だったんですけども、ちょっと一歩下がってみますと、われわれの顧客群といいますか、まつわるお客様というのは宝の山だということに気づきまして、それぞれの地域、あるいは企業さんが持っておられる、そのポテンシャルを活用させていただきながら、お付き合いをさせていただいているわれわれ銀行がコーディネーターとなってさまざまな企画を展開することによって、そのポテンシャルをさらに引き出して、まちの活性化とかができるんじゃないかと。

私は地域住民、行政に加え我々のような企業というのも重要な登場人物だと思っております。その力を使わないのは、もったいないな、という観点からこのプロジェクトを進めております。まだまだこのプロジェクトを始めて３年ということでございますので、このプロジェクトがずっと続くようになって、日本全国の各地域がそれぞれ特色のある活性化ができればいいなと思っております。

このプロジェクトの具体的事例をDVDにまとめておりますのでそれを見ていただきながら、このプロジェクトのご理解をいただけたらと思います。それでは、よろしくお願いいたします。

藤原　明氏

「DVD：【CM】「おい、見つかったか。」「あかん、石ころばっかりや。」「ほんまにあるんか。」「あるはずや。」「たくやの兄ちゃんが、この辺やって言うてたんやから。」「ほんまに埋めてあるんかなあ。」「そりゃ、あるやろ。いっぱい持ってたビー玉、おばちゃんがほかすって言うからな。慌てて隠したらしいで。」子どもの頃、こんな宝探しやりましたよね。すごいものを見つけたい、この気持ちは大人になってもどこかにありませんか。私たち、りそな銀行には、身近にとても多くの宝物があります。それは、私たちを支えてくれた地域や企業の皆様。大切な皆様と今度は手をつないで何か動かしたい。そんな気持ちで始まったプロジェクト、REENAL。「あったで。」「ほんまや。」どんどん広がっています。REENALの輪。今度はあなたと。Feel together! REENAL。りそな銀行です。」

REENALプロジェクトとは、りそな銀行が中心となってFM802を始めとした企業や地域とのコラボレーション企画を展開し、企業や地域のポテンシャルを引き出し、最終的に新しいマーケットを創造することを目的としたプロジェクトの総称です。「REENAL」とは、りそな銀行の「りそな」と地域を意味する「regional」を組み合わせた造語です。プロジェクトでは、「Media Mix」をキーワードとしてキャッシュカード、放送、ポスター、フリーペーパー、イベント、ウェブサイトなど、さまざまなオリジナルメディアを活用したプロモーションを展開しています。

FM802のアートプロジェクト「digmeout」とのコラボレーション「RESONART」。若手アーティストを応援する活動として、2004年にスタートしました。これまで、メジャーなキャラクターや著名な作家にしかチャンスがなかった、キャッシュカードのデザインを無名のアーティストたちが手がけるという、このRESONARTの活動は、平成16年１月のスタートから大きな反響を呼びました。平成18年８月現在、これまで起用したアーティストは11人に及び、カードの通産発行枚数は32万枚を超えています。また、キャッシュカードのみならず、季節ごとに店頭を彩るディスプレイや、カードのデザインに合わせた紙バッグのプレゼントなどを通じ、銀行からアートを発信し続けています。さらに、RESONART作家がCDジャケットワークを手がけたアーティストのりそな銀行大阪本店での無料ライブ「RESONART FREE LIVE」や、アート性の高いフリーペーパー「REENAL　digmeout EDITION」の発行、ギャラリーやカフェでの定期的な個展開催など、より「音楽」と「街」とに関わる活動として有機的な広がりを見せています。

そして、平成18年２月の第10弾アーティストから、RESONARTは全国でのプロモーションを開始しました。これまで、RESONARTに参加してくれた10人のアーティストたちの作品とプロフィールが掲載されたアートブック『ART BANK』の発行。　また「RESONART FREE LIVE Vol1.」参加アーティストであるDEPAPEPEが、RESONA FITS YOU! キャンペーンソング『キミドリ』を提供。東京、大阪でフリーライブを開催し、RESONARTの全国展開を応援してくれました。無名の若手アーティストに活躍の場を与え育てていく、りそな銀行は、アーテ

ィストたちによって育てられていく銀行になりたいと考えています。

さらに、RESONARTは、REENALプロジェクトとして、地域や企業とのコラボレーションを次々に展開しています。RESONARTデザインの「花」をテーマに、地域のフラワーコーディネーター、フラワーショップ、フラワースクールに銀行店頭をディスプレイしていただこうという「RESONART×FLOWER」をりそな銀行20店舗で展開しました。NOVAお茶の間留学でお馴染みのギンガネットIPテレビ電話を活用して、りそな銀行本店ロビーで開催されたREENAL Presents RESONART FREE LIVE X'mas edition」の模様を南堀江の「digmeout CAFE」でライブ中継。ギンガネット電話が、英会話レッスンコンテンツだけではなく、将来のエンターテイメント系コンテンツの拡充の可能性があることを実証しました。WEBサイト「REENAL.net」を企業とのコラボレーションツールとした企画も展開。りそなグループの女性向け投資信託商品「Loveme!(ラブ・ミー!)」の女性プロモーション隊のメンバーが「ECO」「ART」「BEAUTY」をテーマに、資生堂の環境に配慮したリサイクルや、文化支援の取り組み、ビューティー施設などをレポートしました。

「【CM】ナスカの地上絵。ペルーのナスカ大地に描かれた巨大な動物の絵や幾何学模様。いくつもの謎に包まれています。年間雨量たった5ミリ、雨による侵食が少ない環境がこの地上絵を残したといわれています。また、その魅力に魅せられ私財を投げ打ってまでも、その保存に尽くした人たちがいました。彼らがいなければ、今日のような地上絵は残っていなかったでしょう。ところが、近年雨の量が増え、その雨水が地上絵を消そうとしています。異常気象の影響は、ここにも及んでいます。守り続けてきた人たちの力も、自然の力には逆らえないのです。地球環境、手遅れになる前に。地球を救うのは、一人一人のエコの気持ち。REENALもエコ活動に積極的に参加しています。Feel together! REENAL。りそな銀行です。

平成17年4月29日には、FM802の恒例野外イベント「FUNKY MARKET」をりそな銀行がオフィシャルサポート。REENAL Presentsとして「ECO」「ART」「MUSIC」をテーマに、万博記念公園お祭り広場において大規模フリーマーケットを開催しました。当日は、FM802DJ番組ブース、digmeoutブースを中心に、りそな参加ブースも含め200ブースが出店し、来場者は3万人を越えました。また、会場ではREENAL Presents「RESONART FREE LIVE」を開催すると共に、凸版印刷、ノバシステムの協力を得て、「REENAL.net携帯サイト」をオープンし、出展ブース・イベントの情報を随時配信するITコミュニケーションを新たに展開。取引先企業の技術力を活用した企画展開により、新たな技術力活用の手法を実現しました。「水筒を持とう」をコンセプトにさまざまなプロジェクトを進めている「すいとう帖委員会」とのコラボレーション。「RE! SUITOU」キャンペーンも会場で実施。水筒を持って、FUNKY MARKETに行こうとREENALのフリーペーパーやホームページ、さらにはラジオ番組で呼びかけたところ、約1,000名もの方がマイ水筒を持って、会場に駆けつけてくれました。その模様をREENAL.netに、すいとう帖図鑑としてアップ。大きな反響を呼びました。アーティストの豊田弘治氏が中心となって、もっとみんなに、身の回りにあることやもの、環境の有難さと「このままでは地球がやばい」ということに気づいてもらうことを目標とする環境意識活動「Ecommon(エコモン)」。REENALは、この「Ecommon」のコラボレーションを展開。Ecommonミニアートブックや、ステッカーを近畿二府四県の支店で配布すると共に、平成18年5月3日には「地球がほんまにやばいねん」をテーマに「REENAL×

Ecommon present FUNKY MARKET」を開催。3万5千人もの方が来場されました。当日は、FM802ホリデイスペシャル「REENAL presents FEEL TOGETHER!」を会場から生放送。できることから始めるエコロジーをメッセージとして伝えました。さらに、象印魔法瓶が「RE！SUITOU」プロジェクトに賛同。活動をバックアップしていただきました。人気アーティストがデザインした、オリジナルマイボトルステッカーを配布したり、マイボトルを持参していただいた方に、大阪の給茶スポットでもある人気カフェの限定ドリンクを給茶するなど、さまざまな展開に多くの方に参加していただきました。保温、保冷に優れ、地球環境にも優しい魔法瓶の良さ、水筒というものの良さを改めて伝えました。

平成17年7月13日から19日に開催された「ロボカップ2005大阪世界大会」において、凸版印刷の技術協力、FM802のソフトプロモーション協力により、ICタグを利用した最新認証システム1万人の実証実験を展開しました。ストラップ型ICタグは、RESONARTカードの第三弾アーティスト、木野下円さんによるデザイン。ロボカップ2005大阪世界大会の会場では、「便利なICタグを使ったイベントがいっぱい！」をキャッチコピーに、入場者にストラップ型ICタグを一万枚配布し、予約・入場受付管理、域内電子キャッシュ、情報発信、会場内各種イベント通知の実証実験を行いました。また、りそな銀行とともにRESONARTを進めるdigmeout CAFEが、ロボカップ会場でアートカフェを展開しました。木野下円さんのグラフィックでディスプレイされたポップな空間で、カフェ特製のコーヒーやソフトドリンクをご提供。会場では、RESONART の歴代ビジュアルも展示されたほか、クラブDJによるカフェミュージック演出や、ハプニングライブも行いました。ロボカップ2005大阪世界大会の開催地、大阪は「ロボットテクノロジー推進都市」を標榜し、ロボットの開発助成事業やロボットラボラトリーの開設、様々な技術セミナーや展示会の開催と、ロボットテクノロジー促進策を積極的に打ち出しています。りそな銀行は「REENALプロジェクト」ロボカップ2005大阪世界大会におけるICタグを利用した最新認証システム一万人の実証実験を展開することにより「川上・川中・川下の連携強化と産業集積の維持強化を目指す」世界ものづくりサミットの目的にも合致させ、大阪のロボットテクノロジー推進都市化に貢献したいと考えました。

注目の大阪北ヤード開発では、りそな銀行の融資機能と公益信託機能を組み合わせた、新しい仕組み「横断型マッチング機能」を活かして、アーリーステージよりも前段階のアーリー・アーリーステージの企業や企業家を支援するために「りそなインキュベーション＆ソリューションプラザ」を展開することを目指します。

【CM】「りそなでーす。」「リージョナルでーす。」「二人合わせてリーナルでーす。」「おしまい。」「はやっ。」「おしまい。」「はやっ。」早い話がREENALとは、りそな銀行の「りそな」と地域を意味する「regional」を組み合わせた造語です。…「暖かくなってきたね。」「そうやねー。」「最近、仕事どない？」「えーと、手つないだり、組んだり。」「誰と？」「いろんな人と。」REENALは、企業や地域、いろんなところとコラボレーション企画を展開しています。…「やばい…」「え？」「やばいねん…」「何？」「地球がほんまにやばいねん。」REENALはエコ活動にも積極的に参加しています。Feel Together! REENAL。りそな銀行です。

平成16年3月から、NPO法人天神天満町街トラスト、大阪市立大学商学部とともに、天神橋筋商店街の活性化をキーワードに「天神橋筋商店街町おこし共同企画」を展開しています。最初は、地域オリジナルの大阪天満宮の朱印を押した定期預金の証書袋を作ってみよう…という小さな取り組

みでしたが、反響は予想以上のもので、まちの賑わいづくりに貢献できるレベルまで企画は広がっています。また、フリーペーパーの発行や、商店街と花火がテーマとなった映画『天国の本屋～恋火』の試写会開催。かつて、酒造りが盛んだったことから、商店街オリジナルブランドの清酒『百天満天百』の醸造の企画や、大阪天満宮内にできる上方落語の定席（じょうせき）、天満天神繁昌亭の建設資金・運営資金支援を目的としたチャリティー寄席の開催。サポータズクラブ発足など、リアルなまちおこしのチャレンジは続いています。平成17年２月には、りそな銀行野江支店が、地域とのコミュニケーションをテーマにコミュニケーションスペース「Reenalプラザ」としてリニュアルオープンしました。アクティブシニア層・ヤングミセス層を対象としたカルチャースクールやキッズコーナーを併設し、大変好評を得ています。カルチャースクールは、サンケイリビング新聞社とのコラボレーション企画で、受講生の口コミが広がり、開講３ヶ月で教室稼働率は83.3％に達しました。主婦層やアクティブシニア層の指示を得ている、サンケイリビング新聞社からコンテンツ提供を受けることで、店舗自体の魅力を高め、収益機会を増やすトライアルとなっています。平成17年10月、大阪商工会議所と関西ジャズ協会の共催による「ニューオーリンズ・ハリケーン復興支援ジャズコンサート」に協力。そのお礼の印として、駐大阪・神戸米国総領事館主催による「ドリーンズ・ジャズ・ニューオーリンズ コンサート」では、大阪本店講堂を会場として提供し、独自メディアを活用したプロモーションで参画させていただきました。これは天満天神繁昌亭チャリティー寄席の反響がきっかけとなったものです。立命館大学と学術交流協定を締結し、それぞれが有するネットワークを活用した、関西地域活性化のための共同施策を展開しています。「Ritz×RESONAコラボレートセミナー」の共催や、りそな銀行社員の立命館大学への講師派遣などを通じ、関西経済・地域に対する社会貢献を行うことを目指しています。大阪府や大阪市が協力する「美しい大阪をつくる100万本のバラの会」その事業の趣旨に賛同するとともに、事業への協力をREENALプロジェクトの一つとして位置づけ、企画を展開しています。りそな銀行の大阪府下店や、りそな銀行が開催するセミナーやコンサートなどのイベント会場に募金箱を設置し、一人100円で100万人が参加する運動に協力しています。

REENALプロジェクトは、プロダクツの企画にまで発展し、オンワード樫山とのコラボレーション『Bankbook Case』を展開しています。従来、銀行のノベルティ以外に商品カテゴリーになかった通帳ケースについて、クールな通帳ケース『Bankbook Case』を製作するという企画を立案しました。お洒落な女性やビジネスマンがバックに入れていても違和感のない、クォリティーやデザイン性の高いREENALブランドの『Bankbook Case』は、ウェブ上でアンケートを実施。ユーザーに商品企画に参加してもらう形式で、最終デザイン案を決定しました。将来的には、りそな銀行のお取引先に商品化・販売していただくことを目指しています。編集プロダクションparkeditingが創刊する「Re:Standard」をテーマにした新しい書籍媒体『Re:s』に企画・参画しています。「あたらしいふつうを提案する」がコンセプトのこの媒体は、REENALを、すべての人にとっての「ふつう」にするべく、紙面上のさまざまなプロジェクトと連携。わたしたちの思いをさらに広く世に問うべく展開しています。第一号の特集では、「すいとうのある暮らし」と「いまだからワープロ」という二つの特集を展開。その反響は大きく、一般読者はもちろんのこと、沢山のクリエーターの方々をはじめ、魔法瓶メーカーや文具メーカーなど多くの企業から、マイ水筒を持つ生活や、新しいワープロの開発に関する企

画の提案が続々とあがっています。Re:sは、このようにさまざまな企業とクリエーターをつなぐREENALの、新たなプラットホームとして重要な機能を果たしていきます。

【CM】2006年度REENAL by Resona Bankタイアップ曲『想い描いて♪』REENALプロジェクトは、さまざまな人と出会うことから始まっています。人々を繋いで、新しいものを生み出したい。この曲、ベベチオとリーナルが出会って生まれました。Feel Together! REENAL。りそな銀行です。」（DVD終了）

以上ですね。ちょっと映像を交えて、REENALプロジェクトについてご説明をさせていただきました。ありがとうございました。

プレゼンテーション⑤

角　　知子

（新世界アーツパーク事業　事務局）

皆さま、こんにちは。新世界アーツパーク事務局の角と申します。まちづくりの先輩方のお話をいろいろ聞けて、今日はほんとに来られてよかったなと思っております。

（映像を見ながら）皆さんの街づくりの歴史から比べると、私たちはフェスティバルゲートという遊園地に拠点を置き始めて、まだやっと４年です。そのフェスティバルゲートも、皆さん大半の方がご存知だと思いますけども、この４年の間にも日に日に寂れていきまして、もうどうしたらいいのかなあと毎日頭を抱えている状態ではありますが。その中に拠点を作りました４つのアートNPOがフェスティバルゲートの中にこもらず、地元である新世界や日本橋の町のほうに出て行きまして、どんどん活動の幅を広げております。

（映像を見ながら）だいたいの位置関係といいますか、フェスティバルゲートの周囲というのを見ていただきたくて、こういう図を作ってきました。ご存知の通り、通天閣。今年二代目になってから50周年を迎えた通天閣のお膝元、大阪で一番キッチュな町といわれる新世界の中に、大阪市交通局が造ったフェスティバルゲートという遊園地があります。これは、1997年にオープンしたんですけれども、オープンから一度も黒字を出すことなく、どんどん空きテナントが増えていきました。持ち主である交通局さんも、こりゃ困ったなあということになって、大阪市のいろんな部局に「空き店舗を使ってなんかできまへんか。」言うて相談に行きました。そして、「大阪市ゆとりとみどり振興局 文化振興課」という、いわゆる芸術文化を扱っている部署にたどり着きます。その文化振興課が「ちょうどバブルが弾けた以降、どんどんアーティストの発表の場所がなくなっていて、その発表の場を支えていたスタッフたちも劇場やライブハウスから、端的に言えばリストラされてしまうという状況が進んでいるので、レストラン跡を使って、大阪で芽吹いたいくつかの現代芸術のジャンルの人たちを移植してはどうか」というアイデアを提案しまして、じゃあそれで、という話になり、この新世界アーツパークがスタートしました。

2002年10月にまずは３つのアートNPOからスタートしまして、現在はアートNPOが４つ。それとNPOではないんですけれども、二つの資料室がありまして全部で６チームで活動しております。そのアートNPOなんですけれども、決して劇団とか、クラシックの演奏団体そのものに入ってもらっているのではなくて、そういったアーティストたちを支援する中間支援型のNPOが入っております。

（映像を見ながら）この４つのNPOが入っておりまして、現代舞踊、コンテンポラリーダンスといいますけれども、ダンスを支えるNPO。それから、実験音楽とか現代音楽とかいわれる、そうですね…普段ラジオとかでは流れることのない、とてもチャレンジ精神旺盛な音楽をやっているチーム。それから、メディアアートや映像美術とかいわれる、現代になって出てきたコンピューターや、ビデオカメラなどを使って作られる新しい美術を支援するNPO。それと、言葉と表現とコミュニケーション。言葉というのは、コミュニケーションをとる一番最初のツールであるというふうに考えて、その言葉をもっと味方につけて他者とコミュニケーションをとって

角　知子氏

もらいたいという思いで歩んでいるNPO。この４つのNPOが今フェスティバルゲートのレストラン跡をそれぞれ活用して、ダンスの専用劇場であるとか、ライブハウスであるとか、或いはギャラリーであるとかを運営しております。

（映像を見ながら）さて、アートNPOと一口で言うてきましたけれども、じゃあ「何をやっとんねん」ということですが、先ほど簡単に言いましたけれども、決してアーティストそのものではないんですね。アーティストと社会をつなぐ、一般的には「アートマネージメント」というところを専門にしているNPOです。大きく分けると目的は二つあります。ひとつは、「表現自体の追求」。言うてみたら、アーティストがよりよいもの、より面白いものというのを作っていける環境をサポートするということです。もう一方は、そのアーティストが編み出した表現手法を少しアレンジして、一般社会に還元していくことはできないだろうかということを模索する、いわゆる、「アウトリーチ」と呼ばれること。この二つが中間支援型のアートNPOの大きな柱になっています。今日は主にこの「アウトリーチ」と呼ばれる事業のほうを、主に紹介していきたいと思います。

（映像を見ながら）さて、４つのNPOとも、手を変え品を変え、いろんな方法で地域の人たちと一緒に何かをやっていこうということをしていますけれども、今日は一つずつだけご紹介させていただきます。

まずは、その現代舞踊、コンテンポラリーダンスのNPO「ダンスボックス」がやっております試みなんです。だいたい毎年３月中旬頃に、フェスティバルゲートの隣にあるスパワールドの大階段を客席にして、その下でダンサーが踊って、道行く人にダンスをお見せして楽しんでもらうという「コンテンポラリーダンスin新世界」というのを開催しております。これ、写真では、そのスパワールドの大階段のほうが写ってるんですけども、ちょうどその大階段からダンサーの後ろに通天閣がどどんと見えまして、まさに新世界の風景を借景にしてダンサーが踊るという面白い試みです。

（映像を見ながら）下のほうですね。これは８階のライブハウスを運営しておりますNPO「Beyond Innocence」がやりました「子どものための演奏会」です。ここの実験音楽というチームは、その実験性を追及するためにインプロヴィゼーション、いわゆる即興音楽というのを中心にやっているメンバーが多いので、参加した子どもたちが「あれ歌いたい。これ歌いたい。」という歌をその場でBGMをつけて、子どもたちに自由に声を出して歌ってもらう、踊ってもらうという場を創出するというものでした。

（映像を見ながら）上の方は、映像美術のチームがやっているプロジェクトです。８ミリビデオというのが昔ありましたよね。昔あったって言ったら失礼かな。今では、ほんとにデジタルメディアというのが発達してきまして、８ミリの映写機なんかお家で持ってらっしゃる方というのは、もうほとんどいらっしゃらない。けれども、新世界みたいに長いこと住んでらっしゃる人が多い地域では、倉庫とか押入れとかを掘り起こすと、８ミリフィルムがわらわら出てくるんですね。それで、それを集めまして「上映会をやります。」と宣伝したところ、地元の方をはじめ、そういった昔の映像・街並みというのに興味のある方を含めて100名以上の方が集まって、楽しくその昔の映像を見ました。

これをすることによって、もちろんその昔の風景を楽しむということもあったんですけれども、昔のことを突然その持ち主が思い出したりするという現象がありまして、これは医療のほうにも応用できるんじゃないかということで、今このプロジェクトは、新しい方向に進みつつあります。

さて、下のほうですが、これは声と言葉とコミュニケーションを主にやっているNPOがしている「身

体障がい者の人たちのための音楽のワークショップ」です。まあ音楽といっても、重きを置いているのは歌のほうで、言葉を発してもらうっていうことを、全身を使ってやってもらおうというものです。今、ここの写真に写っているのは、重度の肢体障がい者の方たちばっかりなんですが、驚くぐらい発語がどんどん上手になっていきました。

（映像を見ながら）映像のNPOの中に「ブレーカープロジェクト」いう別働隊がありまして、これは、アートは美術館の中だけに留まっていてはいけないと考えるアーティストが、積極的に新世界の町に出かけていって、美術活動をするというプロジェクトをするための専門のチームです。左上の写真は、美術作家さんと一緒に新世界の町のおもろい風景を探して歩くという、いわゆるフィールドワークといわれる手法でやっています。それからその右隣は、子どもたちが小さいおもちゃの前にいてますけれども、これは福岡在住の美術作家さんがやってらっしゃる「かえっこ」という、いらなくなったおもちゃを子どもたちが持ち寄って、それを交換するという、リサイクルと、子どもたちの活動の幅を広げ、社会性を養うというプロジェクトを融合させたものです。それから、例えば、一番右の下のほうなんですけれども、これはヤモリプロジェクトといいまして、「ヤモリのアニメーション」を作ったんです。ヤモリの形に切った厚紙がありまして、そこに子どもたちが自分たちで絵を書いたり、写真を貼ったりして、自分のヤモリを作ってもらうんですね。それをちょっと動かしては、ビデオカメラで一コマ、ちょっと動かしては、ビデオカメラで一コマというようにして、アニメーションを子どもたちと一緒に作るというプログラムです。こういったワークショップをキッズプラザさんや近所の小学校とか、いろんな所で展開をしまして大好評です。

こんな形で、子供向けから町の探検までと、いろんな幅を持ってやっているプロジェクトがあります。

このように、4年間、フェスティバルゲートの中でやってきまして、各々NPOがそれぞれの得意技を活かして、地域に出て行っての活動というのをやってきたんですが、実は今年の夏、新世界及び、そのもう少し北にある電気街日本橋において、アートフェスティバルをやりました。というのは、新世界の町では40年間盆踊りが途絶えているということを地元の人たちから聞いたので「あっ。盆踊りやったら私らできるんちゃうか。」と思ったのです。なぜなら、言葉の部屋には詩人がおります。そして、音楽のチームには、ミュージシャンがたくさん出入りしております。そして、ダンスのお部屋には、振り付けのできるダンサーがたくさん出入りしております。「ほんなら新しい盆踊り作れるやん。」ていうことになりまして。またその40年前の記録が全然残ってないということで「じゃあ、映像メディアのチームが今度は無くさへんように記録取れるやん。」というこの流れで、盆踊り大会を復活させてみようということに挑戦しました。それが「ビッグ盆！」という試みです。

（映像を見ながら）このように、普段はさびしい感じのするフェスティバルゲートの二階に櫓を組みまして、地元の人たちに「来てくださいね。」と声をかけたところ、当日たくさんの方が来てくださいまして、8時半ぐらいの一番盛り上がったときで、2600人くらいのにぎわいでした。先ほど言ったように、若手のアーティストが小学校に出向いて、小学校5年生・6年生の人たちと一緒に作った「新しい新世界の盆踊りを作る」という作業。それから、その上の写真ですが、あれは、40年前の盆踊りを覚えてらっしゃる奥様方にお集まりいただき、「40年前新世界にオリジナルの盆踊りはなかったのか？」ということをお聞きしましたところ、「確かにあってん。けど、ちょっと思い出されへんねん。どうしよう。」っていうことになり、いろいろとみんなで、「その昔の盆踊りどんなんやったっけ…」という思い出す作業をした風景です。そんな作業を経て新世界の町の盆踊りを、この夏復活させました。

（映像を見ながら）盆踊り大会だけではなく、いつもと同じように各NPOがそれぞれの得意技を活かして、日本橋と新世界の町へ出かけていって、展示やトークサロンや演奏会をやりました。例えば、この「テクノポリタンミュージアム」という右側の写真のものなんですが、その実験音楽をやっているアーティストの中には、自分たちで楽器を作るという人たちもたくさんいます。そういうアーティストたちが全国から20組集まりまして、演奏会と、日本橋のパーツ屋さんとかジャンク屋さんとかで自分の作った新しい作品を展示するということをやりまし

て、日本橋地域のもともとの魅力である、「電気の町」という部分を大変クローズアップした企画になりました。

こんな感じで、4年間かけて、地元の人たちと一緒に何かをやっていくということを積み重ねてきて、この「ビッグ盆！」において、本格的に地元の人たちと一緒に一つのものを作り上げたという経験ができ、4NPO、またその4NPOの広報支援担当の私としても、大変喜んでおります。

しかし、フェスティバルゲートというのが来年7月17日にちょうど10周年を迎えるんですが、それを機に売却をしてしまうか、もしくは、新しくプロデューサーを募って、別の使い方を考えるかという節目に立っております。一年前を切っているというのに、まだその先のことが分からないという状態です。つまり、新世界という場所で、このまま活動を続けていけるかどうかというのが分からない状態で、毎日頭を抱えながら活動をしております。まあ、頭を抱えてるだけやったらあかんので、みんな元気に活動しておりますけれども。

よろしければ、ぜひ今のうちにフェスティバルゲートにお越しいただいて、4NPOの活動を見ていただきたい。そして、またそれ以降もフェスティバルゲートの方に残れることになりましたら、またぜひ足を運んでいただいて、日本橋及び新世界の町、そして私たちアートのNPOとの繋がり具合がどこまでいったかなということをまた確かめに来ていただければうれしいなと思います。どうもありがとうございました。

質　疑　応　答

藪田：それでは、ただいまから残っておる時間、一応17時半までということで、このりそな銀行さんの方にお願いを致しましたので、議論を始めたいと思います。先ほどまで当センターの主任の研究員の森本幾子というのが司会をしておりました。それから、私はセンターの総括プロジェクトリーダーをしております藪田と申しますが、45分まで…17時30分まで司会させていただきます。

神野先生のご報告の後、平野の川口さん。それから、徳島の中村さん。それから、天神橋の土井さん。それから、りそなの藤原さん。さらに、新世界フェスティバルゲートの角さんと…いうことで、ご報告いただきました。長年の活動をされている方もあれば、近年の活動というところもございますが。恐らく、限られた時間では喋れないことがたくさんあっただろうと思います。その繰り返しをしていただいても結構だと思いますが、これから議論を深めてみたいと思いますが、特にお話聞いていただいて分かりますように、やはりそれぞれの手法でのまちづくりの進め方といいましょうか、考え方ということが随分やっぱり色濃く出ていたように思いますので、その辺を前半にさせていただきたいと思います。

それから、もう一つは私どものコンセプトは「文化遺産」でありますので、何を文化遺産だと考えるのかということ。それも、やはり少し議論しておいたほうがいいと思いますので、後半のところでは、文化遺産とは何かという議論もしたいと思っておりますが、皆さん長い時間、真剣に聞いていただきましたので、フロアの皆さん方のほうから少しご質問やご意見を受けて、それを口火に始めたいと思います。

神野先生のお話から始まりまして、それぞれ聞いていただきましたが、どなたでも結構ですがお三人ほど。最初に少し口火を切っていただく方がおられますれば、ちょっと手を挙げていただけますか。

参加者A：自分は19のときから、6年間イギリスに住んでまして、大学に行って院を出て、帰ってきたばっかりで、日本のことはまだまだ分からないんで、これから勉強しなきゃいけないっていうことがあるんです。神野先生が最初、ヨーロッパの話をたくさんされましたが、僕も住んでましたので、ちょっと質問したいことがあるんです。

やっぱり、ヨーロッパ、イギリスもそうなんですが、フランスとか、北欧諸国も、やっぱり箱物といいますか…建物とか景観をすごい大事にして古いものがすごい残っている。

それこそ、もう800年前のものとかが、ふつうに街中に残っているわけですね。やっぱり、そういうのは、行政側のサポートみたいなのがあると思うんですね。さっき土居様が、市民が自発的にやらなきゃいけないというのは本当だと思うんですが、やっぱりその国にとっても、ある程度何かすることがあると思うんですね。

僕の個人的な意見としては、文化というものは、基本的に対話というかコミュニケーションがその地域の人々の間にあって、初めて成り立つと思うんですね。大阪弁ひとつをとっても、やっぱりそのお爺ちゃんとか、地域の人とかと話していることによって、継承されることだと思うんです。僕が、一つ思うのは、やっぱり日本ていうのは、戦後ずっと一生懸命働いて、西洋に追いつかなきゃいけないとやってきたと思うんですが、やっぱり働きすぎて、対話の重要性、コミュニケーションの重要性を忘れてしまったんじゃないかなというふうに思うんです。

例えばヨーロッパでしたら、労働時間はすごい規制があって、フランスでしたら、例えば週に35時間しか働けないとかあるんですね。35時間といいますのは、フランスでももう一回議論されているんで、いろいろ疑問はあると思うんですが、例えば産休を増やすとか、もうちょっと休日をしっかり取るようにするとかですね。日本で「サービス残業」というのは当たり前なんですけど、イギリスでは英語に直訳はできても、その単語そのものの「サービス残業」というのは普通の日常会話にないんですね。やっぱり、働くだけじゃなくて、地域と関わる時間も確保していかなきゃいけないと思うんです。

僕は、社会政策を大学で勉強したんですが、その労働規制とかいう話になると「いや。お前は、日本社会のビジネスのあり方をわかってない。」と言われ、「まず、食ってかなきゃいけない。」というのがあるんですね。だから、さっき土居様が文化で食えるかいうふうに周りからと言われたことと一緒ですね。大阪には中小企業が多いですけども、労働規制なんかそんなもんできるかいと。「週40時間きっちりなんか、そんなもんできるわけがない。」という感じです。そういう人たちに対して「いや、文化を継承していくためには、やっぱりそういうコミュニケーションとか対話とか、地域の関わりを確保するためには、そういうことも考えなければいけない」と説得しなきゃいけないと思うんですが、今日来られた先生方は、普段どのようにしてそういうものの重要性を説かれているのか。興味があるので、ぜひ答えていただけたらと思います。よろしくお願いします。

藪田：お答えはちょっと後に致しまして。あと、二人ほど。どうぞ。はい。

参加者B：本日のパネリストの皆さんは、「なにわの文化遺産」ということで、基本的には狭い意味の過去の文化遺産、歴史的な文化遺産を掘り起こすことによって、まちづくりを進めていくというお考えであるようにお見受けいたします。ところが、最後に登場された角さんは、むしろ新しいこれまでなかったようなアートを開発しいく方向で、まちづくりはできないかというお立場だとお見受けいたします。それで、私の質問は、大阪という非常に特徴のある都市において、いわゆる文化遺産という概念を、過去の歴史的な遺産という意味に限定して捉えられるのか、それとも新しい、いわゆるクリエイティブな最近のアートなども含めた新しい情報文化というものを大いに取り込む形で展開していくべきだとお考えになるか。そのあたりについて、皆さまのご意見を承れれば幸いです。

藪田：はい。ありがとうございました。それぞれ、かなり重要な発言を二人でしていただきましたが…前者が「まちづくり」、後者の方が「文化遺産の考え方」ということですので、私が先ほど設定したテーマに沿っておりますが、もう一方。もう少し具体的なケースのご質問があれば。はい。

参加者C：本日は、いろいろお話を聞かせていただきまして、ありがとうございました。一点、私のほうからお伺いしたいのは、今回お越しの方で、中村様を除かれて、全員大阪に関係のある方だということで、近年、その大阪の人口が減っているですとか、大阪の町そのものが経済の中心ですけれども、沈滞をしている状況というのがありますよね。どうしても、東京に一極集中化の流れとういうのがあると思うんですが、その中で、大阪が東京に対抗するという部分でのまちづくりというのを、東京を意識したという部分があるかないかというのも含めて、ちょっとお伺いできればと思うんです。

大阪が、より大阪らしさを出せるための特色のあるまちづくりの方向性について、東京との比較というのも含めて、もしお考えのところがあれば、お聞かせいただければと思いまして、質問にしたいと思います。

藪田：はい。それでは、とりあえずお三方のご発言をいただきました。参加者B氏からいただきました「文化遺産の議論」については、ちょっと後段に置かせていただきまして、若いお二人のほうからは「まちづくりの担い手」、あるいは「文化の継承の可能性」、あるいは「東京に対する大阪の戦略」のような議論が出ておりましたが、この辺のところから、まず議論を始めてみたいと思います。その辺のご質問に対して、神野先生を始めとして少しご発言をいただきたいんですけども、いかがでしょうか。

神野：「古い文化とそれから新しい文化を…どっちを大事にするのか。」というお話だったと思うんですが、私は文化そのものの専門家ではないのですが、これは二律背反するものではなく、先ほどもおっしゃいましたように発展させるものである限り、我々の用語を使えば、文化というのは暗黙地によって伝えられていくものであるのでですね。むしろ、これは両方両立するのではないかと思います。

例えば、フランスのパリは、皆さまもご存知の通り、過去の文化遺産を非常に大事にしているということに関しては、あらゆる所よりも、一番強いかと思いますが、しかし、同時に現在フランスで生まれつつある文化を非常に大事にしている。私の理解が間違いなければ、フランスの画商というのは、日本のようにすでに出来上がっている他国の絵画を何百億で売買するというよりも、現在いるアーティストに投資をして、そのアーティストのものを全部買い取っている。つまり、あの新凱旋門もそうだと思いますが、現在生まれつつあるアーティストは、過去のアーティストを引き継ぐものであり、それを育てていくというのとは両立するのではないかと思います。

先ほど、アートを育てるという活動をご紹介していただいた中で、私が思い出したのはスウェーデンは皆さんご存知の通り「１％ルール」というのがあって、あらゆる公共物を作ったときに、その予算の１％をアートに使わなければならないということがルールで決まっているわけですね。しかし、各地方自治体はもっとそれよりも厳しい条件を課していて、ストックホルムなどでは２％を上回るものを課さなければならない。それから、それだけじゃないんですね。例えば、アーティストは病院で芸術活動をしなければならないということになっています。なぜなら病院というのは、肉体的な痛みだけではなくて、社会の痛み、さらに精神的な痛みを癒す場であるので、病める者たちが最もアートを必要としている。したがって、アーティストはその病院で活動しなければならない。これが義務付けられております。

さらにスウェーデンは、皆さんご存知の通りに、ノーベル式の授賞式をストックホルムの市役所で行っておりますが、それまでのそのスウェーデンの建築様式が、ヨーロッパの建築様式をただ単に真似たものだったのですけれども、その建物は、スウェーデン独自の建築様式を創ろうとして、23年間かかって、20世紀の初めに創り上げました。私が非常に感心するのは、行っていただければ分かりま

すが、議会とかその他、部屋部屋に全部銅像が建っています。この銅像は、日本で考えれば恐らく政治家の銅像が建つということになるかと思うんですが、その銅像は何の銅像かというと、その部屋を造った大工さんの銅像なんですね。

スウェーデン人たちが何を将来の世代に伝えたいのかという価値観が現れていると、私は思っておりまして、文化というのは、文化そのものが過去の文化を暗黙地で伝えられながら発展させていくものであって、現在の文化を育成させることと、過去の文化遺産を保護し、過去の文化遺産を発展させていくというのは、同時というのかな、相乗効果みたいなもので、相反するものではないのではないかなというふうに思います。そういう答えでいいでしょうか。素人なので、そういう答えしかできないですが。

藪田：はい。同じことを少し、川口さんも、恐らくお考えになることだと思いますが、いかがでしょう。

川口：すいません。それは、今でいいんですか。後の部分じゃなかったですか。

藪田：先生が口火を切っていただきましたので、まずやってください。

川口：そうですか。それに加えて、そのもう一つの東京に対抗するというのをちょっと同時にお答えさせていただいて、よろしいですか。

藪田：はいどうぞ。

川口：先ほど神野先生がおっしゃったように、僕たちも「歴史を活かすまちづくり」というのをテーマにしております。それで、その26年前というのは、全国で伝統的な建造物ということで、例えば今井町であるとか、それから富田林であるとか、そういうふうな古い町並みをそのままそっくり残すということで、それがブームだった時期でした、今ももちろん、どんどん増えておるんですけども、文化遺産を残すということは、単なるノスタルジックでやっているという部分も、無きにしも非ずだったんですが、そいうことで進めてきました。

ともすれば、遺産を残すというのは、マイナスのイメージというか、ちょっと後ろを向いたイメージで捉えられるんですが、考えてみましたら、近代都市という、いろんな歴史的なものを壊すことによって、効率を求めた都市が造られてしまって。それで、画一的な、ほんとにきれいな街並みはそろいましたけども、そこには余裕がない。ゆとりがない。面白みがない。遊びがない。結局、効率的にはいいんですけど、人間が住みにくくなってきたということで、それに気づいて、最近は近代都市の中にも、路地を造ったり、ちょっと遊びの広場を造ったりということになってきました。

そうすると、平野の場合は、もともとあるものを大事にすれば、わざわざ造らなくても、もともとあったものを大事にするということで、気がつけばですね、守るということは、一周遅れで時代の先頭に行っているという感覚があるんですね。ということは、歴史を守るということがマイナスではなくて、ほんとは積極的な一番攻めではないかと。壊して新しく造るよりも残すことのほうが、本当はものすごいエネルギーがいるんですね。でも、それがやっぱり人間というのは、生物ですから、残されてきた歴史とか、そういうものを感じる力ってあるんですよ。だから、その歴史とか年輪を感じるものというのは、やっぱり目にみえないものやけど、伝わってくる。それがその町の雰囲気とか、景観というか、街並みもそうなんですけども、やっぱりそれが大切だと思うということ。それは、先ほどの歴史とクリエイティブな部分ということなんですが、私のほうは、実は1400年の聖徳太子建立のお寺という伝統があるんですが、その実は、伝統というものと現代的なものといのうは、何ていいますか…伝統を踏まえておらなかったら、新しいものは出てこな

いと思っているんですね。ですから、古いものを捨ててしまっては、新しいものは生み出せないと。だから逆に言うと、千何百年の伝統というものがある。そしたら、時代というのは、どんどんどんどん変わってくるし、地域も変わってくるけれども、その伝統がきちっと守られておれば、それがいつも最先端にいくんではないかと思ってるんですね。ですから、古いだけではだめなんですけども、古いものをそのままやっぱり真に置いて、新しいものが入ってくると。

ですから、仏教の伝統からいうと、教えはお釈迦さんの時代の2500年から変わらない。聖徳太子の時代からは、教えというものは、人間に対する基本とか宗教は変わってないんですけど、その時代時代によって表現方法が変わってくる。その時代によって、その表現方法を変えなければいけないということで、現代的なアートも全部取り入れないかんというふうに思っております。

すみません。最後に大阪が東京に何が対抗できるかいうと、まず古い歴史というのが、京都・奈良・大阪という歴史の積み重ねがやっぱり違いますね。これはいつも関西人が、東京と対抗して意識的に言うてることなんですけども。

積み重ねてきたもの。それは今、埋もれているだけなんですよ。この現代的な都市の下に埋もれている。その積み重ねが大いにあるので、それを掘り返していって、新しく時代に、表現するっていうことが大切なんです。今、埋もれているだけやと思うんですね。埋もれているのを今までは、掘り起こさないで、今でも、大阪は観光集客都市というて、まず万博から始まって、味をしめましてね。いろんなイベントとか、大きなものを建てて人を呼ぶという発想ですけど、ほんとは眠っているものがたくさんあるので、それを掘り起こしていくということと、やっぱり最後は、文化遺産というのは人間やと思うんですね。人材、やっぱり人間のおもしろさなので、眠っている文化と人間に絶対対抗できる力がある。それが両方結びつけば、地域からの発信というのは、ものすごい強力なものを持っていると思いますので、それが大いに対抗できると。まあ非常に‥最後に表現は悪いんですけども、東京の人は寄せ集めの文化で、新しもの好きにすぎないというふうに僕は思っているんですけど。

藪田：はい。中村さん、どうしましょうか。お答えいただけますか。ご意見があれば。

中村：徳島は、四国88箇所があって古い文化ですわね。これは、ますます盛んになっていってます。それから、人形浄瑠璃なんかでも、やはり後継者がどんどん出来てきて、古い文化がずっと続いていくようなことがあります。それから、まあ新しいといえば、阿波踊りなんですけど。阿波踊りもずっと続いているんですけど、やっぱりこう住民の中から沸き起こってくるような文化であれば、非常に発展するんではないかなと思ってます。

最後のこの大阪らしさとかあったんですけど、私が外から見よるときは、東京のほうの人は、あまり大阪を意識してないように思います。大阪の人は、特に東京東京…ということをものすごく意識していると思います。やっぱり大阪の人が東京を意識せんようになってきたときは、ぱっと上へいってるんでないかな。

まあ私らのところで、四国の中では吉野川があって、これ194km。それから、高知県のほうに四万十川が196kmあるんです。やはり、四万十と吉野川を案外よく比べるんですけど、四万十より吉野川きれいとかよく言うんです。やはり、それを意識しているうちは、相手を追い越すということは、なかなかできんだろうと思います。外からみよると、大阪の人は特に、私の偏見だろうと思うんですけど、東京を意識しているように思います。東京のほうが大阪の人を意識しているという感じがあまりしないと私自身は受けませんので。やはり、いろんな良いものはものすごくあるんですから、あまり意識せんようになってきたときが、大阪が確実に追い越した

ようなときでないかなというように思っております。

藪田：ありがとうございます。全て答えていただかなくても結構なんですが、ありがとうございました。さすがにちょっと距離があるという、海の向こうの冷めた感覚だと思いますが。もういっぺん戻りまして、土居さん。その「古い文化とか新しい文化の問題」ですとか、あるいは「文化遺産の継承の可能性」、「日本風の可能性」という議論についていかがでしょうか。

土居：あの…繁昌亭ができてどうなったかっていうお話をしますとね。今日なんかそうですけども、土日祭日３割ぐらい人通りが増えたんです。しかも、その皆さん方がそれぞれ、落語を聴きたい、商店街を歩きたい…ということで、晴れの場として考えてはるわけね。だから、よそ行きの格好して、例えば着物姿がめちゃめちゃ多い。これは、今の大阪に見られない風景なんです。昔は、道頓堀へ行きますとか、千日前へ行くといったら、そういう晴れの場があったけども。今は、残念ながら、大阪の文化って何やいうたら「たこ焼き」と「お好み焼き」と、それから有名な「おばちゃん」。このぐらいしか大阪の文化がないように思われている。それはちょっと情けないよね。ミナミの文化は、そういうふうな切り口で。

キタの文化っていうのは…天神橋筋はキタへ入らないんですよ。天神橋筋はキタから外れてるんです。キタの文化っていうのは何かっていったら、企業文化で、それこそ先生おっしゃったように、高い建物がいっぱい建ってね、そこへデパートがいっぱい入って、流通だけで町を形成している文化。「そんなん、大阪違うやろ。」「もっと大阪らしい、ええとこがあるやろ。」ということを天満から発信をしたいと、そういうふうに思っているわけです。

そうすると、新しい若者もたくさん増えてくる。今度は噺家を使って…というたらおかしいけど、噺家と一緒になって、どうしたら落語に若い文化が生まれるかなということをやろうとしたりね。観光バスを使って、どうしたら面白い大阪が楽しめるかなと。そういうことを発信したり、もうやりたいと思っていることが山ほどあるわけ。特に大阪は、観光がまだ下手くそやねん。全然、観光という切り口では、今までやったことが慣れてない。まだ10年ぐらいにしかなりませんから、ほんとに観光ってこんなものやと。さっき、どなたかおっしゃったように、原風景が観光なんやと。そうすると、原風景ということは、「自分たちがこの町が好きでっせ。」「この町へ来て欲しいねん。」という思いを寄せないと観光にならない。ユニバーサルやら海遊館が観光かというたら、それだけでは観光にならないんでね。本当に大阪に来てもらいたいという人たちの思いが、上手くできてこそ観光やというふうに思いますから。そういう意味では、やることはいっぱいあると思います。

最近は、経済産業省なんかがいうのは、「もうお年寄りの受け皿がない。だから、商店街はそのために一生懸命やってください。」なんていうのは、僕は大反対。皆さん、年寄りだけ商店街歩いていて嬉しいですか。嬉しくないやん。やっぱり、若い人がいっぱい入ってね。みんながごちゃ混ぜの文化で、かやくご飯みたいな文化になってこそ、町がおもろしろい。だから、その必ずしも歴史街道を歩くだけでは、文化が現在に継承できない。なんとか今が活きる町にしたいというのが僕の思いやから、歴史も使いながら、そんなことを再現しながら、やっぱり今の町がある。そういうふうにしたいと思うんですよ。

例えば、修学旅行生が来た話をしますけども、修学旅行生を大阪に一日実地体験ということで呼んだのは、うちの商店街が初めて。それから、今ブームになってね。いっぱい来はるけども。そのときに、例えば大阪弁という言葉を教える。「大阪弁で『おおきに』言うたら、どういうことや。」と言うたら、みんなが「ありがとう。」っていうわけよ。「あ

りがとう」は、当たり前なんで違うでと。「おおきに」っていうのは、「おおいに、ありがとう」。そやから、サンキュウベリーマッチがついてんねんでと。そのくらい商人は、頭を下げてね。皆さんに、感謝をしてるねん。今のスーパーやコンビニみたいに、お金と物とを交換してるだけと違う。それは、金物交換業、て勝手に言うてんねけどね。そんなもんと違う。やっぱり、真ん中に心を挟んで、おもてなしが挟んでこそ、商いなんや。そういうとこをちゃんと教えたりする。

私は茶碗屋ですから、茶碗のことは皆さんより詳しい。ある程度はね。ほんなら「瀬戸物のことは、英語でどない言うねや。」言うたら、たいがいの修学旅行生分かれへんね、今。Japanて言うやん。Japanて…Chinaって言う。China。で、漆はJapanて言うんです。日本で生まれたから。器はChinaと、中国から来たからChinaと言うやん。Chinaが日本へ来たら、日本の器文化はどうなってん。あんたらみんな茶碗…自分の茶碗持ってるやろ。自分のお箸持ってるやろ。それは日本しかないやんと。お父ちゃんもお母ちゃんも全部自分の茶碗と自分のお箸持ってる。中国も韓国もそんなんあらへんで。ナイフ・フォークに、自分のナイフや自分のお箸…スプーンやいうたらあらへん。そういう文化も大事にせなあかん…みたいなことを話したりね。例えば、「ほな、商店街知ってるか？」て言うて、その中学生に聞くと、ほとんどの人が「商店街なんて行ったことない。」って言う。そのかわり、それだけ地方の商店街っていうのは、衰退してんねんけども。お母ちゃんが、つまり商店街行ってないわけや。だから、子どもはついて来ない。そうすると、どこ行ってるか言うたら、スーパーとか、コンビニとか、郊外型のショッピングセンターへ行く。例えば、100円の茶碗買うて、それで食べてる。そんなら、100円の茶碗買うのと1,000円の茶碗買うのと…どっちが皆さん、もったいないと思います。100円の茶碗、大量に生産して、消費…勝手に使い捨てみたいに、ほってしもて。それでも、陶器の土はだんだん減っていくんですよ。1000円の茶碗買うたら、次の正月まで持って大事に使おうや。柄も自分で選べる。いろんな生地も選べる。そうすると、自分の好きなものがそこで、文化が生まれる。100円の茶碗では決して文化が生まれない。

そういうことをちゃんと伝えるのが私たちの町商人の文化やと思っている。それが今、みんなにちょっと伝わってないのが、大変残念やなあ。（資料を見ながら）いうことで、こないだ30年以上商売してはる商店街の皆さんを全部これをここに網羅しました。この人たちは確実に、それだけの自分の商いにプライドを持っている。17代続いてる、刃物屋さんもおる。大塩平八郎の刃物作ったっていうような、そんな店もある。そういう人たちの文化をもっともっとクローズアップさせたいな。そのために、それが商店街の生き残りにつながるか分からへんいうこととかね。今、ここにチラシをちょっと、旧暦の月暦を作った。ほな、農産物とか漁業とかは、全部旧暦ですやん。旬のものっていうのは、全部旧暦や。そんなことをみんなにやっぱり知って欲しい。若い人に。旧暦の三日の日は、必ず三日月の日なんやいうことぐらいは知ってほしい。五月晴れいうたら、快晴の中に天気になってる五月晴れじゃなくて、ちょうど五月晴れの頃は、梅雨時なんや。その梅雨時の間に、ちょっと晴れ間が見えるのが五月晴れやねんというふうなことも知ってもらいたい。そういうことを伝えていく役割ができたらええかなあと。 今、そんなことを思っているんです。

藪田：あとお二人おられますので、どうぞ先ほどのご質問に、どういう角度からでも結構です。お答えください。

藤原：我々、先ほどちょっと紹介させていただいた「REENALプロジェクト」というのはですね。まあ、新しいもの古いものも関係なく、いろんなものをですね。良いものは、良いもので…それをフューチャーさせて、世の中をちょ

っとでも良い方向に持っていきましょうという気概を持ってですね。それに賛同していただける、地域の人々とかですね。それから、企業の方々。それを巻き込んで、いろんなことをやっております。

例えばですね。キャッシュカードのアーティストの発掘の事例があったと思うんですけども、彼らはFM802さんの「digmeout」っていうですね、アートプロジェクト。新人発掘のプロジェクトがありまして、そのオーディションに通った方の…アーティストの方にですね、オリジナルの作品を描いてもらって、キャッシュカードとかですね、ポスターとかっていう作品発表の場にしてもらおうと。で、それがされるとどういうことが起こるかというと、銀行がそういうオフィシャルなカードなんで、いきなり彼らの作品が出ると、彼らはいきなりですね…活躍の場がどんどん広がるわけですね。

我々としては、企業として彼らに活躍のチャンスを与えていって、何かムーブメントが起こったり、そこにまた音楽をからめたら、大阪発のミュージシャンがまたどんどん出る…とかですね。そういうことを我々としては、仕掛けたいなと。

例えば繁昌亭の例でいく、我々はここ堺筋本町ですから、OLの人たちとか、サラリーマンの人たちが多いと。例えば、ここで繁昌亭を応援するようなチャリティー寄席をやることによって、単なるチャリティーを集めるということではなくて、そういうOLの人たちとか、サラリーマンの人たちが、どんどん落語を文化として嗜むような方向になればいいなというような雰囲気も持ってましてですね。そういう形で、何か広げられるようなお手伝い。そこにまた企業が絡んでくると、企業に働いてはる人たちも、またそこに何かいい方向に持っていけるような感じがしていまして。先ほど言われたように、日本はなかなか仕事ばっかりしてサービス残業とかが多くて、そういう関わり方が難しいというようなところがあると思うんですけども。我々としては、企業をそういう方向に持っていくことによって、そこに働いてはる人たちも、実は仕事なんだけれども、そういう方向に持っていけるというような。それで、地域に戻ったところには、また地域でそういう活動をしてもらえるような雰囲気が作れたらいいなというふうに思っております。

角：　すいません。普段は4 NPOが前に出ておりまして、実はこういう場に出てくるのがめったにない機会なので、かなり緊張しているんですけれども。ちゃんと、まとめてしゃべれるかどうか心配ですが…いくつか思ったことを話させていただきます。

まず、その現代芸術と言ってしまって、よく誤解されるんですが、もちろん新しいものを創ります。けれども、全く過去と断絶しているというわけじゃないんですね。すべての手法っていうのを新しくもういっぺん考え直そうっていうても、考え直すその前があるんです。つまり、前のものをちゃんと勉強してから、もう一度組み立て直すっていう活動をしないと、新しいものにならない。紡いでいくという作業。昔と今を繋いでいくっていう作業。そして、また未来を繋ぐっていう作業が、絶対必要なんですね。

ところが、その昔というのが断絶しています。一回目の断絶は、明治維新の時にあります。二回目の断絶が、戦争のときにあります。この断絶の後に、最近また断絶が起こっているような気がしてならないんですね。なので今、昔のものを掘り起こしたり、昔のことを知っている人たちや町にずっと息づいているものと、もう一度触れ合うっていう機会が求められている。それはアーティスト側にとっても必要なことなんです。また、地元の人たちが普通のものやというふうに思い込んでいるものをアーティストが「それ、おもしろいですよね。」とか言うて「いやいや。いつも、やってることやけど。」というようなことがあることによって、元々それを持ってた人たちにも「これって、すごいんや。」というのを確認してもらうことが、今の現代アートが芸術の術、技術として還元されてい

る部分、いわゆる「アウトリーチ」の効果のひとつなんですね。

アーティストが、そういうふうに活動していく場所を広げていくのが、「アートマネージメント」という仕事になってきます。その芸術家が、美術館や劇場に留まるのではなくって、その町に出かけていく。「アートマネージャー」は、町の人と対話を重ねることにより、「今この町に、このアーティストを連れてきたらええんちゃうか。」っていう、そのマッチング的なところっていうのも担ってやっていく。つまり、その町に根付いた活動をさらに別の要素を盛り込んできて、新しく繋いでいくっていう作業。そうやって、どんどんどんどん織物を織り上げていくっていう作業をこれからもアートNPOとアーティストは続けていって、新しい社会…次の社会を見据えて、活動していくんじゃないかなというふうに思ってます。ちゃんと言えたかな、今ので。

あと、東京に対抗する手段ていうような話が、先ほど質問のほうにありましたけれども、中村さんがおっしゃっていたみたいに、東京を見ている場合じゃないっていうのを、最近ある資料を見て知りました。日本の全国の経済規模を100とすると、東京の経済規模が16％ぐらいなんですね。大阪はというと、50年前までは10％ぐらいあったそうです。つまり、名実ともに、大阪は日本第二の都市やったんですけれども、今は８％を切っています。つまり、東京の半分なんですね。ところが、50年前は６％程度やった愛知県が、７％を超えてきてるんですよ。つまり、もう３番目がすぐ後ろに来てるんです。それぐらい、大阪って後退してきてるんですよ。

そういうことを考えたときに、東京に吸収されているのではなくて、その周りの地域に吸収されていってしまっているっていうことを考えたら、そりゃ東京の面白いもん、ええもんを対抗相手に選ぶのではなく、もっと全国的に面白いものっていうのをちゃんと調査して、「それに対して大阪は。」っていうことを考えていかないと駄目な時期なんじゃないかなというふうに思います。

アートでも同じことが起こってまして、やっぱり地方出身の面白いアーティストがどんどん増えてきている。逆に東京っていうのは、「なんか画一化している。一番面白いものが集まっている町のはずやし、もちろんアーティストの人口もめちゃめちゃ多いけれども、何かちょっと物足りない町になってきている」というふうにフェスティバルゲートに出入りしているアーティストたちは言います。いろいろ見てきた人たちが最終的に選んでくれる町。つまり、ほんまに面白いものが集まる町は大阪、と言われるようになってほしいなと思って…ますますフェスティバルゲートに面白いアーティストを呼んで、それがいろいろと循環していくようなことを、やっていきたいなというふうに思います。

藪田：はい。時間がなくなってまいりましたので…今日５人の方のそれぞれの、極めて具体的な、かつ長年にわたる活動の報告をしていただいたんですが、最後に神野先生。お話をお聞きになられた上で、どういうご感想をお持ちになられたのか少し…もし、おまとめの発言がいただけたら、ありがたいと思うんですが。いかがでしょうか。

神野：　私がまとめるというよりも、皆さま方のお話がすべてを物語っている、強烈なメッセージになったのではないかというふうに思います。先ほど、イギリスからお帰りになった若い人が、おっしゃっていたようにですね。確かに、日本は古いものを失いつつありますし、そのことは「働きすぎ」と関係があるのかもしれません。元々、家族familyっていう英語は、食事を同じくする者という意味ですから。ローマの奴隷にもですね。家族は、食事を同じくする権利を認められておりました。しかし、今、日本人で、家族で食事を一緒にしている権利を行使している家族が、どの程度あるかっていうと疑わしいんですね。たまたま、お父さんが一緒に食事をしたときも、仕事のことを考えているっていうような

家族が、多いような気さえいたします。

古いものを守っていくというよりも重要なことは、古いものにプライドを持って、かつ新しい状況に対応させていくということなのではないかと思います。そういうときに重要なのは、実は「公」ということではないかと思うんです。つまり、「社会の構成員が協力して事に当たる」ということだと思うんですが。今日のご発表で、全ての事例の研究を見て学べることは、社会の構成員が自らの生活のために活動をする。しかも、重要なことは、その古いものに対してプライドを持っているということではないかと思います。確かに、日本は「コモンズ」、「公」という概念を失いました。

「公」というのを、一番説明するのにいい公園というのは、ドイツの偉大な文学者、ゲーテが作りました。ゲーテは、「封建領主や一部の貴族だけが独占している美しい庭園を、全ての社会の構成員に開放しよう」というふうに主張したわけです。「公」というのは、全ての社会の構成員に解放されているものという意味です。大英博物館は、全ての社会の構成員に、学術を開放するということを任務としておりますので、イギリスはいかに、民営化したり、独立行政法人化したりしたとしても、大英博物館は無料です。全ての社会の構成員に開放することだからです。

そういうその「コモンズ」。まあ、日本でも「結」とか、さまざまなものが残っていたわけですけれども。日本は、コモンズを失ったというふうに言われておりますが、国際コモンズ学会というのが組織され、現在の世界の経済的な思想の主流は「コモンズの悲劇」と言って、コモンズにしたら効率が悪いと。みんなで、社会の構成員が助け合って仕事をしたら、効率が悪いんだと。私有財産をくっつけて、競争させるのが一番効率的なんだというふうに言われていたんですが、それが「コモンズの悲劇」って言われている。「コモンズ」にしたら効率が悪い、悲劇が起きちゃうっていう議論だったんです。国際コモンズ学会っていうところが、世界的にコモンズで悲劇が働いてるかということを調べたら、働いていないっていうことが分かったんですね。、その会長である女性ですが、マーガレット・マッキーンという女性は、世界で最も「コモンズ」をですね。巧みに運営している国民はどこかっていうと、「それは日本だ」というふうに言っております。マーガレット・マッキーンが指摘しているのは、最も巧みに「コモンズ」を運営した例は、四国の弘法大師が造った「満濃池の管理」。これが、最も巧みに「コモンズ」を管理した例である。これは、世界の現代の農業が学ばなければならない原点であると、こういうふうに言っているんですね。

私があまり悲観をしていないのは、確かに日本は「公」を失った。公用電話、「公」に用いる電話ということですね。中国では、誰もが使える電話のことを言っておりますので、社会の構成員の誰もが参加できるものが「公」なんですね。ところが、日本で公用車っていうとですね。官僚だけが使う車のことを言ってますから、「公」っていう意味が剥奪されて、「官」というものに変わってしまっている。しかし、「公」っていうのは失われているかっていうと、伝統があって、この伝統さえ頭を持ち上げてくれれば、必ず「公」は復活する。

今日の発表していただいた皆さまのものをみれば、あるときは水資源だったり、町おこしだったり、文化を守るっていうことだったり、その地域社会での生活を発展させることであったり、いろいろな例はありますけれども、自発的に、下からグラスルーツで、社会の構成員の全ての人々が参加しようという根が残っている。これが日本の未来を切り開いていくのではないかというふうに感じました。以上です。

藪田：ありがとうございました。それでは、最後にセンター長のほうから一言。閉会のご挨拶を申し上げます。

髙橋：長時間にわたりご議論いただきありがとうご

髙橋センター長とパネリスト

ざいました。私も少しだけ紹介しておきたいことがあります。以前、福島県の会津若松に行きましたときのことですが、「会津若松は、戊辰戦争に負けてよかった」という話を耳にしたことを鮮明に覚えております。歴史に「もしも」はありませんが、会津藩が薩長側についていれば、旧国鉄の幹線も東北新幹線も会津若松を間違いなく通るルートになっていただろうと、そうしますと日本の原風景を残すような現在の会津若松はなかっただろういうわけです。興味深い話です。

もう一つ、今日のご議論も頂戴しながらですが、私どもが考えている「文化遺産学」というのは、「文化遺産」を決して過去のもの、遺物とは捉えておりません。文化遺産は、先人たちが残してくれた貴重な遺産であって、それは将来を構想する際の大切な資源であるという考えです。文化遺産学の立場で大切なことは、地域の特質を見きわめ、それを活かしていくということです。つまり、特徴を「際立たせる」ことが重要です。たとえば、天神橋筋商店街をはじめ関西の商店街にはアーケードがございますが、東京・関東にはアーケードがありません。これなども大阪の「際立つ」文化的特質です。このアーケードは、お客だけでなく、地域の共同体にとってもじつに有効です。これがあることによって、向こう三軒両隣の意識が濃密になり、そこにコミュニケーションが生まれます。これがもともとの「結の精神」でございます。神野先生がおっしゃる、「きずなの基本形態」は、ここにあるんだろうと思います。「きずな」は、地域の人びとによる「内なるきずな」と、地域外の方がたがその地域に寄せる「外なるきずな」の二つが機能しなければならないと考えております。もちろん、なによりも「内なるきずな」を尊重しなければなりません。

ともかく、本日は、神野先生の基調講演をはじめ、川口さん、中村さん、土井さん、藤原さん、角さん、皆さん方にはまことに貴重なご意見を賜りまして、まことにありがとうございました。どうか今後ともに、私ども「なにわ・大阪文化遺産学研究センター」に対しまして、ご支援とご指導をいただきたいと存じます。本日は、どうもありがとうございました。

藪田：どうもありがとうございました。それでは、閉会とさせていただきます。お手元に緑色のアンケートがございますので、お帰りになられますときにお出しいただけたらと思います。

パネル展示

「牧村史陽氏旧蔵大阪の古写真」

今回は、大阪のまちづくりを中心としたフォーラムのテーマにあわせて、昨年度にひきつづき、なにわ・大阪文化遺産学研究センター所蔵・牧村史陽氏旧蔵古写真のなかから、昭和30～40年代の大阪市内の写真を選び、現在の場所と比較できるように、パネル展示を実施した。

パネル展示に見入る来場者

研究ノート

寺社境内および周辺における「にぎわい」に関する基礎研究
――研究の目的と方法――

妻木　宣嗣

第１章　どのような対象に対し、どのような視点で考えるのか

１－１．寺社境内および周辺における「にぎわい」

寺社の境内や、その周辺のもつ表情は、実に多彩です。一日のなかでもさまざまな表情がありますし、週・月・年といった時間の流れ、さらには四季折々の表情を私たちに見せてくれます。そうした多彩な表情をもつ寺社境内やその周辺空間（以下寺社空間と呼びます）ですが、こと祭礼時には、普段とは異なった雰囲気になります[1)]。例えば夏祭り。普段は厳格な雰囲気の寺社空間もこのときばかりは一変します。寺社空間は子供達から老人まで、世代を超えた大勢の人々の笑顔があり、大変な熱気に包まれ、にぎわいをみせます。ベビーカステラ、金魚すくい、スマートボール、イカ焼き…さまざまな仮設店舗（以下、仮設店とよぶ）が醸し出す雰囲気に、思わず楽しい気持ちになるものです。

さて寺社空間において、こうした日常ではない時間を演出してくれるのは、何も祭礼時の仮設店だけではありません。例えば門前町などは、生活のちょっとしたゆとりとでもいうべき時間をもたらしてくれます。通い慣れた寺社への参拝の帰りに、うどんを食べたり、喫茶するひとときは、日常を忘れ、一息つく贅沢な時間です。また旅行先の門前町であれば、門前町を歩くこと自体、旅の楽しみの１つでしょう。このように寺社空間は、信仰を旨としつつも、あるいはそれをきっかけとしつつ、さまざまな人々が集い、色々な時間を過ごす「場」であるといえます[2)]。

寺社空間では、さまざまな人々がさまざまな時間を過ごすわけですが、こと非日常の時間を演出する施設として仮設、あるいは常設の商業施設があります。彼らは信仰の面からみれば、副次的な存在に過ぎませんが、先にも述べたように、さまざまな人々が集い、さまざまな時間を過ごすといった、にぎわいには欠かせない存在であるといえます。このように寺社空間は、さまざまな要素が複雑に絡み合って存在しているわけですから、さまざまな視点から検証されてこそ、その構造の一端が浮かび上がってくるわけですし、こういう理由から商業建築や商業空間（または環境）を考察することは意義あることだと思います。

こうした視点から本稿では研究テーマである、「寺社境内および周辺における「にぎわい」研究」に関する見通しと方向性について述べたいと思います。具体的な分析事例として、祭礼時に出店される仮設店を採り上げます[3)]。

１－２．仮設店が構成する参道空間

先ほども述べましたが、日本の夏祭りには実に数多くの仮設店が軒を連ねます。そこを歩く参拝者は、老若男女でにぎわい、みんな笑顔です。しかし仮設店がつくる参道空間（以下、仮設店参道空間と呼びます）を構成する要素は極めてはシンプルです。仮設店と商品、それから店の人と参拝者、たったこれだけです。しかも仮設店が扱う商品やサービスはそれほど多くなく、仮設店のカタチは単純明快です。さらに詳しく仮設店についてみますと、確かに構成部材のうち水引はナイロン、屋根の横桟はステンレス製の物干し竿であり、照明は電気ですから、「近代のおかげ」といってよいモノを用いています。しかし、その他の仮設店の構成や提供される商品やサービス、さらにそれらが連続して形成される空間は、およそ近代的とはいえません（本稿で用いる「近代」の説明は１－４．ここでいう「近代」を参照）。そこには近代的な科学や工学といった近代的手法などほとんどなく、どちらかといえば「前近代」的です（ここでいう「近代的な科学や工学」は古い世代を考えています､これも１－４.参照）。

こうした視点からみると、仮設店は確かにあまり見栄えのよいものとはいえないかも知れません。カ

タチは単純だし、衛生面も十分なものとはいえません。しかしそんな環境にも関わらず、仮設店が構成する参道は、最近できた下手な商業施設などより、ずっと多くの人でにぎわっているし、みんな楽しそうで活気があります。これは一体なぜでしょうか。「祭りという特別な時間だから」、「年中あったら誰も行かなくなるよ」…、なるほど確かにそうです。しかしそうした理由だけで、あれだけのにぎわい全てを説明できるでしょうか。祭りが行われさえすれば、仮設店はどんな商品・サービスでも、そしてどんな場所にでも出店しさえすれば、にぎわうのでしょうか。例えば、私たちは祭りの仮設店といえば、金魚すくいやスマートボールすくい、ベビーカステラやいか焼きといった特定の商品やサービスを思い出しますし、それがどんな場所にあるかについても、おおよそ想像できるものです。また先ほども述べましたが、仮設店が構成する参道空間は極めてシンプルにも関わらず、そこにあれだけの「にぎわい」がみられるということは、そうしたシンプルな構成のなかにも、人をワクワクさせるような何らかの工夫（仕掛け）が隠されていると考えることはできないでしょうか。

今回の研究は、こうした問いかけが全ての出発点です。一見、近代的科学や工学といった思考や方法論が考慮されていない、むしろ前近代的な仮設店と仮設店群が構成する参道空間が、なぜこんなに「にぎわい」をみせるのか。このあたりが今回の研究で知りたいことです。

ところでこうした疑問を考えるには、どのような対象をどのような視点から見ていけばよいでしょうか。あるいはどのような研究分野から、どのような視点を学ぶことができるのでしょうか。無責任かも知れませんが、現在私はこれについて明確な答えをもっているわけではありません。しかし今のところ本研究を考える上でのキーワードとして、「人のふるまい」や「近代」、このあたりが重要な手がかりになるのではないかと思っています。次にこれらについて考えていきたいと思います。

1－3.「人のふるまい」から考える

1－3－1．人のふるまい研究のいろいろ

仮設店参道空間を考えるとき、その構成のシンプルさ故に、何を手がかりにその「にぎわい」を考えればよいのか、なかなか頭を悩ませます。私などは、建築や空間そのものに、つい目が向いてしまいがちですので、いきおい仮設店そのものばかりに注目してしまいがちです。けれどそこには、近代建築のような近代的な科学や工学は見あたりませんし、最近の建築家が自らの造形を正当化する上で語る、造形理念やコンセプトといった気むずかしい議論も見あたりません。

そこで色々な論文や著書を読んだり、研究者にお話を聞かせてもらったりしているうちに、どうやら仮設店参道空間の「にぎわい」を考えるには、直ちに仮設店や空間そのものに求めるのではダメで、まず「人」に注目する必要性があることがわかってきました。つまり極めて当たり前のことですが、そこにはまず人がいて、人の行動があり、その上で、環境が形成されていく。はじめに物理的な空間があるのではなくて、何よりもまず人を考えないといけない。そう考えていくと、今回の疑問を解く手がかりとして「人のふるまい」というキーワードが浮かび上がってきます（ここでいう「人のふるまい」とは、普通の人が生活する上での行動全般をさします）。なぜそうしたふるまいに注目するのかといえば、「なぜ人はそうふるまうのか」、という理由を間接的に拾い出すことができると考えるからです。さらに「ふるまい」から、「ふるまい」の背後にある意識や生活習慣などといった要素についても注目できますし、そうした要素が空間を構成する物理的な要素を構成したと考えることができるわけです。そこで次に、こうした人のふるまいを考える上で、重要な論考をいくつか見てみましょう。

まずこれは古典的な研究ですが、人と人の距離に関する１つの構造を明らかにしたＥ．ホールによる（プロクセミクス＝近接学）という視点があります。ホールは、人と人との距離が、夫婦や恋人同志など最も近い「密接距離」から、親友や知人との私的な会話が行われる「個体距離」、個人的でない人との距離、あるいは相手からの直接的干渉を避ける時の「社会距離」、さらには講演など一方的な発言などの場合の公衆距離まで、４段階（近接含めると８段階）あることを示しています[4)]。

次にこれも古典的な研究ですが、Ｒ．ソマー氏は、その著『人間の空間―デザインの行動的研究』において、ホール氏の心的距離を空間にまで広げ、

いわゆる「パーソナル・スペース」を提起しました[5)]。これらの論考はいずれも、人がもともと、あるいは環境によって、特定の距離や空間を持つこと、そしてこうした心的距離やパーソナル・スペースがさまざまな地域の文化を考える上で重要な手がかりになることを示した論考であるといえるでしょう[6)]。

一方、人の視知覚に関する重要な著書に、J．J．ギブソン氏の『生態学的視覚論』と、これを画期とした一連の視知覚と環境に関する研究があります[7)]。視覚は人が環境を捉える際、最も頻繁に用いる知覚ですので、この生態学的視覚論は環境と人との関係を考える上で、非常に大きな方向性を与えました。内容は非常に多岐に渡るものですので、私なんかは手に負えそうにないほどの分厚いものですが、人間の視覚系を眼、神経、脳といった合目的的な部品（部分）に還元しないことや、「空間」という概念を、近代の繁栄で欠かせない物理学が定義するような、「空気も光も風もなにもないモデル」として考えるのではなく、大地と空、太陽があり、空気があって風も吹く、といった人間が見たり、聞いたり、感じたりするレベル、身近な生活感を手がかりに世界と接している専門家でない普通の人のレベルで視知覚系を考える必要性と、基本原理・概念を打ち立てた論考であるといえるでしょう（こういうレベルを、以下「普通の人の意識・感覚」とか「普通の人の視点」、「普通の人のレベル」などと呼びます）。なかでも、「アフォーダンス」という考え方は、興味深いものです。この概念も実に難しいのですが、私が認識する限りでいいますと、人は自身の判断によって環境内で行動を行うだけではなく、周囲の環境によって行動させられている（アフォードされている）と考える視点です。有名な例え話を１つしましょう。ある家の玄関前の地面に、１本の溝があったとします。すると雨のなかこの家を訪問した人は、１本の溝の側に「ここは傘立てです」と書いていなくても、おそらくそこに傘を立てるでしょう。こういう場合「溝が人に対して、そこに傘を立てることをアフォードしている」というわけです。もっと簡単な例えでいいますと、「椅子はどのような椅子であっても座ることをアフォードしている」といえるわけです。この視点にたてば、本研究で取り上げる寺社空間におけるさまざまな、「にぎわい」構成要素が、こうした参拝者のワクワク感をアフォードしている可能性があると考えられるかも知れません[8)]。

さてもう少し、こうした研究についてみていきましょう。ここでとりあげるのは、人のふるまいを直接扱った研究ではないのですが、人がもつイメージの大切さに関する論考で、ケヴィン・リンチ氏の『都市のイメージ』という著書です[9)]。リンチ氏は、近代的な科学や工学に基づいた理論を駆使した専門家による都市計画が、そこに住む市民の生活にとって必ずしも豊かな都市空間といえるものではなくなった点を述べ、そこにごく普通に住み、生活する市民の視点からアプローチしていく必要性を訴えました。都市計画の一部の専門家が一方的に都市を造っていくのではなくて、そこに住む側の視点の重要性、つまりそれまでの都市デザインの視点を、作り手から住み手へと大きく変換した論考であるといえます。都市にとって大切なのは、その都市に住む市民自らが如何に豊かに自分たちの街をイメージできるのかにあるとし、人にとってイメージされやすい空間構成とはどのようなものであるかについて言及していることから、本研究との関連（例えば仮設店の配置など）からも興味深い指摘であるといえます[10)]。

さてこうした、人のふるまいに関する研究は、現在、環境デザイン学や環境心理学、環境行動学と呼ばれ、膨大かつ貴重な研究が数多く行われていますが（以下本稿では環境デザイン学と呼びます）[12)]、こうした分野の研究蓄積が、仮設店参道空間や近世期の商業空間といった、近代的科学や工学のない前近代、あるいは前近代的な環境を考える上でどのように有効なのでしょうか。次にこの点についてみていくことにしましょう。

１－３－２．近代以前の環境を「人のふるまい」から捉えられるのか？

結論を先にいえば、環境と人の知覚・行動特性（ふるまい）に関する研究には、近代的な科学や工学など何もないころの前近代的な環境を素材にした研究が数多くみられますし、そもそも研究者はすでに、前近代的な環境に「人のふるまい」が考慮されていることを確認しています。例えば樋口忠彦氏はシークェンス景観（視点が環境の中を移動するとき、その視点に次々と展開していく景観のこと）に

ついて

> 日本においては、陸上において歩行以外の移動手段がほとんど発達しなかったこともあって、歩行に伴い展開するシークェンス景観について、回遊式庭園、茶庭の路地、社寺の参道等かなり洗練された例を挙げることができる

とし、さらに続けます―

> 日本の社寺参道はシークェンス景観としてとらえた場合、心にくいばかりの配慮がなされている。

と、日本の社寺参道を素材としたシークェンス景観を分析しています[12)]。

また船越徹氏らは、

> 空間構成という視点から見た日本の歴史的空間は、その歴史性・文化性を除いて見ても現代に通ずる非常に興味深いものである。例えば孤蓬庵忘筌に使われている内部から外部への視界の限定、桂離宮の雁行配置、修学院離宮の見えかくれ等、それらの空間構成は、古さよりもむしろ現代建築が忘れがちな空間のデザインを、設計方法に多くの示唆を与えるものである。

とした上で、日本の前近代的な空間を素材に、人の歩行と視覚特性について物理的構成要素と、それによってもたらされる心理的作用を詳細に分析しています[13)]。

また材野博司、宮岸幸正の両氏は、前近代的な日本庭園を素材に、景観の継起的変化が誘発する景観行動に注目し、日本庭園におけるシークェンス景観の開放性や閉鎖性について考察しています。ここでは、歩行を伴う視知覚の特性とその構造の一端が明らかされていると共に、その文面からは前近代的な日本庭園空間が、こうした視知覚の特性を考慮していたことを知ることができます[14)]。

こうした日本における前近代を扱った研究は他にも数多くありますが、その多くが①環境と人の知覚・行動特性や構造へ接近するにあたり、日本の前近代的な環境を素材として用いているもの、および②あらかじめ導き出された空間における人の行動特性を前近代的な環境から読み取ろうとするもの、この２つの方法に大別することができます。これらの研究そのものから私たちが学ぶことができるのは、「日本の前近代的な環境が、人の知覚・行動特性（ふるまい）を考慮している」、この点にあるといえるでしょう。つまりこれらの研究からは、人の知覚・行動特性（「人のふるまい」）が日本の環境の在り方において非常に重要な要素になっている、あるいは環境の在り方そのものが、人のふるまいに無意識あるいは意識的に影響を与える、という視点が導き出されますし、こうした視点は今回の研究において非常に示唆に富んだアプローチであるといえるでしょう。

さて、ここで１つの疑問が浮かんできます。上で紹介したような、環境と人のふるまいに関する研究で、なぜ現代の最新の空間（環境）や、近代的な空間（環境）などが研究の対象にならずに、わざわざ神社の参道や日本庭園といった、近代的科学や工学がない時代の前近代的な環境を素材とするのでしょう。どうやらこの疑問を、少し掘り下げてみることで、私たちの研究において学ぶことのできる視点が見つけられそうです。

そこで次節では、このあたりについて、近代という時代性と環境デザイン学という分野が生成される歴史的背景を手がかりに、考えていくことにしましょう。

１－４．ここでいう「近代」

一般的に近代は18世紀半ば、ヨーロッパに端を発する産業革命を画期とする工業社会と、アメリカ独立やフランス革命などをきっかけに世界中に広がった国民国家、この２つが大きな要素であるといえます。近代については、実にさまざまな視点からの指摘があり、それぞれに興味深いものです。例えば、近代あるいは近代思想について、建築史・建築哲学が御専門の鈴木博之氏は、氏の著書『日本の近代10都市へ』で、近代を「機械」に例えます[15)]。鈴木氏は「機械」を、「機能、構造、普遍性を備えた装置」とし、「近代社会が産業革命によって生じたとするならば、その産業革命を生み出したものは機械だった。「機械」が近代を生んだといってもよいのである」とされ、近代建築の巨匠であるル・コルビュジェを例に、「機械」としての建築と都市についてこう述べます。

住宅建築を「住むための機械」とよんだ建築家ル・コルビュジェが、近代建築の旗手となっていったのは、彼が正確に時代の精神を見抜いていたからにほかならない。ここで「機械」としての建築の概念が世界に向かって公表された。それは機能的な建築のことだと受け取られがちであるが、そしてそれは誤ってはいない受けとめ方ではあるが、実は「機械」としての建築という考え方がもたらしたものは、それだけではなかった。「機械」としての建築とは、場所に拘束されない建築のイメージを含むものだった。そしてこのことが、以後の建築を大きく支配することになるのである。「機械」のもつ普遍性は、場所に縛られないという性質を含んでいた。「機械」は仕様書通りに操作すれば、いつでもどこでも、普遍的に設定された機能を遂行する。「機械」は場所を選ばないのである。建築が機械をモデルにするということは、いつでもどこでも成立する普遍的な建築を目指すことであった。それが二十世紀後半の世界中の都市から場所性を奪うことにつながるとは、そのときには彼は考えなかった。

このように鈴木氏は、機能、構造、普遍性を備えた装置としての「機械」に例えられる近代思想が、都市から場所性を奪い去ったといいます。鈴木氏は同書で何度も、近代が都市や建築から場所性を奪い取ったと述べますが、上の文章の「都市」や「場所」という単語を「人」に置き換えてみると、もう１つの近代が見えてくるような気がします。

「機械」としての建築とは、「人」に拘束されない建築のイメージを含むものだった。そしてこのことが、以後の建築を大きく支配することになるのである。「機械」のもつ普遍性は、「人」に縛られないという性質を含んでいた。「機械」は仕様書通りに操作すれば、いつでもどこでも、普遍的に設定された機能を遂行する。「機械」は「人」を選ばないのである。建築が機械をモデルにするということは、いつでもどこでも成立する普遍的な建築を目指すことであった。それが二十世紀後半の世界中の都市から「人」性を奪うことにつながるとは、そのときには彼は考えなかった。

（註）下線部は妻木が「都市」・「場所」を「人」に置き換えたところ）

どのような対象もモデル化する際には、余計な色々な要素を対象から切り捨て、単純化した上でのモデル化であることを意識する、つまりモデルは対象そのものすべてをあらわしたものではない、という自覚のもとで行われるのが一般的です（モデル化とはそもそもそういうものですが）。近代では対象をモデル化する際、「普通の人の意識・感覚」については、さしあたり保留することが多かったのではないでしょうか。ですから、近代初頭の科学者は、自分たちが行う対象のモデル化が「普通の人の意識・感覚」を保留したものであるという認識はあったはずです。とはいえ近代は、こうして設定された「普通の人の意識・感覚が保留されたモデル」を解析していった結果、多くの効能が得られ、それによって社会や世界は、その効能が発見される前の時代よりも、良くなっていった。すると、「このモデルはとても良い！」、ということになって、どんどんこうした視点からの分析が進められていきます。こうした思考循環が、さまざまな世界で行われていくと、それらの相乗効果もあって、どんどん世界は豊かになっていきました。しかし問題はあったと思います。それは「あるモデル」が加速度的に世界を豊かにしていくと、社会や世界そのものを同様の視点でもってモデル化しさえすれば、どんどん世界は豊かになっていくと思ってしまい、いま扱っているモデルが「さまざまな要素を保留したモデル」（普通の人の意識・感覚が保留されたモデル）であるという限界性の自覚よりも、モデルの方に寄りかかるかたちで世界や対象をみてしまいがちになった。そして、ついには実際の世界そのものも「普通の人の意識・感覚が保留されたモデル」としてしか見なくなってしまうという、あべこべの事態に陥ったのが近代にあったように思われます[16]。

例えば建築や都市を計画する上で大切な、「歩行」を扱った研究に登場するのは、肩幅何cm、厚み何cmといった寸法をもって時速数km/hで歩く「機械人」で、そこには思わず寄り道をしたり、気分の赴くままに散歩したり、お店の商品をみたり友達とお話しをしながら歩く人など、生活感のある人は登場しないわけです[17]。

そしてこうした思考循環が繰り返され続けていたある時、専門家でない身近な生活上の意識や感覚を手がかりに世界と接している「普通の人」からみれば、極めて不自然な状況が世界に現れるようになります。例えば街。街は自動車優先の道路と高速道路が走り、空気の悪い危険な、人間味のない住みにく

くなりました。確かに衛生的で合理的かも知れませんが、普通の人からみると、なんだか変だなあと思うような居心地の悪い空間（例えば人を物理的な機械として扱うかのような冷たい感じのする病院など）が、専門家のお墨付きのもと、ありがたい空間として権力をもっていきます。

こうした状況と循環が、さまざまな世界・対象に対して徹底的に行われたのが近代ではないでしょうか。花を見て美しいと思ったり、その花をリビングルームに飾るだけで、ちょっぴり気分がウキウキするといった「普通の人の意識・感覚・視点・価値」という生身の人の側からの議論は、そもそも最初からほとんど考慮されていなかったわけですから、当然そうした普通の人の感覚からくる意見や、何となく感じる違和感は軽視され、排除される、といった状況に陥るわけです。そして普通の人がどんどん端っこに追いやられていく。かくして「普通の人の意識・感覚・視点・価値不在モデル」が、自分たち人間の存在する世界そのものを捉える際の、ほとんど唯一のイメージになっていったといえるでしょう。

極論かも知れませんが、このように考えたとき、近代は世界を「普通の人の意識・感覚不在」の巨大な機械・システムとしてモデル化し走っていったところに、その限界性があったのではないでしょうか。少なくとも近代には、病院にせよ、学校にせよ、スーパーマーケットにせよ、家にせよ、人が見たり、聞いたり、感じたりすることのない、機械的存在としての人しか人を扱っていなかった時期があったのではないでしょうか。うれしいことがあったときに晩御飯のおかずを少し奮発する人、商品を購入するというよりは繁華街を歩いているだけで楽しい気分になるから街に出かける人、コンクリート打ちっ放しより、木の質感に暖かみを感じる人、そうした普通の人が全然見えない世界が描かれ、そうした世界観に基づいて生の世界そのものが加工され認識されるに至った。そしてそこには、上に述べたような思考循環が背景にあったと思われます。（このような思考を、ここでは近代的思考と呼びます）。

ところで、こうした近代的思考に対する違和感は、先に述べたギブソン氏の『生態学的視覚論』の「まえがき」にも読み取ることができます。

> 光学者は放射としての光については知っていても、照明としての光についてはわかっていないように思えた。解剖学者は、器官としての眼については知っていても、それがなし得ることについてはわかっていない。生理学者は、網膜の神経細胞とそのはたらきについては知っているが、視覚系がどのようにはたらいているかは知らない。こうした専門家が知っていることは当面の問題に関係あるようには思えなかった。ホログラムを作ったり、眼鏡の処方をしたり、眼疾患を治療したりすることはできるかもしれないし、このことはすばらしい成果であるが、彼らは視覚を説明することはできなかった。
>
> 物理学や光学、解剖学、生理学などは事実を示してはいても、それは知覚研究にはふさわしい水準の事実ではない。本書には新しい水準での説明を企てている。

とし、さらに続けます―

> 私がまた読者に望みたいことは、空間の概念は何ら知覚と関係がないということである。幾何学的空間は純粋に抽象的概念である。宇宙は心像化できるが、実際に見ることはできない。奥行の手がかりは単に絵画に関係するもので、それ以上のものではない。視覚的３次元はデカルト（Descartes）のいう座標系の３つの軸の概念の誤用である。
>
> 空間の概念をもたない限り、我々は周囲の世界を知覚できないであろうとする説は意味のないことである。事実は全く逆である。我々は足もとの地面と空を見ない限り、何も無い空間を想像することはできないであろう。空間は神話であり、幻影であって、また幾何学者のための作りごとである。疑いなく、このようなことはすべて奇妙に聞こえるであろう。しかし私が説きたいことは、読者がこの仮説を受け入れることである。カント（Kant）が述べているような「概念なき知覚は盲目である」という独断を捨て去ることに読者が同意するならば、深刻な理論的混乱、まさしくこの泥沼は涸れることであろう。
>
> （註）下線部は妻木が加筆

さらにこうした近代思想の限界性を、都市計画学、コミュニティー、そして本研究で採り上げる仮設店といったものを通して述べたものに、望月照彦氏の一連の論考があります[18)]。望月氏の論考は、本研究の文献調査の過程で見い出したのですが、本研究を考える上でも重要な指摘ですので、少しじっくりとみていきたいと思います。氏はいいます。

ある調査が目的で江東区にある公団の大島四丁目団地に見学に行ったのだが、そこで出くわした光景が一つのインパクトになったのである。春先だといってもまだ吹きぬける風の冷たい、割合お金のかかっていると思われる、４棟の高層住居に囲まれた閑散とした中庭に、何となく焼イモ屋の屋台が入ってきた、そうすると今まではほとんど人影のまばらだったその場に三三五五と子供を連れた主婦達が集まってくる。集まってきた主婦達はその焼イモ屋の回りでごくごく自然におしゃべりを始める。子供達は子供達同志で勝手に遊びまわる。沈黙していた風景が活性化し、急に賑わいを取りもどす。このインテメートなショットは大変なショックを与えた。我々が計画していたものは何だったのか。あの冷たく全てのものを拒絶したコンクリートのマスだったのではないか。少なくとも計画学のプログラムの中に、こうした空間の躍動を挿入しようとした事があったのか。あるいはむしろ入ってくる移動店舗を、非合法なものとして規制してしまうように、コニュニティというメタフィジカルな問題を、それほど意識的でないにしろ、フィジカルな問題の中で隠蔽してきてしまったとうに思う。

とし、さらに続けます―

計画化のダイナミズムが人間喪失につながり（あまりにも短絡したいい方かも知れないが）、計画しないことがまたそれ以上の状況を生みだし得ないという状況下のなかで、我々がやはり指向していかなければならないことは、計画化の表層に現れた変化のメカニズムについて言及していくことではなくて、その変化の基底に沈んでいる、いわば「見えない構造」をすくいあげ、それをいかに現代のみえる都市構造にフィードバックしていくか、ということではあるまいか。これは行為を超えた思弁的帰結をも含んだ哲学的命題になってしまうかもしれない。それをレヴィ・ストロースいうところの「野性の思考」に終わらせることのない為に、「文明の思考」として把え、計画化していかなければならないのが今後の都市計画学に付された主要なテーマではないだろうか。

と、自らの学問意義を主張します。望月氏のその後の研究が、どの程度「計画化」されたのかについてはここで述べませんが、本研究は望月氏の問題提起とその視座の点において共有できる部分が多いといえます。

１－５．前近代から学ぶ

さてここで、これまでの内容をもう一度整理しましょう。確かに私たちは近代的思考に基づいて世界を発展させてきた結果、世界は前近代に較べて、衛生的なものになり、幼児の死亡率は低下し、移動時間は短くなり、以前とは較べものにならないほど便利で豊かになりました。けれど、全てが良い方向に向かったのでしょうか。例えば私達に身近な都市。インフラは整備され、高層ビルの内部は年中一定の温度・湿度が自動的にコントロールされ、とても快適です。買い物は大型ショッピングセンターやインターネットなどで、いつでもどこでも瞬時にできるようになりました。しかし、その結果、今や現代社会において人こそが、もっとも非合理的な存在になりつつあります。物理的に便利になったことは、安全で衛生的になったことは、ありがたいことですが、なんだか人が置き去りになっていったといえないでしょうか。

実はこうした問いかけ、つまり近代的思考が生み出したさまざまな矛盾や歪みに対する異議申し立てが1950年代、特に1960～1970年代にかけて見られるようになります。そこで次に本研究を考える上で影響を受けた論考をいくつかみていきましょう。

B.ルドフスキー氏は『人間のための街路』[19] の冒頭でこう述べます。

18世紀の終り頃に始まった自然環境の急激な変化は、ノアの洪水以来、他のどんな出来事にもまして人間性に大きな影響を及ぼした。合衆国では、徹底的な略奪に対してはブレーキの役割を果たすような人道的な伝統、あるいは単なる自尊心すらもまったくなかったために、これまで世界に存在したことのないような非都市が出現した。

ルドフスキー氏は、こうした前提のもと自動車交通の円滑化という純化された目的のみのための道路ではなく、人にとってより豊かな世界中の街路（彼に言わせれば、街路は古代ローマ時代のフォーラムにさえ匹敵します）を紹介しています。また紹介される街路のほとんどが前近代的な街路ですし、豊富な写真のなかには大阪の居酒屋（街路に面したカウンターに暖簾のお店）も紹介されています。

またこうした時代性を考える上で、鈴木氏の以下の文章は興味深い内容を含んでいます[20]。

しかし近代がもたらした機能的で普遍的な都市は、地球上のあらゆる場所から建築的な個性を失わせていったのではないかという疑問が、ひとびとの心に兆してきた。快適で便利な空間は、没個性的で味気のない都市を生み出したのではないか、という批判を生む。それは都市にのみならず、近代の文化全般にわたる批判につながるものであった。1960年代末のパリの五月革命、それにつづく世界各地での学生の異議申し立ての動きは、近代批判の具体的な現れであったし、オイルショックを引き起こした第三世界の異議申し立ても、ヨーロッパ先進諸国に対する途上国の批判であった。

それまでの近代的思考とそれに基づく世界観に対する異議申し立てこそが、この時期の時代を象徴する空気であったといえます。

さらに環境デザイン学という形で１つの学問として成立するこの領域の初期研究は、こうした時代背景のなか、1950年頃から、特に1960～1970年代にかけて、さまざまな学問領域で同時多発的に噴き出します。例えば先ほども登場した、K．リンチ氏の『都市のイメージ』は1960年出版、E．ホール氏の『かくれた次元』は1966年に出版されていますし、R．ソマー氏の『人間の空間―デザインの行動的研究』や、B.ルドフスキー氏の『人間のための街路』の原著は、いずれも1969年に出版されています。さらに環境デザイン学会（Environmental Design Research Association: EDRA）そのものが1969年、「環境と行動（Environment and Behavior）」の出版と共に設立されているのです[21]。

近代思想の発展から生じた「ひずみ」、これをきっかけとした研究が1950年頃から行われたわけですが、これらの研究に共通するのは、私たちの身のまわりの事柄について関心があること、そして何よりも、「身近な生活感を手がかりに世界と接している、専門家でない普通の人の視点」にこそ現状を改善する上での手がかりがあると考えたといえるでしょう。

このように考えたとき、上で述べたような時代背景から発展した日本の環境デザイン学研究の多くが、近代的な科学や工学などまるでなかった前近代的な環境を素材にしていることにこそ、私たちが「にぎわい」を考える上で学ぶべき研究の姿勢が隠されているといえるでしょう。近代的思考の影響下にある現在の日本からみると、学ぶべきことが少ないかも知れない前近代的空間構成が、近代的思考によって露呈した矛盾を乗り越えんとするかたちで生成されてきた環境デザイン学などからみたとき、改めて光りを放つわけです[22]。

さて本節の最後に、前近代に形成された事柄が（これからの時代を考える上で）手がかりになるという考えを端的に示した論文を１つ紹介しましょう。この論文は、今回の研究を考える上で示唆的な論文ですので、しっかりと見ていきたいと思います。著者は中村良夫氏、論文題名は「河川景観計画の発想と方法」です[23]。中村氏は主に景観論が専門ですが、この論文で中村氏は、日本における河と景観との関係において、近代以降移入された公園以外に、近世期に成立した「名所」という概念の重要性を論じています（なおここで展開される論考は、何も河川景観のみに止まることなく、日本の近代・現代思想を考える上でも重要な指摘であるといえます）。中村氏は、現在の都市計画で考えられている公園が西欧で一般化したのは19世紀、日本では明治になって西欧文明の輸入とともに入ってきた文物であるとした上で、公園が都市に出現した背景として公衆衛生の認識と啓蒙思想を挙げると共に、その発展を決定的にした思想的背景として「空間の機能を明確に純化してこれを排他的に留保するという、分析的な近代思想の影響」を挙げています。そして「名所」という概念についてこう述べます。

名所とは霊域、街並、山水、花鳥風月などによって形成され、多様な歓楽様態が生みだす総合的身体感覚によって条件づけられた、ひときわ印象深い風景を特徴とし、神事、芸能、祭りなどの定期的イベント、商業や交通などの日常生活に強く結びついた特殊な習俗空間で、長い時間のうちにコミュニティーの成員が暗黙のうちに定めた１つの複合的シンボル体系である」

とし

「言語が一民族共有の巨大な財産であるのとほとんど同じ意味において、それは１つの財産であって、集団意識が外在化した、社会学的存在であったと言ってよい。わが国の名所においては山水と花鳥風月はもはや単なる自然ではなく、象徴的意味を刻された文化的実在になっていた

（註）下線は妻木が加筆

近代思想の産物ともいえる公園に対し「公園が休息とレクレーション機能を純化し、分離してとり出し、固有の敷地によって自己を主張しはじめたことは、都市の非衛生と雑踏からそれを守るという重要な目的を担っており、近代が人間生活に与え得た大きな福音であった」としながらも「しかしそのことが日常生活の多彩な含みを内包した名所という巧いまれなる非凡な空間の価値を見過ごしてよい理由にはならないだろう」とし、こうした公園が行う自己正当性の主張を「そこには一つの思想的陥穽があるように思われる」（註）（下線は妻木が加筆）とさえ述べます。中村氏はこうした議論のもと、河川緑地を都市計画に位置づける前提として、公園以外に名所という思想を自覚的に受け入れる具体的な提案を行っていますが、本研究から学ぶべき点は実に多くあります。特に現在の河川緑地を考える上で、近代思想の産物としての公園という概念のみをよりどころにしてきた、明治以降の日本にとってそれが１つの限界に達していること、そしてこれを乗り越える上で、前近代に成立した「名所」という思想・概念を、手がかりにしている点は重要です。前近代には、近代思想では捉えきれない、しかし近代思想によって良くなった世界がさらに良くなっていく上で示唆的な要素が隠されている、といった指摘は本研究から大きな示唆をうけています。これは近代を迂回するかたちで前近代をみるという姿勢ともいえるでしょう。

１－６．再び「にぎわい」の話（本研究の射程）

さて随分議論が大きくなってしまいました。「近代」とか「前近代」などといったテーマは、それだけで、多くの研究領域で多くの専門家が日々研究されている重いテーマですので、私なんかが触れること自体、おこがましいことだとは思っています。しかし、こういったことを考えながら、仮設店や近世の商業空間を研究しているということを明確にしておかないと、「単に趣味じゃないか」と、よくお叱りをうけますので、あえてこのあたりを思い切って書いてみました[24)]。

さてこうした議論を踏まえた上で、改めて図－１－１を見て頂きましょう。図－１－１は天王寺さん（四天王寺）へ向かう通りです。通りはＪＲ天王寺駅などから、四天王寺へ向かう道で、毎月21日に行われる弘法さんでは、多くのお店と参拝者でにぎわいます。この空間で興味深いのは、店先にテーブルや台を出して商品陳列を行っているお店が多いことです。なぜ、わざわざこういう陳列を行うのかについて、すぐに答えを見いだすことはできませんが、少なくとも店側としては、こういった陳列の方が、店内のみで商売を行うよりも、売り上げが多少なりとも上がるために行っているといえるでしょう。店先に並んだ商品をみるだけで、なんだか楽しい気分になります。また参拝者のなかには、お目当ての商品をわざわざ買いに来ている人もいるでしょうが、どちらかといえば歩きながら買うともなく買わないともなく商品をみながら、目の止まる商品を手に取ったり、お店の人とコミュニケーションしながら時間を過ごすことが楽しみの１つになっている人の方が多いに違いありません。そんな参拝者にとっては、店の中に商品があるよりも、商品を見たり、手に取ったりしやすい商品陳列の方がよいわけで、よほど商品に興味を示さない限り、参拝者はわざわざ店の中にまで入って商品を吟味しないでしょう。そうした消費者の気持ちを実に上手く計算に入れた商品陳列が、ここでは展開されているのではないでしょうか。この街路に面しているお店にとって、弘法さんの時など、天王寺さんの参拝者はお客さんなわけですから、こうした商品陳列はお店の商売にとって基本的かつ重要なものであると思われます。ところが、お店の建物は必ずしもこうした商品販売を考慮して設計されていません。前近代では考えられないような近代的な建築―安全・衛生的で、耐久性のある建築や街路を含む空間（環境）―が、「お店の人がいて、商品が台に置いてあって、そこをお客さ

図－１－１　色々見ながら四天王寺さんへ…

んが通りかかって、立ち止まって、店と客のやりとりがある」、そんな近代以前からある当たり前の販売時の人のふるまいを、必ずしも上手く演出していない状況がみられます。もったいないことです。こういった普通の風景にも本研究を考える上で重要な手がかりがあるといえるでしょう。

以上の問題意識のもと本研究は、仮設店参道空間や近世期の商業空間を対象に、そして「人のふるまい」を手がかりに「にぎわい」を考えます。前近代的空間（環境）を考えるには、それが生成される時間的経緯が影響を与えていることはもちろん、生成され形成されるまでの、各時代における社会的・経済的・政治的背景を考慮する必要がある一方で、人のふるまいが空間形成上、重要な要素であった可能性、これについて考察します。「そこにまず人がいることから全てが始まる」との当たり前の前提から研究は進められていきます。

なお本研究では、その時代、その地域の特殊性（独自性）そのものをただちに探すものでもなく、また今すぐ何かの役に立つために、仮設店参道空間や前近代的な商業空間に潜む見えない構造を浮かび上がらせる、という立場はとりません。まず先学（例えば環境デザイン学など）によって、今まで何となく見ていたのでは見えなかったものが、人のふるまいを手がかりにしたとたんにあぶり出された見えない工夫や視点、これらを手がかりに前近代をみていきたいと考えています。人のふるまいというフィルターを通したとき、前近代的な環境からみえてくるもの、逆に近代的な環境からは見えなくなるといった要素が見つけられれば、前近代の造形を単に「古い」とか、「地域的に希」などといった評価軸だけではない、私たちの生活をより楽しくしてくれるヒントが一杯詰まった宝箱（＝文化遺産）としてみることができるのではないかと考えています。

以上今回は、具体的な実証部分の手前で随分紙面を割き、なぜこういった研究を行うかについて、大上段に構えつつ書きました。ただこの後に続く実証については「当たり前」と言われてしまうかも知れません。ではなぜそんな「当たり前」といわれる事柄をわざわざ採り上げるのか。それは一言でいえば、そういった言われてみれば「当たり前」といわれる事柄こそ近代的思考が幅を利かせている現代の建築や造形に多く取りこぼされているからに他ありません。またいくら「当たり前」が良いと言い続けても、近代を経験した現代からすれば、それは単なる意見でしかない。ではどうすればよいのか。それには、そうした信奉者に対し、「当たり前」の事柄にこそ、人のふるまいや生活といった視点からみたとき、よくよく考えられた良くできたモノ・コトであることを、単に集めるだけではなくて説明していくしかないのではないかと考えています。この点において、「当たり前」を実証していく意味はあると考えています。他者へ説明する上で、造形そのものを行う以外に、実証ほど説得力のない方法は現在ほかにないわけですから。

第２章　2006年度に行った調査・研究

以上で本研究の位置づけと、その射程についてお話しましたが、ここではこうした問題意識のもと、2006年度に行った具体的な調査・研究内容についてお話したいと思います。

はじめに寺社空間の「にぎわい」を考える上で、次の２つに焦点をあてました。①夏祭りにおける仮設店種選択、および仮設店種と立地との関係、②仮設店が形成する参道空間と人の歩行行動との関係、この２つです。ここでは、それぞれの研究目的と方法について、ごく簡単に述べたいと思います。

まず夏祭りの仮設店種と立地の関係ですが、一見無作為に配置されているように見える仮設店も、そこに何か隠された工夫がみられるのではないかとの考えのもと、検証が進められます。つまり仮設店出店者からみれば、出来る限り個々の仮設店、さらには全体の仮設店の売り上げ増加に向け、様々な工夫を行うのは自然な行為である一方、視点を参拝者に向ければ、仮設店配置における様々な工夫によって、参拝者は消費を促され、仮設店でモノやサービスの提供を受けようと、知らぬ間に感じさせられている可能性が考えられるからです。仮設店配置における工夫は、多くの参拝者が仮設店の商品やサービスに対して購買意欲を誘うための工夫として注目できますし、こうした人々の気分によって祭礼空間は「にぎわい」をもつ可能性がある。このことについて検証します。

具体的には大阪市内の夏祭り73社を素材に、祭礼においてどのような仮設店種が選択されているのか

（仮設店種選択状況）、および仮設店種別立地状況について考察を試みます（第３章）。

次に第４章では、夏祭り時に仮設店が形成する参道空間について、主に参拝者の歩行行動と、仮設店の庇下空間（仮設店の屋根が前方に張り出すかたちで形成される空間をさす）との関係について考察を試みます。具体的には、仮設店の庇下空間が参拝者の注意を喚起したり、あるいは購買意欲を喚起するなど、店側と参拝者側とのやりとりを考える上で何らかの意味を内包している装置として機能している可能性について、参拝者の歩行行動を手がかりに観察します。

続く第５章では、今後の課題と見通しについて述べ、「終わりに」では、普通の私が前近代にこだわる理由を少し書きました。

《参考文献および註》

１）なおここで用いる「空間」と「環境」は、それほど厳密な使い分けをしているわけではありませんが、「空間」とは物理的な要素が形成する物理的広がりをさし、「環境」とはそうした物理的な広がりに加え、人を巻き込んだ状態をさすといった程度で使い分けています。

２）こうした現象は少なくとも近世期には一般化していたと考えられます。金行信輔氏は、近世期、江戸の寺社境内のオープンスペースを広場と捉え、境内が堂舎・社殿という宗教施設をとりまく環境であり、神仏に対する「信仰の場」として不特定多数の参拝者を受容しうる点に本質があるものの、広場はまた、都市環境に開かれた場として、店舗や芸能小屋の展開する営業地・興行地となり、人びとに娯楽と遊興の機会を提供していたことを指摘しています（金行信輔「寺院境内―社会関係と空間の諸相」、『江戸の広場』、東京大学出版会、2005年）。またこうした寺社空間における信仰以外の場と社会構造に関する研究として光井渉氏は、浅草寺における子院境内を対象に、土地経営と空間利用の実態の解明を行っています（光井渉「近世寺社境内の崩壊」、『近世寺社境内とその建築』、中央公論美術出版、2001年」。また吉田伸之氏は浅草寺地域を「寺院社会」と捉え、空間・社会構造、社会関係を明らかにしました。（吉田伸之「巨大城下町―江戸」『巨大城下町江戸の分節構造』、山川出版社、2000年）。

３）なお門前町などに展開する常設店舗については別途考察中です。

４）E．ホール、日高敏隆ほか訳『かくれた次元』、みすず書房、1970年、Hall, E.T.（1966）:The Hidden Dimension, Doubleday & Company, Inc.,New York）。

５）R．ソマー、穐山貞登訳、『人間の空間―デザインの行動的研究』、鹿島出版会、1972年、Sommer, R.（1969）: Personal Space: The behavioral basis of design, Prentice Hall Inc., Englewood Cliffs, New Jersey。

６）また本書の訳者である穐山貞登氏は、「あとがき」で「（前略）人間の空間についての日本の研究は、きわめて日本的な特色を明らかにするであろうし、また、現代人の生き方に対する切実な反省をもたらすにちがいない（後略）」と、すでにこうした視点が、日本の空間を考える上で示唆的なものであることを指摘していることは興味深いといえるでしょう。

７）J.J.ギブソン、『生態学的視覚論―ヒトの知覚世界を探る―』、1985年、サイエンス社、James J.Gibson（1979）: The Ecological Approach to Visual Perception, Houghton Mifflin Company。

８）なお現在アフォーダンスを他領域へ応用する試みが、主にデザインの領域で行われています。例えば後藤武、佐々木正人、深澤直人『デザインの生態学』、東京書籍、2004年。

９）K.リンチ、丹下健三ほか訳、『都市のイメージ』、岩波書店、1968年、Kevin Lynch（1960）:THE IMAGE OF THE CITY, MIT & Harvard。

10）リンチ氏は、人がイメージしやすい都市空間構成として具体的に５つの概念、パス（Paths）、エッジ（Edges）、ディストリクト（Districts）、ノード（Node）、ランドマーク（Landmarks）を提唱しています。またリンチ氏はこうした都市イメージの手がかりを考察する際にシークェンスという概念を用いています。

11）この分野の研究史が整理された文献としてはG.T.ムーア、D.P.タトル、S.C.ハウエル、小林正美監訳、三浦研訳、『環境デザイン学入門　その導入過程と展望』、鹿島出版会1997年、Gary T.Moore,D.P.Tuttle,S.C.Howell（1985）:ENVIROMENTAL DESIGN RESERCH DIRECTIONS, Process and Prospects, Praeger Publishers. があります。

12）樋口忠彦「シークェンス景観」、『土木工学大系13 』、1977年　彰国社。

13）船越徹、積田洋、清水美佐子「参道空間の分節と空間構成要素の分析（分節点分析・物理量分析）―参道空間の研究（その１）」、『日本建築学会計画系論文集』、pp53,61、1988,2）。同じく神社参道空間と視知覚に関する研究としては、鈴木信弘、志水英樹、塩田洋「参道空間における視覚・記憶構造に関する研究」、『日本建築学会計画系論文集』、 pp93,100、no.457、1994,2などがあります。

14）材野博司、宮岸幸正「基本構造シークエンス景観と行動シークエンス景観との関係」、『日本建築学会計画系論文報告集』、no438、pp.79.85、1992.8、同「シークエンス景観における景観行動と空間の開放度・インパクト度との関係」、『日本建築学会計画系論文報告集』、no440、pp.119,125、1992.10。こうした環境の在り方と人の知覚・行動特性に関する研究のなかで、日本の前近代的な要素

を多く持つ環境を素材にした研究としては他に、大野隆造、近藤美紀、「感覚刺激情報源としての環境の記述　廻遊式庭園のシークェンスに関する研究（その１）」、『日本建築学会計画系論文集』、no461、pp.123.129、1994.7などがあります。

15）鈴木博之『日本の近代10　都市へ』、中央公論新社、1999年。

16）もっともこうした構造は、「解析する」ことを至上命題とする研究では、多かれ少なかれ、はまり込んでしまうドグマであるといえます。本研究でも、こうしたドグマを意識しつつ（つまりは限界性を自覚しつつ）行っていく必要があるでしょう。

17）J.J.フルーイン、長島正充ほか訳、『歩行者の空間』、鹿島研究所出版会、1974年、John J. Fruin,（1971）:「PEDESTRIAN Planning and Design」）。

18）望月照彦『マチノロジー　街の文化学』、1977年、創世記。

19）B.ルドフスキー、平良敬一ほか訳、『人間のための街路』、1973年、鹿島出版会、Bernard　Rudofsky（1969）: STREETS FOR PEOPLE A Primer for Americans, Doubleday & Company, Inc., New York。

20）前掲注釈（16）。

21）中島義明、大野隆造編、『人間行動学講座　第３巻すまう　行動の心理学』、朝倉書店、1996年。

22）同様の動向は、近年の脳・神経研究などでもみられます。

23）中村良夫「河川景観計画の発想と方法」、日本河川協会編『河川』、pp.23.34、1980.6。

24）考えてみると、近代の立役者である、工学系の研究の多くは「安全」とか「経済的」という明確でわかりやすい研究動機があるわけですから、研究する意味をあえて問わなくてよいのは当たり前といえば当たり前でしょう。私は最近、自明な研究目的を前提にした上で、ただ淡々と実証を述べるだけで終わる研究も重要だと思いますが実証云々以前に、自らが行っている研究の意味・見通しを膨大に論証する必要のある研究も必要だと思いますし、そこに研究のダイナミックさがあると思っています。

第３章　大阪市内の夏祭りにおける仮設店種選択と配置

３－１－１．研究の目的と方法

祭礼時における仮設店は、私たちに身近なものにも関わらず、建築史学・日本文化論などからの研究は少ないのが現状です[1)]。そうしたなか材野博司氏は、その著『かいわい』において

どのような縁日であれ、その仮設店の配置には何か共通したものがある。すなわち、通りの角や広場への入口など行動の変化点には風船、わた菓子という業種が、縁日市のシンボルのような形で市をしめており、変化点間の距離が長くなるとその中間にもそれらのシンボル業種が配される。

と、縁日などでの仮設店の配置には何らかの構造がみられる可能性について言及されています[2)]。

一方上原估貴氏らは、東京原宿の表参道の仮設店を素材に、仮設店が歩行者の流れを穏やかにする作用（人々の空間への滞留時間増加を促す）や、空間への人の増加を促すなど、賑わいを促す作用が認められるとの指摘があります[3)]。

そこで本章では、大阪市内の夏祭りを素材に、夏祭り時における仮設店の種別選択状況、および仮設店種と仮設店配置について考察を試みます。

調査法および研究方法については、以下の手順をとりました。①大阪市内の神社の所在（住所・電話番号）を調べ、各神社へ夏祭り開催日および仮設店出店数について聞き取りを行い、大阪市内における夏祭りカレンダーを作成（なおカレンダー作成に関しては、なにわ・大阪文化遺産学研究センター祭礼遺産研究プロジェクト黒田一充氏ら作成の「2005大阪の夏祭りカレンダー」などを参考にしました）、②祭り開催日に仮設店出店状況をビデオ撮影し、各神社の仮設店種別出店一覧、および各神社の周辺を描いた地図上に仮設店を記入した配置図を作成、この２つを基礎資料とし考察を行いました（対象となる夏祭りは、①神社の電話番号が不明なもの、②多くの仮設店がボランティアによって出店されているもの、③100軒を超える大規模な祭りを除く73社。なお調査対象となった祭り、および今回解析で用いた神社については表－３－１を参照。また神社所在については図－３－１参照）。

調査を行った結果、仮設店種は多岐に渡りますが、分析の関係上、以下のような分類を行いました（以下、こうした仮設店種の分類を「仮設店系」と呼びます）。

・食べ物１系：商品を提供される時の温度が高い食べ物の仮設店
・食べ物２系：商品を提供される時の温度が高くない食べ物の仮設店

・ゲーム系　：金魚すくい・スーパーボールすくいなど遊戯要素を含んだ仮設店
・販売系　：食べ物を除く商品を販売する仮設店
・クジ系　：クジの要素を含む仮設店

3－1－2．全体の傾向

今回調査を行った神社の仮設店出店数を示したのが（表－3－2）です。これによると大阪市内の夏祭りに出店される仮設店数は、10～20店が最も多く、続いて21～30店と続きます。

次に祭りに出店されている仮設店系を、出店数規模別にみたところ、規模に関わらず割合がほぼ一定であることから、祭りに求められるものは規模にそれほど大きく左右されないことが分かりました（表－3－3）。

また仮設店種により出店率（各仮設店の出店されている祭り数／総祭り数）に差異がみられます（表－3－4）。表－3－4をみると、金魚すくい・スーパーボールすくいは、いずれも95.9%、ベビーカステラが94.5%といずれも90%台の高い確率で出店されているので、この3種は大阪市内の夏祭りにおいて、定番仮設店種であることがわかります。これに続いてスマートボール・ヨーヨーつり・クジが80%台と続き、かき氷・フルーツあめ・イカ焼が70%台、フランクフルト・玉子せんべいが60%台、わた菓子・ミルクせんべい・ボール投げが50%台と続いています。大阪市内の夏祭りの定番仮設店種として、どこで線引きをするかは難しいのですが、少なくとも60%台以上の仮設店、つまり金魚すくい・スーパーボールすくい・ベビーカステラ、スマートボール・ヨーヨーつり・クジ・カキ氷・フルーツあめ・イカ焼き・フランクフルト・玉子せんべいの11種類は、頻繁に出店されている仮設店種であるといってよいでしょう。

次にこの上位11の仮設店をベスト11と呼び、これらを中心に祭り出店仮設店数と仮設店種との関係について考察します（なおベスト11の中で、食べ物1系のものを食べ物1系主要仮設店、食べ物2のものを食べ物2系主要仮設店、ゲームのものをゲーム系主要仮設店と呼びます）。

3－1－3．祭りの構成と祭り規模別出店状況

ここでは祭り仮設店の出店数を10件ごとにわけ、祭り仮設店の出店数によって出店率にどのような違いがあるのかについて考察しました（表－3－5）。その結果、祭り仮設店の出店数0～10件の祭りではベスト11のうち、ベビーカステラ・金魚すくい・スーパーボールすくいが強く求められています。さらに、祭り仮設店の出店数11～30件規模では、ベスト11の仮設店が総じて強く求められていることがわかります。またベスト11では、仮設店数が41～50以上になると、ほとんどの祭りに出店がみられることがわかります。一方、お面や光るバッチなどは、仮設店数の少ない祭りでは出店がみられませんが、仮設店数が多くなるにしたがって、出店がみられるようになります。

次に仮設店種と仮設店数について仮設店出店総数別（規模別）に考察すると（表－2－6）、ベビーカステラを除いた食べ物1系・食べ物2系・販売系は、仮設店数の増加と仮設店種の増加がほぼ同程度ですので、これらの仮設店系は規模が大きくなっていくにしたがって、仮設店種を増やすことによって仮設店数を増やしていることがわかります。これに対してゲーム系については仮設店出店数の増加に対して、仮設店種の増加は低いことから、ゲーム系は、仮設店種をそれほど増やすことなく、仮設店数を増やしていくことで出店数を増やしています。

3－1－4．小結

以上大阪市内の夏祭りの仮設店選択状況について考察を行った結果、以下の傾向を明らかにできました。

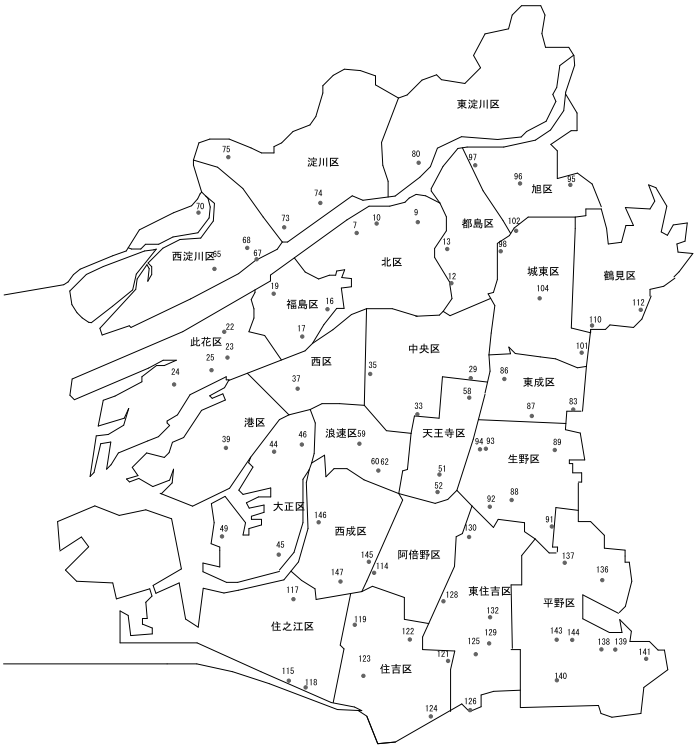
①大阪市内の夏祭りに出店される仮設店数は、10～20店が最も多く、続いて21～30店と続く。
②祭りに出店されている仮設店系を、出店数規模別にみたところ、規模に関わらず割合がほぼ一定であることから、祭りに求められるものは規模にそれほど大きく左右されない。
③また仮設店種別の出店率から、金魚すくい・スーパーボールすくい、ベビーカステラは、定番中の定番仮設店種であり、さらにスマートボール・ヨーヨーつり・クジ・カキ氷・フルーツあめ・イカ焼き・フランクフルト・玉子せんべいを加えた11種類は、頻繁に出店されている仮設店種である。

表－３－１　今回調査した神社

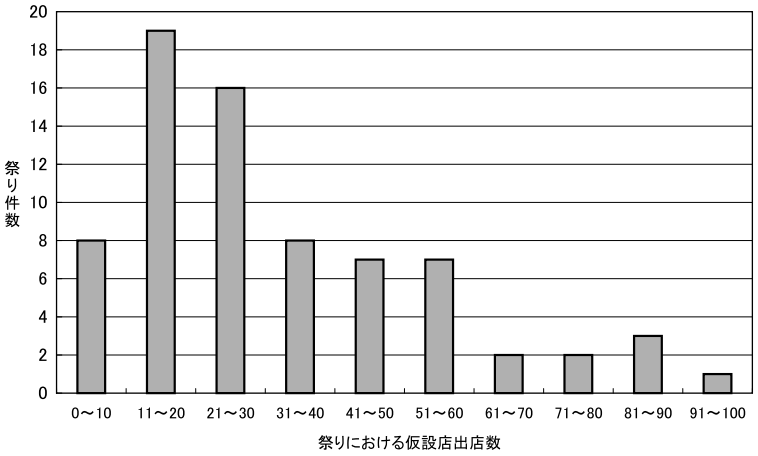
No	所在区	法人名	調査した祭	対象祭	No	所在区	法人名	調査した祭	対象祭
1	北区	八阪神社	○		86	東成区	八王子神社	○	○
2	北区	露天神社			87	東成区	熊野大神宮	○	○
3	北区	大阪天満宮	○		88	生野区	田島神社	○	○
7	北区	富島神社	○	○	89	生野区	清見原神社	○	○
9	北区	長柄八幡宮	○	○	91	生野区	巽神社	○	○
10	北区	豊崎神社	○	○	92	生野区	生野八坂神社	○	○
12	都島区	櫻宮	○	○	93	生野区	御幸森天神宮	○	○
13	都島区	都島神社	○	○	94	生野区	彌栄神社	○	○
16	福島区	福島天満宮	○	○	95	旭区	八幡大神宮	○	○
17	福島区	恵美須神社	○	○	96	旭区	大宮神社	○	○
19	福島区	八阪（八坂）神社	○	○	97	旭区	日吉神社	○	○
22	此花区	鴉宮	○	○	98	城東区	水神社	○	○
23	此花区	住吉神社	○	○	99	城東区	若宮八幡大神宮	○	
24	此花区	産土神社	○	○	100	城東区	八劔神社	○	
25	此花区	朝日神明社	○	○	101	城東区	諏訪神社	○	○
29	中央区	稲荷神社	○	○	102	城東区	須佐之男尊神社	○	○
30	中央区	鵲森宮	○		104	城東区	皇大神宮	○	○
33	中央区	高津宮	○	○	110	鶴見区	阿遅速雄神社	○	○
34	中央区	御霊神社	○		112	鶴見区	比枝神社	○	○
35	中央区	難波神社	○	○	113	阿倍野区	阿倍王子神社	○	
37	西区	茨住吉神社	○	○	114	阿倍野区	阿部野神社	○	○
39	港区	天満宮	○	○	115	住之江区	高崎神社	○	○
42	港区	三社神社	○		117	住之江区	天満宮	○	○
44	大正区	泉尾神社	○	○	118	住之江区	高砂神社	○	○
45	大正区	天満宮	○	○	119	住吉区	生根神社	○	○
46	大正区	八坂神社	○	○	120	住吉区	住吉大社	○	
49	大正区	神明神社	○	○	121	住吉区	保利神社	○	○
51	天王寺区	久保神社	○	○	122	住吉区	神須牟地神社	○	○
52	天王寺区	河堀稲生神社	○	○	123	住吉区	止止呂支比売命神社	○	○
53	天王寺区	大江神社	○		124	住吉区	大依羅神社	○	○
54	天王寺区	東高津宮	○		125	東住吉区	素盞嗚尊神社	○	○
55	天王寺区	生國魂神社	○		126	東住吉区	阿麻美許曽神社	○	○
56	天王寺区	堀越神社	○		128	東住吉区	山阪神社	○	○
57	天王寺区	五條宮	○		129	東住吉区	住吉神社	○	○
58	天王寺区	三光神社	○	○	130	東住吉区	天神社	○	
59	浪速区	難波八阪神社	○	○	132	東住吉区	中井神社	○	○
60	浪速区	廣田神社	○	○	133	平野区	杭全神社	○	
62	浪速区	今宮戎神社	○	○	135	平野区	新家天満宮	○	
65	西淀川区	姫嶋神社	○	○	136	平野区	菅原神社	○	○
67	西淀川区	鼻川神社	○	○	137	平野区	旭神社	○	○
68	西淀川区	住吉神社	○	○	140	平野区	瓜破天神社	○	○
70	西淀川区	田蓑神社	○	○	142	平野区	志紀長吉神社	○	○
73	淀川区	塚本神社	○	○	143	平野区	式内楯原神社	○	○
74	淀川区	神津神社	○	○	145	西成区	天満宮	○	○
75	淀川区	香具波志神社	○	○	146	西成区	津守神社	○	○
80	東淀川区	柴島神社	○	○					
83	東成区	深江稲荷神社	○	○					
85	東成区	八阪神社	○						

（註）番号は調査のために便宜上つけたもの。

図－３－１　調査した神社所在



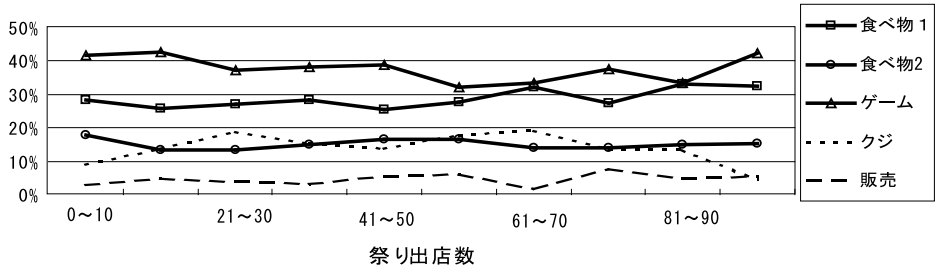
表－３－２　仮設店出店数別にみた祭りの数



表－３－４　祭りごとの仮設店出店率

順位	仮設店種	出店率
1	金魚すくい	95.9%
1	スーパーボールすくい	95.9%
3	ベビーカステラ	94.5%
4	スマートボール	89.0%
5	ヨーヨーつり	83.6%
5	クジ	83.6%
7	カキ氷	74.0%
7	フルーツあめ	74.0%
9	イカ焼き	71.2%
10	フランクフルト	69.9%
11	玉子せんべい	68.5%
12	わたがし	52.1%
13	ミルクせんべい	50.7%
13	ボール投げ	50.7%
15	お面	49.3%

表－３－３　祭り規模別仮設店系分布

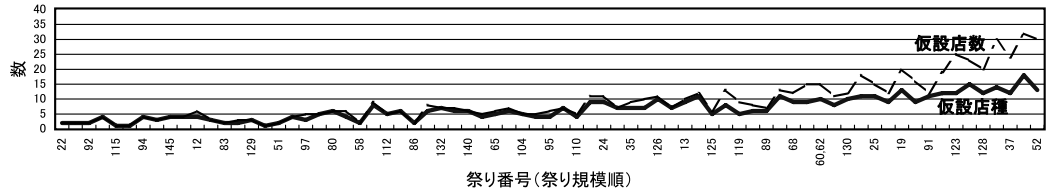


表－３－５　仮設店出店数別、仮設店系別出店率

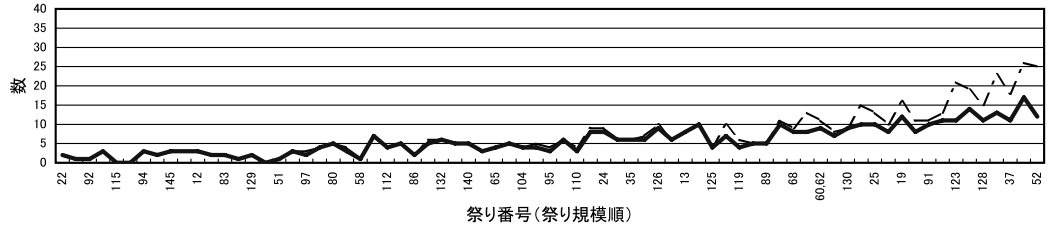
		0～10	11～20	21～30	31～40	41～50	51～60	61～70	71～80	81～90	91～100
食べ物1系	ベビーカステラ	87.5%	89.5%	93.8%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	イカ焼き	25.0%	47.4%	75.0%	87.5%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	玉子せんべい	12.5%	42.1%	68.8%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	フランクフルト	37.5%	42.1%	81.3%	75.0%	100.0%	85.7%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	から揚げ	12.5%	21.1%	50.0%	50.0%	57.1%	85.7%	100.0%	100.0%	66.7%	100.0%
食べ物2系	カキ氷	37.5%	57.9%	75.0%	75.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	フルーツあめ	12.5%	47.4%	93.8%	87.5%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	わたがし	12.5%	15.8%	50.0%	62.5%	85.7%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	ミルクせんべい	25.0%	26.3%	50.0%	62.5%	71.4%	85.7%	100.0%	50.0%	66.7%	100.0%
	ジュース	25.0%	5.3%	0.0%	37.5%	71.4%	42.9%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
ゲーム系	金魚すくい	75.0%	94.7%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	スーパーボールすくい	87.5%	94.7%	100.0%	87.5%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	スマートボール	62.5%	84.2%	87.5%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	ヨーヨーつり	62.5%	63.2%	87.5%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	ボール投げ	12.5%	36.8%	50.0%	50.0%	85.7%	57.1%	100.0%	100.0%	66.7%	100.0%
販売系	お面	0.0%	26.3%	56.3%	50.0%	71.4%	100.0%	0.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	光るバッチ	12.5%	0.0%	0.0%	25.0%	42.9%	42.9%	0.0%	50.0%	33.3%	100.0%
	水笛	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	28.6%	28.6%	0.0%	50.0%	66.7%	0.0%
	キャラクターグッズ	0.0%	0.0%	6.3%	0.0%	28.6%	14.3%	0.0%	0.0%	33.3%	0.0%
	福袋	0.0%	0.0%	0.0%	12.5%	0.0%	14.3%	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%

表－３－６　祭り別仮設種数と仮設店数

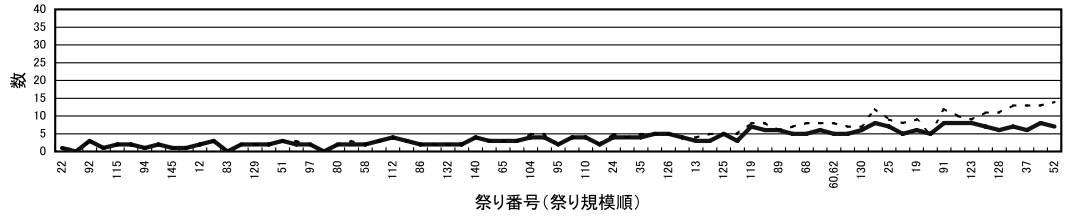
食べ物1系



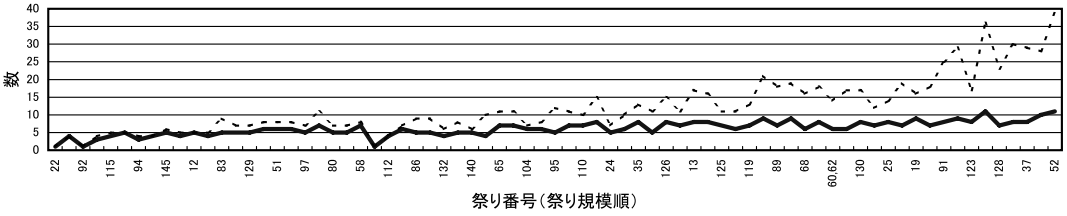
ベビーカステラを除いた食べ物1系



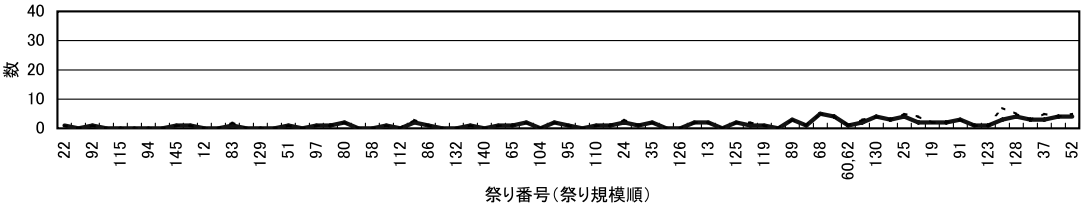
食べ物2系



ゲーム系



販売系



④祭り仮設店の出店数０～10件の祭りではベスト11のうち、ベビーカステラ・金魚すくい・スーパーボールすくいが強く求められ、祭り仮設店の出店数11～30件規模では、ベスト11の仮設店が総じて強く求められる。またベスト11は、仮設店数が41～50以上になると、ほとんどの祭りに出店がみられることがわかる。
⑤お面や光るバッチなどは、仮設店数の少ない祭りでは出店がみられないが、仮設店数が多くなるにしたがって、出店がみられるようになる。

以上の傾向から、大阪市内の夏祭りにおける仮設店選択は、まずベスト11といった定番の仮設店があり、このベスト11の仮設店が数を増やしながら、他の仮設店が加わるかたちで、仮設店の出店数が増え、大規模になっていくといえるでしょう。

また各祭りにおける仮設店種と、仮設店数について仮設店出店規模別にみた結果、
⑥ベビーカステラを除いた食べ物１系・食べ物２系・販売系は、仮設店数の増加と仮設店種の増加がほぼ同程度であることから、これらの仮設店系は規模が大きくなっていくにしたがって、仮設店種を増やすことにより仮設店数を増やしている。
⑦ゲーム系については仮設店出店数の増加に対して、仮設店種の増加は低いことから、ゲーム系は、仮設店種がそれほど多くない分、仮設店数を増やしていくことで出店数を増やしている。

さてこの⑥・⑦を、仮設店側である「店」と参拝者である「客」との関係からみると次のようになると考えられます。つまり仮設店出店側からすれば、ゲーム系の仮設店は同種仮設店を複数出店した方が売り上げが期待できるため、こうした出店の工夫を行っていると考えられますし、視点を参拝者に向ければ、そうされることによって、ゲーム系のサービスを行うよう誘導されている可能性を考えることができます。これに対してベビーカステラを除く食べ物１系、食べ物２系、販売系は、仮設店種の増加と仮設店数の増加に相関性があることから、店側は同種の仮設店を多数出店することを嫌っていた可能性があります。これは出店される仮設店数が多い祭りで同種の仮設店をあまりに多数出店すると、「客」の購買意欲が下がってしまい、結果として個々の仮設店、さらには仮設店全体の売り上げが下がってしまうことを店側が経験的に理解した上での出店工夫として読み替えることができるのではないでしょうか。

いずれにせよ、夏祭りの仮設店種は、何となく選択されているのではなく、参拝者の消費者行動を意識した選択が行われている可能性はあると考えられます。今後は実際に仮設店経営者の方に仮設店出店における「コツ」についてヒヤリングすることも必要でしょう。

３－２　大阪市内の夏祭りにおける仮設店種と立地について

３－２－1. 仮設店の周辺

ここでは、大阪市内の夏祭り時に出店される仮設店について、主に仮設店種別の配置について考察を試みます。なお考察に際しては図－３－２のような仮設店配置図を作成しました[4)]。

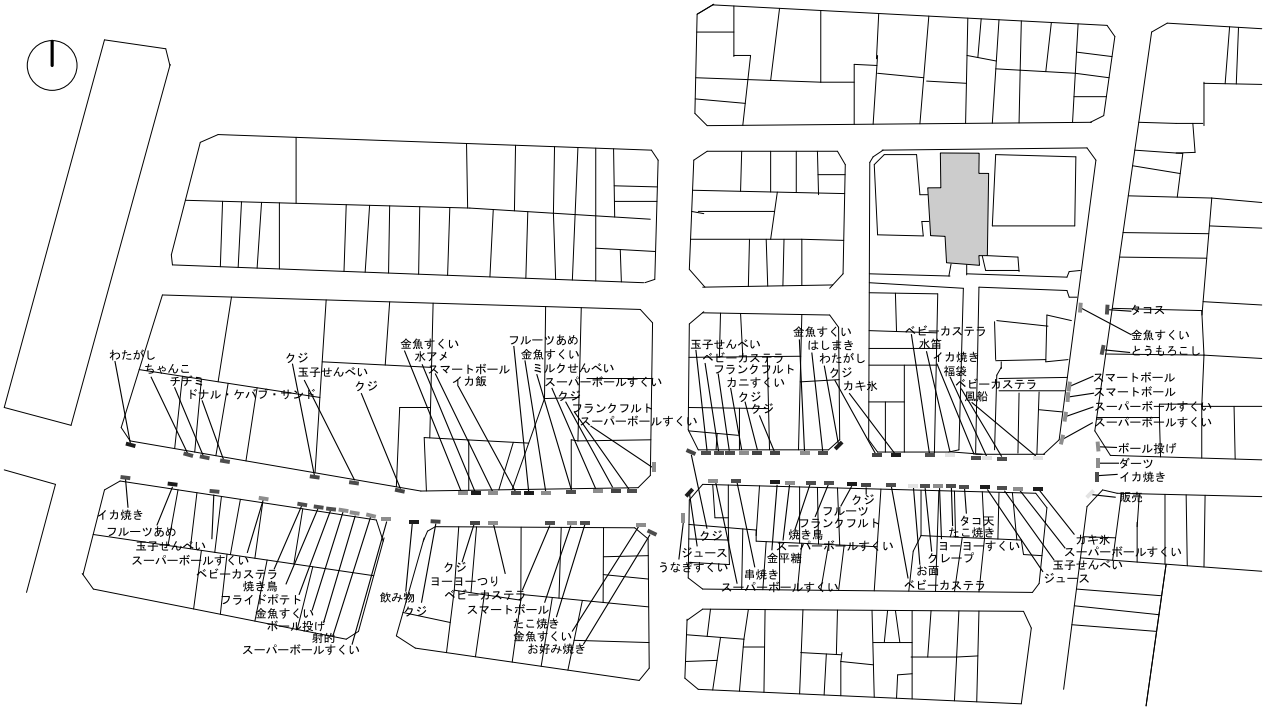
はじめに大阪市内の祭りのうち、出店数の多い仮設店のうちクジ系を除いた上位８種（スーパーボールすくい・金魚すくい・ベビーカステラ・スマートボール・ヨーヨーつり・カキ氷・フルーツあめ・イカ焼き）にわた菓子を加えた９仮設店（以下９仮設店と呼ぶ）について、周辺にどのような仮設店が立地するか考察します。

さて対象仮設店と周辺仮設店の立地関係を図－３－３のようにパターン化し、対象仮設店の周辺に立地する上位の仮設店種を挙げたものが表－３－７です。表－３－７によると、わた菓子を除いて各仮設店の周辺仮設店には、クジが多く配置されていることがわかります。特にゲーム系屋台の周辺には同じゲーム系やクジが多いのに対し、ゲーム系の仮設店の周辺に食べ物系の仮設店が少ない。これについては、さまざまな要因が考えられますが、ゲームやクジを連続して配置することによって、消費を喚起している可能性が考えられます。

３－２－2. 仮設店の配置

次に仮設店が配置される場所について、図－３－４のように空間の変化点と考えられるC、C’、D、D’、E、E’、F、F’、G、ＡＣに出店される仮設店種について、祭り規模別、出店状況別に考察します（なおこれら空間の変化点を「特殊配置パターン」と呼びます。また「’」は境内をさし、「’」のないものは敷地外の街路上をさします。ここでいう「規

図－３－２　夏祭りの仮設店配置例（難波八坂神社）



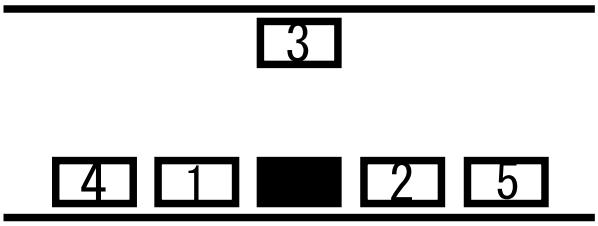
模」は仮設店出店数が１～30を小規模、31～60を中規模、60以上を大規模とします。また「出店状況」は、仮設店が境内の内だけに配置されている祭りを「内の祭り」、仮設店が境内の内と外の両方に配置されている祭りを「内外の祭り」、仮設店が境内の外だけに配置されている祭りを「外の祭り」、以上の分類をさします)。

以上から仮設店配置構成について考察したところ、次のような傾向が確認できました（表－３－８)。まずわた菓子の配置については、材野氏の指摘通り、祭り規模、あるいは出店状況に関わらず特殊配置パターンに配置されるものが80％近くに及ぶことから、他の仮設店とは異なり空間の変化点に意図的に出店されていることがわかります。この理由については、①わた菓子の配置位置が仮設店の配置場所を決める際、重要な役割を持つために他の仮設店よりも先に特殊な位置に配置するため、あるいは②わた菓子の仮設店は他の仮設店よりも仮設店のサイズが小さいので、すべての仮設店の立地が決定した後に目立つ位置に布石のように配置される、などの要因が考えられます。

これに対しゲーム系・クジの仮設店は、わた菓子とは逆に特殊配置パターンの割合が非常に低いと共に、連続して配置される場合が多いといえます。このような出店配置が行われる理由として、客が仮設店前に滞留することによって仮設店の周りに「にぎわい」ができ、結果としてさらに客を引き付けるという相乗効果を期待した可能性などが考えられるでしょう。

一方ベビーカステラについては、祭りの規模別・出店状況別に異なる傾向がみられました。つまり特殊配置パターンへの出店が全体で40％と高いのですが、規模別・出店状況別でみると、「大規模の祭り」または「外の祭り」では特殊配置パターンの割合が低く、特に「大規模の祭り」の中で「内外の祭り」、「外の祭り」では特殊配置パターンの割合が20％を下回る結果となりました。逆に①小・中規模の祭りで65％の祭りが特殊な位置にベビーカステラを少なくとも１軒は配置すること、②特に中規模の祭りでは81％もの祭りで特殊な位置にベビーカステラが存在することから、小・中規模においてベビーカステラが特殊な位置に出店する傾向にあることが指摘できます。またベビーカステラが出店される特殊配置は、その多くがC（境内の外の角)、D（境内の外の端)、G（入り口）を中心に存在することから、ベビーカステラは、どちらかといえば境内内部より境内の外側、あるいは外部と内部の境界部分に出店されています。

図－３－３　特定仮設店の周辺露店



（註）黒い仮設店が対象仮設店。その周辺の露仮設店を番号で記している（表－３－７に対応）。

表－３－７　各仮設店の周辺仮設店

表-A　SBすくいの周辺仮設店

順位	屋台名	1+2	3	4+5	合計
1	クジ	39	18	17	74
2	ベビーカステラ	15	14	11	40
3	ＳＢすくい	14	6	9	29
4	金魚すくい	11	10	5	26
5	スマートボール	6	5	10	21

表-B　いか焼の周辺仮設店

順位	屋台名	1+2	3	4+5	合計
1	クジ	9	2	2	13
2	カキ氷	10	1	1	12
3	金魚すくい	5	2	4	11
3	ＳＢすくい	2	5	4	11
5	フルーツあめ	5	2	1	8

表-C　スマートボールの周辺仮設店

順位	屋台名	1+2	3	4+5	合計
1	クジ	15	4	8	27
2	スマートボール	18	2	4	24
3	ＳＢすくい	10	5	5	20
4	金魚すくい	9	4	1	14
5	ヨーヨーつり	5	3	3	11

表-D　フルーツあめの周辺仮設店

順位	屋台名	1+2	3	4+5	合計
1	クジ	13	7	1	21
2	ＳＢすくい	11	5	2	18
3	イカ焼き	6	2	1	9
3	ヨーヨーつり	5	3	1	9
5	ベビーカステラ	6	2	0	8
5	金魚すくい	4	4	0	8

表-E　ヨーヨーつりの周辺仮設店

順位	屋台名	1+2	3	4+5	合計
1	クジ	18	6	13	37
2	金魚すくい	3	9	6	18
3	ベビーカステラ	7	2	7	16
4	ＳＢすくい	2	5	6	13
5	フルーツあめ	6	3	2	11
5	スマートボール	7	1	3	11
5	ヨーヨーつり	0	7	4	11

表-F　かき氷の周辺仮設店

順位	屋台名	1+2	3	4+5	合計
1	ＳＢすくい	7	0	8	15
2	ベビーカステラ	6	3	3	12
2	イカ焼き	10	1	1	12
2	クジ	6	0	6	12
5	金魚すくい	6	0	3	9

表-G　金魚すくいの周辺仮設店

順位	屋台名	1+2	3	4+5	合計
1	クジ	23	15	22	60
2	ＳＢすくい	12	12	3	27
3	ベビーカステラ	10	5	9	24
4	スマートボール	11	3	2	16
5	フランクフルト	6	2	7	15

表-H　わたがしの周辺仮設店

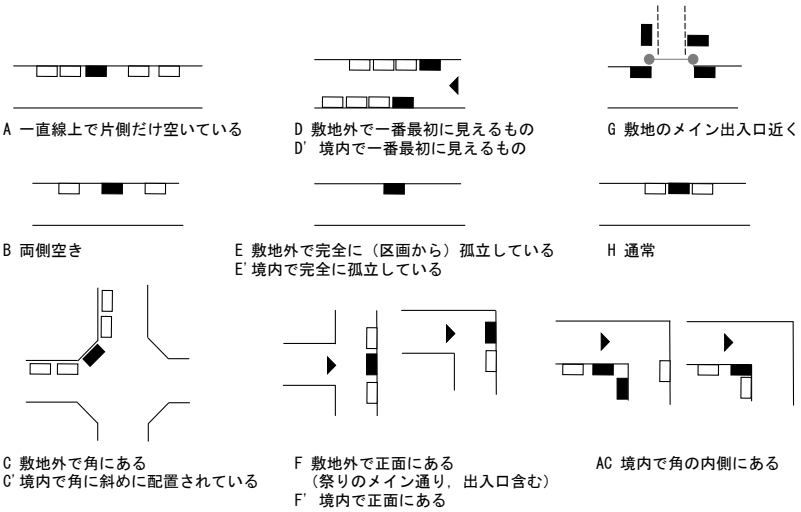
順位	屋台名	1+2	3	4+5	合計
1	ベビーカステラ	3	0	3	6
2	イカ焼き	3	1	1	5
3	カキ氷	2	1	1	4
3	ＳＢすくい	0	0	4	4
5	金魚すくい	1	0	2	3
5	ヨーヨーつり	0	2	1	3
5	クジ	1	0	2	3

表-I　ベビーカステラの周辺仮設店

順位	屋台名	1+2	3	4+5	合計
1	ＳＢすくい	13	14	10	37
2	クジ	13	8	8	29
3	金魚すくい	10	3	8	21
4	ヨーヨーつり	10	2	3	15
5	カキ氷	6	5	3	14

※SBすくい：スーパーボールすくい

図－３－４　特殊配置にある仮設店パターン



表－３－８　上の図で示した場所に配置されている仮設店種を、祭り仮設店出店規模別に示したもの

表-A　内の祭り小規模

	C	D	F	G	C'	D'	F'	合計	総数	割合
わたがし	0	0	0	2	1	1	1	5	6	83.3%
焼き鳥	0	0	0	2	0	0	0	2	3	66.7%
ベビーカステラ	0	0	0	7	2	2	2	13	21	61.9%
イカ焼き	0	0	0	3	1	1	0	5	10	50.0%
お好み焼き	0	0	0	0	0	1	0	1	2	50.0%
たこ焼き	0	0	0	1	0	0	0	1	2	50.0%
東京コロッケ	0	0	0	0	1	0	0	1	2	50.0%
おもちゃ	0	0	0	1	0	0	0	1	2	50.0%
射的	0	0	0	0	2	1	1	4	9	44.4%
フライドポテト	0	0	0	1	1	0	0	2	5	40.0%
カキ氷	0	0	0	2	1	1	1	5	13	38.5%
スマートボール	0	0	0	1	4	1	3	9	24	37.5%
フランクフルト	0	0	0	1	2	0	1	4	11	36.4%
とうもろこし	0	0	0	1	0	0	0	1	3	33.3%
ＳＢすくい	0	0	0	2	4	3	2	11	36	30.6%
ボール投げ	0	0	0	1	1	0	1	3	10	30.0%
金魚すくい	0	0	0	2	2	3	0	7	24	29.2%
水アメ	0	0	0	1	0	0	0	1	4	25.0%
ミルクせんべい	0	0	0	0	2	0	0	2	9	22.2%
クジ	0	0	0	3	6	0	3	12	56	21.4%
フルーツあめ	0	0	0	0	2	0	0	2	10	20.0%
ヨーヨーつり	0	0	0	1	1	1	1	4	20	20.0%
お面	0	0	0	1	0	0	0	1	6	16.7%

表-B　内の祭り中規模

	C	D	F	G	C'	D'	F'	合計	総数	割合
わたがし	0	0	0	2	0	0	0	2	3	66.7%
射的	0	0	0	0	0	0	2	2	3	66.7%
カキ氷	0	0	0	0	2	1	0	3	7	42.9%
ダーツ	0	0	0	0	0	0	1	1	3	33.3%
ヨーヨーつり	0	0	0	2	1	0	0	3	11	27.3%
イカ焼き	0	0	0	0	1	0	0	1	4	25.0%
玉子せんべい	0	0	0	0	1	0	0	1	4	25.0%
金魚すくい	0	0	0	1	2	0	0	3	13	23.1%
クジ	0	0	0	0	2	2	1	5	23	21.7%
ベビーカステラ	0	0	0	2	0	0	0	2	10	20.0%
ＳＢすくい	0	0	0	1	0	0	0	1	10	10.0%

表-C　内外の祭り小規模

	C	D	F	G	C'	D'	F'	合計	総数	割合
わたがし	2	1	0	1	0	0	0	4	5	80.0%
クレープ	1	1	0	0	0	0	0	2	3	66.7%
ベビーカステラ	5	6	0	2	1	0	1	15	23	65.2%
たこ焼き	0	0	0	1	0	0	0	1	2	50.0%
焼そば	0	0	0	1	0	0	0	1	2	50.0%
チヂミ	1	0	0	0	0	0	0	1	2	50.0%
フルーツあめ	0	2	0	2	1	1	0	6	12	50.0%
かたぬき	0	0	0	0	0	0	1	1	2	50.0%
パチンコ	0	1	0	0	0	0	0	1	2	50.0%
お面	0	1	1	0	0	0	0	2	5	40.0%
イカ焼き	2	1	0	1	0	0	0	4	11	36.4%
カキ氷	0	0	0	4	0	0	0	4	11	36.4%
焼き鳥	0	0	0	0	0	1	0	1	3	33.3%
東京コロッケ	0	1	0	0	0	0	0	1	3	33.3%
ボール投げ	1	1	0	0	0	0	0	2	6	33.3%
フランクフルト	0	0	0	2	0	1	0	3	11	27.3%
スマートボール	0	2	1	1	0	1	1	6	22	27.3%
販売	1	0	0	0	0	0	0	1	4	25.0%
ＳＢすくい	1	1	0	1	0	4	0	7	31	22.6%
玉子せんべい	0	0	0	2	0	0	0	2	10	20.0%
金魚すくい	0	1	0	2	1	0	0	4	24	16.7%
射的	0	0	0	1	0	0	0	1	6	16.7%
わなげ	0	0	0	0	1	0	0	1	6	16.7%
クジ	1	1	0	1	0	2	0	5	42	11.9%
ヨーヨーつり	0	1	0	0	0	1	0	2	17	11.8%

表-D　内外の祭り中規模

	C	D	F	G	C'	D'	F'	合計	総数	割合
わたがし	4	4	0	1	0	0	0	9	12	75.0%
フライまんじゅう	0	2	0	0	0	0	0	2	3	66.7%
うなぎつり	1	0	0	1	0	0	0	2	3	66.7%
たこ焼き	1	2	0	0	0	0	0	3	5	60.0%
ベビーカステラ	6	6	2	2	0	1	1	18	33	54.5%
イカ焼き	4	3	0	3	1	0	0	11	22	50.0%
焼そば	0	1	0	0	0	0	0	1	2	50.0%
べっ甲飴	0	0	0	0	0	1	0	1	2	50.0%
水アメ	0	0	0	1	1	0	0	2	5	40.0%
ダーツ	0	1	0	0	0	0	1	2	5	40.0%
光るバッチ	1	1	0	0	0	0	0	2	5	40.0%
カキ氷	3	1	1	1	3	0	0	9	23	39.1%
お面	2	0	0	2	1	0	0	5	13	38.5%
フランクフルト	0	0	0	3	0	2	0	5	14	35.7%
串焼き	0	1	0	0	0	0	0	1	3	33.3%
かたぬき	0	0	0	0	0	1	0	1	3	33.3%
とうもろこし	0	0	0	2	0	0	0	2	7	28.6%
フルーツあめ	0	1	0	3	2	0	0	6	21	28.6%
ジュース	0	0	0	1	1	0	0	2	7	28.6%
ミルクせんべい	0	0	0	1	2	0	0	3	11	27.3%
から揚げ	0	1	1	0	0	1	0	3	12	25.0%
はしまき	0	1	0	0	0	0	0	1	4	25.0%
東京コロッケ	0	0	0	1	0	0	0	1	4	25.0%
金魚すくい	2	3	0	3	3	0	1	12	49	24.5%
わなげ	0	0	0	1	1	0	0	2	9	22.2%
ボール投げ	0	1	0	0	1	0	0	2	10	20.0%
販売	0	0	0	0	1	0	0	1	5	20.0%
玉子せんべい	0	0	0	1	1	1	0	3	18	16.7%
ＳＢすくい	1	0	1	2	4	2	0	10	62	16.1%
ヨーヨーつり	1	0	1	2	1	0	0	5	31	16.1%
スマートボール	1	2	0	1	1	0	0	5	32	15.6%
フライドポテト	1	0	0	0	1	0	0	2	15	13.3%
焼き鳥	0	0	0	1	0	0	0	1	10	10.0%

表-E　内外の祭り大規模

	C	D	F	G	C'	D'	F'	合計	総数	割合
わたがし	1	2	0	2	1	0	0	6	7	85.7%
はしまき	0	0	1	0	0	0	0	1	2	50.0%
ミルクせんべい	1	0	0	0	0	0	1	2	4	50.0%
お面	0	0	0	0	0	0	1	1	2	50.0%
イカ焼き	1	1	0	0	0	1	0	3	7	42.9%
フランクフルト	0	0	1	2	1	0	0	4	10	40.0%
フルーツ	0	0	0	1	1	0	0	2	6	33.3%
スマートボール	0	0	0	0	2	0	1	3	9	33.3%
お好み焼き	0	0	1	0	0	0	1	2	7	28.6%
ＳＢすくい	0	1	0	2	4	0	1	8	31	25.8%
焼そば	0	0	0	1	0	0	0	1	4	25.0%
カキ氷	0	0	1	0	1	0	0	2	8	25.0%
ヨーヨーつり	2	0	0	0	0	0	1	3	15	20.0%
ジュース	0	0	0	0	1	0	0	1	6	16.7%
玉子せんべい	0	0	0	0	1	0	0	1	7	14.3%
フライドポテト	0	0	0	0	1	0	0	1	7	14.3%
フルーツあめ	0	1	0	0	0	0	0	1	7	14.3%
金魚すくい	0	1	0	0	1	1	0	3	21	14.3%
射的	0	0	1	0	0	0	0	1	7	14.3%
クジ	0	1	0	0	6	0	1	8	57	14.0%
ベビーカステラ	0	2	1	0	0	0	0	3	22	13.6%
から揚げ	0	0	0	0	0	0	1	1	9	11.1%

表-F　外の祭り小規模

	C	D	F	G	C'	D'	F'	合計	総数	割合
フルーツあめ	2	2	0	0	0	0	0	4	4	100.0%
カキ氷	4	0	0	1	0	0	0	5	7	71.4%
イカ焼き	1	1	0	2	0	0	0	4	6	66.7%
フランクフルト	0	2	0	0	0	0	0	2	4	50.0%
わたがし	1	0	0	0	0	0	0	1	2	50.0%
ジュース	0	0	0	1	0	0	0	1	2	50.0%
カメすくい	1	0	0	0	0	0	0	1	2	50.0%
魚釣り	1	0	0	0	0	0	0	1	2	50.0%
ベビーカステラ	0	2	0	2	0	0	0	4	12	33.3%
フルーツチョコ	1	0	0	0	0	0	0	1	3	33.3%
ボール投げ	1	0	0	0	0	0	0	1	3	33.3%
お面	0	1	0	0	0	0	0	1	4	25.0%
玉子せんべい	1	0	0	0	0	0	0	1	5	20.0%
スマートボール	0	1	0	0	0	0	0	1	5	20.0%
ヨーヨーつり	0	2	0	0	0	0	0	2	10	20.0%

表-G　外の祭り中規模

	C	D	F	G	C'	D'	F'	合計	総数	割合
うなぎつり	2	0	0	0	0	0	0	2	2	100.0%
光るバッチ	0	2	0	0	0	0	0	2	2	100.0%
わたがし	0	2	0	1	0	0	0	3	4	75.0%
フランクフルト	0	1	0	1	0	0	0	2	4	50.0%
とうもろこし	0	1	0	0	0	0	0	1	2	50.0%
ミルクせんべい	0	1	0	0	0	0	0	1	2	50.0%
ジュース	1	1	0	0	0	0	0	2	4	50.0%
カキ氷	2	0	0	1	0	0	0	3	9	33.3%
フルーツ	0	1	0	0	0	0	0	1	3	33.3%
お面	0	1	0	0	0	0	0	1	3	33.3%
ベビーカステラ	1	2	0	1	0	0	0	4	13	30.8%
イカ焼き	1	0	0	0	0	0	0	1	4	25.0%
わなげ	0	0	1	0	0	0	0	1	4	25.0%
玉子せんべい	0	1	0	0	0	0	0	1	6	16.7%
ＳＢすくい	0	1	0	1	0	0	0	2	14	14.3%
スマートボール	0	1	0	0	0	0	0	1	10	10.0%

表-H　外の祭り大規模

	C	D	F	G	C'	D'	F'	合計	総数	割合
わたがし	4	2	0	0	0	0	0	6	7	85.7%
うなぎつり	2	0	1	0	0	0	0	3	4	75.0%
光るバッチ	4	0	1	0	0	0	0	5	7	71.4%
たこ焼き	1	1	0	0	0	0	0	2	4	50.0%
カキ氷	4	0	0	1	0	0	0	5	11	45.5%
お面	0	0	1	1	0	0	0	2	5	40.0%
フルーツ	0	0	1	0	0	0	0	1	3	33.3%
ダーツ	0	1	1	0	0	0	0	2	6	33.3%
イカ焼き	0	1	1	1	0	0	0	3	10	30.0%
ボール投げ	1	1	0	0	0	0	0	2	7	28.6%
スマートボール	3	0	0	1	0	0	0	4	16	25.0%
金魚すくい	4	1	0	2	0	0	0	7	29	24.1%
ジュース	2	0	0	0	0	0	0	2	10	20.0%
ベビーカステラ	0	3	1	0	0	0	0	4	21	19.0%
お好み焼き	1	0	0	0	0	0	0	1	6	16.7%
から揚げ	0	0	1	0	0	0	0	1	7	14.3%
焼き鳥	1	0	0	0	0	0	0	1	8	12.5%
玉子せんべい	0	1	0	0	0	0	0	1	9	11.1%

※　SBすくい：スーパーボールすくい

一方食べ物１は祭り全体では外部の特殊配置パターンが多いですが、大規模・外の祭りでは割合が低いです。これに対し食べ物１の特殊配置パターンの割合が低い祭りでは、食べ物２の特殊配置パターンの割合が高くなっています。また、お面・光るバッチ・うなぎつりに関しては、総仮設店数こそ少ないですが、中・大規模かつ外の祭りでは境内外における特殊配置パターンの割合が非常に高く、場合によっては対象９屋台を上回っています。これについてはさまざまな要因が考えられますが、お面・光るバッチはわた菓子同様、空間の変化点にそれを象徴するかたちでの配置が意図されている可能性があります。これらはゲーム系・クジ同様、商品をディスプレイとして利用できますが、ゲーム系やクジとのサービスとは異なって客の滞留が、それほど期待できないことや、仮設店そのものの規模も小さいことなどから、仮設店単体で客を引き付けられるよう特殊な場所に立地し、商品を目立たせることによって仮設店単体の売り上げ、さらには祭り全体の売り上げ増を期待していると考えられます。

３－２－３．小結

以上から一見「何となく」配置しているようにみえる仮設店の配置も、

①わた菓子、お面、光バッチ、あるいはベビーカステラなどといった仮設店は、空間の変化点に配置されている

②ゲーム系は変化点に配置されず、複数のゲーム系仮設店が連続して配置されている

など、いくつかの傾向を読み取ることができました。こうした傾向は、店側の売り上げ増加をねらった工夫（仕掛け）ということができると共に、こうしたみえない工夫（仕掛け）によって参拝者はワクワク感を増幅させられている可能性を指摘することができるでしょう。

《参考文献および註》

１）現在の香具師系露天商などのナワバリなど、社会構造に関する論考として、中村周作「縁日露天商の空間行動と生成過程」、『地理科学』vol.54、no.4、pp.280.296、1999、あるいは厚香苗「香具師系露店商集団にみられる「なわばり」の運用」、『国立歴史民俗博物館研究報告』、第123集、pp.375.395、2005.3などがあります。

２）材野博司『かいわい　日本の都市空間』1978年　鹿島出版会。

３）上原估貴、後藤春彦、佐久間康冨「都市空間における露店の意義の再考」、『日本都市計画学会学術研究論文集』、no36、pp313.318、2001年。同「露店主・商店主・歩行者の意識から見た都市における露店の意義の再考」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』、pp153.154、2001年。なおこれらの論考で取り扱う仮設店は、本稿第４章で採り上げるような仮設だけではなく、地面に敷物を敷き、直接商品を並べるタイプなども含んでいます。

４）こうした大阪市の仮設店配置に関する調査は以外に少ないのですが、管見の限り大阪市行政局『大阪市に於ける露店出店状況（中間報告）』、1949.11があります。

第４章　屋台が構成する参道空間と、人の歩行行動について

４－１．はじめに

J.J.フルーイン氏は『歩行者の空間』において[1)]

> 歩行ということは人間のすばらしい能力の１つであって、この力を通じて人類は進化の階段の長い旅路を文明へと昇りつめてきたのである。歩行者の能力は人類の最初の集落や都市の形を作ってきた。すなわち都市は歩行者の便利で快適な生活の　ために組み立てられてきたし、都市はこのような人間的な性格に基づいてデザインされてきた。機械的交通手段が発明されると、都市の構造は大きく変化しなければならなくなり、車のスケールを都市のデザインにもちこまねばならなくなった。人間と自動車の矛盾によって都市の空間はアンバランスな競合関係が生まれてきた。自動車の影響は都市の組み立てのあらゆる側面に浸みわたり、 人間環境を損っていく。自動車は歩行者を殺し、傷つけ、騒音やほこりや排気を起こし、社会・経済的に損害を与えていく。そして都市生活の最も重要な特質と生命をおびやかしているのである

と、歩行を人間の能力の１つであり、都市は歩行者の便利で快適な生活のために組み立てられていたこと、そして都市はこうした人間的な性格に基づいてデザインされてきたことについて述べます。また近代以降の機械的交通手段（特に自動車）による、都市空間の占有による歩行空間の軽視に対し、これを厳しく批判すると共に、都市における歩行者の復権

を提唱します。このように氏は、行きすぎた効率文明に対して批判を行い、人間の立場から都市を考える必要性とその理論的提案を行ってはいますが、同書第２章「歩行と人間工学」以降は、人間の歩行を平均交通量や歩行速度といった物理量に純化し、歩行を効率的に処理する手法を論じていることから、そこには氏の指摘ほど「人間らしさ」はみられません。

またB.S.プシュカレフ氏らも、現代都市における歩行者の復権を訴えるものの、空間（環境）の在り方と、人の歩行時における・行動特性に関する議論はありません[2)]。

さらに日本では、岡田光正氏らが、人間の歩行について分析をおこなっていますが[3)]、これについてもフルーイン氏やプシュカレフ氏ら同様、安全に人間が歩行できるための理論構築について研究されていますが、そこにいる歩行者は、やはりある大きさと歩行速度をもったモデルとして扱われ、結果として「にぎわい」といった歩行におけるアメニティー性についての言及はありません。

これに対して最近、こうした歩行と空間に対する興味深い論考が発表されました。矢田努氏らは、歩道を歩く人の歩行線形を分析することによって、街路に接する建物の形態（セットバック）や、床の段差が歩行者行動に及ぼす影響について定量的な分析を行っています。そこでは、セットバックしている建物の際を歩いている歩行者は、歩行者密度が高くなると歩道を越え、建物の敷地内に流入すること、また段差があると流入は起こりにくくなり２段以上になると歩行者の流入はわずかになること、など興味深い指摘を行っています。矢田氏らの研究から歩行者は､セットバックや段差など､非常にわずかな空間の変化を敏感に感知していることがわかります[4)]。

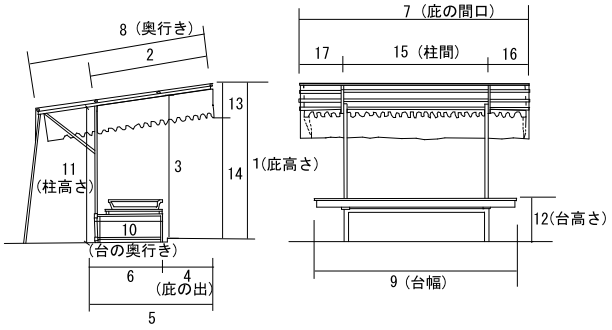
そこで本章では、夏祭り時に仮設店が形成する参道空間について、矢田氏の研究を参考にしつつ、主に参拝者の歩行行動と仮設店の庇下空間（仮設店の屋根が前方に張り出すかたちで形成される空間をさす）について考察を試みます。

４－２．仮設店の形状

まず、仮設店の形状について各部位別寸法関係を中心に確認します。なお今回の仮設店および参道の実測は、大枠をマンパワーで行い、詳細については、レーザースキャニングシステム（Leica製HDS-3000）を用いました。また調査に関しては同研究センターR.A.の宮元正博、千葉太朗の両氏が担当しました。（図－４－１～４は、こうして得られたデータを元に作成したものです）。

さて図－４－１に仮設店の主な部位寸法とその部位を示しました。仮設店の形状を決定する際に重要になってくると考えられるのは、庇高さ、庇の間口、仮設店の奥行き、台幅、台の奥行き、柱高さ、台高さなどがありますが、今回実測調査を行った屋台の各部位別寸法一覧を作成し、各屋台の部位寸法について考察した結果、以下のような傾向をよみとることができました（表－４－１）。

図－４－１　仮設店寸法関係



Ａ：庇高さは、7.5尺を中心に最大8.9尺、最小で6.7尺である。なかでも飲食系の火を使用する仮設店はその他の仮設店に較べ高くなっている。ゲーム系の仮設店はスーパーボールを除き7.5尺前後でおさまっている。

Ｂ：庇の間口は、10尺前後を中心に最大12尺、最小8.6尺である。

Ｃ：仮設店の奥行きは、８尺前後を中心に最大９尺、最小で７尺である。なかでも飲食系の火を使用する仮設店は全て９尺となっている。

Ｄ：台幅は、９尺を中心に最大10尺、最小6.3尺である。ゲーム系のなかでも水を扱う（商品をすくう）行為を伴う仮設店は９尺前後で揃っている。

Ｅ：台の奥行きは、３尺を中心に最大3.5尺、最小で2.6尺である。幅に関しては寸法に幅はあるが３尺前後でおさまっている。

Ｆ：柱高さは、６尺を中心に最大6.4尺、最小5.3尺である。ゲーム系の仮設店は６尺前後でおさまっている。

G：台高さは、２尺を中心に最大2.8尺、最小1.6尺である。飲食系の仮設店はゲームやクジ系などの仮設店に比べ全体的に高いといえる。この中でもゲームやクジの仮設店は客がしゃがんだり、子供を対象としているものは台が低いといえる。

このように、仮設店の形状を決定する各部位の寸法は、ある程度中心となる寸法があるものの、単に大規模・中規模・小規模といった基準はみられず、各々の仮設店が提供する商品やサービスによって、それぞれの部位ごとに基準寸法を選択するかたちで仮設店形状、・規模が決められているといえます。

４－３．参道空間と人の歩行について

次に仮設店が形成する参道空間について考察します。図－４－１からわかるように、仮設店の多くは屋根が前方に張り出しているという傾向をもちます。この張り出し、雨除けや日除けにしては、張り出しが大きすぎますし、参拝者と店との関係において何らかの意味をもっている可能性が考えられます。そこでここでは庇下空間を、参拝者の歩行との関係から考えます。

４－３－１．参拝者が参道を歩く軌跡

調査は、大阪府藤井寺市にある道明寺天満宮のご協力のもと、天神祭り時（2006年７月24日、16：00～17:30）に、仮設店によって形成される参道と、そこを歩く参拝者をビデオカメラで撮影、得られた映像を確認するため、モニター上に透明フィルムを貼り付け、１ｍグリッドを描いた上で、参拝者(130人）の歩行軌跡を拾い出し歩行軌跡図を作成、この図をもとに参道を歩く人と仮設店の庇下空間との関係について考察しました（歩行軌跡図は図－４－４）[5)]。

まず歩行線形の分析にあたり、庇下に入る人と入らない人に分類したところ、庇下に入る人が全体の６割（78人）（表－４－２、３)、庇下に入らない人が４割（52人）ありました。また表－４－２、３より、庇下に入る回数と接近回数のどちらにおいても、回数が多くなるほど人数は減少する傾向がみられます。

次に庇下に入る参拝者が、進行方向に向かって、どのあたりをどのように歩くのかについてみました(以下「進行経路」と呼びます)。進行経路には、①進行方向右側のみの庇下を歩く場合、②進行方向左側のみの庇下を歩く場合、③両側の庇下を歩く場合、以上が確認されました（これらの集計結果を庇下に入る回数別に分け、表－４－４に示しました)。表－４－４から参拝者の進行経路をみると、進方向片側のみの庇下を歩く傾向がみられます。両側の庇下を歩く人は１人だけでした。

４－３－２．参拝者の庇下への入り方

庇下に入る人の仮設店への近づき方とその回数を示したのが表－４－５です（表－４－５では、台に少し近づく場合を小、台に近づく距離が大きい場合を大としました。小は、庇先から台に向かって参道までの距離の１/３より小さい場合、大は１/３以上を基準としました)。

表－４－５のうち、１度目の庇下への入り方をみると、全体で73％の人が台に少ししか近づいていません。しかし、庇下に入る度に台に近づく人の割合が高くなっています。こうした傾向に対する解釈として、参拝者は屋台が並ぶ参道の歩き始めでは、仮設店空間に馴染んでいないため様子見をしているのに対し、少しずつ仮設店の雰囲気にも慣れた時期に、複数の仮設店に近づくと共に、近づき方も大きくなっていると解釈できます。

４－３－３．参拝者が庇下に入る仮設店の分析

次に参拝者が何軒目の仮設店庇下に入るか、また参拝者が何軒目の仮設店庇下に近づくか分析を行い、これらの結果を進行方向の仮設店別に表－４－６（進行方向右側）と表－４－７（進行左側）に示しました（各仮設店名に関しては図－４－１に示す通り)。

表－４－６、７をみると、参拝者が庇下に入る仮設店は、表－３－14の４軒目と５軒目を除き、１軒目から順に増減を繰り返しています。このことから、参拝者は庇下の中や外を一定のリズムで歩く傾向があるといえます（この理由についてはさしあたり不明です)。

４－４．小結

以上仮設店が形成する参道空間のうち、庇の張り出しについて、参拝者の歩行行動との関連から考察を試みました。なぜ、仮設店が庇を張り出している

表－４－１　仮設店実測寸法

		カードクジ	クレープ	クジ１	マスコットヨーヨー	冷やしパイン	クジ２	金　魚すくい	ベビーカステラ	スーパーボール	クジ３	イカ焼き	風船ぬいぐるみクジ	平均	最大	最小
1	庇高さ	7.6	8.0	7.4	7.5	7.1	7.3	7.6	8.9	6.7	7.5	8.0	8.2	7.6	8.9	6.7
2	庇長さ	5.6	6.3	5.4	5.3	5.0	5.4	5.0	6.4	5.1	4.7	6.3	6.2	5.6	6.4	4.7
3	台(外)から屋根高さ	6.7	7.1	6.8	6.8	6.6	6.8	7.1	7.9	6.4	7.3	7.1	7.3	7.0	7.9	6.4
4	庇の出	2.1	2.9	1.8	2.6	1.5	1.7	2.4	2.6	2.3	1.4	3.1	2.8	2.3	3.1	1.4
5	店主から庇下	5.9	6.8	5.9	6.1	5.3	6.2	5.8	6.8	6.2	5.6	7.2	6.8	6.2	7.2	5.3
6	店主から台（外）	3.8	3.8	4.1	3.5	3.8	4.3	3.5	4.1	3.8	4.1	4.0	4.0	3.9	4.3	3.5
7	庇の間口	10.4	10.7	10.0	9.7	8.6	10.2	11.2	10.1	10.1	10.0	10.6	12.0	10.3	12.0	8.6
8	奥行き	8.3	9.0	8.3	8.0	7.4	7.9	8.2	9.0	7.8	7.0	9.0	7.5	8.1	9.0	7.0
9	台幅	8.8	9.0	9.0	9.2	6.3	8.8	9.1	9.3	9.1	8.3	9.9	10.0	8.9	10.0	6.3
10	台の奥行き	3.0	3.0	3.3	2.7	2.9	3.5	2.6	3.3	3.0	3.3	2.9	3.3	3.1	3.5	2.6
11	柱高さ	5.6	6.4	6.1	6.0	5.9	5.9	6.3	6.3	6.0	5.3	5.7	6.4	6.0	6.4	5.3
12	台高さ	1.6	2.6	1.8	1.7	2.2	1.9	2.2	2.1	1.8	1.8	2.8	1.7	2.0	2.8	1.6
13	水切りの長さ	0.0	1.8	2.1	1.2	1.4	2.1	1.4	1.7	1.4	1.5	2.1	0.0	1.7	2.1	0.0
14	水切り高さ	0.0	6.1	5.3	6.3	5.7	5.2	6.2	7.3	5.4	6.0	5.9	0.0	5.9	7.3	0.0
15	柱間	8.8	8.8	7.2	6.4	5.3	7.6	6.3	8.7	6.2	8.1	8.9	8.2	7.5	8.9	5.3
16	水切りから柱(右)	0.8	1.0	1.4	1.7	1.7	1.3	2.4	0.7	2.0	0.9	0.9	1.9	1.4	2.4	0.7
17	水切りから柱(左)	0.8	1.0	1.4	1.7	1.7	1.3	2.4	0.7	2.0	0.9	0.9	1.9	1.4	2.4	0.7
18	間隔（右）	0.0	17.8	1.7	1.3	2.0	0.5	2.0	3.3	0.0	4.3	3.8	2.1	3.9	17.8	0
19	間隔（左）	17.8	1.7	1.3	2.0	0.5	2.0	3.3	0.0	4.3	3.8	2.1	2.8	3.8	17.8	0
20	間隔（前）	0.0	3.0	3.1	5.0	5.0	4.5	0.0	0.0	4.5	5.1	3.1	0.0	4.1	5.1	0

表－４－２　庇下に入る回数

回数	人数	%
1	37	47.4
2	17	21.8
3	17	21.8
4	7	9
合計	78	100

表－４－３　庇下に近づく回数

接近回数	人数	%
0	25	48.1
1	12	23.1
2	13	25
3	2	3.8
合計	52	100

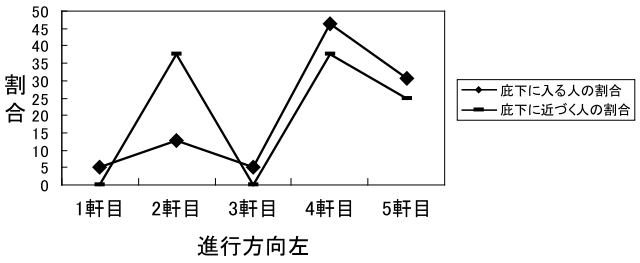
表－４－4　庇下に入る人の進行経路

回数	人数	進行経路			進行方向片側合計
		両側	進行方向（右）	進行方向（左）	
1	37		25	12	37
2	17	0	7	10	17
3	17	1	14	2	16
4	7	0	7	0	7
合計	78	1	28	12	40

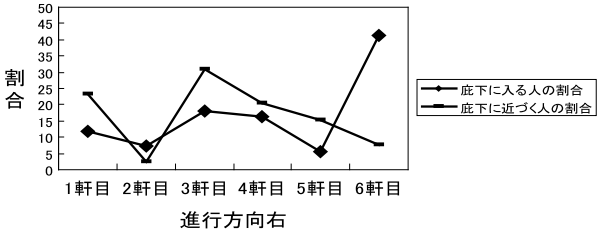
表－４－５　庇下への入り方（人）

庇下に入る回数	１度目		２度目		３度目		４度目	
	小	大	小	大	小	大	小	大
1	25	8						
	75.8%	24.2%						
2	13	4	10	7				
	76.5%	23.5%	58.8%	41.2%				
3	12	5	10	7	9	8		
	70.6%	29.4%	58.8%	41.2%	52.9%	47.1%		
4	3	4	2	5	1	6	3	4
	42.9%	57.1%	28.6%	71.4%	14.3%	85.7%	42.9%	57.1%
合計	73	27	22	19	10	14	3	4
割合	73%	27%	53.6%	46.3%	41.7%	58.3%	42.9%	57.1%

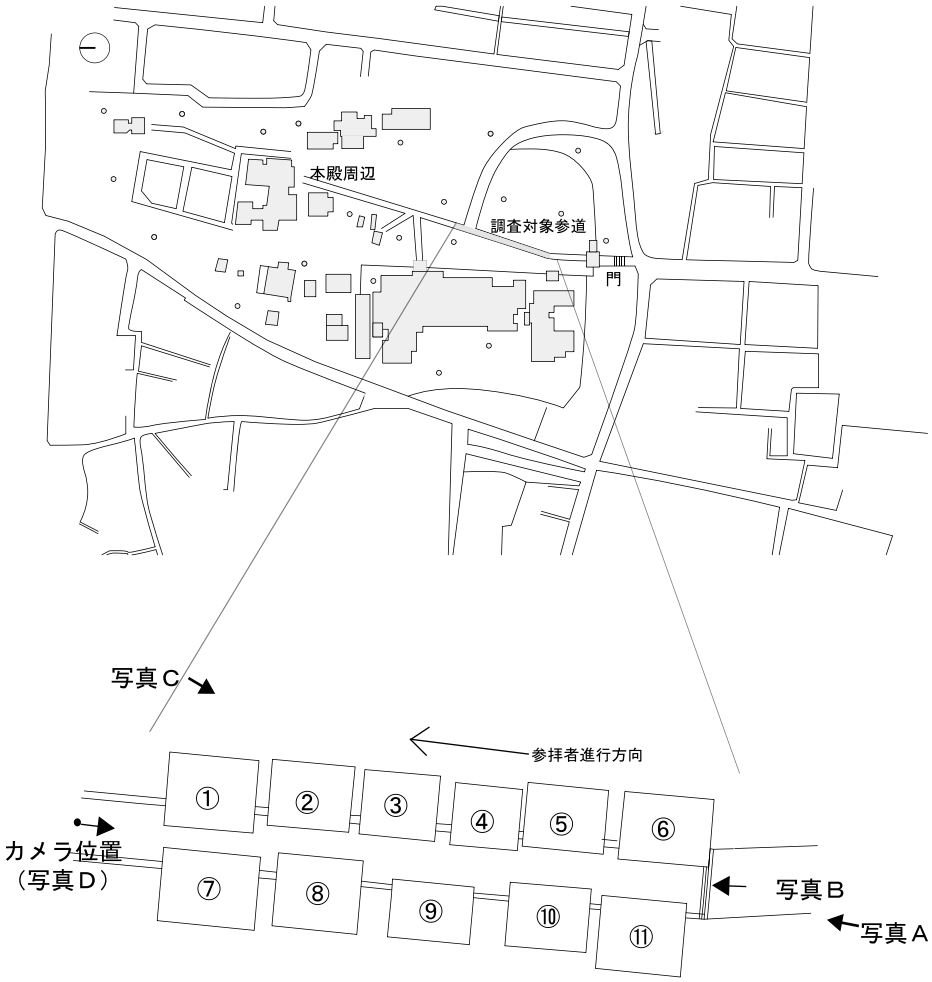
表－４－６　参拝者が庇下に入る、あるいは近づき方（進行方向左側）



表－４－７　参拝者が庇下に入る、あるいは近づき方（進行方向右側）



図－４－２　境内周辺図と仮設店配置状況



①クレープ

②くじ

③冷やしパイン

④マスコット
ヨーヨー

⑤くじ

⑥金魚すくい

⑦風船くじ

⑧いかやき

⑨くじ

⑩ボールすくい

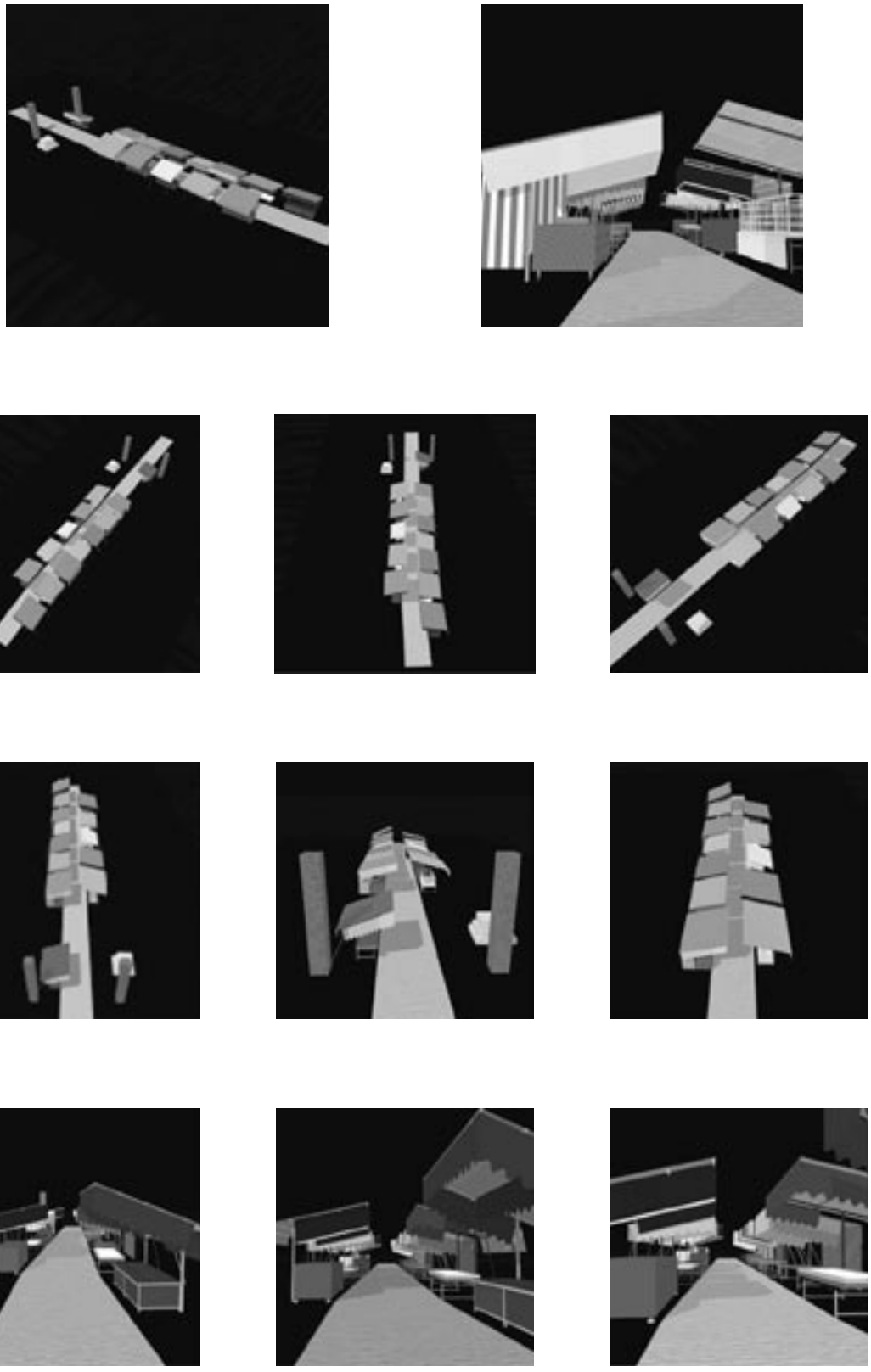
写真Ａ

写真Ｂ

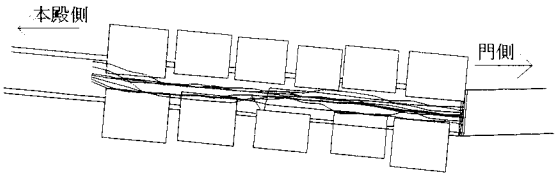
写真Ｃ

写真Ｄ

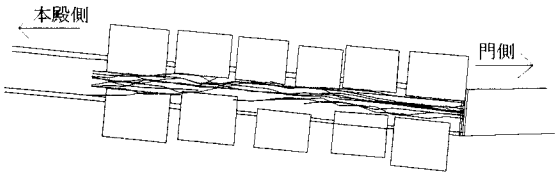
図－４－３　屋台CG



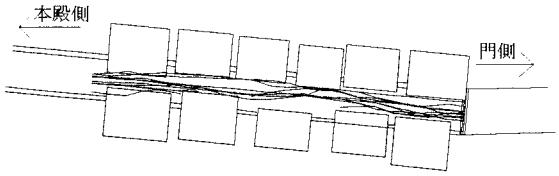
図－４－４　屋台CG



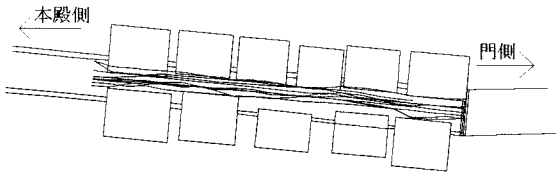
通行人 1～10



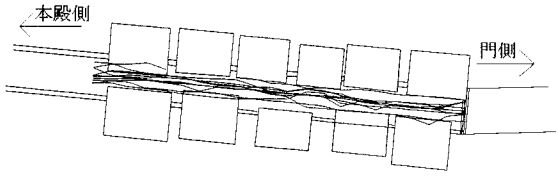
通行人 11～20



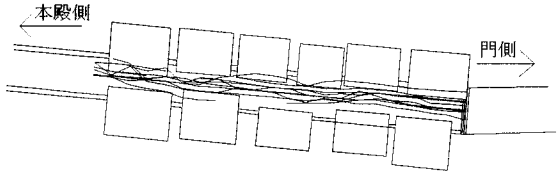
通行人 21～30



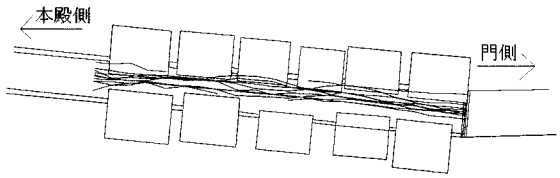
通行人 31～40



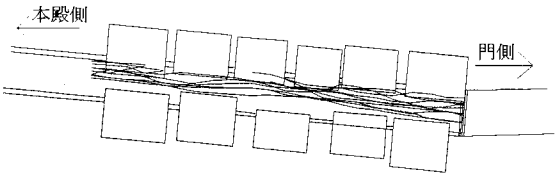
通行人 41～50



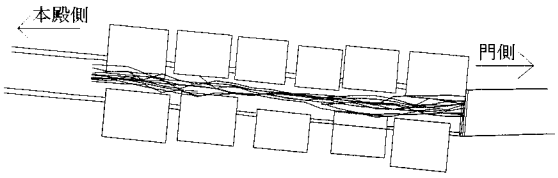
通行人 51～60



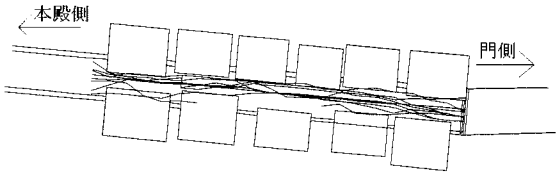
通行人 61～70



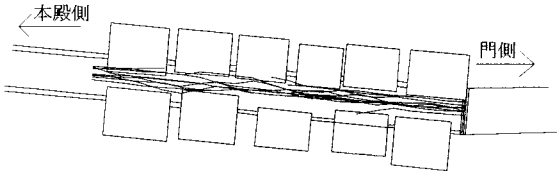
通行人 71～80



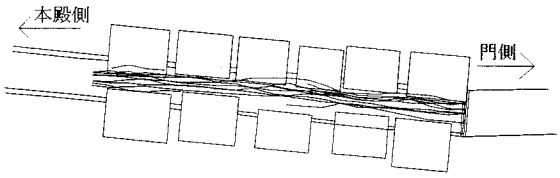
通行人 81～90



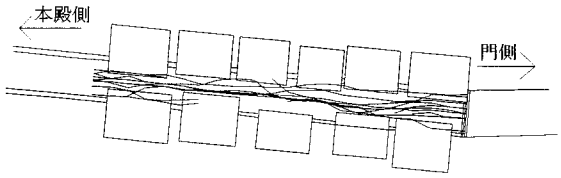
通行人 91～100



通行人 101～110



通行人 111～120



通行人 121～130

かについては、さしあたり不明ですが、少なくとも今回の調査で、参拝者の動線は庇下空間を境に変化していることについては指摘できたと思います。

ところで今回の調査で得られた傾向を参拝者からみたとき、あるいは店の人から見たとき、どのように考えることができるでしょうか。例えば参拝者の庇への入り方をみますと（表－４－５）、庇下へ入る人は、庇に入る回数が増えるにつれ、お店に近づく距離が大きくなっていますが、こうしたふるまいを「参拝者の意識の現れの一端」と捉えることはできないでしょうか。つまり

①参拝者は仮設店の商品やサービスに、とても興味があります。

②けれど、門を入ってお店が並ぶ参道を歩く直後では、まだその雰囲気に馴染めません。また参拝者は、店にも遠慮気味ですので、店にもなかなか近づけません（しかも参道は短いですので、なかには一回だけお店に近づいているだけの人も多いわけです）。

③ところが、そうした気分のなか参道を歩いていくうちに、少しずつ雰囲気に馴れていく。

④そして遠慮気味な気持ちよりも商品やサービスへの関心の方が強くなった結果、お店に近づく回数が増えるにしたがって、よりお店に近づいていく。

このように考えることができるのではないでしょうか。さらに参拝者のふるまい（だんだんお店に近づいていく行動）が庇下を境に行われていることを総合して考えると、庇下空間は、参拝者とその場との関係（例えば参拝者の環境との順応など）を考える上で、何らかの意味を持っていると考えることができるのではないでしょうか。

このように庇下空間を、雨除けや日除けといった単なる物理的・機能的な造形としてみるのではなく、人の意識との関係から考えると色々な見方ができると思われます。例えば先ほど同様、参拝者から考えると、少しでもモノを買うつもり（気持ち）でないと入りにくい、その一線として庇下空間をみることができないでしょうか。また店の人に注目したとき、店の前を通る人が参拝者か、それともお客なのかを識別する手がかりとして用いているとはいえないでしょうか。さらにこれと関連して、庇の出を①店の人が参拝者を客と認識する距離、または②参拝者自身が自らを客として自覚的にふるまう距離、こうした距離が予めあって、そうした距離を巧みに取り入れた結果としてみることも考えられるわけです。

現在のところ、これらはいずれも推測の域を出ていませんが、少なくとも、庇の張り出しは、単に雨除けとか日除けといった物理的理由から設けられただけではなく、参拝者の意識を考慮したものであると考えることはできると思われます。庇の出は、単にそれだけを見ていたのではダメで、参拝者の意識とその一端を表現している行動（ふるまい）を巻き込みながら見ていかないと、なかなか理解できないといえるでしょう。

以上参道空間における仮設店の庇の出について、歩行行動を手がかりに考えましたが、こうした見通し（仮説）の検証には、今後店の人のふるまいや、参拝者の歩行調査・分析を、より詳細に行う必要があるでしょう（なお道明寺天満宮の全面的なご協力のもと、2006年12月31日深夜～2007年１月３日まで初詣参拝者の歩行行動をより詳細に調査できました。2007年度は得られた画像データの解析を行い、仮設店参道空間と参拝者との関係について、より詳細に考察する予定です）。

《参考文献および註》

1）J.J.フルーイン、長島正充ほか訳、『歩行者の空間』、鹿島研究所出版会、1974年、John J. Fruin,（1971）:「PEDESTRIAN Planning and Design」）。

2）ボリス・S．プシュカレフ、ジュフリー・M.ジュパン、月尾嘉男訳、『歩行者のための都市空間』、1977年、鹿島出版会。Boris Pushkarev with Jeffrey M.Zupan（1975）「URBAN SPACE FOR PEDESTRIANS」:MIT Press,。。さらに日本では岡田光正氏らが、人間の歩行について分析をおこなっていますが、これについてもフルーインやプシュカレフら同様、安全に人間が歩行できるための理論構築について多くが述べられているものの、そこにいる歩行者は、やはりある大きさと歩行速度をもったモデル（機械人間）として扱われ、結果として「にぎわい」といった歩行におけるアメニティー性についての言及はありません。

3）岡田光正、吉田勝行、柏原士郎、辻正矩、『建築の都市の人間工学』、鹿島出版会、1977年。

4）矢田努、仙田満、國吉真哉、「街路空間のけるセットバックの形態と歩行線形に関する研究」、『第25回　日本都

市計画学会学術研究論文集』、pp637.642、1990。なお本論考は、この矢田氏らの論考からも多くを学んでいます。

5）なお今回は真上からの撮影ではなく、角度をもつ状態での撮影であったので、歩行軌跡は一人一人の歩行が確認できる時間帯（人が多くない状態）としました。結果とし対象者の多くは小学・中学生です。

第５章　第３・４章まとめと今後の課題

以上夏祭りにおける仮設店について考察を試みた結果、わずかですが、いくつかの傾向を読み取ることができたと思います。各章の考察によって導き出された具体的な現象については、ここでは繰り返さず、こうした現象をどのような視点から照射することができるのか、その可能性と見通しについて述べたいと思います。

さて、今回考察した結果認められた傾向を簡単にまとめれば「現在の大阪市内の夏祭りにおける、仮設店出店状況とその傾向」という話だけで終わることになるでしょう。そこからは、せいぜい同じ方法で他の地域を検証し、導き出された現象と現象を比較した地域比較か、前近代と現在の仮設店とを比較した時代比較で纏められて終わることになると思います。しかし今回の研究において重要なのは、こうした現象そのものをどういった視点から解釈するか、という点にあります。つまり仮設店出店者側の視点からみれば売り上げが下がるような試みは行わないわけで、今回抽出し得た傾向は、できるだけ売り上げを上げたいために長い時間をかけて培われてきた工夫であると考えられるわけです。さらに言い方を変えるとこうなるでしょうか。つまり仮設店出店者からみれば、出来る限り個々の仮設店、さらには全体の店の売り上げ増加に向け、様々な工夫を行うのは自然な行為である一方、視点を参拝者に向けたとき、仮設店における様々な工夫によって、参拝者は消費を促され、仮設店でモノやサービスの提供を受けようと感じさせられている可能性も考えられるわけです。仮設店における工夫は、多くの参拝者が仮設店の商品やサービスに対して購買意欲を誘うための工夫として注目できると共に、こうした人々の気分によって祭礼空間は「にぎわい」をもつと考えられます。この点からも今回考察した祭りにおける仮設店に見られた工夫は、祭りのにぎわいを考える上で重要な要素であると考えられるのではないでしょうか。

いずれにせよ、こうした課題についてさらに検証することが2007年度の課題です。

第６章　終わりに

以上今回なにわ・大阪文化遺産学研究センターから、研究論文ではない文章を書く機会を頂戴しましたので、研究論文ではいえないこと、けれど今考えていることについて思い切って書いてみることにしました。そもそも研究論文は「実証なき言説は言うべからず」です。また研究論文は、専門家同志が問題を共有しているわけですから、ややもすると「あなたは、なぜその研究をしているのですか？」、という普通の問いかけを無視した内容になってしまうことが多いと思います。そうしたこともあって、今回私が現在行っている研究で知りたいこと、言いたいことについて書いてみました。最後に本章では（これは蛇足になるかも知れませんが）、私がなぜ前近代を考えるのかについて書きたいと思います。

図－６－１は、今や日本の街のあちこちでみかける「オープンカフェ風」の風景です。こういう場所で御茶を楽しむ理由は、色々考えられると思いますが、「完全な内部空間ではない」といったあたりが、こうした場所で喫茶を楽しむ理由の１つだと思います。

現在私の研究室では、絵画資料を用いて近世商業空間について考察していますが、近世の商業空間のうち飲食を提供するお店では、街路に面した半外部、あるいは半内部のような空間に身を置き、喫茶を楽しむといった行為が多く認められます。つまり近世の街路に面したお店において、完全な内部空間

図－６－１　街の風景

で飲食が行われるというのは、むしろ少数派といえるわけです。ところが日本では近代以降、街路に面し飲食を提供する店の多くが、内部空間でサービスを提供するようになったと考えられます。つまり前近代にはあったサービス行為が、近代以降消え去っていった。そして、また最近、「オープンカフェ風」が「トレンド」になっているというわけですから、私などは、ちょっとした疑問を持ってしまいます。

前近代にあったコト・モノが、近代になって消え去ってしまった。それが再び日本中に広がっていく。確かに近世のお店とオープンカフェは、見た目も考え方も違いますから同列に扱えませんが、「通りに接するところに身を置き、通りを歩く人に目を向けながら喫茶する」という要素自体は、両者に共通するものであるといえます。このように考えたとき、近世を研究している私などからみると、現在の日本人のなかには、近代（明治）以降しか、現代とつながりのある「過去」を「過去」と見なしていない部分があるのではないか、とさえ思ってしまうわけです。これはもちろん対象によって異なります。例えば食事は「和食」が前近代～現代まで、非常に強く続いている文化だと思いますが、建築などは、随分と近代以降からの日本しか直接の過去としてみていないような傾向があるのではないかと思ってしまいます。

さらにヨーロッパのオープンカフェなんかは、前近代、近代、現代に関係なく、ずっとごく当たり前に、自然に行われ続けてきた行為です。別に近代になったから、これは良くないからやめようとか、そういったものではない。しかし日本では近代以降、近代化の過程で国民国家、工業化と共に、ヨーロッパ文化も一色単になって移入されましたから、近代化のためには当座、目の前にみえるすべての前近代を一回リセットする必要があった。そしてふと気がつくと、近代と西欧文化を上位、日本の前近代を下位に置くようなイメージが、先ほどの近代的思考と私が述べたような循環も手伝って、近代を通じて生成されたのではないでしょうか。だから「西欧」というと、「近代的」というと、なんだか新しくて良いものだと思い込んでしまう人が実に多い。

日本の前近代では当たり前に行っていたし、その良さ、美しさを前近代は知っていたと思われる事柄が、近代を経た現在、ゴソッと抜け落ちてしまっている部分があるのではないでしょうか。さらにそうしたゴソッと抜け落ちた部分を、今になって良いことに気づき、慌てて復活させるという、不思議な循環を行っているとさえ思えるわけです。

前近代から「古くさくて非科学的かつ原始的」というレッテルを拭い去って、前近代のものでも良いものは良いと素直に認める態度、つまり自身の文化を前近代から連綿と続くスパンで考えていくといった態度こそ、皮肉なことに、いまヨーロッパから学ぶべき態度・姿勢ではないでしょうか。そうしないと、いつまでたっても借り物文化になってしまいかねません。

日本が近代に足を踏み出してから、約140年になります。そろそろ、肩に力を入れずに前近代を考えられるのではないでしょうか。近代の達成に敬意を払いつつも、前近代―（近代）―現代と近代を（　）に入れた時間軸で、建築・都市・環境を考えていくことができる時期にあるのではないでしょうか。なぜなら日本の風景や社会、環境や生活を形成する上で決定的な役割を果たしたのは、紛れもなく前近代なわけですから。

最後にこうした見方・考え方で現代をみたとき、世の中の流行は馬鹿にできないことについて述べて本稿を終わりたいと思います。例えば「癒し」。「癒し」は、「近代」に疲れた人々の自然な欲求なのかも知れません。例えば温泉。近代的なビルが乱立する温泉街より、木造旅館の立ち並ぶ、ひっそりした隠れ家的な温泉に人気が集まっています。それからコンクリート打ちっ放しの住宅の減少。一時あれだけ「トレンド」だったコンクリート打ちっ放しですが、やはり生活する上では無理があったようです。

「癒し」の流行が、単に新しいもの好きを相手にメディアが造った人工物であったとしても、それが一時的なものではなく、長期間続くとすれば、それは流行というもので片づけられない、生活習慣あるいは文化の１つとして考えないといけないと思います。そしてこうした「癒し」というキーワードで注目されるモノ・コトの多くは、効率などといった近代思想では理解しにくい、むしろ前近代的なものだったりするわけです。とすれば、前近代を一番良く知っているのは、「癒し」といった流行を自然に受け入れた普通の人々なのかも知れません（2007年３月現在ですが…）。

現代と過去のある時代を完全に切り離した、普遍的な時代考証、つまり過去のある時代を純化した上でその時代を考える歴史学は大切です。しかし人が見たり、聞いたり、感じたりするレベル、身近な生活感を手がかりに世界と接するレベルで過去を解釈することも無駄ではないのではないでしょうか。本研究では、そういったことも含めて「にぎわい」を検証できればと考えています。

【謝辞】

本稿を作成するにあたっては、多くの方々にお世話になりました。第１章、第２章では大阪工業大学工学部空間デザイン学科　宮岸幸正教授に多くの御教授を頂きました。続く第３章では大阪工業大学工学部建築学科 学生諸氏（伊藤純氏、障子勇祐氏、辻中秀明氏、中村與子氏、西村利也氏、姫野健氏、福本浩一郎氏、布施武郎氏、別所岳人氏、宮宇地秀樹氏）に調査・データ解析などで協力を頂きました。また仮設店研究に関しては荒武賢一朗氏、橋本孝成氏に文献紹介などの助言を頂きました。さらに第４章の調査には、道明寺天満宮 宮司 南坊城充興氏、禰宜 南坊城光興氏をはじめ御家族の方々、同天満宮関係者の方々にご協力頂きました。またリンクス・アーク・アソシエーツの島田智和氏には調査方法など助言を頂きました。ここに深く御礼申し上げます。

本稿は2006年１月28日に行われた「なにわ・大阪文化遺産学研究センター 生活文化遺産研究プロジェクト　第二回研究報告会」での報告「寺社境内とその周辺における「にぎわい」空間について」を元に加筆・修正したものです。

調 査 報 告

ボストン美術館所蔵上方絵目録

北川　博子

ボストン美術館に大量の浮世絵が所蔵されていることは従来から知られていたが、その実態については、長らく未詳のままであった。近年、ボストン美術館が「開かれた美術館」になったことで、世界中から数多くの研究者が訪れ、徐々にその収蔵内容が明らかになりつつある。また、2006年に開催された「ボストン美術館所蔵肉筆浮世絵展　江戸の誘惑」展は、神戸市立博物館、名古屋ボストン美術館、江戸東京博物館を巡回し、各会場では長蛇の列が出る好評を博した。さらに、2007年３月４日に放映されたNHKスペシャル「歌麿・紫の謎」も、ボストン美術館所蔵の歌麿作品を一般向けにわかりやすく解説した番組であった。

このようにボストン美術館の浮世絵が、国内外の研究者はもちろんのこと、一般的にも注目を浴びている中、2006年８月に上方絵を調査する機会を得た。本調査では約2,400枚の上方絵を閲覧、それに基づき目録を作成することができたので、その概要を記しておきたい。

所蔵上方絵の概要

ボストン美術館の美術品は、ほとんどが個人収集家からの寄贈によるものである。今回調査できた上方絵のうち約95パーセントは、1911年、アメリカ人医師ウィリアム・スタージス・ビゲロー（William Sturgis Bigelow）によって美術館に寄贈されたものである。先述した「江戸の誘惑」展にはビゲローコレクションの肉筆が出品されていたことから、展覧会図録には、ボストン美術館日本美術課長アン・ニシムラ・モース氏の玉稿「ウィリアム・スタージス・ビゲロー　日本愛好家にして日本主義者」が収録されている。この論文により、ビゲローの日本美術収集の過程を知ることができるが、直接モース氏に、ビゲローの上方絵収集の方法をお尋ねしたところ、「全く不明」とのお返事を頂いた。今回の調査で、作品の保存状態が総じて最高の状態であること、また、同じ作品が不完全な揃い方で複数所蔵されている例がかなりあることなどから、一つ一つ吟味しながら購入したのではなく、同一もしくは少数の業者からまとめて購入した可能性が高いと考えている。このことは、モース氏の前掲論文中から窺えるビゲローの美術品収集の姿と矛盾しない。

さて、上方で本格的に浮世絵が版行されるのは、江戸より約１世紀遅れた1790年代からで、1880年代にはほぼ終焉を迎える。また、役者絵、風景画、美人画などが均衡を保って版行されていた江戸とは異なり、上方絵は役者絵の比率がかなり高い。幕末から明治にかけて江戸の広重に影響を受け、上方でも風景画が出されていくのであるが、美人画はわずかな作例が認められるものの、江戸のようには発達しなかった。その代わりに、大坂の島之内、北新地、新町や京都の祇園の妓女が仮装して練り歩く「ねりもの図」が出されていた。

ビゲローコレクションを、このような上方絵版行の情況に照らし合わせると、時代的にも作品の比率的にも、上方絵の歴史を網羅する作品が揃っており、その点でも大変バランスの取れたコレクションであると言えよう。年代的には1876年11月の役者絵を最後としているが、ビゲローは1889年まで日本に滞在している。ここからも、滞在中にこつこつと買い求めたとは考え難い。

このコレクションで特筆すべきことは、その保存状態の良さで、特に中判作品には目を見張るものが多い。上方では、天保の改革以後、それまで大判で版行されていた浮世絵が、半分の大きさの中判となった。中判には、豪華な絵の具を使用し、色板や模様の板を増やした「上摺」と、安価な絵の具で模様の板も少ない「並摺」の２種類が版行されていたが、ビゲローコレクションはほとんどが上摺である。しかも、絵の具の退色や剥落があまりなく、摺られた状態のまま今日に残っているのである。これらを見ていると、紙に絵の具が刷り込まれている、というより、紙の上に絵の具が乗っているような厚

みを感じる。さらに、花や着物の柄に空刷りを多用し、江戸では禁止されていた金銀がふんだんに使用されているので、平面的な絵というより立体的な工芸品を見ているような感覚さえ生じてくる。

さらに驚くべきことは、合羽摺の祇園ねりもの図が100枚近くも所蔵されていることである。合羽摺は錦絵に比べ安価な浮世絵であったため、その分大切に保存されず、現存率が極めて低い。特に文化10年代の作品の揃い方は驚異的ですらある。近年、Mr. Peter Ujlaki・中出明文氏の共編で「Gion nerimono prints revisited : The list」(『Andon』75) が出されたが、今後の祇園ねりもの図の研究に、ボストン美術館の作品は必要不可欠となるであろう。これらも、錦絵同様、退色の激しい合羽摺としては異例の保存状態の良さで、表面全体に施された雲英のように光る素材もかなり残っている。

ビゲローコレクションの次に多いのは、デンマン・ウォールドー・ロス (Denman Waldo Ross) から1906年、1911年、1917年に分けて寄贈された浮世絵で85枚を確認している。バランスの取れているビゲローコレクションとは異なり、その3分の1はねりもの図である。その他に注目すべきは、上方浮世絵の祖といわれる流光斎以前の絵師、岡本雪圭斎昌房の役者絵が、すばらしい状態で残っていることであろう。

先述のNHKスペシャル「歌麿・紫の謎」は、スポールディングコレクション中の歌麿作品を取り扱っていた。このコレクションは作品保護のため展示しないことを条件に寄贈されており、なかなか目にすることはできない。ホームページで見るだけでも、作品の質の高さを知ることができるが、わずかながら上方絵も含まれている。中でも流光斎作品1枚は、ビゲローコレクションの1枚とともに、ボストン美術館の初期上方浮世絵の名品を形作っている。

本目録の利用に当たって

ボストン美術館には、完成した浮世絵の目録やデータベースは現時点では存在しない。しかし、公式ホームページ (http://www.mfa.org/index.asp) の検索画面であるCollections Search Results (http://www.mfa.org/collections/search_art.asp) で、画像を閲覧することができる。画像に関しては順次掲載されているようだが、上方絵は江戸絵に比べ画像化が進んでいる。複数のボランティアによって絵師や年代、外題、役者等のデータが付されており、形式も内容も均一ではないが、更新の度合いは頻繁である。図録などを参照にしながらデータを付けているものについては、根拠となった書名も明記されているが、絵師と判型などの基本データしかない場合がかなり多く、間違いも見受けられる。しかし、昨夏の調査は4日間といった短期間であったので、事前もしくは同時進行形、さらには帰国後にも画像を確認できたことは、作業の効率化を図る上で大変ありがたいことであった。今後、本目録によって、ホームページのデータが調うことを期待している。

さて、本目録には浮世絵には必要不可欠な図版が欠落している。是非、所蔵番号をホームページ検索画面のAccession Numberに入力して、作品のすばらしさを確認して頂きたい。

前述したように、ボストン美術館の収蔵品は旧蔵者が大きな意味を持っている。本目録では、コレクション名がわかるように工夫した。

なお、本目録に収載した作品の中には、ホームページで確認できないものもあるが、これは順次公開されていくものと思われる。反対に、現地で現物を確認できなかったもので、最近、ホームページ上で画像を確認した作品もある。このことから、継続的に整理が進められていることがわかる。従って、今後もこの目録にない作品が出てくるものと思われので、未掲載の上方絵を確認された方は、ご一報賜れば幸いである。

本目録によって、上方絵の研究がさらに進むことを願ってやまない。

【付記】

ボストン美術館への調査は、平成18年度科学研究費補助金による基盤研究 (C)「上方役者絵の国内外所蔵調査とデータベース化の基礎的研究」の一環であり、本目録はその報告である。

閲覧に関しては、ボストン美術館アジア・オセアニア・アフリカ美術部 日本美術課長Anne Nishimura Morse氏、同浮世絵版画室室長Sarah Thompson氏、リサーチアシスタントのAbraham Schroeder氏のお世話になった。心より感謝する次第である。

凡例

・現時点で確認できたボストン美術館所蔵上方絵 2,395 枚を【役者絵】1,904 枚【見世物】3 枚【ねりもの】177 枚【美人画】13 枚【風景画】267 枚【歴史物】12 枚【その他】19 枚に分類し、各々年代順に配列した。

・各作品は、版行年月、題名、**絵師**、判型・摺・枚数、版元、画中文字（続き物の場合は一枚ずつ／で区切った）、所蔵番号（複数所蔵の場合は一作品ごとに／で区切った）の順に記した。

・所蔵番号のみ記してあるものは、William Sturgis Bigelow Collection、(R)は Denman Waldo Ross Collection、(S)は William S. and John T. Spaulding Collection、(P.S)は Gift of Porter Sargent、(L)は Gift of L. Aaron Lebowich、(T.S.R)は Gift of Thorvald S. Ross、(O)は Gift of David T. Owsley、(B)は Gift of Louis W. Black、(W)は By exchange with the Worcester Art Museum、(A)は Anonymouse gift (F)は Special Chinese and Japanese Fund 等の Fund である。

・【役者絵】は番付等の上演資料に基づき考証し、作品は上演演目（上演年月、劇場、外題〈外題読み〉）ごとにまとめて記してある。また、配役等で、画中になく考証によって補ったものについては、[ ]に括り記した。【ねりもの】はねりもの番付に基づき考証し、番付未見のものに関しては、Mr. Peter Ujlaki・中出明文氏の「Gion nerimono prints revisited:The list」（『Andon』75）を参照にしながら、画風やその他の資料によって年代を記した。その他の浮世絵に関しては、描かれている内容、絵師の活躍時期、画風、版元等から年代を確定している。

・歌舞伎の外題等に関しては外字が多いが、データ処理上、全て☆で記してある。正確な文字が必要な場合は、各所蔵機関の番付目録等を参照にされたい。

【役者絵】

安永 5 年(1776)12 月　中
伊賀越乗掛合羽〈いがごえのりかけがっぱ〉
昌房　細判合羽 1　大吉　「唐木政右衛門　中山文七」
(R)06.1229

寛政 4 年(1792)閏 2 月　中
花洛清水夜開帳〈みやこきよみずよがいちょう〉
流光斎　細判錦絵 1　大左　［大坂や長右衛門　叶雛助］
(S)21.6298

寛政 5 年(1793)1 月　角
勝武革奴道成礎〈しょうぶかわやっこどうじょうじ〉
流光斎　細判錦絵 1　塩林　［ひがきのお大］　叶雛助
11.19263

寛政 10 年(1798)頃
松好斎　細判錦絵 1　［女形の役者］　11.26559
松好斎　細判錦絵 1　［立役の役者］　11.26560

文化 1 年(1804)8 月　中
相生獅子余波英〈あいおいじしなごりのはなぶさ〉
無款　細判合羽 1　墨吉　［石橋　瀬川路考］　(R)11.2066

文化 10 年(1813)1 月　角
姉妹達大礎〈あねいもうとだてのおおきど〉
北洲　大判錦絵 1　塩長　「松江落人　嵐吉三郎」11.35362

文化 10 年(1813)1 月　中
ひらかな盛衰記〈ひらかなせいすいき〉
北洲　大判錦絵 1　塩長　「船頭松右衛門　中村歌右衛門」
11.35360

文化 10 年(1813)3 月　中
復讐二島英雄記〈かたきうちにとうえいゆうき〉
北洲　大判錦絵 2　塩長　「佐々木巌流　片岡仁左ヱ門」／「宮本無三四　中村歌右ヱ門」「百性七助　中山新九郎」
11.35424　11.35425／11.38798

文化 10 年(1813)11 月　京南
彫刻左小刀〈ちょうこくひだりこがたな〉
清谷　細判合羽 1　本吉「太夫　叶珉子」　(F)Res.33.200

文化 11 月(1814)1 月　角
けいせい筑紫☆〈けいせいつくしのつまごと〉
秀栄　細判合羽 1　綿喜　「沖つ仁三　嵐吉三郎」11.26558

文化 11 月(1814)8 月　角
比良嶽雪見陣立〈ひらがだけゆきみのじんだて〉
春郷　大判錦絵 1　塩長　「小田春孝　嵐吉三郎」11.35108

文化 12 年(1815)9 月　中
敵討浦朝霧〈かたきうちうらのあさぎり〉
芦国　大判錦絵 2　［小割伝内　嵐吉三郎］　11.26641

文化 13 年(1816)2 月　中
園雪恋組題〈そののゆきこいのくみだい〉
正好　大判錦絵 1　塩長　「妻平　嵐吉三郎」　11.35237
北敬　大判錦絵 1　塩長　「秋月大膳　嵐吉三郎」11.35229
国広　大判錦絵 1　綿喜　「秋月　嵐吉三郎」　11.36019

文化 13 年(1816)3 月　角
三月開嬉心船橋〈やよいにひらくあんどのふなはし〉
北洲　大判錦絵 2　塩長　「三浦荒次郎　市川鰕十郎」／「佐野源左衛門　中村歌右衛門」　11.35430　1.35431

文化 13 年(1816)8 月　中
勝鬨☆源氏〈かちどきみばえげんじ〉
北洲　大判錦絵 2　塩長　「牛若丸　［市川市紅］」／「熊坂長範　嵐吉三郎」　11.35439　11.35440
北洲　大判錦絵 1　［牛若丸　市川市紅、熊坂長範　嵐吉三郎］　11.35333

芦国　大判錦絵1　［熊坂長範　嵐吉三郎、牛若丸　市川市紅］　11.18138

文化13年(1816)8月　中
油商人廓話〈あぶらうりくるわものがたり〉
北洲　大判錦絵2　塩長　「あづま　叶みんし」／「油屋与兵衛　あらし吉三郎」　11.35436　11.35437

文化13年(1816)閏8月　角
紅紫大坂潤〈べにむらさきあいでそめあげ〉
重麿　大判錦絵2　本清・草紙屋・な　「唐犬重兵衛　市川鰕十郎」／「平井権八　中村歌右衛門」　11.36198a-b

文化13年(1816)閏8月　角
織合襤褸錦〈おりあわせつづれのにしき〉
芦ゆき　大判錦絵3　塩長・未詳　「次郎左衛門　中村歌右衛門」／「加村宇太右衛門　市川鰕十郎」／「高市武右衛門　片岡仁左衛門」　11.35118　11.35119　11.35120

文化13年(1816)9月　角
伽羅先代萩〈めいぼくせんだいはぎ〉
芦郷　大判錦絵2　塩長・未詳　「才原勘解由　中村歌右衛門」／「鉄之助　市川鰕十郎」　11.36150　11.35033
芦ゆき　大判錦絵2　塩長　「頼兼　中村歌右エ門」／「高尾　藤川花友」　11.35109　11.35110
北洲　大判錦絵4　草紙屋・本清・未詳　「鉄之助　市川鰕十郎」／「あさか　中山よしを」／「才原かげゆ　中村歌右衛門」／「秋塚たてわき　片岡仁左衛門」　11.35432　11.35433　11.35434　11.35435

文化13年(1816)9月　角
恋女房染分手綱〈こいにょうぼうそめわけたづな〉
北洲　大判錦絵2　草紙屋・本清・未詳　「馬かた八蔵　市川鰕十郎」／「ひぬか八蔵　片岡仁左衛門」　11.35428　11.35429

文化13年(1816)9月　中
濃紅葉小倉色紙〈こいもみじおぐらしきし〉
国広・芦広　大判錦絵2　草紙屋・本清　「笹原隼人　嵐璃寛」／「千くさひめ　かなふみんし」　11.36016　11.35034
芦ゆき　大判錦絵2　塩長　「笹原左門之助　尾上新七」／「佐々木隼人　嵐吉三郎」　11.35121　11.35122

文化14年(1817)1月　角
けいせい稚児淵〈けいせいちごがふち〉
芦尚　大判錦絵2　塩長　「さつきひめ　中村松江」／「石川五右衛門　中村歌右エ門」　11.35038　11.35039
芦ゆき　大判錦絵3　塩長　「真柴久つぐ　市川鰕十郎」／「石田のつぼね　中村歌右エ門」／「淀町御前　中山よしほ」　11.35111　11.35112　11.35113
北洲　大判錦絵2　塩長　「斎藤内蔵之助　市川鰕十郎」／「小早川高景　嵐三五郎」「仙石権平　大谷友右衛門」　11.35426　11.35427

文化14年(1817)1月　中
児淵花白波〈ちごがふちはなのしらなみ〉
北洲　大判錦絵1　草紙屋・本清　「捨若丸　嵐吉三郎」　11.35361
北敬・北洲　大判錦絵3　本清　「十右衛門女房おむめ　叶みん子」／「間島大助　嵐冠十郎」／「高瀬屋重右衛門　嵐吉三郎」　11.35416　11.35417　11.35418
芦広　大判錦絵2　塩長　「すて若丸　あらし吉三郎」／「おかじ　叶珉子」　11.35035　11.35036

文化14(1817)3月　角
敵討御堂前〈かたきうちみどうのまえ〉
芦広・芦尚　大判錦絵2　塩長　「島川太兵衛　市川鰕十郎」「磯貝藤助　小川吉太郎」／「舟越九八　中村歌右エ門」「磯貝兵助　中山文七」　11.35037　11.35040
芦ゆき　大判錦絵2　本清　「ふな越九八　中村歌右エ門」／「しま川太兵へ　市川鰕十郎」　11.35114　11.35115

文化14(1817)3月　角
莫怪踊化姿〈またかいなじゅうにばけ〉
国広　大判錦絵1　草紙屋・☆水　［関帝　中村歌右衛門］　11.36009

文化15年(1818)1月頃　見立
けいせい品評林〈けいせいしなさだめ〉
北洲　大判錦絵1　［御子さかき　中山よしを］　11.35355

文化15年(1818)1月　中
加々見山廓写本〈かがみやまくるわのききがき〉
芦ゆき　大判錦絵2　塩長　「多加ノ太正　鳥居又助　嵐吉三郎」／「望月源蔵　市川鰕十郎」　11.35124　1.35123
芦ゆき　大判錦絵3　塩長　「土佐庄司　市川鰕十郎」／「鳥井又助　嵐吉三郎」／「おたい　嵐小六」「谷沢求馬　小川吉太郎」　11.35125　11.35126　11.35127

文政1年(1818)8月　角
隅田春妓女容性〈すだのはるげいこかたぎ〉
芦ゆき　大判錦絵2　塩長　「てつち長吉　市川門之助」／「梅ノ由兵衛　市川鰕十郎」　11.35117　11.35116

文政2年(1819)3月頃　見立　役者花見の図
北洲　大判錦絵4　塩長　［中村松江、嵐三五郎、中村歌右衛門］／［藤川友吉、片岡仁左衛門］／［浅尾工左衛門、市川鰕十郎、市川門之助］／［嵐吉三郎、嵐小六］　11.35468　11.35469　11.35470　11.35471

文政2年(1819)　角
源平布引滝〈げいぺいぬのびきのたき〉
松楽　大判錦絵1　「実盛　市川団蔵」　11.35226

文政2年(1819)9月　中
遠江瀉恋賊〈とおとうみがたこいのしらなみ〉
北洲・梅莚　大判錦絵 3　本清　「銅かねや幸兵衛　浅尾工左衛門」／「日本駄右衛門　嵐吉三郎」／「牙のおさいあらし小六」
11.35419　11.35420　11.35421／11.35107／11.38809

文政2年(1819)11月　角　楽屋入の図
よし国　大判錦絵1　利新・未詳・有忠　「中村歌右エ門」
11.22632

文政2月(1819)11月　角
双蝶々曲輪日記〈ふたつちょうちょうくるわにっき〉
北洋　大判錦絵 2　利新　「長吉　中村歌右衛門」／「長五良　市川鰕十郎」　11.35307　11.35308

文政3年(1820)1月　角
けいせい花大樹〈けいせいはなのこのした〉
北洲　大判錦絵 3　本清　「山口九郎次郎　市川鰕十郎」／「小田春永　片岡仁左衛門」「森ノ蘭丸　市川市蔵」／「此下東吉　中村歌右衛門」
11.35409　11.35410　11.35411／11.35412a-c
北洲　大判錦絵2　本清　「持国丸　片岡仁左衛門」／「重瞳丸　市川鰕十郎」　11.35445　11.35446
国広　大判錦絵2　草紙屋・天喜　「重暁丸　市川鰕十郎」／「おはや　中村松江」　11.36018　11.36017

文政3年(1820)3月　角
義経千本桜〈よしつねせんぼんざくら〉
北洲　大判錦絵1　本清　「主馬ノ小金吾　市川市蔵」「いがみノ権太　中村歌右衛門」　11.35356
北洲　大判錦絵 2　本清　「しつかのまへ　中村松江」／「狐忠信　中村歌右衛門」「速見藤太　浅尾国蔵」
11.35441　11.35442

文政3年(1820)7月　角
菊月入船噺〈きくづきいりふねものがたり〉
北洲　大判錦絵 2　本清　「狩野四郎治郎　尾上菊五郎」／「茨木門兵衛　嵐団八」「けいせい遠山　嵐小六」
11.35443　11.35444

文政3年(1820)9月　北堀江・角
時再興在原系図〈ときにさいこうありわらけいず〉・
八陣守護城〈はちじんしゅごのほんじょう〉
北洲　大判錦絵1　「惟喬親王　嵐吉三郎」「加藤正清　中村歌右衛門」　11.35378

文政3年(1820)9月　角
八陣守護城〈はちじんしゅごのほんじょう〉
よし国　大判錦絵1　利新　「加藤正清　中村歌右衛門」
11.22634
北洲　大判錦絵1　「加藤正清　中村歌右衛門」
11.26603／11.38800

文政3年(1820)9月　中
岩井寿千世松本〈いわいことぶくちよのまつもと〉
春蝶・春敬　大判錦絵2　本清　「光秀　松本幸四郎」／「さつき　岩井半四郎」　11.36299a-b／11.35227　11.35228

文政3年(1820)9月　北堀江
時再興在原系図〈ときにさいこうありわらけいず〉
北洲　大判錦絵1　本清　「いかるが藤太　嵐吉三郎」
11.22749／11.35383／11.38801
北洲　大判錦絵 1　本清　「飛脚仲二　嵐吉三郎」「百松松島屋島松」「くら吉　浅尾朝次郎」　11.35384／11.22662
長秀　大判錦絵 1　草紙屋・綿喜　「飛脚忠治実は惟高親王　嵐吉三郎」　11.26595

文政4年(1821)頃　玩具絵　嵐橘三郎鬘合
北洲　大判錦絵 5　利新　「捨若丸」「赤根半七」「柳ヶ瀬左内」他／「飛脚仲二」「筑紫権六」「岩川」他／「日本駄右衛門」「玉矢真平」「行ひら」他／「弁慶」「佐々木丹右衛門」「中津仁三」他／「熊かへ」「熊坂長範」「いかるが藤太」他
11.35388　11.35389　11.35390　11.35385　11.35391
／11.35393　11.35392　11.35386　11.35387

文政4年(1821)1月頃
近江源氏先陣館〈おうみげんじせんじんやかた〉
重春　大判錦絵1　「高綱　盛綱　三浦之助　［嵐橘三郎］」
11.26639
北洲　大判錦絵1　本清　「佐々木高綱　嵐橘三郎」
11.35380／11.35381

文政4年(1821)1月　角　楽屋入の図
よし国　大判錦絵 2　有忠・利新・未詳　「登り坂東三津五郎」／「登り浅尾奥山　中村歌六」　11.36240　11.36236

文政4年(1821)1月　角
けいせい双鏡山〈けいせいかがみやま〉
北洲　大判錦絵1　綿喜　「局岩ふじ　坂東三津五郎」「中老尾上　中村松江」　11.35375
北洲　大判錦絵 2　本清　「谷沢内記　坂東三津五郎」／「はいかい師千代　あらし小六」
11.35449　11.35450／11.36293a-b
長秀　大判錦絵2　綿喜　「岩ふじ　坂東三津五郎」／「おはつ　中村歌右衛門」　11.26620　11.26621

文政4年(1821)1月　中
けいせい廓島台〈けいせいさとのしまだい〉
国広　大判錦絵 2　天喜　「塩の長蔵　嵐橘三郎」／「その花　岩井半四郎」　11.36032a-b
芝国　大判錦絵2　利新　「三好長慶　松本幸四郎」／「塩長蔵　嵐橘三郎」　11.26614　11.26615
よし国　大判錦絵 1　未詳・有忠・利新　「娘その花　岩

井半四郎」　11.22633

文政４年(1821)３月　角
妹背山婦女庭訓〈いもせやまおんなていきん〉
北洲　大判錦絵 2　「大判事清澄　坂東三津五郎」「久我之助　嵐小六」／「娘ひな鳥　中村松江」「後室狭高　中村歌右衛門」　11.35377　11.35376
北洲　大判錦絵 1　「金輪五郎今国　中村歌右衛門」「おみわ　嵐小六」　11.35374
よし国　大判錦絵１　有忠　「入鹿大臣　坂東三津五郎」　11.36273

文政４年(1821)３月　角
梶原平三紅梅☆〈かじわらへいぞうこうばいたづな〉
よし国　大判錦絵 1　有忠・利新・未詳　「梶原平三景時　中村歌右ヱ門」　11.36261
北洲　大判錦絵 2　本清　「梶原平三　中村歌右衛門」／「青貝師六郎太夫　浅尾工左衛門」「娘小つゑ　中村松江」　11.35447　11.35448

文政４年(1821)３月　角
染模様難波土産〈そめもようなにわみやげ〉
国広　大判錦絵 4　天喜・草紙屋　「さくら木太夫　坂東三津五郎」／「源太　うさぎ　阪東三津五郎」／「しら拍子かつみ　五ぶのみほぞ右衛門　坂東三津五郎」／「へそむらおさん　うかれ奴　坂東三津五郎」
11.36038　11.36037　11.36036　11.36035／11.36295a-d

文政４年(1821)３月　中
隅田川花御所染〈すみだがわはなのごしょぞめ〉
長秀　大判錦絵１　綿喜　「おはつ　岩井半四郎」11.26596

文政４年(1821)３月頃　若太夫
契情廓源氏〈けいせいくるわげんじ〉
よし国　大判錦絵１　利新　「金魚や金八　百村百太郎」　11.36270

文政４年(1821)６月頃　見立　百奇園庭前納涼之図
よし国　大判錦絵 1　豊・利　「中村歌右ヱ門」「倅中村駒之助」　11.36267

文政４年(1821)６月頃　鶴たちばな
よし国　大判錦絵 1　有忠・利新　「嵐橘三郎」「中村歌右衛門」　11.36259／11.38828

文政４年(1821)７月　中
秋花先代名松本〈はぎはせんだいなはまつもと〉
北洲　大判錦絵２　利新　「荒獅子男之助　中村歌右衛門」／「仁木だん正　松本幸四郎」　11.35457　11.35458／11.36292a-b

文政４年(1821)７月　中
京紅藍杜若〈きょうこうかそめてむらさき〉
国広　大判錦絵 1　天喜　「下人弥吉　市川市蔵」「嫁おその　中村松江」　11.36023
よし国　大判錦絵 2　有忠・利新・未詳　「あかねや半七　中村歌右衛門」／「さんかつ　岩井半四郎」　11.36217a-b

文政４年(1821)７月　中
赤松円心緑陣幕〈あかまつえんしんみどりのじんまく〉
よし国　大判錦絵 1　有忠・利新　「赤松円心　中村歌右衛門」「熊若丸　中村歌雅弥」　11.36257

文政４年(1821)７月頃　大西
道中亀山噺〈どうちゅうかめやまばなし〉
彦国　大判錦絵１　綿喜　「石井源蔵　中村鶴助」11.35100

文政４年(1821)８月　北新地
頼政鵺物語〈よりまさぬえものがたり〉
きし国　大判錦絵１　利　「兵庫頭より政　嵐橘三郎」　11.36054
北洲　大判錦絵１　「兵庫頭頼政　嵐橘三郎」　11.35332／11.38808

文政４年(1821)９月　角
太平記菊水之巻〈たいへいききくすいのまき〉
重春　大判錦絵 1　天喜・草　「まりかぜ秋夜　中村歌右衛門」　11.26561

文政４年(1821)９月　角
復讐二島英勇記〈かたきうちにとうえいゆうき〉
北洲　大判錦絵 2　利新　「笠原老翁　片岡仁左衛門」／「宮本無三四　中村歌右衛門」　11.35453　11.35454

文政４年(1821)９月　角
山紅葉錦の五百機〈やまもみじにしきのいおはた〉
芝国　大判錦絵 1　有忠・利新　「山うは　怪童丸　中村歌右ヱ門」　11.36195

文政４年(1821)９月　中
其昔恋緋縮緬〈そのむかしこいのひがのこ〉
北洲　大判錦絵 2　利新／利新・綿喜　「小性吉三郎　あらし小六」／「八百屋お七　岩井半四郎」
11.26635　11.26636／(R)17.3210.19　17.3210.21(異版)

文政４年(1821)９月　中
俠詞花川戸〈たてひきことばのはなかわど〉
北洲　大判錦絵４　本清　「寺西閑心　坂東重太郎」／「小むらさき　あらし小六」／「白井権八　岩井半四郎」／「幡随長兵衛　松本幸四郎」　11.26855　11.26856　11.26857　11.26858
よし国　大判錦絵１　利「平井権八　岩井半四郎」11.36266

文政４年(1821)９～11月頃　大西
嫁入信田妻〈よめいりしのだづま〉・

相馬太郎☆文談〈そうまたろうみばえぶんだん〉
よし国　大判錦絵1　有忠・利新　「くずの葉　中村鶴助」「相馬太郎」　11.36264

文政4年(1821)9～11月頃　大西
嫁入信田妻〈よめいりしのだづま〉
彦国　大判錦絵1　本清「くずの葉　中村鶴助」11.35102

文政4年(1821)9～11月頃　大西
拳褌廓大通〈けんまわしさとのだいつう〉
よし国　大判錦絵1　有忠・利新　「今木伝七　尾上芙雀」　11.36263

文政4年(1821)9月頃　大当り新狂言つくし
国広　大判錦絵 1　天喜　「左内　橘三郎」「伝七　菊五郎」「おやす　松江」「おくめ　小六」「たく兵へ　歌右衛門」「重太郎　三津五良」「べん慶　鰕十郎」「権八　半四郎」「長兵へ　幸四郎」　11.36021

文政4年(1821)9月27日　死絵
よし国　大判錦絵1　利新　［嵐橘三郎］　11.36258／11.36271

文政4年(1821)9月27日　死絵
頼政鵺物語〈よりまさぬえものがたり〉
彦国　大判錦絵 1　本清　「より政御名残狂言」「俗名嵐橘三郎」　11.35097

文政4年(1821)9月27日　死絵　道行死出の旅立
北洲　大判錦絵1　利新　「嵐橘三郎　沢村田之助」　11.35343

文政4年(1821)9月27日　死絵
木下蔭狭間合戦〈このしたかげはざまかっせん〉
北洲　大判錦絵1「真柴久吉　故嵐吉三郎」　11.35382

文政4年(1821)9月27日　死絵
油商人廓話〈あぶらうりくるわものがたり〉
北洲　大判錦絵 1　利新　「あぶらやよひふうへ　あらし璃寛」　11.35438

文政4年(1821)11月　中
三十石☆始〈さんじっこくよふねのはじまり〉
彦国　大判錦絵1　本清「仲居おふね　嵐小六」11.35098

文政4年(1821)12月　中
鬼一法眼三略巻〈きいちほうげんさんりゃくのまき〉
よし国　大判錦絵1 有忠・利新「鬼若丸　中村歌右衛門」　11.36262
北洲　大判錦絵 3　本清　「牛若丸　あらし小六」／「鬼一法眼　中村歌右衛門」／「智恵内　市川鰕十郎」　11.35400　11.35401　11.35402

文政5年(1822)頃
倭仮名在原系図〈やまとがなありわらけいず〉
北洲　大判錦絵1　本清・山市　［奴蘭平　市川鰕十郎］　11.35349

文政5年(1822)頃
紅紫大坂潤〈べにむらさきあいでそめあげ〉
北洲　大判錦絵1　［唐犬重兵衛　市川鰕十郎］　11.35379／11.38799

文政5年(1822)頃　千代の寿
千歌国　大判錦絵1　泉理・本清　「中むら歌六」11.26601

文政5年(1822)1月頃　年頭挨拶の図
玉国　大判錦絵1　［市川鰕十郎］　11.35249

文政5年(1822)1月　角
菅原伝授手習鑑〈すがわらでんじゅてならいかがみ〉
よし国　大判錦絵 1　利新　「覚じゆ」「かん相丞　坂東三津五郎」　11.36268／11.38829

文政5年(1822)1月　角
春色道成寺〈ちょうはながたかねがみさき〉
彦国　大判錦絵1　利新　「白びやうし　坂東三津五郎」　11.35106

文政5年(1822)1月　中
けいせい染分総〈けいせいそめわけたづな〉
北洲　大判錦絵2　本清　「千切屋お娘　嵐富三郎」／「山形屋儀兵衛　市川鰕十郎」　11.35422　11.35423
北洲・国広　大判錦絵 2　天喜　「けいせい花の戸　中村三光」／「斎藤内蔵之介　市川鰕十郎」　11.36040a-b／11.36015
北洲　大判錦絵1　本清　「たばこ切三吉　中村歌右衛門」　11.35359
よし国　大判錦絵1 本清・貴　「馬かた与作　小川吉太郎」　11.36229

文政5年(1822)1月　大西
加々見山廓写本〈かがみやまくるわのききがき〉
はし国　大判錦絵1　利新　「谷沢たのも　尾上芙雀」　11.35096

文政5年(1822) 2～8月頃　角丸
玉藻前曦袂〈たまものまえあさひのたもと〉
よし国　大判錦絵1　利新　「せいこく　中村福之助」「玉藻前」　11.36269

文政5年(1822)2月　中・角
金門五三桐〈きんもんごさんのきり〉
彦国　大判錦絵1　「西ノ方　石川五衛門　中村歌右衛門」「東ノ方　石川五右衛門　坂東三津五郎」　11.35101

文政5年(1822)2月　中

金門五三桐〈きんもんごさんのきり〉
彦国　大判錦絵1　「石川五右衛門　中村歌右衛門」
11.35104
彦国　大判錦絵1　「石川五右衛門　中村歌右衛門」
11.35105
北洲　大判錦絵1　利新　［石川五右衛門　中村歌右衛門］
11.35354／11.38805
北洲　大判錦絵 1　利新　「霊山国師実は石川五右衛門　中村歌右衛門」　11.35358

文政5年(1822)2月　中
男作五雁金〈おとこだていつつかりがね〉
北洲　大判錦絵 1　利新・井伝　［あんの平兵へ　片岡仁左衛門、かりがね紋七　市川鰕十郎、かみなりの庄九郎　浅尾工左衛門、こくゐの千右衛門　浅尾勇次郎、ほていの市右衛門　中村歌右衛門］　11.35342／11.38941

文政5年(1822)3月　中
大石摺桜花短冊〈おおいしずりさくらたんざく〉
北洲　大判錦絵1　本清・山市　「花田求馬　浅尾国五郎」「厚井勘太夫　桐山紋治」　11.35357
北洲　大判錦絵 1　本清・山市　「中村歌右衛門　天川や伊吾のちに矢藤与茂七」　11.35344
春頂　大判錦絵 1　利新・叶　「下人八助実は田代安兵へ　中村歌右衛門」「花田求馬　浅尾国五郎」　11.35230
よし国　大判錦絵 1　利新　「下人八介実は田代安兵衛　中村歌右衛門」　11.36272
彦国　大判錦絵1　利新　「田代安兵衛　中村歌右衛門」
11.35103
国広　大判錦絵 1　天喜　「神田与五郎　中村歌右ヱ門」「寺岡平右衛門　市川鰕十良」　11.36012

文政5年(1822)3月　金沢川上
近江源氏先陣館〈おうみげんじせんじんやかた〉
彦国　大判錦絵1　有忠・利新　「三浦之助　中村鶴助」
11.35099
文政5年(1822)5月　御霊
世話料理八百屋献立〈せわりょうりやおやのこんだて〉
春要　大判錦絵1　本清・山市　「女房ちよ　あらし小六」
11.35287
文政5年(1822)7月　中
和訓水滸伝〈やまとことばすいこでん〉
国広　大判錦絵 1　天喜・井伝　「小平次女房おなみ　沢村国太郎」　11.36014
国広　大判錦絵 1　綿喜・天喜　「けいせい小女郎　嵐富三良」　(R)17.3212.18

文政5年(1822)8月　角
恋女房染分手綱〈こいにょうぼうそめわけたづな〉
国広　大判錦絵1　天喜　「お乳人重の井　中村歌右衛門」「馬士三吉　坂東亀太郎」　11.36013

文政5年(1822)9月～12月頃　大西
桂川連理柵〈かつらがわれんりのしがらみ〉
千歌国　大判錦絵 1　井伝　「おきぬ　片岡あやめ」「長吉　大谷友次」　11.22630

文政5年(1822)9月　中　楽屋図
芝国　大判錦絵1 有忠　「江戸登り嵐徳三郎改名嵐橘三郎」
11.36193
よし国　大判錦絵1　「嵐橘三郎」　11.36265

文政5年(1822)9月　中
釜淵雙級巴〈かまがふちふたつともえ〉
北頂　大判錦絵 2　山市　「けいせい滝川　中村三光」／「石川五右衛門　中村歌右衛門」　11.35313　11.35314

文政5年(1822)9月　中
頼政鵺物語〈よりまさぬえものがたり〉
北洲　大判錦絵1　［あやめの前　沢村国太郎、源三位頼政　嵐橘三郎］　11.26604

文政5年(1822)9月　中
勇ましき老嫗寿〈いさましきおいのことぶき〉
北洲　大判錦絵1　有忠　「佐藤ノ老女　中村歌右衛門」
11.35352／11.35363
文政5年(1822)9月　追善絵
鎮西弓張月〈ちんぜいゆみはりづき〉
芝国　大判錦絵1　有忠・利新　「鎮西八郎　嵐橘三郎」
11.36196
文政5年(1822)9月　追善絵
濃紅葉小倉色紙〈こいもみじおぐらしきし〉
千歌国　大判錦絵1　井伝　「笹原隼人　故嵐橘三郎」
11.26600

文政5年(1822)11月　浪花道頓堀大歌舞妓舞台惣稽古之図
よし国　大判錦絵 3　泉理・草紙屋　「あらし小六」「浅尾工左衛門」「嵐吉三郎」「浅尾額十郎」「市川鰕十郎」／「片岡仁左衛門」「中村歌右衛門」「嵐団八」「桐山紋治」／「中村歌六」「嵐橘三郎」「百村鹿蔵」「小川吉太郎」「嵐富三郎」「大谷友右衛門」
(R)17.3210.16　17.3210.17　17.3210.18

文政5年(1822) 11月頃　大西　楽屋図
よし国　大判錦絵1　［百村百太郎］　11.22804

文政6年(1823)1月　角
けいせい廓大門〈けいせいおおもんぐち〉
北洲　大判錦絵3　天喜・山市・鶴勢堂　「桂中納言実は伊勢新九郎　市川鰕十郎」／「細川勝元　浅尾額十郎」／

「高はしの局実は美濃庄九郎　中村歌右衛門」
11.35413　11.35414　11.35415
北洲　大判錦絵3　井伝・本清・泉理　「美濃ノ庄九郎　中村歌右衛門」／「丸鉄実は三浦荒次郎　市川鰕十郎」／「けいせい雛鶴実は庄九郎妻小蝶　中村歌六」
11.35465　11.35466　11.35467
よし国　大判錦絵1　利新　「庄九郎妻小てふ　中村歌六」
11.22631

文政6年(1823)1月　角
千種の乱れ咲〈ちぐさのみだれざき〉
北洲　大判錦絵1　有忠　「わん久　中村歌右衛門」
11.35364

文政6年(1823)1月　中
けいせい品評林〈けいせいしなさだめ〉
芦ゆき　大判錦絵1　［名古や山三　嵐橘三郎］　11.26640

文政6年(1823)3月　角
菅原伝授手習鑑〈すがわらでんじゅてならいかがみ〉
国広　大判錦絵1　天喜･山市「八重　沢村国太郎」11.36020
北頂　大判錦絵1　天喜･山市「判官代輝国　市川鰕十郎」
11.35312

文政6年(1823)4月　角
夏祭浪花鑑〈なつまつりなにわかがみ〉
北洲　大判錦絵 2　天喜・山市　「団七九郎兵衛　中村歌右衛門」／「一寸得兵衛　市川鰕十郎」　11.35463　11.35464

文政6年(1823)5月　北堀江
関取千両幟〈せきとりせんりょうのぼり〉
芦ゆき　大判錦絵 2　本清　「岩川次郎吉　嵐橘三郎」／「女房おとわ　沢村国太郎」　11.26645　11.26646

文政6年(1823)7月　大西
吉原細見図〈よしわらさいけんず〉
よし国　大判錦絵1　本清　「遠山甚三　尾上芙雀」
11.22803

文政6年(1823)7月　京北
頼政鵺物語〈よりまさぬえものがたり〉
蘭斎　細判合羽1　木本　「猪の早太　大谷友右衛門」
(R)11.2165

文政6年(1823)9月　角
敵討崇禅寺馬場〈かたきうちそうぜんじばば〉
北洲　大判錦絵5　利新　「かくれん坊　市川助十郎」「斎藤木曽兵衛　市川団蔵」「誉田司之助　市川市蔵」／「治左衛門女房おきわ　沢村国太郎」／「児雷丸　中村歌右衛門」／「児福丸　市川鰕十郎」／「若とう折平　中村歌七」「西逆坊　桐山紋治」
11.35394　11.35395　11.35396　11.35397　11.35398
北洲　大判錦絵3　「遠城治左衛門　中村歌右衛門」／「生田伝八　市川鰕十郎」／「春藤幾八郎　市川団蔵」
11.35406　11.35407　11.35408

文政7年(1824)1月　楽屋入の図
芝国　大判錦絵1　利新　［中村三光］　11.36194

文政7年(1824)1月　角
遖傾城花大矢数〈あっぱれけいせいまつらのとうりや〉
よし国　大判錦絵1　柴伊・本清　「娘小まき　中村三光」
11.36254

文政7年(1824)3月　角
仮名手本忠臣蔵〈かなでほんちゅうしんぐら〉
芝国　大判錦絵1　「お蘭の方　中村三光」　(R)17.3212.17
北洲　大判錦絵 2　天喜　「おたか　中むら松江」／「本右衛門　市川鰕十良」「弥七　市川団蔵」
11.35461　11.35462／11.26637　11.26638(讃入)

文政7年(1824)閏4月　角
伊賀越乗掛合羽〈いがごえのりかけがっぱ〉
北頂　大判錦絵 2　天喜・利新　「池添孫八　中村歌七」「渡辺しづま　小川吉太郎」／「唐木又右衛門　中村歌右衛門］　11.35317　11.35318

文政7年(1824)5月　北堀江
女猿曳☆諷〈おんなさるまわしかどでのひとふし〉
国広　大判錦絵1　天喜　「猿廻し小よし　中むら三光」
(R)17.3214.20
よし国　大判錦絵 1　本清・吉　「伝兵へ　小川吉太郎」「女さる廻し小よし　中村三光」　11.26593

文政7年(1824)5月　北堀江
芦屋道満大内鑑〈あしやどうまんおおうちかがみ〉
国広　大判錦絵 1　天喜・木綿屋　「葛の葉　二代目沢むら国太良相勤申候」　(R)17.3213.11
北洲　大判錦絵 3　利新　「安部保名　中村歌右衛門」／「やかん平　中村歌右衛門」／「狐くずの葉　沢村国太郎」
11.35367　11.35366　11.35368／11.38806　11.38802
芦ゆき　大判錦絵1　本清　［安部保名　中村歌右衛門］
11.26580

文政7年(1824)7月　京北
夏祭浪花鑑〈なつまつりなにわかがみ〉
芝国　大判錦絵 1　あき惣・島　「つり舟の三婦　玉しま磯之丞　市川団蔵」　11.36191
芦ゆき　大判錦絵 1　綿喜　「つり船ノ三ふ　市川団蔵」「徳兵衛女房たつ　中村三光」　11.26579

文政7年(1824)8月　中
競伊勢物語〈はなくらべいせものがたり〉
芦ゆき　大判錦絵2　本清　「伊勢ノおじう　あらし小六」／「小野ノ篁　あらし橘三郎」　11.35142　11.35143
芦ゆき　大判錦絵1　本清･吉　「小野篁　嵐橘三郎」「伊勢侍従　あらし小六」　11.26576

文政 7 年(1824)8 月　角
三月開嬉心船橋〈やよいにひらくあんどのふなはし〉
芦ゆき　大判錦絵 2　綿喜　「後室玉ざゝ　沢村国太郎」／「勇助女房おそで　中村三光」(R)17.3212.13　17.3212.15

文政 7 年(1824)9 月　角
国性爺合戦〈こくせんやかっせん〉
よし国　大判錦絵 1　本清　「錦昌女　市川団蔵」　(R)17.3210.15

文政 7 年(1824)9 月　角
鎌倉三代記〈かまくらさんだいき〉
芝国　大判錦絵 1　綿喜・有忠　「藤三女房おくる　中村三光」　11.36192
北洲・よし国　大判錦絵 2　本清　「佐々木四郎高綱　中村歌右衛門」／「三浦之助　市川団蔵」　11.35451　11.35452

文政 7 年(1824)9 月　角
平家女護島〈へいけにょうごのしま〉
芝国・北洲　大判錦絵 4　天喜　「丹左衛門元保　市川鰕十郎」／「海士千鳥　藤川友吉」／「瀬尾太郎　中村歌右衛門」／「しゆん寛　市川団蔵」　11.36197a-d

文政 8 年(1825)1 月　角
日本新玉九尾化〈よせてあらたにここのばけ〉
よし国　大判錦絵 9　本清　「天人　中村歌右衛門」／「浦しま太郎　中村歌右衛門」／「黒んぼう　中村歌右衛門」／「平ノ知盛　中村歌右衛門」／「いちこ　中村歌右衛門」／「鳥羽絵　中村歌右衛門」／「けいせい　中村歌右ヱ門」／「玉藻ノ前　中むら歌右ヱ門」／「九尾ノ狐　中村歌右ヱ門」
11.36281　11.36282　11.36283　11.36284　11.36285　11.36286　11.36287　11.36288　11.36289／11.38834　11.38835　11.38836　11.38837　11.38832　11.38833　11.38830　11.38831／(P.S)RES.50.71

文政 8 年(1825)1 月　中
もゝちどり鳴門白浪〈ももちどりなるとのしらなみ〉
芦ゆき　大判錦絵 3　吉・本清・利新　「萩塚鳴戸之助　市川団蔵」「浜名織部　坂東寿太郎」／「尾形秀丸　大谷友右衛門」「福島左衛門　浅尾額十郎」／「博多ノ島蔵　嵐橘三郎」　11.35158　11.35159　11.35160

文政 8 年(1825)3 月　角　寿式三〈ことぶきしきさん〉
よし国　大判錦絵 1　本清　「式三番叟　景事浦しま　中村鶴助」　11.36237

文政 8 年(1825)3 月　角
姫小松子日遊〈ひめこまつねのひのあそび〉・
靱猿〈うつぼざる〉・寿式三〈ことぶきしきさん〉
北洲　大判錦絵 1（3 分の 1 ずつに 1 演目を描く）　[俊寛僧都　中村歌右衛門、おやす　中村三光]／[大名　小川吉太郎、太郎冠者　中村歌七、猿引　中村三光]／[三番叟　中村鶴助]　11.35334　11.35335　11.35336

文政 8 年(1825)3 月　角
義経腰越状〈よしつねこしごえじょう〉
北洲　大判錦絵 1　天喜・井伝　「和泉ノ三郎　市川鰕十郎」「五斗兵衛　中村歌右衛門」　11.35341
北洲　大判錦絵 1　天喜・井伝・明石堂　「和泉ノ三郎　市川鰕十郎」　11.35365
北洲　大判錦絵 1　本清　「五斗兵衛　中村歌右衛門」　11.35369／11.38803

文政 8 年(1825)3 月　角
彦山権現誓助剣〈ひこさんごんげんちかいのすけだち〉
北洲　大判錦絵 1「おその　中村歌右衛門」(R)17.3210.20
北洲　大判錦絵 1　利新　「毛谷村六助　市川鰕十郎」「弥三松　あらし鹿之介」　11.35337
北洲　大判錦絵 2　本清・綿喜・有忠　「おその　中村歌右衛門」／「毛谷村六助　市川鰕十郎」　11.35455　11.35456
北洲　大判錦絵 1　綿喜・有忠「京極内匠　中村歌右衛門」　11.35372
北洲　大判錦絵 1　明石堂　「おその　中村歌右衛門」　11.35373

文政 8 年(1825)3 月　角
一谷嫩軍記〈いちのたにふたばぐんき〉
北洲　大判錦絵 2　本清　「熊谷次郎　中村歌右衛門」／「さがみ　中村三光」　11.38974a-b／11.35459　11.35460／(R)17.3212.20
北洲　大判錦絵 1　綿喜・有忠　「熊谷治郎直ざね　中村歌右衛門」　11.35370／11.38804／11.35371（異版）

文政 8 年(1825)3 月　角
姫小松子日の遊〈ひめこまつねのひのあそび〉
よし国　大判錦絵 1　本清　「俊寛　中村歌ヱ衛門」　11.26592

文政 8 年(1825)3 月頃　大西
金門五山桐〈きんもんごさんのきり〉
とし国　大判錦絵 1「石川五右衛門　中村鶴助」　11.35238

文政 8 年(1825)5 月　中
秋葉権現廻船語〈あきばごんげんかいせんばなし〉
よし国　大判錦絵 1　本清　「月本円秋　市川団蔵」　11.36256

文政 8 年(1825)6～10 月頃　若太夫
戯場製伊達累着〈かぶきしたてだてのかさねぎ〉
梅国　大判錦絵 1　本清　「百性与右衛門　沢村源之助」「かさねほうこん　登り坂東蓑助」　11.35251

文政 8 年(1825)8 月　角
けいせい廓船諷〈けいせいさとのふなうた〉

芦ゆき　大判錦絵 2　綿喜　「桑名屋徳蔵　市川鰕十郎」／「けいせい檜垣　あらし富三郎」　11.35148　11.35149

文政 8 年(1825)8 月　中
義経千本桜〈よしつねせんぼんざくら〉
よし国　大判錦絵 2　井伝・天喜　「しつかノ前　浅尾額十郎」／「狐忠信　沢村国太郎」　11.36274a-b

文政 8 年(1825)8 月　角
舞扇南柯語〈まいおうぎなんかのはなし〉
芦ゆき　大判錦絵 1　綿喜　「かさ屋三勝　あらし富三郎」　(R)17.3212.16

文政 8 年(1825)　11 月　角
梅浪華早咲源氏〈うめのなにわはやさきげんじ〉
よし国　大判錦絵 1　本清　「平井権八　尾上梅幸」　11.26591

文政 8 年(1825)11 月　大西
恋の俤〈こいのおもかげ〉
春芝　大判錦絵 1　本清・吉　「法界坊霊魂おくみ　[尾上多見蔵]」　(R)17.3210.14

文政 9 年(1826)1 月　角
けいせい達抄本〈けいせいだてのぬきがき〉
芦ゆき　大判錦絵 1　本清　「大工六三実は松ケ枝鉄之助　尾上菊五郎」「娘おその　あらし小六」　11.35012
芦ゆき　大判錦絵 1　本清　「倅千松　市川市松」「乳人あさ岡　尾上菊五郎」　11.35016／11.35017
芦ゆき　大判錦絵 1　本清　「仁木直則　尾上菊五郎」　11.26581

文政 9 年(1826)1 月　角
いろは仮名四谷怪談〈いろはがなよつやかいだん〉
北晴　大判錦絵 1　利新　「与茂七女房おそて　藤川友吉」「直助　嵐団八 」　(R)Res.50.44
北頂　大判錦絵 2　綿喜・天喜　「新介　市川子之助」「民谷伊右衛門　一蝶改中村新九郎」／「おいわ怨霊　尾上菊五郎」　11.35322　11.35323
北洲　大判錦絵 1　[伊右衛門女房おいわ　尾上菊五郎]　11.35347／(S)21.5393
国広　大判錦絵 1　天喜　「おいわ怨霊　尾上梅幸」　11.36030
国広　大判錦絵 1　天喜　「民谷伊右衛門　一蝶改中山新九郎」「おいわ　尾上菊五郎」　11.36026

文政 9 年(1826)1 月頃　角　外題未詳
多美国　大判錦絵 1　本清　「牛御前　幸崎甚内実は吉田松若　尾上菊五郎」　11.35250

文政 9 年(1826)1 月　北堀江
けいせい浦朝霧〈けいせいうらのあさぎり〉
芦ゆき　大判錦絵 3　綿喜　「おすま之方　あらし璃光」／「小割伝内　嵐橘三郎」／「娘おきよ　あらし小六」　11.35152　11.35153　11.35154

文政 9 年(1826)3 月　中
菅原伝授手習鑑〈すがわらでんじゅてならいかがみ〉
よし国　大判錦絵 1 本清　「松王丸　中村芝翫」 11.36255
よし国　大判錦絵 1　本清　「菅丞相霊魂　尾上菊五郎」　11.36253
長秀　大判錦絵 1　綿喜　「菅相丞　尾上菊五郎」 11.26594
芦ゆき　大判錦絵 3　綿喜　「かりや姫　尾上松助」「かく寿　浅尾額十郎」／「菅相丞　尾上菊五郎」／「てる国　市川団蔵」　11.35155　11.35156　11.35157
芦ゆき　大判錦絵 3　本清　「となみ　藤川友吉」「錦のまへ　沢村国太郎」／「菅相丞　尾上菊五郎」／「武部源蔵　浅尾額十郎」「稀王　嵐舎丸」　11.35164　11.35165　11.35166
重勝　大判錦絵 3　「松王丸　中村芝翫」／「さくら丸　尾上菊五郎」／「梅王丸　嵐来芝」　11.36199a-c

文政 9 年(1826)4 月　角
妹背山婦女庭訓〈いもせやまおんなていきん〉
よし国　大判錦絵 1　「漁師ふか七　市川団蔵」　11.36260

文政 9 年(1826)4 月　中
木下蔭狭間合戦〈きのしたかげはざまがっせん〉
よし国　大判錦絵 1 本清 「石川五右衛門　中村歌右衛門」　(P.S)RES.50.72
北洲　大判錦絵 1　「石川五右衛門　中村歌右衛門」　11.26602／11.38807

文政 9 年(1826)4 月　中
極彩色娘扇〈ごくさいしきむすめおうぎ〉
芦ゆき　大判錦絵 2　本清　「朝比奈藤兵衛　市川鰕十郎」／「寺子屋兵助　中村歌右衛門」　11.35150　11.35151
春子　大判錦絵 1　利新・大亀　「けんくわや五郎右衛門　市川鰕十郎」「手代喜蔵　浅尾奥山」　11.35233

文政 9 年(1826)7 月　若太夫
契情花発船〈けいせいはないかだ〉
春芝　大判錦絵　本清・吉　「吉川橋之助　尾上多見蔵」　11.35231

文政 9 年(1826)7 月　京北
名作切籠曙〈めいさくきりこのあけぼの〉
芦ゆき　大判錦絵 2　綿喜　「たる屋おせん　藤川友吉」／「里見伊助　あらし橘三郎」　11.26643　11.26644

文政 9 年(1826)11 月 16 日　死絵
北洲　大判錦絵 1　本清　「嵐小六」　11.35345
北洲　大判錦絵 1　本清　[嵐小六]　11.35348

文政 10 年(1827)頃　楽屋図
春芝　大判錦絵 1　「[尾上]多見蔵」　11.35232

文政 10 年(1827)1 月　角
春陽三獅頭〈いまようみつのししがしら〉
芦ゆき　大判錦絵 2　本清　「少々　沢村国太郎」／「曽我五郎　中村芝翫」　11.35011　11.35010／11.35015
芦ゆき　中判錦絵 1　［大尽　関三十郎］　(L)50.24

文政 10 年(1827)4 月　北堀江
仮名手本忠臣講釈〈かなでほんちゅうしんこうしゃく〉
北頂　大判錦絵 2　本清　「おりへ　中村歌右衛門」／「矢間重太郎　関三十郎」　11.22674　11.22675／(R)17.3213.15

文政 10 年(1827)5 月　中
けいせい桟物語〈けいせいかけはしものがたり〉
芦ゆき　大判錦絵 3　綿喜　「うきすノ岩松　市川鰕十郎」／「百性重作　嵐橘三郎」／「十吉　あらし橘蔵」「女房おきぬ　沢村国太郎」　11.35176　11.35177　11.35178

文政 10 年（1827）閏 6 月　京南
五大力恋縅〈ごだいりきこいのふうじめ〉
春子　大判錦絵 1　兵善　「勝間源五兵衛　尾上芙雀」「けいこ菊野　中山一枝」　11.35234／11.35235

文政 10 年(1827)7 月　角
双蝶々曲輪日記〈ふたつちょうちょうくるわにっき〉
よし国　大判錦絵 1　本清　「濡髪長五郎　中村芝翫」　11.21999
北頂　大判錦絵 2　本清　「山崎与五郎　中村歌右衛門」／「ふじ屋あづま　中村歌六」　11.35315　11.35316

文政 10 年(1827)7 月　角
堂島救入浜〈おとこいっぴきすくいのたてひき〉
北洲　大判錦絵 3　本清　「手代新兵衛　浅尾歌四郎」「ごくもんの庄兵衛　市川市蔵」／「黒船忠右衛門　中村歌右衛門」／「女房おまき　中村松江」　11.35403　11.35404　11.35405
国広　大判錦絵 1　天喜　「獄門庄兵衛　市川市蔵」　11.21853

文政 10 年(1827)7 月　角　中村笄〈ひよくかんざし〉
国広　大判錦絵 1　天喜　「八百屋長吉　中村歌右衛門」「道楽和尚里橋　浅尾国五郎」　11.16377
梅国　大判錦絵 1 天喜・井伝　「大くら吉兵衛　中村芝翫」　11.22673

文政 10 年(1827)7 月　京北
ひらかな盛衰記〈ひらがなせいすいき〉
芦ゆき　大判錦絵 3　綿喜　「梶原平二　嵐橘三郎」／「梶原源太　市川団蔵」／「こし元千鳥　沢村国太郎」　11.35167　11.35168　11.35169／11.22676　11.22677

文政 10 年(1827)7 月 16 日　死絵
北洲　大判錦絵 1　［市川鰕十郎］　11.35339

北洲　大判錦絵 1　天喜・井伝　「市川鰕十郎」　11.35346

文政 10 年(1827)7 月 16 日　死絵
けいせい桟物語〈けいせいかけはしものがたり〉
芦ゆき　大判錦絵 1　綿喜　「盗賊丹せき実は玉島幸兵衛　市川鰕十郎」　11.35000

文政 10 年(1827)9 月　中
勝関☆源氏〈かちどきみばえげんじ〉
芦ゆき　大判錦絵 1　本清　「牛若丸　沢村国太郎」　11.35008
芦ゆき　大判錦絵 1　［牛若丸　沢村国太郎、熊坂長範　嵐橘三郎］　11.26577

文政 10 年(1827)9 月　中
関取千両幟〈せきとりせんりょうのぼり〉
芦ゆき　大判錦絵 1　綿喜　「鉄ヶ嶽　嵐冠十郎」「岩川　嵐橘三郎」　11.35014

文政 10 年(1827)9 月　京因幡薬師
月雪花吾妻錦絵〈つきゆきはなあずまのにしきえ〉
国広　大判錦絵 1　天喜　「けいせい　坂東簑助」　11.36039

文政 10 年(1827)10 月　角
乱菊露仇枕〈らんぎくつゆのあだまくら〉
国広　大判錦絵 1 天喜　「狐勘兵へ　中村芝翫」　11.36010
よし国　大判錦絵 5　本清　「子もり　中むら芝翫」／「大人　中村芝翫」／「かごかき　中村芝翫」／「「葛の葉狐　中村芝翫」／「狐勘平　中村芝翫」　11.36241a-e

文政 11 年(1828)1 月　角
天満宮花梅桜松〈てんまんぐうあいじゅのめいぼく〉
芦ゆき　大判錦絵 2　綿喜　「青柳大夫　藤川友吉」／「百性重作　中村歌右衛門」　11.35179　11.35180
北洲　大判錦絵 1　本清　「堤ばた十作　中村歌右衛門」　11.35353
北洲　大判錦絵 3　［紀ノ長谷雄　市川鰕十郎］／［孔雀三郎　中村歌右衛門］／［紅梅姫　藤川友吉］　11.26859　11.26860　11.26861

文政 11 年(1828)1 月　中
けいせい素袍☆〈けいせいすおうのだいり〉
芦ゆき　大判錦絵 2　本清　「お女中関屋　沢村国太郎」「百兵衛　大谷友右衛門」／「高島九八　嵐橘三郎」　11.35134　11.35135／11.36297a-b
芦ゆき　大判錦絵 3　綿喜　「早川玄蕃　嵐冠十郎」「鳴戸幸兵衛誠は尼子春久　坂東寿太郎」／「毛利元成　浅尾額十郎」／「貫練門平誠はつゝみ瀬平　嵐橘三郎」　11.35173　11.35174　11.35175
芦ゆき　大判錦絵 3　本清　「いつくしま天女　嵐富三郎」／「大内左馬之助　嵐橘三郎」／「鳴門幸兵衛　坂東寿太

郎」　11.35170　11.35171　11.35172／11.35001
芦ゆき　大判錦絵 1　本清　「六部快了　嵐橘三郎」　11.35005

文政 11 年(1828)1 月　若太夫
けいせい石川染〈けいせいいしかわぞめ〉
とし国　大判錦絵 1　本清・吉　「奴矢田平実は石川五右衛門　片岡市蔵」　11.16373

文政 11 年(1828)5 月　竹田
隅田春妓女容性〈すだのはるげいこかたぎ〉
国広　大判錦絵 1　天喜　「梅の由兵へ　市川鰕十郎」　11.36025

文政 11 年(1828)8 月　角
粧水絹川堤〈けわいみずきぬがわづつみ〉
芦ゆき　大判錦絵 2　本清　「女房かさね　嵐橘三郎」／「お竹　沢村国太郎」　11.35138　11.35139

文政 11 年(1828)8 月　筑後
けいせい筑紫☆〈けいせいつくしのつまごと〉
多美国　大判錦絵 1　利新　「宮城阿曽次郎　尾上芙雀」　11.22629

文政 11 年(1828)末頃　若太夫
隅田川続俤〈すみだがわごにちおもかげ〉
国広　大判錦絵 1　天喜　「法界坊亡魂　沢村源之助」　11.36011

文政 12 年(1829)1 月頃　見立
重春　大判錦絵 1　天喜　「見立　あらし璃寛」　11.26562

文政 12 年(1829)1 月　角
花雪歌清水〈はなふぶきうたのなどころ〉
重春・国広　大判錦絵 2　天喜　「地蔵ノ五平治　中村歌右ヱ門」／「女房小女郎　沢村国太郎」　11.36041a-b

文政 12 年(1829)1 月　中
新うすゆき物語〈しんうすゆきものがたり〉
芦ゆき　大判錦絵 4　本清　「園部ノ左衛門　嵐三五郎」／「奴妻平　嵐璃寛」／「☆まかき　坂東寿太郎」／「薄雪姫　藤川友吉」11.35128　11.35129　11.35130　11.35131
芦ゆき　大判錦絵 1　本清　「奴妻平　嵐璃寛」　11.35003
芦ゆき　大判錦絵 1　［やつこ妻平　嵐璃寛、こしもと籬坂東寿太郎］　11.26578

文政 12 年(1829)1 月　筑後
初春寿九化〈はつはるのことぶきいわうここのばけ〉
春勢　大判錦絵 1　本清・吉　「源太　りやうし　尾上多見蔵」　(R)17.3212.10

文政 12 年(1829)3 月　中
けいせい楊柳桜〈けいせいやなぎさくら〉
芦ゆき　大判錦絵 2　本清　「一式結城之守　市川団蔵」「沢江木多ノ正　片岡仁左衛門」／「木津関兵衛　嵐璃寛」　11.26651　11.26652

文政 12 年(1829)5 月　中
夏祭浪花鑑〈なつまつりなにわかがみ〉
北英　大判錦絵 1　井伝　「団七九郎兵衛　市川白猿」　11.35181

文政 12 年(1829)7 月　角　見立
芦ゆき　大判錦絵 1　本清　「中村松江」　11.35002

文政 12 年(1829)7 月　角
碁太平記白石噺〈ごたいへいきしらいしばなし〉
芦ゆき　大判錦絵 1　本清　「妹しのぶ　中村松江」「庄屋七郎兵衛　片岡仁左衛門」　(R)17.3212.14

文政 12 年(1829)7 月　角
棹歌木津川八景〈さおのうたきづがわはっけい〉
芦ゆき　大判錦絵 2　本清　「けい子咲野　中村松江」／「木津勘助　嵐璃寛」　11.26647　11.26648
北頂　大判錦絵 3　本清　「堀口万右衛門　市川鰕十郎」／「木津勘助　嵐璃寛」「林三左衛門　中山文七」／「渡シ守三十郎　浅尾額十郎」　11.35319　11.35320　11.35321

文政 12 年(1829)9 月　角
松下嘉平治連歌評判〈まつしたかへいじれんがひょうばん〉
芦ゆき　大判錦絵 2　本清　「武智光秀　中村歌右衛門」／「嘉平次妻玉笹　中村松江」　11.35132　11.35133

文政 13 年(1830)1 月頃　見立　春遊見立七福神
重春　大判錦絵 1　天喜　「あらし璃寛」「沢村国太郎」　11.36205

文政 13 年(1830)1 月　角
けいせい雪月花〈けいせいせつげっか〉
北洲　大判錦絵 1　本清　「百性五作実は石川五右衛門　中村歌右衛門」　11.35351
北洲　大判錦絵 1　本清　「早枝政右衛門　市川白猿」　11.35340
芦ゆき　大判錦絵 3　本清　「娘綾織　中村松江」／「真柴久次　嵐璃寛」／「石田ノ局　中村歌右衛門」「真柴久秋　中村梅助」　11.35161　11.35162　11.35163／11.35009
芦ゆき　大判錦絵 2　本清　「石川五右衛門　中村歌右衛門」／「小鮒ノ源五郎　嵐璃寛」　11.35136　11.35137
重春　大判錦絵 1　天喜　「石川五右衛門　中村歌右衛門」「かむろ実は五郎市　中村額之助」　11.36211

文政 13 年(1830)1 月　中　口上
北洲　大判錦絵 1　本清　「四代目坂東彦三郎」　11.35350

文政 13 年(1830)2 月　中
今川本領猫魔館〈いまがわほんりょうねこまたやしき〉
重春　大判錦絵 2　綿喜　「羽生や助四郎　沢村四良五郎」

「げいこおきく　尾上菊五郎」／「村ごし良介　坂東彦三郎」「なにはや幸助　尾上菊五郎」　11.36222a-b

文政 13 年(1830)2 月　中
鏡山故郷錦〈かがみやまこきょうのにしき〉
重春　大判錦絵 2　天喜　「岩ふじ　尾上菊五郎」／「はしたお初　岩井粂三郎」　11.36226a-b

文政 13 年(1830)3 月　角
仮名手本忠臣蔵〈かなでほんちゅうしんぐら〉
北洲　大判錦絵 1［大星由良之助　中村歌右衛門］11.35338
重春　大判錦絵 2　天喜　「早野勘平　市川団蔵」／「女房おかる　中村松江」　11.36219a-b

文政 13 年(1830)3 月　角
助六由縁江戸桜〈すけろくゆかりのえどざくら〉
重春　大判錦絵 1　本清　「助六　市川白猿」「白酒うり　中村歌右衛門」　11.36201
重春　大判錦絵 2　天喜・綿喜　「けゐせい揚まき　中村松江」／「助六　市川白猿」　(R)17.3210.13　11.36209

文政 13 年(1830)3 月　竹田
菅原伝授手習鑑〈すがわらでんじゅてならいかがみ〉
信勝　大判錦絵 1　天喜　「官相々　尾上梅幸」 11.36058
信勝　大判錦絵 1　天喜　「桜丸　尾上菊五郎」 11.37893

文政 13 年(1830)3 月　伊勢
鎌倉三代記〈かまくらさんだいき〉
重春　大判錦絵 1　天喜･木綿屋　「佐々木高綱　嵐璃寛」　11.36206
文政 13 年(1830)閏 3 月　見立　御影参道の粧
重春　大判錦絵 2　天喜・本清　「間の山」／「あさ間岳」　(T.S.R)RES.52.67　RES.52.68

文政 13 年(1830)6 月　宮島　口上
北英　大判錦絵 1　井伝　「中村松江」「中村さん光」　11.35190
文政 13 年(1830)8 月　中
勢州阿漕浦〈せいしゅうあこぎがうら〉
北英　大判錦絵 1　本清　「 あこぎ平次　嵐璃寛」　11.34996
重春　大判錦絵 1　本清　「あこぎの平治　嵐璃寛」　11.36213
文政 13 年(1830)9 月　角
芦屋道満大内鑑〈あしやどうまんおおうちかがみ〉
重春　大判錦絵 3　本清　「奴やかん平　中村歌右衛門」／「狐くづの葉　沢村国太郎」／「奴与かん平　嵐璃寛」　11.36204a-c／11.36203

文政 13 年(1830)9 月　角
染模様妹背門松〈そめもよういもせのかどまつ〉
芦ゆき　大判錦絵 1　本清「娘おそめ　嵐璃寛」 11.35007
重春　大判錦絵 2　本清　「娘おそめ　あらし璃寛」／「野さきノ久作　中村歌右衛門」「でつち久松　市川団蔵」　(R)17.3212.6　17.3212.7／11.38821／(F)07.716

文政 13 年(1830)9 月　角
義経千本桜〈よしつねせんぼんざくら〉
重春　大判錦絵 1　天喜　「静御前　尾上菊五郎」　(R)17.3210.12
重春　大判錦絵 1　綿喜　「しづか御ぜん　尾上菊五郎」　11.36215
重春　大判錦絵 2　本清　「静御前　尾上菊五郎」／「狐忠信　中村歌右衛門」　11.36220a-b

天保 2 年(1831)1 月　角
けいせい廓苧環〈けいせいさとのおだまき〉
芦ゆき　大判錦絵 2　本清　「尾形力丸　嵐璃寛」／「大内さと姫　藤川友吉」　11.26649　11.26650
芦ゆき　大判錦絵 2　本清　「吉川帯刀　浅尾額十郎」／「尾形力丸　嵐璃寛」　11.35146　11.35147
芦ゆき　大判錦絵 2　吉　「けいせい岩国　中山南枝」／「奴文字助　嵐璃寛」　11.35144　11.35145／11.36296a-b
芦ゆき　大判錦絵 1　本清　「尾形力丸　嵐璃寛」　(R)17.3212.12
天保 2 年(1831)1 月　角
東土産稲妻草紙〈えどみやげいなづまぞうし〉
芦ゆき　大判錦絵 2　本清　「不は伴左衛門　嵐璃寛」／「名古屋山三　尾上菊五郎」　11.35140　11.35141

天保 2 年(1831)1 月　角
隅田川続俤〈すみだがわごにちのおもかげ〉
重春　大判錦絵 1　綿喜　「法界坊亡魂　嵐璃寛」11.36207

天保 2 年(1831)1 月　中
けいせい繁夜話〈けいせいしげしげやわ〉
北英　大判錦絵 2　本清　「松浪蔵人　中村歌右衛門」／「奴鳴平　坂東重太郎」　11.35301　11.35302
重春　大判錦絵 1　本清　「松浪蔵人　中村歌右衛門」　11.36210
天保 2 年(1831)3 月　角
競伊勢物語〈はでくらべいせものがたり〉
北英　大判錦絵 3　本清　「娘しのぶ　中村松江」／「紀ノ有常　中村歌右衛門」／「春日野小よし　坂東寿太郎」「豆四郎　市川団蔵」　11.35211　11.35212　11.35213

天保 2 年(1831)3 月　角
京鹿子娘道成寺〈きょうがのこむすめどうじょうじ〉
国広　大判錦絵 1　天喜　「白拍子　中村歌右衛門」　(R)17.3212.19

天保2年(1831)3月　若太夫
東海道四谷怪談〈あずまかいどうよつやかいだん〉
北英　大判錦絵 2　本清　「直介権兵へ　浅尾内匠」「羽宮伊右衛門　市川助十郎」／「佐藤与茂七　尾上菊五郎」
11.35267　11.35268

天保2年(1831)3月　御霊
錦旧☆御所車〈はなかざりやよいのみくるま〉
芦ゆき　大判錦絵1　吉　「出づかい　江戸登り吉田兵吉」
11.35013

天保2年(1831)5月　角
娘景清八島日記〈むすめかげきよやしまにっき〉
重春　大判錦絵1　綿喜　「娘糸たき　中村松江」11.36214

天保2年(1831)7月　中
義経腰越状〈よしつねこしごえじょう〉
北英　大判錦絵1　本清　「五斗兵衛　中村歌右衛門」「こし元竹田　嵐三右衛門」「〃あかし　中村まもり」11.35186

天保2年(1831)9月　角
忠孝誉二街〈ちゅうこうほまれのふたみち〉
北英　大判錦絵 2　本清　「唐橋作十郎　嵐璃寛」／「大道寺学太郎　浅尾内匠」　11.35265　11.35266

天保2年(1831)9月　中
復讐高音鼓〈かたきうちたかねのたいこ〉
北妙　大判錦絵 1　本清　「なみ路　常盤」「浅間左衛門梅玉」「富士太郎　市紅」「富士右門　延若」「なみ江　其答」
11.35330

天保2年(1831)11月　中　寿式三〈ことぶきしきさん〉
北英　大判錦絵 2　本清　「あづま男棒立　尾上多見蔵」／「唐人　尾上多見蔵」　11.34995／(P.S)49.1753
春王　大判錦絵1 吉 「唐人　からしゝ石橋　尾上多見蔵」
11.35236

天保2年(1831)11月　中
辰春祝秀句戯場〈たつのはるというしゅうくのかおみせ〉
国広　大判錦絵1　天喜　「木おい　尾上多見蔵」11.36029

天保2年(1831)11月　京北
容競出入湊〈すがたくらべでいりのみなと〉
北妙　大判錦絵 1　本清　「ごくもんの庄兵衛　中村歌右衛門」「黒船忠右衛門　嵐璃寛」　11.35328

天保3年(1832)頃　見立
貞升・北英　大判錦絵 4　天喜　「田村丸　岩井紫若」／「韋駄天刑部　中村歌右衛門」／「関ノ正市　嵐璃寛」／「月雪姫　中村松江」
11.35278　11.35279　11.35280　11.35281

天保3年(1832)1月頃　見立
国広　大判錦絵 3　天喜　「見入由丸　中村歌右ヱ門」／「宝歳太郎　嵐璃寛」／「いわ井升姫　中村松江」
11.36034a-c

天保3年(1832)1月頃
伽羅先代萩〈めいぼくせんだいはぎ〉
信春　大判錦絵 1　「兵庫頭　友次改柴崎林左衛門」「勘解由　坂東彦三郎」　11.18133

天保3年(1832)1月　中
けいせい品評林〈けいせいしなさだめ〉
北英　大判錦絵 3　本清　「かつらき太夫　中村松江」／「不破伴左衛門　坂東寿太郎」／「中居おみや　岩井紫若」
11.30386　11.30385　11.30384

天保3年(1832)1月　筑後
復讐二島英勇記〈かたきうちにとうえいゆうき〉
北英　大判錦絵 2　本清　「宮本友治郎　嵐璃寛」／「傾城むさしの　嵐徳三郎」　11.35263　11.35264
北妙　大判錦絵1　本清・河治　「宮本友次良後無三四　嵐璃寛」
11.35329

天保3年(1832)2月　角
潤色女雁金〈じゅんしょくおんなかりがね〉
北英　大判錦絵2　本清　「かり金お文　中村松江」／「雷ノお庄　岩井紫若」　11.35205a-b

天保3年(1832)3月　筑後
傾城筑紫☆〈けいせいつくしのつまごと〉
北英　大判錦絵 2　本清　「娘みゆき　嵐徳三郎」／「駒沢次郎左衛門　嵐璃寛」　11.35289　11.35290
重春　大判錦絵1　天喜　「阿曽次郎　あらし璃寛」
11.36208

天保3年(1832)4月　角
接合北国梅〈つぎあわせこしじのめいぼく〉
北英　大判錦絵1　本清　「おはつ　岩井紫若」　11.35195
北海　大判錦絵1　本清・ふし太　「おはつ　岩井杜若」
11.35327
国広　大判錦絵 2　天喜　「召つかいお初　岩井紫若」／「岩ふじ　中村歌右ヱ門」「ふとり木　中むら歌七」
11.36031a-b

天保3年(1832)5月　筑後
夏祭浪花鑑〈なつまつりなにわかがみ〉
北英　大判錦絵1　本清　「団七九郎兵衛　嵐璃寛」
11.35271
北英　大判錦絵1　本清　「団七九郎兵衛　嵐璃寛」
11.35272
国広　大判錦絵1　天喜　「団七ノ九郎兵衛　嵐璃寛」
11.36027
重春　大判錦絵1　綿喜　「おたつ　岩井紫若」　11.36212

天保3年(1832)6月頃　見立　道頓堀芝居町夕すゝみ

重春　大判錦絵2　綿喜　「中村松江」／「沢村国太良」
11.36221a-b

天保3年(1832)7月　角
豊歳潤曽我〈ほうねんうるおいそが〉
北英　大判錦絵1　本清　「朝ひな三郎　中むら歌右衛門」
11.35187

天保3年(1832)8月　角
柵自来也談〈やえむすびじらいやものがたり〉
北英　大判錦絵1　本清　「代々絹太夫　中村歌六」
(R)17.3213.14

天保3年(1832)8月　中
絵本殿下茶屋聚〈えほんでんがちゃやむら〉
重春　大判錦絵 2　天喜　「早瀬伊織　嵐璃寛」／「染の井　岩井紫若」
11.36225a-b
北英　大判錦絵 3　本清　「早瀬伊織　嵐璃寛」／「早瀬源二郎　中山みよし」「坂田庄三郎　坂東彦三郎」／「安達弥助　坂東寿太郎」　11.35220　11.35221　11.35222
北英　大判錦絵1　本清　「人形屋幸右衛門　嵐璃寛」「手代久七　市川助十郎」
11.35189

天保3年(1832)9月　中
希露恵秋草〈こいねがうつゆのあきくさ〉
北英　大判錦絵 2　本清　「牛若丸　岩井紫若」／「花見女中　岩井紫若」
11.35200　11.35201

天保3年(1832)11月　京北
染模様妹背門松〈そめもようといもせのかどまつ〉
北英　大判錦絵1「久松　お染」「いわ井し若」(S)21.5352

天保4年(1833)1月　見立　卯の日まふで春の曙
重春　大判錦絵4　本清　［中歌右衛門、中村松江］／［市川団蔵、藤川友吉、浅尾工左衛門］／［岩井紫若、嵐璃寛］／［中村富十郎、中村友三、尾上菊五郎］
11.36223a-d

天保4年(1833)1月　角
けいせい稚児淵〈けいせいちごがふち〉
北英　大判錦絵4　綿喜　「捨若丸　中村歌右衛門」／「三浦常陸　尾上多見蔵」／「ぎおんおかじ　松江改中村富十郎」／「斎藤蔵之助　坂東寿太郎」
11.26862　11.26863　11.26864　11.26865
北英　大判錦絵 1　柴伊　［けいせい菊川　松江事中村富十郎］
11.35188
北英　大判錦絵1　本清　「真虫治郎吉　尾上多見蔵」
11.35203
北英　大判錦絵 2　本清　「小ゆき　松江改中村富十郎」／「狩野四郎次郎　中村歌右衛門」
11.35291　11.35292／11.38975a-b
国広　大判錦絵 3　天喜　「小ゆき　松江改中村富十郎」／「岩城屋お見津　嵐璃寛」／「狩野四郎次郎　中村歌右衛門」
11.36033a-c

天保4年(1833)1月　中
姫競双葉絵草紙〈ひめくらべふたばえぞうし〉
北英　大判錦絵 2　本清　「猟師浪七　嵐璃寛」／「照手ノまへ　岩井紫若」
11.35305　11.35306
北英　大判錦絵 3　本清　「娘おこま　中村歌六」／「小栗判官兼氏　嵐璃寛」／「小萩実は照手前　岩井紫若」
11.35217　11.35218　11.35219／11.38793
国広　大判錦絵1　本清　「りやうし浪七　嵐璃寛」
11.36028
信勝　大判錦絵1　天喜　「小栗判官兼氏　嵐璃寛」
11.36057

天保4年(1833)1月　中
信州川中島合戦〈しんしゅうかわなかじまかっせん〉
北英　大判錦絵 3　本清　「長尾輝虎　嵐璃寛」／「女房おかつ　中村歌六」／「母越路　実川額十郎」
11.26852　11.26853　11.26854

天保4年(1833)5月　角
国性爺合戦〈こくせんやかっせん〉
北英　大判錦絵 3　本清　「錦祥女　中村富十郎」／「かんき　中村歌右衛門」／「和藤内　嵐璃寛」
11.35223　11.35224　11.35225
国広　大判錦絵1　天喜　「和藤内　嵐璃寛」　11.36022

天保4年(1833)5月　角
藍桔梗雁金五紋〈あいききょうかりがねごもん〉
北英　大判錦絵 2　本清　「雷庄九郎　中村歌右衛門」／「雁文七　嵐璃寛」
11.35303　11.35304

天保4年(1833)9月　中
島廻月弓張〈しまめぐりつきのゆみはり〉
北英　大判錦絵1　本清　「八郎為朝　嵐璃寛」 11.22678
北英　大判錦絵 2　柴伊　［鎮西八郎為朝　嵐璃寛］／［琉球国ノねいわん女　岩井紫若］(R)17.3214.21　17.3214.22
重春　大判錦絵1　［鎮西八郎為朝　嵐璃寛］　11.34997

天保4年(1833)末頃　見立
里見八犬伝〈さとみはっけんでん〉
北英　大判錦絵 2　本清　「犬坂毛野胤智　岩井紫若」／「犬田小文吾安悌　中村芝翫」　11.35293　11.35294
北英　大判錦絵 2　本清　「犬飼見八信道　坂東寿太郎」／「犬塚信乃戌孝　嵐璃寛」　11.35299　11.35300

天保5年(1834)頃　見立
里見八犬伝〈さとみはっけんでん〉
重春　大判錦絵 2　「犬塚信乃戌孝　［嵐璃寛］」／「犬飼見八信道　［中村歌右衛門］」
11.39500a-b

天保5年(1834)1月頃　見立
北英　大判錦絵 5　綿喜　「駒夫根八郎　中村歌右衛門」／「駒舟女房おかね　中村富十郎」／「粟島甲斐之助　嵐

璃寛」／「尼子駒若丸　登り中村芝翫」／「馬方おさむ実はゆかりノ前　岩井紫若」
11.35206　11.35207　11.35208　11.35209　11.35210

天保5年(1834)1月　角
六歌仙容彩〈ろっかせんすがたのさいしき〉
北英　大判錦絵 4　天喜・本清・綿喜　「在原業平　中村芝翫」／「僧正遍照　中村芝翫」／「文屋康秀　中村芝翫」／「喜撰法師　中村芝翫」
11.35182　11.35183　11.35184　11.35185

天保5年(1834)1月　中
けいせい染分総〈けいせいそめわけたづな〉
北英　大判錦絵 1　本清　「三吉　嵐璃寛」「お梅　岩井紫若」　11.35197

天保5年(1834)10月　角
傾城反魂香〈けいせいはんごんこう〉
北英　大判錦絵 1　本清　「はる駒　中村富十郎」「瓢箪鯰　中村芝翫」　11.35191

天保6年(1835)頃　見立
貞升　大判錦絵 2　太　「景清　嵐璃寛」／「奴　中村歌右衛門」　11.36004a-b

天保6年(1835)1月　中
けいせい英草紙〈けいせいはなぶさぞうし〉
北英　大判錦絵 2　本清　「松たじま　嵐璃寛」／「八重姫　岩井紫若」　11.35295　11.35296
北英　大判錦絵5　本清　「きり太郎　坂東寿太郎」／「おせん　中村歌六」「辻要助　実川額十郎」／「吉川景任　嵐璃寛」／「妹しおり　岩井紫若」／「阿曽ケ嶽多楽坊実は尼子秀丸　片岡市蔵」
11.35277　11.35273　11.35274　11.35275　11.35276

天保6年(1835)2月　中
お染久松色読販〈おそめひさまつうきなのよみうり〉
北英　大判錦絵 2　綿喜　「久松　おそめ　岩井紫若」／「母栄妙　岩井紫若」「五百崎の久作　嵐璃寛」
(R)17.3212.22　11.21991

天保6年(1835)3月　角
復讐二島英勇記〈かたきうちにとうえいゆうき〉
北英　大判錦絵1　本清　「宮本無三四　中村芝翫」　11.26599

天保6年(1835)4月　中
契情箱伝授〈けいせいはこでんじゅ〉
北英　大判錦絵1　本清　「つくし権六　中村芝翫」　11.35192

天保6年(1835)5月　中
花櫓詠吉野〈はなやぐらひとめせんぼん〉
北英　大判錦絵2　本清　「釣籠鮓弥介　中村芝翫」／「女房おさと　中村富十郎」　11.35261　11.35262
重春　大判錦絵 2　天喜　「すけノつぼね　中村富十郎」／「平ノ知もり　中村芝翫」　11.36216a-b

天保6年(1835)8月　中
双紋廓錦絵〈ひよくもんさとのにしきえ〉
北英　大判錦絵1　天喜　「水尾四郎左衛門　関三十郎」　(O)65.1724
芦ゆき　大判錦絵1　「平井権八　嵐璃寛」　11.35004
芦ゆき　大判錦絵1 本清　「平井権八　嵐璃寛」　11.35006

天保6年(1835)10月　中
太平記忠臣講釈〈たいへいきちゅうしんこうしゃく〉
北英　大判錦絵2　本清　「小間物屋弥七　嵐璃寛」／「こし元おたか　中村富十郎」　11.38794a-b／11.35286
北英　大判錦絵1　綿喜　「ぬい之助　嵐璃寛」　11.35196

天保6年(1835)11月　中
須磨都源平躑躅〈すまのみやこげんぺいつつじ〉
北英　大判錦絵1 天喜　「小萩実は無官太夫敦盛　嵐璃寛」　11.26597
北英　大判錦絵 2　本清　「熊谷次郎　中村歌右衛門」／「小萩実は無官太夫　嵐璃寛」　11.26632　11.26631
北寿　大判錦絵 1　金花堂　「熊谷次郎直実　中村歌右衛門」「娘小萩実は敦盛　嵐璃寛」　11.35331
北英　大判錦絵1　天喜　「鷲尾三郎　嵐璃寛」　11.26598

天保7年(1836)頃　見立
伊賀越乗掛合羽〈いがごえのりかけがっぱ〉
貞広　大判錦絵 1　天喜　「[佐々木丹右衛門]　中村歌右衛門」「[笹尾]　中村富十郎」「[鳴見]　中村玉助」　11.36475

天保7年(1836)1月　角
けいせい青陽☆〈けいせいはるのとり〉
北英　大判錦絵 1　本清　「柴田修理之輔　芝翫改中村歌右衛門」　11.35194

天保7年(1836)1月　中
花魁莟八総〈はなのあにつぼみのやつふさ〉
北英　大判錦絵 2　本清　「犬塚信乃　嵐璃寛」／「娘浜ぢ　中村富十郎」　11.26630　11.26629
北英　大判錦絵 4　天喜　「杉倉木曽介氏元　関三十郎」／「ふせひめ　中村富十郎」／「金鞠大輔　嵐璃寛」／「けいせい玉梓　中山南枝」
11.35282　11.35283　11.35284　11.35285
北英　大判錦絵 2　本清　「犬塚信乃　嵐璃寛」／「犬川額蔵　関三十郎」　11.35255　11.35256
北英　大判錦絵 2　天喜　「犬塚信乃　嵐璃寛」／「犬塚伴作　関三十郎」　11.35269　11.35270

北英　大判錦絵 1　「杉倉氏元　関三十郎」「定かげ　片岡市蔵」「金鞠大介　嵐璃寛」　11.22628
貞信　大判錦絵 1　本清　「犬塚信の　嵐璃寛」　11.36440

天保 7 年(1836)3 月　中
花魁莟八総〈はなのあにつぼみのやつふさ〉
北英　大判錦絵 1　綿喜　「犬田小文吾　関三十郎」「ふさ八　あらし璃寛」　11.35204
北英　大判錦絵 2　天喜　「犬飼見八　片岡市蔵」／「犬塚信乃　嵐璃寛」　11.35297　11.35298
北英　大判錦絵 2　本清　「舞子朝けの実は犬坂毛野　中村富十郎」／「犬田小文吾　関三十郎」　11.35257　11.35258

天保 7 年(1836)3 月　角
伊賀越道中双六〈いがごえどうちゅうすごろく〉
重春　大判錦絵 1　綿喜　「佐々木丹右衛門　中村歌右衛門」　11.36202

天保 7 年(1836)3 月　大西
花洛清水夜開帳〈みやこきよみずよがいちょう〉
貞信　大判錦絵 1　本清　「芸子いろは　嵐徳三良」　11.36444

天保 7 年(1836)5 月　若太夫
八重霞浪花浜荻〈やえがすみなにわのはまおぎ〉
北英　大判錦絵 1　天喜　「かしく　坂東寿太郎」　(R)17.3212.21

天保 7 年(1836)5 月　北新地
八陣守護城〈はちじんしゅごのほんじょう〉
北英　大判錦絵 1　本清　「加藤政清　嵐璃寛」　11.35193

天保 7 年(1836)6 月　宮島
ひらかな盛衰記〈ひらがなせいすいき〉
貞信　大判錦絵 1　「梶原平治　嵐璃寛」　11.36438

天保 7 年(1836)6 月　宮島
競伊勢物語〈はでくらべいせものがたり〉・
褄重恨鮫鞘〈つまがさねうらみのさめざや〉
北英　大判錦絵 1　天喜　「紀ノ有常　古手や八郎兵衛　嵐璃寛」　11.35198

天保 7 年(1836)6 月　宮島
ひらかな盛衰記〈ひらがなせいすいき〉・
関取千両幟〈せきとりせんりょうのぼり〉
北英　大判錦絵 1　天喜　「樋口ノ次良　岩川次郎吉　嵐璃寛」　11.35199

天保 7 年(1836)8 月　中
頼政鵺物語〈よりまさぬえものがたり〉
北英　大判錦絵 3　本清　「爪琴　中村富十郎」／「源三位頼政　嵐璃寛」／「あやめの前　中村歌六」　11.35214　11.35215　11.35216

天保 7 年(1836)8 月　中
油売人廓話〈あぶらうりくるわばなし〉
北英　大判錦絵 2　天喜　「あふら屋与兵へ　あらし璃寛」／「ふじやあづま　なかむら富十郎」　11.35259　11.35260／11.38976a-b
北英　大判錦絵 2　天喜　「油や与兵衛　嵐璃寛」／「中村歌ほよ」「藤川勝三郎」「藤屋あづま　中村富十郎」　11.26634　11.26633
北英　大判錦絵 1　本清　「油屋与兵へ　嵐璃寛」11.35202

天保 7 年(1836)11 月　京南
八陣守護城〈はちじんしゅごのほんじょう〉
重春　大判錦絵 2　綿喜　「加藤正清　あらし璃寛」／「娘ひなぎぬ　沢村三吉」　11.36218a-b

天保 8 年(1837)頃　見立
花魁莟八総〈はなのあにつぼみのやつふさ〉
貞信　大判錦絵 4　天喜　「犬山道節忠興　中村玉助」／「河鯉権佐守如　三枡源之助」／「犬坂毛野胤智　中村歌右衛門」／「かなめの前　中村富十郎」　11.36448a-d

天保 8 年(1837)1 月頃　見立
俳優擬鶏合〈やくしゃみたてとりあわせ〉
貞信　大判錦絵 3　本清　「八木実柴之助歳吉　中村歌右衛門」／「豊とし姫　中村富十郎」／「新穀大炊之助安成　嵐璃寛」　11.36445a-c

天保 8 年(1837)1 月　角
けいせい小倉☆〈けいせいおぐらのしきし〉
貞信　大判錦絵 1　本清　「笹原隼人　嵐璃寛」　11.36442
貞広　大判錦絵 1　天喜　「笹原隼人　嵐璃寛」　11.36473

天保 8 年(1837)1 月　若太夫
けいせい妹背☆〈けいせいいもせのおしどり〉
貞広　大判錦絵 2　天喜　「おし鳥の精霊　中山南枝」／「おし鳥の精霊　嵐三五郎」　11.36467a-b

天保 8 年(1837)5 月　大西
敵討乗合話〈かたきうちのりあいばなし〉
北妙　大判錦絵 1　本清　「民谷源八郎　嵐璃寛」「奴寸度平　尾上多見蔵」　11.35326

天保 8 年(1837)6 月 13 日　死絵
鰯恋湊〈なまめかしこいのみなと〉
貞信　大判錦絵 1　本清　「俗名嵐璃寛　生涯御名残狂言出村新兵衛」　11.36439

天保 8 年(1837)6 月 13 日　死絵
北妙　大判錦絵 1　「嵐璃寛」　11.35324
北妙　大判錦絵 1　本清　「嵐璃寛」　11.35325

国広　大判錦絵1　天喜　「嵐璃寛」　11.36024
信勝　大判錦絵1　［嵐璃寛］　11.36055／11.36056

天保8年(1837)8月　中　物ぐさ太郎〈ものぐさたろう〉
貞信　大判錦絵2　本清　「物くさ太郎　中村玉助」／「山三妻かづらき　中村歌右衛門」　11.36453a-b

天保8年(1837)8月　中
稲雀誰来観〈いなすずめたれもきてみよ〉
貞信　大判錦絵1　天喜　「中村歌右衛門」「中村玉助」　(R)06.824.25
北妙　大判錦絵2　本清　「中むら歌へもん」「中村芝蔵」／「あさ尾与六」「中むら芝くわん」　(R)06.824.22　06.824.23

天保8年(1837)9月　中
鬼一法眼三略巻〈きいちほうげんさんりゃくのまき〉
貞升　大判錦絵 4　天喜・紅宗　「皆鶴姫　中村富十郎」／「鬼一法眼　中村玉助」／「奴智恵内　三枡源之助」／「牛若丸　中村歌六」　11.36008a-d

天保8年(1837)9月　中
会稽雪鉢木〈かいけいゆきのはちのき〉
貞信　大判錦絵 2　天喜　「佐野の源左衛門　中村玉助」／「先の白たゑ亡霊　中村富十郎」　11.36449a-b／11.36450a-b

天保9(1838)年頃
貞広　大判錦絵1　「実川延三郎」　11.36470

天保9年(1838)1月頃　見立
比良嶽雪見陣立〈ひらがだけゆきみのじんだて〉
貞芳　大判錦絵 3　綿喜　「真柴久よし　中村歌右ヱ門」／「清香姫　中村富十郎」／「柴田権六　尾上多見蔵」　11.37800a-c

天保9(1838)年1月　角
けいせい廓船諷〈けいせいさとのふなうた〉
貞広　大判錦絵1　天喜　「はしとみ良介　三枡源之助」　11.36469
貞信　大判錦絵 1　天喜　「けいせい菱垣　南枝改中山よしを」　11.36436／11.36437

天保9(1838)年1月　角
加賀見山旧錦絵〈かがみやまこきょうのにしきえ〉
貞信　大判錦絵3　天喜　「局岩ふじ　坂東寿太郎」／「召使お初　中村富十郎」／「中老尾上　三枡源之助」　11.36462a-c／(R)17.3211.13　17.3211.14

天保9(1838)年1月　中
仮名手本忠臣蔵〈かなでほんちゅうしんぐら〉
貞升　大判錦絵1　本清　「早ノ勘平　中村歌右衛門」　11.36007

天保9(1838)年1月　中
昔慕やはり七化〈ふるめかしけれどやはりななばけ〉
貞信　大判錦絵 4　本清　「大原女　なり平　中村歌右衛門」／「太夫　座頭　中村歌右衛門」／「越後獅子　仕丁　中村歌右衛門」／「朱鍾馗　中村歌右衛門」　11.36508　11.36459　11.36461　11.36460／(R)17.3212.9　17.3213.7

天保9(1838)年1月　大西
日本第一和布苅神事〈にっぽんだいいちめかりのじんじ〉
貞芳　大判錦絵 1　綿喜　「長門之助　実川延三郎」「おはし　嵐徳三郎」　11.16422

天保9(1838)年7月　堀江
女猿曳☆諷〈おんなさるまわしかどでのひとふし〉
貞信　大判錦絵1　天喜　「猿廻し小よし　中村富十郎」　11.36451

天保9(1838)年7月25日　死絵
貞信　大判錦絵1　天喜　「中村玉助」　11.36452

天保10年（1839）頃　外題未詳
豊秀　大判錦絵1　本清　［松風ヵ　中村富十郎］
※役名・役者名上貼り紙故未考証　(R)17.3212.11

天保10年（1839）1月　角
けいせい浜真砂〈けいせいはまのまさご〉
貞雪　大判錦絵1「石川屋真砂路　中村富十郎」　11.36190

天保10年（1839）1月　角
先代萩若栄〈ちよのはるはぎのわかばえ〉
貞升　大判錦絵1　「乳ノ人政岡　中村富十郎」　11.36006

天保10年（1839）3月　角
妹背山婦女庭訓〈いもせやまおんなていきん〉
貞広　大判錦絵1　本清　「りやうしふか七　あらし璃珏」　11.36472

天保10年（1839）3月　角
廓文章〈くるわぶんしょう〉
貞升　大判錦絵 2　本清　「藤屋伊左衛門　片岡我童」／「扇屋夕きり　中村富十郎」　11.36005a-b

天保10年（1839）5月　天満
ひらかな盛衰記〈ひらがなせいすいき〉
貞升　中判錦絵 1　「源太景季　片岡我童」「梅ヶ枝　中山よしを」　11.26003

天保10年（1839）8月　大西
関取千両幟〈せきとりせんりょうのぼり〉
貞升　中判錦絵 2　「鉄ケ嶽陀左衛門　片岡市蔵」／「岩川次郎吉　嵐徳三郎」　11.35977　11.35976

天保 10 年（1839）9 月　中
伊達娘恋緋鹿子〈だてむすめこいのひがのこ〉
貞信　大判錦絵 2　天喜　「小性吉三　市川森之助」／「八百屋お七　尾上多見蔵」　(R) 17.3210.10　17.3210.11

天保 10 年（1839）11 月　角
檀浦兜軍記〈だんのうらかぶとぐんき〉
豊秀　大判錦絵 1　本清　「けいせゐ阿古屋　市川団蔵」　11.35247

天保 11 年（1840）1 月　角
けいせい青陽☆〈けいせいはるのとり〉
貞信　大判錦絵 1　天喜　「三七郎信孝　市川団蔵」　11.36441

天保 11 年（1840）3 月　中
猿曳☆一諷〈さるまわしかどでのひとふし〉
貞芳　大判錦絵 1　ふし太　「猿廻し与治郎　坂東寿太郎」　11.21995／11.22763

天保 11 年（1840）3 月　中
義臣伝読切講釈〈ぎしんでんよみきりこうしゃく〉
貞信　大判錦絵 1　天喜　「蘭の方　中村富十郎」　(R) 17.3213.6

天保 11 年（1840）8 月　中
隅田川続俤〈すみだがわのちのおもかげ〉
貞雪　大判錦絵 1　「法界坊霊魂　中村芝翫」　11.36189

天保 12 年（1841）1 月　中
けいせい楊柳桜〈けいせいやなぎさくら〉
貞信　大判錦絵 1　天喜　「淀屋辰五郎　片岡我童」　(R) 17.3212.8
豊秀　大判錦絵 1　本清　「淀屋辰五郎　片岡我童」　11.35254
豊秀　大判錦絵 1　綿喜　「服部金五郎　片岡我童」　11.35248

天保 12 年（1841）4 月　中
天満宮菜種御供〈てんまんぐうなたねのごくう〉
貞信　大判錦絵 2　天喜　「宿祢太良　片岡我童」／「後室覚寿　中村富十郎」　11.36454a-b

天保 12 年（1841）4 月　中
男作五雁金〈おとこだていつつかりがね〉
貞信　大判錦絵 1　金花堂　「布袋市右衛門　実川延三郎」　11.36463
貞芳　大判錦絵 1　綿喜　「かり金文七　中村芝翫」「雷庄九郎　浅尾工左衛門」「安の平兵衛　片岡我童」「極印平右衛門　中村友三」「布袋市右衛門　実川延三郎」　11.21993

天保 12 年（1841）8 月　角
敵討崇禅寺馬場〈かたきうちそうぜんじばば〉
貞信　大判錦絵 1　「児富丸　片岡我童」　11.36465

天保 12 年（1841）9 月　角
契情狭妻櫛〈けいせいさつまぐし〉
貞広　大判錦絵 1　天喜　「千島司之介　中村歌十良」　11.36474

天保 12 年（1841）9 月　中
恋女房染分手綱〈こいにょうぼうそめわけたづな〉
貞信　大判錦絵 1　金花堂　「乳人重の井　中村富十郎」　11.36464

天保 13 年（1842）1 月　中
傚花傾城道成寺〈てくだのはなけいせいどうじょうじ〉
貞広　大判錦絵 2　天喜　「松島坊　片岡我童」／「瀬川の霊　中村富十郎」　11.36468a-b

天保 13 年（1842）3 月　中
鏡山再続俤〈かがみやまごにちのおもかげ〉
貞信　大判錦絵 2　天喜　「よし田松前丸　尾上菊五郎」／「花子後ニ清玄尼　中村富十郎」　11.36455a-b

弘化 4 年(1847)11 月　竹田
双紋廓錦絵〈ひよくもんくるわのにしきえ〉
広貞　中判錦絵 1　「白井権八　［実川延三郎］」　11.35662

弘化 5 年(1848)頃　見立
姫競双葉絵草紙〈ひめくらべふたばえぞうし〉
広貞　中判錦絵 1　川音　「小栗はん官　［実川延三郎］」　11.35663

弘化 5 年(1848)頃　見立
義経千本桜〈よしつねせんぼんざくら〉
貞升　中判錦絵 1　金花堂　「ぎん平　［片岡我童］」　11.36001

嘉永 1 年(1848)以降　伊賀越道中双六　※非役者絵
国員　大判錦絵 4　綿喜　「伊賀越道中双六　第三」／「伊賀越道中双六　第五」／「伊賀越道中双六　第七」／「伊賀越道中双六　第十一」　(R) 11.2240　06.787　06.1757　06.786

嘉永 1 年(1848)3 月　角
敵討巌流島〈かたきうちがんりゅうじま〉
広貞　中判錦絵 1　本清　「宮本むさし　［嵐璃珏］」　11.35649

嘉永 1 年(1848)3 月　筑後
伽羅先代萩〈めいぼくせんだいはぎ〉
広貞　中判錦絵 2　金花堂　「松ゲ枝鉄の介　［片岡我童］」／「斎原かげゆ　［嵐璃寛］」　11.35609a-b

嘉永 1 年(1848)7 月　若太夫
小野道風青柳硯〈おののとうふうあおやぎすずり〉
広貞　中判錦絵 1　「小野道風　［嵐璃寛］」　11.35643

嘉永 1 年(1848)8 月　中

東都産伊達雛形〈あずまみやげだてのひながた〉
貞升　中判錦絵1　「仁木だん正　［大川橋蔵］」　11.36002

嘉永1年(1848)10月　筑後
千種の乱咲〈ちぐさのみだれざき〉
升信　中判錦絵1　［椀久　中村玉七］　11.36090

嘉永1年(1848)11月　京南
忠孝誉二街〈ちゅうこうほまれのふたみち〉
広貞　中判錦絵1　川音　「六部弟合法　［片岡我童］」　11.35664

嘉永2年(1849)頃　見立
けいせい雪月花〈けいせいせつげっか〉
国重　中判錦絵1　「小ぶな源五郎　［片岡我童］」11.36184

嘉永2年(1849)1月　角
花雪歌清水〈はなふぶきうたのきよみず〉
国員　中判錦絵1　「奴妻平　［嵐璃寛］」　11.37050

嘉永2年(1849)1月　筑後
新玉る鵜の思羽〈あらたまるおしのおもいば〉
広貞　大判錦絵 3　［鴛鴦の精霊　中村玉七］／［鴛鴦の精霊　嵐璃珏］／［鴛鴦の精霊　沢村其答］　11.21331　11.21332　11.21333

嘉永2年(1849)3月　中
桜舞台近江八景〈さくらぶたいおうみはっけい〉
国重　中判錦絵1　堀亀　「たいこ持仁作　［実川延三郎］」　11.36185

嘉永2年(1849)4月　角
仮名手本忠臣蔵〈かなでほんちゅうしんぐら〉
無款　中判錦絵1　石和　「早野勘平　［市川市紅］」　11.35018

嘉永2年(1849)4月　中
敵討襤褸錦〈かたきうちつづれのにしき〉
広貞　中判錦絵1　金花堂　「高市武右衛門　［三枡大五郎］」　11.22635

嘉永2年(1849)閏4月　筑後
五大力恋縅〈ごだいりきこいのふうじめ〉
広貞　中判錦絵 3　金花堂　「芸子菊の　［沢村其答］」／「笹野三五兵衛　［市川海老蔵］」／「勝間源五兵衛　［三枡大五郎］」　11.35566a-c
広貞　中判錦絵3　天喜　「三五兵衛　［市川海老蔵］／「源五兵衛　［三枡大五郎］」／「菊の　［沢村其答］」　11.35565a-c

嘉永2年(1849)8月　中
棹歌木津川八景〈さおのうたきずがわはっけい〉
広貞　中判錦絵 3　「堀口万右衛門　［市川海老蔵］」／「木津勘助　［実川延三郎］」／「渡守三十郎　［片岡市蔵］」　11.35563a-c

嘉永3年(1850)1月　中
座附引合〈ざつきひきあわせ〉
広貞　中判錦絵1　［中村歌右衛門］　11.35646

嘉永3年(1850)1月　中
けいせい誉両刀〈けいせいほまれのすけだち〉
広貞　中判錦絵1　「池添孫八　［実川延三郎］」　11.35661
広貞　中判錦絵 3　川音　「唐木政右衛門　［中村歌右衛門］」／「おたに　［中山南枝］」／「山田幸兵衛　［三枡大五郎］」　11.35638a-c
広貞　中判錦絵2　蔦勘　「誉田内記　［三枡大五郎］」／「唐木政右衛門　［中村歌右衛門］」　11.35638a-b
広貞　中判錦絵2　錦鯱堂　「娘お袖　［尾上芙雀］」／「唐木政右衛門　［中村歌右衛門］」　11.35612a-b
貞信　中判錦絵 2　「誉田大内記　［三枡大五郎］」／「唐木政右衛門　［中村歌右衛門］」　11.36458a-b

嘉永3年(1850)1月　中
三春翫雀躍〈みつのはるすずめのたわむれ〉
貞芳　大判錦絵1　本清　「けいせい浪花津　［中村歌右衛門］」「禿やり梅　［中村玉七］」「新造うら梅　［中村福助］」　11.22000／11.22769
芳国　中判錦絵3　「初ぞら太夫　［中村歌右衛門］」／「馬のり駒吉　［中村歌右衛門］」／「かげ清　［中村歌右衛門］」　11.36242a-c

嘉永3年(1850)3月　中
妹背山婦女庭訓〈いもせやまおんなていきん〉
広貞　中判錦絵1　「定高　［三枡大五郎］」　11.35666
広貞　中判錦絵4　川音　「大判事　［中村歌右衛門］」／「久我之助　［実川延三郎］」／「定高　［三枡大五郎］」／「ひな鳥　［中山南枝］」　11.35627a-d

嘉永3年(1850)3月　中
堂島救入浜〈どうじますくいのたてひき〉
広貞　中判錦絵2　天喜　「浜地源左衛門　［三枡大五郎］」／「黒船忠右衛門　［中村歌右衛門］」　11.35633a-b
広貞　中判錦絵 3　川音　「黒船忠右衛門　［中村歌右衛門］」／「はんじもん喜兵衛　［実川延三郎］」／「女房お政　［中山南枝］」　11.35564a-c

嘉永3年(1850)3月　筑後
和田合戦女舞鶴〈わだがっせんおんなまいづる〉
広貞　中判錦絵 2　「あさりの与市　［嵐璃珏］」／「半がく女　［嵐璃寛］」　11.35636a-b／11.35635

嘉永3年(1850)5月　筑後
宿無団七時雨傘〈やどなしだんしちしぐれからかさ〉
貞信　中判錦絵1　鹿島堂　「団七茂兵衛　［片岡我童］」　11.36457

嘉永3年(1850)8月　中
児淵恋白浪〈ちごがふちこいのしらなみ〉

広貞　中判錦絵 3　「真柴久次　［実川延三郎］」／「淀町御前　［中山南枝］」／「石田ノ局　［中村歌右衛門］」
11.35640a-c

嘉永 3 年(1850)8 月　中
義経腰越状〈よしつねこしごえじょう〉
広貞　中判錦絵 2　「娘とく女　［中村玉七］」／「女房関女　［中村歌六］」　11.35554a-b
広貞　中判錦絵 2　「五斗兵衛　［中村歌右衛門］」／「井水ノ三郎　［三枡大五郎］」　11.35667a-b

嘉永 3 年(1850)9 月　中
花街模様劇稲妻〈さともようかぶきのいなづま〉
広貞　中判錦絵 2　名楽堂　「名古屋山左衛門　［三枡大五郎］」／「不破伴左衛門　［中村歌右衛門］」
11.35599a-b／11.35598
広貞　中判錦絵 3　「名古屋山三　［実川延三郎］」／「梅津嘉門　［三枡大五郎］」／「斯波左衛門　［三枡梅舎］」「猿次郎介　［三枡源之助］」　11.35596a-c
広貞　中判錦絵 3　「佐々木蔵人　［三枡大五郎］」／「不破伴左衛門　［中村歌右衛門］」／「名古屋山三　［実川延三郎］」　11.35592a-c
広貞　中判錦絵 2　天喜　「娘かゐで　［中山南枝］」「下人野介　［中村鷲助］」／「名古屋山三　［実川延三郎］」
11.35593a-b
広貞　中判錦絵 3　川音　「大津屋又平　［中村歌右衛門］」「番頭門兵衛　［中村友三］」／「名古屋山三　［実川延三郎］」／「娘かゐで　［中山南枝］」　11.35595a-c
広貞　中判錦絵 3　「不破伴左衛門　［中村歌右衛門］」／「おくに　［山下金作］」／「かづらき　［中山南枝］」
11.35594a-c
広貞　中判錦絵 2　川音　「名古屋山三　［実川延三郎］」／「奴鹿蔵　［三枡梅舎］」　11.35611a-b
広貞　中判錦絵 4　「名古屋山三　［実川延三郎］」／「不破伴左衛門　［中村歌右衛門］」／「かつら木　［中山南枝］」／「佐々木蔵人　［三枡大五郎］」　11.35597a-d／11.35567a-c

嘉永 3 年(1850)9 月　中　廓文章〈くるわぶんしょう〉
広貞　中判錦絵 3　「伊左衛門　［中村歌右衛門］」／「喜左衛門　［三枡大五郎］」／「夕きり　［中山南枝］」
11.35641a-c

嘉永 3 年(1850)9 月　若太夫
相馬太郎☆文談〈そうまたろうみばえぶんだん〉
広貞　中判錦絵 2「滝夜叉姫　［嵐璃寛］」／「うとふ安方［嵐璃珏］」　11.35634a-b

嘉永 3 年(1850)9 月　若太夫
戻駕色相肩〈もどりかごいろにあいかた〉
広貞　中判錦絵 3　川音　「あづまノ与四郎　［尾上多見蔵］」／「浪花ノ次郎作　［嵐璃寛］」／「かむろたより　［嵐璃珏］」　11.35568a-c
広貞　中判錦絵 1　川音　「かむろ　［嵐璃珏］」　11.35651

嘉永 3 年(1850)11 月　角
菅原伝授手習鑑〈すがわらでんじゅてならいかがみ〉
広貞　中判錦絵 2　「さくら丸　［嵐璃珏］」／「八重　［嵐璃寛］」　11.35642a-b
広貞　中判錦絵 3　「春藤玄蕃　［嵐璃寛］」／「松王丸　［尾上多見蔵］」／「武部源蔵　［嵐璃珏］」　11.35614a-c

嘉永 4 年(1851)頃　見立
花魁莟八総〈はなのあにつぼみのやつふさ〉
広貞　中判錦絵 2　川音　「勇利金太　［中村友三］」「ぬか助　［中村歌右衛門］」／「信乃　［嵐璃珏］　11.35626a-b

嘉永 4 年(1851)頃　見立
島廻月弓張〈しまめぐりつきのゆみはり〉
広貞　中判錦絵 2　「八郎為朝　［中村歌右衛門］」／「島女長女　［中山南枝］」　11.35644a-b

嘉永 4 年(1851)1 月　角
姫競双葉絵草紙〈ひめくらべふたばえぞうし〉
広貞　中判錦絵 3　川音　「足利よし満　［嵐璃寛］」／「小栗判官　［片岡我童］」／「奴三千助　［嵐璃珏］」
11.35587a-c
広貞　中判錦絵 2　「奴三千助　［嵐璃珏］」／「小栗判官［片岡我童］」　11.35562a-b
広貞　中判錦絵 3　「細川政房　［尾上多見蔵］」／「小栗判官　［片岡我童］」／「風間八郎　［片岡市蔵］」
11.35588a-c
広貞　中判錦絵 1　「小栗判官　［片岡我童］」　11.35653

嘉永 4 年(1851)1 月　角
当世八文字〈とうせいはちもんじ〉
広貞　中判錦絵 3　「唐金茂右衛門　［嵐璃寛］」／「筑波茂右衛門　［嵐璃珏］」／「三笠茂右衛門　［片岡我童］」
11.35617a-c

嘉永 4 年(1851)1 月　中
けいせい清船諷〈けいせいきよめのふなうた〉
広貞　中判錦絵 1　「深見勝五郎　［中村歌右衛門］」
11.35660
広貞　中判錦絵 1　金花堂　「娘おつゆ　［中山南枝］」「深見勝五郎　［中村歌右衛門］」　11.35659
広貞　中判錦絵 2　川音　「深見勝五郎　［中村歌右衛門］」／「娘おつゆ　［中山南枝］」　11.35582a-b
広貞　中判錦絵 2　天喜　「おつゆ　［中山南枝］」／「深見勝五郎　［中村歌右衛門］」　11.35608a-b
広貞　中判錦絵 3　「小西弥十郎　［三枡大五郎］」／「娘おつゆ　［中山南枝］」／「深見勝五郎　［中村歌右衛門］」
11.35581a-c
広貞　中判錦絵 3　「おつゆ　［中山南枝］」／「小西弥十

郎 ［三枡大五郎］」／「深見勝五郎 ［中村歌右衛門］」
11.35584a-c
広貞 中判錦絵 2 「加藤正清 ［中村歌右衛門］」／「船頭与次兵衛 ［中村友三］」 11.35583a-b
広貞 中判錦絵3 鹿島堂 「加藤正清 ［中村歌右衛門］」／「木村又蔵 ［実川延三郎］」／「加藤寅之介 ［実川延作］」「八ツ代 ［中山南枝］」 11.35586a-c／11.35585
広貞 中判錦絵1 「加藤正清 ［中村歌右衛門］」11.35647
広貞 中判錦絵1 「加藤正清 ［中村歌右衛門］」11.35655
広貞 中判錦絵 2 「木村又蔵 ［実川延三郎］」／「加藤正清 ［中村歌右衛門］」 11.35559a-b／11.35558

嘉永4年(1851)1月 中
初戎福徳歌〈はつえびすふくやとくわか〉
広貞 中判錦絵 1 「徳若才蔵 ［中村歌右衛門］」「万歳徳太夫 ［三枡大五郎］」 11.35658

嘉永4年(1851)2月 筑後
明烏夢泡雪〈あけがらすゆめのあわゆき〉
広貞 中判錦絵 3 「山名屋文三 ［嵐三幸］」「みどり［嵐千鳥］」／「浦さと ［沢村其答］」／「とき次郎 ［中山文七］」 11.35613a-c

嘉永4年(1851)3月 中
花相撲蝶々紋日〈はなずもうちょうちょうのもんび〉
広貞 中判錦絵 3 川音 「幻竹右衛門 ［三枡大五郎］」／「放駒長吉 ［実川延三郎］」／「濡髪長五郎 ［中村歌右衛門］」 11.35573a-c
広貞 中判錦絵2 「濡髪長五郎 ［中村歌右衛門］」／「放駒長吉 ［実川延三郎］」 11.35575a-b
広貞 中判錦絵3 錦鯱堂 「濡れ髪長五郎 ［中村歌右衛門］」／「行事庄九郎 ［片岡市蔵］」／「放駒長吉 ［実川延三郎］」 11.35576a-c

嘉永4年(1851)5月 中
仮名手本忠臣蔵〈かなでほんちゅうしんぐら〉
広貞 中判錦絵4 「桃井若狭之介 ［実川延三郎］」／「塩冶判官 ［三枡大五郎］」／「高ノ師直 ［中村歌右衛門］」／「かほよ御前 ［山下金作］」 11.35630a-d
広貞 中判錦絵 2 「塩冶判官 ［三枡大五郎］」／「高ノ師直 ［中村歌右衛門］」 11.35631a-b
広貞 中判錦絵3 「石堂右馬之丞 ［実川延三郎］」／「塩冶判官 ［三枡大五郎］」／「大星由良之助 ［中村歌右衛門］」 11.35632a-c
広貞 中判錦絵 3 川音 「百性弥作 ［中村歌右衛門］」／「千崎弥五郎 ［三枡梅舎］」／「女房おかよ ［山下金作］」 11.35628a-c

嘉永4年(1851)5月 中
宿無団七時雨傘〈やどなしだんしちしぐれのからかさ〉
広貞 中判錦絵1 「団七ノ茂兵衛 ［中村歌右衛門］」「岩井風呂富 ［中山南枝］」 11.35657
広貞 中判錦絵1 「団七ノ茂兵衛 ［中村歌右衛門］」 11.35656
広貞 中判錦絵4 川音 「女郎とみ ［中山南枝］」／「治助 ［片岡市蔵］」「廻し作兵衛 ［市川市友］」／「女房かじ ［山下金作］」「廻し久七 ［中村友三］」／「団七茂兵衛 ［中村歌右衛門］」 11.35602a-d／11.35601a-b
広貞 中判錦絵 2 「並木正三 ［三枡大五郎］」／「団七茂兵衛 ［中村歌右衛門］」 11.35603a-b
広貞 中判錦絵2 「団七茂兵衛 ［中村歌右衛門］」／「女郎とみ ［中山南枝］」 11.35604a-b

嘉永4年(1851)8月 中
ひらかな盛衰記〈ひらがなせいすいき〉
広貞 中判錦絵 2 「梶原平次 ［中村歌右衛門］」／「こしもと千鳥 ［中山南枝］」 11.35579a-b
広貞 中判錦絵 4 「秩父ノ重忠 ［三枡大五郎］」／「樋口次郎 ［中村歌右衛門］」／「駒若丸 ［三枡雀三郎］」「権四郎 ［片岡市蔵］」／「女房およし ［中山南枝］」 11.35580a-d
広貞 中判錦絵 2 「駒若丸 ［三枡雀三郎］」「松右衛門［中村歌右衛門］」／「権四郎 片岡市蔵」 11.35553a-b
広貞 中判錦絵 4 「母円寿 ［三枡大五郎］」／「梶原平次 ［中村歌右衛門］」／「梶原源太 ［実川延三郎］」／「こしもと千鳥 ［中山南枝］」 11.35569a-d／11.35570a-d
広貞 中判錦絵2 蔦勘・錦鯱堂 「梅ヶ枝 ［中山南枝］」／「梶原源太 ［実川延三郎］」 11.35556a-b

嘉永4年(1851)8月 中
五大力恋縅〈ごだいりきこいのふうじめ〉
広貞 中判錦絵 3 「けい子菊の ［中山南枝］」／「勝間源五兵衛 ［中村歌右衛門］」／「笹野三五兵衛 ［三枡大五郎］」 11.35577a-c
広貞 中判錦絵 2 大甚 「勝間源五兵衛 ［中村歌右衛門］」／「若とふ八右衛門 ［実川延三郎］」 11.35578a-b

嘉永4年(1851)8月 筑後
傾城狭妻櫛〈けいせいさつまぐし〉
広貞 中判錦絵 2 「千島ノ頭 ［嵐璃珏］」／「六部快了［片岡我童］」 11.35561a-b

嘉永4年(1851)9月 中
菅原伝授手習鑑〈すがわらでんじゅてならいかがみ〉
広貞 中判錦絵 3 池吉 「かりや姫 ［中村梅花］」「覚寿 ［市川助寿郎］」／「菅丞相 ［三枡大五郎］」／「輝国［中村歌右衛門］」 11.35610a-c
広貞 中判錦絵 3 「梅王丸 ［三枡大五郎］」／「松王丸［中村歌右衛門］」／「桜丸 ［実川延三郎］」 11.35637a-c／11.35654
嘉永4年(1851)9月 中

嫗山姥〈こもちやまんば〉
広貞　中判錦絵 2　「坂田蔵人　［三枡大五郎］」／「八重桐　［中村歌右衛門］」　11.35574a-b
広貞　中判錦絵 2　「田葉粉や源七　［三枡大五郎］」／「八重きり　［中村歌右衛門］」　11.35560a-b

嘉永 4 年(1851) 11 月　中　式三番〈しきさんばん〉
広貞　中判錦絵 2　金花堂　「三番叟　［中村歌右衛門］」／「浦島　［中村歌右衛門］」　11.35557a-b

嘉永 5 年(1852)頃　見立
粂の仙人吉野桜〈くめのせんにんよしのざくら〉
貞広　中判錦絵 2　「粂ノ王子　［三枡大五郎］」／「たへま姫　［藤川友吉］」　11.36471a-b

嘉永 5 年(1852)1 月　中
四海平清盛〈よつのうみたいらのよざかり〉
広貞　中判錦絵 2　天喜　「鶴屋伝三　［実川延三郎］」／「貝屋善吉　［中村歌右衛門］」　11.35629a-b

嘉永 5 年(1852)1 月　中　六歌仙〈ろっかせん〉
広貞　中判錦絵 6　川音　「へん正　［中村歌右衛門］」／「康秀　［中村歌右衛門］」／「喜せん　［中村歌右衛門］」／「小町　［中山南枝］」／「なり平　［中村歌右衛門］」／「黒ぬし　［中村歌右衛門］」　11.35606a-f／11.35607

嘉永 5 年(1852)2 月　筑後
須磨都源平躑躅〈すまのみやこげんぺいつつじ〉
広貞　中判錦絵 2　「熊谷次郎　［三枡大五郎］」／「敦盛［三枡源之助］」　11.35618a-b

嘉永 5 年(1852)2 月　筑後
男作五雁金〈おとこだていつつかりがね〉
広貞　中判錦絵 4　池吉　「雷庄九郎　［片岡市蔵］」／「かり金文七　［三枡大五郎］」／「角左衛門　［片岡我童］」／「安ノ平兵衛　［中山文七］」「「極印十右衛門　［姉川新四郎］」　11.35621a-d

嘉永 5 年(1852)3 月　角
けいせい稚児渕〈けいせいちごがふち〉
広貞　中判錦絵 2　「捨わか丸　［中村玉七］」／「髪ゆひ源五郎　［嵐璃珏］」　11.35591a-b

嘉永 5 年(1852)3 月頃　見立
けいせい稚児淵〈けいせいちごがふち〉
広貞　中判錦絵 2　「武智左馬之介　［中村歌右衛門］」／「捨若丸　［中村玉七］」　11.35590a-b

嘉永 5 年(1852)3 月　中
花楓小倉の色紙〈はなもみじおぐらのしきし〉
広貞　大判錦絵 1　錦鰐堂　「弥平次　［中村友三］」「笹原隼人　［片岡我童］」　11.35589

嘉永 5 年(1852)3 月　中
伊勢音頭恋寝剣〈いせおんどこいのねたば〉
広貞　中判錦絵 2　錦鰐堂／錦鰐堂・蔦勘　「伯母おみね［片岡我童］」／「福岡貢　［実川延三郎］」　11.35619a-b／11.35620a-b

嘉永 5 年(1852)8 月　筑後
遠江潟恋賊〈とおとうみがたこいのしらなみ〉
広貞　中判錦絵 3　伊勢吉　「唐銅や幸兵へ　［市川助寿郎］」／「日本駄右衛門　［嵐璃珏］」／「牙ノお斎　［藤川友吉］」　11.35623a-c

嘉永 5 年(1852)8 月　筑後
茜染野中隠井戸〈あかねぞめのなかのかくれいど〉
広貞　中判錦絵 2　天喜　「梅ノ由兵衛　［嵐璃珏］」／「でつち長吉　［中村玉七］」　11.35571a-b

嘉永 6 年(1853)1 月　角
景清曽我賑不尽〈けいせいそがはるのふじがね〉
広貞　中判錦絵 5　川音　「工藤左右衛門　［市川団蔵］」／「舞つる姫　［藤川友吉］」／「小林朝日丸　［中村玉七］」／「曽我十郎　［片岡我童］」／「曽我五郎　［市川海老蔵］」　11.35624a-e
広貞　中判錦絵 2　「いわ永　［市川海老蔵］」／「重忠　［片岡我童］」　11.35616a-b
広貞　中判錦絵 3　「岩永　［市川海老蔵］」／「重忠　［片岡我童］」／「あこや　［市川団蔵］」　11.35625a-c
広貞　中判錦絵 3　天喜　「母万江　［市川団蔵］」／「曽我五郎　［市川海老蔵］」／「曽我十郎　［片岡我童］」　11.35600a-c
広貞・国員　中判錦絵 2　錦鰐堂　「曽我十郎　［片岡我童］」／「曽我五郎　［市川海老蔵］」　11.35790a-b／11.35797a-b
宗広　中判錦絵 1　「畠山重忠　［片岡我童］」　11.35979

嘉永 7 年(1854)1 月　中
けいせい染分☆〈けいせいそめわけたづな〉
貞信　中判錦絵 1　「田葉粉や三吉　［実川延三郎］」　11.36456
広貞　中判錦絵 1　「たばこや三吉　［実川延三郎］」　11.35648

嘉永 7 年(1854)8 月　中
児雷也豪傑譚語〈じらいやごうけつものがたり〉
国晴　中判錦絵 2　「妖婦越路　［尾上梅幸］」／「児雷也［市川猿蔵］」「妖童小ぐさ　［市川てる代］」　11.36000a-b

安政 2 年(1855)8 月　角
敵討優曇華亀山〈かたきうちうききのかめやま〉

広貞　中判錦絵2　金花堂　「石井源蔵　［ 嵐璃珏］」／「石井兵介　［実川延三郎］」　1.35572a-b
広貞　中判錦絵1　「赤堀水右衛門　［三枡大五郎］」　11.35650

安政3年(1856)1月　中
浪乗曽我花景清〈なみのりそがはなのかげきよ〉
芳豊　大判錦絵1　［宇佐美三郎　中村友三、大磯ノ虎　中山南枝、小林ノ朝比奈　尾上多見蔵、一前司祐つね　市川鰕十郎、曽我ノ五郎　市川海老蔵、久賀美の三郎　市川市蔵、曽我ノ十郎　実川延三郎］　11.36249

安政3年(1856)2月　筑後
隅田川続俤〈すみだがわごにちのおもかげ〉
広信　中判錦絵 2　「との直之助　［三枡稲丸］」／「法界坊亡魂　［嵐璃珏］」　11.35080　11.35081

安政3年(1856)8月　筑後
勝鬨黄金瓢〈かちどきこがねのうまじるし〉
広信　中判錦絵 2　金花堂　「松永大膳　［三枡大五郎］」／「真柴久吉　［嵐璃珏］」　11.35069　11.35070

安政3年(1856)9月　中
敵討☆合邦〈かたきうちににんがっぽう〉
国計　中判錦絵2　「弟合邦　実川延三郎」／「兄合邦　嵐吉三郎」　11.3997a-b

安政3年(1856)9月　中
会稽雪後日鉢木〈つもるゆきのちのはちのき〉
芳豊　中判錦絵1　「白砂之霊　［嵐璃寛］」　11.36252

安政3年(1856)9月　筑後
花雲佐倉曙〈はなのくもさくらのあけぼの〉
国計　中判錦絵2　京伊三　「女房お三　中山南枝」／「藤五郎　嵐りかく」　11.35998a-b
国計　中判錦絵 2　石和　「印旛喜右衛門　嵐冠十郎」／「岩橋村藤五郎　嵐りかく」　11.35999a-b
広信　中判錦絵1　「能役者珏阿弥　嵐璃珏」　11.35050

安政4年(1857)頃　見立
男哉婦将門〈おとこなりけりおんなまさかど〉
芳峰　中判錦絵1　「乙姫　［嵐璃珏］」　11.36243

安政4年(1857)頃　外題未詳
国員　中判錦絵1　「勝見大助」「須川長左衛門」　11.21116

安政4年(1857)1月　角
けいせい八花魁〈けいせいやつのはなふさ〉
芳滝　中判錦絵1　「犬坂毛乃　［嵐璃寛］」　11.35533
国員　中判錦絵 2　「犬坂毛の　嵐りくわん」／「犬田小文五　嵐吉三郎」　11.35786a-b
国員　中判錦絵 2　「犬田小文五　嵐吉三郎」「けいせひ花橘　中むら大吉」／「犬坂毛の　嵐璃寛」　11.20662a-b
国員　中判錦絵 2　「猫一角　中むら雀右衛門」「犬むら角太郎　尾上多見蔵」／「犬飼現八　嵐璃珏」　11.35801a-b／11.20660　11.20659
国員　中判錦絵 2　「犬飼現八　嵐璃珏」／「富山一藤太中むら中助」　11.21114　11.21107
国員　中判錦絵3　「犬山道節　尾上多見蔵」／「山内頼貞　嵐璃珏」／「毛のはゝ　中むら歌六」「犬坂毛の　嵐璃寛」　11.20665a-c
国員　中判錦絵1　「けいせい花橘　中むら大吉」　11.21108
国員　中判錦絵1　「犬飼現八　嵐璃珏」　11.37052

安政4年(1857)1月　角
初翠緑尾上岩藤〈はつみどりおのえいわふじ〉
国員　中判錦絵2　「岩ふじ　嵐吉三郎」／「召仕はつ　嵐璃寛」　11.37056a-b

安政4年(1857)1月　中
けいせい長者艦〈けいせいちょうじゃつりふね〉
国員　中判錦絵 2　「朝比奈三良　実川延三郎」／「ぼさ平　三桝大五郎」　11.35807a-b
国員　中判錦絵3　「女西行うつしへ　中山なんし」／「源ノ頼家　実川延三郎」／「けいせいもぢ鶴　嵐三右衛門」　11.20657a-b　11.21103
芳豊　中判錦絵 2　「冠者義高　［市川海老蔵］」／「竹川正忠　［市川鰕十郎］」　11.36250a-b

安政4年(1857)1月　中
梶原平三紅梅☆〈かじわらへいざこうばいたづな〉
芳豊　中判錦絵1　「梶原景時　［三枡大五郎］」　11.36251

安政4年(1857)3月　中
伊賀越乗掛合羽〈いがごえのりかけかっぱ〉
国員　中判錦絵1　「佐々木丹右衛門　実川延三郎」　11.20667

安政4年(1857)3月　中
行平礒馴松〈ゆきひらそなれまつ〉
芳滝　中判錦絵1　「まつ風　［中山南枝］」　11.35492

安政4年(1857)4月　角
仮名手本忠臣蔵〈かなでほんちゅうしんぐら〉
国員　中判錦絵 2　「高ノ師直　嵐吉三郎」／「塩冶判官嵐璃珏」　11.35808a-b
芳滝　中判錦絵1　「寺岡平右衛門　［嵐璃珏］」　11.35539

安政4年(1857)5月　筑後
金門五三桐〈きんもんごさんのきり〉
光信　中判錦絵1　紀保　「捨若丸　中村玉七」　11.35996

安政４年(1857)５月　筑後
五大力恋縅〈ごだいりきこいのふううじめ〉
芳滝　中判錦絵２　「笹野三五兵へ　［中村翫雀］」／「勝間源五兵へ　［中村玉七］」　11.36148a-b

安政４年(1857)７月　角
大塔宮曦鎧〈おおとうのみやあさひのよろい〉
芳滝　中判錦絵２　江戸庄　「斎藤太郎左衛門　［市川海老蔵］」／「永井右馬ノ頭　［市川鰕十郎］」　11.36101a-b

安政４年(1857)８月　角
桜紅葉近江八景〈さくらもみじおうみはっけい〉
国員　中判錦絵３　石和　「島田平左衛門　［三枡大五郎］」／「田上三左衛門　［実川延三郎］」／「三島伝蔵　［市川海老蔵］」　11.37882a-c／11.20666

安政４年(1857)８月　角
大塔宮曦鎧〈おおとうのみやあさひのよろい〉
国員　中判錦絵２　「斎藤太郎左衛門　市川海老造」／「花ぞの　嵐璃寛」　11.37058a-b
国員　中判錦絵２　「右馬之頭　［市川鰕十郎］」／「太郎左衛門　［市川海老蔵］」　11.35806a-b

安政４年(1857)８月　角
助六由縁江戸桜〈すけろくゆかりのえどざくら〉
芳豊　大判錦絵１　紀保「白酒売　［実川延三郎］」11.36246
芳滝　中判錦絵５　江戸庄　「京ノ次郎　［市川鰕十郎］」／「髭の伊久　［三枡大五郎］」／「花川戸助六　［市川海老蔵］」／「遊君揚巻　［嵐璃寛］」／「白酒売　［実川延三郎］」　11.35503a-e
宗広　中判錦絵３　「伊久　三桝大五郎」／「あげ巻　嵐璃寛」／「花川戸助六　市川海老蔵」11.35994a-b　11.35978

安政４年(1857)８月　中
千金手綱恋染込〈せんりょうたづなこいのそめこみ〉
国員　中判錦絵２　「由留木左衛門　嵐吉三郎」／「奴いつ平　嵐璃珏」　11.35783a-b
国員　中判錦絵３　石和　「奴いつ平　嵐璃珏」／「馬士江戸兵衛　尾上多見蔵」／「馬士八造　嵐吉三郎」　11.35805a-c

安政４年(1857)９月　中
敵討崇禅寺馬場〈かたきうちそうぜんじばば〉
芳滝　中判錦絵１　「遠城治左衛門　［尾上多見蔵］」「生田伝八　［嵐吉三郎］」「安藤喜八郎　［嵐璃珏］」11.35516

安政４年(1857)９月　中
花魁荅八総〈はなのあにつぼみのやつふさ〉
国員　中判錦絵２　「犬塚信乃　［嵐璃珏］」／「犬塚伴作　嵐吉三郎」　11.35803a-b

安政４年(1857)９月　筑後
隅田川続俤〈すみだがわごにちのおもかげ〉
宗広　中判錦絵１　京伊三　「殿゛の介　［中村竹三郎］」　11.35980

安政５年(1858)１月　角
けいせい英草紙〈けいせいはなふさぞうし〉
国員　中判錦絵１　「桐太郎　嵐璃寛」　11.35028

安政５年(1858)１月　角
戻駕色相肩〈もどりかごいろにあいかた〉
国員　中判錦絵２　「吾妻ノ与次郎　三桝大五郎」「浪花次郎作　市川海老造」／「かむろ　あらし璃珏」　11.21112　11.21111

安政５年(1858)１月　口上
芳豊　大判錦絵１　本清　「江戸登り五代目坂東彦三郎」　11.36248

安政５年(1858)１月　中
けいせい雪月花〈けいせいせつげっか〉
国員　中判錦絵５　「早枝政右衛門　市川鰕十郎」／「小鮒源五郎　実川延三郎」／「石川五右衛門　尾上多見蔵」／「斉藤蔵之助　嵐吉三郎」／「狩野四郎次郎　坂東彦三郎」　11.37053a-e
国員　中判錦絵１「石川五右衛門　尾上多見蔵」11.37891
芳滝　中判錦絵１　「゛びざこの十　［市川鰕十郎］」　11.35534
芳滝　中判錦絵２　江戸庄　「真柴久次　坂東彦三郎」／「三島左近　実川延三郎」　11.36134a-b
芳滝　中判錦絵３　「早枝政右衛門　［市川鰕十郎］」／「石田の局　［嵐吉三郎］」／「奴矢田平　［尾上多見蔵］」　11.36156a-c

安政５年(1858)１月　中
柳桜春錦画〈やなぎさくらはるのにしきえ〉
芳滝　中判錦絵３　「市友坊　［市川市友］」「丸幸坊　［中村友三］」「他人坊　［三枡他人］」／「白びやうし　坂東彦三郎」／「狂言師鶴八　坂東彦三郎」　11.36161a-c

安政５年(1858)１月　筑後
けいせい染分総〈けいせいそめわけたづな〉
国員　中判錦絵２　「斎藤蔵之助　中むら翫雀」／「たばこや三吉　中むら玉七」　11.21101　11.21118
国員　中判錦絵１　「三吉　中村玉七」　11.37890

安政５年(1858)８月　竹田
魁佐野船橋〈わたりぞめさののふなはし〉
芳滝　中判錦絵２　紀保　「三浦荒次郎　嵐吉三郎」／「佐野源左衛門　実川延三郎」　11.36085a-b／11.36137a-b
国員　中判錦絵２　「佐野源左衛門　実川延三郎」／「奴要助　市川鰕十郎」　11.35799a-b

安政5年(1858)10月　角
新薄雪物語〈しんうすゆきものがたり〉
国員　中判錦絵2「地蔵五平次　嵐璃珏」／「娘おみつ　尾上梅花」　11.35787a-b

安政5年(1858)10月　角
嫗山姥五百機錦〈こもちやまんばいおはたにしき〉
芳滝　中判錦絵1　「怪童丸　嵐璃珏」　11.35540
国員　中判錦絵 1　「山うは　［嵐璃寛］」「金時　［嵐璃珏］」　11.37885

安政5年(1858)10月19日　死絵
芳滝　中判錦絵1　「市川鰕十郎」　11.35529

安政5年(1858)10月19日　死絵
木下蔭狭間合戦〈このしたかげはざまがっせん〉
国員　中判錦絵1　「真柴久吉　市川鰕十郎」　11.37884

安政6年(1859)1月　角
けいせい廓門松〈けいせいくるわのかどまつ〉
芳滝　中判錦絵 2　「国つら　嵐璃寛」／「多門の頭　嵐璃珏」　11.36129a-b
芳滝　中判錦絵 3　「洞九郎　中村雀右衛門」「野さらし悟助　嵐璃寛」／「かつらき　市川筆之助」／「提婆仁三郎　三枡大五郎」「華形丸　市川猿之助」　11.36163a-c
芳滝　中判錦絵 3　「矢島帯刀　中むら玉七」／「華形丸　市川鰕十郎悴市川猿之助」／「杣ノ与喜蔵　尾上多見蔵」　11.36162a-c／11.36111a-b
国員　中判錦絵 4　石和　「修行者快了　嵐璃珏」／「三島蔵人　中村翫雀」／「よき蔵　尾上多見蔵」／「矢島帯刀　中むら玉七」11.43796　11.43797　11.43794　11.43795

安政6年(1859)1月　角
国性爺合戦〈こくせんやかっせん〉
広貞　中判錦絵3　「錦正女　［嵐璃珏］」／「かんき　［嵐吉三郎］」／「和藤内　［嵐璃寛］」　11.35622a-c
国員　中判錦絵1　「錦生女　［嵐璃珏］」　11.37888
国員　中判錦絵3　「金少女　嵐璃珏」／　／「和藤内　嵐璃寛」　11.21102a-c

安政6年(1859)1月　角
花暦春陽賑〈はなごよみはるのにぎわい〉
宗広　中判錦絵 2　「奥女中玉川　中村玉七」／「奥女中おのへ　中村翫雀」　11.25983a-b
宗広　中判錦絵 3　「曲手まり　嵐璃珏」／「大神楽　中村翫雀」／「大神楽　中村玉七」　11.35984a-c

安政6年(1859)1月　中　寿式三〈ことぶきしきさん〉
国員　中判錦絵2　錦鯱堂　「浦しま　坂東彦三郎」／「三番叟　坂東彦三郎」　11.35802a-b

安政6年(1859)1月　中
けいせい阿国歌舞妓〈けいせいおくにかぶき〉
国員　中判錦絵2　蔦勘　「中将より兼　実川延三郎」「神浪三左衛門　［実川菊蔵］」／「菅沼小介　嵐吉三郎」　11.35789a-b
国員　中判錦絵1　石和　「実川延三郎　ふじ原より兼」　11.37889
国員　中判錦絵 2　「松前鉄之助　実川延三郎」／「仁木弾正　嵐吉三郎」　11.37055a-b

安政6年(1859)1月　中
国性爺合戦〈こくせんやかっせん〉
芳藤　中判錦絵 2　「和藤内母蓬生　坂東亀蔵」「伍将軍甘輝　嵐吉三郎」／「錦祥女　坂東彦三良」　11.37331a-b
芳滝　中判錦絵4　「錦生女　坂東彦三郎」／「かんき　嵐吉三郎」／「和藤内　実川延三郎」／「母蓬生　坂東亀蔵」「侍女　市川滝十郎」「侍女　中村友三」　11.35505a-d／11.41997a-c

安政6年(1859)3月　角
天満宮菜種御供〈てんまんぐうなたねのごくう〉
国員　中判錦絵 3　「仕丁桜丸　嵐璃珏」／「記ノ長谷雄　嵐璃寛」／「孔雀三郎　尾上多見造」　11.35800a-c
宗広　中判錦絵 2　「あをやぎ　中村翫雀」／「堤畑十作　嵐璃珏」　11.35993a-b
宗広　中判錦絵 2　石和　「あおやぎ　中村翫雀」／「十作　嵐璃珏」　11.35989a-b

安政6年(1859)3月　角
関取千両幟〈せきとりせんりょうのぼり〉
国員　中判錦絵 2　「女房おとは　嵐璃寛」／「岩川　尾上多見造」　11.35782a-b／11.41984a-b／11.41985a-b

安政6年(1859)3月　角
男作五雁金〈おとこだていつつかりがね〉
国員　中判錦絵 5　石和　「雁金文七　嵐璃寛」「安ノ平兵衛　三枡梅舎」／「雷庄九郎　中村翫雀」／「覚左衛門嵐璃珏」／「こく印平右衛門　中村玉七」／「布袋市右衛門　嵐璃珏」　11.35804a-e

安政6年(1859)3月　中
菅原伝授手習鑑〈すがわらでんじゅてならいかがみ〉
芳滝　中判錦絵 2　「桜丸　阪東彦三郎」／「八重　中村千之助」　11.36114a-b
国員　中判錦絵3　「覚寿　市川助十郎」「かりやひめ　尾上芙雀」／「菅丞相　実川延三郎」／「判官代輝国　嵐吉三郎」　11.35798a-c／11.20655　11.21121
芳滝　中判錦絵 2　「輝国　嵐吉三郎」／「菅丞相　実川延三郎」　11.36131a-b／11.41917
国員　中判錦絵 2　「松王丸　嵐吉三郎」／「梅王丸　実川延三郎」　11.20661　11.21105

国員　中判錦絵 3　なし／錦鯱堂　「松王丸　嵐吉三郎」／「梅王丸　実川延三郎」／「桜丸　坂東彦三郎」
11.35795a-c／11.21104　11.21120　11.21119
国員　中判錦絵 1　「嵐吉三郎　松王丸」　11.37887
芳滝　中判錦絵 3　「松王丸　嵐吉三郎」／「梅王丸　実川延三郎」／「桜丸　坂東彦三郎」　11.36160a-c
芳滝　中判錦絵 2　「桜丸　坂東彦三郎」／「八重　中村千之助」　11.36125a-b

安政 6 年(1859)3 月　中
油売恋山崎〈あぶらうりこいのやまざき〉
芳滝　中判錦絵 2　「油屋与兵へ　実川延三郎」／「吾妻　坂東彦三郎」　11.36142a-b
国員　中判錦絵 2　「けいせいあづま　坂東彦三郎」／「油屋与兵衛　実川延三郎」　11.35784a-b

安政 6 年(1859)8 月　角
碁太平記白石噺〈ごたいへいきしらいしばなし〉
国員　中判錦絵 2　「兵部之助　尾上多見蔵」／「谷五郎　嵐璃珏」　11.37057a-b
国員　中判錦絵 2　未詳　「谷五郎　嵐璃珏」／「兵部之助　尾上多見蔵」　11.21100　11.21099／11.37059a-b
広貞　中判錦絵 1　「金井谷五郎　嵐璃珏」　11.35665

安政 6 年(1859)8 月　中
祇園祭礼信仰記〈ぎおんさいれいしんこうき〉
国員　中判錦絵 3　「雪ひめ　坂東彦三郎」／「松永大膳　嵐吉三郎」／「木下藤吉　実川延三郎」
11.21106　11.21109　11.20669
国員　中判錦絵 2　錦鯱堂　「松永大膳　嵐吉三郎」／「雪ひめ　坂東彦三郎」　11.20664　11.20668／11.37054a-b

安政 6 年(1859)10 月　角
義経千本桜〈よしつねせんぼんざくら〉
芳滝　中判錦絵 2　「しつか御前　嵐璃珏」／「狐忠信　尾上多見蔵」　11.36071a-b／11.41918

安政 6 年(1859)10 月　天満
ひらかな盛衰記〈ひらがなせいすいき〉
国員　中判錦絵 1　「松右衛門　嵐吉三郎」　11.37051
国員　中判錦絵 2　「梶原平次　嵐吉三郎」／「梶原源太　坂東彦三郎」　11.20656　11.20658

安政 7 年(1860)1 月頃　見立
女猿曳☆諷〈おんなさるひきかどでのひとふし〉
芳滝　中判錦絵 2「小よし　嵐璃寛」／「与次郎　嵐璃珏」　11.36127a-b
安政 7 年(1860)1 月　角
けいせい石川染〈けいせいいしかわぞめ〉
広貞　中判錦絵 2　「石川五右衛門　尾上多見蔵」／「真柴久吉　嵐璃珏」　11.35555a-b
芳滝　中判錦絵 2　「五右衛門　尾上多見蔵」／「浪華ノ梅蔵　尾上多見蔵」　11.36064a-b
芳滝　中判錦絵 2　「石川五右衛門　尾上多見蔵」／「真柴久吉　嵐璃珏」　11.36059a-b／11.41992a-b

安政 7 年(1860)1 月　中
けいせい百千鳥〈けいせいももちどり〉
芳滝　中判錦絵 1　「娘小三　嵐璃寛」　11.35536
国員　中判錦絵 2　「福島正則　坂東彦三郎」／「浜田織部　嵐吉三郎」　11.35785a-b

安政 7 年(1860)1 月　筑後
姫競双葉絵草紙〈ひめくらべふたばえぞうし〉
国員　中判錦絵 3　「細川政房　中村翫雀」／「小栗助重　中むら玉七」／「風間八郎　片岡我童」　11.35796a-c
広貞　中判錦絵 1　「小栗判官　中むら玉七」　11.35652

万延 1 年(1860)3 月　中
仮名手本忠臣蔵〈かなでほんちゅうしんぐら〉
芳滝　中判錦絵 2　「斧定九郎　嵐吉三郎」／「与市兵へ　中むら仲介」「千崎弥五郎　嵐鱗子」「早の勘平　坂東彦三郎」　11.36089a-b
宗広　中判錦絵 2　未詳　「らんの方　坂東彦三郎」／「小春や弥七　実川延三郎」　11.36042a-b

万延 1 年(1860)閏 3 月　堀江
長柄長者黄鳥墳〈ながらちょうじゃうぐいすづか〉
国員　中判錦絵 1　石和　「佐々木源之助　中村翫雀」　11.37892
万延 1 年(1860)4 月　堀江
恵大賀写本〈おめぐみおおがのうつしがき〉
国員　中判錦絵 2　「稲のや半兵衛　大谷友松」／「おちよ　中むら翫雀」　11.35788a-b

万延 1 年(1860)8 月　中
六歌仙体綵〈ろっかせんすがたのいろどり〉
宗広　中判錦絵 1　「大友黒主　嵐吉三郎」「小野小町　坂東彦三郎」　11.35982

万延 1 年(1860)8 月　筑後
絵合太功記〈えあわせたいこうき〉
宗広　中判錦絵 3　「加藤虎之助　中村翫雀」／「鈴木孫市　嵐璃珏」「弟重若　片岡市作」／「妻雪ノ谷　藤川友吉」「松よひ　嵐豊丸」　11.35995a-c

万延 1 年(1860)8 月　筑後
ひらかな盛衰記〈ひらがなせいすいき〉
宗広　中判錦絵 1　「梶原源太　中村翫雀」「梶原平次　大谷友松」　11.35981

万延1年(1860)8月　筑後
東街道四谷怪談〈とうかいどうよつやかいだん〉
芳滝　中判錦絵 3　「佐藤与茂七　嵐璃珏」／「民谷伊右衛門　中むら翫雀」／「直介紺兵へ　中村雀右衛門」　11.36164a-c
猿雀　中判錦絵1　石和　「神谷伊右衛門　中村翫雀」　11.35548
宗広　中判錦絵 2　「神谷伊右衛門　中村翫雀」／「お岩霊　嵐璃珏」　11.35988a-b
宗広　中判錦絵 3　「民谷伊右衛門　中村翫雀」／「女房お岩　嵐璃珏」／「女房お袖　藤川友吉」「直介紺兵へ　中むら雀右衛門」　11.35990a-c
宗広　中判錦絵1　「直介紺兵へ　中むら雀右衛門」　11.35991
芳升　中判錦絵 1　「神谷伊右衛門　中村翫雀」「佐藤与も七　嵐りかく」「直介権兵衛　中村雀右衛門」　11.36245

万延1年(1860)9月　角
隅田春妓女容性〈すだのはるげいこかたぎ〉
宗広　中判錦絵1　「丁児長吉　嵐理かく」「女房小梅　嵐璃珏」　11.35985
宗広　中判錦絵 2　「梅ノ由兵衛　［尾上多見蔵］」／「女房小梅　［嵐璃珏］」　11.35987a-b

万延1年(1860)11月　筑後
同計略花芳野山〈とばかりはなのよしのやま〉
芳滝　中判錦絵2　「弁ノ内侍　中村千之助」「楠正行　嵐芳三郎」／「又五郎狐　嵐璃珏」　11.36083a-b

万延2年(1861)1月　筑後
けいせい雪月花〈けいせいせつげっか〉
芳滝　中判錦絵 2　「百性五作　嵐璃寛」／「小鮒源五郎　嵐璃珏」　11.36091a-b
芳滝　中判錦絵 2　「石川五右衛門　［嵐璃寛］」／「小鮒源五郎　［嵐璃珏］」　11.36106a-b
芳滝　中判錦絵1　「三二五郎七　嵐璃珏」　11.35535
芳滝　中判錦絵3　「真柴久次　嵐璃珏」／「百性五作　嵐璃寛」／「早枝政右衛門　市川滝十郎」　11.36159a-c

文久1年(1861)3月　中
敵討優曇華亀山〈かたきうちうきぎのかめやま〉
芳滝　中判錦絵 2　「赤堀水右衛門　嵐吉三郎」／「中野関助　中むら仲助」「竜野良助　嵐鱗子」　11.36096a-b
芳滝　中判錦絵 2　「石井兵助　実川延三郎」／「花房主膳　嵐吉三郎」　11.36097a-b
芳滝　中判錦絵 3　「赤堀水右衛門　嵐吉三郎」／「松坂屋瀬兵へ　片岡市蔵」／「石井源蔵　尾上多見蔵」　11.35538　11.36102a-b

文久1年(1861)3月　筑後
廓文章〈くるわぶんしょう〉
芳滝　中判錦絵 3　「藤や伊左衛門　嵐璃珏」／「夕ぎり嵐璃寛」／「おきさ　尾上梅幸」「喜左衛門　中村雀右衛門」　11.36168a-c
芳滝　中判錦絵1　「藤屋伊左衛門　嵐璃珏」　11.35512

文久1年(1861)4月　竹田
伊勢音頭恋寝剣〈いせおんどこいのねたば〉
国員　中判錦絵1　石和　「福岡みつき　尾上梅幸」　11.35551

文久1年(1861)4月　竹田
恋女房染分手綱〈こいにょうぼうそめわけたづな〉
宗広　中判錦絵1　「重の井　嵐璃寛」「三吉　嵐璃橘丸」　11.35986

文久1年(1861)5月　堀江
勝関☆源氏〈かちどきみばえげんじ〉
国員　中判錦絵2　「牛若丸　［嵐璃珏］」／「熊坂張半　［嵐吉三郎］」　11.21115　11.21110
国員　中判錦絵1　石和「牛若丸　あらし璃珏」　11.37886
無款　中判錦絵 2　「源ノ牛若丸　嵐璃珏」／「熊坂長範　嵐吉三郎」　11.35023　11.35024／11.35288

文久1年(1861)5月　堀江
極彩色娘扇〈ごくさいしきむすめおうぎ〉
芳滝　中判錦絵 1　「子筆まつ　［尾上和多之助］」「てら子や兵助　［嵐璃珏］」　11.35510
芳滝　中判錦絵 2　「朝比奈藤兵へ　嵐吉三郎」／「てら子や兵助　嵐璃珏」　11.36132a-b／11.41980a-b
芳滝　中判錦絵 1　「橘のりん蔵　嵐吉三郎」「伊場十三　嵐璃珏」　11.42999

文久1年(1861)5月　天満
出世太功記〈しゅっせたいこうき〉
芳滝　中判錦絵2　「松下嘉平次　中むら雀右衛門」／「明智左馬五郎　嵐璃寛」「明智十次郎　嵐璃橘丸」11.36073a-b

文久1年(1861)5月　天満
八重霞浪花浜荻〈やえがすみなにわのはまおぎ〉
芳滝　中判錦絵 1　「大工六三郎　沢村訥升」「妾かしく　嵐璃寛」　11.43005

文久1年(1861)7月　竹田
契情大江山〈けいせいおおえやま〉
芳滝　中判錦絵2　本清　「茨木童子　［大谷友松］」／「渡辺綱　［尾上梅幸］」　11.36061a-b

文久1年(1861)8月　角
色競九重錦〈いろくらべここのえにしき〉
芳滝　中判錦絵2　「おりう　［嵐璃寛］」／「孫作　［嵐璃珏］」　11.36099a-b
芳滝　中判錦絵 2　「みどり丸　嵐とく丸」「猿巡り岩松

［中村雀右衛門］」／「杣孫作　［嵐璃珏］」　11.36138a-b
芳滝　中判錦絵 2　「内匠頭義親　［三枡梅舎］」／「横曽根平太郎　［嵐璃珏］」「菊御前　［中村千之助］」
11.36080a-b／11.41972a-b
芳滝　中判錦絵 1　「冠者為よし　［浅尾大吉］」　11.35514
芳滝　中判錦絵 1　「孫作実は平太郎　［嵐璃珏］」「女房おりう　［嵐璃寛］」　11.43001

文久 1 年(1861)8 月　角
摂州渡辺橋供養〈せっしゅうわたなべばしくよう〉
芳滝　中判錦絵 1　「遠藤武者盛遠　［嵐璃寛］」　11.35513

文久 1 年(1861)8 月　角
花楓浪速詠〈はなもみじなにわのながめ〉
芳滝　中判錦絵 2　「女房おつま　［藤川友吉］」「若狭や太平二　［生島寛右衛門］」／「古手屋八郎兵へ　［嵐璃珏］」
11.36117a-b
芳滝　中判錦絵 3　「古手や八郎兵へ　［嵐璃珏］」／「女房おつま　［嵐璃寛］」／「香具や弥兵へ　［中村千之助］」
11.36182a-c／11.41994a-c
宗広　中判錦絵 2　「丹波や若の　［中村千之助］」「青山新左衛門　［三枡梅舎］」／「古手屋八郎兵衛　［嵐璃珏］」
11.35992a-b

文久 1 年(1861)8 月　角
倭仮名在原系図〈やまとがなありわらけいず〉
芳滝　中判錦絵 1　「奴蘭平　尾上多見蔵」「悴しげ蔵　市川滝三郎」　11.43004

文久 1 年(1861)8 月　中
倣花雪菊水〈なぞらえてゆきのきくすい〉
芳滝　中判錦絵 2　「民部之助正悦　［嵐吉三郎］」／「熊ヶ谷三郎兵へ　［嵐鱗子］」　11.36133a-b
芳滝　中判錦絵 2　「細川木津ノ正　［実川延三郎］」／「民部ノ助正悦　［嵐吉三郎］」　11.36081a-b

文久 1 年(1861)10 月　角
本朝廿四孝〈ほんちょうにじゅうしこう〉
芳滝　中判錦絵 3　「八重垣姫　嵐璃寛」／「勝頼　嵐璃珏」／「ぬれ絹　中むら千之助」　11.36183a-c／11.35522
芳滝　中判錦絵 2　「兄横蔵　尾上多見蔵」／「弟慈悲蔵　嵐璃珏」　11.36112a-b
芳滝　中判錦絵 2　「花作りみの作　嵐璃珏」「花守関兵へ　三枡梅舎」／「長尾謙信　中むら雀右衛門」「白須賀六郎　中むら橘之助」　11.36105a-b
芳滝　中判錦絵 3　「山本勘助　尾上多見蔵」／「直江山城　嵐璃珏」／「母越路　三枡梅舎」「女房お種　藤川友吉」　11.36165a-c
芳滝　中判錦絵 2　「慈悲蔵　嵐璃珏」／「女房お種　藤川友吉」　11.36109a-b
猿雀　中判錦絵 1　「武田勝頼　［嵐璃珏］」　11.35550
芳滝　中判錦絵 1　「八重垣姫　嵐璃寛」　11.35511

文久 1 年(1861)10 月　堀江
関取千両幟〈せきとりせんりょうのぼり〉
芳滝　中判錦絵 1　「鉄ヶ嶽駄左衛門　中むら仲助」「岩川次郎吉　嵐吉三郎」　11.43003

文久 1 年(1861)11 月　天満
東海道茶屋の娘〈とうかいどうちゃやのむすめ〉
猿雀　中判錦絵 1　「牙のお才　大谷友松」「夏目仙次郎　中村芝丸」　11.43002

文久 1 年(1861)11 月　天満
須磨都源平躑躅〈すまのみやこげんぺいつつじ〉
芳滝　中判錦絵 2　「熊ヶ谷　嵐吉三郎」／「あつ盛　大谷友松」　11.36146a-b
猿雀　中判錦絵 1　「熊谷直実　嵐吉三郎」「無官太夫敦盛　大谷友松」　11.43000
広信　中判錦絵 1　「熊谷　［嵐吉三郎］」「あつ盛　［大谷友松］」　11.35041

文久 2 年(1862)頃　見立　大日本六十余州　**国員**
中判錦絵 2　［目録］／［目録］　11.37811　11.37848
中判錦絵 3　「江戸」「北条時政　［市川海老蔵］」「ときひめ　［嵐璃珏］」／「大阪」「佐々木高綱　［片岡仁左衛門］」「羽柴久次　［実川延三郎］」／「京都」「石川五右衛門　［中村歌右衛門］」「石田つほね　［中村富十郎］」　11.37812a-c
中判錦絵 1　「山城　京」「ゆき姫　［坂東彦三郎］」「大膳　［嵐吉三郎］」　11.37813
中判錦絵 1　石和　「大和」「かくはん　［三枡梅舎］」「狐たゝ信　［尾上多見蔵］」　11.37814
中判錦絵 1　「河内」「五右ヱ門　［尾上多見蔵］」11.37815
中判錦絵 1　「和泉」「阿部の保名　［中村翫雀］」「くずの葉　［嵐璃寛］」　11.37816
中判錦絵 1　「摂津」「松右衛門　［嵐吉三郎］」　11.37817
中判錦絵 1　石和　「伊賀」「内記　［中村駒之助］」「政右衛門　［嵐吉三郎］」　11.37847
中判錦絵 1　「伊勢」「しのぶ　［中山南枝］」「によ八　［中村友三］」　11.37818
中判錦絵 1　石和　「志摩」「みつぎおば　［片岡仁左衛門］」「彦太夫　［市川市友］」　11.37819
中判錦絵 1　石和　「尾張」「伝内　［嵐璃珏］」11.37820
中判錦絵 1　石和　「参河」「此下藤吉　［実川延三郎］」　11.37821
中判錦絵 1　「遠江」「桑名や徳造　［片岡市蔵］」「けいせいひ垣　［中山南枝］」　11.37822
中判錦絵 1　石和　「駿河」「浅間左ヱ門　［中村歌右衛門］」「富士右門　［市川海老蔵］」　11.37823
中判錦絵 1　「甲斐」「岩根　［中村雀右衛門］」「満祐丸　［中村橘之助］」　11.37824

中判錦絵 1　石和　「伊豆」「はつ花　［中村翫雀］」「勝五郎　［中村玉七］」　11.37825
中判錦絵 1　「相模」「山うば　［嵐璃寛］」「坂田金時　［嵐璃珏］」　11.37826
中判錦絵 1　石和　「武蔵」「綱五郎　［中村翫雀］」　11.37827
中判錦絵 1　石和　「安房」「犬山道節　［嵐吉三郎］」　11.37828
中判錦絵 1　石和　「上総」「おとみ　［尾上梅幸］」「与三郎　［中村玉七］」　11.37829
中判錦絵 1　「下総」「滝やしや姫　［尾上芙雀］」「大蛇長国　［嵐璃珏］」　11.37830
中判錦絵 1　「常陸」「小栗判官　［片岡仁左衛門］」「娘おこま　［中村大吉］」　11.37831
中判錦絵 1　「近江」「半兵衛　［実川延三郎］」「こいな［中山南枝］」　11.37832
中判錦絵 1　「美濃」「竹中重晴　［三枡梅舎］」「前田犬清　［大谷友松］」　11.37833
中判錦絵 1　石和　「飛騨」「京人形　［坂東彦三郎］」「甚五郎　［坂東亀蔵］」　11.37834
中判錦絵 1　石和　「信濃」「武田勝頼　［実川延三郎］」「八重垣ひめ　［中山南枝］」　11.37835
中判錦絵 1　「上野」「よし政　［嵐吉三郎］」「宗五郎　［市川小団次］」　11.37836
中判錦絵 1　石和　「下野」「久松　［坂東彦三郎］」「鬼門喜兵衛　［坂東亀蔵］」　11.37837
中判錦絵 1　「陸奥」「宇治兵部之助　［市川海老蔵］」「金谷他五郎　［嵐璃寛］」　11.37838
中判錦絵 1　「出羽」「弁慶　［市川海老蔵］」「義経　［浅尾大吉］」　11.37839
中判錦絵 1　「若狭」「力弥　［中村駒之助］」「小なみ　［市川米蔵］」　11.37840
中判錦絵 1　「越前」「出村新兵衛　［尾上多見蔵］」「玉屋新兵衛　［市川滝十郎］」　11.37841
中判錦絵 1　「加賀」「岩ふじ　［嵐吉三郎］」「尾上　［尾上菊次郎］」　11.37842
中判錦絵 1　石和　「能登」「時より　［市川助十郎］」「白たへ　［嵐璃寛］」　11.37843
中判錦絵 1　石和　「越中」「伊賀十太郎　［市川海老蔵］」「よし門　［実川延三郎］」　11.37844
中判錦絵 1　「越後」「よこ造　［片岡市蔵］」「じひ造　［嵐璃珏］」　11.37845
中判錦絵 1　「佐渡」「民谷伊右衛門　［中村翫雀］」「お岩　佐渡与茂七　［嵐璃珏］」　11.37846
中判錦絵 3　石和　「朝信公　［坂東彦三郎］」「貞光　［片岡市蔵］」／「渡辺綱　［嵐璃寛］」「鬼同丸　［嵐吉三郎］」／「金時　［尾上多見蔵］」「季武　［中村芝蔵］」「丹波」　1.37849a-c
中判錦絵 1　「丹後」「三正大夫　［片岡市蔵］」「あんじう姫　［中村千之助］」　11.37848
中判錦絵 1　「但馬」「庄九郎　［市川鰕十郎］」　11.37855
中判錦絵 1　「因幡」「平井権八　［大川橋蔵］」　11.37865
中判錦絵 1　「伯耆」「雲竜九郎　［中村芝蔵］」「虎王麿早風　［市川市蔵］」　11.37869
中判錦絵 1　「出雲」「不破伴左衛門　［嵐吉三郎］」「名古や山三　［片岡仁左衛門］」　11.37871
中判錦絵 1　石和　「岩見」「坂団右衛門　［市川団蔵］」「岩見十太郎　［尾上多見蔵］」　11.37872
中判錦絵 1　「隠岐」「六蔵　［中村仲助］」「おふね　［中村翫雀］」　11.37851
中判錦絵 1　「播州」「桃井若狭之助　［中村翫雀］」「塩冶判官　［中村玉七］」　11.37856
中判錦絵 1　「美作」「毛佐太郎　［市川海老蔵］」　11.37857
中判錦絵 1　「備前」「鳴見大八　［嵐吉三郎］」「石留武助　［実川延三郎］」　11.37858
中判錦絵 1　「備後」「ゐじん　［嵐吉三郎］」「宮本無三四　［片岡仁左衛門］」　11.37866
中判錦絵 1　「備中」「団七九郎兵衛　［嵐吉三郎］」「一寸得兵衛　［嵐璃珏］」　11.37867
中判錦絵 1　石和　「周防」「尾形力丸　［尾上多見蔵］」　11.37873
中判錦絵 1　石和　「長門」「能登甲斐教経　［嵐吉三郎］」　11.37874
中判錦絵 1　「紀伊」「しげ吉」「鈴木孫市　［嵐璃珏］」「松代」　11.37875
中判錦絵 1　「安芸」「牛若丸　［嵐璃珏］」「熊坂　［嵐吉三郎］」　11.37876
中判錦絵 1　石和　「淡路」「若ば内し　［坂東彦三郎］」　11.37852
中判錦絵 1　「阿波」「夕きり　［嵐璃寛］」「伊左衛門　［嵐璃珏］」　11.37859
中判錦絵 1　石和　「讃岐」「むばお辻　［嵐璃寛］」「坊太郎　［尾上多見之助］」　11.37860
中判錦絵 1　石和　「べんけい　［嵐吉三郎］」「おわさ［尾上菊次郎］」「伊予」　11.37861
中判錦絵 1　「土佐」「おとく　［中山南枝］」「又平　［中村歌右衛門］」　11.37853
中判錦絵 1　「かんしやう正　［片岡仁左衛門］」「筑前」　11.37862
中判錦絵 1　石和　「筑後」「加藤重氏　［市川鰕十郎］」「重氏御代　［藤川友吉］」　11.37863
中判錦絵 1　「豊前」「笹原左門之助　［嵐吉三郎］」「笹原集人　［実川延三郎］」　11.37854
中判錦絵 1　「おその　［尾上菊次郎］」「六助　［三枡大五郎］」「豊後」　11.37864
中判錦絵 1　「肥前」「伝七　［嵐璃珏］」　11.37868
中判錦絵 1　「肥後」「加藤正清　［中村歌右衛門］」　11.37877
中判錦絵 1　石和　「日向」「景清　［嵐三幸］」「糸たけ

［実川延太郎］」 11.37878
中判錦絵 1 「駒きね八郎 ［中村歌右衛門］」「大隅」 11.37879
中判錦絵 1 石和 「薩摩」「源五兵衛 ［実川延三郎］」「きくの ［中山南枝］」 11.37870
中判錦絵 1 「壱岐」「源為朝 ［片岡仁左衛門］」「喜平次 ［嵐吉三郎］」 11.37880
中判錦絵 1 「対馬」「日本駄右衛門 ［市川団十郎］」 11.37881

文久 2 年(1862)頃
道中亀山噺〈どうちゅうかめやまばなし〉
芳滝 中判錦絵 2 「蒲原堅次 浅尾奥山」「鳥井弥十郎 三枡梅舎」／「中野藤兵へ 嵐璃珏」 11.36121a-b／11.41977a-b／11.35532
芳滝 中判錦絵 2 「川越シ 嵐楯蔵」「中の藤兵衛 嵐璃珏」／「赤堀水右衛門 三枡梅舎」「石井兵助 嵐徳三郎」「川越し 市川眼十郎」 11.36076a-b／11.41979a-b

文久 2 年(1862)頃
日本第一和布神事〈にっぽんだいいちめかりのじんじ〉
芳滝 中判錦絵 1 本清 「尾形力丸 ［嵐吉三郎］」 11.35527

文久 2 年(1862)頃
けいせい雪月花〈けいせいせつげっか〉
広信 中判錦絵 1 「花や徳兵衛 嵐璃珏」 11.35049

文久 2 年(1862)頃
褄重縁色揚〈つまがさねゆかりのいろあげ〉
猿雀 中判錦絵 1 石和 「鈴木主水 中村芝三郎」 11.35552

文久 2 年(1862) 1 月頃 見立
けいせい廓大門〈けいせいおおもんぐち〉
芳滝 中判錦絵 4 「けいせい難波づ 藤川友吉」／「悪二郎義澄 嵐吉三郎」／「伊勢新九郎長氏 実川延三郎」／「美濃庄九郎 尾上多見蔵」 11.35545a-d

文久 2 年(1862) 1 月 中
けいせい廓大門〈けいせいおおもんぐち〉
芳滝 中判錦絵 2 「伊勢新九郎 嵐吉三郎」／「今川男之助 実川延三郎」 11.36084a-b
芳滝 中判錦絵 2 「唐使玉寿官 尾上多見蔵」／「蔵の進 嵐吉三郎」 11.36078a-b
広信 中判錦絵 2 本清 「伊勢ノ新九郎 ［嵐吉三郎］」／「美濃ノ庄九郎 ［尾上多見蔵］」 11.35059 11.35060

文久 2 年(1862) 2 月 角
敵討巌流島〈かたきうちがんりゅうじま〉
広信 中判錦絵 2 「宮本無三四 嵐璃珏」／「白倉伝五右衛門 三枡梅舎」 11.35071 11.35072
広信 中判錦絵 2 「宮本無三四 嵐璃珏」／「娘糸はぎ中むら千之助」 11.35082 11.35083
広信 中判錦絵 2 「笠原新三郎 三枡梅舎」「木曽ノ童子 嵐璃之助」／「宮本無三四 嵐璃珏」 11.35073 11.35074／11.35020
芳滝 中判錦絵 2 「宮本無三四 嵐璃珏」／「白倉伝五右衛門 三枡梅舎」「林左衛門 浅尾奥山」「村上源蔵 市川眼十郎」「万右衛門 大谷広五郎」 11.36140a-b
芳滝 中判錦絵 2 「宮本むさし 嵐璃珏」／「娘糸はぎ中むら千之助」 11.36135a-b
芳滝 中判錦絵 2 「霊人 三枡梅舎」「童子 嵐橘之助」／「宮本無三四 嵐璃珏」 11.36077a-b
芳滝 中判錦絵 2 「宮本友次郎 嵐璃珏」／「むさし野中むら千之助」 11.36126a-b
芳滝 中判錦絵 2 「娘糸萩 中むら千之助」／「宮本無三四 嵐璃珏」 11.36145a-b

文久 2 年(1862) 2 月 角
乱菊枕慈童〈らんぎくまくらじどう〉
広信 中判錦絵 2 「菊童子 嵐璃珏」／「百眼米吉 嵐璃珏」 11.35090 11.35091

文久 2 年(1862)閏 8 月 中
契情天羽衣〈けいせいあまのはごろも〉
芦貞 中判錦絵 2 「乙女大夫 藤川友吉」／「細川勝元 実川延三郎」 11.36149a-b
芳滝 中判錦絵 1 「しづの女お菊 藤川友吉」 11.35549

文久 2 年(1862) 10 月 川竹乗込賑
芳雪 中判錦絵 4 「川竹乗込賑」／「片岡我童」「片岡我当」／「嵐璃寛」「市川寿美之丞」／「三枡梅舎」「中村千之助」 11.36230a-d

文久 2 年(1862) 10 月 見立 三番叟〈さんばそう〉
芳滝 中判錦絵 1 紀保 「寿式三番叟 片岡我当」 11.35524

文久 2 年(1862) 10 月 角
伊賀越乗掛合羽〈いがごえのりかけかっぱ〉
芳滝 中判錦絵 2 「誉田内記 嵐璃寛」／「唐木政右衛門 片岡仁左衛門」 11.36144a-b

文久 2 年(1862) 10 月 角
恋飛脚大和往来〈こいびきゃくやまとおうらい〉
芳滝 中判錦絵 2 「亀屋忠兵へ 片岡我童」／「梅川 中むら千之助」「孫右衛門 三枡梅舎」 11.36103a-b

文久 3 年(1863)頃
けいせい曽我鎌倉☆〈けいせいそがかまくらだいじん〉
豊秀 中判錦絵 2 「曽我五郎 嵐和橘」／「曽我十郎 市川枡蔵」 11.35240 11.35239

文久 3 年(1863)1 月　角
けいせい総神事〈けいせいたづなのじんじ〉
豊秀　中判錦絵 3　「たはこや三吉　片岡我当」「与三兵衛　三枡梅舎」／「山形や儀兵衛　嵐璃寛」「姉娘　片岡槌之介」／「弟　片岡秀太郎」「下女おせつ　市川団之介」
11.35241　11.35242　11.35243
／11.35244　11.35245　11.35246
国員　中判錦絵 2　「山形や儀兵へ　嵐璃寛」「千切屋お梅　中村千之助」／「たばこや三吉　片岡我童」11.35793a-b

文久 3 年(1863)1 月　中
けいせい染分☆〈けいせいそめわけたづな〉
芳滝　中判錦絵 2　「三吉　実川延三郎」／「蔵之助　嵐吉三郎」　11.36100a-b
芳滝　中判錦絵 3　「舟頭梶蔵　実川延三郎」／「小ざゝ中村雀右衛門」／「蔵之助　嵐吉三郎」
11.36157a-c／11.41916　11.41971a-b
芳滝　中判錦絵 3　「馬士江戸兵へ　嵐吉三郎」／「舟頭梶蔵　実川延三郎」／「由留木左衛門　尾上多見蔵」
11.36169a-c
芳滝　中判錦絵 2　「番頭伝兵へ　実川鯱蔵」「三吉　実川延三郎」／「下女お花　藤川八太郎」「お梅　藤川友吉」
11.36124a-b
芳滝　中判錦絵 2　「蔵之助　嵐吉三郎」／「さくら木　藤川友吉」　11.36108a-b
芳滝　中判錦絵 3　［わし塚官太夫　中村仲助、鷺坂左内尾上松寿、けいせいさくら木　藤川友吉］／［由留木左衛門尾上多見蔵、斎藤蔵之介　嵐吉三郎、船頭梶蔵　実川延三郎］／［乳人小笹　中村雀右衛門、伊達与作　嵐鱗子、由留木右馬ノ介　浅尾大吉］　11.36158a-c
広信　中判錦絵 2　内寅　「斉藤蔵之助　嵐吉三郎」／「たばこや三吉　実川延三郎」　11.35077a-b
芳雪　中判錦絵 2　「おろちノ精　藤川友吉」／「由留木左衛門　尾上多見蔵」　11.36227a-b

文久 3 年(1863)1 月　筑後
由良湊千軒長者〈ゆらのみなとせんげんちょうじゃ〉
芳滝　中判錦絵 2　「三荘太夫　中村雀右衛門」／「要之助　嵐来芝」　11.36166a-b／11.41925
芳滝　中判錦絵 2　「山岡　中村芝蔵」／「三荘太夫　中村雀右衛門」　11.36167a-b／11.35537

文久 3 年(1863)3 月　角　廓文章〈くるわぶんしょう〉
広信　中判錦絵 3　内寅　「伊左衛門　片岡我当」／「喜左衛門　三枡梅舎」／「女房おきさ　市川団之助」
11.35087　11.35088　11.35089
文久 3 年(1863)3 月　中
華幕瓢箪盞〈はなのまくひさごのかわらけ〉
広信　中判錦絵 3　「女房お斎　藤川友吉」／「杉浦十内嵐吉三郎」／「池田庄三良　実川延三郎」
11.35084　11.35085　11.35086
広信　中判錦絵 3　石和　「森ノ蘭丸　市川桃太郎」／「小田春永　嵐吉三郎」／「此下東吉　尾上多見蔵」
11.35044　11.35092　11.35093
芳滝　中判錦絵 2　「小田春永　嵐吉三郎」／「木下藤吉尾上多見蔵」　11.36088a-b

文久 3 年(1863)3 月　筑後
仮名手本忠臣蔵〈かなでほんちゅうしんぐら〉
芳雪　中判錦絵 1　御霊軒　「斧定九郎　大谷友松」
11.39506
文久 3 年(1863)4 月　筑後
花櫓詠千本〈はなやぐらひとめせんぼん〉
豊秀　中判錦絵 1　「狐忠のぶ　実川延若」　11.35253

文久 3 年(1863)4 月　堀江
菖蒲咲姿彩〈しょうぶさくすがたのいろどり〉
芳雪　中判錦絵 1　本清　「ふじ娘鷹匠　市川鯉三郎」
11.36238
文久 3 年(1863)7 月　堀江
有職鎌倉山〈ゆうしょくかまくらやま〉
芳滝　中判錦絵 2　「三浦荒二郎　中村雀右衛門」／「佐野源左衛門　実川延三郎」　11.36136a-b

文久 3 年(1863)7 月　堀江
小栗判官車街道〈おぐりはんがんくるまかいどう〉
芳滝　中判錦絵 2　「浅妻　藤川友吉」／「横山太郎　三枡源之助」　11.36072a-b

文久 3 年(1863)8 月　角
花洛矢数誉〈はなのみやこやかずのほまれ〉
芳雪　中判錦絵 2　「勘左衛門　尾上多見蔵」／「和田雷八　三枡梅舎」　11.39504a-b／11.41924

文久 3 年(1863)8 月　角
銘作切籠曙〈めいさくきりこのあけぼの〉
広信　中判錦絵 2　石和　「里見伊助　尾上多見蔵」／「樽やおせん　嵐和歌太夫」　11.35057　11.35058

文久 3 年(1863)8 月　筑後
敵討殿下茶屋聚〈かたきうちてんがちゃやむら〉
芳雪　中判錦絵 2　「東間三郎右衛門　浅尾朝太郎」「奴うで助　藤川鐘九郎」／「安達元右衛門　市川市十郎」「早瀬伊織　実川延若」　11.36231a-b

文久 3 年(1863)9 月　角
都名所源氏絵合〈みやこめいしょげんじえあわせ〉
広信　中判錦絵 1　紀保　「牛若丸　片岡我当」　11.35042

文久 3 年(1863)9 月　角　橋弁慶〈はしべんけい〉
広信　中判錦絵 2　紀保　「牛若丸　嵐徳三郎」／「弁慶

尾上多見蔵」　11.35053　11.35054
広信　中判錦絵 1　内寅　「牛若丸　嵐徳三郎」 11.35047

文久 3 年(1863)9 月　筑後
里見八犬伝〈さとみはっけんでん〉
広信　中判錦絵 1　紀保　「金鞠大助　実川延若」11.35045
広信　中判錦絵 2　紀保　「犬塚信乃　実川延若」／「犬飼現八　市川市十郎」　11.35055　11.35056
広信　中判錦絵 6　紀保　「犬塚信乃　実川延若」／「犬田小文吾　大谷友松」／「犬山道節　尾上松緑」／「犬川額蔵　浅尾朝太郎」／「犬村角太郎　中村翫雀」／「犬飼現八　市川市十郎」　11.35063　11.35064　11.35065　11.35066　11.35067　11.35068
芳滝　中判錦絵 1　「伏姫　大谷友松」　11.35525
芳滝　中判錦絵 1　石和　「里見伏ひめ　大谷友松」「金鞠大助　実川延若」　11.42997
芳滝　中判錦絵 1　石和　「網干左次郎　大谷友松」「娘はまじ　中村翫雀」　11.42995

文久 3 年(1863)10 月　中
一谷嫩軍記〈いちのたにふたばぐんき〉
芳滝　中判錦絵 2　紀保　「あつ盛　嵐鱗子」／「熊谷直実　嵐吉三郎」　11.36074a-b
芳滝　中判錦絵 4　紀保　「よし経　実川延三郎」／「熊谷直実　嵐吉三郎」／「妻さがみ　藤川友吉」／「弥陀六　中村雀右衛門」　11.35506a-d

文久 4 年(1864)1 月　角
けいせい児雷也譚語〈けいせいじらいやものがたり〉
芳雪　中判錦絵 3　「児雷や　尾上多見蔵」／「富喜太郎　市川滝十郎」／「おしづ　市川団之助」　11.36239a-c
国員　中判錦絵 3　「高砂勇巳之助　三桝梅舎」／「尾形自雷也　尾上多見造」／「富貴太郎　市川滝十郎」　11.37883a-c
広信　中判錦絵 1　「児雷也　尾上多見蔵」　11.35052
広信　中判錦絵 1　「更科都守之介　片岡我当」　11.35043

文久 4 年(1864)1 月　中
けいせい百万国〈けいせいひゃくまんごく〉
芳雪　中判錦絵 3　「こし元もしほ　荻野扇女」／「鹿子勘兵衛　嵐吉三郎」／「唐橋作十郎　実川延三郎」　11.39507a-c
芳滝　中判錦絵 2　紀保　「鳥井亦助　嵐吉三郎」／「唐橋作十郎　実川延三郎」　11.36104a-b
芳滝　中判錦絵 2　堀亀　「鹿子勘兵へ　嵐吉三郎」／「高橋作十郎　実川延三郎」　11.36139a-b

文久 4 年(1864)1 月　筑後
接合北国梅〈つぎあわせこしじのうめ〉
芳滝　中判錦絵 1　石和　「中老尾上　中村翫雀」「召仕はつ　大谷友松」　11.42998／11.35541

文久 4 年(1864)1 月　筑後　筑後
隅田川続俤〈すみだがわごにちのおもかげ〉
芳滝　中判錦絵 1　石和　「法界坊　大谷友松」「おくみ　市川筆之助」　11.42996

文久 4 年(1864)1 月　堀江
けいせい稚児淵〈けいせいちごがふち〉
芳雪　中判錦絵 2　「石川五右衛門　中村駒之助」／「大領久よし　三枡稲丸」　11.36228a-b

元治 1 年(1864)3 月　中
伽羅先代萩〈めいぼくせんだいはぎ〉
芳雪　中判錦絵 1　「松ヶ枝的之助　実川八百蔵」「仁木直則　嵐吉三郎」　11.39505
宗広　中判錦絵 1　「千代鶴　藤川橘之介」「政岡　荻野扇女」　11.16231

元治 1 年(1864)3 月　中
伊勢音頭恋寝剣〈いせおんどこいのねたば〉
国員　中判錦絵 2　「伯母おみね　［嵐吉三郎］」／「福岡貢　［実川延三郎］」　11.35791a-b

元治 1 年(1864)3 月　筑後
菅原伝授手習鑑〈すがわらでんじゅてならいかがみ〉
芳滝　中判錦絵 1　紀保　「菅丞相　大谷友松」 11.35519

元治 1 年(1864)7 月 14 日　死絵
芳滝　中判錦絵 1　「嵐璃珏」　11.35530

元治 1 年(1864)8 月　筑後
恋染衣岩倉宗玄〈こいごろもいわくらそうげん〉
国員　中判錦絵 2　石和　「折琴姫　嵐和歌太夫」／「宗元　実川延若」「久我助　中村梅之助」　11.35792a-b

元治 1 年(1864)8 月　筑後
大賀の世話〈おおがのよがたり〉
芳雪　中判錦絵 2　「しゆん道徳次郎　実川延若」／「田葉こや奇八　中むら駒之助」　11.36234a-b

元治 1 年(1864)8 月　堀江
嫁入信田妻〈よめいりしのだづま〉
芳雪　中判錦絵 2　「葛の葉　嵐徳三郎」／「やすな　市川米蔵」　11.36233a-b

元治 1 年(1864)9 月　中
仮名手本忠臣蔵〈かなでほんちゅうしんぐら〉
芳雪　中判錦絵 2　「由良之助　実川延三郎」／「力弥　中村翫雀」　11.36232a-b

芳滝　中判錦絵 1　石和　「大星由良之輔　実川延三郎」「寺岡平右衛門　あらし吉三郎」　11.35520

元治 2 年(1865)1 月　角
けいせい雪月花〈けいせいせつげっか〉
芳滝　中判錦絵 2　「扇屋司　市川筆之助」「高木次郎太夫　中むら仲助」／「三二五郎七　中むら駒之助」　11.36095a-b

元治 2 年(1865)2 月　中
けいせい恋関札〈けいせいこいのせきふだ〉
国員　中判錦絵 8　「江戸与作　中村雀右衛門」／「戻り馬八蔵　大谷友松」／「ひぬかノ八造　中村仲助」／「馬方与作　実川延若」／「佐竹十内　嵐雛助」／「岩倉帯刀　実川額十郎」／「佐々木源次郎　実川延三郎」「足軽源五左　実川八百蔵」／「重の井　荻野扇女」　11.35810a-h
芳滝　中判錦絵 3　石和　「由留木左衛門　嵐雛助」／「鷺坂左内　実川額十郎」／「重の井　荻野扇女」　11.35491a-c

元治 2 年(1865)3 月　中
女夫盛中由兵衛〈めおとざかりなかのよしべえ〉
芳滝　中判錦絵 2　「梅の由兵へ　実川額十郎」／「長吉　実川延若」　11.36116a-b

元治 2 年(1865)3 月　筑後
寐花操文章〈やよいのはなみさおぶんしょう〉
芳滝　中判錦絵 1　石和　「横蔵　大谷友松」　11.35496

慶応 1 年(1865)5 月　筑後
旅雀相宿噺〈たびすずめあいやどばなし〉
芳滝　中判錦絵 3　「弥次郎兵へ　中むら仲助」／「喜多八　実川延若」「与太兵衛　浅尾玉六」／「下女おとく　中島勘蔵」「山井養仙　中村翫雀」「後家おかん　中むら寿郎」　11.36181a-c
芳滝　中判錦絵 2　「高尾　市川筆之助」／「石井恒右衛門　中むら宗十郎」　11.36107a-b
芳滝　中判錦絵 2　「石井恒右衛門　中むら宗十郎」／「貝屋善吉　中むら翫雀」　11.36092a-b

慶応 1 年(1865)5 月　堀江
東仕入帯屋注文〈えどじいれおびやのちゅうもん〉
芳滝　中判錦絵 2　「片岡幸左衛門　中村雀右衛門」「帯屋長右衛門　中むら芝蔵」／「六はらお六　荻野扇女」　11.36141a-b

慶応 1 年(1865)10 月　堀江
雪花女鉢木〈きごとのはなおんなはちのき〉
芳滝　中判錦絵 1　「白たゑ　荻野扇女」　11.35498

慶応 1 年(1865)11 月　角
勢州阿漕浦〈せいしゅうあこぎがうら〉
芳滝　中判錦絵 1　「阿漕ノ平次　市川滝十郎」「平河原次郎蔵　三枡大五郎」　11.35497

慶応 2 年(1866)頃
名作切籠曙〈めいさくきりこのあけぼの〉
広信　中判錦絵 2　「里見伊助　尾上多見蔵」／「おせん　市川右団二」　11.35061　11.35062

慶応 2 年(1866)頃
戻駕色相肩〈もどりかごいろのあいかた〉・
けいせい筑紫☆〈けいせいつくしのつまごと〉
芳滝　中判錦絵 1「かむろたより　あそしろう　市川米蔵」　11.35517

慶応 2 年(1866)1 月　角
けいせい石川染〈けいせいいしかわぞめ〉
芳滝　中判錦絵 1　「此村大炊の助　三枡大五郎」「奴矢田平　嵐徳三郎」　11.35515
広信　中判錦絵 2　「石川五右衛門　尾上多見蔵」／「堀尾帯刀　嵐徳三郎」　11.35094　11.35095

慶応 2 年(1866)3 月　角
一谷嫩軍記〈いちのたにふたばぐんき〉
広信　中判錦絵 2　「平忠度　嵐徳三郎」／「岡部六弥太　市川滝十郎」　11.35078　11.35079
芳滝　中判錦絵 2　「さゞなみ　嵐徳三郎」／「岡部六弥太　市川滝十郎」　11.36098a-b

慶応 2 年(1866)5 月　中
夏祭浪花鑑〈なつまつりなにわかがみ〉
芳滝　中判錦絵 2　「団七九郎兵へ　［実川延若］」／「一寸徳兵へ　［中村駒之助］」　11.36079a-b

慶応 2 年(1866)9 月　中
傾城会稽山〈けいせいゆきみるやま〉
芳滝　中判錦絵 2　「加藤正清　中むら雀右衛門」／「上田慶次郎　実川額十郎」　11.36094a-b

慶応 2 年(1866)9 月　中
大経師昔暦〈だいきょうじむかしごよみ〉
芳滝　中判錦絵 6　「ずぼら伝吉　中村雀右衛門」／「浜田弥十郎　実川八百蔵」「番頭勘八　実川鯱蔵」／「下女お玉　荻野扇女」／「嫁おさん　沢村国太郎」／「手代茂兵衛　実川額十郎」／「うつけの三四郎　中村駒の助」　11.35546a-f

慶応 2 年(1866)9 月　筑後
濃紅葉小倉色紙〈こいもみじおぐらしきし〉
広信　中判錦絵 1　「笹原隼人　実川延若」　11.35051

慶応 2 年(1866)9 月　堀江
袖浦故郷錦〈そでがうらこきょうのにしき〉
広信　中判錦絵 1　「華屋徳兵へ　片岡我当」　11.35048

慶応3年(1867)2月　角
けいせい大江山〈けいせいおおえやま〉
芳滝　中判錦絵 2　「茨木童子　尾上多見蔵」／「渡辺綱　三枡大五郎」　11.36063a-b

慶応3年(1867)2月　中
新うすゆき物語〈しんうすゆきものがたり〉
芳滝　中判錦絵2　富士政　「奴妻平　中村宗十郎」／「こしもとまかき　沢村国太郎」　11.36123a-b

慶応3年(1867)2月　中
艶競見立六歌仙〈やさすがたみたてろっかせん〉
芳滝　中判錦絵2　石和　「喜撰法師　中村宗十郎」／「文屋康秀　中村駒之助」　11.42993　11.42994

慶応3年(1867)4月　竹田
箱根霊験躍仇討〈はこねれいげんいざりのあだうち〉
芳滝　中判錦絵2　「九十九新左衛門　市川滝十郎」／「奴三千助　嵐徳三郎」　11.36143a-b

慶応3年(1867)8月　角
木下蔭狭間合戦〈きのしたかげはざまがっせん〉
芳滝　中判錦絵1　石和　「早枝犬千代　市川右団二」　11.35494／11.35495
芳滝　中判錦絵 2　「娘千里　中村千之助」／「左枝犬清　市川右団治」　11.36082a-b

慶応3年(1867)8月　角
須磨都源平躑躅〈すまのみやこげんぺいつつじ〉
芳滝　中判錦絵 2　「熊谷直実　尾上多見蔵」／「小はぎ　市川右団二」「姉輪平次　中村歌津右衛門」　11.36093a-b
芳滝　中判錦絵 2　「熊が谷直実　尾上多見蔵」／「あつ盛　市川右団二」　11.36113a-b
無款　中判錦絵1　「小はぎ　市川右団二」　11.35027

慶応3年(1867)8月　中
色競秋七草〈いろくらべあきのななくさ〉
芳滝　中判錦絵 2　「甲斐之助　中村駒之助」／「駒木根八郎　中村雀右衛門」　11.36130a-b
芳滝　中判錦絵 2　「甲斐之助　中村駒之助」／「梅の井荻野扇女」　11.36128a-b

慶応3年(1867)8月　中
播州皿屋鋪〈ばんしゅうさらやしき〉
芳滝　中判錦絵 2　「奴雁平　浅尾友蔵」「青山鉄山　中村雀右衛門」／「こしもとお菊　嵐璃寛」　11.36110a-b
広信　中判錦絵 2　阿文　「お菊ノ亡霊　五代目嵐璃寛」「子十松」／「舟瀬三平　中村駒之助」　11.35075　11.35076

慶応3年(1867)8月　筑後
褄重累萩伊達染〈つまがさねはぎのだてぞめ〉
芳滝　中判錦絵 2　「絹川谷蔵　実川延若」／「娘かさね　中村翫雀」　11.36122a-b

慶応3年(1867)9月　筑後
実秋佐倉賑〈みのりのあきさくらのにぎわい〉
広信　中判錦絵1　「狩野四郎次郎　中村宗十郎」11.35046

慶応4年(1868)頃　見立　絵本太閤記〈えほんたいこうき〉
芳滝　中判錦絵1　「明智光秀　大谷友右衛門」　11.35528

慶応4年(1868)頃　見立
鬼一法眼三略巻〈きいちほうげんさんりゃくのまき〉
芳滝　中判錦絵 3　「皆鶴姫　嵐徳三郎」／「御曹子牛若　片岡我当」／「喜三太　中むら宗十郎」　11.36155a-c

慶応4年(1868)3月　筑後
絵本太功記〈えほんたいこうき〉
芳滝　中判錦絵1　富士政　「武智光秀　嵐雛助」11.35518

明治1年(1868)9月　筑後
お染久松色読販〈おそめひさまつうきなのよみうり〉
芳滝　小判錦絵1　「おそめ　嵐璃寛」「久まつ　嵐璃寛」　11.35521

明治1年(1868)10月　角
梅魁後花総〈うめのさきがけのちのはなぶさ〉
芳滝　中判錦絵 2　「犬山道節　尾上多見造」／「犬川荘助　市川右団次」　11.36067a-b

明治1年(1868)11月　角
高恩形見俤〈こうおんかたみのおもかげ〉
芳滝　中判錦絵3　「けいせい　福助　市川右団二」／「猟人　たのき　市川右団二」／「田舎娘　光氏　市川右団次」　11.43006　11.43008　11.43007

明治2年(1869)1月　筑後　嫗山姥〈こもちやまんば〉
無款　中判錦絵1　石和　「源七　中村宗十郎」　11.35029

明治2年(1869)8月　中
隅田川続俤〈すみだがわごにちのおもかげ〉
芳滝　中判錦絵 3　石和　「法界坊　坂東彦三郎」／「宿位之助　実川延三郎」／「おくみ　中村翫雀」　11.36175a-c

明治2年(1869)9月　角
染模様妹背門松〈そめもようういもせのかどまつ〉
芳滝　中判錦絵 2　石和　「おそめ　市川右団治」／「久まつ　片岡我当」　11.35025　11.35026

明治2年(1869)9月　筑後　嫗山姥〈こもちやまんば〉
無款　中判錦絵1　石和「八重ぎり　坂東彦三郎」11.35030

明治3年(1870)1月　筑後
けいせい花八英〈けいせいはなのやつふさ〉
広貞　中判錦絵 2　「犬田小文吾　あらし雛助」／「山林房八　中むら宗十郎」　11.35605a-b

明治3年(1870)3月　角
敵討巌流島〈かたきうちがんりゅうじま〉
無款　中判錦絵 2　「笠原隠人　三枡大五郎」／「宮本無三四　市川右団治」　11.35021　11.35022

明治3年(1870)8月　角
東海道四谷怪談〈とうかいどうよつやかいだん〉
芳滝　中判錦絵 2　「伊右衛門　三枡大五郎」／「与茂七市川右団治」　11.36115a-b
芳滝　中判錦絵2　石和　「女房お岩　市川右団治」／「民谷伊右衛門　三枡大五郎」　11.36118a-b

明治3年(1870)10月　角
蔦☆恋横櫛〈つたもようこいのよこぐし〉
芳滝　中判錦絵 2　「赤間源左衛門　三枡大五郎」／「妾お富　市川右団治」　11.36086a-b
芳滝　中判錦絵 2　「こうもりノ安　市川鰕十郎」「源左衛門　三枡大五郎」／「おとみ　市川右団治」　11.36087a-b

明治3年(1870)10月　角
伽羅先代萩〈めいぼくせんだいはぎ〉
芳滝　中判錦絵 2　「細川勝元　片岡我当」／「外記左衛門　市川鰕十郎」「仁木弾正　三枡大五郎」　11.36065a-b

明治4年(1871)1月　角
天満宮花梅桜松〈てんまんぐうあいじゅのめいぼく〉
芳滝　中判錦絵 2　石和　「十作　市川右団治」／「青柳太夫　片岡我当」　11.36119a-b

明治5年(1872)3月　松島
勝閧松島新舞台〈かちどきまつしましんぶたい〉
芳滝　中判錦絵7　八尾善　「坂東寿太郎」／「実川延若」／「嵐璃寛」／「中村福助」／「市川右団治」／「中村宗十郎」／「尾上多賀之丞」　11.35509a-g

明治6年(1873)頃　見立　浪華新景六の名橋
芳滝　中判錦絵 3　八百善　「心斎橋」「市川右団次」／「千代さき橋」「中村福助」／「高らい橋」「実川延若」　11.36174a-c

明治6年(1873)頃　死絵
芳滝　中判錦絵1　石和　「実川延治郎さいご物がたり」　11.35531

明治6年(1873)頃　見立
けいせい大江山〈けいせいおおえやま〉
無款　中判錦絵 2　「袴垂保輔　中むら福助」／「藤原保昌　片岡我童」　11.35031　11.35032

明治6年(1873)2月　角
けいせい☆佳節〈けいせいなづなのせっく〉
芳滝　中判錦絵 2　堀亀　「陸奥霊　市川右団次」／「胡蝶の前　片岡松太郎」　11.36147a-b
芳滝　中判錦絵1　八百善　「契情陸奥　市川右団次」　11.35526
芳滝　中判錦絵 2　「甲斐之助　市川右団治」／「駒木根八郎　尾上多見蔵」　11.41978a-b
茂広　中判錦絵1　玉ノ井　「甲斐之助　市川右団次」　11.36187

明治6年(1873)4月　中
けいせい雪月花〈けいせいせつげっか〉
芳滝・小信　中判錦絵 2　綿喜　「石川五右衛門　尾上多見蔵」／「久よし　嵐璃寛」　11.36060a-b

明治6年(1873)4月　筑後
恋飛脚大和往来〈こいびきゃくやまとおうらい〉
茂広　中判錦絵 2　玉ノ井　「亀や忠兵へ　中村宗十郎」／「つちや梅川　嵐三右衛門」　11.36188a-b

明治6年(1873)6月頃　見立
芳滝　中判錦絵7　阿文　「市川右団治」／「中村宗十良」／「尾上多賀之丞」／「嵐璃寛」／「阪東寿太郎」／「中村福助」／「実川延若」　11.35543a-g

明治6年(1873)8月11日　死絵
茂広　中判錦絵1　「尾上多見丸」　11.36186

明治6年(1873)8月20日　死絵
芳隆　中判錦絵1　阿文　「尾上卯三郎」　11.35811
芳滝　中判錦絵1　八尾善　「尾上卯三良」　11.35812

明治6年(1873)8月31日　死絵
芳滝　中判錦絵1　「阪東寿太郎」　11.35523

明治6年(1873)9月　角
大汐噂聞書〈おおしおうわさのききがき〉
芳滝　中判錦絵3　石和　「幻吉五郎　市川右団次」／「古手屋喜助　片岡我童」／「娘ゆき　片岡松太郎」11.36170a-c

明治6年(1873)9月　角　所作姿〈しょさすがた〉
芳滝　中判錦絵 7　石和　「尼貞昌　市川右団次」「かみなり　市川右団次」／「おそめ　市川右団治」／「久まつ市川右団治」／「おさく　市川右団二」／「奥女中竹川　市川右団次」／「土手お六　市川右団次」／「おみつ　市川右団次」　11.35508a-g

明治6年(1873)11月　角
東山桜荘子〈ひがしやまさくらぞうし〉

芳光　中判錦絵2　綿喜　「喜右衛門　実川八百蔵」／「佐倉宗五郎　市川右団次」　11.36244a-b
芳滝　中判錦絵 3　八尾善　「しのゝめ　実川八百蔵」／「足利光氏　市川右団次」／「たそがれ　尾上多賀之丞」　11.36173a-c
芳隆・芳滝　中判錦絵2　堀亀　「足利義政　実川八百蔵」／「佐倉藤五郎　市川右団治」　11.36062a-b

明治7年(1874)頃　見立
絵合太功記〈えあわせたいこうき〉
芳滝　中判錦絵 5　本安　「久吉妻於竹　尾上多賀之丞」／「斎藤内蔵之助　嵐璃寛」／「真柴久吉　市川右団次」／「明智光秀　実川延若」／「百性市作　片岡我童」　11.35499a-e

明治7年(1874) 1月頃　見立
芳滝　中判錦絵3　綿政　「春駒　実川延若」／「春駒　実川勇次郎」／「春駒　市川右団次」　11.36180a-c

明治7年(1874)4月　角
大和錦朝日旗揚〈やまとにしきあさひのはたあげ〉
芳滝　中判錦絵 3　八尾善　「白鳳内侍　嵐璃寛」／「土佐三郎　尾上多見蔵」／「権ノ頭教補　市川右団次」　11.36177a-c
芳滝　中判錦絵 3　八尾善　「奈須新吾　三枡源之助」／「中山侍従忠光　市川右団次」／「吉村虎太郎　嵐璃寛」　11.36176a-c

明治7年(1874)4月　角
雪景色春賑〈ゆきげしきはるのにぎわい〉
芳滝　中判錦絵 7　阿文・石和　「仲居おさつ　尾上多賀之丞」／「住吉踊り松島坊　片岡我童」／「住吉踊り里貫坊　嵐璃寛」／「住吉踊り松玉坊　尾上多見蔵」／「住吉踊り家升坊　市川右団次」／「住吉踊り梅丈坊　中村駒之助」／「仲居おとさ　片岡松太郎」　11.35501a-g

明治7年(1874)5月　角
仮名手本忠臣蔵〈かなでほんちゅうしんぐら〉
芳滝　中判錦絵3　八尾善　「こし元おかる　市川右団次」／「早野勘平　嵐璃寛」／「鷺坂伴内　尾上多見蔵」　11.36172a-c

明治7年(1874)5月　角
隅田川続俤〈すみだがわごにちのおもかげ〉
芳滝　中判錦絵4　本安　「法界坊霊　市川右団次」／「宿位之助　片岡我童」／「おくみ　尾上多賀之丞」／「おかん　実川八百蔵」　11.35507a-d

明治7年(1874)6月頃　見立
芳滝　中判錦絵7　阿文・本為・石和　「実川延若」／「尾上多賀之丞」／「中村駒之助」／「実川八百蔵」／「市川右団次」／「三枡源之助」／「中むら福助」　11.35504a-g

明治7年(1874)10月　筑後
当戌歳里見繁栄〈あたるいぬどしさとみのさかえ〉
芳滝　中判錦絵 2　本安　「蜑崎照文　実川延若」／「犬坂毛野　嵐璃寛」　11.36069a-b

明治7年(1874)11月　角
四季模様白縫譚〈しきもようしらぬいばなし〉
芳滝　中判錦絵3　八尾善　「小女郎　市川右団次」／「白縫太郎　市川右団次」／「小女郎　市川団之助」11.36179a-c

明治7年(1874)11月　角
高蒔画色蔦島台〈たかまきえいろのしまだい〉
芳滝　中判錦絵 2　富士政　「番頭善六　市川右団次」／「後家おみね　中村駒之助」　11.36120a-b

明治8年(1875)3月　角
和合曽我誉富士〈めぐみそがほまれのふじやま〉
芳滝　中判錦絵 2　本為　「箱王丸　市川右団次」／「曽我十郎　実川延若」　11.36066a-b

明治8年(1875)3月　角
☆山姫捨松〈ひばりやまひめすてまつ〉
芳滝　中判錦絵 4　本安　「こし元桐の家　市川筆之助改嵐和歌太夫」／「岩根御前　芝雀更中村雀右衛門」／「中将姫　嵐璃寛」／「妻浮舟　中村扇女」　11.35500a-d

明治8年(1875)3月　角
五色雲三玉獅子〈ごしきぐもみつのたまじし〉
芳滝　中判錦絵 3　石和　「[石橋]　嵐璃寛」／「[石橋]尾上多見蔵」／「[石橋]　市川右団次」　11.36178a-c

明治8年(1875)5月　筑後
もゝちどり鳴門白浪〈ももちどりなるとのしらなみ〉
芳滝　中判錦絵 3　富士政　「入間屋喜十郎　嵐橘三郎」／「番頭彦七　実川延若」／「おさん　嵐璃寛」　11.36171a-c

明治8年(1875)5月　筑後
鏡山旧錦絵〈かがみやまこきょうのにしきえ〉
芳滝　中判錦絵 2　本為　「局岩ふじ　実川延若」／「召仕はつ　市川右団次」　11.36075a-b

明治9年(1876)9月　戎
護国婦女太平記〈ごこくふじょたいへいき〉
芳滝　中判錦絵 2　「綱義公　実川延若」／「おさめの方中むら福助」　11.36070a-b

明治9年(1876)11月　角
新舞台清水群参〈しんぶたいきよみずもうで〉
芳滝　中判錦絵 2　「小さくら姫　尾上多賀之丞」／「志賀之助　市川右団治」　11.36068a-b

【見世物】

文化文政頃　9月　西横堀御池橋　菊細工
春貞　特大大判墨摺1　11.22027

文久頃　一流曲独楽
芳雪　中判錦絵2　「奴いか　竹沢万治」「舟頭権六　竹沢岩吉」／「浦しま　竹沢万治」　11.36235a-b

【ねりもの】

文化10年(1813)　祇園神輿洗ねりもの姿
長秀　細判合羽1　山佐・本庄　「先はやし　京いづゝやまさの」　11.20676／11.38812
長秀　細判合羽1　山佐・宮久　「先はやし　三升やこま」　11.26527
長秀　細判合羽1　山佐・本庄　「先はやし　水口やとく」　11.20680／11.38811／(R)11.1943
長秀　細判合羽1　山佐・島和「先はやし　松本屋北の松」　11.26514
長秀　細判合羽1　山佐・柏宗　「先はやし　新屋梅きく」　11.26505
長秀　細判合羽1　山佐　「先はやし　水口や小みを」　11.26534
長秀　細判合羽1　山佐　「先はやし　よろづや小てる」　11.20674／11.26538
長秀　細判合羽1　山佐・島和「先はやし　ゐづゝや岩の」　11.26526
長秀　細判合羽1　山佐・宮久　「先はやし　京いづゝや青葉」　11.26545
長秀　細判合羽1　山佐・島和　「町娘礼者姿　三ますや小鶴」「付添　るい」　11.26543
長秀　細判合羽1　山佐・宮久　「杉酒やおみわ　京いづゝや小梅」　11.26541
長秀　細判合羽1　山佐・島和　「いせ物語しのぶ　あらやつるか」「付添　妙八かめ」　11.26512
長秀　細判合羽1　山佐・本庄　「町まいこまる山行　はゝ親　井上や歌吉」「舞子　同歌松」　11.26507
長秀　細判合羽1　山佐・本庄　「吉野しづか」「宇治やてる」　11.26497
長秀　細判合羽1　山佐　「女浦島　桜井や枝きく」　11.26510
長秀　細判合羽1　山佐　「こもち山姥八重桐　三ますやぎ」　11.26544
長秀　細判合羽1　山佐・柏宗　「鳥おひ姿　新シ屋里吉」　11.26549／11.20673
長秀　細判合羽1　山佐・宮久　「歌右衛門七化越後獅子京や小市」　11.20678
長秀　細判合羽1　山佐　「石橋　京井筒や駒治」11.26536
長秀　細判合羽1　山佐・島和「おぼこ娘　水口や小きく」　11.38810／(R)06.754
長秀　細判合羽1　山佐・宮久　「うす雪妻平　花びしやぬゐ」「付添　辰吉　乙吉」　11.26555
長秀　細判合羽1　山佐・柏宗　「わかめとり　あふみやかめ」　11.20675／11.26509
長秀　細判合羽1　山佐・宮久　「曽我五郎　京いづゝやとら」　11.26511
長秀　細判合羽1　山佐・本庄　「伏見人形」「近江屋」「ふく助　宇吉」「湯上り　宇の松」　11.26515
長秀　細判合羽1　山佐・島和　「鳥さし　桜井やきく江」　11.20672／11.26506
長秀　細判合羽1　山佐・本庄　「阿蘭陀可笑竹」「おらんだじん　京や亀二」「さぞやん女　同鶴二」　11.26498
長秀　細判合羽1　山佐　「須磨浦松風　桜井やいろは」　11.26522
豊国　細判合羽1　叶喜・山佐　「業平行司姿　うぢ屋三輪の」　11.26572
豊国　細判合羽1　叶喜・山佐　「参宮田舎娘　花びしやまさを」　11.26574
豊国　細判合羽1　山佐・叶喜　「太夫揚屋入　井上屋小ぢう」「付添　三升や駒吉」　11.26573
豊国　細判合羽1　叶喜・山佐　「矢数姿　万屋すま」　11.26575
長秀　細判合羽1　山佐・本庄　「田舎順礼　水口や鶴江」　11.26520
豊国　細判合羽1　山佐・叶喜　「矢削の長者　牛若丸　うぢ屋君の」　11.16392
長秀　細判合羽1　山佐・須新　「歌右衛門役七化の海士姿　京いづゝやすゑ」　11.26552

文化11年(1814)　祇園神輿洗ねりもの姿
長秀　細判合羽1　山佐・はし勘　「先はやし　万屋政治」　11.26535
長秀　細判合羽1　山佐・柏宗　「先はやし　京いつゝやふき」　11.26542
長秀　細判合羽1　大分・山佐「先はやし　あふみや菊松」　11.26540
長秀　細判合羽1　山佐・宮久　「先はやし　松本や市栄」　11.26501
長秀　細判合羽1　山佐・宮久「先はやし　花ひしや熊吉」　11.26517
長秀　細判合羽1　山佐・須藤「先はやし　桜井屋まきの」　11.26546
春川　細判合羽1　山佐・本吉　「風流女鷹匠　あたらしや小いな」　11.20118／11.26563
長秀　細判合羽1　大分・山佐　「あらひ香かんばん姿　三升やあさを」「同いそ」　11.26504
長秀　細判合羽1　山佐・本庄　「神と君の恵みいのらむ鶴と亀」「町うば　京や鶴二」「たかまがはら　同亀二」　11.26533

長秀　細判合羽 1　山佐・本庄　「茶みせ娘　井づゝやふさを」　11.26503
春川　細判合羽 1　山佐・叶喜　「忠臣蔵となせ　京いづゝや小ゑい」　11.26565
長秀　細判合羽 1　山佐・はし勘　「しなの神子　いづゝや磯栄」　11.26530
長秀　細判合羽 1　山佐・島和　「風流女蛭子　京いづゝや宮菊」　11.26550／(R)06.753
春川　細判合羽 1　山佐・叶喜　「奴小万　水口屋まさ次」　11.20470／11.38795
長秀　細判合羽 1　山佐・柏宗　「女鵜飼　宇治屋てつ」　11.26521　11.20677
長秀　細判合羽 1　山佐・宮久　「若殿鷹遊　京やうの」「付添　あい」　11.26551／11.20679
春川　細判合羽 1　山佐・叶喜・須藤　「里飛脚　三升や友賀」　11.26567
春川　細判合羽 1　山佐・叶喜　叶みんし役お蘭　うぢ屋三輪の」　11.26570
長秀　細判合羽 1　山佐・島和　「道成寺　扇九くが路」　11.26553
春川　細判合羽 1　山佐・叶喜　「宮木阿曽次郎　京いづゝや今鶴」　11.26569
春川　細判合羽 1　叶喜・柏宗　「三勝忍姿　ゐのうへや小十栄」　11.20468／11.26564
長秀　細判合羽 1　山佐・島和「歌読官女　ならやくが鶴」　11.26531
無款　細判合羽 1　山佐・本正　「珉子役花丸　いづゝや菊江」　11.26582
長秀　細判合羽 1　山佐　「伶人舞　さくら井や栄治」　11.26548／(R)06.755

文化 12 年(1815)　祇園神輿洗ねりもの姿
長秀　細判合羽 1　山佐・宮久　「市紅やく助八　花びしやくまの」　11.26528

文化後期　祇園神輿洗ねりもの姿
春川　細判合羽 1　山佐・叶喜　「先囃子　松本屋こま」　11.26566
長秀　細判合羽 1　山佐・本庄　「先はやし　さくら井や小いろ」　11.26508
長秀　細判合羽 1　山佐・宮久　「先はやし　万屋さと」　11.26519
長秀　細判合羽 1　山佐・柏宗「先はやし　水口やみやこ」　11.26532
長秀　細判合羽 1　山佐　「先はやし　宇治やいしの」　11.26516
長秀　細判合羽 1　山佐・須藤　「先はやし　あふみや八重の」　11.26502
長秀　細判合羽 1　山佐・島和　「先はやし　京屋とせ妹つた」　11.26500
長秀　細判合羽 1　山佐・須藤　「常盤御前　三升や喜さ栄」　11.26554
長秀　細判合羽 1　山佐・島和「すあい女　ならやくが鶴」　11.26537
長秀　細判合羽 1　山佐　「先はやし　京いづゝや花松」　11.26547
長秀　細判合羽 1　山佐・柏宗　「雛に寄るふしみ人形姿井上やたつ」「同付添料理人姿　付添さゑ」　11.26523
長秀　細判合羽 1　山佐・本庄　「筑摩鍋被祭り　新シや梅松」　11.26524
長秀　細判合羽 1　山佐・柏宗　「北山花売女　ならやつるも」　11.26518
長秀　細判合羽 1　山佐・島和　「山姥　近江屋東ノいしかね」　11.26513
春川　細判合羽 1　山佐・叶喜・須藤　「於美輪　京井筒屋小鶴」　11.26568
長秀　細判合羽 1　山佐・本庄　「太々神楽　三升や浅尾」　11.26496
長秀　細判合羽 1　山佐・本庄「雀踊　宇治屋くま　きく」　11.26539
長秀　細判合羽 1　山佐・本庄　「手打連　う治や政二」「付添　さく」　11.26525
豊国　細判合羽 1　叶喜・山佐「一の谷忠度　京屋小か次」　11.26571
長秀　細判合羽 1　山佐　「吾妻奴　一りき鶴」　11.26556

文政中期　祇園神輿はらひねりもの姿
長秀　細判合羽 1　山佐　「小野道風　万屋小のぶ」　11.26529
長秀　細判合羽 1　山佐　「出替り美人　いづゝやよね」　11.26499

文政 5 年(1822)6 月　大坂新町ねりもの
重信　大判錦絵 1　「還城楽　中扇屋初花太夫」　11.18087
※他 15 枚は現物・画像未見故画題等未詳
所蔵番号のみ HP で知れるので次に記す
11.18086　11.25825　11.25826　11.25827　11.25828
11.25829　11.25830　11.25831　11.25832　11.25833
11.25834　11.25835　11.25836　11.25837　11.25838

文政 8 年(1825)8 月　大坂新町ねりもの
よし国　大判錦絵 1　「紙喜ノ梅松　先はやし」　11.36275
よし国　大判錦絵 1　「わたやりきの　唐士官女」11.36276
よし国　大判錦絵 1　「更棒　中ノ扇やみさき」　11.36277
よし国　大判錦絵 1　「さゝ羅すり　中ノ扇屋雛とり」　11.36278
よし国　大判錦絵 1　「西扇や雛咲太夫　ゑほし着」　11.36279／(R)17.3214.18
よし国　大判錦絵 1　「中折屋揚巻太夫　でんかく法師」　11.36280

文政 11 年(1836)6 月　大坂島之内ねりもの
重春　大判錦絵 1　「花色ころも　あふみやしま」「禅門仝ふさ」　11.36200

天保 7 年(1836)6 月　大坂島之内ねりもの
北英　大判錦絵 1　天喜　「はやし　大清小峰」　11.26589／(R)06.824.15
北寿　大判錦絵 1　天喜　「はやし　竹づゝ屋二竜」　11.26586／11.38797／(R)06.824.13
北英　大判錦絵 1　本清　「一夜官女　北森新いく」　11.38789／(R)06.824.9
北英　大判錦絵 1　「末広　大清小絹」　11.26590／11.38788／11.38792／(R)06.824.17／(R)17.3214.13
北英　大判錦絵 1　天喜　「鵜飼　まつ屋えむ」　11.38790／11.38791／(R)06.824.10
貞広　大判錦絵 1　天喜　「若菜摘　中森軒二代目とら」　11.26584／11.38813／11.38814／11.38815／(R)06.824.14
貞広　大判錦絵 1　天喜　「はした女　中森軒まつ梅」　11.26585／(R)06.824.11
重春　大判錦絵 1　「けそう文　伊丹駒小なべ」　11.26583／(R)17.3214.11／(R)06.824.12
重春　大判錦絵 1　「京扇屋てふ」　11.26587／11.38823／11.38824／11.38825／(R)17.3214.14／(R)06.824.18
重春　大判錦絵 2　天喜　「華陽夫人　中森軒ゑい」／「感陽宮　中森軒小浪」　11.36298a-b／11.38820a-b／(R)06.824.2　06.824.5／11.38818／11.38822
貞信　大判錦絵 1　本清　「羽衣　京喜きぬ葉」　11.26588／11.38816／(R)06.824.16

天保 8 年(1837)6 月　大坂北新地ねりもの
重春　大判錦絵 1　本清・綿喜・天喜「孟宗　伊勢島八重」　11.18158／11.38819／(R)06.824.1
重春　大判錦絵 1　本清・綿喜・天喜　「鶯宿梅　明石屋小とま」　11.38817／(R)06.824.3
重春　大判錦絵 1　本清・綿喜・天喜　「あたか　伊勢島もん」　11.38826／(R)06.824.4
貞広　大判錦絵 1　天喜・綿喜・本清　「石橋　扇さとゑつ」　(R)06.824.6
貞信　大判錦絵 1　天喜・綿喜・本清　「喜瀬川亀菊」「伊勢島いと」　(R)06.824.8
貞信　大判錦絵 1　天喜　「露の天神砂もちはやし　伊勢鶴寿吉」　11.36446／(R)06.824.26
貞信　大判錦絵 1　天喜　「露の天神砂もちはやし　伊勢鶴玉」　11.36447／(R)06.824.27
貞信　大判錦絵 1　天喜・綿喜・本清　「鎮西八郎　広島屋ちゑ」　(R)06.824.7
北妙　大判錦絵 1　本清・綿喜・天喜　「九文蛇　伊勢島より」　(R)06.824.24

【美人画】

文化頃　十二単美人と若衆
無款　細判合羽 1　11.19280

文化 10 年(1813)頃
無款　細判合羽 1　柏宗　「宇治屋里きく」　11.19281

天保 3 年(1832)頃　天保山遊山の図
北英　大判錦絵 3　11.35309　11.35310　11.35311

天保 8 年(1837)頃　北新地妓女
重春　大短冊錦絵 1　「扇里小ゑつ」「福秀ゆき」　(R)06.824.19

天保 11 年(1840)5 月　北新地　古市おどり
貞芳　大判錦絵 3　柴伊　「ふく秀　かう」「高田屋　小多加」「扇さと　ゆう」「柾木屋　小清」／「大柳　小いと」「高田屋　てつ」「広島屋　小かの」「伊勢しま　あさ尾」／「高田屋　多可」「大柳　池多津」「伊勢島　鶴歌」「広しま屋　千恵」　(R)06.824.21　11.22762　(R)06.824.20

安政頃　浪花風俗浮礼歌美人合の内
貞信　中判錦絵 4　春日堂「高らいばし屋ぐらやしき」／「道とん堀の春景」／「東御堂の暁雪」／「中之島鮪の松」　11.20715　11.20716　11.20718　11.20719

【風景画】

文化頃　是心山寿法寺滝桜の真図
探月斎　特大大判合羽 1　五福　11.20234

文化頃　風流近江八景
長秀　大判合羽 1　墨小　11.15048

天保 2 年(1831)3 月頃　大阪安治川口大浚市中御加勢之図
無款　扇面彩色　11.34999

嘉永頃　滑稽浪花名所
芳豊　中判錦絵 1　大甚　「御城追手」　11.36224.16
芳梅　中判錦絵 1　大甚　「京橋」　11.36224.17
芳梅　中判錦絵 1　「桜ノ宮」　11.36224.30
芳梅　中判錦絵 1　「樋の口」　11.36224.29
芳梅　中判錦絵 1　「鶴満寺」　11.36224.21
芳梅　中判錦絵 1　大甚　「長柄渡シ」　11.36224.19
芳梅　中判錦絵 1　大甚　「天満天神」　11.36224.18
芳梅　中判錦絵 1　大甚　「天満市場」　11.36224.20
芳梅　中判錦絵 1　大甚　「天神はし」　11.36224.25
芳梅　中判錦絵 1　大甚　「なにわばし」　11.36224.24
芳梅　中判錦絵 1　大甚　「大川すゝみ」　11.36224.23

芳梅 中判錦絵1 「堂島米市」 11.36224.26
芳梅 中判錦絵1 「鬼子母善神」 11.36224.5
芳梅 中判錦絵1 大甚 「浦江聖天」 11.36224.22
芳梅 中判錦絵1 「五百羅漢」 11.36224.27
芳梅 中判錦絵1 「安治川」 11.36224.28
芳梅 中判錦絵1 大甚 「赤手拭」 11.36224.1
芳梅 中判錦絵1 大甚 「住吉」 11.36224.2
芳梅 中判錦絵1 「四天王寺」 11.36224.3
芳梅 中判錦絵1 大甚 「清水」 11.36224.4
芳豊 中判錦絵1 大甚 「西御堂」 11.36224.10
芳梅 中判錦絵1 大甚 「法善寺」 11.36224.11
芳梅 中判錦絵1 大甚 「日本橋」 11.36224.9
芳梅 中判錦絵1 大甚 「下寺町」 11.36224.6
芳梅 中判錦絵1 大甚 「高津」 11.36224.8
芳梅 中判錦絵1 大甚 「生玉」 11.36224.7
芳梅 中判錦絵1 大甚 「うぶゆ」 11.36224.14
芳梅 中判錦絵1 大甚 「桃山」 11.36224.15
芳梅 中判錦絵1 大甚 「さなた山」 11.36224.12
芳豊 中判錦絵1 大甚 「城南杉山」 11.36224.13

安政頃 東都名所
国員 大判錦絵1 若松 「真乳山の雪」 (B)51.26

安政頃 名所江戸百景張交
貞信 大判錦絵 4 綿喜 「深川万年橋」「浅草金竜山」「千駄木団子坂花屋敷」「王子不動の滝」「墨田河橋場の渡かわら竈」／「鎧の渡し小網町」「上野清水堂不忍ノ池」「馬喰町初音の馬場」「目黒千代か池」「永代橋佃しま」／「上野山した」「浅草川首尾の松御厩河岸」「八ツ見のはし」「日本橋江戸ばし」「堀切の花菖蒲」／「けんきんするか町」「芝愛宕山 正月三日毘沙門使」「四ツ谷内藤新宿」「亀戸天神境内」「亀戸梅屋鋪」
(W)RES.54.34 RES.54.33 RES.54.32 RES.54.35

安政頃 六十余州名所図会
貞信 大判錦絵1 綿喜 「伊勢 朝熊山峠の茶屋」
(P.S)RES.50.50

安政頃 国尽四
貞信 小判錦絵1 「秋葉海道四十八瀬越」「遠江」
(S)21.8753

安政頃 菱垣剰錦番船川口出帆之図
芳豊 大判錦絵3 盛陽軒 11.36247a-c

文久頃 浪花百景
無款 中判錦絵2 石和 [目録]／[目録]
11.41862 11.35724／11.41863 11.35782／11.35781
国員 中判錦絵1 石和 「錦城の馬場」 11.35673
国員 中判錦絵1 石和 「今橋つきぢの風景」 11.35668
国員 中判錦絵1 石和 「八軒屋夕景」 11.35771
国員 中判錦絵1 石和 「さくらの宮景」 11.35772
国員 中判錦絵1 石和 「堂じま米市」 11.35735
国員 中判錦絵1 御霊軒 「鮒の松夜の景」 11.35736
国員 中判錦絵1 御霊軒 「解舟町」 11.35777
国員 中判錦絵1 石和 「浪花橋夕涼」 11.35778
国員 中判錦絵1 御霊軒 「真言坂」11.35669／11.35758
国員 中判錦絵1 石和 「天神祭り夕景」 11.30390
国員 中判錦絵1 石和 「松のはな」 11.35739
国員 中判錦絵1 石和 「新町店つき」
11.35740／11.35747
国員 中判錦絵1 御霊軒 「生玉絵馬堂」
11.35672／11.35748
国員 中判錦絵1 石和 「源八渡シ口」 11.35759
国員 中判錦絵1 石和 「北妙けん堤」 11.35760
国員 中判錦絵1 石和 「天満市場」 11.35763
国員 中判錦絵1 御霊軒 「住吉高とうろう」 11.35764
芳滝 中判錦絵1 石和 「高津」
11.35681／11.41883／11.41897
芳滝 中判錦絵1 石和 「梅やしき」
11.35683／11.35749／11.41914
芳滝 中判錦絵1 石和 「さな田山三光宮」
11.35750／11.41904／11.41950
芳滝 中判錦絵1 石和 「増井浮瀬夜の雪」
11.35751／11.41900／11.41951
芳滝 中判錦絵1 石和 「天満天神地車宮入」
11.35752／11.35761
芳滝 中判錦絵1 石和 「雑喉場」
11.35762／11.35773／11.41885
芳滝 中判錦絵1 石和 「四ツ橋」
11.35769／11.35774／11.41906
芳滝 中判錦絵1 石和 「長堀石浜」
11.35770／11.41901／11.41905
芳滝 中判錦絵1 石和 「今宮蛭子宮」
11.35743／11.41884／11.41898
芳滝 中判錦絵1 石和 「広田社」
11.35745／11.35775／11.41887
芳滝 中判錦絵1 石和 「長堀財木市」
11.35776／11.41903／11.41948
芳滝 中判錦絵1 石和 「森の宮蓮如松」
11.35674／11.35767／11.41949
芳滝 中判錦絵1 石和 「福しま逆櫓松」
11.35753／11.35768／11.41886／11.41913
芳滝 中判錦絵1 石和 「野田藤」 11.35754／11.41946
芳滝 中判錦絵1 石和 茨住吉」
11.35685／11.41947／11.41952
芳滝 中判錦絵1 石和 「松屋呉服店」
11.35670／11.41899／11.41953
芳雪 中判錦絵1 御霊軒 「四天王寺」 11.35689
芳雪 中判錦絵1 石和 「四天王寺合法辻」 11.35677
芳雪 中判錦絵1 石和 「河堀口」 11.35779
芳雪 中判錦絵1 石和 「生玉弁天池夜景」

11.35737／11.35780
芳滝 中判錦絵1 石和 「道頓堀太左衛門橋雨中」
11.35733／11.35738
芳雪 中判錦絵1 石和 「十三中道」 11.35757
芳滝 中判錦絵1 石和 「木津川口千本松」 11.35734
芳雪 中判錦絵1 御霊軒 「茶臼山」 11.35678
芳雪 中判錦絵1 石和 「うらえ杜若」 11.35746
芳雪 中判錦絵1 石和 「覚満寺之夕景」 11.35765
芳雪 中判錦絵1 石和 「勝曼院愛染堂」 11.35766
芳雪 中判錦絵1 石和「しりなし漆づゝみ甚兵衛の小家」 11.35755
芳雪 中判錦絵1 石和 「堀川備前陣家」
11.35676／11.35756
芳雪 中判錦絵1 石和 「安居天神社」 11.35741
芳雪 中判錦絵1 石和 「広田星力池稲荷」 11.35744
芳雪 中判錦絵1 石和 「新清水紅葉坂滝」 11.35742
芳雪 中判錦絵1 石和 「産湯味原池」 11.35679
国員 中判錦絵1 石和 「筋鐘御門」 11.35690
国員 中判錦絵1 石和 「三大橋」 11.35693
国員 中判錦絵1 石和 「天満ばし風景」 11.35698
国員 中判錦絵1 石和 「あみ島風景」 11.35699
国員 中判錦絵1 石和 「川崎御宮」 11.35701
国員 中判錦絵1 石和 「三井呉服店」 11.35703
国員 中判錦絵1 石和 「浜村鬼子母神」 11.35705
国員 中判錦絵1 「北瓢亭」 11.35710
国員 中判錦絵1 石和 「崇禅寺場々」 11.35708
国員 中判錦絵1 石和 「玉江橋景」 11.35712
国員 中判錦絵1 石和 「戎島天満宮御旅所」 11.35726
芳滝 中判錦絵1 石和 「川口雑喉場つきじ」 11.35675
国員 中判錦絵1 石和 「安治川ばし」 11.35722
芳雪 中判錦絵1 石和 「下安治川随見山」 11.35718
芳雪 中判錦絵1 御霊軒 「天保山」 11.35725
芳滝 中判錦絵1 石和 「新町廓中九軒夜桜」 11.35728
芳滝 中判錦絵1 石和 「あみだ池」 11.35729
芳滝 中判錦絵1 石和 「永代蔵」 11.35732
国員 中判錦絵1 石和 「北之大融寺」 11.35719
国員 中判錦絵1 石和 「両本願寺」 11.35717
国員 中判錦絵1 石和 「大江ばしより福しま風景」 11.35700
国員 中判錦絵1 石和 「二軒茶や風景」 11.35697
国員 中判錦絵1 石和 「道頓堀角芝居」 11.35695
芳滝 中判錦絵1 石和 「長町裏遠見難波蔵」 11.35696
芳雪 中判錦絵1 石和 「吉助牡丹盛り」 11.35694
芳雪 中判錦絵1 石和 「鉄眼寺夕景」 11.35692
芳滝 中判錦絵1 石和 「天王寺増井」 11.35691
芳滝 中判錦絵1 石和 「寿法寺」 11.35720
芳滝 中判錦絵1 石和 「舎利寺」 11.35716
芳雪 中判錦絵1 御霊軒 「御勝山」 11.35714
芳雪 中判錦絵1 石和 「茶臼山雲水」 11.35727
国員 中判錦絵1 石和 「四天王寺伽藍」 11.35730
芳滝 中判錦絵1 石和 「天下茶やぜさい」 11.35731
芳滝 中判錦絵1 石和 「住吉岸姫松」 11.35721
芳滝 中判錦絵1 石和 「住よし五大力」 11.35723
芳滝 中判錦絵1 石和 「浅沢の弁才天」 11.35684
芳滝 中判錦絵1 石和 「住吉反橋」 11.35671
国員 中判錦絵1 石和 「住吉本社」 11.35682
芳滝 中判錦絵1 石和 「住よし大和橋」 11.35680
芳雪 中判錦絵1 御霊軒 「京橋」 11.35713
芳雪 中判錦絵1 石和 「川崎ノ渡シ月見景」 11.35715
芳雪 中判錦絵1 御霊軒 「天満樋の口」 11.35711
芳雪 中判錦絵1 石和 「毛馬」 11.35709
国員 中判錦絵1 石和 「長柄三頭」 11.35707
国員 中判錦絵1 石和 「柴島晒堤」 11.35706
国員 中判錦絵1 石和 「江口君堂」 11.35702
芳雪 中判錦絵1 石和 「佐太村天満宮」 11.35704
国員 中判錦絵1 石和 「三島江」 11.35687
芳雪 中判錦絵1 石和 「西照庵月見景」 11.35688
芳滝 中判錦絵1 石和 「野中観音桃華盛り」 11.35686

慶応4年(1868)頃 セイミ局
無款 中判錦絵1 綿喜 11.35019

慶応4年(1868)閏4月 浪華安治川外国館真写之図
小信 大判錦絵1 綿喜 11.39169

明治2年(1869) 浪花新景松島松鶴楼の図
芳滝 大判錦絵4 八百善 11.35490a-d

明治2,3年(1869,1870)頃 浪花百景之内 **貞信**
中判錦絵1 「高麗橋」 11.36405
中判錦絵1 綿喜 「築地蟹島」 11.36427
中判錦絵1 「北新地樋之橋白雨」 11.36424
中判錦絵1 綿喜 「浦江の聖天」 11.36430
中判錦絵1 「神明宮」 11.36406／(S)21.6995
中判錦絵1 綿喜 「露の天神」 11.36425
中判錦絵1 「合羽島より東を望む」 11.36414
中判錦絵1 「五百羅漢」 11.36428
中判錦絵1 「中の島蛸の松」 11.36432
中判錦絵1 綿喜 「鶴満寺」 11.36421
中判錦絵1 「東本願寺」 11.36412
中判錦絵1 「心斎橋通初売の景」 11.36434
中判錦絵1 綿喜 「四ツばし」 11.36431
中判錦絵1 綿喜 「三津八幡宮」 11.36409
中判錦絵1 綿喜 「自安寺妙見宮朝参の図」 11.36426
中判錦絵1 綿喜 「松が鼻」 11.36419
中判錦絵1 「天満宮御旅書」 11.36423
中判錦絵1 綿喜 「なんばむら御蔵」 11.36415
中判錦絵1 「住吉高灯籠」 11.36418
中判錦絵1 「住よし反橋」 11.36422
中判錦絵1 綿喜 「雲水邦福寺」 11.36416

中判錦絵 1　綿喜　「四天王寺東門」　11.36413
中判錦絵 1　綿喜　「梅屋敷」　11.36429
中判錦絵 1　綿喜　「玉造稲荷舞台」　11.36417
中判錦絵 1　「長町毘沙門堂」　11.36408
中判錦絵 1　綿喜　「安井天神」　11.36411
中判錦絵 1　綿喜　「広田社雪景」　11.36433／(S)21.6994
中判錦絵 1　「瑞竜寺俗に鉄眼寺ト云」　11.36420
中判錦絵 1　綿喜　「住吉神宮寺」　11.36410
中判錦絵 1　「川口の春景」　11.36407／(S)21.6993

明治 3,4(1870,1871)頃　都名所之内　**貞信**
中判錦絵 1　「伏見稲荷社」　11.36379／(S)21.6997
中判錦絵 1　綿喜　「東福寺通天橋」　11.36403／(S)21.7001
中判錦絵 1　綿喜　「三十三間堂後堂之図」　11.36382
中判錦絵 1　綿喜　「高台寺秋景」　11.36392／(S)21.6999
中判錦絵 1　綿喜　「四大谷目鏡橋」　11.36385／(P.S)RES.49.185
中判錦絵 1　綿喜　「音羽山清水寺」　11.36401
中判錦絵 1　綿喜　「黒谷金戒光明寺」　11.36400
中判錦絵 1　綿喜　「真如堂楓林」　11.36399
中判錦絵 1　綿喜　「南禅寺大燈炉」　11.36390
中判錦絵 1　綿喜　「吉田山神楽岡」　11.36396／(S)21.7003
中判錦絵 1　綿喜　「知恩院本堂に傘を見る」　11.36381
中判錦絵 1　「円山安養寺夜景」　11.36377
中判錦絵 1　綿喜　「祇園大鳥居」　11.36397
中判錦絵 1　綿喜　「祇園社西門」　11.36404
中判錦絵 1　綿喜　「四條橋河原夕涼」　11.36387
中判錦絵 1　綿喜　「四条橋より縄手通大和橋を望」　11.36402／(S)21.7002
中判錦絵 1　綿喜　「如意嶽大文字」　11.36384／(S)21.7000
中判錦絵 1　綿喜　「比叡山山上より湖水を望」　11.36393
中判錦絵 1　綿喜　「三條大はし」　11.36380
中判錦絵 1　綿喜　「北野天満宮境内」　11.36376
中判錦絵 1　綿喜　「金閣寺雪景」　11.36389／(S)21.6998
中判錦絵 1　綿喜　「妙心寺雪江松」　11.36383
中判錦絵 1　綿喜　「竜安寺雪曙」　11.36388／(S)21.6996
中判錦絵 1　「御室仁和寺花盛」　11.36394
中判錦絵 1　「広沢池秋の月」　11.36398／(S)21.7004
中判錦絵 1　綿喜　「高雄奥の院庭中」　11.36391／(S)21.7006
中判錦絵 1　「栂尾門前雨中」　11.36378／(S)21.7005
中判錦絵 1　綿喜　「愛宕山之図」　11.36375
中判錦絵 1　「嵐山三軒家より眺望」　11.36395
中判錦絵 1　綿喜　「島原出口光景」　11.36386

【歴史物】

明治 1 年(1868)　毛理島山官軍大勝利之図
国広Ⅱ　大判錦絵 5　11.39166a-e

明治 1 年(1868)　本願寺御門跡大坂津村御坊所仮皇居之図
貞広　大判錦絵 3　11.36466a-c

明治 1 年(1868)5 月　神功皇后三韓征伐御調煉之図
貞信　大判錦絵 1　綿喜　11.36443

明治 1 年(1868)10 月　神武天皇御即位大慶寛仁大日本和合万世不朽之大業を創し給ひ文武誠忠之諸将に褒賞を給ふ図
貞信　大判錦絵 3　綿喜　11.36435a-c

【その他】

文化頃　桂川
松好斎　大判錦絵 1　岩市　［お半　長右衛門］　11.26557

文化頃
長秀　大判合羽 1　山佐　「纓銭樹之図」　(A)RES.49.44

文化頃
堀田　細判合羽 1　清水吉　「睦月」「春駒」　(F)54.329

文化頃
無款　細判合羽 1　本吉　「七夕祭」　(R)06.752

文化頃
無款　細判合羽 1　「かずかずござるぎんこばん」　(R)11.1997

天保頃
芳梅　中本 1　綿喜　「滑稽人物　諺臍の宿替　十一偏」「半水戯作」　※噺本の袋　11.37324

天保頃　十二ヶ月風物
一船　大判錦絵 11　ワタヘ　［正月］／［二月］／［三月］／［四月］／［五月］／［六月］／［七月］／［八・九月］／［十月］／［十一月］／［十二月］
11.36051　11.36043　11.36053　11.36050　11.36049
11.36052　11.36048　11.36047　11.36046　11.36045
11.36044

安政頃　アメリカは国人物之図
国員　中判錦絵 1　はり弥・石和　(S)53.451

安政頃　菊に雉子
貞信　大短冊錦絵 1　(S)21.7928

新収資料紹介

菅楯彦画　藤沢南岳賛「猿田彦」

近代の大阪を代表する画家菅楯彦が描くところの「猿田彦」に、これまた大阪を代表する漢学者藤沢南岳が賛を加えた作品。

菅楯彦（1878～1963）は、鳥取県倉吉の生まれ。長年大阪に住み、晩年は「浪速御民」と署名した。本業の画業はいうまでもなく、舞楽・文楽・祭礼・風俗など大阪の文化を研究する一方、「天神祭・住吉祭・生玉祭などの復興に寝食を忘れて奔走し」（『大阪人物事典』）、昭和37年、最初の大阪名誉市民の栄誉を受けた。

藤沢南岳（1842～1920）は香川県高松の生まれ。明治維新後、大阪に出て父藤沢泊園の跡を受けて、淡路町の泊園書院を主宰。懐徳堂閉校後、欧米思潮が強まる大阪にあって、漢学精神の復興を訴えた。「時に近畿を巡遊して講演、学名四海に聞こえ」（『大阪人物事典』）、その足跡は扁額や書軸、蔵書、碑文、さらに道明寺天満宮の釈奠祭として大阪府下に広く残されている。

賛の脇に「七三翁南岳」と署名されていることから、南岳73歳、大正３年（1914）の作品。この時楯彦は37歳で、親子以上に歳の離れた二人が、「猿田彦」を共有している。

猿田彦の上部に書かれた賛は、「宜導神威々自薫風暖日馬嘶高」と読め、祭礼に登場した猿田彦を詠み、描いたものではないかと想像されるが、大田南畝『蘆の若葉』（1801年）につぎのような証言がある。「ややありて鼻高き面きたる猿田彦の神馬にのりてわたる」（６月17日御霊社祭礼）、「かの猿田彦の神馬に乗りてわたる」（21日仁徳天皇稲荷明神祭礼）、「次に猿田彦の面きて装束し、馬上にてわたる」（22日座摩社祭礼）。本作の猿田彦も、たしかに鼻が高く、想像を逞しくさせるものがある。

以上のことから、大阪の夏祭りに登場する猿田彦を題材に共有することで本作品がなったのではないかと推測される。

（総括プロジェクトリーダー　藪田　貫）

菅楯彦画　藤沢南岳賛「猿田彦」

新収資料紹介

明治期における大阪名所資料

江戸時代後期、名所見物への関心が高まった結果、名所に関する出版物が多く生み出された。それらは『摂津名所図会』に代表される名所の故事来歴を記した地誌類、『浪花百景』のように風景を絵画的に描いた錦絵、また、大坂市中の見所や有名商店を紹介した簡便な一枚摺など、多様な形式をみせる。

ここに紹介する３点も、江戸時代から続く、名所に関する出版物に連なる資料である。折本・双六と、それぞれの形式は異なるが、名所という視点から分析することで、大阪における名所の変遷や風景の変化が明らかになるだろう。

『浪花新景』 縦18.0×横6.0（cm）折数 44折

明治維新後の新たな「浪花十景」を描いた木版摺の折本である。表紙の題箋を欠くが、第１図と第２図に「浪花新景」とあるため、これを書名とした。十景の内容は以下の通りである。

①川崎鋳造場　②松島船座敷　③松島松鶴楼　④川口運上所
⑤安治川伝信機局　⑥川口目印山　⑦新橋外国館　⑧中之島
⑨東堀鉄橋　⑩淀川蒸気船

明治４年２月、天満川崎に開業した造幣局（川崎鋳造場）は、淀川を運行する蒸気船とともに、新しい時代を象徴する風景として、錦絵の格好の題材となった。また、付近の大川両岸は江戸時代後期からの桜の名所である。「川崎鋳造場」の図は、桜並木のなかに鋳造所の煙突がそびえ立つ新しい大阪の風景となっている。

「大阪名所新画図」 縦37.6×横52.5（cm）明治24年（1891）

江戸と明治、新旧50ヶ所の名所が入り混じった銅版画である。「ふりだし」や「上がり」はないが、双六の形式をとり、それぞれの升目に風景が描かれている。

明治３年、大阪初の鉄橋として生まれ変わった高麗橋を始め、帆船通行用の跳ね橋となっていた千代崎橋など、７つの鉄橋が新名所として登場する。なかでも、明治21年に鉄橋となった天神橋と天満橋が中央に大きく配置される。「十三川春景」図には、明治16年に操業を開始した大阪紡績会社の煙突からのぼる煙が描かれ、近代都市へと変貌を遂げる大阪の姿がうかがえる一枚である。

「大日本大阪名所廻双六」 縦39.1×横54.3（cm）明治31年（1898）

生國魂神社を「ふりだし」に、新旧32ヶ所の大阪名所を双六形式で紹介する。「上り」は「大阪鎮台古景」。大阪鎮台は明治21年に第四師団と改称された。明治23年に開設された城東練兵場も描かれている。また双六の欄外には、高麗橋から各名所への里程が記されている。

（祭礼遺産研究プロジェクトR.A.　内海寧子）

新収資料紹介

幕末から明治期の買物案内

『商人買物独案内』１冊　縦11.9×横18.6（cm）　慶応３（1867）補刻　浪華書林松岡栄作ほか６肆

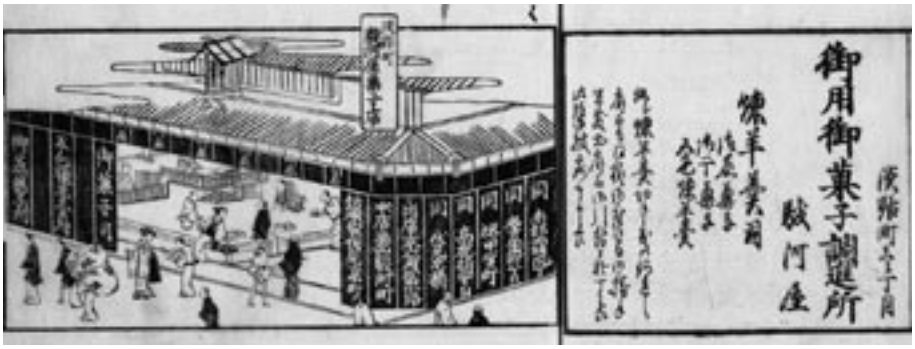
『浪華名所智掾』１冊　縦12.2×横18.3（cm）　明治18（1885）版　金石堂古鹿利兵衛ほか４肆

いずれの資料も大阪市中の店を紹介した書物である。

『商人買物独案内』は約280種の業種をいろは順に分類している。一方『浪華名所智掾』は、「上町之部」「船場之部」「島ノ内之部」といった地域別の分類をしている。いずれも読者の利用の便を考えてのことであろう。

本文には店の名前や所在地、品物の種類などが掲載されている。版面や掲載内容には相違があり、店によっては店頭の様子が描かれているものもある。近世末期から近代における大阪の商業を知る上で、いずれも有用な資料である。

さらに『浪華名所智掾』は、「有名諸大家」「能狂言」などの項目を立て、当時大阪にいた文化人の名前を羅列している。近代大阪の文化的環境の一端を知ることができ、貴重である。



商人買物独案内

浪華名所智掾

漢学・詩文学の大家として藤澤南岳の名前が紹介（『浪華名所智掾』）

（学芸遺産研究プロジェクトR.A.　松本　望）

〈紹介資料収集年月〉

菅楯彦画　藤沢南岳賛「猿田彦」	平成18年２月	浪花新景	平成19年１月
大日本大阪名所廻双六	平成18年６月	商人買物独案内	平成19年１月
大阪名所新画図	平成18年６月	浪華名所智掾	平成19年１月

全体の活動報告

センター全体の活動一覧

月　日	活　動　報　告
3月31日	年報『なにわ・大阪文化遺産学研究センター　2005』刊行
3月31日	『Occasional paper№2　河内国府遺跡里帰り展』刊行
3月31日	『なにわ・大阪文化遺産学叢書1　関西大学図書館所蔵上方役者絵画帖』刊行
4月12日	なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟への引越
4月22日	関西大学創立120周年記念事業　なにわ・大阪文化遺産学研究センター竣工記念特別展「インカへの道　―アンデスの秘宝―」オープニングセレモニー
5月13日	第1回ワークショップ「天王寺舞楽の魅力」（なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟1階　文化遺産実習・展示室）
5月13日	『難波潟№3』刊行
5月22日～6月12日	八尾市・植田家資料のセンターへの搬出・搬入作業
6月3日	第1回学芸遺産研究例会（なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟1階　文化遺産実習・展示室）
6月24日	第1回NOCHSレクチャーシリーズ「近世大坂の学芸」（なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟1階　文化遺産実習・展示室）
7月1日	第1回祭礼遺産研究例会（なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟1階　文化遺産実習・展示室）
7月7日	第1回歴史資料遺産研究例会（なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟1階　文化遺産実習・展示室）
7月14日	大阪・堀川めぐり
7月29日	第1回生活文化遺産研究例会（なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟1階　文化遺産実習・展示室）
6月22日	長期インターンシップ実習開始
9月15日	『難波潟№4』刊行
10月8日	芦屋市立美術博物館共催シンポジウム（芦屋市立美術博物館）
10月12日	北恩加島小学校4年生校外学習へ補助員としての参加
10月14日	地域連携企画第2弾「八尾安中新田植田家の文化遺産」（八尾市龍華コミュニティセンター）
10月25日	大阪ブランドサミット参加「大阪の四季を彩る祭礼」（大阪国際会議場10階）
10月28日	関西大学創立120周年記念行事：シンポジウム「日本のなかの大阪文化遺産」（関西大学千里山キャンパスBIGホール100）、特別公演「篝の舞楽」（尚文館前芝生広場）
10月27日	『Occasional paper№3　なにわ伝統野菜VS京野菜』刊行
11月18日	第2回ワークショップ「お茶と茶釜～千里庵へのいざない～」（なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟1階　文化遺産実習・展示室／関西大学茶室）
11月25日	第3回NOCHS文化遺産学フォーラム「まちづくりと文化遺産」（りそな銀行大阪本社地下講堂）
12月4日	第2回学芸遺産研究例会（なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟1階　文化遺産実習・展示室）
12月5日～7日	韓国文化遺産視察
12月22日	長期インターンシップ実習報告会
1月12日	第2回祭礼遺産研究例会（なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟1階　文化遺産実習・展示室）
1月13日	第2回生活文化遺産研究例会（なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟1階　文化遺産実習・展示室）
1月19日	第4回NOCHSレクチャーシリーズ「中・近世大坂の寺院と歴史資料遺産」（なにわ・大阪文化遺産学研究センター1階　文化遺産実習・展示室）
1月31日	P.D.・R.A.のための文章講座①（センター2階会議室）
1月31日	『難波潟№5』刊行
2月14日	P.D.・R.A.のための文章講座②（センター2階会議室）
3月31日	『Occasional paper№4 近世大坂の学芸』刊行
3月31日	『なにわ・大阪文化遺産学叢書2　大坂代官竹垣直道日記（一）』刊行
3月31日	『なにわ・大阪文化遺産学叢書3　神社を中心とする村落生活調査報告（一）』刊行
3月31日	『なにわ・大阪文化遺産学叢書4　道明寺天満宮宝物選』刊行

3月末現在

センター全体の活動報告

Ⅰ．ワークショップ

①第１回ワークショップ

「天王寺舞楽の魅力」

５月13日（土） 参加者130名

於：なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟１階
　　文化遺産実習・展示室

第一部　ビデオ上映「四天王寺聖霊会」
　　舞楽の楽器と演奏

第二部　襲装束の解説と着付けと舞楽「萬歳楽」

解説：小野　功龍氏（天王寺楽所雅亮会理事長）

演者：天王寺楽所雅亮会

センターでは、今年度初のワークショップを開催した。当センターのワークショップは、大阪の今に残る文化遺産を地域の人びとに体験していただき、さらなる理解を深める機会を提供することを目的としている。

天王寺楽所雅亮会による演奏

「萬歳楽」公演

第一部では、小野功龍氏による解説と、それにともなう天王寺楽所雅亮会による舞楽の楽器が演奏された。小野先生の指揮にしたがい、静寂のなか、美しい音色が会場内に響き渡った。第二部では、二人の舞人による「萬歳楽」が披露され、一定の規律あるリズムでありながらも躍動感のある舞に、来場者も見入っていた。

第１回ワークショップを通じて、実際に大阪の文化遺産にふれること、体感することの意義を学ぶことができた。

②第２回ワークショップ

「お茶と茶釜　～千里庵へのいざない～」

11月18日（土） 参加者41名

於：なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟１階
　　文化遺産実習・展示室
　　関西大学茶道部茶室「千里庵」

第一部 「茶釜のできるまで」

講演：角谷　征一氏（㈳日本工芸会正会員、㈳大阪工芸協会副会長）

第二部　お点前体験

解説：福原　宗寿宗匠（裏千家師範）

実演：洗心会（関西大学茶道部OB）

第一部は、角谷征一氏が、父であり人間国宝である角谷一圭氏による茶湯釜制作工程の映像をみながら茶湯釜制作について解説をした。角谷氏の話からは、ものづくりに込められた地域の人びとのこころが伝えられた。また、実際に貴重な茶湯釜を持参していただき、来場者に鑑賞の仕方や扱い方についても教えてもらうことができた。第二部では、関西大学茶道部および茶道部OB（洗心会）にご協力いただき、来場者に千里山キャンパス内に残された茶室「千里庵」にて、解説をまじえた実際のお点前の体験をする機会を設けた。身近な関西大学にある文化遺産にふれることができ、あらためて地域のなかに埋もれている文化について考えることができた。

Ⅱ．NOCHSレクチャーシリーズ

①第３回NOCHSレクチャーシリーズ

「近世大坂の学芸」

６月24日（土） 参加者49名

於：なにわ・大阪文化遺産学研究センター１階
　　文化遺産実習・展示室

Andrew Gerstle氏（ロンドン大学SOAS教授、国際日本文化研究センター研究員）
「女形の身体を描く―三ヶ津の浮世絵肉体表現を問う―」
水田　紀久氏（元関西大学教授、木村蒹葭堂顕彰会代表）
「同床同机―増山雪斎侯と木村蒹葭堂―」

今回は、近世大坂における学芸遺産について、国内外を問わず精力的な研究に取り組んでおられるAndrew Gerstle氏と水田紀久氏に講演をいただいた。

Andrew Gerstle氏は、近世期大坂の流光斎如圭の写実的な人物の描き方の流れが、四条派や月岡雪鼎などのような上方の美人画・人物画の伝統からくる可能性を考えた場合、江戸絵に重点がおかれる浮世絵研究にも、人物像の流れに上方絵を入れたらおもしろいのではないかと課題を提起した。

水田紀久氏は、長島藩藩主・増山雪斎侯の人柄を、雪斎侯の建てた「虫塚」や虫の採集記録『虫豸帖』から描き出し、また、雪斎侯に「独楽園」に寄題する賀詞を寄せた木村蒹葭堂についても、人生における節目の出来事からその人物像を語った。

②第４回NOCHSレクチャーシリーズ
「中・近世大坂の寺院と歴史資料遺産」
１月19日（金）　参加者39名
於：なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟１Ｆ
　　文化遺産実習・展示室
大澤　研一氏（大阪歴史博物館）
「地域のなかで寺院を考える―中世～近世の摂河泉を題材に―」
冨坂　賢氏（独立行政法人国立博物館東京国立博物館）
「国指定文化財・歴史資料の現状と課題」

今回は、地域のなかにおける歴史資料遺産について、歴史資料を選定し、それを保存・活用させることを大阪の地域および国を対象範囲として調査・研究活動をつづけている大澤研一氏と冨坂賢氏に講演をいただいた。

大澤研一氏は、地域社会における寺院の機能について、権力の変遷や家意識の高まりのなかで、中・近世移行期における寺院の存在形態を描き出した。

冨坂賢氏は、文化財としての歴史資料に対する、文化庁の取り組みや「歴史資料」概念の拡がりのなかで、近代の文化遺産保護の必要性に重点が置かれるようになった経緯を述べ、その保存・活用のためのいくつかの課題を指摘した。

Ⅲ．地域連携企画

地域連携企画第２弾
「八尾安中新田植田家の文化遺産」
（八尾市教育委員会と共催）
10月14日（土）　参加者119名
於：八尾市・旧植田家住宅
　　八尾市・龍華コミュニティセンター
第一部　現地説明会
森　隆男氏（関西大学教授・生活文化遺産研究プロジェクト研究員）
第二部　講演会
李　熙連伊氏（八尾市立歴史民俗資料館学芸員）
「植田家に伝わった河内木綿」
藪田　貫氏（関西大学教授・学芸遺産研究プロジェクトリーダー）
「植田家の人々と学芸」
八尾市文化財課
「旧植田家住宅整備について」

今年の地域連携企画は、八尾市教育委員会と共同でおこなったものである。これまで八尾市教育委員会と当センターが協力しておこなってきた調査の成果を八尾市民の皆さまに報告した。

第一部は、八尾市・旧植田家住宅における現地説明会を開催した。森隆男氏による母屋をはじめ、旧植田家の住居の構造や当時の生活空間としての役割などの説明から、旧植田家住宅像を描き出し、八尾の人びとに当時の生活を理解してもらうことができた。

第二部では、まず、李熙連伊氏が、豪快なタッチで描かれた節句幟や風呂敷など河内木綿の織物について絵柄の話や当時の生活に実際に使用されていた状況などをおりまぜた話をおこなった。つづく藪田貫氏は、残されている写本の状態から植田家の人びとの教育環境や成長過程を説明した。最後に、八尾市文化財課・岸本邦雄課長から、旧植田家住宅を資

料館として復元整備し、地域の人びとに八尾の文化遺産について触れる機会を提供することを話した。

Ⅳ．NOCHS文化遺産学フォーラム

第３回NOCHS文化遺産学フォーラム
（株式会社りそな銀行と共催）
「まちづくりと文化遺産」
11月25日（土） 参加者83名
於：りそな銀行大阪本社地下講堂
＜基調講演＞
神野　直彦氏（東京大学大学院経済学研究科・経済学部教授）
＜パネリスト＞
川口　良仁氏（「平野の町づくりを考える会」・全興寺住職）
土居　年樹氏（天神橋筋商店連合会会長）
中村　英雄氏（徳島市「新町川を守る会」代表）
藤原　明氏（株式会社りそな銀行地域サポート本部プランニングマネージャー）
角　知子氏（新世界アーツパーク事務局チーフ）

今回のフォーラムは、りそな銀行大阪本社と共催であった。まず、基調講演では神野直彦氏が、地域の発展は、「人間の信頼の絆」からもたらされるということ、また、「希望と楽観主義」で現在にみる地域社会崩壊の苦難を乗り越えようとすることによって途が開けてくることを述べ、地域社会におけるまちづくりについて議論する場に導いた。

つづくパネルディスカッションでは、大阪その他地域においてまちづくりに積極的に関わっている人たちに、それぞれ個性あふれる活動状況について映像を用いながら紹介してもらった。地域の歴史的な遺産や人びとが守ってきたものを、現在のまちづくりに取り込み、住民に活用してもらう工夫をすることや後世に保存する方策を考えることなど、まちづくりへの並々ならぬ努力と思いが伝わってきた。

まちづくりパネルディスカッション

牧村史陽氏旧蔵大阪の古写真・パネル展示に見入る来場者

Ⅴ．関西大学創立120周年記念行事

シンポジウム「日本のなかの大阪文化遺産」
10月28日（土）13時～16時
於：関西大学千里山キャンパス第２学舎BIGホール100
＜基調講演＞
髙橋　隆博（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター長）
「なにわ・大阪の文化遺産」
＜パネリスト＞
森　まゆみ氏（作家・地域雑誌編集者）
小野　功龍氏（元相愛大学学長・天王寺楽所雅亮会理事長）
Andrew Gerstle氏（ロンドン大学SOAS教授）
＜特別ゲストパネラー＞
笑福亭仁智氏（社団法人　上方落語協会理事）
＜総合司会＞
藪田　貫（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター総括プロジェクトリーダー）

特別公演「篝の舞楽」
10月28日（土）16時30分～18時
於：関西大学千里山キャンパス　尚文館中庭
演目
振鉾（えんぶ）　陪臚（ばいろ）

還城楽（げんじょうらく）
長慶子（ちょうげいし）
演奏：天王寺楽所雅亮会
解説：小野　功龍氏（雅亮会理事長）

関西大学120周年記念行事の一環として、当センターではシンポジウムを開催することとなった。まず、基調講演のなかで、髙橋隆博センター長が、関西大学に残されている先人の学問的な足跡をたどりながら、大阪の文化遺産についての地道な調査・研究活動をつづけていくことが今求められていることであると述べた。つづくパネルディスカッションでは、藪田貫総括プロジェクトリーダーによる司会のもとで、それぞれ東京、外国、大阪という、パネリストが活躍する場から大阪の文化遺産をみたときに、今後の研究をする上で何に注目をすればよいのかなどの議論がかわされた。また、特別ゲストパネラーとして笑福亭仁智氏をお招きし、落語という上方文化を通じてみえる大阪について語ってもらった。

同日夕方より、天王寺楽所雅亮会による特別公演「篝（かがり）の舞楽」が尚文館前芝生広場でおこなわれた。

闇のなか、篝に火が入れられると、そこにつどった約1,000人ほどの観客は、静寂のなか楽人たちの奏でる美しい音色に導かれながら、聖域と化した舞台上で豪快かつしなやかに舞う舞人たちに、しばし見入っていた。

パネルディスカッション（BIG ホール 100 にて）

特別公演「篝の舞楽」（尚文館前芝生広場にて）

Ⅵ. シンポジウム

（芦屋市立美術博物館との共催）
公開シンポジウム「近世大坂画壇の特質」
10月８日（土）　参加者48名
於：芦屋市立美術博物館
＜基調講演＞
橋爪　節也氏（大阪市立近代美術館建設準備室）
＜パネリスト＞
有坂　道子（京都橘大学助教授、なにわ・大阪文化遺産学研究センター学芸遺産研究プロジェクト研究員）
「文人画家たちの交流―木村蒹葭堂の周辺―」
北川　博子（阪急学園池田文庫、なにわ・大阪文化遺産学研究センター学芸遺産研究プロジェクト研究員）
「大坂画壇と歌舞伎」
＜司会＞
明尾　圭造（芦屋市立美術博物館学芸課長、なにわ・大阪文化遺産学研究センター歴史資料遺産研究プロジェクト研究員）

この企画は、芦屋市立美術博物館と共催でおこなったものである。当センターからは、学芸遺産研究プロジェクト研究員の有坂道子氏と北川博子氏がパネリストとして、歴史資料研究プロジェクト研究員の明尾圭造氏が司会者として参加した。

シンポジウムの様子

Ⅶ. 文化遺産視察

「韓国慶州の文化遺産」

12月５日（火）～７日（木）

今年度は、韓国・慶州における新羅時代の文化遺産を訪問した。慶州の景観や遺物保存の方法を学ぶとともに、今後センターにおいて大阪の文化遺産を調査・研究するにあたって、大きく示唆を受けるものとなった。

＜視察行程＞

12月５日（火）

９：00　関西国際空港集合
11：00　金海国際空港到着
11：30　同　出発
12：20　通度寺到着
13：25　同　出発
14：15　古墳公園到着
15：10　同　出発
15：15　慶州国立博物館到着
17：00　同　出発

12月６日（水）

９：15　宿泊所出発
10：00　石窟庵到着

佛国寺・大雄殿前にて

東国大学校（発掘現場）にて

10：50　同　出発
11：00　国立慶州文化財研究所到着
11：20　同　出発
11：30　仏国寺到着
12：10　同　出発
12：15　掛陵到着
12：45　同　出発
12：55　四天王寺址到着
13：20　同　出発
13：35
～　昼　食
15：10
15：15　武烈王陵到着
15：20　同　出発
15：35　東国大学校（発掘現場）到着
14：10　同　出発
14：20　金　鎬詳氏（(財)慶州文化遺産調査団）
講演（於：社団法人 新羅文化院）
「新羅（慶州）文化の現在」
18：30　同講演終了

12月７日（木）

９：00　宿泊所出発
10：40　金海国際空港到着
13：15　関西国際空港到着

Ⅷ. その他の研究行事

①大阪・堀川めぐり

７月14日（金）

大阪の街並みを川から眺望し、大阪の文化についての認識を深めるため、「大阪・堀川めぐり」を企画した。湊町船着場（湊町リバープレイス）を発着点とし、道頓堀川～木津川～堂島川～東横堀川に沿う歴史ある大阪の景観をみつめ、近世～近代～現代の文化遺産について考える良い機会となった。

②大阪ブランドサミット「大阪の四季を彩る祭礼」

10月25日（水）

於：大阪国際会議場10階

大阪ブランドコミッティ主催の企画で、「大阪の文化」に関する調査・研究成果を大学および企業が中心となって紹介するものであった。当センターからは、藪田貫総括プロジェクトリーダーおよび祭礼

堀川より大阪の街並みを臨む

玉造稲荷神社にて

遺産研究プロジェクトが中心となって大阪の祭礼について調査した結果を映像やパネルにて紹介した。

会場後方では、大阪の寺社と関係するなにわ伝統野菜の紹介と試食会をおこなった。

③小学校教育との連携

大阪市立北恩加島小学校

「なにわの伝統野菜」からの学び

９月13日（水）勝間南瓜の調理実習視察

天王寺蕪や勝間南瓜など、なにわの伝統野菜復活の立役者である石橋明吉氏のご紹介により、大阪市立北恩加島小学校（大正区）を訪ねた。

同校では、石橋氏のご指導のもと、2006年度から勝間南瓜の種まき・栽培・収穫体験をおこなっている。９月13日には、収穫した勝間南瓜の調理実習と試食会が実施され、その模様を視察した。

10月12日（木）

なにわの伝統野菜をめぐる校外学習説明補助

勝間南瓜の栽培を通じ、なにわの伝統野菜に関心をもった児童らは、野菜の背景にある伝統を学ぶため、大阪市教育改革プログラムの一環として実施されているレッツゴープラン事業を活用し、伝統野菜とつながりのある寺社を見学した。当センターからは、児童への説明補助員として４名が、校外学習に同行した。

児童らは、阿倍王子神社（天王寺蕪）・生根神社（勝間南瓜）・玉造稲荷神社（玉造黒門越瓜）・法楽寺（田辺大根）などを訪問する班に分かれ、各交通機関を乗り継いで、それぞれの見学先にたどりついた。見学先では、神職・住職らから説明を受け、野菜に関する質問会もおこなわれた。

２月15日（木）

田辺大根の調理実習と報告会視察

勝間南瓜に続き、４年生の児童らが、10月下旬から、田辺大根と天王寺蕪を栽培した。この日は、田辺大根の大根餅を調理し、試食会を開いた。

午後からは「伝統野菜ファイナル」として、伝統野菜について学習した内容を発表する会が開催された。

賞

感謝状

関西大学の学生様

あなたはレッツゴープランのつきそいをしてくれました。
行き方がわからなかった時に一緒に調べてくださったおかげで無事に目的地に着くことができました。ありがとうございました。
ここに感謝状を送ります。

平成19年2月15日
大阪市立北恩加島小学校
4年一同

大阪市立北恩加島小学校からの感謝状

④P.D.・R.A.のための文章講座

１月31日（水）、２月14日（水）

講師：永井　芳和氏

（読売新聞大阪本社編集委員）

於：なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟２階会議室

センターでは、調査・研究の頻度が徐々に増加しており、それにともなう研究成果物への執筆作業が増えている。そこで、文章を読み手に分かりやすく伝えるための記述の仕方について、読売新聞大阪本社編集委員・永井芳和氏に講演をいただいた。

永井先生の講義に聞き入る R.A.

Ⅸ．調査

①八尾植田家調査

今年度は、八尾市・植田家旧蔵の書籍、古文書、扁額、屏風類を当センターにて調査・研究をするために、八尾市から寄託を受けた。

まず、八尾市教育委員会と協力し、植田家旧蔵資料の当センターへの搬出・搬入をおこない、さらに燻蒸をして保存するための体制をととのえた。

今後は、これらの資料についての調査をすすめ、成果としてまとめていくことが課題である。

現在は、古文書・書籍・民具の調査をすすめているところである。

＜植田家旧蔵資料の植田家よりセンターへの搬出・搬入日程＞

５月22日　植田家資料搬出準備作業
５月24日　植田家蔵にて八尾市による資料燻蒸
５月29日　植田家資料梱包・搬出準備作業
５月30日　センターへの資料搬入
６月７日～12日　センターにて資料燻蒸

②NOCHSメール配信

昨年度にひきつづき､各プロジェクトの研究員が、調査・研究の現況を速報的に伝えるために、月２回の配信をおこなった。2006年度は、P.D.・R.A.のほかに、センター研究員や事務局、またインターンシップ生などの記事も掲載し、内容を充実させることにつとめた。

植田家資料燻蒸の準備

Ⅹ．センター来訪者

2006度、当センターには、調査・研究のため多くの方が来館された。

＜来館者＞

８月

Jan Sýkora（ヤン・シーコラ）氏
（チェコ・カレル大学哲学部日本学科助教授）
講演：「チェコにおける日本研究の現状～カレル大学を中心に～」

９月

山田　豊弘氏
（りそな御堂筋ビジネスソリューションプラザ・プランニングマネージャー）

2006年11月25日開催・NOCHS第３回文化遺産学フォーラム「まちづくりと文化遺産」打ち合わせのため来館。

10月

Franziska Ehmcke（フランチィスカ・エームケ）氏
（ドイツ・ケルン大学日本学科教授）
講演：「オーストリアで新再発見された大坂図屏風」
エームケ氏の紹介された屏風は、2006年10月19日（木）の朝日新聞朝刊１面に掲載された。

11月

朝賀　浩　氏
（大阪市立美術館主任学芸員）
小浮　恵子氏

（日本経済新聞社　企画事業部）
Franziska Ehmcke（フランチィスカ・エームケ）氏が紹介された「大坂図屏風」に関する取材にて来館。
伊藤　賢一氏
（大阪市立中央高校教諭）
大阪文化遺産学の学習に関する高大連携事業について相談のため来館。

12月
藤原　学氏
（吹田市立博物館学芸員）
当センターの韓国文化財視察のプランニング・アドバイザーとして来館。
太田　直之氏
（國學院大学専任講師）
後藤　匠氏
（國學院大学職員）
オープン・リサーチ・センター視察のため来館。

２月
定兼　恵子氏
（現代画家・ジュッセルドルフ在住）
織豊期の日本と世界をモチーフに新作のアイデアを新発見の「大坂屏風」に求めたいとして来館。

３月
後藤　俊明氏
（朝日新聞社　社会部）
佐藤　卓史氏
（朝日新聞社　社会部）
４月からの朝日新聞連載記事と、９月開催の国際会議の打ち合わせのため来館。

Ⅺ．出版物

①年報『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2006』
2006年度の調査・研究成果や研究例会での報告をもとに、研究員が執筆した。

②News Letter『難波潟（なにわがた）』
なにわ・大阪文化遺産学研究センターの調査・研究状況を地域の人びとに速報的に伝えるため、年に３回程度の刊行をめざしている。2006年度刊行成果は以下のとおりである（詳細についてはセンター通信『難波潟』目次を参照）。
・『難波潟№３』（2006年５月13日刊行）
・『難波潟№４』（2006年９月15日刊行）
・『難波潟№５』（2007年１月31日刊行）

③Occasional　paper
（オケージョナル・ペーパー）
NOCHSレクチャーシリーズや、地域連携企画などの詳細な記録をまとめたものである。2006年度刊行成果は以下のとおりである。

・『Occasional　paper№３　なにわ伝統野菜VS京野菜―復興のなにわか伝統の京か―』（2006年10月27日刊行）
・『Occasional paper№４　近世大坂の学芸』（2007年３月31日刊行）

④なにわ・大阪文化遺産学叢書
ある一定のテーマにそって研究員を中心としてまとめられた資料集である。2006年度の刊行成果は以下のとおりである。
・『なにわ・大阪文化遺産学叢書２　大坂代官竹垣直道日記（一）』（2007年３月31日刊行）
・『なにわ・大阪文化遺産学叢書３　神社を中心とする村落生活調査報告（一）』（2007年３月31日刊行）
・『なにわ・大阪文化遺産学叢書４　道明寺天満宮宝物選』（2007年３月31日刊行）

※2005年度刊行物
・年報『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2005』（2006年３月31日発行）
・『難波潟№１』（2005年８月１日刊行）
・『難波潟№２』（2005年12月１日刊行）
・『Occasional paper№１　なにわ・大阪の神社』（2005年12月31日刊行）
・『Occasional paper№２　河内国府遺跡里帰り展』（2006年３月31日刊行）
・『なにわ・大阪文化遺産学叢書１　関西大学図書館所蔵　上方役者絵画帖』（2006年３月31日刊行）

各プロジェクトの活動報告

P.D.の活動一覧

月　日	活　動　内　容
3月23日～24日	山口県萩市出張（山口県立萩美術館・吉眉大賀記念館・萩博物館調査）
4月2日	玉造稲荷神社「なにわ伝統野菜市」視察（祭礼遺産研究プロジェクトR.A.内海／P.D.森本）
4月3日	第1回ワークショップのため天王寺楽所雅亮会理事・徳山耕一氏と打ち合わせ（P.D.森本）
5月13日	第1回ワークショップ「天王寺舞楽の魅力」
5月21日	関西大学教育後援会・センターの活動紹介（生活文化遺産研究プロジェクトR.A.宮元／歴史資料遺産研究プロジェクトR.A.櫻木／P.D.森本）
5月22日	八尾市植田家資料搬出準備（祭礼遺産研究プロジェクトR.A.内田／生活文化遺産研究プロジェクトR.A.宮元・千葉／学芸遺産研究プロジェクトR.A.松本／P.D.森本／事務局常行）
5月25日	長期インターンシップ面接（生活文化遺産研究プロジェクト研究員森隆男／P.D.森本／事務局常行）
5月29日	八尾市植田家資料搬出準備（生活文化遺産研究プロジェクトR.A.宮元／学芸遺産研究プロジェクトR.A.松本／歴史資料遺産研究プロジェクトR.A.櫻木／P.D.森本／事務局熊・常行）
6月7日～12日	八尾市植田家資料の燻蒸（祭礼遺産研究プロジェクトR.A.内田・内海／生活文化遺産研究プロジェクトR.A.宮元・千葉／学芸遺産研究プロジェクトR.A.松本／歴史資料遺産研究プロジェクトR.A.櫻木／P.D.森本／事務局常行）
6月8日	長期インターンシップ生会議（生活文化遺産研究プロジェクト研究員森隆男／P.D.森本）
6月20日	八尾市植田家民具調査（生活文化遺産研究プロジェクト研究員森隆男・吉田晶子／生活文化遺産研究プロジェクトR.A.宮元・千葉／P.D.森本）
6月22日	長期インターンシップ実習開始にともなう説明会（P.D.森本）
6月24日	第3回NOCHSレクチャーシリーズ「近世大坂の学芸」
7月14日	大阪堀川めぐり
7月18日	第33回舞楽ゼミナール調査（学芸遺産研究プロジェクトR.A.松本／P.D.森本）（北御堂）
7月19日	神戸女学院大学におけるJan Sýkora（ヤン・シーコラ）氏（カレル大学哲学部日本学研究科）講演「チェコにおける文化の森：間伐か伐採か」聴講（P.D.森本）
7月20日	「大阪ブランドサミット」開催の大阪国際会議場下見（祭礼遺産研究プロジェクトR.A.内田／生活文化遺産研究プロジェクトR.A.宮元／P.D.森本／事務局常行）
7月31日～ 8月4日	八尾市・植田家古文書一斉調査（歴史資料遺産研究プロジェクトR.A.櫻木／P.D.森本）
8月4日	四天王寺　籌の舞楽調査（髙橋隆博センター長／藪田貫総括プロジェクト・リーダー／生活文化遺産研究プロジェクト研究員酒井亮介／学芸遺産研究プロジェクト研究員前田成雄／祭礼遺産研究プロジェクトR.A.内海／学芸遺産研究プロジェクトR.A.松本／歴史資料遺産研究プロジェクトR.A.櫻木／P.D. 森本／事務局常行）
9月12日	「大阪ブランドサミット」のため法楽寺調査（祭礼遺産研究プロジェクトR.A.内海／P.D.森本）
9月13日	「大阪ブランドサミット」のため生根神社調査（祭礼遺産研究プロジェクトR.A.内海／P.D.森本）
9月21日	「大阪ブランドサミット」のための玉造稲荷神社調査（P.D.森本）
9月25日	「大阪ブランドサミット」にて展示資料拝借のため大阪天満宮文化研究所出張（祭礼遺産研究プロジェクトR.A.内海／P.D.森本）
9月28日	「大阪ブランドサミット」にて展示資料拝借のため大阪天満宮文化研究所出張（P.D.森本）
10月1日～ 10月28日	関西大学120周年記念行事の準備
10月2日	東京出張（国立史料館にて資料調査）（P.D.森本）
10月3日	東京出張（関西大学120周年記念行事シンポジウムのパネリスト森まゆみ氏訪問、第3回NOCHS文化遺産学フォーラム打ち合わせのため東京大学大学院経済学研究科・経済学部教授神野直彦氏訪問）（藪田貫総括プロジェクトリーダー／P.D.森本）
10月11日	第3回NOCHS文化遺産学フォーラム準備のため大阪りそな銀行本社出張（P.D.森本）
10月12日	大阪市立北恩加島小学校4年生校外学習の説明補助員として参加（祭礼遺産研究プロジェクトR.A.内田・内海／生活文化遺産研究プロジェクトR.A.宮元／P.D.森本）

10月14日	地域連携企画第２弾「八尾安中新田植田家の文化遺産」
10月17日～20日	八尾市・古文書一斉調査（歴史資料遺産研究プロジェクトR.A.櫻木／P.D.森本）
10月25日	「大阪ブランドサミット「大阪の四季を彩る祭礼」」
10月27日	関西大学120周年記念行事シンポジウムのパネリスト森まゆみ氏と打合わせ（P.D.森本）
10月28日	関西大学120周年記念行事シンポジウム「日本のなかの大阪文化遺産」／特別公演「篝の舞楽」
11月９日	第３回NOCHS文化遺産学フォーラム準備のため大阪りそな銀行御堂筋ソリューションプラザ出張（P.D.森本）
11月15日	「大阪ブランドサミット」資料返却のため大阪天満宮文化研究所出張（祭礼遺産研究プロジェクトR.A.内海／P.D.森本）
11月18日	第２回ワークショップ「お茶と茶釜～千里庵へのいざない～」
11月19日	門真市・歴史文化講座（かどま　今昔）にて講演「近世大坂の食文化―茨田郡・大坂雑喉場の婚礼事情から―」（門真市歴史民俗資料館）（P.D.森本）
11月20日	NPO法人・長堀21世紀計画の会調査（P.D.森本）
11月24日	第３回NOCHS文化遺産学フォーラム準備のためりそな銀行大阪本社出張（祭礼遺産研究プロジェクトR.A.内海／P.D.森本）
11月25日	第３回NOCHS文化遺産学フォーラム「まちづくりと文化遺産」
12月５日～７日	韓国文化遺産視察
12月22日	長期インターンシップ実習報告会（歴史資料遺産研究プロジェクトR.A.櫻木／P.D. 森本／事務局熊・常行）
2007年１月19日	第４回NOCHSレクチャーシリーズ「中・近世大坂の寺院と歴史資料遺産」
１月31日	文章講座①
２月14日	文章講座②

３月末現在

P.D.

Ⅰ．長期インターンシップ受入

なにわ・大阪文化遺産学研究センターでは、今年度はじめて長期インターンシップを受け入れた。今年は、３名の希望があり、インターンシップ受入担当研究員の森隆男氏、事務局の常行氏とともに面接をおこなった。３名を受け入れることが確定して後、６月よりセンターでの業務の説明会をおこなった。また、業務カレンダーや出勤簿を作成し、勤務状況が分かるように記録をとった。

12月には、森隆男、事務局熊氏・常行氏および歴史資料遺産研究プロジェクトR.A.櫻木とともに、インターンシップ生が当センターの業務を通じて学んだことや気付いたことなどを発表する報告会に参加した。

Ⅱ．八尾市・植田家資料搬出・搬入および調査

①八尾市からの植田家資料搬出・搬入作業

八尾市・植田家から、センターへ資料を搬出・搬入するにあたり、資料の清掃作業をしながら約60箱の古文書を箱につめ、扁額・屏風・軸などを梱包する作業をおこなった。その際、八尾市教育委員会の把握している資料とセンターへの受入資料の数に齟齬がないよう確認作業も合わせておこなった。資料をセンター４階の収蔵室に搬入した後、業者に燻蒸をしてもらい、調査・研究できるよう環境を整えた。

②古文書調査

今年度は、八尾市教育委員会の協力のもと、２回の古文書一斉調査を実施した。調査する際の備品請求や八尾市教育委員会との間で交わされる資料発送など、調査環境を整える業務をおこなった。今年度の調査では、主に古文書の清掃・目録作成作業が中心となった。

Ⅲ．大阪ブランドサミット「大阪の四季を彩る祭礼」準備

今年度は、大阪ブランドコミッティ主催の大阪ブランドサミットに当センターからも参加することとなった。まず、会場となる大阪国際会議場へ下見に出かけ、展示スペースや机・椅子の配置・ミキシング状況などを確認した。

つづいて、祭礼遺産研究プロジェクトR.A.内海とともに展示の内容を調査するため、大阪市・法楽寺、生根神社、玉造稲荷神社に伺い、住職や宮司の話を聞きながら、寺社となにわ伝統野菜の関係を調査した。さらに、展示資料や映像資料等を拝借するため、大阪天満宮文化研究所に調査に出かけ、大阪ブランドサミット終了後、資料返却をおこなった。

Ⅳ．関西大学120周年記念行事「シンポジウム」準備

今年度は、関西大学が創立120周年を迎えた。当センターでは、「シンポジウム　日本のなかの大阪文化遺産」および天王寺楽所雅亮会による「特別公演　篝の舞楽」を開催することとなった。

シンポジウム開催にあたって、基調講演をされるセンター長・髙橋隆博氏およびパネリスト・森まゆみ氏、Andrew Gerstle氏、小野功龍氏、特別ゲストパネラー・笑福亭仁智氏と連絡を取り、使用されるスライドの処理作業や当日の時間配分など、数回にわたる打ち合わせをおこなった。また、シンポジウムにて配布されるチラシを考案した。

シンポジウムの基調講演に使用する映像のデータ処理については、祭礼遺産研究プロジェクトR.A.内田が担当した。

Ⅴ．第３回NOCHS文化遺産学フォーラム準備

今年度のNOCHS文化遺産学フォーラムは「まちづくりと文化遺産」というテーマで開催した。

まず、共催のりそな銀行大阪本社地域サポート部りそな御堂筋ビジネスソリューションプラザプランニングマネージャー・山田豊弘氏より当日使用する会場にて設備の説明をしてもらった。また、「まちづくり」というテーマにあわせて、当センターが収蔵している牧村史陽氏旧蔵古写真のなかから昭和30～40年代頃の大阪の街並みの写真を数点選び、生活文化遺産研究プロジェクトR.A.宮元・千葉・インターンシップ生角田歩氏とともに展示パネルを作成した。前日には、祭礼遺産研究プロジェクトR.A.内海とともに会場設営をおこなった。

また、当日に司会を務める関係もあって、基調講演の神野直彦氏、パネリストの川口良仁氏・土居年樹氏・中村英雄氏・角知子氏と資料やデータをはじめ当日のプレゼンテーションの時間配分について、

数回にわたる打ち合わせをおこなった。

また、大阪府下にはまちづくりに関わっているNPO法人が存在するが、今後大阪のまちづくりについて議論を深めるため、活動状況や方針について３～４団体に聞き取り調査を実施した。

Ⅵ. 門真市歴史文化講座講演
―『鷺池家文書』の調査をふまえて―

今年度は、門真市歴史民俗資料館より門真市歴史文化講座にて報告をする機会をいただいた。門真市所蔵の資料および現在、研究・調査活動を継続している『鷺池家文書』を使用し、茨田郡士と大坂商人の婚礼事情を調べ、近世大坂および周辺地域における食文化について比較した。

この報告を起点として、今後は、近世大坂の食文化および大坂商人の信用構築の仕方、権力との関係などを『鷺池家文書』の調査・研究によって明らかにしていく。

Ⅶ. 出張

①山口県

＜日程＞３月23日～24日

＜調査先＞萩市・山口県立萩美術館・吉眉大賀記念館・萩博物館調査（2005年度の調査活動であるが、2005年度の年報には記載していなかったため、ここに記述しておく。）

今回は、山口県立萩美術館や萩博物館における展示とそれらの現代的建物がいかにして伝統的建造物と調和を保ちながらまちづくりがおこなわれているのかを中心に調査した。

近世城下町の「文化遺産」が色濃く残されている萩市は、「はぎ町中博物館」が企画されており、町中の人びとが総力をあげて城下町景観と観光客誘致に向けて尽力していた。しかし、そのため道路拡張が許されなかったり、景観維持費に莫大な費用がかかったり、「文化遺産」を守る地域住民への不利益は否めないことを感じた。

今回の調査では、「文化遺産」そのもののみならず、それが保持されるための困難や人びとの努力の軌跡についても焦点をあてなければならないことをあらためて考えた。

②東京都

＜日程＞10月２日～３日

＜調査先＞国立史料館・東京大学大学院経済学研究科・経済学部教授神野直彦氏研究室

東京都国立史料館にて、近世期の阿波から大坂に出荷される藍玉や白砂糖類が記された帳簿類の調査をおこなった。これまで近世期大坂市場を周辺地域より研究してきたが、その研究成果を活かしつつ、今後はセンターの資料を用いながら、近世期「大坂市場」の実態について調査・研究をすすめていきたい。

つづいて、藪田貫総括プロジェクトリーダーとともに『谷中根津千駄木』編集者で作家の森まゆみ氏に面会し、10月28日の関西大学120周年記念行事シンポジウム「日本のなかの大阪文化遺産」のコンセプトと同日に開催される外部評価委員会の日程などについて相談した。

翌日、来る11月25日の第３回文化遺産学フォーラムの基調講演を依頼している東京大学大学院経済学研究科・経済学部教授の神野直彦氏に、当日の相談も兼ねて面会した。

神野氏は、まちづくりについて、インフラ整備をするにしても、そこには、「人」ではなく「自然」が景観をつくるという考えのもと、地域社会や都市再生を考えるときにも、市場優先ではなく、人が主体となった未来づくりが必要であることを強く説いていた。

Ⅷ. P.D.・R.A.会議の実施

センターの調査・研究活動を具体化し、準備作業を円滑にすすめるため、P.D.・R.A.会議を実施している。今年度は、計９回にわたる会議を実施した。特に調査・研究活動や研究行事が多岐にわたったため、P.D.および各プロジェクト間の情報交換や研究行事における役割分担など、事前に打ち合わせをする作業に多くの時間を要した。

Ⅸ. ホームページの充実

今年度は、調査・活動状況にともないホームページをより充実したものにするため、生活文化遺産研究プロジェクトR.A.宮元とともに、センターのホームページのデザインや掲載情報などを考案し、業者委託にて作成をすることが決定した。

祭礼遺産研究プロジェクト活動一覧

月　日	活　動　内　容
3月10日	大阪天満宮「梅を描いた引札展」調査（R.A.内海／学芸遺産研究プロジェクトR.A.松本）
3月24日	大阪市史編纂所訪問（統括プロジェクトリーダー藪田貫／R.A.内海）
3月24日～25日	国立歴史民俗博物館　明治大学図書館　神社資料関連の調査（黒田）
4月2日	玉造稲荷神社「なにわ伝統野菜市」視察（P.D.森本／R.A.内海）
4月11日	叡福寺　大乗会式調査（R.A.内田）
4月22日	四天王寺　聖霊会調査
4月25日	大阪府庁　宗教行政文書調査（大谷／R.A.内田）
5月2日	住吉大社　卯之葉神事調査（R.A.内海）
5月13日	第1回ワークショップ「天王寺舞楽の魅力」
5月25日	京都国立博物館　特別展「大絵巻展」視察（R.A.内田）
6月1日	大阪府庁　宗教行政文書調査（R.A.内田）
6月4日	芸能史研究会大会聴講（R.A.内海／学芸遺産研究プロジェクトR.A.松本）
6月24日	第3回NOCHSレクチャーシリーズ「近世大坂の学芸」（R.A.内海報告）
7月1日	第1回研究例会
7月12日	関西大学ミュージアム講座　近江晴子「天神祭の歴史とみどころ」
7月14日	大阪・堀川めぐり（R.A.内海資料作成）
8月4日	四天王寺　篝の舞楽
9月8日	国立民族学博物館図書室　神社資料関連の調査（黒田）
9月12日	「大阪ブランドサミット」の準備として法楽寺　田辺大根調査（P.D.森本／R.A.内海）
9月13日	大阪市立北恩加島小学校　勝間南瓜の調理実習視察（R.A.内海）「大阪ブランドサミット」の準備として阿倍王子神社・天王寺蕪調査（R.A.内海）生根神社・勝間南瓜調査（P.D.森本／R.A.内海）
9月16日	岸和田市　だんじり祭調査（R.A.内海）
9月25日	「大阪ブランドサミット」にて展示資料拝借のため大阪天満宮文化研究所出張（P.D.森本／R.A.内海）
9月27～28日	東京大学史料編纂所所蔵「竹垣直道御代官日記　一～四」調査（R.A.内海、学芸遺産研究プロジェクトに同行）
10月8日	長野神社　松明神事調査（黒田）
10月8日	四天王寺宝物館　特別展「近世の聖徳太子信仰」視察（R.A.内田）
10月12日	大阪市立北恩加島小学校　4年生校外学習説明補助員として参加（P.D.森本／R.A.内海／R.A.内田／R.A.宮元）
10月14日	地域連携企画第二弾「八尾安中新田植田家の文化遺産」
10月20日	芦屋市立美術博物館・連続講座参加　肥田晧三氏「大坂四条派雑感」聴講（R.A.内海／学芸遺産研究プロジェクトR.A.松本）
10月25日	大阪ブランドサミット「大阪の四季を彩る祭礼」
10月28日	関西大学創立120周年記念行事　シンポジウム「日本の中の大阪文化遺産」、「篝の舞楽」（天王寺楽所雅亮会）
10月29日	八尾市立歴史民俗資料館　特別展「聖徳太子―伝説のなかの八尾―」視察（R.A.内田）
11月10～11日	『なにわ・大阪文化遺産学叢書3　神社を中心とする村落生活調査報告㈠大阪府』出版準備合宿　関西大学飛鳥文化研究所
11月15日	「大阪ブランドサミット」資料返却のため大阪天満宮文化研究所出張（P.D.森本、R.A.内海）
11月16日	関西大学創立120周年記念講演会 中谷伸生氏「大坂画壇の絵画」聴講（R.A.内海／学芸遺産研究プロジェクトR.A.松本）
11月18日	第2回ワークショップ「お茶と茶釜」
11月25日	第3回文化遺産学フォーラム「まちづくりと文化遺産」
12月5日～7日	韓国文化遺産視察
1月12日	第2回研究例会
1月19日	第4回NOCHSレクチャーシリーズ「中・近世大坂の寺院と歴史資料遺産」
1月27日	天満天神繁昌亭視察（R.A.内海）
1月31日	P.D.・R.A.のための文章講座①
2月14日	P.D.・R.A.のための文章講座②
2月15日	大阪市立北恩加島小学校　伝統野菜の調理実習、「伝統野菜ファイナル」視察
2月26日	大阪天満宮所蔵史料調査（総括プロジェクトリーダー藪田貫、R.A.内海）
3月8日	大阪市史編纂所訪問（黒田／R.A.内海）
3月10～11日	『なにわ・大阪文化遺産学叢書　神社を中心とする村落生活調査報告（2）』出版準備合宿
3月15日	部落解放同盟大阪府連合会加島支部訪問（『なにわ・大阪文化遺産学叢書3　神社を中心とする村落生活調査報告（一）大阪府』について打ち合わせ）（藪田／黒田）
3月24～26日	山口県文書館・島根県津和野町出張（R.A.内海）
3月31日	『なにわ・大阪文化遺産学叢書3　神社を中心とする村落生活調査報告㈠大阪府』出版

3月末現在

祭礼遺産研究プロジェクト

Ⅰ．研究例会

①第１回例会　７月１日（土）　参加者17名

於：なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟１階
　　文化遺産実習・展示室

藤井　裕之（研究員）

「異形のはきもの」

祭りの中では、さまざまな日常生活用具に特別な意味を持たせて儀礼をおこなうことがある。2006年度の第１回研究例会では、祭りの儀礼で使用される履きものをテーマとして、藤井裕之（研究員）が報告をおこなった。

履きものは、本来、足の汚れを防ぐため、防寒のためなど実用的な用途、あるいは服飾の一部として装飾的な用途を持つものであるが、祭りの儀礼で用いられる履きものには、そういった機能面からは説明しがたい事例がみられる。藤井報告では、これらの「非実用的な履きもの」について、大阪の事例を中心に考察を進めた。

藤井報告では、祭りの儀礼におけるこれら「非実用的な履きもの」は３種類に大別され、それぞれ、①司祭者が履いて神事を行うもの、②集落や家の境界に設置して悪霊の侵入を防ぐもの、③祭祀の対象として供えるもの、と位置づけられる。

また、これらの「非実用的な履きもの」の多くは、踵部分が環状であったり、魚の尻尾のような形であったりするなど、一般的な履きものとは異なった形状を持つ。藤井報告では、そうした履きものを写真画像を提示しながら紹介し、神や稚児など、祭りの儀礼における聖なる存在を保護するためのものであったり、神を送り迎えする象徴としての意味を持つことを述べた。

②第２回例会　１月12日（金）参加者20名

於：なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟１階
　　文化遺産実習・展示室

内田　吉哉（R.A.）

「大阪府下の神社合祀に関する新聞記事調査」

和住　香織（関西大学大学院博士課程前期課程）

「明治後期の大阪の神社」

大阪府下における神社合祀の実態解明のため、2005年度以来、明治末期の新聞記事調査を実施してきたが、この調査に基づき、報告をおこなった。

内田報告では、近代の大阪において、神社がどのように変貌したのかを調査する必要性を指摘し、新聞記事調査の意義を述べた。また、新聞記事には、現在ではおこなわれていない神社行事の記述がみられることから、失われた文化遺産の記録としても注目すべきであると指摘した。

続く和住報告は、明治後期の新聞記事に、神社合併・移転・正遷宮・合祀・迷信を批判する記事など、多様な記事がみられることを紹介した。また、大阪府庁所有の宗教行政資料には、明治から昭和初期にいたる神社・寺院の明細帳､土地台帳が含まれ、新聞記事とともに、合祀の実態や、神社の変貌が把握できる資料として指摘した。

Ⅱ．NOCHSレクチャーシリーズ

今年度は、祭礼遺産研究プロジェクトの企画によるレクチャーシリーズはおこなわなかった。

Ⅲ．調査・研究

①大阪市史編纂所津田秀夫文庫所蔵

『神社を中心とする村落生活調査報告』

2005年度に大阪市史料編纂所津田秀夫文庫から借

用した『神社を中心とする村落生活調査報告』をPDF化し、調査・翻刻・出版準備作業を進めた。同書の内訳は、大阪府４冊、兵庫県２冊である。

今年度は６月から９月まで、大学院生のアルバイトを雇用し、資料の翻刻をおこなった。また並行して資料の読み合わせ作業をおこない、特に11月には合宿を実施し、出版作業を進めた。その成果として大阪市と大阪府三島郡・豊能郡の２冊分を翻刻し、『なにわ・大阪文化遺産学叢書３』として刊行した。残る河内・和泉地域と兵庫県についても現在翻刻作業中である。

②大阪府神社合祀調査

2005年度に引き続き、明治時代末期の大阪府下でおこなわれた神社合祀に関する調査を実施した。調査内容としては、大学院生を調査員としてアルバイト雇用し、新聞記事の悉皆調査を行った。調査対象とした新聞は『大阪朝日新聞』と『大阪毎日新聞』で、現在までに調査を終えた範囲は、『大阪朝日新聞』が明治39（1906）年４月１日から明治41（1908）年12月31日まで、『大阪毎日新聞』が明治39（1906）年から明治41(1908)年６月30日までである。なお、大阪府下における神社合祀は、明治44（1911）年頃まで頻繁に行われているため、新聞記事調査の範囲も、これにあわせて明治末年までをカバーする必要があり、次年度も継続して調査を行う予定である。

また、今年度の調査活動において、調査員の協力により、大阪府庁に、明治12（1879）年の作成になる、宗教行政文書が所蔵されていることが確認され、閲覧させていただく機会を得た。この文書は、近代の大阪府下の宗教行政に関する根幹的な資料であり、これを調査研究することによって、大阪府における神社合祀の実態が一層明らかになることが期待される。

③天神祭資料調査

研究員の近江晴子を中心に、天神祭の史料調査を実施している。近世から現代にいたる天神祭に関する資料を、大阪天満宮所蔵の記録などから収集し、翻刻・出版する予定である。

④祭礼調査

叡福寺大乗会式　４月11日

大阪府太子町にある叡福寺で行われる大乗会式の調査を実施した。大乗会式は聖徳太子の年忌法要として毎年４月11日、12日におこなわれる。今回は４月11日のみを調査した。

聖徳太子の年忌法要としては、毎年４月22日におこなわれる四天王寺聖霊会が有名であり、石舞台で催される舞楽には多くの観客が詰め掛ける。叡福寺の大乗会式では、楽人による演奏のみがおこなわれるだけで、舞人は登場しない。

11日の法要では、金堂内で表白・神分を唱えたのち、聖霊殿の前で読経と「南無観音化身上宮太子」という題目をとなえ、次に聖徳太子御廟へ向かう。廟前でも読経と「南無日本教主聖徳法王」という題目を唱える。その後、真言をとなえて法要は終了し、楽人を先頭に参拝者にぜんざいがふるまわれる。

叡福寺　大乗会式

住吉大社　卯之葉神事　５月２日

住吉大社の卯之葉神事でおこなわれる舞楽を見学した。卯之葉神事は、毎年５月最初の卯の日におこなわれる。神功皇后が住吉の地に鎮座した神功摂政11年卯月卯の日にちなんだものである。住吉大社と天王寺楽所との繋がりは古く、『住吉名所図会』には、大乗会の際、四天王寺から伶人を招いて、舞楽をおこなったという記述がみられる。この日は、天王寺楽所雅亮会により、振鉾・仁和楽・春庭花・貴徳の四曲の舞楽が奉納された。

岸和田市　だんじり祭　９月16日

岸和田市のだんじり祭は、例年９月15日、16日に実施されていたが、祝日法の改正にともなう祝日移動のため、今年から休日にあわせた開催となった。調査を実施した春木地区では、16日にパレード（曳行）、17日に弥栄神社への宮入りがおこなわれた。

16日は、午前９時頃、各町のだんじりが南海電鉄

春木駅前に集合し、9時半から曳行がスタートした。13台のだんじりが街中を駆け抜けた。道幅がせまく、旧家が残る紀州街道でのだんじりのすれ違い、辻でのやりまわしが見せ場となっていた。

Ⅳ．その他

①大阪ブランドサミット　10月25日（水）

於：グランキューブ大阪（大阪国際会議場10階）

大阪ブランドコミッティが主催する大阪ブランドサミットが開催された。水都・ロボット・伝統芸能など、「大阪ブランド」の研究に取り組んだ15の団体が集結し、その研究成果を披露した。当センターからは「祭礼パネル」の部門で、「大阪の四季を彩る祭礼」と題したアピールイベントをおこなった。この催しへの参加は、2005年度以来、総括プロジェクトリーダーの藪田貫が中心となり、祭礼遺産研究プロジェクトの調査を基にした報告書作成で、主催者の活動に連携しているためである。

アピールイベントの第１部では、研究員の黒田一充が、大阪の祭礼について講演し、第２部では四天王寺の聖霊会舞楽大法要と天神祭を映像で紹介した。特に、第１部の黒田報告では、祭りの画像を提示しながら、大阪府下でおこなわれる一年間の祭礼について解説し、各地でおこなわれる多様な祭りを、大阪の貴重な文化資源としてアピールした。

来場者にお祭りの雰囲気を味わっていただくため、会場の設置にも工夫を凝らした。会場前に幟を設置し、ドアには門幕を張った。また、会場内には、大阪の祭礼地図、聖霊会や天神祭を解説したパネル、なにわの伝統野菜と祭りに関するパネルを展示した。さらに、伝統野菜の復活を支える関係者の協力により、加工食品の展示・試食をおこない、参加者の関心を高めることができた。なお、参加者には大阪府下の夏祭りカレンダー2006年版を配布した。

②「大阪の夏祭りカレンダー」2006年版の作成

大阪ブランドサミットへの参加にともない、当日配布する資料として、「大阪の夏祭りカレンダー」の2006年版をA3版カラー印刷にて作成した。昨今は、祭りの日程が土曜・日曜・祝日に設定される例もあり、さらに、祝日に行われる祭りの場合は、祝日法の改正によるハッピーマンデーの制定によって、毎年祝日の日付が変化する。このように、毎年祭りの日程が同じでないため、昨年度においても同様のカレンダーを作成したが、大阪ブランドサミットに際して、新たに2006年版を作成する必要があった。

大阪の夏祭りは、その幕開けとされる愛染祭（大阪市天王寺区・勝鬘院）から、掉尾の住吉祭（大阪市住吉区・住吉大社）まで、およそ１か月にわたって連日どこかの寺社でおこなわれている。それらの中から、大阪市内を中心として、できるだけ特徴のある儀礼や行事をともなう祭りを選択して「大阪の夏祭りカレンダー」を作成した。カレンダーの中には、祭りが記載されない空き日もあるが、そうした日にち欄には、祭りの雰囲気を視覚的に理解する参考となるよう、夏祭りの写真を挿入した。

③「大阪の四季を彩る祭礼」映像資料作成

大阪ブランドサミットにおける、黒田一充報告の映像資料を作成した。これまでに調査した祭礼、約50件の写真をプレゼンテーションソフトで編集し、映像化した。

④関西大学ミュージアム講座「なにわの文化遺産」

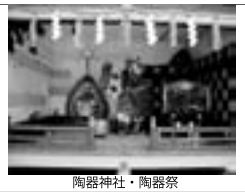
７月12日（水）

於：関西大学第一高等学校・第一中学校　親和館　親和ホール

近江　晴子（研究員）

「天神祭の歴史とみどころ」

関西大学博物館が主催する関西大学ミュージアム講座において、近江晴子研究員が、上記の論題で講演をおこなった。

月	火	水	木	金	土	日
 愛染祭	 石切劔箭神社・献牛祭	 機物神社・七夕祭	 瀧安寺・採燈大護摩供	**6/30** ●**愛染祭**（勝鬘院愛染堂、天王寺区） 宝恵駕籠行列 ●**茨木神社**・大祓、輪くぐり神事（茨木市）	**7/1** ●**愛染祭**	**7/2** ●**愛染祭**
7/3 ●**石切劔箭神社**・献牛祭（東大阪市）	 星田妙見宮・七夕祭	 瀧安寺・採燈大護摩供	**7/6** ●**機物神社**・七夕祭（交野市）	**7/7** ●**機物神社**・七夕祭 七夕飾、茅の輪くぐり ●**瀧安寺**・採燈大護摩供（箕面市） 開山忌、護摩壇 ●**金剛山道華祭 葛木神社 転法輪寺** （千早赤阪村 御所市）護摩壇 ●**小松神社**（星田妙見宮 交野市） 七夕飾 ●**安倍晴明神社**・七夕祭（阿倍野区） ●**大阪天満宮**・星愛七夕祭（北区）	**7/8** ●**大津神社**・夏越祭（羽曳野市） ●**大森神社**・灯籠祭（第2土曜 熊取町）	 生國魂神社・いくたま夏祭
 杭全神社・夏祭	**7/11** ●**杭全神社**・夏祭（平野区） 足洗神輿川行事 ●**生國魂神社**・いくたま夏祭（天王寺区） 枕太鼓、獅子舞	**7/12** ●**杭全神社**・夏祭 地車合同曳行 ●**生國魂神社**・いくたま夏祭 渡御祭 ●**難波八阪神社**・夏祭（浪速区） ●**白鳥神社**・夏祭（羽曳野市）	**7/13** ●**杭全神社**・夏祭 地車宮入り ●**難波八阪神社**・夏祭 ●**五社神社**・例祭（池田市） ●**細河神社**・例祭（池田市） ●**茨木神社**・夏祭（茨木市） 枕太鼓	**7/14** ●**杭全神社**・夏祭 神輿渡御 ●**難波八阪神社**・夏祭 ●**玉祖神社**・夏祭（八尾市） ●**茨木神社**・夏祭	**7/15** ●**玉造稲荷神社**・夏祭（中央区） 玉造黒門越瓜のふるまい ●**大江神社**・夏祭（天王寺区） ●**久保神社**・夏祭（天王寺区） ●**五條宮**・夏祭（天王寺区） ●**玉祖神社**・夏祭 ●**八坂神社**・例祭（池田市） ●**堀越神社**・夏祭（天王寺区） ●**日根神社**・ゆ祭（泉佐野市）五社音頭 ●**感田神社**・太鼓台祭（貝塚市）太鼓台	**7/16** ●**玉造稲荷神社**・夏祭 ●**大江神社**・夏祭 ●**久保神社**・夏祭 ●**五條宮**・夏祭 ●**堀越神社**・夏祭 ●**感田神社**・夏祭 ●**春日神社**・夏祭（泉佐野市） ●**門真神社**・例祭（門真市）
7/17 ●**瓢箪山稲荷神社**・夏祭（東大阪市） ●**高津宮**・夏祭（中央区） ●**春日神社**・夏祭 ●**伊居太神社**・例祭（池田市） ●**寺方の提灯踊り**（守口市）	**7/18** ●**瓢箪山稲荷神社**・夏祭 ●**高津宮**・夏祭 氷室祭、ございばの神饌、張子の虎 ●**河堀稲生神社**・夏季大祭（天王寺区） ●**寺方の提灯踊り**	**7/19** ●**東高津宮**・夏祭（天王寺区） ●**野田恵美須神社**・夏祭（福島区） ●**河堀稲生神社**・夏季大祭	**7/20** ●**住吉大社**・住吉祭（住之江区 大阪南港） 神輿洗行事 ●**東高津宮**・夏祭 ●**野田恵美須神社**・夏祭	**7/21** ●**坐摩神社**・夏祭（中央区） せともの祭（～24日） ●**難波神社**・氷室祭（中央区） ●**三光神社**・神祭（天王寺区） ●**お初天神（露天神社）**・夏祭（北区） 地車囃子	**7/22** ●**坐摩神社**・夏祭 ●**難波神社**・氷室祭 氷柱の奉納 ●**三光神社**・夏祭 ●**能勢妙見山**・虫払会祈祷会 ●**お初天神（露天神社）**・夏祭 ●**科長神社**・夏祭（太子町）	**7/23** ●**陶器神社**・陶器祭 陶器人形 ●**星田妙見宮**・妙見祭（交野市） ●**呉服神社**・例祭（池田市） ●**科長神社**・夏祭（第4日曜） 船形だんじり、三番叟、八社太鼓 ●**興覚寺**・ほうろく灸祈祷（土曜丑日・堺市）
7/24 ●**大阪天満宮**・天神祭（北区） 鉾流し神事、茅の輪くぐり ●**生根神社**・だいがく祭（西成区） ●**佐太天満宮**・夏祭（守口市） ●**道明寺天満宮**・天神祭（藤井寺市）	**7/25** ●**大阪天満宮**・天神祭 陸渡御、船渡御 ●**生根神社**・だいがく祭 だいがく舁き ●**佐太天満宮**・夏祭 ●**渋川神社**・逆祭（八尾市） ●**道明寺天満宮**・天神祭	**7/26** ●**渋川神社**・逆祭	**7/27** ●**渋川神社**・逆祭 ●**安倍晴明神社**・夏祭（阿倍野区）	**7/28** ●**安倍晴明神社**・夏祭	 高津宮・夏祭	**7/30** ●**住吉大社**・住吉祭（住吉区）
7/31 ●**住吉大社**・住吉祭 夏越祓神事、茅の輪くぐり ●**道陸神社**・大祓祭（貝塚市） ●**堺大魚夜市**（堺市）	**8/1** ●**住吉大社**・住吉祭 神輿渡御祭 ●**住吉大社宿院頓宮** 荒和大祓神事（堺市） ●**恩智神社**・恩智祭（八尾市） 布団太鼓 ●**一岡神社**・祇園祭	 陶器神社・陶器祭	 難波神社・氷室祭	 生根神社・だいがく祭	 大阪天満宮・天神祭	 住吉大社・住吉祭

2006年　大阪の夏祭りカレンダー

大阪の祭礼地図

７月７日　採燈大護摩供（瀧安寺・箕面市）

１０月１７日　どんじ祭
（吉志部神社・吹田市）

５月５日　馬祭（磐手杜神社・高槻市）

７月７日　七夕祭（機物神社・交野市）

２月２０日　一夜官女祭
（野里住吉神社・大阪市西淀川区）

１２月２５日　枚岡神社粥占神事
（枚岡神社・東大阪市）

１１月２２～２３日　神農祭
（少彦名神社・大阪市中央区）

１１月２４日　御供所神事
（恩智神社・八尾市）

１月第３日曜日　綱引神事
（難波八阪神社・大阪市浪速区）

４月１３日　御田植祭
（杭全神社・大阪市平野区）

７月２４～２５日　だいがく祭
（生根神社・大阪市西成区）

７月７日　蓮華祭
（金剛山・千早赤阪村）

１２月１４日　やっさいほっさい祭
（石津太神社・堺市）

９月１６～１７日　だんじり祭（岸和田市）

５月１～５日　万部法要
（大念仏寺・大阪市平野区）

１０月１１日　松明神事
（長野神社・河内長野市）

生活文化遺産研究プロジェクト活動一覧

月　日	活　動　内　容
3月8日	第2回八尾市植田家民具調査
3月23日	第1回X線透過撮影装置説明会
4月24日～26日	エックス線作業主任者受験準備講習会
5月20日	八尾市植田家河内木綿調査
5月21日	関西大学教育後援会・センターの活動紹介（生活文化遺産研究プロジェクトR.A.宮元／歴史資料遺産研究プロジェクトR.A.櫻木／P.D森本）
5月22日	第3回八尾市植田家民具調査
5月29日	第4回八尾市植田家民具調査
6月13日	大阪錫器調査
6月20日	第5回八尾市植田家民具調査
6月24日	OCR「文化財と情報」シンポジウム「文化財データの発信と活用」（於大手前大学）に参加
7月3日	保存処理分析作業室運営会議
7月4日	第6回八尾市植田家民具調査
7月10日～12日	道明寺天満宮夏祭り調査のための予備調査
7月17日	道明寺天満宮夏祭り調査
7月22日	第2回X線透過撮影装置説明会
7月23日～25日	道明寺天満宮夏祭り調査
7月29日	第1回研究例会
7月31日	道明寺天満宮宝物調査事前打合せ（於道明寺天満宮）
8月3日	第1回道明寺天満宮宝物調査
8月7日	道明寺天満宮宝物調査（本殿神器調査及び写真撮影）
8月10日	質量分析器・粒度分析器説明会
8月25日・27日	道明寺天満宮西宮スキャニング調査
9月3日	八尾市立歴史民俗資料館所蔵辻合コレクション河内木綿調査
9月12日	第7回八尾市植田家民具調査
9月19日	第2回道明寺天満宮宝物調査（軸物の調査及び撮影）
9月30日	八尾市歴史民俗資料館講座講演
10月12日	大阪市立北恩加島小学校4年生校外学習の説明補助員として同行
10月14日	地域連携企画第2弾「八尾安中新田植田家の文化遺産」
10月26日	第3回道明寺天満宮宝物調査（宝物殿所蔵資料の撮影）
10月30日	第3回NOCHS文化遺産フォーラムパネル用写真撮影
11月5日	上町台地お散歩ツアーの企画・実行
11月9日	福原宗寿宗匠と第2回ワークショップの打合せ
11月10日	第8回八尾市植田家民具調査
11月10日	角谷工房訪問・角谷征一氏と第2回ワークショップの打合せ 第9回八尾市植田家民具調査
11月18日	第2回ワークショップ「お茶と茶釜～千里庵へのいざない～」開催
11月20日	保存処理分析作業室運営会議
11月22日	大阪錫器調査（ろくろ挽き工程の記録及び資料撮影）
11月28日	大阪錫器調査（焼き継ぎ工程の記録）
11月29日	第10回八尾市植田家民具調査
11月30日	藤井寺市史（写真借受手続き）
12月2日	史学・地理学大会において「大阪府の二, 三の考古遺跡から得られた無層理代積層のX線像」「粒度分析のためのレーザー回折法とピペット法の比較」発表
12月4日	脱塩実験準備（於元興寺文化財研究所保存科学センター）
12月5日～7日	韓国文化遺産視察
12月8日	藤井寺市立図書館（借受写真選択）
12月11日～13日	第1回脱塩実験
12月12日	大阪錫器調査（絵付・腐らし工程の記録）
12月17日	「吹田くわい連続講座 第2回」に参加
12月18日	大阪錫器調査に関する打合せ
12月19日	藤井寺市立図書館（写真借受）
12月20日	道明寺天満宮初詣調査打合せ
12月22日	道明寺天満宮宝物調査

12月23日～30日	道明寺天満宮初詣調査準備
12月31日～ 1月3日	道明寺天満宮初詣調査
1月9日～12日	第2回脱塩実験
1月13日	第2回研究例会
1月17日	道明寺天満宮所蔵漆製品のX線撮影
2月5日	『道明寺天満宮宝物選』打合せ（於道明寺天満宮）
2月8日	東大阪市・植田家見学
3月31日	『なにわ・大阪文化遺産学叢書4 道明寺天満宮宝物選』発刊

3月末現在

保存処理分析作業室
活動一覧

月　日	活　動　内　容
3月23日	第1回Ｘ線透過撮影装置説明会
4月24日～26日	エックス線作業主任者受験準備講習会
6月1日	エックス線作業主任者資格取得（生活文化遺産研究プロジェクトR.A.千葉）
7月3日	保存処理分析作業室運営会議
7月22日	第2回Ｘ線透過撮影装置説明会
8月8日	乙種第4類危険物取扱者資格取得（生活文化遺産研究プロジェクトR.A.千葉）
8月10日	質量分析器・粒度分析器説明会
9月11日	池島遺跡土層Ｘ線撮影
9月14日・15日	粒度分析装置テスト
9月19日	インド、ヒンドスタン平原氾濫原堆積物の粒度分析
9月22日	インド、ヒンドスタン平原氾濫原堆積物の粒度分析
9月25日	桑原遺跡土層Ｘ線撮影
9月30日	桑原遺跡・三宅西遺跡・池島遺跡土層Ｘ線撮影
11月6日	桑原遺跡・三宅西遺跡・池島遺跡土層Ｘ線撮影
11月20日	保存処理分析作業室運営会議
11月29日	桑原遺跡・池島遺跡採取試料の粒度分析
12月2日	史学・地理学大会において「大阪府の二, 三の考古遺跡から得られた無層理代積層のＸ線像」「粒度分析のためのレーザー回折法とピペット法の比較」発表
12月4日	脱塩実験準備（於元興寺文化財研究所保存科学センター）
12月11日～13日	第1回脱塩実験
12月22日	桑原遺跡・池島遺跡・能勢青少年センター付近採取火山灰試料の粒度分析
12月25日	能勢青少年センター付近土層Ｘ線撮影
1月9日～12日	第2回脱塩実験
1月13日	第2回生活文化遺産学研究プロジェクト研究例会において川本耕三氏・尼子奈美枝氏・木庭元晴氏が保存処理分析作業室に関わる成果などを報告
1月17日	道明寺天満宮所蔵漆製品のＸ線撮影

3月末現在

生活文化遺産研究プロジェクト

Ⅰ．研究例会

①第１回例会　７月29日（土）参加者　39名
　於：なにわ・大阪文化遺産学研究センター１階
　　文化遺産実習・展示室
　森隆男（研究員）
　「モノづくりの今」

現在のモノづくり事情について、いくつかの例を挙げながら述べられた。東大阪宇宙開発協同組合が取り組んでいる「まいど１号」は中小企業が主体となり、その技術をもって人工衛星を打ち上げることで、町工場の高い技術力をアピールするとともに、後継者不足などの危機を社会に知ってもらうきっかけにもなっているそうだ。そのほかにも、自動車生産現場での技術継承やマイスター制度などが話題にあがった。

　吉田晶子（研究員）
　「大阪の鋳物業―近代化以前の職種と技術―」

大阪における近世の鋳物師と真継家との関係について笹本正治氏の「真継家配下鋳物師人名録」を基礎に、大阪府を河内国、和泉国、摂津国（在郷）、大阪市中の４地域に分け、それぞれの鋳物師の居住地や人数、真継家との関係、職分の相違などを比較し、職能集団である鋳物師としての共通性と地域差について考察された。今後は製品、工房へのアプローチから都市の鋳物業の復元をめざす。

②第２回例会　１月13日（土）参加者　24名
　於：なにわ・大阪文化遺産学研究センター１階
　　文化遺産実習・展示室
　当センターには保存処理分析作業室が設置されている。そこで今回の例会では保存処理及び分析に関する発表を以下の方がたにしていただいた。
　尼子奈美枝氏（研究協力者）
　「出土金属製品の保存処理」
　川本耕三氏（研究協力者）
　「関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターでの金属器保存処理～保存科学について」

まず、尼子氏から元興寺文化財研究所で行なわれている金属器保存処理の方法の紹介がなされ、かかる工程ひとつひとつの説明がなされた。保存処理工程のなかで元興寺文化財研究での方法と当センターで行なう方法で異なる点は脱塩処理工程である。そこで、川本氏からその違い、元興寺文化財研究所で行なっているアルカリ水溶液含浸法と当センターで行なう高温高圧法について両者の長所、短所についての説明がなされた。また、当センターで行った２回の脱塩実験の報告がなされた。さらに、文化財の分析や文化財の保存環境についての報告も行なわれた。

　木庭元晴氏（研究協力者）
　「無層理未固結堆積物の堆積環境復元―レーザー回折法による粒度分析法とX線像から―」

大阪府下の遺跡、池島遺跡・桑原遺跡で採取された無層理未固結堆積物から堆積環境を復元するためにX線像と粒度分析器によるレーザー回折での分析を行なった結果報告がなされた。X線像ではそれぞれ見た目には確認できない層理を捉えることができることがわかり、また粒度分析を利用することで人的擾乱を捉えることができるということである。

　さらに、３氏の報告の後、実際に参加者に保存処理分析作業室をみていただき、X線透過撮影装置の撮影状況などをみていただいた。

Ⅱ．地域連携企画

　地域連携企画第２弾

「八尾安中新田植田家の文化遺産」
※八尾市教育委員会と共催
10月14日（土） 参加者119名

第１部は、植田家住宅の現地説明会が行われた。植田家は新田支配人を勤めていた家で、そこでは代官との連絡や、地域の人びとの会合が行われていた。参加者にはその当時の植田家を訪れた気持ちになって解説を聞いていただき、訪問者によって通される部屋や応対が違うことを体感していただいた。また、植田家には数多くの神棚があり、様ざまな神様が祀られていたことも併せて説明された。

植田家改築の歴史を知る上で貴重な資料となる家相図も数点が紹介された。家相図は改築を行う際に、風水などの見地から吉凶禍福を占った結果が書き込まれているものである。

第２部は、八尾市・龍華コミュニティセンターにおいて、講演会を開催した。ここでは八尾市立歴史民俗資料館の李 熙連伊氏、当センター総括プロジェクトリーダーの藪田貫、八尾市文化財課長の岸本邦雄氏が講演を行った。また、会場外の廊下には、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターの活動パネルを展示した。李氏は植田家に現存する河内木綿を会場に展示し、資料解説を行い河内木綿の概要について述べた。資料のうち、幟３点については、意匠も含めて詳しく解説した。この幟は今の鯉のぼりにあたる節句幟で、二つつけられた家紋のうち、一つは送られる子どもの家の紋であり、もうひとつは送り主の家の紋である。つまりは父方の紋と母方の紋が入れられていると予想される。描かれている絵は子どもに力強く健康に育って欲しいという願いが込められているためか、中国の武将の絵やヤマタノオロチ退治の絵など、勇壮なものが多いようである。また、幟の「振り留」と呼ばれる部分には赤い布が使われており、これは疱瘡除けや魔除けの意味を持っているそうである。絵師の特定が今後の課題になるだろうとのことであった。

Ⅲ．ワークショップ

第２回ワークショップ
「お茶と茶釜～千里庵へのいざない～」
11月18日（土） 参加者41名
於：なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟１階
文化遺産実習・展示室
関西大学茶道部茶室「千里庵」

第１部
角谷征一氏（(社）日本工芸会正会員）
「茶湯釜のできるまで」

角谷征一氏の父であり人間国宝の角谷一圭氏による茶湯釜製作工程の記録ビデオを観賞した後、征一氏による講演が行われた。祖父巳之助氏が鋳造業を始められたきっかけ、父一圭氏の話や、茶湯釜の製作に関する話、さらに茶湯釜の観賞のしかたや取り扱いなどの話をしていただいた。また、当日は巳之助氏、一圭氏、そしてご本人の作品や製作にかかわる道具などをお持ちくださったのでそれを展示した。

第２部
福原宗寿宗匠（裏千家師範）・洗心会
「茶道体験」

センター１階実習・展示室にて関西大学茶道部OB会「洗心会」によるお点前の実演、福原宗寿宗匠による解説が行なわれた。福原宗匠が一つ一つの道具や所作について非常に分かりやすく解説してくださった。その後、参加者を２班（第１班は学生、第２班は一般参加者と関係者）に分け、関西大学にある茶室「千里庵」へ移動して実際に茶道体験をしていただいた。茶道部の現役学生がお茶を立て、洗心会の方が説明してくださった。体験終了後も学生たちは熱心に質問している様子は印象的であった。

Ⅳ．調査・研究

①植田家民具調査

植田家旧蔵（八尾市文化財課所蔵）の民具のうち、蔵に収蔵されているものを中心に調査を行った。この蔵には、主として生活にかかわる器具が収蔵されていた。中でも特徴的であったのは、膳や茶碗などが数多く残っていることで、これはかつて同家が地域の人びとが寄り合いを行う際に会所として使われていたことを裏づける資料となる。

予定していた調査はすべて終了し、今後は作成した調書をもとに、データ入力していく作業が中心となると思われる。

なお、本調査は昨年度から継続して行っていたものである。

②道明寺天満宮スキャニング調査

7 月10日 から12日 に24日、25日に行なわれた道明寺天満宮夏祭りの予備調査を行った。この調査は「にぎわい調査」（下記③）のバックグラウンドとなる参道と屋台の位置関係を抑えるとともに、屋台の形状を記録するためのものである。

今回は2005年度に行われたスキャニング調査の不備を確認し、再スキャニングを行うとともに、24日、25日には屋台が立ち並ぶ参道及び屋台のスキャニングを行なった。また１月１日、２日には初詣に伴い天寿殿前及び参道に立ち並んだ屋台について、スキャニングを行なった。

2005年度の調査ではバッテリーを用いてスキャニングを行うと、機器の作動時間に制約があるという点が問題として挙げられていたが、今回、ACアダプターを導入することでこの制約から解放され、より詳細なデータを得ることに成功した。

③にぎわい調査

にぎわい調査として道明寺天満宮において夏祭り及び初詣の調査を行った。

夏祭りの際には参道上にビデオカメラを設置し、

屋台と参道を俯瞰で撮影した。同時に、手持ちのカメラで屋台の並ぶ参道を歩く人の動きを撮影した。

初詣の際には、屋台の並ぶ参道上に単管を組み、約５メートルごとにCCDカメラを設置。計11台を使って夏祭り時よりも詳細に人の動きをビデオ撮影した。現在、撮影した映像の解析中である。

④道明寺天満宮宝物調査

道明寺天満宮所蔵の宝物について、写真撮影および調書の作成を行った。道明寺天満宮には国宝・重要文化財を含む数多くの資料が所蔵されている。この調査は、『なにわ・大阪文化遺産学叢書４道明寺天満宮宝物選』を作成するための下地となるものである。

調査は古絵図・絵画・古文書・書跡・文学資料・工芸・考古遺物・石造物・絵馬・巨木・釋奠祭について行われた。

⑤大阪錫器調査

株式会社 大阪錫器（大阪市東住吉区田辺）において、錫器の製造に関する聞き取り調査及び技術記録作成のための製造工程の調査を行った。また、工房の状態を記録するため、略測図も作成した。

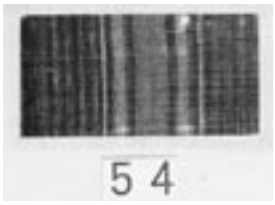
聞き取りは大阪錫器会長の今井崇子氏および社長の今井達昌氏（伝統工芸士）をインフォーマントとして行い、錫器を製作する会社や職人のつながりについて記録した。技術記録は「鋳込み」「ろくろ挽き」「焼き継ぎ」「絵付」「腐らし」と呼ばれる工程について行った。

鋳込みは湯と呼ばれる融解させた錫の地金を鋳型に流し込む工程であるが、錫器の鋳造では鋳型が繰り返し使われるのが特徴である。焼き継ぎは鋳込んだ錫器の部品どうしを接合する工程である。この工程では接合部分を熱した鏝を用いて溶接する。ろくろ挽きについては聞き取りと併せてビデオ撮影を行った。

絵付けおよび腐らしの作業工程については、伝統工芸士の佐々木義隆氏にご協力いただき、聞き取りおよびビデオ撮影を行った。絵付けは絵を描く工程。腐らしは絵を描いた部分以外を梨地にする工程である。

今後は「槌打ち」「ロウ付け」の作業工程記録をとるとともに、大阪錫器に所蔵されている資料の調査も行う予定である。

⑥河内木綿調査



八尾市立歴史民俗資料館学芸員の李 熙連伊氏とともに、植田家に現存する河内木綿の調査を行い、調書の作成及び写真撮影を行った。同家には地域連携企画の際に展示した幟のほかに、着物や布地が多数残っており、河内木綿を研究する際のサンプルとして貴重である。

今回、特に重要と思われる資料（手紡ぎ糸で作られたと思われるもの）については、デジタルマイクロスコープ（Keyence製VHX-200）を用い、25～175倍の倍率で繊維の撮影も行った。この撮影データから紡がれた木綿糸の太さを計測し、統計を取ることで、手紡ぎ糸と機械紡績糸の差異が数値上に現れることが期待される。

また、八尾市立歴史民俗資料館所蔵の辻合コレクションから『河内木綿譜』の調査を行なった。本調査では通常のデジタルカメラによる接写だけでなく、上記デジタルマイクロスコープを用いた撮影も行い、繊維の計量的な研究を行う際に基礎となるであろうデータを蓄積した。

同時に、李氏のご好意により、同資料館が栽培する河内木綿の綿摘みから、糸紡ぎまでを体験させていただくことができた。

⑦保存処理・分析

金属器、特に鉄器の保存処理を行なうにあたり、脱塩処理に使用する溶剤を決定するため、２回の脱塩実験を行なった。脱塩とは金属に含まれる錆の原因となる塩分を取り除くことである。脱塩処理の方法も様々で、例えば元興寺文化財研究所ではアルカリ水溶液に鉄製品を浸して、塩分を水溶液中に溶出させるアルカリ水溶液含浸法を採用している。当センターでは高温高圧法を用いる。これは鉄製品をインヒビター（腐食抑制剤）に浸し、高温高圧をかけ、維持することで水の粘度と表面張力が極度に低下し、脱酸素された熱水がサビの内部に浸入して可溶性の塩類を溶出させるという方法である。

第１回脱塩実験では試料に鉄粉圧縮体を使用した。その作成は元興寺文化財研究所で行なった。インヒビターを表の要領で作成し、各溶剤に塩化物を加えたものと加えないものの２パターン用意し、実験を行なった。

	セスキカーボネート	BTA	ホウ砂	安息香酸Na
a	0.5%	−	−	−
b	−	0.2%	0.1%	−
c	−	0.2%	−	0.1%
d	−	−	0.3%	−
e	−	−	−	0.3%

その結果、ホウ砂（四ホウ酸ナトリウム）がより効果的であるという結果が得られた。これまでの報告によるとBTA（ベンゾトリアゾール）にホウ砂を加えたもの（表のｂ）が効果的であるとされていたが、以上の結果からホウ砂のみとする。

第２回実験では、使用する溶剤の濃度による変化を検討するために、試料に鉄粉圧縮体を使用し、ホウ砂の濃度を変え、同様の実験を行なった。第１回同様、塩化物を加えたものと加えないものを用意した。今後はさらに実験・分析を行い、保存処理作業を進めていく予定である。

また、Ｘ線透過撮影装置、粒度分析装置を使用した大阪府下の遺跡から採取した無層理堆積物の堆積環境の復元的研究を行なった。Ｘ線撮影像は肉眼では確認できない層序が確認できた。今後も粒度分装置による研究を併用し、継続して研究していく。粒度分析装置については影山氏他が本年報にまとめられているので詳細はそちらを参照していただきたい。また、道明寺天満宮のご協力のもと道明寺天満宮所蔵漆製品のＸ線撮影を行なった。彫漆屈輪文合子で蓋身ともにＴ字形の木地構造であることが確認できた。Ｘ線撮影像は肉眼で確認できない部分の観察に有効であり、今後はより有効な活用法についても検討していく。

学芸遺産研究プロジェクト活動一覧

月　日	活　動　報　告
3月10日	「梅を描いた引札展」調査（大阪天満宮）（松本、祭礼遺産研究プロジェクトR.A.内海）
3月31日	北川博子編『なにわ・大阪文化遺産学叢書１　関西大学図書館蔵　上方役者絵画帖』発行
4月15日	特別展「ボストン美術館所蔵　肉筆浮世絵展　江戸の誘惑」・講演　調査（神戸市立博物館）
4月16日	企画展「大津絵の世界」調査（大津市歴史博物館）
4月22日	聖霊会調査（四天王寺）
4月24日	関西大学創立120周年記念事業　なにわ・大阪文化遺産学研究センター竣工記念特別展「インカへの道　―アンデスの秘宝―」オープニングセレモニー・『長島侯増山雪斎独楽園賀詞帖』、菅楯彦画、藤沢南岳賛「猿田彦」公開
4月27日	「大坂代官竹垣直道日記」読み合わせ・校正作業開始（松本、祭礼遺産研究プロジェクトR.A.内海）
4月28日	『長島侯増山雪斎独楽園賀詞帖』調査（有坂）
5月13日	第１回ワークショップ「天王寺舞楽の魅力」
5月18日	企画展「近代池田の和歌と俳句」調査（池田市歴史民俗資料館）
5月22日	八尾市植田家資料搬出準備作業
5月29日	八尾市植田家資料搬出作業
6月３日	第１回研究例会・『長島侯増山雪斎独楽園賀詞帖』公開
6月４日	第43回藝能史研究會大会調査（松本、祭礼遺産研究プロジェクトR.A.内海）
6月24日	第３回NOCHSレクチャーシリーズ「近世大坂の学芸」・『長島侯増山雪斎独楽園賀詞帖』公開
7月４日	八尾市・植田家書籍関連調査
7月８日	第11回MKCRフォーラム「18世紀のビジュアル・カルチャー　―上方浮世絵の人物表現―」調査（武庫川女子大学関西文化研究センター）
7月14日	大阪・堀川めぐり
7月18日	第33回『雅楽ゼミナール』調査（北御堂内　津村ホール）（松本、P.D.森本）
7月21日～22日	東京大学史料編纂所、国立公文書館内閣文庫、国立国会図書館調査（有坂）
8月４日	「篳の舞楽」調査（四天王寺）
8月11日	平成18年度中之島図書館百周年記念大阪資料・古典講座調査（松本）
9月７日～10月31日	鬼洞文庫一枚摺調査
9月12日	地域連携企画第２弾「八尾安中新田植田家の文化遺産」会場下見・打ち合わせ
9月26日～28日	東京大学史料編纂所所蔵「竹垣直道御代官日記　一～四」調査（松本、祭礼遺産研究プロジェクトR.A.内海）
10月８日	「近世大坂画壇の特質」公開シンポジウム（芦屋市立美術博物館）
10月14日	地域連携企画第２弾「八尾安中新田植田家の文化遺産」
10月20日	「大坂慕情　～なにわ四条派の系譜～」連続講座調査（芦屋市立美術博物館）（松本、祭礼遺産研究プロジェクトR.A.内海）
10月25日	大阪ブランドサミット「大阪の四季を彩る祭礼」
10月28日	関西大学創立120周年記念行事：シンポジウム「日本のなかの大阪文化遺産」、「篳の舞楽」（天王寺楽所雅亮会）
10月29日～30日	東京都立中央図書館、国立国会図書館調査（山本）
11月４日	木村蒹葭堂顕彰会講談・講演調査（大阪美術倶楽部）
11月12日	門真市歴史文化講座にて講演（松本）
11月16日	関西大学創立120周年記念展示「大坂画壇の絵画―文人画・戯画から長崎派・写生画へ―」記念講演調査（松本、祭礼遺産研究プロジェクトR.A.内海）
11月25日	第３回NOCHS文化遺産学フォーラム「まちづくりと文化遺産」
12月４日	第２回研究例会
12月５日～７日	韓国文化遺産視察
1月15日～16日	松竹大谷図書館、早稲田大学演劇博物館調査（北川）
1月19日	第４回NOCHSレクチャーシリーズ「中・近世大坂の寺院と歴史資料遺産」
1月26日	大阪市社会科教員研究会（講師：藪田、調査：松本）
1月31日	P.D.・R.A.のための文章講座①
2月14日	P.D.・R.A.のための文章講座②
3月１日	『Occasional Paper No.4 近世大坂の学芸』発行
3月31日	『なにわ・大阪文化遺産学叢書２　大坂代官竹垣直道日記（一）』発行

3月末現在

学芸遺産研究プロジェクト

Ⅰ．研究例会

①第１回例会　６月３日（土）参加者17名

於：なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟１階
　　文化遺産実習・展示室

内海寧子（祭礼遺産研究プロジェクトR.A.）

「大坂代官竹垣直道の名所見物
　　―『代官竹垣直道日記』を読む―」

有坂道子（研究員）

「伊勢長島藩主増山雪斎の文人交流
　　―『独楽園賀詞帖』に見る―」

内海報告では、『なにわ・大阪文化遺産学叢書２』として刊行する『大坂代官竹垣直道日記』（東京大学史料編纂所蔵）を素材に報告した。特に名所見物に焦点を当てて考察した。竹垣が行った見物先や、代官の職務と名所見物の相関関係、見物先での竹垣の趣味嗜好など、名所見物にかかわる行動の一端が明らかになった。

有坂報告では、平成17年度新収資料の『長島侯増山雪斎独楽園賀詞帖』（以下賀詞帖）について報告した。賀詞を贈った文人とその事跡の紹介、賀詞帖に収められていない賀詞についての指摘、漢詩人市河寛斎の曾孫である市河三陽の著書『市河寛斎先生』に賀詞を見たとの記述があることから賀詞帖の成立に関し言及した。

また報告とともに、賀詞帖を展示した。

②第２回例会　12月４日（月）　参加者42名

於：なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟１階
　　文化遺産実習・展示室

山本卓（研究員）

「上方浮世草子作者「都の錦」
　　―メディアとしての舌耕・書き本、 そして出版―」

鶴崎裕雄（研究員）

「港の歴史と文化　―江口・神崎・大物―」

山本報告では、上方の浮世草子作者である都の錦について、年譜や著作『内侍所』の識語などから、人物像をあぶり出した。都の錦が義士伝を広めるため、舌耕や写本を有効に活用していた様子を明らかにした。

鶴崎報告では、地域にかかわる文化や文学を研究することを通して地域の特色を見出していく、地域文化・地域文学論の有用性について言及した。

その事例として神崎川の河港である江口、神崎、大物を取り上げた。いずれの地域も古典作品の中に登場することが多いことから、神崎川の特異性として古典とのかかわりが深いことを指摘した。

Ⅱ．NOCHSレクチャーシリーズ

第３回NOCHSレクチャーシリーズ

「近世大坂の学芸」

６月24日（土）　参加者49名

於：なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟１階
　　文化遺産実習・展示室

Andrew Gerstle氏

（ロンドン大学SOAS教授・国際日本文化研究センター研究員（2006年９月まで））

「女形の身体を描く
　　―三ヶ津の浮世絵肉体表現を問う―」

水田紀久氏

（元関西大学教授・木村蒹葭堂顕彰会代表）

「同床同机　―増山雪斎侯と木村蒹葭堂―」

今回のレクチャーシリーズでは、上方役者絵と平

成17年度新収資料『長島侯増山雪斎独楽園賀詞帖』を取り上げ、近世大坂の文化遺産を再評価することを開催趣旨とした。

Gerstle報告では、上方役者絵画家である流光斎如圭が描いた女形の人物表現を素材に、上方役者絵の写実性がどこに由来するのか、江戸の役者絵との相違について言及した。

水田報告では、『長島侯増山雪斎独楽園賀詞帖』にかかわって、増山雪斎と木村蒹葭堂、それぞれの人物像や２人の交流について講演した。

また、『長島侯増山雪斎独楽園賀詞帖』の展示・公開とともに、有坂道子による釈文を配付した。

講演記録として、『Occasional Paper No.4　近世大坂の学芸』を発行した。

Ⅲ.「近世大坂画壇の特質」公開シンポジウム

※芦屋市立美術博物館と共催

10月８日（日）　参加者48名

於：芦屋市立美術博物館

基調講演：橋爪節也氏

（大阪市立近代美術館建設準備室）

パネリスト

有坂道子（研究員）

「文人画家たちの交流

―木村蒹葭堂の周辺―」

北川博子（研究員）「大坂画壇と歌舞伎」

司会：明尾圭造

（歴史資料遺産研究プロジェクト研究員）

当プロジェクトとしては、有坂道子と北川博子がパネリストとして参加した。

有坂は、福原五岳、桑山玉洲、野呂介石、十時梅厓、浦上玉堂などの文人画家たちの交流の結節点となった木村蒹葭堂について報告した。

北川は、上方役者絵や俳諧摺り物、流光斎や松光斎などの絵師、そして上方歌舞伎研究の現状について報告した。

Ⅳ. 地域連携企画

地域連携企画第２弾

「八尾安中新田植田家の文化遺産」

（旧植田家住宅現地調査報告会）

※八尾市教育委員会と共催

10月14日（土）参加者119名

第１部　現地説明会（於：八尾市植田家）

森隆男（生活文化遺産研究プロジェクト研究員）

第２部　講演会（於：龍華コミュニティセンター）

李熙連伊氏（八尾市立歴史民俗資料館学芸員）

「植田家に伝わった河内木綿」

藪田貫（研究員）「植田家の人々と学芸」

八尾市文化財課「旧植田家住宅整備について」

当プロジェクトとしては、藪田貫が、植田家所蔵の書籍を素材に、植田家の人びとの学芸環境について講演した。

多数の漢籍、『庭訓往来』『商売往来』といった往来物、『女大学宝箱』など、植田家でおこなわれていたと考えられる教育や、「懐徳堂祭典執行次第」から見える大阪文化の復興の動きについて示唆した。

また松本が準備作業として、９月12日に龍華コミュニティセンターの下見ならびに八尾市文化財課岸本邦雄氏との打ち合わせをおこなっている。

Ⅴ. 調査

①鬼洞文庫一枚摺調査

昨年度残したものについて、関西大学大学院生の中尾和昇、清水敦子の協力を得、９月から調書を作

成し、作業を完了した。入力作業については随時おこなっている。

②東京大学史料編纂所蔵『大坂代官竹垣直道日記』

今年度の成果として『なにわ・大阪文化遺産学叢書２　大坂代官竹垣直道日記(一)』を発行するべく、作業をおこなってきた。本書は天保11年から13年までの日記を収載し、３月末に発行した。

４月から、松本、祭礼遺産研究プロジェクトR.A.内海、関西大学大学院生の吉川潤、松永友和、赤木怜志、榎隆敏、田中梓都美が校正作業をおこなった。入力作業については、小林可奈の協力を得た。

９月26日～28日には、松本と内海が東京大学史料編纂所にて原本校正をおこなった。

11月８日には編集に当たって、研究協力者前田成雄氏より、助言を得た。

当資料にかかわって、６月３日（土）の第１回研究例会で、祭礼遺産研究プロジェクトR.A.内海寧子が報告した。

③『長島侯増山雪斎独楽園賀詞帖』

４月22日の関西大学創立120周年記念事業　なにわ・大阪文化遺産学研究センター竣工記念特別展「インカへの道　―アンデスの秘宝―」オープニングセレモニー、６月３日の第１回研究例会、６月24日の第３回NOCHSレクチャーシリーズ「近世大坂の学芸」で展示・公開した。

また有坂道子が４月28日に当資料を調査し、６月３日の第１回研究例会で報告をおこなった。第３回NOCHSレクチャーシリーズでは、水田紀久氏が増山雪斎と木村蒹葭堂の交遊について講演した。

長島侯増山雪斎独楽園賀詞帖

④上方役者絵

2006年３月発行の北川博子編『なにわ・大阪文化遺産学叢書１　関西大学図書館所蔵　上方役者絵画帖』にかかわって、第３回NOCHSレクチャーシリーズで、Andrew Gerstle氏が講演した。

また北川が、ボストン美術館、松竹大谷図書館、早稲田大学演劇博物館などで上方役者絵に関する調査を進めている。

⑤八尾市植田家　書籍調査

植田家の土蔵および母屋にある書籍を当センターに移管するため、植田家にて５月22日に資料搬出準備作業、５月29日に資料搬出作業をおこなった。

６月10日～15日のくん蒸作業の後、７月３日より松本が詳細調査をおこなっている。

また藪田貫が植田家の書籍を素材に地域連携企画第２弾「八尾安中新田植田家の文化遺産」で報告した。

Ⅵ. その他

①菅楯彦画、藤沢南岳賛「猿田彦」公開

４月22日、特別展「インカへの道　―アンデスの秘宝―」オープニングセレモニーで展示・公開した。

また藪田貫が、関西大学博物館彙報『阡陵』(No. 52) で当資料を紹介している。

②歴史文化講座「かどま　今昔」講演

松本が、門真市が開催している歴史文化講座「かどま　今昔」に出講した。

当センターで進めている大坂代官竹垣直道日記の調査の紹介と、大塩事件に参加したことで有名な茨田郡士の書籍のうち、大塩平八郎著の書籍に着目し、その特徴について報告した。

猿田彦

歴史資料遺産研究プロジェクト活動一覧

月　日	活　動　内　容
3月14日～16日	東京・千葉出張調査（西本・櫻木）
3月	大阪府内市町村史収載史料の調査
4月22日	聖霊会見学（於：四天王寺　原田・櫻木）
5月3日	第1回ワークショップ「天王寺舞楽の魅力」の打ち合わせ（天王寺楽所雅亮会）
5月11日	第1回ワークショップ「天王寺舞楽の魅力」の最終打ち合わせ・舞台設置
5月13日	合同例会（研究員ミーティング）・第1回ワークショップ「天王寺舞楽の魅力」
5月21日	関西大学教育後援会（センターの活動紹介）
5月29日・30日	八尾市植田家資料搬出およびセンターへの搬入作業
6月24日	第3回NOCHSレクチャーシリーズ「近世大坂の学芸」
7月3日	八尾市植田家古文書調査打ち合わせ・芦屋市立美術博物館との共催シンポジウム打ち合わせ
7月6日・10日	創立120周年記念行事の会場下見
7月7日	第1回研究例会・研究員ミーティング
7月10日	関西大学ミュージアム講座（西本）
7月11日	関西大学ミュージアム講座（北川）
7月14日	大阪　堀川めぐり（浜野・櫻木）
7月24日	創立120周年記念行事「籌の舞楽」打ち合わせ（天王寺楽所雅亮会・学長課）
7月26日	藤井寺市立図書館出張調査（原田・櫻木）
7月31日～ 8月4日	八尾市植田家古文書調査
8月2日	籌の舞楽会場設営見学（於：四天王寺）
8月3日	道明寺天満宮出張調査（原田・櫻木）
8月4日	籌の舞楽見学（於：四天王寺）
8月25日	上方芸能まつりinミナミ2006　舞楽公演見学（櫻木）
9月25日	創立120周年記念行事「籌の舞楽」関係者全体打ち合わせ
10月8日	芦屋市立美術博物館公開シンポジウム「近世大坂画壇の特質」（明尾・櫻木）
10月14日	地域連携企画第2弾「八尾安中新田植田家と文化遺産」
10月17日～20日	八尾市植田家古文書調査
10月17日	創立120周年記念行事「籌の舞楽」について懇談（於：四天王寺本坊）
10月25日	創立120周年記念行事「籌の舞楽」会場決定会議 大阪ブランドサミット「大阪の四季を彩る祭礼」
10月26日	創立120周年記念行事リハーサル
10月28日	創立120周年記念行事「日本のなかの大阪文化遺産」・「籌の舞楽」
11月4日	関西大学創立120周年記念式典（特別公演「天王寺舞楽」）
11月17日	天王寺楽所雅亮会第40回雅楽公演会見学（櫻木）
11月18日	第2回ワークショップ「お茶と茶釜」
11月25日	第3回NOCHS文化遺産学フォーラム「まちづくりと文化遺産」
12月5日～7日	韓国文化遺産視察
12月20日	京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター第2回公開講座「仏教と雅楽」参加（櫻木）
12月22日	道明寺天満宮所蔵資料撮影 長期インターンシップ生実習報告会出席
1月1日～2日	道明寺天満宮スキャニング調査（櫻木）
1月19日	第4回NOCHSレクチャーシリーズ「中・近世大坂の寺院と歴史資料遺産」・合同例会
1月26日	藤井寺市立図書館出張調査（櫻木）
1月31日・2月14日	P.D.・R.A.のための文章講座
2月19日～21日	関西大学博物館所蔵本山コレクション拓本写真撮影
2月26日	大坂城図屏風国際会議の会場下見（於：大阪商工会議所）
2月26日～ 3月16日	関西大学博物館所蔵本山コレクション拓本・文学部古文書室所蔵津田秀夫先生収集文書調査
3月7日～8日	沖縄出張調査（西本・櫻木）

3月末現在

歴史資料遺産研究プロジェクト

Ⅰ．研究例会

第１回例会　７月７日（金）　参加者27名
於：なにわ・大阪文化遺産学研究センター
　　文化遺産実習・展示室
南谷恵敬氏（四天王寺国際仏教大学教授）
「四天王寺の信仰と芸術」

第１回研究例会では、研究協力者で四天王寺執事の南谷氏に、古代から現在に至る四天王寺の信仰と宝物についてご報告いただいた。平安時代から鎌倉時代における四天王寺信仰についてのご報告は、創建期に比べて研究の少ない時期だけに、今後、四天王寺を研究する上で興味深い内容であった。

例会後のミーティングでは、今後の四天王寺研究の可能性について多くのご教示を得た。

研究例会の様子

第２回例会

今年度の第２回研究例会は、当プロジェクトの企画となる第４回NOCHSレクチャーシリーズに充てることとなった。

Ⅱ．NOCHSレクチャーシリーズ

第４回NOCHSレクチャーシリーズ
「中・近世大坂の寺院と歴史資料遺産」
１月19日（金）　参加者39名
於：なにわ・大阪文化遺産学研究センター
　　文化遺産実習・展示室
大澤研一氏（大阪歴史博物館学芸員）
「地域のなかで寺院を考える
　　―中世～近世の摂河泉を題材に―」
冨坂　賢氏
（独立行政法人国立博物館東京国立博物館）
「国指定文化財・歴史資料の現状と課題」

第４回NOCHSレクチャーシリーズでは、大阪の寺院史研究の動向や、当プロジェクトのテーマである「歴史資料」について取り上げ、それぞれの分野で活躍されている両氏をお招きした。

大澤報告では、松尾寺（和泉市）などの具体的な事例を用いて、中近世移行期から近世の寺院や社会について分析し、地域史を考える切り口としての寺院の重要性について述べられた。

大澤研一氏

冨坂報告では、文化庁による「歴史資料部門」の設置と国指定の推進についてのこれまでの取り組みや、保存や修復など歴史資料が抱える今後の課題が指摘された。

冨坂　賢氏

第４回NOCHSレクチャーシリーズについては、来年度、『NOCHS Occasional Paper』として刊行する予定である。

Ⅲ．調査・研究

①基礎的所在調査

昨年度から引き続き『東京大学史料編纂所報』などを用いて所在調査を行うとともに、昨年度末には、大阪府内の市町村史に収載されている資料について

の調査を行った。また、『なにわ・大阪文化遺産学叢書４　道明寺天満宮宝物選』の刊行にむけて、『国立歴史民俗博物館資料調査報告書12　情報資料研究部　社寺境内図資料集成２　近畿・補遺』などで、道明寺天満宮の関係資料について調査した。

②関西大学所蔵資料の調査

（１）本山コレクション「日本の部」拓本

６月７日に、軸装分と未表装分についてセンター内でくん蒸作業を行った。２月19日～21日には、軸装分126点の写真撮影を業者に委託して行った。２月下旬～３月中旬には、未調査の拓本を整理し、目録を作成した。

拓本調査の様子

本山コレクション「日本の部」拓本は、来年度、『なにわ・大阪文化遺産学叢書』として刊行する予定である。

（２）文学部古文書室所蔵津田秀夫先生収集文書

津田秀夫先生収集文書のうち、中世文書を中心とした38点について、調書の作成とデジタルカメラでの撮影を行った。

③出張調査

（１）道明寺天満宮関連資料調査

『なにわ・大阪文化遺産学叢書４　道明寺天満宮宝物選』の刊行のため、道明寺天満宮関連資料の出張調査を行った。

７月26日に、藤井寺市立図書館において、『藤井寺市史』編さんの際に撮影された資料の写真を調査し、８月３日に、道明寺天満宮において、昨年度は未見であった古文書のほか、境内図などの絵図を調査した。調査アルバイトの林圭一郎（関西大学大学院博士課程後期課程）らと調書を作成し、写真撮影を行った。調査終了後には、道明寺天満宮周辺の現地調査も行った。

二度の調査の結果にもとづいて、12月22日に道明寺天満宮で、生活文化遺産研究プロジェクトR.A.の宮元と未撮影の資料について写真撮影を行った。

また、R.A.櫻木は、１月１日～２日にかけて行われた生活文化遺産研究プロジェクトの道明寺天満宮境内のスキャニング調査に調査補助として加わった。

（２）東京・千葉の所蔵機関調査

①基礎的所在調査にもとづいて、2005年３月14日～16日に、国立公文書館内閣文庫・（財）石川文化事業財団お茶の水図書館・大学共同利用機関　人間文化研究機構　国立歴史民俗博物館において、『槇尾山小縁起　附槇尾山大縁起』・『行基菩薩伝』・『和泉国大鳥神社古文書』などの写本調査を行った。また、祭礼遺産研究プロジェクトが進める『神社を中心とする村落生活調査報告』に関連して、『全国神社明細帳』の大阪府分を閲覧した。

Ⅲ．調査・研究には、2005年度分の調査報告を含んでいるが、『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2005』では2005年２月末までの調査報告を掲載したので、本年報において報告した。

④その他

（１）八尾市植田家古文書調査

八尾市教育委員会が進める同市植田家所蔵の資料調査に関して、浜野潔研究員が古文書調査の進め方などの助言を行った。

Ⅳ．その他

①関西大学ミュージアム講座

７月10日　西本昌弘「行基と難波津」

７月11日　北川　央「大坂城の歴史と謎・伝説」

於：関西大学第一高等学校・第一中学校

親和館　親和ホール

「なにわの文化遺産」を総合テーマとした平成18年度の「関西大学ミュージアム講座」（主催：関西大学博物館、関西大学エクステンション・リードセンター）において、当プロジェクトの西本昌弘研究員・北川央研究員が上記のタイトルで講演を行っ

た。

②芦屋市立美術博物館公開シンポジウム
「近世大坂画壇の特質」

当プロジェクトの明尾圭造研究員（芦屋市立美術博物館）より、同館の「大坂慕情～なにわ四条派の系譜～」（10月７日～11月19日）の開催期間中に、公開シンポジウムをセンターと共催したいとの依頼があった。協議の上、開催日を10月８日とし、パネリストには、橋爪節也氏（大阪市立近代美術館建設準備室）、センターから学芸遺産研究プロジェクトの北川博子研究員・有坂道子研究員とすることが決められた。パネリストとの調整など準備・運営全般は、明尾研究員が担当した。R.A.櫻木は、学芸遺産研究プロジェクトR.A.松本と、当日の会場設営等に携わった。

③第１回ワークショップ「天王寺舞楽の魅力」

今年度から開催されたワークショップの第１回「天王寺舞楽の魅力」の準備と運営は、P.D.森本とR.A.櫻木で分担することとなり、チラシの作成などの広報や当日の司会は森本が、天王寺楽所雅亮会や業者との連絡・調整､当日の運営は櫻木が担当した。

今回のワークショップでは、第２回NOCHSレクチャーシリーズと同様、吹田市内の新聞折込でチラシを配布し、センター行事としてはじめての往復はがきによる事前申し込み制を採った。

また、当日の参加者に配布する「鑑賞のてびき」（A4判10頁）を作成することとし、各プロジェクトのR.A.が執筆し、櫻木が編集した。その内容と執筆担当者は以下の通りである。

舞楽（櫻木）
天王寺楽所と雅亮会（櫻木）
天王寺舞楽と聖霊会（内田・祭礼遺産）
萬歳楽（櫻木）
萬歳楽の楽器（内海・祭礼遺産）
萬歳楽の装束（松本・学芸遺産）

当初、萬歳楽の演舞は、センター前のなにわ広場に設置された特設舞台での公演を予定していたが、雨天のため、センターの文化遺産実習・展示室での公演に変更された。

ワークショップ開催にあたっては、四天王寺楽所雅亮会の全面的な協力のもと、円滑に準備・運営を進めることができた。特に、研究協力者で、雅亮会理事長の小野功龍氏、理事の徳山耕一氏・中島仁氏とは、緊密に連絡を取り合って準備を進めるとともに、「鑑賞のてびき」の監修をしていただいた。

④関西大学創立120周年記念行事
パネルディスカッション
「日本のなかの大阪文化遺産」
特別公演「篝の舞楽」

関西大学創立120周年記念式典
特別公演「天王寺舞楽」

10月28日に開催された関西大学創立120周年記念行事のうち、R.A.櫻木は、特別公演「篝の舞楽」についての全般を担当した。本行事は関西大学との共催であったため、学長課の川原哲夫氏・畠山勝代氏らと緊密に連携を図りながら準備・運営を行った。

吹田市内・豊中市内の新聞折込でチラシを配布するなどの広報を行い、往復はがきによる事前申し込み制とし、1.289名の参加申し込みがあった。

また、当日の参加者に配布する「鑑賞のてびき」（A4判カラー４頁）を作成した。「鑑賞のてびき」は、演目や天王寺楽所雅亮会について写真入りで解説したものである。

今回も四天王寺楽所雅亮会の全面的な協力を得ることができた。雅亮会理事の徳山耕一氏・吉光信昭氏・小野真氏とは、ワークショップと同様、打ち合わせや会場の下見、「鑑賞のてびき」の監修など、緊密な連絡を取り合いながら準備を進めた。

また、「篝の舞楽」は、毎年８月４日に四天王寺で執り行われる年中行事であることから、四天王寺勧学部の柏原智覚氏・総務部の南條光輝氏に、当日の運営に関する助言をいただいた。

11月４日に開催された関西大学創立120周年記念式典の特別公演「天王寺舞楽（萬歳楽）」に、R.A.櫻木が協力した。協力の内容は、式典出席者に配布する天王寺舞楽と萬歳楽の解説（A4カラー片面刷り）の執筆および準備・当日の運営であった。

2006年度会議報告

月　日	会　議　報　告
4月5日	第1回HQ・P.D.・R.A.合同連絡会議
4月12日	第1回HQ会議
4月19日	第1回推進委員会
4月26日	第2回HQ会議
5月13日	第1回合同例会
5月24日	第3回HQ会議
5月31日	第2回HQ・P.D.・R.A.合同連絡会議
6月21日	第2回推進委員会
6月26日	第4回HQ会議
6月28日	第3回HQ・P.D.・R.A.合同連絡会議
7月12日	第5回HQ会議
7月14日	第4回HQ・P.D.・R.A.合同連絡会議
7月26日	第3回推進委員会
9月20日	第5回HQ・P.D.・R.A.合同連絡会議
10月4日	第6回HQ会議
10月18日	第4回推進委員会
10月19日	第6回HQ・P.D.・R.A.合同連絡会議
10月28日	第1回外部評価委員会
11月8日	第7回HQ・P.D.・R.A.合同連絡会議
11月22日	第7回HQ会議
12月13日	第1回リーダー会議
12月25日	第8回HQ会議
1月10日	第8回HQ・P.D.・R.A.合同連絡会議
1月17日	第5回推進委員会
1月19日	第2回合同例会議
3月14日	第9回HQ・P.D.・R.A.合同連絡会議
3月20日	第6回推進委員会

ＨＱは事務局の略

長期インターンシップ実習

＜受入から報告会までの日程＞

5月25日（木）面接
6月8日（木）インターンシップ生会議
6月22日（木）実習開始
12月22日（金）実習報告会

＜受入担当研究員＞

森　隆男（生活文化遺産研究プロジェクト研究員／関西大学文学部教授）

＜2006年度インターンシップ実習生＞

久保　智美氏（文学部総合人文学科3回生）
吉富　覚子氏（文学部総合人文学科3回生）
角田　歩氏（総合情報学部総合情報学科3回生）

①センターでの受入

今年度より、当センターでは、長期インターンシップ生を受け入れることとなった。受け入れ期間は、6月～12月の半年間であった。

当センターは、今にのこる大阪の文化遺産を調査・研究し、その研究成果の地域社会への還元を目的としている。したがって、インターンシップ生には、それぞれの地域において、景観も含めて歴史的な遺産が人びとにどのように受け入れられているのかを学んでもらうため、センター研究員主導で大阪各地域への調査に同行したり、研究行事へ参加したりすることを通じて、大阪の文化遺産に実際に触れる機会を提供した。そして、そこで研究員や自らが調査し学んだことが研究センターにおいて、どのような形で成果として結実していくのかということを一連の作業を通して理解できるように仕事をすすめてもらった。

具体的な仕事内容としては、成果物の校正、研究行事案内葉書や成果物の発送作業、研究行事の準備、研究行事における来場者誘導・受付・カメラ・ビデオ撮影など、センターにてP.D.・R.A.が常時おこなっている業務に携わってもらった。

半年間の実習の成果をまとめた実習報告会では、大阪の文化遺産については、必ずそれを支える人びとがいて、保存・継承することの困難さを知ることができたということ、また、当センターにおける仕事については、ひとつの大きな研究行事が多くの人びとの協力と長期にわたる準備によって成り立つものであること、自分たちで仕事を見つけ、積極的にやらなければならないことなど、実際の業務を通じて学んだことを報告した。

受け入れ側であるセンターは、今年度の反省点を活かして実習生が文化的事業に理解をもち、将来仕事に就く上で目的意識をもって仕事ができるような指導をするように努めたい。

＜主な仕事内容＞

・研究行事の受付、誘導、資料配布
・植田家民具調査
・鬼洞文庫一枚摺調書入力
・文化庁ホームページへの行事登録
・NOCHSメールの作成
・Occasional paperの校正作業
・配送物の送付準備作業
・研究行事の展示パネル作成

②インターンシップを終えて　―実習生の感想―

久保智美（文学部3回生）

私は2回生の時にも学校インターンシップに行き、そこで受動的ではなく能動的に動くことの大切さを学んだ。この教訓を活かすべく、また、学校インターンシップとは違った経験をしてみたいと思い、この関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターのインターンシップに応募した。

今回のインターンシップは私にとってとても新鮮なもので、何よりも、とても身近な大阪とその周辺の文化と歴史を学べた事が、歴史分野を学ぶ為に大学に来た私には良いものとなった。1つのことをいろいろな視点から見る大切さを学ぶことができた。

吉富覚子（文学部3回生）

八尾市植田家の民具調査で普段みることや触れることのない民具資料を調査したことは「インターンシップなのに楽しんでいいのか？」と思ってしまうほどだった。ただ、受身の仕事をこなすだけで半年間を過ごしてしまったことはとても悔やまれた。

センターに携わる多くの人がひとつのことを熱心に研究されている知識の深さを見て、私もひとつでも、強みとなる知識を見つけて仕事がしたいと思った。また、ワークショップやフォーラムを通して文化遺産に少しでも興味を持ってもらう活動は、私が企業で志望する職種が何かを気付かせてくれた。

角田歩（総合人間学部３回生）

一番印象に残ったものは「お茶と茶釜」のワークショップだ。私も茶道体験をさせていただけることになり、初めて茶室に入っての茶道を経験することができた。難しく厳しい作法で取っ付きにくいものと思っていた茶道が、正しい作法よりもその場の雰囲気を楽しむことが重要との言葉でリラックスして臨むことができた。

私は普段高槻キャンパスへ通っているため、センターのある千里山キャンパスに通う他のインターンシップ生に比べて活動に参加できた時間が少なかったことが心残りだが、色々な経験ができ、自分の欠点や改善点に気付けた。

外部評価委員会

①第一回外部評価委員会の実施

日　時：2006年10月28日（土）10：00～11：30
場　所：なにわ・大阪文化遺産学研究センター２階　会議室

＜外部評価委員＞
井上　　宏氏（関西大学名誉教授／㈳生活文化研究所「上方研究の会」代表）
永井　芳和氏（読売新聞大阪本社編集委員）
森　まゆみ氏（作家／地域雑誌編集者）

＜なにわ・大阪文化遺産学研究センターからの出席者＞
髙橋　隆博（なにわ・大阪文化遺産学研究センター長／関西大学博物館長／関西大学文学部教授）
藪田　　貫（なにわ・大阪文化遺産学研究センター総括プロジェクト・リーダー／関西大学文学部教授）
熊　　博毅（博物館事務長）
森本　幾子（なにわ・大阪文化遺産学研究センターP.D.）

今年度は、なにわ・大阪文化遺産学研究センターの活動が始動して以来、第１回目の外部評価委員会を開催した。外部評価委員会は、センターの調査・研究活動について、客観的な視点から評価してもらい、評価委員の意見や感想をふまえた上で、今度のセンターの研究に反映させていくことを目的としている。

まず、P.D.森本から、配布資料の確認と説明をおこなった。つづいて、髙橋センター長からセンターの基本的なコンセプトと祭礼遺産・生活文化遺産・学芸遺産・歴史資料遺産の各プロジェクトについて説明をおこなった。その後、各評価委員より質問を受けながら、センターの評価について具体的な意見や感想をいただいた。最後に、藪田総括プロジェクトリーダーから今後の外部評価委員会の予定についての説明があり、委員会を終了した。

外部評価委員会の様子

外部評価委員会にて評価委員から出された意見および感想

井上　宏氏

- これまで出版されているものをみると、新聞やテレビなど、情報メディアを使い分けながら上手に情報発信が出来ていると思う。
- 刊行物は、それに携わる研究員が面白い、楽しいという気持ちでやっている様子がストレートにこちらへ伝わってくる。
- なにわ・大阪文化遺産学研究センターは将来、もっと飛躍すると思う。
- 叢書はすばらしいと思うが、補助金を受けて刊行したものは販売禁止というのは驚きである。普及という意味からも一般の出版社と連携しながら情報発信をしていく手立てを考えてもらいたい。
- なにわ・大阪文化遺産学研究センターの活動は、学生の教育にも強い力になっていくと思われる。
- 現場を見せると感動する学生は多い。簡単なハウツーの手引書をつくって徐々にレベルアップをはかればよい。
- 年報をはじめとしてセンターの出版物は、ほどんどがA4判であるが、個人で所蔵するにはA4判は大きい。ポピュラーな内容のものについては、A6判からB6判で発行してもらいたい。

森　まゆみ氏

- 近代のことがらは、現在の自分の時代とつながっているので分かりやすいという点から、近代にも重点を置いてもらいたい。近代を研究する場合には、オーラルヒストリーの収集が欠かせない。テープレコーダーで音だけを拾うのではなく、映像と音を同時に記録する方が良いだろう。そのためには、ビデオを上手に活用すればよい。また、ただ収集するだけではなく、収集したものをきちんと分類・整理しておくことが大切である。
- 小学校や中学校に対する副読本は是非とも実現してもらいたいが、その際は４つの研究プロジェクトの成果を網羅したものにしてもらいたい。大阪には、神社が少なく、寺院が多いがそうしたことは、大阪人の精神文化を垣間見る手立てとなる。次代に継承させる意味でも副読本の実現は必要であると思う。
- センターのひとつのポイントとして「食」文化があるが、なにわ伝統野菜だけではなく、大阪の料亭文化というものにも焦点をあててもらいたい。大阪の料亭文化は、江戸時代から非常にすすんでおり、その頃の料亭の献立も残っている。そうした点も明らかにしてもらいたい。
- 指定管理者制度の導入などで、貴重な資料を持っている人も、自分の資料が将来的にどうなるか分から

ないということから、自治体に資料を預けることにためらいを持ちはじめている。そうした状況だからこそ、大学が信用されるようになるのではないか。

永井　芳和氏

- 寄贈があった資料については、センターの出版物の後ろにいれてPRしていくことが大切である。

- 報告書には写真がたくさん入っており、そうした点を見ただけでも時代が変わったということを感じる。映像や音の記録は大切で、片手間ではできない。新聞社の取材では、記者以外にカメラマンがきちんとついている。記録に残すという自覚を持って撮るのと、漠然と撮るのとでは結果が違ってくる。音も現場で採取する必要がある。映像資料は、20年後、30年後に生きてくる。そのために、責任者をきちんと決めてできるだけ早い時点で整理をしておくことが大切である。

- センターのホームページを充実させ、センターのURLをきちんと入れておいたほうがよい。

センター通信

① NOCHS メール

号	配信月日		内　　容	執筆者	編集担当
第14号	3月29日	1	2月・3月の動き		櫻木　　潤
		2	今年度の活動を振り返って	森本　幾子 内田　吉哉 内海　寧子 宮元　正博 千葉　太朗 松本　　望 櫻木　　潤	
		3	4月の予定		
		4	編集後記		
第15号	6月20日	1	5月の活動		内田　吉哉
		2	第1回ワークショップ「天王寺舞楽の魅力」の舞台裏	松本　　望	
		3	八尾市・植田家からセンターへの資料搬入	森本　幾子	
		4	7月の予定		
		5	編集後記		
第16号	6月30日	1	生活文化遺産研究例会のお知らせ		内田　吉哉
		2	6月の活動		
		3	インターンシップ紹介		
		4	八尾市・植田家民具調査	インターンシップ生・吉富　覚子	
		5	足元にある「なにわ・大阪の文化遺産」	櫻木　　潤	
		6	編集後記		
第17号	7月18日	1	センターで検証する「大阪の伝統野菜」	事務担当・常行貞臣	内田　吉哉
		2	道明寺天満宮夏祭り調査・予備調査	宮元　正博	
		3	大阪府の神社合祀に関連する新聞記事調査	内田　吉哉	
		4	8月の予定		
		5	編集後記		
第18号	8月1日	1	7月の活動		内田　吉哉
		2	川面から大阪を新発見―なにわ探検クルーズ―	櫻木　　潤	
		3	第33回『雅楽ゼミナール』に参加して	松本　　望	
		4	X線透過撮影装置取り扱い説明会	千葉　太朗	
		5	編集後記		
第19回	8月31日	1	「篝の舞楽」鑑賞記	学芸遺産研究プロジェクト研究員・前田成雄	内田　吉哉
		2	上方芸能としての天王寺舞楽～上方芸能まつりinミナミ2006から～	櫻木　　潤	
		3	なにわ伝統野菜の収穫と調理	宮元　正博	
		4	9月の予定		
		5	編集後記		

第20号	9月21日	1	8月の活動		内海　寧子
		2	大阪ブランドの集結―大阪ブランドサミット―	内海　寧子	
		3	大阪の寺社となにわ伝統野菜のあゆみ	森本　幾子	
		4	なにわの伝統野菜と食育	事務担当・速水裕子	
		5	編集後記		
第21号	10月10日	1	なにわ実験農園第2期播種	宮元　正博	内海　寧子
		2	保存処理分析作業室だより―さびのはなし―	千葉　太朗	
		3	竹垣直道日記をめぐる東京見聞	内海　寧子	
		4	10月の予定		
		5	編集後記		
第22号	11月13日	1	11月の予定		内海　寧子
		2	八尾安中新田植田家の文化遺産	インターンシップ生・久保　智美	
		3	NOCHSへようこそ！―外国人研究者による特別講演会―	松本　望	
		4	関西大学創立120周年記念行事と記念式典―センターは次の一歩を踏み出した―」	櫻木　潤	
		5	10月の活動		
		6	編集後記		
第23号	12月20日	1	11月・12月の活動報告		千葉　太朗
		2	第2回ワークショップ「お茶と茶釜」雑感	宮元　正博	
		3	まちづくりと人びと	森本　幾子	
		4	上町台地お散歩ツアー	千葉　太朗	
		5	編集後記		
第24号	1月30日	1	1月の活動報告		千葉　太朗
		2	インターンシップ生として受け入れて頂いて	インターンシップ生・久保　智美	
		3	インターンシップを振り返って	インターンシップ生・吉富　覚子	
		4	インターンシップを経験して	インターンシップ生・角田　歩	
		5	編集後記		
第25号	2月28日	1	2月の活動報告と発行予定出版物		千葉　太朗
		2	2006年度第2回祭礼遺産研究例会	内田　吉哉	
		3	保存処理分析作業室便り ―2006年度生活文化遺産第2回研究例会―	千葉　太朗	
		4	第4回NOCHSレクチャーシリーズ 「中・近世大坂の寺院と歴史資料」	櫻木　潤	
		5	編集後記		

②『難 波 潟』

号	頁	内　　容	執筆担当
第３号	１～２	【特集】第2回NOCHS文化遺産学フォーラム「大阪と沖縄の文化遺産」 アンケートより	宮元　正博
	３～４	【第２回NOCHSレクチャーシリーズ】 「なにわ伝統野菜VS京野菜―復興のなにわか伝統の京か―」 講演：大阪府立食とみどりの総合技術センター、 野菜園芸グループリーダー・森下正博「なにわの伝統野菜のもつ今日的意義―なにわの伝統野菜で大阪を「しんか」させよう―」／野菜文化史研究センター所長・久保　功「歴史文化野菜学からみた京野菜」／参加者の感想（アンケート結果から）／参加者が教えてくださった調理例	森本　幾子
	５～７	【研究室だより】 「第２回祭礼遺産研究例会：祭礼遺産研究班研究員・市川秀之「近世の民俗に対する知識人の関与―河南町平石の祭礼を題材に―」	内田　吉哉
		「第２回生活文化遺産研究例会：生活文化遺産研究班R.A.・宮元正博・千葉太朗「道明寺天満宮３Dスキャニング調査概報」／大阪工業大学講師・妻木宣嗣「寺社境内とその周辺における「にぎわい」空間について」	千葉　太朗
		「第２回学芸遺産研究例会：学芸遺産研究班R.A.・松本望「鬼洞文庫一枚摺調査の経過報告と今後の展望」／（財）阪急学園池田文庫研究員「関西大学図書館蔵『上方芝居絵帖』・『一養亭芳瀧筆画帖』について」	松本　　望
		「第１回歴史資料遺産研究例会：歴史資料遺産研究班R.A.・櫻木潤「なにわ・大阪の歴史資料調査～歴史資料遺産研究班の第一歩として」	櫻木　　潤
		「第２回歴史資料遺産研究例会：関西大学非常勤講師・若井敏明「古代の難波津―その位置論を中心に―」／歴史資料遺産研究班P.L.、関西大学文学部教授・西本昌弘「平安時代の難波津」	櫻木　　潤
	８	書籍紹介「大阪歴史博物館・早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編集・発行『日英交流　大坂歌舞伎展―上方役者絵と都市文化―』2005年　302ｐ	松本　　望
		なにわ・大阪文化遺産学研究センター今後の予定	森本　幾子
		編集後記	
		奥付	

2006年５月13日刊行

号	頁	内容	執筆担当
第4号	1～3	【第1回ワークショップ】「天王寺舞楽の魅力」 天王寺楽所と雅亮会／雨の中130名もの参加者が／第一部「聖霊会ビデオ上映 舞楽と管絃」／第二部「襲装束の解説と着付け　舞楽の所作解説　　萬歳楽」／ワークショップを終えて	櫻木　　潤
	4～5	【第3回NOCHSレクチャーシリーズ】「近世大坂の学芸」 ロンドン大学SOAS教授、国際日本文化研究センター研究員・Andrew Gerstle「女形の身体を描く―三ヶ津の浮世絵肉体表現を問う―」／元関西大学教授、木村蒹葭堂顕彰会代表・水田紀久「同床同机―増山雪斎侯と木村蒹葭堂」／アンケートより	松本　　望
	6～7	【研究室だより】 「2006年度第1回祭礼遺産研究例会：吹田市立博物館・藤井裕之「異形のはきもの―大阪府内の事例を中心に―」	内田　吉哉
		「2006年度第1回生活文化遺産研究例会：関西大学文学部教授・森　隆男「モノづくりの今」／（財）枚方市文化財研究調査会・吉田晶子「大阪の鋳物業―近代化以前の職種と技術―」	宮元正博／ 千葉太朗
		「2006年度第1回学芸遺産研究例会：祭礼遺産研究プロジェクトR.A.・内海寧子「大坂代官竹垣直道の名所見物―『代官竹垣直道日記』を読む―」／京都橘大学文学部助教授・有坂道子「伊勢長島藩主増山雪斎の文人交流―『独楽園賀詞帖』に見る―」	松本　　望
		「2006年度第1回歴史資料遺産研究例会：四天王寺国際仏教大学教授・南谷恵敬「四天王寺の信仰と芸術」	櫻木　　潤
	8	切り抜き帳：平成18年5月14日（日）朝日新聞大阪版・朝刊29面「天王寺舞楽地域に発信」 施設の紹介「文化財保存処理分析作業室」 2006年度新研究員紹介	森本　幾子
		編集後記	
		奥付	

2006年9月15日刊行

号	頁	内容	執筆担当
第５号	１～２	【地域連携企画第２弾】「八尾安中新田植田家の文化遺産」	松本　　望
		「第１部　現地説明会：関西大学教授、生活文化遺産研究プロジェクト研究員・森　隆男」／「第２部　講演会：八尾市立歴史民俗資料館学芸員・李熙連伊「植田家に伝わった河内木綿」、関西大学教授、学芸遺産研究プロジェクト・リーダー・藪田貫「植田家の人々と学芸」、八尾市文化財課「旧植田家住宅整備について」／アンケートより	
	３	【大阪ブランドサミット】「祭礼パネル」出展	内海　寧子
	４～５	【関西大学創立120周年記念行事】「関西大学がはぐくんだ大阪学と中国学」 パネルディスカッション「日本のなかの大阪文化遺産」基調講演：なにわ・大阪文化遺産学研究センター長・髙橋隆博、パネルディスカッション：森まゆみ氏（作家／地域雑誌編集者）・小野功龍氏（相愛大学音楽学部教授／天王寺楽所雅亮会理事長）・Andrew Gerstle氏（ロンドン大学SOAS教授）・笑福亭仁智氏（(社）上方落語協会理事、総合司会：藪田　貫（なにわ・大阪文化遺産学研究センター総括プロジェクト・リーダー） 特別公演「篝の舞楽」　振鉾（えんぶ）　篝の火入れ　陪臚（ばいろ）　還城楽（げんじょうらく）　長慶子（ちょうげいし）　演奏：天王寺楽所雅亮会、解説：小野功龍氏（雅亮会理事長） 120周年記念行事を終えて－センターの第２ステップへ－	櫻木　　潤
	６	【第２回ワークショップ】「お茶と茶釜」 第１部「茶湯釜のできるまで」／第２部「茶道体験」	千葉　太朗
	７	【第３回NOCHS 文化遺産学フォーラム】「街づくりと文化遺産」	宮元　正博
	８	来館者の紹介 施設の紹介「なにわ実験農園」	内田　吉哉
		編集後記	
		奥付	

2007年１月31日刊行

センター紹介記事

今年度も新聞紙上をはじめとして、さまざまなメディアを通してセンターの活動が社会に発信された。ここでは、新聞記事を中心に今年度の活動を振り返る。

天王寺舞楽の魅力―ワークショップと120周年記念行事―

天王寺舞楽 地域に発信

吹田 埋もれた文化に光

聖徳太子（574～622）の仏教伝来に起源を持つ国の重要無形民俗文化財「天王寺舞楽」を大阪の文化遺産として広く市民に知ってもらおうと、吹田市山手町3丁目の関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターで舞楽が披露され市民ら約120人が観賞した。

同センターは文科省の学術高度化推進事業として昨春、組織は発足していたが、専用のセンター棟が今春完成した記念に第1回ワークショップとして市民に公開した。

天王寺舞楽を舞う天王寺楽所雅亮会のみなさん＝吹田市の関西大学で

天王寺舞楽は、四天王寺（大阪市天王寺区）で聖徳太子の命日に催す聖霊会などの法会に奉納される舞楽。この日は、伝統を受け継ぐ「天王寺楽所雅亮会」の小野功龍理事長が、舞楽の歴史、笙や篳篥などの楽器、舞装束などを一つ一つ実物を見せて解説したあと、「蘇莫者」を披露した。

高橋隆博・同センター長は「世界的に優れているのに一般には余り知られていない文化遺産が大阪にはまだまだ多い。今後も埋もれた『なにわの文化』に光を当て、地域社会に発信していきたい」と話している。

【2006年５月14日（日）朝日新聞（朝刊）28面】

第１回ワークショップは、朝日新聞のほかに大阪日日新聞にも掲載された。また、翌日には吹田ケーブルテレビジョンで当日の様子が放映された。

芝生広場 舞楽に千人

関大千里山キャンパス

国の重要無形文化財「天王寺舞楽」を大阪の文化遺産として広く知ってもらおうと、特別公演「雅の舞楽」が28日、吹田市の関西大千里山キャンパスであり、公募した市民ら約千人が篝火に照らされた優雅な舞と音色を楽しんだ＝写真。

天王寺舞楽は、四天王寺（大阪市天王寺区）で聖徳太子の命日に催す聖霊会などの法要に奉納される舞楽。この日は、キャンパス内の芝生広場に特設した舞台で、1300年来の伝統を受け継ぐ「天王寺楽所雅亮会」（小野功龍理事長）の楽人が、笙や篳篥などの楽器を奏で、舞人が舞装束などをまとい、舞を披露した。

【2006年10月29日（日）朝日新聞（朝刊）32面】

この日は、パネルディスカッション「日本なかの大阪文化遺産」も開催され、双方の様子は当日夜のANNニュースで放映された。

大阪の四季を彩る祭礼―大阪ブランドサミット―

大阪ブランド

1000人参加、北区でサミット

「怖い」「低俗」→アツさも渋さも

祭りや伝統野菜PR

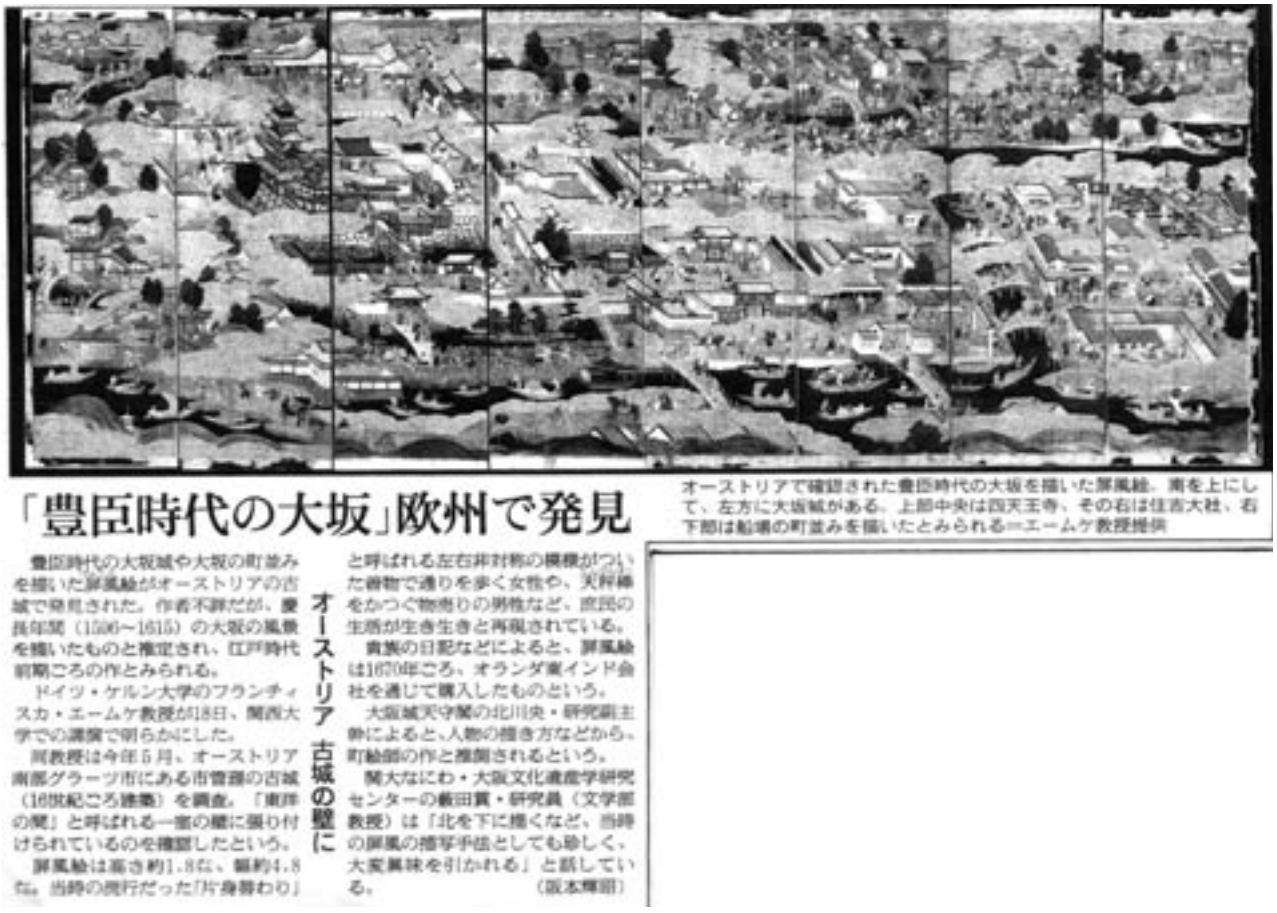
世界に発信

「熱いヤクザの街」「低俗なお笑いの都市」などと海外の旅行ガイドなどで負のイメージが喧伝されている「大阪」の、魅力を掘り起こし、世界に発信していこうと「大阪ブランドサミット」が25日、大阪市北区の大阪国際会議場で開かれた。府や大阪市で作る団体「大阪ブランドコミッティ」が主催し、約千人が参加した。（後藤俊明）

なにわの伝統野菜から作った食品の試食や焼酎の試飲を楽しむ参加者＝大阪国際会議場で

【2006年10月26日（木）朝日新聞（朝刊）32面】

新発見！―豊臣時代の大坂城図屏風―



「豊臣時代の大坂」欧州で発見

オーストリア 古城の壁に

豊臣時代の大坂城や大坂の町並みを描いた屏風絵がオーストリアの古城で発見された。作者不詳だが、慶長年間（1596～1615）の大坂の風景を描いたものと推定され、江戸時代前期ごろの作とみられる。

ドイツ・ケルン大学のフランチスカ・エームケ教授が18日、関西大学での講演で明らかにした。

同教授は今年5月、オーストリア南部グラーツ市にある市管理の古城（16世紀ごろ建築）を調査。「東洋の屏」と呼ばれる一室の壁に張り付けられているのを確認したという。

屏風絵は縦さ約1.8m、幅約4.8m。当時の流行だった「片身替わり」と呼ばれる左右非対称の模様がついた着物で通りを歩く女性や、天秤棒をかつぐ物売りの男性など、庶民の生活が生き生きと再現されている。

貴族の日記などによると、屏風絵は1670年ごろ、オランダ東インド会社を通じて購入したものという。

大阪城天守閣の北川央・研究副主幹によると、人物の描き方などから、町絵師の作と推測されるという。

関大なにわ・大阪文化遺産学研究センターの藪田貫・研究員（文学部教授）は「北を下に描くなど、当時の屏風の描写手法としても珍しく、大変興味を引かれる」と話している。（坂本輝昭）

オーストリアで確認された豊臣時代の大坂を描いた屏風絵。南を上にして、左方に大坂城がある。上部中央は四天王寺、その右は住吉大社、右下部は船場の町並みを描いたとみられる＝エームケ教授提供

【2006年10月19日（木）朝日新聞（朝刊）１面】

10月８日、Franziska Ehmcke氏（ケルン大学日本学科教授）が来館し、オーストリアのエッゲンベルグ城に所蔵される屏風絵の写真を披露された。氏は10月18日に「世界に眠る大阪文化遺産―オーストリアで新再発見された大坂城図屏風―」と題して講演し、翌日、屏風のカラー写真が朝刊１面を飾った。

関西大学の新たな研究拠点として

なにわ野菜は「文化遺産」

週刊まちぶら

第97号

120年の歩み風さわやか

「独立の精神」酔い心地は

巨大船を思わせる楕円（だえん）型の凛風館。屋上には桜並木と風力発電。館内は食堂や書店のほか、ヘアサロンやネールケアの店も＝関西大学千里山キャンパスで

特別展、市民に公開

関西大学かいわい

吹田市

関西大学は11月4日、創立120年を迎える。1886（明治19）年のこの日、大阪市西区に誕生した関西法律学校は、その後校舎を転々とし、大学昇格の1922（大正11）年、吹田市の千里山に来た。以後84年、敷地は約35㍍に拡大し、3万人の学生らが集う。

校内はこの10年、新たな装いの建物や設備が次々と生まれ緑に映える壮麗な校舎群の景観が楽しめる。正門横の総合案内で地図ももらえる。新装の尚文館（大学院棟）、以文館（法科大学院棟）、新凛風館（体育会各部室）、楚文館（博物館など）など、いずれも論語や中書など中国古典から名前が付いている。ただ、今春完成の総合学生会館「凛風館（りんぷうかん）」だけは、愛称募集に入選した学生の案が基だ。館内は誰でも利用でき、桜を植えた屋上に上ると風力発電装置も見学できる。眺めも最高で梅田のビル街が見え、名前通りのさわやかな風が吹いてくる。

正門から左に上った丘に、幹が9株に分かれた吹田市最大のクスノキが立つ。幹回り計12㍍余。吹田市保護樹木第1号。9年前にすいた市民環境会議の平軍二さん（68）らが、市内の古木・大木を調べた。学内の保護樹木10本、保護樹林1件。「第1号はヤマタノオロチを思わせるユニークな形で人気の大木。こうした緑は市民全体の宝です。守り続けてほしい」と話す。

木々の間のあちこちに創像や彫刻が立つ。学内のモニュメントは10個。教養しながら歴史を学べる。楚文館は新たな特別展示「関西大学120年の歩み」を15日から当分の間、市民に公開する。入場無料。

（後藤俊明）

◇次回（16日）は「藤井寺駅かいわい」（藤井寺市）です。

【2006年10月９日（月）朝日新聞（朝刊）31面】

朝日新聞朝刊の「週刊まちぶら」第97号では創立120周年を目前にした関西大学のキャンパス周辺が取り上げられた。関西大学の新たな研究拠点として３月に竣工したセンター棟と、文化遺産として「なにわの伝統野菜」の栽培に取り組むセンターが紹介された。

研究ノート

伊勢長島藩主　増山雪斎の文人交流
――『独楽園賀詞帖』に見る――

有坂　道子（京都橘大学）

はじめに

『独楽園賀詞帖』（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター所蔵）は、伊勢長島城内に新しく造られた庭園「独楽園」に寄題する賀詞集で、時の藩主増山雪斎（一七五四～一八一九）の求めに応じて寄せられた三十七名の詩を収める。詩を寄せたのは京坂で活躍した文人が中心で、十八世紀後半における増山雪斎を軸とした文人交流の様子がうかがえる貴重な資料である。

増山雪斎は名を正賢といい、書画に優れ、詩文や煎茶を能くする文人大名であり、雪斎、長洲、松秀園など多数の号を持つ。宝暦四年（一七五四）に江戸で生まれ、安永五年（一七七六）父の死により二十三歳で伊勢長島藩二万石を継いで五代藩主となった。藩主時代に加番（大坂城の警備を担当する大番の補佐にあたる役）を四度、すなわち安永七年・天明元年（一七八一）・天明三年・寛政元年（一七八九）につとめ、この間在坂している。

好学で雅事を好んだ雪斎は、長島の文化振興に大きな役割を果たした。大坂から十時梅厓を招いて藩儒に迎え、藩校文礼館を再興して新たに孔子廟を設けたほか、南画家の春木南湖を江戸詰の御抱画師とし、長崎に遊学させて来舶清人に画を学ばせるなどしている。また、雪斎と親しかった造酒家で文人・博物家の木村蒹葭堂が過醸事件に巻き込まれた際には、蒹葭堂を領内に呼び寄せ屋敷地を与えて庇護したことはよく知られている。

享和元年（一八〇一）四十八歳で致仕して後は巣鴨の下屋敷に隠棲し、文政二年（一八一九）六十六歳で亡くなった。著作に、書論を述べた『松秀園書談』（寛政五年〈一七九三〉成立）、囲碁に関する『観奕記』（享和三年〈一八〇三〉成立）、煎茶書である『煎茶式』（文化元年〈一八〇四〉刊）、さらに『長洲鳥譜』、『虫豸帖』などの博物画譜がある。[1]

一　賀詞と作者

『独楽園賀詞帖』（図1）は縦三〇・四cm×横二一・八cm、絹地を用いて書かれた漢詩一篇ずつを集めて折帖仕立てとしたもので、外題は無く、『独楽園賀詞帖』の名称を通称としている。現在の装訂になったのがいつかは不明で、おそらく近代に入ってからと推測されるがこの点については後述する。

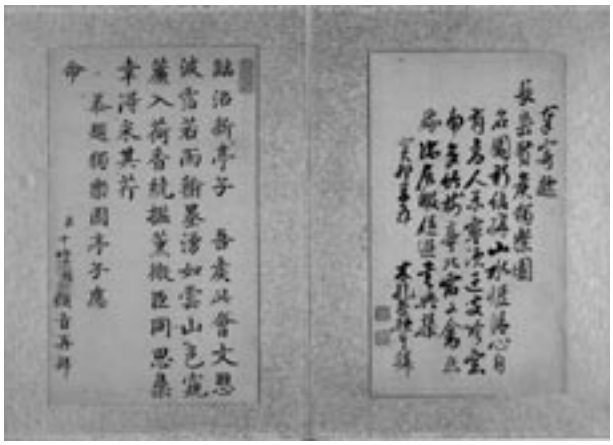


図1　『独楽園賀詞帖』より
木村蒹葭堂（右）・十時梅厓（左）

はじめに、賀詞と作者の略歴を紹介しておきたい。便宜上、巻頭より仮に番号を付し、作者の略歴については『国書人名辞典』（岩波書店）に多く拠った。

［1］柴邦彦

独楽名園裡　四時楽未央　水明観月概　鳥掠対花觴　竹韻寒宵静　蓮香夏晩涼　能客芻雉往　幽意更応長　　右寄題
　独楽園敬応
長島侯命
　外臣阿波国御儒者柴邦彦再拝上

柴邦彦（柴野栗山）……元文元（一七三六）～文化四（一八〇七）
漢学者。享年七十二。讃岐牟礼の人。高松藩儒後藤芝山に学んだ後、江戸に出て林家に入門。明和四年（一七六七）阿波藩儒となり、京都に住み西依成斎・赤松滄洲・皆川淇園らと詩社・三白社を結んだ。天明八年（一七八八）松平定信に招かれて昌平黌の教授となり、寛政異学の禁を実施した。

［2］葛張

別院珍蔵古書法
君侯心画有誰如　竹林多少製毫兎　蓮沼浮沈呑墨魚　西鎮擁旄行数壮　東関述職歳何虚　幾時独楽園亭上　拝灑雲煙興有余　　葛張拝

葛張（葛子琴）……元文四（一七三九）～天明四（一七八四）
漢詩人。享年四十六。大阪の医者橋本貞淳の男。菅甘谷・兄楽郊に古文辞学を学ぶ。京都で医を学んで帰坂、医業の一方で、片山北海が主宰する詩社・混沌社の中心として活躍。頼春水・岡元鳳らと親交。書を能くし、篆刻にも巧みで、笙・篳篥などの音楽も能くした。

［3］岡元鳳

長島君侯独楽園
侯家亭子是仙寰　城裏園成官事閑　満架書編消日日　一窓吟夢繞青山　林花做趣開時落　郡鳥無心去復還　独楽温公師友在　能令着緒出人間
　癸卯夏五　　岡元鳳頓首拝題

岡元鳳（岡公翼）……元文二（一七三七）～天明六（一七八六）
医者・漢学者・本草家。享年五十。大坂に住し、医を業とする。菅甘谷に学んで詩に長じた。宝暦年間、木村蒹葭堂の詩会に参加、のち片山北海の混沌社に加わり、葛子琴・篠崎三島らと交遊。本草物産にも通じた。

［4］片猷

多度山南長島城　芙蓉池館翠簾明　薫風已鮮群黎慍　縹帙殊開独楽情　春駐筆床花五色　雲香芸閣月三更　提封政理心無事　何擬菟裘因老営
　越後庶士片猷頓首再拝謹書

片猷（片山北海）……享保八（一七二三）～寛政二（一七九〇）
漢学者・漢詩人。享年六十八。新潟生まれ。京都に遊学し、宇野明霞に師事。のち大坂に移り、明和二年（一七六五）詩社・混沌社を結成しその盟主となる。門人に木村蒹葭堂・平沢旭山・佐々木魯庵・岡田南山らがいる。

［5］片文貫

卜築新題牓　園亭景趣分　琴書供独楽　詩筆試多文　蓮蝕西池月　鴻穿北嶺雲　拝弦堪甘送　不必歎離群　駐駕消連日　省耕余暇時　烟霞籠松竹　泉石狎鷗麕　古井苔三尺　新花雨一籬　此中幽趣足　不使外人知
　片文貫拝

片文貫（片山弘道）……生没年未詳。片山北海の最初の養子。名、文

貫。字、弘道。号、大観。通称、右門。岡山の人。天明三年（一七八三）はじめごろ北海の養子となるが、同六年中に何らかの理由で関係がとぎれる。(2)

［6］北海江邨

恭奉
命遥寄題
長島侯独楽園
長島建牙地　小亭幽意存　応栽召伯樹　何数辟疆園　林上瑶琴響　壁間香墨痕　非嫌与衆楽　聊此避塵喧
北海江邨綬拝

北海江邨（江村北海）……正徳三（一七一三）～天明八（一七八八）
漢詩人。丹後宮津藩儒。享年七十六。京都の人。福井藩儒伊藤竜洲の次男で江村毅庵の養嗣子。兄は伊藤錦里、弟は清田儋叟。詩社を賜杖堂といい、大坂の片山北海、江戸の入江北海と併せて三都の北海と称された。

［7］伊藤栄吉

恭寄題
長島侯独楽園
邦国原知政理良　名園勝事属時康　花亭月席遊倶遍　馬埒弓場武益彰
沼豁恩魚穏浮泳　林深仙鶴恣翺翔　公余歓予同臣庶　更有図書独楽長
伊藤栄吉拝

伊藤栄吉（伊藤君嶺）……延享四（一七四七）～寛政八（一七九六）
漢学者。享年五十。伊藤錦里の養嗣子。播州北条村の人。京都に遊学し、錦里の女婿となってその跡を継ぎ、福井藩儒となった。

［8］赤松鴻

名園知幾処　先説在東州　花月明林表　山池接案頭　雄風宜避暑　春気可乗秋　閑適有余興　還思桂樹幽
右奉寄題
長嶋侯独楽園　播磨赤松鴻拝草

赤松鴻（赤松滄洲）……享保六（一七二一）～寛政十三（一八〇一）
漢学者。享年八十一。播磨三日月の人。赤穂藩医大川耕斎の養子。京都に出、医学を香川修庵、儒学を宇野明霞・岡竜洲に学ぶ。延享四（一七六〇）病のため致仕。その後は京都で儒学を講じ、晩年は赤穂に帰った。

［9］木孔恭

奉寄題
長嶋賢侯独楽園
名園新結構　山水愜清心　自有高人楽　寧須迂叟吟　窓南多竹樹　亭北宿文禽　想像端居暇　優遊書与琴
癸卯夏五　木孔恭頓首拝

木孔恭（木村蒹葭堂）……元文元（一七三六）～享和二（一八〇二）
商家・文人・博物学者。享年六十七。大坂北堀江で酒造業を営む。本草学を津島桂庵・小野蘭山に、画を大岡春卜・鶴亭・池大雅らに、篆刻を高芙蓉に、詩文を片山北海に学び、混沌社の活動に加わる。書籍・標本類の収集と幅広い交遊で著名。過醸事件により一時増山雪斎のもとに身を寄せたが、のち帰坂し文房具を商った。

［10］十時賜

臨沼新亭子　吾侯此会文　恩波霑若雨　翰墨湧如雲　山色窺簾入　荷香繞檻薫　微臣同思楽　幸得采其芹
恭題独楽園亭子応

命　　臣十時賜頓首再拝

十時賜（十時梅厓）……元文二（一七三七）～文化元（一八〇四）
漢学者・画家・書家。享年五十六。大坂の人。伊藤東所に学ぶ。伊勢長島藩儒に招かれ、再建された藩校文礼館の祭酒となる。寛政二年（一七九〇）長崎遊学、来舶清人の費晴湖・陳養山に書画の技法を学んだ。書は大谷永庵・趙陶斎に学び、詩文・篆刻も能くした。

［11］皆川愿
竹樹名園勝　政間茲予遊　舜琴論六律　晋帖玩雙鉤　魚躍池光動　鹿鳴山色幽　自多賢者楽　何必問鄙叟
右寄題
長島侯独楽園
　平安皆川愿再拝書上

皆川愿（皆川淇園）……享保十九（一七三四）～文化四（一八〇七）
漢学者。享年七十四。冨士谷成章の兄。京都の人。大井蟻亭・三宅牧羊・伊藤錦里らに学ぶ。開物学と称する独自の経学で知られ、多くの門人を擁し、晩年には自邸内に学館弘道館を設けた。また詩文・書画を能くした。

［12］皆川允
園亭真意足　宛類野人居　山翠邀清景　林禽適暇余　琴伝中散曲　鵞換右軍書　不識蓮池裏　幾群呑墨魚
右寄題独楽園応
　皆川允再拝書上
長島侯需

皆川允（皆川篁斎）……宝暦十二（一七六二）～文政二（一八一九）
漢学者。享年五十八。皆川淇園の男。京都の人。父淇園と共に招かれて近江膳所藩主本多氏に講書し、藩校尊義堂の創設に参画。また肥前平戸藩主の求めにより藩士に講説した。のちに丹波亀山藩儒となる。

［13］冨士谷成寿
政暇常無塵俗牽　幽亭燕坐独思玄　緑稠院落煙籠竹　紅浄池塘露涵蓮　檻外松風促琴曲　簷前蘿月入詩篇　北山便合名姑射　封内仍聞報有年
右寄題独楽園応
長嶋侯需
　平安冨士谷成寿再拝謹書

冨士谷成寿（冨士谷御杖）……明和五（一七六八）～文政六（一八二三）
国学者。享年五十六。冨士谷成章の長男。筑後柳川藩京都留守居役。はじめ父に家学を受け、父の没後伯父皆川淇園に学ぶ。和歌を広橋兼胤、日野資枝に学ぶ。言霊倒語説と称される特異な学説を樹立した。文政四年、柳川藩の譴責にあい無禄となる。

［14］皆川成均
緑樹含園景　華亭幽経通　臨池論墨妙　授簡試文雄　首浄遊魚外　山明啼鳥中　玉琴時寸鼓　長此楽南風
右寄題独楽園恭応
長嶋侯需　　平安皆川成均拝稿

皆川成均……小河成均（皆川淇園の弟で、冨士谷御杖の叔父）にあたると思われる。

［15］巌垣彦明
恭応
長嶋藤侯需寄題
独楽園
百里山川烟景清　淵々風教殖民生　遊覧偏慕前賢意　園囿還呼独楽名

平安巖垣彦明拝

巖垣彦明（岩垣竜渓）……寛保元（一七四一）～文化五（一八〇八）
漢学者。享年六十八。京都の人。宮崎筠圃に学んで、のち博士家の清原家に入門し古注学を修め、大舎人となった。また伏原宣条・皆川淇園にも従学した。

［16］清勲

遥寄題

長島侯独楽園

林園近在郡城隈　中用元戎小隊来　竹塢禽啼苦径滑　蓮池月白水亭聞
逍遥独楽郊坰趣　教化誰争周邵寸　況復琴書為政隙　胸懐不敢受繊埃

清勲拝

清勲（清田竜川）……寛延三（一七五〇）～文化八（一八一一）（一説、文化五）漢学者。享年六十二。江村北海の三男。叔父清田儋叟の養嗣子。家学を継ぎ、福井藩儒となった。

［17］篠応道

奉寄題

長島君侯独楽園

美人為政海雲郷　閒暇偏憐野趣長　開苑孤吟供日渉　忘機独楽有年譲
田々荷葉廻池館　裊々花枝払石牀　長陽城中春自秘　何時侍燕酔流觴

篠応道頓首再拝

篠応道（篠崎三島）……元文二（一七三七）～文化十（一八一三）
漢学者。享年七十七。大坂の人。もと商家で家業の傍ら兄楽郊、菅甘谷に師事。混沌社の社友となり、田中鳴門・葛子琴・尾藤二洲・頼春水・頼杏坪らと親交。四十歳で儒者となり、家塾梅花書屋を開いた。

［18］松本慎

雄鎮東南勝　名園擬洛陽　竹稠高日薄　蓮綻脱風香　清暇臨池静　妙音流
水長　応追真率会　千乗自相忘

寄題

松本慎拝書

長島侯独楽園

松本慎（松本愚山）……宝暦五（一七五五）～天保五（一八三四）
漢学者。享年八十。京都の人。学を皆川淇園に受け、のち大坂で教授、詩文を能くした。

［19］中島漁

恭賦一律寄題

長島侯独楽園

南面視朝罷　逍遥林下風　図書高閣静　花竹細泉通　交友同迂叟　鳴禽
伴酔翁　閑園時独座　楽意属年豊

亀山儒学中島漁拝書

中島漁（中島雪楼）……延享二（一七四五）～文政八（一八二五）
漢学者。享年八十一。丹波亀山藩儒。岡白駒・那波魯堂に学び、京都で講説を業とした。亀山藩儒となり、以後藩主五代にわたって侍講を兼ねた。禄百石。『史徴』校訂の功を賞され五十石加賜された。

［20］浄

奉寄題　長島侯独楽園

新築名園五瀬辺　君侯勝事遠相伝　西池菡萏南林竹　暮嶺雲霞朝市烟　為
政城中甘独楽　読書窓下友群賢　長洲預卜菟裘地　一代風流無所牽

僧浄拝

浄……人物詳細不明。（印刻は「竺二」「浄」）

［21］**秦修美**

奉寄題独楽園
侯国風流本数奇　城頭曾見万年枝　内新荘弄月華在　応賦敬亭独坐詩
浪華　秦修美拝

秦修美（秦主膳）……医家。大坂天満市之町に住す。

［22］**黄符**

君侯機務暇　遊息此亭中　羊酪鱠曇貯　牙籤棟宇充　芰荷開一水　花竹繞
千叢　好是遺軒冕　蕭然独嘯風　寄題
独楽園　栄郡黄符

黄符（横尾紫洋）……享保十九（一七三四）～天明四（一七八四）
漢学者。享年五十一。肥前佐賀藩儒。佐賀郡川久保村の人。佐賀春日山高城寺の僧陽山に学び、のち長門の滝鶴台に従学、帰国して藩に仕えた。安永三年（一七七四）上京して九条家の侍講となり、邸内に寓居、帰国を促す藩命に従わなかったため捕えられ、死罪となった。

［23］**浄芳**

司馬温公独楽園　擬戎中嶋感主恩　琴書暇日会文雅　千歳風流今似存
九島蘭洲芳樑寿

浄芳……大坂九条島にある九島院の住持。詩文を能くした。

［24］**図南**

奉寄題独楽園
城主典雅最翩々　勝地新営独楽園　聴事閑暇遊燕日　琴書更慕昔人賢
月山叢図南拝

図南……人物詳細不明。

［25］**神吉世敬**

聞説高亭望不窮　使君幽興四時同　芰荷水暖遊魚出　松柏林深呦鹿通　秋
色入影叢桂緑　春風所酔百巻紅　還知富広閭閻美　自在悠々独楽中
右寄題
長島侯独楽園　赤穂　神吉世敬再拝書上

神吉世敬（神吉東郭）……宝暦六（一七五六）～天保十二（一八四一）
漢学者。享年八十六。赤穂藩医神吉泰常の男。赤松滄洲に学び、各地を遊学して儒・医を修めた。帰国して観善社を開塾、藩主森忠賛の侍医と藩校博文館の督学を兼ねた。

［26］**滕世衡**

風流愛幽意　開室接山雲　国政知無事　侍臣或好文　揮毫転北極　度曲迎
南薫　高臥多詩賦　亦教吾輩聞
浪華滕世衡頓首再拝

滕世衡（藤井樗亭）……宝暦十（一七六〇）～文化七（一八一〇）
書家・医者。享年五十一。大坂の人。片山北海・頼春水に学んで詩文を能くし、書法を趙陶斎に学ぶ。木村蒹葭堂らと交遊があり、俳諧も能くした。

［27］**高昶**

寄題
長陽侯独楽園
政夢多余暇　園亭召野甸　芻蕘随径入　雉兎隔歳賦　時学蘭亭帖　更張流
水弦　高情喜蕭散　何必玩林泉　御津高昶拝草

高昶（高安蘆屋）……生年未詳、寛政年間没。書家。大坂の人。寛政四・五年頃まで富商であったが、零落した。菅甘谷、中井竹山に従学し、書を能くした。

［28］**曾谷学川**

環海府城千里流　他山秀色人長洲　最憐新築誇烟雨　満樹清風六月秋

奉寄題

長島賢侯閣下独楽園

浪華寓生曾之唯頓首拝

曾谷学川……元文三（一七三八）～寛政九（一七九七）

漢詩人・篆刻家。享年六十。京都の人。儒学を片山北海、篆刻を高芙蓉に学ぶ。大坂に住み、混沌社に参加。

［29］**野紹順**

身禄深衣薄世栄　園名独楽養幽情　此心不管無人識　欲倣迂者早解縷

右寄題

長嶋侯独楽園

野紹順拝草

野紹順……人物詳細不明。

［30］**今枝㬎**

名園依勝概　独楽愜幽期　花暖徵歌処　竹深対局時　茶儀閑裡老　觴政興来奇　坐嘯風流趣　優遊歳月遅　右寄題

独楽園謹応

長嶋侯命

平安今枝㬎再拝上

今枝㬎……『平安人物志』にあがる医家の今枝世顕（栄顕）にあたるかと思われる。

［31］**山敬之**

奉寄題

長嶋賢侯独楽園

聞説名園独楽遊　城中為築小僊楼　猗々緑竹坐来興　灼々紅蓮随処幽

東海風雲凭檻起　他山煙靄入杯流　知君政暇耽文事　不譲当年柳々州

山敬之拝

山敬之……人物詳細不明。

［32］**中邨健**

新築園亭照勢州

君侯運意自風流　牙籤玉軸芸窓裡　綺席金樽月沼頭　衆楽元非先独楽　人憂那得比吾憂　遥知置酒招賢士　酔後揮毫躭唱酬

奉寄題

長島侯独楽園　浪華中邨健拝草

中邨健（中村健）……漢学者。大坂の人。

［33］**崗謙**

蓁々場圃近経営　春日喈々百鳥声　樹擁三山薬欄馥　月浮五瀬羽觴清　縹嚢書活竜蛇影　翠嶼風飄蛺蝶情　揮筆吟詩千古事　怡然　独楽謝宣城

崗謙再拝

崗謙……人物詳細不明。

［34］**関祐**

藩侯休沐地　嘉植愛松筠　山為名園秀　亭依碧沼新　停絃聴野鳥　飛翰賜家臣　長島濬（浚力）波外　予遊入夢頻

右寄題

長島侯独楽園

関祐拝稿

関祐……人物詳細不明。

［35］**長崎天雨**
奉寄題
長嶋賢侯独楽園
名園独在彼
藩侯　卜築封中拠二州　多度山雄俯環水　長洲城壮涌層楼　記今麗筆温公
楽　政旧瑶琴単文遊　鐘愛風流書画富　夜称彩鷁米家舟
癸卯夏五　　関谷　張天雨拝草

長崎天雨……大坂の人。詩文を能くした。

［36］**士綽**
遥憶名園勝　琴書事々宜　芰荷薫綺席　松柏映清池　多度四時翠　醴泉千
古奇　夕陽長臥閣　高興入雄詞
謹賦　　浪華士綽拝具
長島侯独楽園応高徴

士綽……人物詳細不明。

［37］**徳竜**
奉寄題
長島侯独楽園
多度当城秀　白雲連海淮　松巣千歳鶴　池隠万齢亀　倚雨風生処　褰簾月
出時
君侯何独楽　日夜在新詩
　　越後十二童釈徳竜九拝

徳竜……明和九（一七七二）～安政五（一八五八）
真宗僧。享年八十七。越後水原の人。高倉学寮、また諸山の碩学について学ぶ。天明三年（一七八三）十二歳の時京坂に遊び、同郷の片山北海を訪問。享和元年（一八〇一）無為信寺の住職となったが数年で退職、学寮に戻って布教や教育に専念した。

以上が、賀詞の内容とそれぞれの作者の略歴である。

二　賀詞の作成と独楽園

次に、賀詞の成立に関し述べておきたい。賀詞の作成契機は、「勝地新営独楽園」（［24］）の句に明らかなように、長島城内に新しく独楽園が造成されたのを受けてのことであり、「長島侯命」（［1］［30］）や「長島侯需」（［13］～［15］）の言葉が示す通り、増山雪斎の依頼によって賀詞が詠まれていることがわかる。「独楽園」の園名は、北宋の司馬光が洛陽での閑居時代に造園した「独楽園」をふまえている。

独楽園が造られた時期ははっきりしていないが、［3］［9］［35］の詩に記される「癸卯五月」を手掛かりにすれば、「癸卯」すなわち天明三年（一七八三）五月までに長島城内に独楽園が完成し、雪斎の求めに応じて各人から賀詞が寄せられたと考えられる。

現在、長島城の跡地は桑名市立長島中学校となっており、往時の姿をうかがうことは出来ないが、長島藩儒となった十時梅厓の著述とされる『長島志』[3]の中に、わずかながら独楽園について言及がある。

……城は西外面村に在り。東門を表と為し、西門を裏と為す。中央に殿堂庁衙有り。殿の西北に蕉亭有り〔公、芭蕉を四面に植え、以て憩息の処と為す〕、子城の北隅に独楽園有り。亭有り、迎香と名づく〔公が記したり、因って并記す〕、一時四方の名士題を寄せる者多し。殿南に門有り、黒門と名づく。黒門を距てること十歩、楼有り月観と名づく。月観を距てること数十歩、楼有り巽と名づく。其の他譙楼四、門五、東西に散置す〔水門二か所数に入れず〕、蓋し周匝千丈に盈たず。……

（原漢文。〔　〕中は割注。傍線は筆者による）

この記述によって、独楽園は長島城の子城の北隅にあり、園内には迎香

と名付けられた亭があったことがわかる。そして、一時四方の名士の題を寄せる者が多かったというのは、『独楽園賀詞帖』に収められている賀詞の篇々がまさにそれにあたるであろう。園内の迎香亭については、別の史料[4]に、

迎香亭―迎香書斉、長島城中有閑園名独楽園、中構小斉方丈余計、置詩文集諸子百家風流之集書、喬木覆屋上池水流窓前

とあって、詩文集や諸子百家、風流の書を置いた書斎であったことが知られる。

江戸期の長島城を描いた城絵図[5]は、作成年代が明確でなく独楽園の位置を断定することができないが、国立公文書館内閣文庫が所蔵する「勢州長島城図」（図2）には本丸の東南にある下屋敷内に「泉水」が描かれており、これが独楽園にあたるのではないかと推定される。

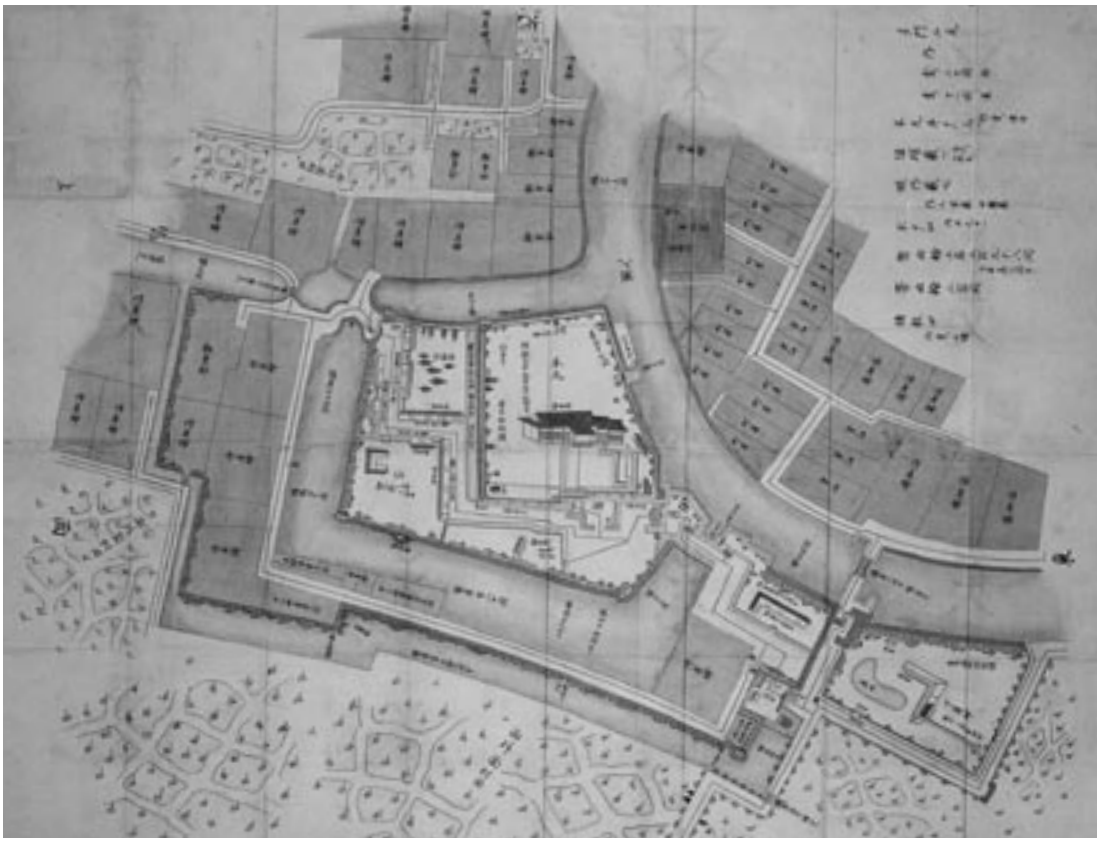


図2　勢州長島城図（内閣文庫所蔵）

三　独楽園に寄せる賀詞

さて、実は独楽園に寄題する賀詩は、『独楽園賀詞帖』に収められた詩以外にも存在する。現在までに確認できたものは、以下の五篇である。

①細合斗南

奉寄題長島侯独楽園
長島城開滄海瀕　楽山還属世家仁　読書平日課師友　観政移風和士民　綺席竜蛇萃翰走　芳園魚鳥玉琴親　子遺如定帰田計　余沢或蒙封土隣

『合子天明後稿』一巻・詩録（寛政十年〈一七九八〉刊）所収

細合斗南……享保十二年（一七二七）～享和三年（一八〇三）
漢学者・漢詩人・書家。享年七十七。伊勢河曲郡江島の人。大坂へ出て菅甘谷に学び、清の考証学を修める。詩を能くし混沌社に参加、また学半塾を開いて儒・書を教えた。天明六年（一七八六）から高田専修寺の文学。

②**白井重行**

寄題長島侯独楽園

大海遥循長島廻　楼台高出彩雲開　閑居不厭繁酬応　藻思移観坐蘚苔　園林春満黄鸝囀　琴瑟調成白鶴来　知是神工饒楽地　外臣何日夢徘徊

『東月集詩』（成立年未詳）所収

白井重行……宝暦三年（一七五三）～文化九年（一八一二）

庄内藩士・漢学者。享年六十。はじめ加賀山桃李に、ついで江戸で松崎観海に学ぶ。郡代を勤め、農政改革を行う。文化二年（一八〇五）藩校致道館を創設し、祭酒兼司業となる。同五年中老。

③**渡部種徳**

寄題長島侯独楽園

遙聞新館倚園林　想見琴書楽抱襟　座久閑雲生遠岫　地幽緑径穏鳴禽　盤旋豈仮追陪侶　逸興時吟大雅音　既誦輿論忻慕切　献芹聊擬野人心

『荘内先賢詩選・前集』（致道館、『自適集』シリーズ第十二輯[6]）所収

渡部種徳……生没年に二説あり。庄内藩士。儒を以て聞こえ、命により藩中の子弟を教えた。詩文に長じる。生没年について、『荘内先賢詩選・前集』では寛政三年（一七九一）没、年七十三（すなわち享保四年〈一七一九〉生まれ）とするが、『新編庄内人名辞典』（一九八六）では墓碑の碑文などから寛延三年（一七五〇）生、天明二年（一七八二）十二月八日没としている。後者を採れば、独楽園への賀詞は天明三年以前に詠まれていたことになる。

④**重田道樹**

寄題長島侯独楽園

長島浮烟多度雲　晩風吹払海天分　座右図書映東壁　亭中杯酒対西曛　弾琴竹苑禽来舞　洗筆蓮池鵞作群　園成総厭今時客　更有前賢能楽君

『荘内先賢詩選・前集』（致道館、『自適集』シリーズ第十二輯）所収

重田道樹……宝暦二（一七五二）～文化八年（一八一一）

庄内藩医。享年六十。庄内藩医重田道達の長子で、寛政元年奥医、同十一年侍医。若年より書を能くし、漢籍に詳しく、藩校致道館が設立されると助教に任ぜられて司業を兼ねた。

⑤**市河寛斎**

寄題長島侯独楽園〔長島隷伊勢〕

使君風尚在園池　暇日逍遥興可知　煙水晴分東海道　閑雲晩擁北山陲〔園北有多度山〕　月窺墜露煎茶夜〔劉夢得試茶歌木蘭墜露香微似〕花掩来禽展帖時〔用王右軍十七帖中事〕　此際独遊多楽事　不須招隠賦新詩

（〔　〕中は割注）

『寛斎摘草』巻之三・七言律（天明六年〈一七八六〉成立）所収

市河寛斎……寛延二（一七四九）～文政三（一八二〇）

漢詩人。享年七十二。嗣子、米庵。江戸生まれ。林家に入門し、天明三年（一七八三）湯島聖堂の啓事役となるが、同七年辞職。詩文に優れ、江湖詩社を興し多くの詩人を育てた。寛政三年（一七九一）富山藩儒となる。

①の細合斗南は、大坂の著名な儒学者で混沌社の社友であり、賀詞が『独楽園賀詞帖』に収められてもおかしくないが、何らかの理由で洩れたようである。

②～④にあげた白井重行、渡部種徳、重田道樹の三名はいずれも庄内藩の文人である。雪斎はこの三人の他にも庄内藩の藩士・文人たちと交流を持っており、彼らが江戸在勤の折に知り合って交遊が始まったものと思われる[7]。次に挙げる史料[8]は、庄内藩の文人・国学者である池田玄斎（安永四年〈一七七五〉～嘉永五年〈一八五二〉）が、同じく庄内藩の文人で琴の名手として知られる相良儀一（宝暦七年〈一七五七〉～文化元年〈一八〇四〉）の略伝を書いたものであるが、

（相良儀一は）一とたび東都に扈従して南上せしより、真龍禅師に随身して琴を学び、長嶋侯に詩を聞き、大いに発明するところありて、（中略）長嶋侯の書画、大泉（庄内藩）に伝ふるは皆淑卿（相良儀一）のたまものなり

（（　）内は筆者注）

とあって、雪斎が庄内藩の文人と深いつながりを持ち、庄内藩の文化に大きな影響を与えていた様子を知ることが出来る。[9] 上記三名の独楽園への賀詞は、こうした交遊を背景に生まれたものである。彼らの詩が『独楽園賀詞帖』に収められていないのは、『賀詞帖』が当時京坂にいた文人を中心にまとめられていることによるものだろう。⑤の市河寛斎も江戸の人であり、『賀詞帖』に入らなかったのは同様の理由と思われる。

参考までに、表1に独楽園への賀詞が寄せられた天明三年の、作者各人の居所と年齢をあげておく。

ところで、⑤にあげた市河寛斎の曾孫にあたる市河三陽が著した『市河寛斎先生』の中に、『独楽園賀詞帖』の成立について示唆を与える重要なことがらが記されているので、次に『賀詞帖』そのものの成立について考えたい。

四　『独楽園賀詞帖』の成立

市河三陽（明治十三年〈一八八〇〉～昭和二年〈一九二七〉）の『市河寛斎先生』は、寛斎の事績を年譜風にまとめた書であるが、天明三年のところに以下の記述がある。[10]

安永五年に家督せる伊勢長嶋侯増山河内守正賢は、性文雅を好み詩画を善くせり。此頃（天明三年）諸方の詞人に嘱してその独楽園に寄題する詠を聚む。予（市河三陽）前年その真蹟三十六葉を寓目してその詩を抄し置けり。紈絹に書しその大さ普通詩箋の如し。後荘内藩白井重行の詩を得、寛斎摘草を閲するに及びて先生も亦応募の一人なるを知る。尚逸するものもあらん。茲には落款に見えたる氏名のみを挙ぐ。正賢は後の雪斎君選にして此年三十歳。

（（　）内注および傍線は筆者による）

つまり、市河三陽は実際に独楽園に寄題する詩を目にしているのだが、注目すべきはそれが「三十六葉」だったということである。既に示したように、『独楽園賀詞帖』は三十七の賀詞を収めている。三陽は右の文に続け

表1　天明三年の居所・年齢

増山雪斎	長島・大坂	30
〔1〕柴野栗山	京都	48
〔2〕葛子琴	大坂	45
〔3〕岡公翼	大坂	47
〔4〕片山北海	大坂	61
〔5〕片山弘道	大坂	
〔6〕江村北海	京都	71
〔7〕伊藤君嶺	京都	37
〔8〕赤松滄洲	京都	63
〔9〕木村蒹葭堂	大坂	48
〔10〕十時梅厓	大坂	47
〔11〕皆川淇園	京都	50
〔12〕皆川簣斎	京都	22
〔13〕冨士谷御杖	京都	16
〔14〕皆川成均	京都？	
〔15〕岩垣竜渓	京都	43
〔16〕清田竜川	京都	34
〔17〕篠崎三島	大坂	47
〔18〕松本愚山	京都	29
〔19〕中島雪楼	京都	39
〔20〕浄		
〔21〕秦主膳	大坂	
〔22〕横尾紫洋	京都	50
〔23〕浄芳	大坂	
〔24〕図南		
〔25〕神吉東郭	赤穂？	28
〔26〕藤井樗亭	大坂	24
〔27〕高安蘆屋	大坂	
〔28〕曾谷学川	大坂	46
〔29〕野紹順		
〔30〕今枝暲	京都？	
〔31〕山敬之		
〔32〕中村健	大坂	
〔33〕崗謙		
〔34〕関祐		
〔35〕長崎天雨	大坂	
〔36〕士綽		
〔37〕徳竜	大坂	12
①　細合斗南	大坂	57
②　白井重行	庄内※	31
③　渡部種徳	（庄内）※	
④　重田道樹	庄内※	32
⑤　市河寛斎	江戸	35

※当時の正確な所在地は確認できない。また、渡部種徳は故人の可能性あり。

て三十六葉の氏名を掲げているので確認してみると（（　）および改行は原文通り）、

柴（野）邦彦　皆川　愿　十時　賜
片（山）猷　皆川　允　皆川成均
江邨　綬　松本　慎　篠（崎）応道
富士谷成寿　蘭州　芳　岡　元鳳
清（田）勲　赤松　鴻　葛　張（ママ）勝　世衡
黄　道符　伊藤栄吉
中村　健　曾　之唯　中島　漁
片（山）文貫　僧　浄　木（村）孔恭
今枝　顕　図南　高　祉
張　天雨　神吉世敬　岡　謙
野　紹順　関　裕　士綽
山　敬之　秦　修美　釈　徳竜

図３　『独楽園賀詞帖』より　巌垣彦明（右）

三陽が挙げる右の三十六名は全て『独楽園賀詞帖』の作者と合致しているが、唯一、『賀詞帖』の［15］巌垣彦明（岩垣竜渓）の名が無いことがわかる。三陽は右のように三十六葉の作者名を挙げ、かつその詩を書き留めたといっており、単なる数え間違いではないことは明らかである。従って、三陽が見たものには巌垣彦明の詩が含まれておらず、後の段階で加えられて『独楽園賀詞帖』が作られたと考えられよう。三陽の記述では、彼が見たものがどのような体裁だったのかよくわからないが、作者名の順も『独楽園賀詞帖』とは異なっており、少なくとも現在の折帖のかたちではなかったことは間違いない。

そうすると、今の帖仕立てになったのはいつのことであろうか。時期の特定は困難だが、三陽の没年（昭和二年）からすれば昭和に入って以降と考えるのが妥当かと思われる。いずれにしても、独楽園の新造を機に増山雪斎のもとには四〇を超える賀詞が集まり、そこから『独楽園賀詞帖』が生まれることになったのである。

おわりに

ここで改めて独楽園に賀詞を寄せた作者たちを見てみよう。

十八世紀後半は、古文辞学の流行を受けて作詩文が盛んとなった時期であり、三都を中心に詩社を結成して文人活動をおこなう者も多く現れた。賀詞の作者たちもみな、作詩文を能くする者たちである。大坂を代表する詩文結社・混沌社の盟主である片山北海（［4］）をはじめ、社友の葛子琴（［2］）、岡元鳳（［3］）、木村蒹葭堂（［9］）、篠崎三島（［17］）、細合半斎（［①］）、曾谷学川（［28］）、京都で賜杖堂を開いた江村北海（［6］）、三白社を作った柴野栗山（［1］）、赤松滄洲（［8］）、皆川淇園（［11］）、江戸で江湖詩社を興した市河寛斎（［⑤］）ら、詩社を結んで積極的に作詩文活動をおこなった者たちが多い。このうち混沌社は明和二年（一七六五）に結成され、独楽園の賀詞が詠まれた天明三年は活動の最盛期にあたっていた。盟主の片山北海は赤松滄洲とは宇野明霞の同門であり、葛子琴、岡元鳳、篠崎三島、細合半斎は古文辞学派の菅甘谷に学び詩社に参加した者たちで、片山北海を師とする木村蒹葭堂は、作詩文を中心とした蒹葭堂会の活動を経て混沌社の創立に加わった人物である。木村蒹葭堂が柴野栗山や皆川淇園、江村北海らと広く交遊していることからもわかるように、相互の交流は詩社内部にとどまるものではなかった。

また、片山弘道（［5］）は片山北海の養子であるが、作者同士に親子や親戚のつながりも見受けられる。伊藤君嶺（［7］）、清田竜川（［16］）（以

上江村北海と）、皆川篁斎（[12]）、冨士谷御杖（[13]）、皆川成均（[14]）（以上皆川淇園と）がそうである。加えて皆川淇園は、伊藤君嶺の義父伊藤錦里が師にあたるという関係もある。

作者同士が師弟の関係にある者には、皆川淇園とその門下の岩垣竜渓（[15]）、松本愚山（[18]）、赤松滄洲と門下の神吉東郭（[25]）、片山北海と門下の藤井樗亭（[26]）、曾谷学川、木村蒹葭堂などが挙げられる。藤井樗亭は書を趙陶斎に学んでいるが、趙陶斎は増山雪斎の書の師でもあった。そしてその陶斎に従って雪斎のもとに出入りしたことがきっかけで、十時梅厓（[10]）は長島藩儒に登用されている。菅甘谷門であった高安蘆屋（[27]）も、書家として知られている。

亀山藩儒をつとめた中島雪楼（[19]）は『雪楼詩鈔』のある詩文家であり、同じ亀山藩儒には皆川篁斎も就いている。横尾紫洋（[22]）は赤松滄洲や高芙蓉と交遊があったが、高芙蓉は印聖と称された篆刻家で、葛子琴や曾谷学川、柴野栗山、木村蒹葭堂らは芙蓉に学びまた交遊した人びとである。片山北海と同郷の徳竜（[37]）はたまたま京坂に来遊していた巡り合わせと思われる。

秦修美（[21]）、浄芳（[23]）、中村健（[32]）、長崎天雨（[35]）らは、大坂の人で漢詩文をたしなんだ文人というほどしか分からず、経歴が明らかでない浄（[20]）、図南（[24]）、野紹順（[29]）、今枝熙（[30]）、山敬之（[31]）、崗謙（[33]）、関祐（[34]）、士綽（[36]）についてはさらに不明であるが、作者たちは詩文に優れた文人としてある程度は相識であったと思われる。

『独楽園賀詞帖』全体を通して見ると、作者の並び順は比較的関係の近い者どうしを集めているように思われる。しかし一方で、個々人が増山雪斎といつ、どのように知り合い、どれほどの交遊を持ったかについては明らかでない点が多い。

雪斎は天明三年以前にも加番として大坂に赴任しており、そうした機会に京坂の文人の名を聞き、接することがあったはずであるが、賀詞の作者は以前から交流のあった文人ばかりではないようである。例えば、木村蒹葭堂はこの賀詞の作成がきっかけとなって雪斎との交遊が始まったと推測される一人である。[11]『蒹葭堂日記』に現れる雪斎の記事を見ると、天明三年以後に親しい交際がうかがえるからである。また、雪斎に招かれて長島藩儒となった十時梅厓については、この賀詞において自らを「臣」と表現していることから、従来言われている天明四年よりも仕官時期が早まると考えられる。

雪斎と作者個々との関係は今後さらに検討すべきであるが、『独楽園賀詞帖』は、天明三年当時の京坂で詩文において活躍していた文人のつながりを具体的に示すとともに、独楽園の新造に伴う賀詞の作成が、雪斎と京坂の文人との新たなつながりを生み出す契機になったと考えられよう。

注

（1）山口泰弘「増山雪斎の中国趣味」（『江戸の風流才子　増山雪斎展』図録、三重県立美術館、一九九三）。

（2）多治比郁夫「片山北海年譜」「同補訂」「片山北海の家庭生活」（『大阪府立図書館紀要』六・七・十五号、一九七〇・一九七一・一九七九）。

（3）本史料の成立は、『長島町誌』上巻（長島町教育委員会、一九七八、一四五頁）によれば、天明四年（一七八四）ごろとされる。

（4）『長島町誌』（前掲注3）には、当時の城中の状況を知る史料として「寛政六年（一七九四年）雪斉（ママ）勝賞書千松秀園の議語にある拓本」があげられている。この史料の所在を確認できていないが、『長島町誌』の翻刻（上巻、一四六頁）に従い該当部分を示した。

（5）長島城絵図としては、①『長島町誌』上巻一三六頁に掲載される「長島城図」（模写。原図は長島中部小学校蔵）、それとほぼ同図の東京大学史料編纂所所蔵「長島城図」（長島村山内熊三蔵本の写）と、②内閣文庫所蔵「勢州長島城図」（「日本分国絵図」のうち）の二種があり、いずれも詳しい作成年代が不明である。

（6）現在入手困難な本書について、関係部分を複写下さった致道博物館犬塚氏に感謝申し上げる。

（7）坂本守正『瘞琴碑について』（荘内人物史研究会、一九八一）四二頁。

（8）同右、四〇～四一頁。

（9）池田玄斎の随筆『弘采録』（酒田市立光丘文庫所蔵）は、全一三九冊に及ぶ膨大な文人記録であるが、その三五冊目に「増山侯の御事」があり、玄斎が相良儀

一から聞いた話として、儀一が初めて雪斎のところへ行った時の様子が次のように記されている（　）内は筆者注）。

初而参候節、御書斎へ扣（控）候様御取次先達ニて入見候へハ、不残唐風の御坐敷ニて亀甲の石を敷、あたりハシツクヒ（漆喰）ニ而殊之外奇麗也、長押ニは唐画山水花鳥の額或は硝子の蛮画等色々の珍画を掛置たり、助右衛門（相良儀一）には円坐を敷せ夫々坐したり、増山様は曲禄（衆）へ御腰懸させられ色々の御物語有之、御吸物御酒も出たり、器物は勿論箸の類まて皆華物ニ而結構至極の事共也、極御懇意の御方ニは女中も不残唐の衣服ニて当時清朝の風俗を擬し裾の広き袴を着御酌に出候と也、助右衛門は初而の事ゆへ御給仕は御近習ニてありし

右の記事からは雪斎の相当な中国趣味が見て取れる。玄斎はこの他に、浪費など雪斎の芳しからぬ行跡にも言及しているが、山水画に関して雪斎を高く評価し、「山水の画ハ此侯（雪斎）と其臣南湖（長島藩の御抱画師である春木南湖）にと、めたり、（谷）文晁等か及所にあらす、玄斎常に慕ふ処にして近来の名家と称すへし」と書いている。

（10）引用は『復刻市河寛斎先生』（あかぎ出版、一九九二）による。本復刻版は、「三省堂『書苑』に連載された市河三陽氏の遺稿・萬機校による「市河寛齋先生」に市河三次氏が再校を加えコピーで私家版として合本としたものを原本として復刻したもの」（同書あとがきより）である。

（11）有坂道子「増山雪斎と木村蒹葭堂」（『混沌』三〇号、二〇〇六）

資料紹介

大阪の河川と海港の文化と文学（稿）

――地域学・地域文学論資料収集の一作業――

鶴崎　裕雄（帝塚山学院大学名誉教授）

序　章　大阪の河川
第一節　本稿の目的
第二節　河川法と大阪府下の主な河川
第一章　水の国・水の都
第一節　摂河泉―河内湾から河内低地へ―
第二節　難波と上町台地
第二章　淀川―都鄙を結ぶ水運―
第三章　神崎川
第一節　江口
第二節　神崎
第三節　大物
第四章　旧淀川
第一節　難波津
第二節　大川
第三節　東横堀・道頓堀
第四節　木津川
第五章　住吉津
第一節　「八代集」の住吉・住之江の歌
第二節　住吉・住之江の物語（散文）
第六章　旧大和川
第一節　寝屋川・深野池
第二節　第二寝屋川にまとめられた旧大和川
第三節　鴻池新田と新田開発
第七章　堺と大和川
第一節　堺津
第二節　新大和川の開削
終　章　大阪の特徴を探って―反省と希望―

序章　大阪の河川

第一節　本稿の目的

平成一三年、私は関西大学大学院で「地域文学論」という授業を担当することとなった。それまでの「文学史」とか「中世文学」といった授業とは違って、あまりなじみのない授業の講座名である。私なりに「地域文学論」について考えてみた。それは地域に関わる文化・文学の研究なのであるが、方法として歴史を縦軸に、一定の地域の文化・文学を論ずることとした。

さらに「地域」という言葉を特徴付けるために比較文化・比較文学と対比することにした。比較文化・比較文学は、英語やフランス語・中国語といった他言語による異文化や外国文学を比較する研究、それもただ比較するだけではなく、むしろ異文化・外国文学間の共通点を探ろうとする学問である。そこで、比較文化・比較文学と対比するために、日本語による共通文化・共通文学の地域差、地域的特徴を探ることに地域文化・地域文学論の目標を定めることとした。つまり「共通」ではなく、「相違」を求めるのである。

かくしてこれまでに私が扱った地域は、南河内・泉州を中心とした大阪南部、和歌山県下、熊野地方などであった。加えて、昨年（平成一八年）秋、尼崎市教育委員会より尼崎の大物浦で室町幕府の管領細川高国が自刃した大物崩れについての講演を頼まれたことから、尼崎を河口とする神崎

川の地域文学、さらに大阪府下の海港・河港の文化・文学へと発展することとなった。今回、『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2006』への執筆を機会に、大阪府下の河川・港湾の文化・文学の資料収集に重点を置き、資料集をまとめてみようというのが本稿の目的である。なお、終章に記すように、自分としてはまだ充分に資料収集が終わっていないので、（稿）を付すことにした。

引用資料には読みやすいように句読点や送り仮名をかなり私に変更した箇所が多い。そのため引用資料の出典を明示すべきであるが、煩雑を避けて割愛した。

参考文献として『大阪府史』『新修大阪市史』『堺市史』はじめ、多くの地方自治体史のほか、『大阪府の地名』（平凡社）・『国史大辞典』（吉川弘文館）・『日本古典文学大辞典』（岩波書店）に依るところが大きい。

第二節　河川法と大阪府下の主な河川

それでは大阪府下には、どのような河川があるのであろうか。その前に、河川の法的根拠、法的基準となる『河川法』について見ておきたい。

（1）『河川法』

『河川法』は、明治維新以後、統一的な治水行政が可能となり、明治六年（一八七三）「河港道路修築規則」により河川の管理・費用の分担が規定された。次に明治二九年（一八九六）河川法が公布された。旧河川法と称されるものである。これは治水に重点が置かれ、河川利用には伝統的な農業用水が優先され、鉄道の未発達の時代なので、通船・河川運送が重視された。新淀川の開削もこの旧河川法の公布による。

その後の資本主義による近代産業の発達とともに、水車や蒸汽罐、さらに水力発電の利用が求められ、旧来の農業・漁業・河川運送・筏流しなどとの河川利用の競合・紛糾が興った。大正年間（一九一二～二六）から河川法改正が唱えられたが、地域・業種・官庁間の利害対立があり、改正は進まなかった。太平洋戦争後、水力発電はじめ、工業用水・都市用水・鉱工業排水・生活排水・水質汚染など新問題が生じ、昭和三九年（一九六四）になってやっと現行の河川法が制定され、四〇年施行された。

この河川法では、重要水系（一級河川）は建設省（国交省）の直接管理と費用負担とし、二級河川は都道府県に委任している。本稿も現行の河川法を念頭に置いて稿を進めたい。

資料1『河川法』　施行　昭和四〇年（一九六五）四月一日

第一章　総則

（目的）

第一章　この法律は、河川について、洪水、高潮等による災害の発生が防止され、河川が適正に利用され、及び流水の正常な機能が維持されるようにこれを総合的に管理することにより、国土の保全と開発に寄与し、もつて公共の安全を保持し、かつ、公共の福祉を増進することを目的とする。

（河川管理の原則等）

第二条①　河川は、公共用物であつて、その保全、利用その他の管理は、前条の目的が達成されるように適正に行なわれなければならない。

②　河川の流水は、私権の目的となることができない。

（河川及び河川管理施設）

第三条①　この法律において「河川」とは、一級河川及び二級河川をいい、これらの河川に係る河川管理施設を含むものとする。

②　この法律において「河川管理施設」とは、ダム、堰、水門、堤防、護岸、床止めその他河川の流水によつて生ずる公利を増進し、又は公害を除却し、若しくは軽減する効用を有する施設をいう。ただし、河川管理者以外の者が設置した施設については、当該施設を河川管理施設とすることについて河川管理者が権原に基づき当該施設を管理する者の同意を得たものに限る。

（一級河川）

第四条①　この法律において「一級河川」とは、国土保全上又は国民経済上特に重要な水系で政令で指定したものに係る河川（公共の水流及び水面をいう。以下同じ。）で建設大臣が指定したものをいう。

② 建設大臣は、前項の政令の制定又は改廃の立案をしようとするときは、あらかじめ、河川審議会及び関係都道府県知事の意見をきかなければならない。

③ 建設大臣は、第一項の規定により河川を指定しようとするときは、あらかじめ、関係行政機関の長に協議するとともに、河川審議会及び関係都道府県知事の意見をきかなければならない。

④ 前二項の規定により関係都道府県知事が意見を述べようとするときは、当該都道府県の議会の議決を経なければならない。

⑤ 建設大臣は、第一項の規定により河川を指定するときは、建設省令で定めるところにより、水系ごとに、その名称及び区間を公示しなければならない。

⑥ 一級河川の指定の変更又は廃止の手続は、第一項の規定による河川の指定の手続に準じて行なわれなければならない。

（二級河川）

第五条① この法律において「二級河川」とは、前条第一項の政令で指定された水系以外の水系で公共の利害に重要な関係があるものに係る河川で都道府県知事が指定したものをいう。

② 都府県知事は、前項の規定により河川を指定しようとする場合において、当該河川が他の都府県との境界に係るものであるときは、当該他の都府県知事に協議しなければならない。

③ 都道府県知事は、第一項の規定により河川を指定するときは、建設省令で定めるところにより、水系ごとに、その名称及び区間を公示しなければならない。

④ 都道府県知事は、第一項の規定により河川を指定しようとするときは、あらかじめ、関係市町村長の意見をきかなければならない。

⑤ 前項の規定により関係市町村長が意見を述べようとするときは、当該市町村の議会の議決を経なければならない。

⑥ 二級河川の指定の変更又は廃止の手続は、第一項の規定による指定の手続に準じて行なわれなければならない。

⑦ 二級河川について、前条第一項の一級河川の指定があつたときは、当該二級河川についての第一項の指定は、その効力を失う。

（河川区域）

第六条① この法律において「河川区域」とは、次の各号に掲げる区域をいう。

一 河川の流水が継続して存する土地及地形、草木の生茂の状況その他その状況が河川の流水が継続して存する土地に類する状況を呈している土地（河岸の土地を含み、洪水その他異常な天然現象により一時的に当該状況を呈している土地を除く。）の区域

二 河川管理施設の敷地である土地の区域

三 堤外の土地（政令で定めるこれに類する土地及び政令で定める遊水地を含む。）の区域のうち、第一号に掲げる区域と一体として管理を行なう必要があるものとして河川管理者が指定した区域

② 河川管理者は、前項第三号の区域を指定するときは、建設省令で定めるところにより、その旨を公示しなければならない。これを変更し、又は廃止するときも、同様とする。

③ 河川管理者は、港湾法（昭和二十五年法律第二百十八号）に規定する港湾区域又は漁港法（昭和二十五年法律第百三十七号）に規定する漁港の区域につき第一項第三号の区域の指定又はその変更をしようとするときは、港湾管理者又は農林水産大臣に協議しなければならない。

（河川管理者）

第七条 この法律において「河川管理者」とは、第九条第一項又は第十条の規定により河川を管理する者をいう。

（河川工事）

第八条 この法律において「河川工事」とは、河川の流水によつて生ずる公利を増進し、又は公害を除却し、若しくは軽減するために河川について行なう工事をいう。

第二章 河川の管理

第一節 通則

（一級河川の管理）

第九条① 一級河川の管理は、建設大臣が行なう。

② 建設大臣は、その指定する区間（以下「指定区間」という。）内の一級河川については、当該一級河川の部分の存する都道府県を統轄する都道府県知事に、政令で定めるところにより、その管理の一部を行なわせるものとする。

③ 建設大臣は、指定区間を指定しようとするときは、あらかじめ、関係都道府県知事の意見をきかなければならない。これを変更し、又は廃止しようとするときも、同様とする。

④ 建設大臣は、指定区間を指定するときは、建設省令で定めるところにより、その旨を公示しなければならない。これを変更し、又は廃止するときも、同様とする。

（二級河川の管理）

第一〇条 二級河川の管理は、当該河川の存する都道府県を統轄する都道府県知事が行なう。

（境界に係る二級河川の管理の特例）

第一一条① 二級河川の二以上の都府県の境界に係る部分については、関係都府県知事は、協議して別に管理の方法を定めることができる。

② 前項の規定による協議が成立した場合においては、関係都府県知事は、建設省令で定めるところにより、その成立した協議の内容を公示しなければならない。

③ 第一項の規定による協議に基づき、一の都府県知事が他の都府県の区域内に存する部分について管理を行なう場合においては、その都府県知事は、政令で定めるところにより、当該他の都府県知事に代わってその権限を行なうものとする。

（以下略）

（2）大阪府下の一級河川と二級河川

大阪府土木局河川室の『大阪府管内河川指定状況調書』（平成13年3月末現在）に基づいて大阪府下の主な一級河川・二級河川を挙げておきたい。なお、本稿で扱う河川は**ゴシック**で示した。

淀川水系（一級河川）

猪名川	兵庫県界～神崎川合流点
安威川	高槻市二料～神崎川合流点
神崎川	淀川分派点～大阪湾
淀川（含 新淀川）	京都府界～大阪湾
桂川	京都府界～淀川合流点
水無瀬川	三島郡島本町尺代～桂川合流点
芥川	京都府界～淀川合流点
天野川	四条畷市上田原～淀川合流点
旧淀川（含 大川・堂島川・安治川）	毛馬閘門～大阪湾
土佐堀川	旧淀川分派点～旧淀川合流点
東横堀川	土佐堀川分派点～道頓堀川合流点
道頓堀川	東横堀川分派点～木津川合流点
木津川	旧淀川分派点～大阪湾
尻無川	木津川分派点～大阪湾
寝屋川	北谷川合流点～旧淀川合流点
恩智川	柏原市大県三丁目～寝屋川合流点
楠根川	八尾市若草町一丁目～第二寝屋川合流点
第二寝屋川	恩智川分派点～寝屋川合流点
平野川	大和川分派点～第二寝屋川合流点

大和川水系（一級河川）	
大和川	奈良県界～大阪湾
石川	河内長野市滝畑～大和川合流点
西除川	河内長野市天野町～大和川合流点
東除川	狭山池（大阪狭山市）～大和川合流点
二級河川単独水系	
石津川	鉢ヶ峰寺川（堺市）合流点～大阪湾
近木川	貝塚市蕎～大阪湾
樫井川	泉佐野市大木（犬鳴大橋）～大阪湾
男里川	阪南市鳥取中～大阪湾

（男里川は上流の金熊川と合わせると

	八、九〇四メートル
	二八、二一三メートル
	一八、五九二メートル
	三五、一〇〇メートル
	九八五メートル
	三、九八五メートル
	二二、〇四八メートル
	一四、八九六メートル
	四〇〇メートル
	二、四五〇メートル
	二、一七五メートル
	二、七四五メートル
	八、八〇〇メートル
	四、一〇〇メートル
	二一、二四一メートル
	一五、四四一メートル
	三、一八八メートル
	一一、六三〇メートル
	一七、三七五メートル
	二四、六五〇メートル
	三〇、七二二メートル
	二六、二〇二メートル
	一三、六八二メートル
	一二、九七四メートル
	一五、四四五メートル
	一六、三二一メートル
	二、四五七メートル
	一二、九二二メートル）

第一章　水の国・水の都

第一節　摂河泉 ―河内湾から河内低地へ―

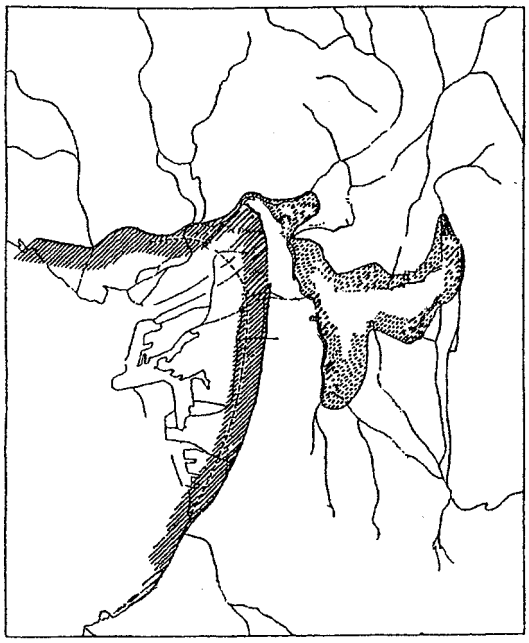
摂津国・河内国・和泉国　大阪は「水の都」といわれた時代があり、近世・近代には「難波八百八橋」などと歌われた。さらに古代・中世において、大阪はまさに「水の国」であった。

大阪府下および神戸市の東部をはじめ、芦屋市や西宮市、三田市や猪名川町など兵庫県の一部はいわゆる「摂河泉」、摂津国・河内国・和泉国の三国である（兵庫県の一部は摂津国）。本来、この三国は河内国の一国であったが、まず天武天皇の時代、摂津職が管理する国として摂津国が河内国より分離独立した。次いで天平宝字元年（七五七）和泉国が河内国より分離独立した。「和泉」の名称は良質の泉が湧く国の意である。和泉国府のあった和泉府中の泉井上神社（大阪府和泉市）には神功皇后が朝鮮出兵の時、清水が湧いたという伝承地がある。

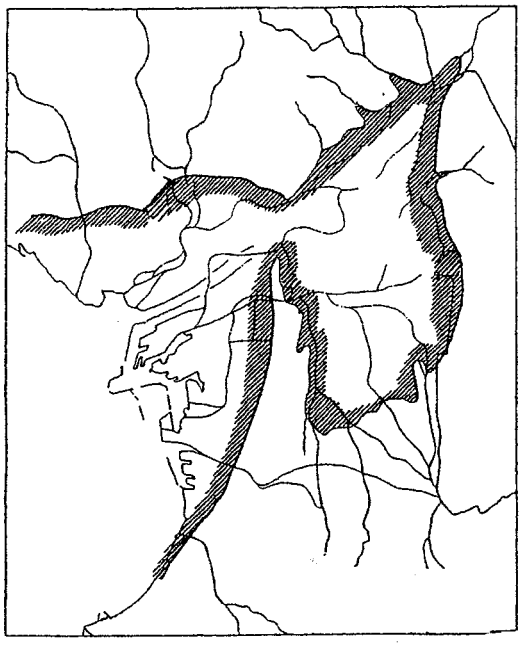
河内（凡河内）
- 摂津 ― 摂津
- 河内
  - 河内
  - 和泉

右の系図のように河内国から摂津国・和泉国が分離独立したのであるが、「河内」の名称自体「川の内」であり、「凡河内」「大河内」である。これは国内に大きな水を湛える国の意、まさに「水の国」である。

河内湾・河内潟・河内湖・河内低地　大阪湾の東、上町台地に仕切られるようにして、生駒山系の西麓までの間に、もう一つの海があり、湾となっていた。現代の地理学上、「河内湾」と呼ぶ。寝屋川市・四条畷市・大東市・門真市・守口市・大阪市の鶴見区・平野区・東大阪市・八尾市など、大阪平野一帯が河内湾の水域となる。河内湾は、時代が下るにつれて、淀川や大和川が運ぶ土砂によって砂州が作られ、水域が縮小し、海水と淡水が混じり合った河内潟となり、湾口が閉ざされて淡水の河内湖となり、梱渇して河内低地となった。およその時代は、縄文時代までは河内湾、縄文時代晩期から弥生時代前期は河内潟、弥生時代後期から古墳時代



河内湖の時代（約1800～1600年前）の古地理図



河内湾の時代（約7000～6000年前）の古地理図

『大阪府史』（大阪府史編集専門委員会編）第一巻　序章・第一章参照

前期は河内湖、古墳時代後期以降は河内低地といわれている。

こうした河内湾の存在は梶山彦太郎氏・市原実氏たちの研究によって明らかになった（梶山彦太郎氏・市原実氏「大阪平野の発達史」地質学論集　昭和47、「続大阪平野発達史」古文物学　昭和60など）。

河内湾から河内低地への移行は、地質学ではボウリングによる魚介類、特にセタシジミの遺殻の採集、考古学では縄文遺跡や弥生遺跡の分布状況、地図上では溜め池や悪水路の存在によって証明される。

文献としては『古事記』中巻や『日本書紀』巻第三の神武天皇の東征が河内湾や河内潟を暗示している。

資料2『日本書紀』巻第三

神日本磐余彦天皇……戊午年の春二月の丁酉の朔丁未に、皇師遂に東にゆく。舳艫相接げり。方に難波碕に到るときに、奔き潮有りて太だ急きに会ひぬ。因りて、名けて浪速国とす。亦浪花と曰ふ。今、難波と謂ふは訛れるなり。

第二節　難波と上町台地

難波の語源　難波の語源として、波の静かな波庭の短縮したものとか、魚が豊富の意味の魚庭などが考えられたが、地質学上、河内湾の存在が明らかとなり、『日本書紀』に見る「奔き潮有り」、つまり河内湾と大阪湾の海峡の干満時の海流が、浪速＝難波であることが明らかとなった。

難波の歌枕　難波江・難波潟、景物の芦・澪標、枕詞の「押照や」など歌枕として古来、難波はしばしば歌に詠まれる。歌枕「難波」については改めて後述するが、冒頭に、是非とも次の四首を掲げておきたい。

『古今和歌集』仮名序、王仁の大鷦鷯の帝に奉る歌

難波津に咲くや木の花冬ごもり　今は春べと咲くや木の花

『後拾遺和歌集』春上

心あらむ人に見せばや津の国の　難波わたりの春の景色を　　能因法師

『新古今和歌集』冬

津の国の難波の春は夢なれや　蘆の枯れ葉に風渡るなり　　西行法師

「豊臣秀吉自筆辞世和歌詠草」大阪城天守閣蔵

露と落ち露と消えにしわが身かな　難波の事も夢の又夢　　松（秀吉）

難波＝上町台地から大阪湾に注ぐ淀川の河口一帯

「大坂」という地名　室町時代中期　大坂・小坂

小坂↑尾坂・尾崎（丘陵や台地の舌端部）

大坂本願寺（石山本願寺）の小坂・大坂は上町台地の舌端部

金沢 尾崎神社 金沢城の舌端 中世 一向一揆の中心

資料3蓮如『御文』

摂州東成郡生玉之庄内大坂

明応五年（一四九六）蓮如生玉荘に隠居所建立↓大坂本願寺（石山本願寺）

資料4三条西実隆『高野参詣日記』大永四年（一五二四）淀川下船

おさかといふ所に至りて……つとめてこの所の本堂　見るべきよし申せしかば、こゝかしこ見巡らすに、心言葉も及ばざる荘厳美麗のさまになむ侍りし

古代・中世の難波（大坂）の文化＝上町台地上に形成

「上町」大坂三郷・船場など下町筋に対する呼称

東斜面は平坦　桃ヶ池（股が池）・長池など

西斜面は急峻　口縄坂・市立美術館・阿倍野神社石段

資料5『一遍上人絵伝』一遍没後一〇年 正安元年（一二九九）成立

四天王寺西門 木の鳥居（石造 永仁二年（一二九四））

現在の一心寺前あたり、坂を登る母子、沖に舟

一心寺の門前横の石垣にある道路改修の石碑

相阪道路世話人　明治九年五月……

相阪及下寺町道路改修明治二十年六月起工……

入り組んだ谷（細工谷・清水谷）と丘陵（夕陽丘・桃山）→埋もれ谷→清水湧出地、増井の清水・新清水寺の玉出瀧

四天王寺亀井の水（金堂下の白石玉出水の伝承）

生活用水　村落の形成

上町台地の遺跡・建造物・伝承地（文化財＝古代・中世の歴史文化）

古墳　茶臼山古墳・帝塚山古墳など現存の古墳

聖天山（松虫中学校）・小手塚山（住吉中学校）

常盤会（旧住吉村入会地）による帝塚山古墳の保存

住吉大社　住之江の浜　難波の漁民信仰

底筒男命・中筒男命・表筒男命・神功皇后

摂津　摂津職（港の管理）　摂津一宮

和歌三神　住吉明神・玉津島明神・柿本人麻呂（人丸）

軍神　神功皇后を守護

文華館（宝物館）古今伝授後の歴代天皇・廷臣奉納和歌

難波の宮跡　昭和二七年（一九五二）山根徳太郎の発掘

天武天皇（七世紀後半）前期難波の宮

聖武天皇（八世紀前半）後期難波の宮

大化元年（六四五）孝徳天皇の難波長柄豊碕宮も？

四天王寺　聖徳太子の物部守屋討伐→立願　荒陵寺

平安時代　浄土思想　厭離穢土・欣求浄土→日想観

西門　石の鳥居　彼岸の中日の夕陽

扁額「釈迦如来転法輪所、当極楽土東門中心」

家隆塚　藤原家隆　嘉禎年間（一二三五～三七）→夕陽庵の碑

契りあれば難波の里に宿り来て 波の入日を拝みつるかな（『古今著聞集』）

埋もれ谷による清水湧出→隠遁生活可能

合邦閻魔堂（ただし上町台地から逢坂を下る）謡曲『弱法師』→浄瑠璃『摂州合邦辻』

阿倍野　上町台地南部平坦地　万代池　交通の要衝

熊野街道　王子神社　院政期より熊野詣の隆盛

『太平記』北畠顕家敗死→阿倍野神社

晴明神社　平安時代中期の陰陽家安部晴明の生誕

松虫塚（古墳の一つ？）謡曲『松虫』男同士の恋慕

大坂（石山）本願寺　大阪城付近、法円坂町一帯？

明応五年（一四九六）蓮如建立→天文元年（一五三二）証如移転

証如『天文日記』はじめて庶民（町衆）の記述

今日六町衆、能二番づつ合はせて十二番これ有り。見物数万人と云々。

能の仕手はいづれも幼き者也。

寺内町の北・南・西・北町屋・清水・新屋敷

大坂城　天正八年（一五八〇）本願寺合戦終結→本願寺の跡地

天正一一年（一五八三）秀吉 築城着手

慶長一一年（一六一四）冬の陣、元和元年（一六一五）夏の陣

→松平忠明 一〇万石→元和五年（一六一九）幕府直轄領

元和六年～寛永六年（一六二九）大坂城再建

明治元年（一八六八）幕府敗北→焼失→昭和六年（一九三一）再建

江戸時代の上町台地　上質の飲料水・寺社参詣の行楽地

清水湧出地より下町へ天秤に水桶を担いだ水売り

大坂六清水 山下清水・増井清水・産湯清水など

社寺参詣・四季の行楽地

住吉大社・四天王寺・生国魂神社・高津宮、料亭浮瀬楼

他に、参詣を当て込んで創られた縁起の神社仏閣

大坂三十三所観音巡り（『曽根崎心中』）一〇番～二九番が上町台地

近代の大阪市　明治時代の市制施行以後、大阪市は急速な近代化、人口の集中・ドーナツ化現象など目まぐるしい変動に対応して周辺地域の合併・区画の変更が行われている。

明治二二年（一八八九）市制施行 北区・東区・南区・西区

明治三〇年 第一次拡張　大阪湾地域合併

明治三二年（一八九九）耕地整理法　耕地整理組合
大正八年（一九一九）都市計画法　土地区画整理組合
　城南土地会社が味原池埋め立て、宅地化が進行
大正一四年（一九二五）第二次拡張　東成郡・西成郡を合併し、西淀川区・東淀川区・港区・此花区・西成区・東成区・住吉区・浪速区・天王寺区が成立
大正九年（一九二〇）一二五万人　昭和一五年（一九四〇）三二五万人
昭和一八年（一五四三）区画を変更→都島区・福島区・大淀区・生野区・城東区・阿倍野区・東住吉区成立
昭和三〇年（一九五五）区画を変更→淀川区・鶴見区・住之江区・平野区成立

第二章　淀川―都鄙を結ぶ水運―

大阪府下の淀川は京都府界から大阪湾までの三五キロ余の範囲で、明治四三年（一九一〇）完成の毛馬閘門下流の新淀川が含まれる。

大阪府下の中心的河川　主な港、海港・河港の存在
古代　摂津職の設置→摂津国
　難波津
中世　河上五ヶ関（兵庫関・渡辺関・神崎関・禁野関・淀関）
　↑『経覚私要鈔』『大乗院寺社雑事記』他
　森田恭二氏「興福寺の河川交通支配―河上五ヶ関を中心として―」『大乗院寺社雑事記研究論集』三（和泉書院）

（1）江戸時代前期の淀川・大和川の概観

資料6新井白石『畿内治河記』（『新井白石全集』三）

天和三年癸亥、国家有レ議、大興二畿内治一レ河之役一、蓋水之為レ患、所在有レ之而源遠流悍者、其患大矣、衆流相湊、併帰二一道一、以達レ於レ海者、其患最大矣、水患之最大而難レ治者、無レ若二摂之大坂河一。大坂河即淀河也。其源江州琵琶湖、流二出宇治一、由二伏見一経二淀城一、至二大坂一入レ于レ海、其間五畿及比近州県諸水来会甚衆、而大和河・木津川・加茂河・桂河其最大者也。

　大和河出二和州初瀬山東南一、合二生駒・立田等衆河一、歴二亀瀬一会二石河一、至二弓削村一分二二股一、一久宝寺川、是為二正流一、一玉櫛河、至二吉田村一又分二二股一、一吉田河、一菱江河、吉田河北趨、涯為二深野・新開二巨浸一、恩地河及久良加利・飯盛等澗壑諸水皆帰レ之、周廻広莫、瀰漫数千頃、又南向出二森河内一与二菱江河、倶合二正流一、至二大坂京橋之下一、入レ于二淀河一。

木津河出二伊賀鹿伏兎谷一傍二笠置山一、城州南方衆山之水悉注レ之、至二淀河大橋一入レ于二淀河一。賀茂河出二城洲岩屋山北一、受二鞍馬・貴布禰・八瀬・小原渓澗諸水一、遶二京城之東一、合二白河・紙屋河一西南入二桂河一。桂河出二丹州園部西北一会二清滝河一、経二嵯峨一従二鳥羽一与二賀茂河一会、倶入レ于二淀河一。淀河実納二四大河之流一、其上流自二湖口一至二宇治一、曲二折山間一、両岸皆高巌石麓、水流二其中一、不レ能レ為レ患、自二宇治一而下始出レ険而更（フル）二平地一、特以二堤防一為二之限一、河流緩而灘沙停積、加レ之、大和河・木津河・桂河並挟二泥沙一趨レ之、壅二塞河道一河身日淤、船隻阻滞、一遇二霖潦一則泛漲溢溢、其勢不レ可二得而制一、重以二百川濯集之威一、衝蕩潰決、敗二壊県邑一淹二没田廬一。畿内之民被二其害一者、歳以レ万数、嗷々（ガウガウ）怨嗟、已数十年矣。

　我　東照大神君受命以来、明哲継レ踵治具必張百廃倶興屢差レ官巡二視畿内水災地方一、以求二修治之策一。議者謂、諸水之会二淀河一多在二上流一、独大和河在二下流一相会、横二衝河身一、是河水所レ漏之処、両河相委、水勢相争、不レ得二共順下一、故淤沙日積、河身漸与レ岸平、若夫深野・新開、潴水旦暮積、雨水纔至則村野之間為二掲厲舟棹之区一者、皆原レ于レ此焉、宜下別開二河道一、導二大和河一、分二殺水勢一、両河各得中其所上。因求二其鑿開之地一、或謂、鑿二瓜破野一、至二住吉浦一以注レ于レ海、或謂、鑿二阿部川一、至二難波浦一以注レ于レ海。而其近邑土著之民、恐二其被一レ割二田廬一、刺心陰痛、与下夫被二水害一之民上、為二哀訴一不レ已。工費亦不レ貲其余、建白競言二巧便一而卒紛々莫二之定一也。有司亦不レ知レ所二取材一格而不レ行復有二年所一、但管レ河官吏歳費二官銭一、植レ椿累レ石増二修堤防一、雖三務致二救護一河患未レ已施及二

寛延之交、河道益淤水害益暴流亡漂溺之災無レ歳無レ之瀕河人民不レ知レ所レ帰今大君紹二纘丕基一光二昭前烈一文武並行万方莫レ不レ循レ軌風化一新群動莫レ不レ被レ沢盛徳之興山高日昇万福是膺独於二畿内之民一豈可レ令二塾溺一於レ是誕垂二嘉恵一博施二洪恩一将レ救二治水患一。

（天和三年）今茲、春二月遂命二稲葉石見守及彦坂壱岐守・大岡備前守一往巡二察畿内河道処所一、択下勘定官三人、伊奈半十郎・手下吏二人可レ任二役事一者上、従レ之都下有二河村瑞賢一、亦差遣従行、以計二便宜一、越三月石見守及壱岐守・備前守至二京師一督二同洲県当該官吏人瑞賢等一、先行二賀茂河及白河一、将レ求二桂河上流一、以二其路絶険不一レ可レ渉、西攀二老坂一、自二丹之保津一舟行、下二嵯峨一、至二淀・鳥羽一、由二伏見一、浮二淀河一、以達二大坂一、視二河口一、東傍二大和河一、至二亀瀬一、経二廻深野・新開一、復踰二清滝山一、歴二視其東北衆山一、濯々皆沙土、而且其沙毎二崩下一流入二渓澗一、復沿二天野河一而下、至下其股合二淀河一之処上復西南循下摂之郡邑憂二水害一之地上、行二視徳庵溝深野・新開比近田間潴水行レ之、至二今福村南一入二大和川一・鯰江河河西摂東郡邑渓溢之水多置二開於一今福村一、以洩レ于レ此流二過備前島・片町之際一、至二京橋下流一入二大坂河一及備前島・片町・京橋等処所一、復縁二平野河一摂河東南山際高阜涓流、及引二狭山池一以潅二瀉田土一之水、又置二大開於一弓削村一、引二大和河一以備二蓄洩之溝一皆帰レ之、至二京橋上流一入二大和河一過二猪甘小橋仁徳天皇十四年為二橋於一猪甘津一、即号二其処一曰二小橋一等処一、廻二狭山池一聖武天皇天平四年築二狭山下池一、巡下相阿部・瓜破及依網池推古天皇十五年作二依網池一・手水橋在下堺津与二住吉浦一之間上向欲二開鑿一之地方上。往反数四、左右旁求、審下詳治二水患一実在二海口一而不レ可三別開レ河導二大和河一説者之計不上レ足二信用一焉。復遡二中津河一淀河支流自二長柄村一西分至二伝法口一入レ于レ海、自二神崎河一淀河支流自二江口村一西分至二尼崎一入レ于レ海西出二尼崎一、復遵レ海浮レ舟、南循二行堺津・住吉浦等処一。熟二視大坂河口一沿海斥鹵之地、蘆葦鋪生、日以蕃茂、令下河水失中宣洩于一レ海之便上、兼レ之近年就二其地一開レ田築レ堤、下流益為二壅塞一、斯治レ水之最所レ可レ急也。

……

新井白石　明暦三年（一六五七）浪人の家に生。木下順庵に朱子学を学び、甲府徳川綱豊（後、将軍家宣）に仕え、家宣が将軍綱吉の養子となり、白　石も江戸城西の丸に勤め、後、家宣・家継将軍の許で間部詮房とともに正　徳の治を行う。享保元年（一七一六）吉宗将軍により解任され、不遇な晩　年を送る。同一〇年没、六九歳。『折たく柴の記』『畿内治河記』ほか。

（2）都を結ぶ水運

資料7紀貫之『土佐日記』

……石津といふ所の松原おもしろくて、浜辺遠し。また、住吉のわたりを漕ぎゆく。或人（貫之）のよめる歌、

今見てぞ身をば知りぬる住江の　松より先にわれは経（へ）にけり

ここに、昔へ人の母（土佐で亡くなった娘（貫之の妻））、一日（ひとひ）かた時も忘れねばよめる、

住江に船さし寄せよ忘れ草　しるしありやと摘みてゆくべく

となむ。うつたへに忘れなむとにはあらで、恋しき心ちしばし休めて、またも恋ふる力にせむとなるべし。

かくいひて、眺めつつ来る間に、ゆくりなく風吹きて、漕げども漕げども、後（しり）へ退（しぞ）きに退きて、ほとほとしくうちはめつべし。楫取りのいはく、「この住吉の明神は、例の神ぞかし。ほしき物ぞおはすらむ」とは、今めくものか。さて、「幣（ぬさ）を奉り給へ」といふ。いふに従ひて、幣奉（たいまつ）る。かく奉れれども、もはら風止まで、いや吹きに、いや立ちに、風波の危（あやふ）ければ、楫取りまたいはく、「幣には御心のいかねば、御船もゆかぬなり。なほ、うれしと思ひ給ぶべき物奉り給（た）べ」といふ。また、いふに従ひて、「いかがはせむ」とて、「眼もこそ二つあれ、ただ一つある鏡を奉る」とて、海にうちはめつれば、口惜し。されば、うちつけに、海は鏡の面のごとなりぬれば、或人（貫之）のよめる歌、

ちはやぶる神の心を荒るる海に　鏡を入れてかつ見つるかな

いたく、住江・忘れ草・岸の姫松などいふ神にはあらずかし。目もうつらうつら、鏡に神の心をこそは見つれ。楫取りの心は、神の御心なりけり。

（承平五年二月）六日。澪標（みをつくし）のもとより出でて、難波に着きて、川尻に入る。みな人々、媼（おむな）・翁（おきな）、額に手を当てて喜ぶこと、二つなし。かの船酔ひの淡路の島の大（おほ）

御、「都近くなりぬ」といふを喜びて、船底より頭をもたげて、かくぞいへる。

いつしかといぶせかりつる難波潟　葦漕ぎ退けて御船来にけり

いと思ひのほかなる人のいへれば、人々あやしがる。これが中に、心ち悩む船君、いたく賞でて、「船酔ひし給べりし御顔には、似ずもあるかな」といひける。

七日。今日、川尻に船入りたちて、漕ぎ上るに、川の水干て、悩み煩ふ。船の上ること、いと難し。かかる間に、船君の病者、もとよりこちごちしき人にて、かうやうのこと、さらに知らざりけり。かかれども、淡路専女の歌に賞でて、都誇りにもやあらむ、からくして、あやしき歌ひねり出だせり。その歌は、

来と来ては川上り路の水を浅み　船もわが身もなづむ今日かな

これは、病をすればよめるなるべし。一歌にことの飽かねば、いま一つ、

疾くと思ふ船悩ますはわがために　水のこころの浅きなりけり

この歌は、都近くなりぬる喜びに堪へずして、いへるなるべし。「淡路の御の歌に劣れり。ねたき。いはざらましものを」と、悔しがるうちに、夜になりて寝にけり。

八日。なほ、川上りになづみて、鳥飼の御牧といふほとりに泊る。今夜、船君例の病起りて、いたく悩む。

或人、あざらかなる物持て来たり。米して返事す。男ども、ひそかにいふなり。「『飯粒してもつ釣る』とや」。かうやうのこと、所々にあり。今日、節忌すれば、魚不用。

九日。心もとなさに、明けぬから、船を曳きつつ上れども、川の水なければ、ゐざりにのみぞゐざる。この間に、曲の泊りの分れの所といふ所あり。米・魚など乞へば、行ひつ。

かくて、船曳き上るに、渚の院といふ所を見つつゆく。その院、昔を思ひやりて見れば、おもしろかりける所なり。後なる岡には、松の木どもあり、中の庭には、梅の花咲けり。ここに、人々のいはく、「これ、昔、名高く聞こえたる所なり」「故惟喬の親王の御供に、故在原の業平の中将の、

世の中に絶えて桜の咲かざらば　春のこころはのどけからまし

といふ歌よめる所なりけり」。今、今日在る人、所に似たる歌よめり。

千代経たる松にはあれどいにしへの　声の寒さは変らざりけり

また、或人のよめる、

君恋ひて世を経る宿の梅の花　むかしの香にぞなほ匂ひける

といひつつぞ、都の近づくを喜びつつ上る。

かく上る人々の中に、京より下りし時に、みな人、子どもなかりき、至れりし国にてぞ、子生める者ども、在りあへる。人みな、船の止る所に、子を抱きつつ下り乗りす。これを見て、昔の子の母、悲しきに堪へずして、

なかりしもありつつ帰る人の子を　ありしもなくて来るが悲しさ

といひてぞ泣きける。父もこれを聞きて、いかがあらむ。かうやうのことも、歌も、好むとてあるにもあらざるべし。唐土もここも、思ふことに堪へぬ時のわざとか。今夜、鵜殿といふ所に泊る。

十日。障ることありて、上らず。

十一日。雨いささかに降りて、止みぬ。かくてさし上るに、東の方に、山の横ほれるを見て、人に問へば、「八幡の宮」といふ。これを聞きて喜びて、人々拝み奉る。山崎の橋見ゆ。うれしきこと限りなし。（後略）

紀貫之　生年不明（貞観一〇年（八六八）ごろか）。延喜五年（九〇五）醍醐天皇の勅により紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑と『古今和歌集』撰進。延長八年（九三〇）土佐守となり赴任。承平四年（九三四）任務を終え、一二月土佐国府を出発、翌年二月帰京。帰京後（承平五年）、『土佐日記』（『土左日記』とも）成立か。「男もすなる日記といふものを、女もしてみんとてするなり」。天慶元年（九三八）周防国に赴任。天慶八年（九四五）木工権頭に就任、同年没。七八、七九歳か。

石津　堺市西区石津町周辺、石津川河口。古代より海港として機能。

住吉のわたり　大阪市住吉区住吉周辺、細井川（細江川）河口に住吉津。住吉大社については後述。

住江　住之江、住吉と同じ。忘れ草は住吉・住之江の景物。

川尻　淀川の河口、六日の川尻は難波の大川の河口か、七日の川尻は神崎

川の河口か。「川尻」は河口の意で特定の地名の比定は難しい。『大阪府史』第二巻第三章第一節担当の松原宣弘氏は「難波から三国川の河尻に至り、三国川をさかのぼった」とする。

鳥飼の御牧　摂津市鳥飼、淀川右岸。淀川と安威川に挟まれた沖積地に開かれた右馬寮の牧。鎌倉時代には耕地化が進み左馬寮の荘園となる。

曲の泊りの分れの所　一は摂津市鳥飼和道周辺、淀川と神崎川の分岐点に当たり「分れ所」に合うが、鳥飼の御牧より行程は手前。他は枚方市出口周辺、鳥飼の御牧と渚の院の中間で行程はよいが、「分れ所」が不解。

渚の院　枚方市渚元町、文徳天皇第一皇子惟喬親王の交野の狩猟の別業。

鵜殿　高槻市道鵜町周辺。

八幡の宮　京都府八幡市の石清水八幡神社、男山（横ほれる山）に鎮座。

山崎の橋　京都府大山崎町から対岸の八幡市橋本町に架けられた橋。神亀二年（七二五）行基建造の伝承があり、『続日本紀』延暦三年（七八四）七月四日条に「仰二阿波・讃岐・伊予三国一、令レ造二山崎橋料材一」の記事がある。平安時代後期には廃絶。

資料8『**栄華物語**』延久五年（一〇七三）二月、後三条上皇の住吉・天王寺参詣。

かくて、三月廿日、天王寺に詣させ給ふ。この院をば、一院とぞ人々申しける。後三条院とも申すめり。女院も一品宮も詣でさせ給ふ。されど、上達部・殿上人多くも参らせさせ給はず。睦まじくおぼしめす人々、さては遊の方の人々をぞ率ておはしましける。まづ女院の御車、次に一院、その後に一品宮おはします。…（略）…

廿一日、今日は皆狩装束にて、烏帽子姿ども、ならはぬ御心地におかしく御覧ず。上達部も皆狩装束にて候ひ給ふ。橋本の津といふ所に下らせ給ひて御覧ずれば、国々の船どもゝ、御船どもゝ、目も遥かに寄せわたしたり。皆御船どもに奉りぬ。御船の有様は、来し方行末有難げにし尽したり。挑みつゝ人々当りくに仕まつれる様、年頃何事にも制ありつるを、この度ぞ残る事なくし尽くしたりける。女房の衣は猶五つなり。上達部、あるは御船にも候ひ給ひ、上達部の舟にも乗り給へり。殿上人は殿上の船に乗りて遊び下る。廿二日の辰の時ばかりに、御船出だして下らせ給ふ程に、江口の遊女二船ばかり参りあひたり。禄などをぞ給はせける。物などはぬがせ給はず。経信の左大弁琵琶、権中将季宗笙、民部大輔政長も笛、師賢の弁歌うたふ。笛の音も琵琶の音も、瀬ゞの河浪に紛ひていみじくおかし。「こゝはいづくぞ」と問はせ給ふ。春宮大夫ぞ伝へ問ひ給ふ。「これは長柄となん申す」といふ程に、「その橋はありや」と尋ねさせ給へば、候よし申す。御船とゞめて御覧ずれば、古き橋の柱たゞ一残れり。「今は我身を」といひたるは、昔もかく古りてありけると思ふもあはれなり。中津河といふ所におはしましぬ。海の色も空の緑に見え紛ひておかし。遠き船の帆上げたるなどいひ知らず見ゆ。この程に、摂津守、様々の折櫃、絵など書きたるに、果物参らせたり。日やう〳〵暮れて、汀の田鶴の霞の絶間より見え渡り、河浪の音も、鶴の声も、様々に心動かし、篝火の影も水底隠れなく、おもしろながらもの心細し。鶯の声も、帰る雁の響もとり集め、ことさらの様なる旅の空なり。廿三日、日うち下りて霞たなびき渡りたる程に、御車ども方々の御船に寄せて、色々様々に装束きたるものどもたちやすらふ。まづ住吉に参らせ給ふ。「関白殿紅の出衣に柳の直衣奉りたりしこそ、いとをかしく、この度の思出なれ」と人申しけり。ましてこと人々の装束いふ方なし。御祓ありて、その後御社に詣らせ給ひて、御遊果てゝ帰らせ給ふ。女院の女房、白きどもに、濃き打ちたる、麗しきものゝいと清げに見ゆ。一品宮のには、萌黄どもに蘇芳の打ちたる、院のは色々に濃き打ちたる。日の暮るゝ程に、天王寺に参らせ給ふ。雨いたく降りてものゝ栄えもなし。御車寄せて御堂に渡らせ給ふ。この程に、蔵人少将公実、内の御使にて参れり。

廿四日は、御堂の事よく御覧じ、亀井など御覧ず。

廿五日の辰時ばかりにぞ御船出だす。午の時に左衛門権佐匡房参れり。色々様々に装束きたる中に、赤き袍衣にことゞ〳〵しくて参りたる、いと珍しく見ゆ。左中弁実政題奉る。御幣島といふ所御覧ず。実政を御船に召し上げて、歌ども講ぜさせ給ふ。

住吉の神もあはれと思ふらん　空しき船をさして来れば　（後三条院御製）

おり上るみゆきを神も嬉しとや　千歳を君に奉るらん　（藤原教通）関白殿

年を経(へ)て多くの御幸見つれども　かく珍しきたびはなかりき　春宮大夫能長

音に聞く長柄の橋はなかりけり　千鳥ばかりぞ鳴き渡りける　左兵衛督資仲

沖つ風吹きにけらしな住吉の　松の下枝(したえ)を洗ふ白浪　左大弁経信

たぐひなき君が御幸の嬉しさに　千歳を譲れ住吉の松　宰相中将隆綱

古(いにしへ)は今日の御幸のためにとや　天降(あまくだ)りけん住吉の神　右大弁伊房

住吉の神の験(しるし)に古(いにしへ)の　松の千歳は君に譲れり　右兵衛督実季

住吉の神に問はゞや古も　かゝる御幸はあらじとぞ思ふ　前丹後守公基朝臣

住吉の松に千歳を君が代の　嬉しくのみぞ三島江の岸　備中守信宗朝臣

古もかゝる御幸はありやせし　夢にも語れ住吉の神　内蔵頭経平朝臣

このたびの祈りは空に知りぬらん　天降ります住吉の神　左中弁実政朝臣

神代より生ひ添ふ松は住吉の　今日の御幸をかねてこそ知れ　右馬頭資宗朝臣

難波江に心とまりて蘆の葉に　うらがへるべき心地こそせね

四位少将家賢朝臣

若葉さす蘆の汀に浪寄るは　こや三島江の渡りなるらん　民部権大輔政長朝臣

住吉の神の験(しるし)に君が代は　松の十返生(とかへりお)ひかはるまで　右京大夫通家朝臣

うちはへて見るとも飽(あ)かじ津の国の　難波の浦の春の曙　源中将季宗朝臣

あらじかしかゝる御幸は住吉の　松よりさきの人に問はゞや　丹波守(後)経成

飽かざりし都の花の色よりも　心ぞとまる住吉の松　左少弁師賢

住吉の千代に一度(ひとたび)あひぬれば　松のかひある旅にもある哉　右少弁匡房

今はとて今日帰るさを急げども　心はとまる旅にもある哉　兵部少輔通俊

よろづよの君が御幸に行末の　年をば譲る住吉の松　右兵衛佐顕実

色ことに今日は見えけり住の江の　松の下枝にかゝる白浪　因幡守忠季

住吉の神の御垣も世々を経て　君が御幸をまつにやあるらん　左衛門大夫資清

住吉の松の緑もこの春は　君が御幸に色ことに見ゆ　刑部丞俊範

ふたかたにかゝる御幸を住吉の　松珍しく神も見るらん　左近将監為房

千歳経む君が御幸のためしには　霞たなびく住吉の松　左衛門尉俊宗

住吉の松に絶えせぬ風の音に　岸打つ浪の声通ふなり　女房

君が代は風も心をよせつれば　枝のどかなる住吉の松

三島江の水に心のすみぬれば　影を宿してのどかにぞ見る

それながらそれとも見えぬ橋柱　久しきあとのしるべなりけり　一品宮女房

遙かなる君が御幸に住吉の　松に花咲くたびとこそ見れ

行く水に長柄の橋は通ひけり　人は名をのみきゝわたりつゝ

三島江の岸に隙なき深緑　君が御幸を待つにざりける

橋柱それとばかりをしるしにて　昔ながらの跡を見るかな

三島江の蘆間に寄する白浪の　たち帰るべき心地こそせね

君が世の久しかるべきためしにや　神も植(う)へけん住吉の松

尋ぬれど昔ながらの橋もなし　あとをぞそれときゝわたりける

うち寄する難波の浦の浪よりも　心ぞかゝる蘆の若葉に

天降る神の験(しるし)に君に皆　よはひは譲れ住吉の松

あとばかり見えしなりけりこれやさば　長柄の橋の渡りなるらん

立ち帰り見るとも飽かじ三島江の　蘆間をわくる水の白浪

待つ程は久しかりしを住吉の　みては程なく帰りぬるかな

音にのみきゝわたりしを君が世の　長柄の橋を見るぞ嬉しき

かずへやる方こそなけれ住吉の　松の千歳は一木ならねば

廿六日、雨いたく降れど、さてのみやとて御船出(いだ)でぬ。上達部の舟に殿上人乗りまじりて、ひねもすに遊びつゝ上る。天河といふ所におはしまし着きぬ。

廿七日、今日京へ上らせ給ふとて、人々思ひ〳〵に装束替(か)へたり。八幡の程におはしまし着きぬ。松の緑も常よりもことに見え、霞の間よりこぼれたる花の匂も、春駒の沢にあさるもおかしく見ゆる程に、淀におはしまし着きぬ。この程に左のをとゞ御迎に参り給へり。いと重〳〵しく、清げにめでたき御有様なり。人のまねぶを書きつくれば、ひが事そらごとならんかし。帰らせ給ひても、日頃の有様恋しうおぼしめす。御心地ともすれば起り〳〵せさせ給ふ。

『栄華物語』　歴史物語（鏡物）、宇多天皇から堀河天皇まで一五代、約二百年を記述。天皇の外戚藤原氏の権力闘争が描かれ、栄華は道長の栄華。

後三条天皇　長元七年（一〇三四）生、後朱雀天皇皇子。治暦四年（一〇六八）践祚、外戚に藤原氏がなかったので親政実行、荘園整理令

など皇室経済の強化。延久四年（一〇七二）白河天皇に譲位。翌五年、住吉・天王寺参詣の後、崩御、四〇歳

資料9十返舎一九『東海道中膝栗毛』第六編上　文化四年（一八〇七）

（第五編で伊勢参宮を終えた弥次郎兵衛・北八は奈良街道から宇治に出、伏見から淀川を下って大坂に向かう途中、枚方から下流の所で船を間違え、上り船に乗って伏見に戻る。）

……こゝ東の都神田の八丁堀辺にすむ、弥次郎兵衛北八といへる二人連のなまけもの、神風や伊勢参宮より足曳のやまと路をまはり、青丹よし奈良街道を経て、山城の宇治にかゝり、こゝより都におもむかんと急ぎけるほどに、やがて伏見の京ばしにいたりけるに、日も西にかたぶき、往来の人足はやく、下り船の人を集る舟頭の声〴〵やかましく「サア〳〵今出るふねじや。のらんせんか。大坂の八軒家舟じや。のてかんせんかい」弥次「ハ、アこれがかの淀川の夜ぶねだな。ナントきた八、京からさきへ見物するつもりで来たが、いつそのこと、此舟にのつて、大坂からさきへやらかそふか」北八「それもよかろう。モシ乗合もありやすか」せんどう「そふはかいの、乗ならはやうのらんせ。いつきに出すさかい。コレ〳〵わらじといてのらんせ。ゑらいへげたれじやな」北八「ヱ、何をぬかしやアがる。きのつゑゝべらぼうだ」弥次「コレ北八、手めへのつゝみもいつしょに、おれが風呂敷につゝんでおこふ」北八「せんどうさん、コリヤアどけへすはるのだ」せんどう「そこな坊さまのねきへ割込んせ」弥次「御めんなせい。ヤアゑいとな」トふたりながらともの間へわりこみすはる。のり合「コリヤゑらうつめくさつた。舟頭さん、ふとんひとつかさんせ」せんどう「ソレとらんせ。サア〳〵みなゑいかいな。下にゐてくだんせ。苫ふくさかい」あきん人「銭かいなされ。銭はよござりますかな」同「みづからさとうもち〳〵」同「かんざけよござりますかいな。あんばいよし〳〵」ト此うちせんどうども、舟にとまをふいてしまひ、さほさし出して「ふねは追風に帆かけてはしる、われはこがれて身をあせる、ソウレソレ〳〵〳〵なんぞいコリヤゑらう空がわるなつた。ふろかしらんわい」のり合「せんどうさん、ゆふべはちうしやう嶋じやあろ。精進わるいさかい、コリヤ雨じやあろぞいのハ、、、、。ときにどなたも、じよらかいてゐなさらんか。今のうちあんじようせんと、後に工合がわるなるさかい」京の人「コレおまい、ちと退てかさんせ。綜のうへに、いじかつてじやわいな」大坂の人「コリヤ無調法。とかく乗合はおたがひに、何じやろと不肖してくれなされ」京「よいわいな。おまい大坂はどこじやいな」大坂「わしや道頓堀」京「かいな。どとんぼりのしゆは、みな芸子じや。ナントこゝで、何なとひとつ、やりなさらんかいな」長崎の人「コリヤよかたい。船中のねぶり目ざましに、あんたしゆ、ひとつヅゝ芸能やらしやつたらよかたい。うんどもは長崎のもんじやが、能毛川嶋のぼうぶらまくらで、かみさしぽつきりでもやろふばいよヲ」越後の人「コリヤゑいことんし。わしどもはいちごのもんだが、長崎のあんにやさがやらしやつたら、わしも国風のおけさ松坂でもかたるべいとこと」北八「こいつはおもしろへ。マア長崎のお客からはじめなせへ」

（略、船中の小便事件→笑い）

弥次「ヱ、、、もふいつてくれるな。咽がさけるよふだ。アゝくるしい。ゲヱイ〳〵」北八「とかくおめへは小便がたゝる。船ではもう禁便にするがいゝ。そこでいつしゆ、うかんだが、どふだ〳〵、せうべんを人にのませしそのむくひ おのれものんでよいきびしよなり」此騒動に船中おの〳〵ねぶりをさまし、大笑ひとなるうち、ふねははや、ひらかたといへる所ちかくなりたると見へ、商ひ船、こゝにこぎよせ〳〵、あきん人「めしくらはんかい。酒のまんかい。サア〳〵みなおきくされ。よふふさるやつらじやな」ト此ふねにつけて、ゑんりよなくとまひきひろげ、わめきたつる。このあきなひぶねは、ものいひがさつにいふを、めいぶつとすること、人のしる所なり。うりことばにかひことばなれば、のり合「コリヤ飯もてうせい。ゑいさけがあるかい」北八「いかさま、はらがへつた。爰へもめしをたのみます」あきん人「われもめしくふか。ソレくらへ。そつちやのわろはどふじやいやい、ひもじそふな頬してけつかるが、銭ないかい」

弥次「イヤこのべらぼうめら、何をふざきやアがる」のり合「この汁はもむないかはり、ねからぬるふていかんわい」あきん人「ぬるかア水まはしてくらひおれ」のり合「何ぬかすぞい。そして、此芋も牛房もくさつてけつかる」

あきん人「そのはづじや。ゑい所はみな、うちで焚(たい)てくてしもふたわい」

…（略）…

かくて船は、ひらか(枚方)たすぎたるころ、雨催(あめもよ)ひのそら(空)、俄にくらくなり降いだし、あはやと見るまに、篠をつく大雨となり、苦をもれば、乗合はうへを下へとさはぎたち、船頭もかくてははたらき自由ならず。やがて堤に船をこぎよせ、しばらくかゝりて、見合せけるが、こゝは伏見と大坂の半途にして、登り船も下りぶね(船)も、みな落合混雑し、がたびしと岸によりて、今やと霽(はれ)をまちいたるに、およそ一ツ時あまり過たるとおぼしき頃、漸(やうや)く雨やみ雲きれて、月の影八わた(八幡)山にさし出たるに、船中おの〳〵いさみたち、弥次郎北八も、とまひ(苦)きあけ、顔さし出して、此けいしよく(景色)をながめいたるが、弥次「ハアもふ何ン時だろふな。ときに北八、又こまつたことがあるわい。雪陣(せつちん)へゆきたくなつた」北八「ヱ、きたねへことばつかりいふ」弥次「どふも船ではできぬ。イヤさいわい、こゝにかゝつてゐるうち、ちよつくり土手へあがつて、やらかしてこよふ」北八「ホンニよその船でも、人が手水(てうづ)にあがるよふすだ。はやくそふしなせへ。イヤわつちもお相伴(しやうばん)がしたくなつた。モシ船頭さん、ちよつとあがつて来たいが、いゝかねへ」せんどう「用たしにならはやういてごんせ。わしらが今めしくてしもふと、いつきに船を出すさかい」弥次「わらじはどこだ」北八「ナニサはだしであがらふ。乗とき足をすゝげばいゝに」ト両人ふねよりつゝみ(堤)にあがりて、弥次「ナントいゝ景色だな。どこらでやらかそふ」北八「ヲツトそこには水溜りがある。もつとそちらへ。ア、なるほどいゝ月だ。

一刻を千金ヅゝの相場なら三十石のよど川の月

かくくちずさみて、おもはず勝景にみとれゐたるが、このうち、岸にかゝりゐたりし船ども、追く漕出すやふすに、北八弥次が乗たる船も、今出ると見へて、船頭どももやひ綱をとき、棹さしのべて、ふたりを呼たつるに、いづれのふねにも、乗合のうち、土手にあがりたるもの共、いちどきにおりたち混雑し、弥次郎北八、やう〳〵のことに、人をおし分、飛乗たるは、大坂八軒家の登り船なり。此ふたりあまりせんどう(船頭)によびたてられて、大きにうろたへ、今までのつて来りし、伏見の船と心え、そのつぎにならびて、かゝりゐたりし、大坂ののぼりぶねにとびのりたるが、とまの(苦)内くらく、まちがひたるふね(船)とも心付ず、ことさら此ふねにも、乗合のうち、つゝみ(堤)にのぼりたるものも、二三人あれば、それらかとおもひて、船中にも、たがひにかほ(顔)もかたちもしれざれば、これをとがむるものもなく、そのうちふね(船)は出るにまかせ、おの〳〵宵よりはなしつかれたるにや、おし合へし合、たがひにあし(足)をやりちがひとなし、ふしたりけるが、弥次郎北八もくらがりにまぎれ、そこらさぐりまはして、手ざはりよくにたればとて、人のふろしきづゝみを、わがつゝみとこゝろえ、引よせて、すぐにそれをまくら(枕)としてうちふし、それよりはぜんご(前後)もしらず、たかいびきなり。去ほどに、船は右にさほさしひだり(左)に綱引のぼるに、はやくもやはた山ざき(山崎)をあとになし、淀堤を打過、夜もあけちかくなりたる頃、伏見にこそは着たりける。苦もる影も白く、烏の声告わたるに、船つきたりと、乗合みな〳〵目をさまし立さはげば、北八弥次郎も苫打ひらきて、笠ふろしき包を手に引さげ、船頭があゆみ板わたすを、打わたりて岸にのぼり、ふな宿にいたるに、乗合の人〴〵いて爰に来るを見れば、見しりたる顔一人もなし。是はふしぎと、そこらうろ〳〵見廻しながら、弥次「ナント北八、おいらに酒をのませた隠居どのは、どふしたの」北八「さればの、そしてアノ長崎ものや越後同者どもは来そふなものだが、大かた爰へよらずにいつたと見へる。（後略）

（第六編下・第七編上下は京都見物。第七編下の最後に、）

それより壬生寺に参りて、こゝに葭簀(よしず)かどさきにたてよせたる、あやしの茶見世に引こまれて、其夜の宿とさだめうちふしたるが、あくる日嶋原を見物し、朱雀野(しゆじやくの)より、丹波街道をよこぎりに、淀の大はし(橋)にいたり、爰より下り船に打のりて、大坂へとおもむきける。

（とあり、第八編上の冒頭は伏見から昼船に乗って大坂に到着した処より始まり、淀川を下る途中の場面はない。）

押照や難波の津は、海内秀異(かいだいしうゐ)の大都会にして、諸国の賈船(こせん)、木津安治の両川口にみよし(艫)をならべ、碇をつらねて、こゝにもろ〳〵の荷物を鬻(ひさ)ぎ、繁昌の地いふばかりなし。殊更(ことさら)花の春は淀川に棹さして、さくらの宮(桜の宮)に遊び、網嶋の鮒卯に酔をもよほし、夏は難波新地の納涼(すずみ)に螢をかり、豆茶(まめちや)や(浮瀬)に腹をこやし、秋はうかむ瀬の月、冬は解船町(ときふねてう)の雪げしき、四季折々の詠(ながめ)

おほかる中に、目枯ぬ花の曲中は、いつもさかりの春のごとく賑ひ、道頓堀の芝居は、つねも顔みせのこゝちして群集絶ず。かゝる名誉の地を、見のこすも本意なしとて、かの弥次郎兵衛喜多八なるもの、ふし見の昼船に途中より飛乗して、はやくも大坂の八軒家にいたり、爰より船をあがりたるは、最早たそがれ時にして、東西をしらず、南北をわきまへざれば、人に尋ねとひつゝ、長町をさしてゆくほどに、堺筋通を南に、日本ばしへ出たりければ、宿引どもこゝに居合せ、両人を見かけて、宿の相談をしかくるに、早速きはまり、すぐさま、此長町の七丁目なる、分銅河内屋といふにぞつれゆきける。

十返舎一九　明和二年（一七六五）生まれ、駿府（静岡）城同心の子か。大坂　町奉行の武家奉公の後、寛政六年（一六九四）江戸に出て書肆蔦屋に寄食、洒落本・滑稽本・読本など手掛け、旅行ブームに乗り、享和二年（一八〇二）の『道中膝栗毛』初編以下一二冊、文化七年（一八一〇）の『続道中膝栗毛』初編以下二五冊刊行。天保二年（一八三一）没、六七歳。

資料10谷崎潤一郎『蘆刈』

君なくてあしかりけりと思ふにも いとゞ難波のうらはすみうき

まだおかもとに住んでいたじぶんのあるとしの九月のことであった。あまり天気のいい日だったので、ゆうこく、といっても三時すこし過ぎたころからふとおもいたってそこらを歩いて来たくなった。遠はしりをするには時間がおそいし近いところはたいがい知ってしまったしどこぞ二、三時間で行ってこられる恰好な散策地でわれもひともちょっと考えつかないようなわすれられた場所はないものかとしあんしたすえにいつからかいちど水無瀬の宮へ行ってみようと思いながらついおりがなくてすごしていたことにこころづいた。…（略）…

その御殿の遺跡は山城と摂津のくにざかいにちかい山崎の駅から十何丁ごく最近なのである。で、そのみなせのみやをとぶらうのがこの時刻から出かけるのにはいちばん手頃であった。やまざきまでなら汽車で行ってもすぐだけれども阪急で行って新京阪にのりかえればなお訳はない。それにちょうどその日は十五夜にあたっていたのでかえりに淀川べりの月を見るのも一興である。そうおもいつくとおんなこどもをさそうような場所がらでもないからひとりでゆくさきも告げずに出かけた。

山崎は山城の国乙訓郡にあって水無瀬の宮跡は摂津の国三島郡にある。されば大阪の方からゆくと新京阪の大山崎でおりて逆に引きかえしてそのおみやのあとへつくまでのあいだにくにざかいをこすことになる。わたしはやまざきというところは省線の駅の附近をなにかのおりにぶらついたことがあるだけでこのさいごくかいどうを西へあるいてみるのは始めてなのである。…（略）…

もとより気の利いた料理屋などのある町でないのは分っていたから一時のしのぎに体をぬくめさえすればいいのでとある饂飩屋の灯を見つけて酒を二合ばかり飲み狐うどんを二杯たべて出がけにもう一本正宗の罎を熱燗につけさせたのを手に提げながら饂飩屋の亭主がおしえてくれた渡し場へ出る道というのを川原の方へ下って行った。亭主はわたしが月を見るために淀川へ舟を出したいものだがというと、いやそれならば直きこの町のはずれから向う岸の橋本へわたす渡船がございます、渡船とは申しましても川幅が広うございましてまん中に大きな洲がございますので、こちらの岸から先ずその洲へわたし、そこからまた別の船に乗り移って向う岸へおわたりになるのですからそのあいだに川のけしきを御覧になってはとそうおしえてくれたのである。橋本には遊廓がございまして渡し船はちょうどその遊廓のある岸辺に着きますので、夜おそく十時十一時頃までも往来しておりますからお気に召したらいくたびでも行きかよいなされてゆっくりお眺めになることも出来ますとなおもいいそえてくれた親切を時に取ってうれしくおもいながらわたしはみちみちひいやりした夜風にほろよいの頬を吹かせつつあるいた。渡船場までの路は聞いたよりは遠い感じがしたけれども、辿りついてみると、なるほど川のむこうに洲がある。その洲の川下の方の端はつい眼の前で終っているのが分るのであるが、川上の方は渺茫としたうすあかりの果てに没して何処までもつづいているように見える。ひょっとするとこの洲は大江の中に孤立している島ではなくてここで桂川

が淀の本流に合している剣先なのではないか。なんにしても木津、宇治、加茂、桂の諸川がこのあたりで一つになり、山城、近江、河内、伊賀、丹波等、五カ国の水がここに集まっているのである。むかしの『澱川両岸一覧』という絵本に、これより少し上流に狐の渡しという渡船場があったことを記して渡の長サ百十間と書いているからここはそれよりもっと川幅がひろいかも知れない。そして今いう洲は川のまん中にあるのではなくずっとこちら岸に近いところにある。河原の砂利に腰をおろして待っているとはるかな向うぎしに灯のちらちらしている橋本の町から船がその洲へ漕ぎ寄せる、と、客は船を乗り捨てて、洲を横ぎって、こちら側の船の着いている汀まで歩いて来る。思えば久しく渡しぶねというものに乗ったことはなかったが子供の時分におぼえのある山谷、竹屋、二子、矢口などの渡しにくらべてもここのは洲を挟んでいるだけに一層優長なおもむきがあっていまどき京と大阪のあいだにこんな古風な交通機関の残っていたことが意外でもあり、とんだ拾いものをしたような気がするのであった。

　前に挙げた淀川両岸の絵本に出ている橋本の図を見ると、月が男山のうしろの空にかかっていてをとこやま峰さしのぼる月かげにあらはれわたるよどの川舟という景樹の歌と、新月やいつをむかしの男山という其角の句とが添えてある。わたしの乗った船が洲に漕ぎ寄せたとき男山はあだかもその絵にあるようにまんまるな月を背中にして鬱蒼とした木々の繁みがびろうどのようなつやを含み、まだ何処やらに夕ばえの色が残っている中空に暗く濃く黒ずみわたっていた。わたしは、さあこちらの船へ乗って下さいと洲のもう一方の岸で船頭が招いているのを、いや、いずれあとで乗せてもらうがしばらく此処で川風に吹かれて行きたいからとそういい捨てると露にしめった雑草の中を踏みしだきながらひとりでその洲の剣先の方へ歩いて行って蘆の生えている汀のあたりにうずくまった。まことに此処は中流に船を浮かべたのも同じで月下によこたわる両岸のながめをほしいままにすることが出来るのである。わたしは月を左にし川下の方を向いているのであったが川はいつのまにか潤おいのあるあおい光りに包まれて、さっき、ゆうがたのあかりの下で見たよりもひろびろとしている。…（略）…

（草むらより現れた男（芹橋慎之助の子）と話し合う）

……まぶかに被っている烏打帽子のひさしが顔の上へ蔭をつくっているので月あかりでは仔細にたしかめにくいけれどもとしはわたしと同年輩ぐらいであろう、痩せた、小柄な体に和服の着流しで道行のように仕立てたコートを着ている。失礼ながら大阪からおいでになりましたかと言葉のふしぶしに京よりは西のなまりがあるのでたずねると、さようでございます、大阪の南の方にささやかな店を持ちまして骨董をあきなっておりますという。散策のおかえりがけでもありますかというと、いえ、いえ、今夜の月をみるつもりで夕刻から出て来たのでございますが例年ならば京阪電車で出かけますところをことしは廻りみちをして、新京阪へ乗りまして、このわたしをわたりましたのが仕合わせでございましたと腰のあいだから煙草入れの筒を抜き取って煙管にきざみをつめながらいうのである。と仰っしゃるとまいねん何処ぞ場所をさだめて月見にいらっしゃるのですか。さようでございます、と、そういってからたばこに火をつけるあいだ黙っていてまいねんわたくしは巨椋の池へ月見にまいるのでございますがこよいはからずもこのところを通りましてこの川中の月をみることが出来ましたのは何よりでございます。…（略）…

（男の話。父芹橋慎之助の若くして夫を亡くした粥川遊（お遊さま）への慕情、遊の妹小曽部静と結婚、静は慎之助と遊の相思を察し、型だけの夫婦生活、遊・慎之助・静の奇妙な関係。遊の一子の病死を機に遊の再婚、遊は巨椋池近くの別荘で暮らす。遊を垣間見る慎之助に連れられて名月の夜、巨椋池を歩いた男）

谷崎潤一郎　後述の谷崎潤一郎略年譜参照

新京阪　大正一一年（一九二二）設立の新京阪鉄道株式会社が、天神橋―淡路―京都四条大宮間の路線施設を計画、昭和三年（一九二八）淡路―西院間開業。天神橋から西院間を新京阪線と呼称した。後、京阪神急行電鉄となり、現在、阪急電鉄京都線。

巨椋池　京都府伏見区・宇治市・久世郡久御山町にあった東西四キロ、南北三キロの池。木津川・桂川・宇治川が合流、古代より干拓が行われ、豊臣

秀吉も伏見城築城時に堤防を改築。昭和八年（一九三三）～一六年、一大干拓工事→淀競馬場など完成。

（3）新淀川

新淀川（明治四三年完成の新淀川については稿を改めたい）

明治一八年（一八八五）夏、大洪水、堤防決壊二一二ヶ所、浸水家屋七万一千二四九戸、死者七八人。

明治二九年（一八九六）河川法案・淀川改修案が国会で可決。工事着工。

明治四三年（一九一〇）新淀川完成。

第三章　神崎川

神崎川は、大阪市東淀川区南江口町で淀川から分岐し、東淀川区相川町と吹田市高浜町で安威川と合流、東淀川区と吹田市、淀川区と豊中市の境界を流れ、淀川区加島と尼崎市神崎町で猪名川と合流、西淀川区と尼崎市の境界を流れ、河口付近で左門殿川と中島川に分岐して西淀川区西島・中島で大阪湾に流入する。古代や中世では三国川と呼ばれていた。『続日本紀』延暦四年（七八五）正月一四日条には三国川開削の記事が載る。

資料11『続日本紀』延暦四年正月十四日条

遣レ使堀二摂津国神下・梓江・鯵生野一、通二于三国川一

①「三国川に通す」＝以前より三国川存在

②「三国川を通す」＝新しく三国川を開削

神崎川の河港

江口（淀川との分岐点）

神崎（猪名川との合流点、右岸）

加島（蟹島、猪名川との合流点、左岸）

大物（川尻、神崎川河口）

明治19年（1886）陸軍参謀本部の外局「陸地測量部」作成２万分の１地形図参照。
まだ新淀川は開削されておらず、神崎川と旧淀川（大川）との間には中津川が流れている。

第一節　江口

延暦四年（七八五）淀川と三国川の連結→京都と瀬戸内海の直結。江口宿・江口の遊女の発展。→滝川政次郎氏『遊女の歴史』日本歴史新書 至文堂昭40

資料12大江匡房『遊女記』（原漢文）

山城国与渡津より、巨川に浮びて西に行くこと一日、これを河陽と謂ふ。山陽・西海・南海の三道を往返する者は、この路に遵らざるはなし。江河南し北し、邑々処々に流れを分ちて、河内国に向ふ。これを江口と謂ふ。蓋し典薬寮の味原の牧、掃部寮の大庭の庄なり。

摂津国に到りて、神崎・蟹島等の地あり。門を比べ戸を連ねて、人家絶ゆることなし。倡女群を成して、扁舟に棹さして旅舶に着き、もて枕席を薦む。声は渓雲を遏め、韻は水風に飄へり。経廻の人、家を忘れずといふことなし。洲産浪花、釣翁商客、舳艫相連なりて、殆に水なきがごとし。蓋し天下第一の楽しき地なり。

江口は観音が祖を為せり。中君・□・小馬・白女・主殿あり。蟹島は宮城を宗と為せり。如意・香炉・孔雀・立枚あり。神崎は河菰姫を長者と為せり。孤蘇・宮子・力命・小児の属あり。皆これ倶尸羅の再誕にして、衣通姫の後身なり。上は卿相より、下は黎庶に及るまで、牀筵に接き慈愛を施さずといふことなし。また妻妾と為りて、身を没するまで寵せらる。賢人君子といへども、この行を免れず。南は住吉、西は広田、これをもて徴嬖を祈るの処と為す。殊に事る百大夫は、道祖神の一名なり。人別にこれを刻れば、数は百千に及べり。能く人の心を蕩す。また古風ならくのみ。

長保年中、東三条院は住吉の社・天王寺に参詣したまひき。この時に禅定大相国（藤原道長）は小観音を寵せられき。長元年中、上東門院また御行ましまし き。この時に宇治大相国（藤原頼通）は中君を賞ばれき。延久年中、後三条院は同じくこの寺社に幸したまひき。狛犬・犢等の類、舟を並べて来れり。人神仙を謂へり。近代の勝事なり。…（後略）

大江匡房　長久二年（一〇四一）生。文章得業生、後三条天皇・白河天皇の信任、荘園整理に功績、正二位権中納言に昇進。平安後期の代表的学者、太宰権帥を兼務→「江帥」。他に『本朝神仙伝』『江家次第』『江談抄』など。天永二年（一一一一）没、七一歳。

『遊女記』　匡房の晩年の執筆か。江口・神崎・蟹島の遊女を記述。『傀儡子記』とともに平安時代の遊女史料。「遊女に同情的で、当時の中流貴族の性格・嗜好を示す」（大曾根章介氏）。

大曾根章介氏校注『遊女記』岩波日本思想大系８『古代　政治社会思想』

（1）西行と江口の遊女

資料13『山家集』

天王寺へまゐりけるに雨の降りければ、江口と申所に宿を借りける

新古今十
世の中を厭ふまでこそかたからめ 仮のやどりををしむ君哉

返し

新古今十
いへを出づる人とし聞けばかりの宿 心とむなと思ふばかりぞ

資料14『西行上人集』　李花亭文庫本（久保田淳氏編『西行全集』）

天王寺にまいりて、雨のふりて、江口と申所にて、宿をかり侍しに、かさゞりければ

世中をいとふまでこそかたからめ かりの宿をもおしむ君哉

返し　　遊女たへ

世をいとふ人とし聞ばかりの宿に 心とむなと思ふばかりぞ

かく申て、やどしたりけり

資料15『撰集抄』巻第九　江口遊女寄事（久保田淳氏編『西行全集』）

過ぬる長月廿日あまりのころ、江口といふところをすぎ侍しに、家は南北の河にさしはさみ、心は旅人の行来の舟を思遊女のありさま、いと哀にはかなきものかなと見たてりし程に、冬をまちえぬむら時雨のさえくらし

侍りしかば、けしかるしづがふせやにたちより、晴間待まのやどをかり侍しに、あるじの遊女ゆるすけしきの見え侍らざりしかば、なにとなく、

　世中をいとふまでこそかたからめ かりのやどをもおしむ君哉

とよみて侍りしかば、あるじの遊女うちわらひて、

　家を出る人としきけばかりの宿に 心とむなと思ふばかりぞ

と返して、いそぎうちにいれ侍りき。たゞ時雨のほどのしばしのやどゝせむとこそ思ひしに、此歌の面白さに、一夜のふしどゝし侍りき。

　此あるじの遊女は、いまは四十あまりにもやなり侍らむ。みめことがら、さもあてやかにやさしく侍りき。夜もすがら、何となき事どもかたり侍し中に、この遊女のいふやう、いとけなかりしより、かゝる遊女と成侍りて、年比その振舞をし侍れども、いとよしなく覚て侍り。女はことに罪のふかきと承に、此振舞をさへし侍ること、げに前の世の宿習のほど思しられ侍りて、うたてしく覚侍りしが、此二、三年は此心いとふかく成侍りしうえ、としもたけ侍りぬれば、ふつにそのわざをもし侍らぬなり。おなじ野寺の鐘なれども、夕はものゝかなしくて、そゞろに涙にくらされて侍り。此かりそめのうき世には、いつまでかあらむずらんと、あぢきなくおぼえ、暁には心すみて、わかれをしたふ鳥のねなんど、ことに哀に侍り。しかあれば、夕は、こよひすぎなばいかにもならむと思ひ、暁には、此夜あけなば様をかへて思ひとゞむとのみ思侍れども、年をへておもひなれにし世中とて、雪山の鳥の心ちして、いまゝでつれなくてやみぬるかなしさよとて、よゝとなくめり。此事聞に、哀にありがたく覚て、墨染の袖しぼりかねて侍りき。夜明侍りしかば、名残おほく侍れども、再会を契てわかれ侍りぬ。

　さて、帰る道すがら、貴くおぼえて、いくたびか涙をもおとしけん。今更心をうごかして、草木を見るにつけても、かきくらさるゝ心地し侍り。狂言綺語の戯、讃仏乗の因とはこれかとよ。かりの宿をも惜君哉といふこしおれを、われよまざらましかば、此遊女やどをかさざらまし。しからば、などてか、かゝるいみじき人にもあひ侍るべき。此君ゆへに、我も聊(いささか)の心を須臾(しゅゆ)の程、おこし侍りぬれば、無上菩提の種をも、いさゝか、などかきざゝざるべきと、うれしく侍り。

　さて、約束の月に尋まかるべきよし思侍しに、或上人の都より来て、うちまぎれて、むなしく成ぬる本意なさに、たよりの人をかたらひて、消息し侍しに、かく申送侍りき。

　かりそめの世には思ひをのこすなとき、し言葉わすられもせず

と申遣て侍しに、たよりにつけて、その返し侍りき。いそぎひらひて侍しかば、世にもおかしきてにて、

　わすれずとまづきくからに袖ぬれて 我身もいとふ夢の世中

とかきて、又、おくに、さまをこそかへ侍りぬれ。しかはあれども、心はつれなくてなむとかきて、又かく、

　かみをろし衣の色はそめぬるに 猶つれなきは心なりけり

とかきて侍き。見しに、涙そゞろにもろくて、袂にうけかねて侍りけり。さもいみじかりける遊女にてぞ侍りける。

　さやうの遊人なんどは、さもあらむ人になじみあいせらればやなんどこそ思めるに、その心をもてはなれて、一筋に後の世に心をかけん事、ありがたくぞ侍る。よもおろ〳〵の宿善にても侍らじ。世ゝにたくはへをきぬる戒行どもの、江口の水にうるほされぬるこそ。歌さへ面白ぞ侍る。さても又、夜ゐには、此夜すぎなばと思ひ、暁には、あけなばと涙をながすとかたり侍りし心の、つゐにうちつゞきぬるにや、さまかへぬるは。其後も尋まかりたく侍しを、様かへて後は、江口にもすまれずとやらん聞侍しかば、終にむなしくてやみ侍りき。彼遊女の最後のありさま、なにとか侍べきと、返ゝとゆかしく侍り。

　よひ暁に心のすみけん、ことはりにぞ侍る。なにとあることやらん、われらまでも、夕は物がなしくて、荻のはにそよめきわたる秋かぜ、嵐かとすれば、深山べは木の葉みだれて、もの思時雨にまがふ木の葉にも、袂をぬらすは夕ぐれの空也。長松洞暁の、さびたる猿のこゑを聞、胡鴈(こがん)のつらなれる音をきき侍るには、その事となく心のすみて、すぞろになみだのこぼるゝに侍り。

『撰集抄』　全九巻、西行述作体裁の仮託の説話集。鎌倉時代中期、一三世紀後半成立。

資料16謡曲『江口』

1 天王寺参詣の僧（ワキ・ワキツレ）登場、江口到着。

2 僧は里の男（アイ）に江口の旧跡を尋ねる。

3 西行の古歌を口ずさんで懐旧する。

ワキ「これは諸国一見の僧にて候。われいまだ津の国天王寺に参らず候ふほどに、このたび思ひ立ち天王寺に参らばやと思ひ候。

ワキ・ワキツレ「都をば、まだ夜深きに旅立ちて、まだ夜深きに旅立ちて、淀の川舟行く末は、鵜殿の蘆のほの見えし、松の煙の波寄する、江口の里に着きにけり、江口の里に着きにけり。（アイと問答）。

ワキ「さてはこれなるは江口の君の旧跡かや。痛はしや、その身は土中に埋むといへども、名は留まりて今までも、昔語りの旧跡を、今見ることのあはれさよ。げにや西行法師、このところにて一夜の宿を借りけるに、主の心なかりしかば、「世の中を厭ふまでこそ難からめ、仮の宿りを惜しむ君かな」と詠じけんも、このところにてのことなるべし。あら痛はしや候。

4 里の女（前シテ）が現れ、西行と遊女との問答の真意を説き、江口の君の幽霊と名乗って消える。

シテ「のうのうあれなるおん僧、今の歌をば何と思ひ寄りて口ずさみ給ひ候ふぞ。

ワキ「不思議やな、人家も見えぬ方よりも、女性一人来たりつつ、今の詠歌の口ずさみを、いかにと問はせ給ふこと、そもなにゆゑに尋ね給ふぞ。

…（略）…

地謡「江口の君の幽霊ぞと、声ばかりして失せにけり、声ばかりして失せにけり。（中入）

5 里の男が再び登場。性空上人の前に普賢菩薩が遊女となって現われた奇瑞を語、供養を勧める。

6 僧たちが供養をすると、江口の遊女の亡霊（後ジテ）が二人の遊女（ツレ）と舟に乗って現われて遊女の身を嘆き、舟遊びを見せ、棹の歌を歌い、実相無漏、随縁真如の悟道を舞う。

シテ・ツレ「秋の水、漲り落ちて去る舟の、

シテ「月も影さす棹の歌、

地謡「歌へや歌へ、うたかたのあはれ昔の恋しさを今もいふ（言ふ＝遊女）ぢよの舟遊び、世をわたる一節を、歌ひていざや遊ばん。…（略）…

シテ「しかるにわれらたまたま受けがたき人身を受けたりといへども、

地謡「罪業深き身と生まれ、ことに例少なき河竹の、流れの女となる前の世の報ひまで、思ひやるこそ悲しけれ。

7 遊女は普賢菩薩、舟は白象となって西の空へ消える。

第二節　神崎

（1）普賢菩薩となる遊女

資料17『古事談』巻第三　九六（原漢文）岩波新古典大系41

書写上人、生身の普賢を見奉るべき由祈請し給ふに、夢の告げ有りて云はく、「生身の普賢を見奉らむと欲はば、神崎の遊女の長者を見るべし」と云々。仍りて悦び乍ら神崎に行き向ひて、長者の家を相ひ尋ぬる処、只今京より上日の輩、群れ来たりて遊宴乱舞の間なり。長者、横座に居て、鼓を執りて乱拍子の上句を弾く。其の詞に云はく、「周防むろづみの中なるみたら井に風はふかねどもささらなみたつ」と云々。其の時聖人、奇異の思ひを成して、眠りて合掌する時、件の長者、普賢の皃を応現し、六牙の白象に乗り、眉間の光を出だして、道俗の人を照らし、微妙の音声を以て説きて曰はく、「実相無漏の大海に、五塵六欲の風は吹かねども、随縁真如の波たたぬときなし」と云々。其の時聖人、信仰恭敬して、感涙を拭ふ。目を開くる時は、又た元の如く女人の皃と為りて、「周防室積」を弾き給ひ、眼を閉づる時は、又た菩薩の形を現じて法文を演ぶ。此くの如き数ヶ度、敬礼して後、聖人涕泣し乍ら退き帰る。時に件の長者俄かに座を起ちて、閑道より聖人の許に追ひ来たりて示して云はく、「口外に及ぶべからず」と謂ひ了りて、即ち逝去す。時に異香空に満つ、と云々。長者俄かに頓滅する間、遊宴の興醒む、と云々。

参考18『後拾遺和歌集』巻二〇　雑六

書写の聖、結縁経供養し侍りけるに、人々あまた布施

送り侍りける中に思ふ心やありけん、しばし取らざりければ詠める　　遊女宮木

津の国の難波のことか法ならぬ　遊び戯れまでとこそ聞きけ

書写の聖　性空上人。生年不明、書写山円教寺創建。花園上皇の帰依、寛弘四年（一〇〇七）没。

（2）法然上人と遊女の入水

参考19『**法然上人絵伝**』**巻三十四　第五段**　京都知恩院蔵四十八巻本

同国（播磨）室の泊に着き給ふに、小船一艘近付き来る。これ遊女が船なりけり。遊女申さく、「上人の御船の由承りて推参し侍るなり。世を渡る道区々なり。如何なる罪ありてか、斯かる身となり侍らむ。この罪業重き身、如何にしてか後の世助かり候べき」と申しければ、上人哀れみての給（宣）はく、「実にも左様にて世を渡り給ふらん罪障、真に軽からざれば、酬報又告ば、酬報又計り難し。若し斯からずして、世を渡り給はぬべき計り事あらば、速やかにその業を捨て給ふべし。若し余の計り事もなく、又、身命を顧みざる程の道心未だ起こり給はずば、唯、その儘にて、専ら念仏すべし。弥陀如来は、左様なる罪人の為にこそ、弘誓をも立て給へる事にて侍れ。唯、深く本願を憑みて、敢へて卑下する事なかれ。本願を憑みて念仏せば、往生疑ひあるまじき」由、懇ろに教へ給ひければ、遊女随喜の涙を流しけり。

後に上人の給（宣）ひけるは、「この遊女、信心堅固なり。定めて往生を遂ぐべし」と。帰洛の時、こゝにて尋ね給ひければ、「上人の御教訓を承りて後は、この辺り近き山里に住みて、一途に念仏し侍りしが、幾程なくて臨終正念にして往生を遂げ侍りき」と人申しければ、「為つらん〳〵」とぞ仰せられける。

法然上人　長承二年（一一三三）生れ、美作押領使漆間時国の子。九歳出家、一五歳比叡山入山、法名源空。源信の『往生要集』により浄土宗の開祖。九条兼実（月輪殿）のために『撰択本願念仏集』著述。承元元年（一二〇七）専修念仏禁止、讃岐に配流、同年赦免。建暦二年（一二一二）没、八〇歳。

『**法然上人行状絵伝**』（国宝）、巻三四絵五に法然が室津（兵庫県たつの市御津町）で舟に乗って遊女に説経（遊女の入水する場面はない）

資料20『**珠光山遍照寺如来院縁起**』　尼崎市如来院蔵

摂津国河辺郡狩野港珠光山遍照寺如来院者聖武天皇勅願所、行基菩薩之開基也……

土御門院建永二年三月源空上人坐事、謫于讃岐国、出都自鳥羽乗船、達于神崎、将解纜於蒼海時、遊女五人作礼上人、具足十念畢投河命終、今有五人塚遊女塚是也、上人憐厭離之情於釈迦堂為念仏廻向、下讃岐国、無幾恩赦、帰洛途経神崎、於釈迦堂修行二夜三日念仏、以為遊女菩提也、道俗群衆渇仰上人…

資料21『**摂州神崎遍照寺如来院之事**』　尼崎市如来院蔵

法然上人建永二年三月十六日鳥羽ヨリ川船ニ乗下リ給ニ、摂州神崎ニツキ給時、辻子口ノ遊女五人参テ上人ノ教化ヲウケ、一念発起シテ身ヲ西方ニナケウツテ神崎動上ノ橋ヨリ五人共川ニ身ヲ投テ空成、上人是ヲ憐、五人一所ニ塚ニ籠、御廻向在シ、其塚今ニ神崎ニアリ、遍照寺釈迦堂ニヲイテ、上人為遊女御廻向在テ、海船ニ乗ウツリテ西海ニ趣、……同（承元元年）年十二月八日勅免ニヨツテ帰洛、則海船ニ乗リ、ホトナク摂州神崎ニツキ給イテ、彼ノ遊女塚ニ上人参、念仏廻向在テ、釈迦堂ニヲイテ二夜三日念仏修行在ニ、村里ノ衆人多クアツマリ、上人ノ帰洛勅免ヲ悦、

この他、神崎での遊女入水に、『十巻伝』（寛文六年（一六六六）刊）、『正源明義抄』（正保四年（一六四七）刊）、『法然上人秘伝遠流記』（貞享三年（一六八六）刊）などがある↑梅溪昇氏「法然遺跡寺院としての来迎院の活動について」『藤堂恭俊博士古稀記念浄土宗典籍研究』（一九八八年）

資料22『**法然上人絵伝**』　大阪歴史博物館蔵

絹本着色33×192　筆写は室町時代、原本の成立↑奥書「建長五年正月二十五日 湛空（花押）」

一〇段の場面と詞章

①月輪殿師暇乞之時、
②師都出之時、
③鳥羽ヨリ師船乗給時、
④師神崎付給時、
⑤遊女入水往生相、
⑥兵庫之沖鬼出、師鬼ヲ勧化給其文　有情輪廻生六道　猶如車輪無始終　或為父母為男女　世々生々互有恩
⑦高砂之浦付給時、
⑧室津付遊女来　師勧給則名号　書授給時之相
⑨鬼神往生相
⑩師都出船中瑞相明星岩屋之趣、絵相顕置也

参考23『発心集』第三巻　或る女房、天王寺に参り、海に入る事

鳥羽院の御時、ある宮腹に、母と女と同じ宮仕へする女房ありけり。年比へて後、此の女、母に先立ちてはかなくなりにけり。……かくしつつ三年と云ふ年、……京をば過ぎて鳥羽の方へ行けば、……天王寺へまうで着きたりける。かくて、日毎に堂にまゐりて、拝みめぐる程に、……三七日が間、念仏する事二心なし。日数満ちて後、云ふやう、「いまは京へ上るべきにとりて、音に聞く難波の海のゆかしきに、見せ給ひてんや」と云へば、「いとやすき事」とて、家の主しるべして、浜に出でつつ、則ち舟に相ひ乗りて、こぎありく。いと面白しとて、「今少し、今少し」と云ふ程に、おのづから澳に遠く出でにけり。かくて、とばかり西に向ひて念仏する事しばしありて、海にづぶと落ち入りぬ。「あな、いみじ」とて、まどひして取り上げんとすれど、石などを投げ入るるが如くにして沈みぬれば、「あさまし」とあきれさわぐ程に、空に雲一むら出で来て、舟にうちおほひて、かうばしき匂ひあり。家主、いと貴くあはれにて、泣く泣くこぎ帰りにけり。その時、浜に人の多く集まりて物を見あひたるを、知らぬやうにて問ひければ、「澳の方に紫の雲立ちたりつる」なんど云ひける。

（後略）

極楽往生の入水↓補陀落浄土への入水（補陀落渡海）が有名。

参考24上田秋成『春雨物語』　宮木が塚

（大意）父納言の君、零落、だまされて娘は遊女に売られる↓伊丹の名家の若者太十の寵愛を受ける。神崎に着いた法然上人より念仏を授けられ入水。

（3）義経の逆櫓

資料25『平家物語』巻第十一　逆櫓

（元暦二年）同二月三日、九郎大夫判官義経、都をたつて、摂津国渡辺より船揃へして、八嶋へすでに寄せんとす。参河守範頼も同日に都を立つて、摂津国神崎より兵船を揃へて、山陽道へおもむかんとす。…

同十六日、渡辺・神崎両所にて、この日ごろ揃へける舟ども、艫綱すでに解かんとす。おりふし北風木を折つて激しう吹ければ、大浪に舟どもさんざんに打ち損ぜられて、出すに及ばず。修理のために其日はとゞまる。……梶原申けるは、「今度の合戦には、舟に逆櫓をたて候ばや」。判官「逆櫓とは何ぞ」。梶原「馬は駆けんと思へば弓手へも馬手へもまはしやすし。舟はきつと押し戻すが大事に候。艫舳に櫓を立てちがへ、脇楫を入れて、何方へもやすう押すやうにし候ばや」と申ければ、判官宣けるは、「軍といふ物は一引きも引かじと思ふだにも、間悪ければ引くは常の習なり。もとより逃げ設けしてはなんのよからうぞ。まづ門出の悪さよ。」……

二月十六日の丑の剋に、渡辺・福島をいでて、明くる卯の時に阿波の地にこそ吹き着けたり。

資料26幸若舞『築島』　岩波新古典大系59『舞の本』

平清盛は福原に新都を定め、築港を思い立つ。国綱を奉行に、安倍安氏の占文で始めた工事が失敗し、三十人を召し捕って人柱を立てる。一門の

人々は人柱の中止を進言するが、清盛は聞き入れない。三十人目の人柱、修行者の刑部左衛門国春は、行方不明の娘名月女を探して行脚中。名月女は父の運命を知り、夫の家包と助命の奔走をして許される。人柱を立てる刻限に、童の松王が人柱の身替りを申し出る。皆釈放され、一万部の法華経と共に松王は沈められる。工事は成就し経の島と命名。

第三節　大　物

大物　神崎川河口　元和四年（一六一八）戸田氏鉄の尼崎城築城により大物　港の家屋・寺院など西に移転↓現在の寺町

（1）義経と静御前

資料27『義経記』巻第四　都落ちの義経一行、四国に向かう途中、暴風雨↓大物に漂着↓大物合戦

その日判官軍に勝ちすまし給ひけり。御舟の中にも手負ふ者十六人、死ぬるは八人ぞ有りける。死したる者をば、敵に首を取られじと、大物の沖にぞ沈めける。

其日は御舟にて日を暮し給ふ。夜に入りければ人々皆陸に上げ奉り給ひて、志は切なけれども斯くては叶ふまじとて、皆方々へぞ送られける。二位大納言の姫君は駿河次郎承つて送り奉る。久我大臣殿の姫君をば喜三太が送り奉る。その外残りの人々は皆縁々に付けてぞ送り給ひける。中にも静をば志深くや思はれけん、具し給ひて、大物浦をば立ち給ひて、渡辺に着いて、明くれば…

資料28謡曲『舟弁慶』

ワキ（弁慶）「おん急ぎ候ふほどに、これははや大物の浦におん着きにて候。それがし存じの者の候ふ間、おん宿のことを申し付けうずるにて候…

ワキ「いかにわが君へ申し上げ候。恐れ多き申しごとにて候へども、まさしく静はおん供と見え申して候、今の折節なにとやらん似合はぬやうにござ候へば、あつぱれこれよりおん返しあれかしと存じ候。

子方（義経）「ともかくも弁慶計らひ候へ

ワキ「畏つて候。（橋掛かりより幕に向って）いかにこの屋の内に静のおん入り候ふか。君よりのおん使に武蔵が参りて候。

シテ（静）「武蔵殿とはあら思ひ寄らずや。何のためのおん使にて候ふぞ。

ワキ「さん候只今参ること余の儀にあらず。わが君の御諚には、これまでのおん参り返すがへすも神妙に候。さりながら、只今は似合はぬやうに候へば、これよりおん帰りあれとのおん事にて候。

シテ「これは思ひも寄らぬ仰せかな。いづくまでもおん供とこそ思ひしに、頼みても頼みなきは人の心なり。あらなにともなや候。

ワキ「さておん返事をばなにと申し候ふべきぞ。

シテ「みづからおん供申し、君のおん大事になり候はば、留まり候ふべし。…よくよく物を案ずるに、これは武蔵殿のおん計らひと思ひ候ふほどに、わらは参り直におん返事を申し候ふべし。

ワキ「それはともかくもおん計らひにて候。さらばおん参り候へ。…いかに申し上げ候。静のおん参りにて候。

子方「いかに静、このたび思はずも落人となり落ち下るところに、これまで遥々来たる心ざし、返すがへすも神妙なり。さりながら遥々の波涛を凌ぎ下らんこと然るべからず。まづこのたびは都に上り、時節を待ち候へ。

シテ「さてはまことにわが君の御諚にて候ふぞや…

子方「いかに弁慶、静に酒を勧め候へ。

ワキ「畏つて候。げにげにこれはおん門出での行く末千代ぞときくの盃。静にこそは勧めけれ。

シテ「わらはも君のお別れ、遣る方なさにかき昏れて、涙にむせぶばかりなり。

ワキ「いやいや、これは苦しからぬ。旅の舟路の門出の和歌。ただひとさしと勧むれば。

シテ「その時、静は立ち上がり、時の調子を取りあへず。渡口の郵船は風静まつて出づ、波頭の謫所は日晴れて見ゆ。

ワキ「これに烏帽子の候。召され候へ。

シテ「立ち舞ふべくもあらぬ身の、袖うち振るも恥ずかしや。…

地謡「舟子ども、はや艫綱をとくとくと、はや艫綱を疾く疾くと、勧め申せ

ば判官も旅の宿りを出で給へば、

シテ「静は泣く泣く

地謡「烏帽子直垂脱ぎ捨てて、涙にむせぶおん別れ、見る目もあはれなりけり。見る目もあはれなりけり。

（2）一宮御息所の略奪と武文の自刃

資料29『太平記』巻第十八　春宮還御事付一宮御息所事

一宮（後醍醐天皇第一皇子尊良親王）が「賀茂ノ糺ノ宮ヘ詣サセ給ヒ」帰途、「誰ガ栖宿トハ不知、墻ニ苔ムシ瓦ニ松生テ、年久ク住荒シタル宿ノ物サビシ気ナルニ、撥音気高ク青海波ヲゾ調ベタル。「怪シヤ如何ナル人ナルラン」ト、洗墻ニ御車ヲ駐メサセテ、遙ニ見入サセ給ヒタレバ、見ル人有トモ不レ知体ニテ、暮居空ノ月影ノ、時雨ノ雲間ヨリ幽ナト顕レ出タルニ、御簾ヲ高ク巻上テ、年ノ程二八許ナル女房ノ秋ノ別ヲ慕フ琵琶ヲ弾ズルニテゾ有ケル」→「絵ニカキタリシ形ニダニ、御心ヲ悩サレシ御事也。マシテ実ノ色ヲ被二御覧一テ、何ニセント恋忍バセ給モ理哉」

→今出川右大臣公顕の息女と判明→今出川邸の歌会に出座。饗宴の後、「時節辺ニ人モ無テ、灯サヘ幽ナレバ、妻戸ヲ少シ押開テ内ニ入セ給タルニ、女ハ驚ク貌ニモ非ズ、閑ヤカニモテナシテ、ヤハラ衣引被テ臥タル化妝、云知ラズナヨヤカニ、閑麗ナリ。宮モ傍ニ寄伏給テ、有シナガラノ心尽シ、哀ナル迄ニ聞ヘケレ共、女ハイラヘモ申サズ、只思ヒニシホレタル其気色、誠ニ匂深シテ、花薫リ月霞ム夜ノ手枕ニ、見終ヌ夢ノ化アル御心迷ニ……」→「其後ヨリハ、彼方此方ニ結ビ置レシ心ノ下紐打解テ、小夜ノ枕ヲ川嶋ノ水ノ心モ浅カラヌ御契ニ成シカバ、生テハ偕老ノ契深ク、又死テハ同苔ノ下ニモト思召通シテ……」

→「又天下ノ乱出来テ（元弘の変）、一宮ハ土佐ノ畑ヘ被流サセ給シカバ、御息所ハ独都ニ留ラセ給テ……」→「只一人召仕レケル右衛門府生秦武文ト申随身ヲ御迎ニ京ヘ上セラル」→「御文ヲ捧タリ。急ギ披テ御覧ゼラルニ、ゲニモ御思ヒノ切ナル色サモコソト覚テ、言ノ葉毎ニ置露ノ、御袖ニ余ル許ナリ。「ヨシヤ何ナル夷ノ栖居ナリトモ、其憂ニコソ責テハ堪メ」トテ、既ニ御門出有ケレバ、武文甲斐々々敷御輿ナンド尋出シ、先尼崎マデ下シ進セテ、渡海ノ順風ヲゾ相待ケル」

→筑紫の武士松浦五郎の横恋慕→松浦の郎等三十余人の侵入→「武文ハ京家ノ者ト云ナガラ、心剛ニシテ日比モ度々手柄ヲ顕シタル者ナリケレバ」→「傍ナル在家ニ火ヲ懸テ、又喚テゾ寄タリケル。武文心ハ武シトイヘ共、浦風ニ吹覆ハレタル烟ニ目暮テ、可レ防様モ無リケレバ、先御息所ヲ掻負進セ、向フ敵ヲ打払テ、澳ナル船ヲ招キ、「何ナル舟ニテモアレ、女性暫乗進セテタビ候ヘ。」ト申テ、汀ニゾ立タリケル。舟シモコソ多カルニ、松浦ガ迎ニ来タル舟是ヲ聞テ、一番ニ渚ヘ差寄タレバ、武文大ニ悦デ、屋形ノ内ニ打置奉り、取落シタル御具足、御伴ノ女房達ヲモ、舟ニ乗ントテ走帰タレバ、宿ニハ早火懸テ、我方様ノ人モナク成ニケリ。松浦ハ適我舟ニ此女房ノ乗セ給タル事、可レ然契ノ程哉ト無限悦テ、「是マデゾ。今ハ皆舟ニ乗レ。」トテ、郎等・眷属百余人、捕物モ不二取敢一皆此舟ニ取乗テ、眇ノ澳ニゾ漕出シタル。武文渚ニ帰来テ、「其御舟被レ寄候ヘ。先ニ屋形ノ内ニ置進セツル上臈ヲ、陸ヘ上進セン。」ト喚リケレドモ、「耳ニナ聞入ソ。」トテ、順風ニ帆ヲ上タレバ、船ハ次第ニ隔リヌ。又手繰スル海士ノ小船ニ打乗テ、自櫓ヲ推ツ、何共シテ御舟ニ追著ントシケレ共、順風ヲ得タル大船ニ、押手ノ小舟非レ可二追付一。遙ノ沖ニ向テ、挙レ扇招キケルヲ、松浦ガ舟ニドット笑声ヲ聞テ、「安カラヌ者哉。其儀ナラバ只今ノ程ニ海底ノ龍神ト成テ、其舟ヲバ遣マジキ者ヲ。」ト忿テ、腹十文字ニ掻切テ、蒼海ノ底ニゾ沈ケル。」

→「其夜ハ大物ノ浦ニ碇ヲ下シテ世ヲ浦風（浪＝浦）ニ漂ヒ給フ。明レバ風能成ヌトテ、同ジ泊リノ船共、帆ヲ引梶ヲ取リ、己ガ様々漕行ケバ、都ハ早迹ノ霞ニ隔リヌ。」→「阿波ノ鳴戸ヲ通ル処、俄ニ風替リ、塩向フテ、此船更ニ不二行遣一。」→「船中ノ上下異口同音ニ観音ノ名号ヲ唱奉リケル時、不思議ノ者共波ノ上ニ浮ビ出テ見ヘタリ。先一番ニ退紅著タル仕丁ガ、長持ヲ舁テ通ルト見ヘテ打失ヌ。其次ニ白葦毛ノ馬ニ白鞍置タルヲ、舎人八人シテ引テ通ルト見ヘテ打失ヌ。其次ニ大物ノ浦ニテ腹切テ死タリシ右衛門府生秦武文、赤糸威ノ鎧、同毛ノ五枚甲ノ緒ヲ締、黄鵠毛ナル馬ニ乗テ、弓杖ニスガリ、皆紅ノ扇ヲ挙ゲ、松浦ガ舟ニ向テ、其舟留マレト招ク様ニ見ヘテ、浪ノ底ニゾ入ニケル。」→御息所と水手（船頭）を小舟に乗せる

↓武島（ムシマ）（沼島か）に漂着↓海士の世話になる。

↓「去程ニ其年（元弘三年（一三三三））ノ春ノ比ヨリ、諸国ニ軍起（イクサオコツ）テ、六波羅・鎌倉・九州・北国ノ朝敵共、同時ニ滅ビシカバ、先帝（後醍醐天皇）ハ隠岐国ヨリ還幸成り、一宮ハ土佐ノ畑ヨリ都へ帰リ入ラセ給フ。天下悉公家一統ノ御世ト成テ目出カリシカ共（コトゴトク）、一宮ハ唯御息所ノ今世ニ坐（マシマ）サヌ事ヲ嘆（ナゲキオボシメシ）思食ケル処ニ、淡路ノ武島（ムシマ）ニ未生（イマダイキ）テ御坐（ゴザアリ）有ト聞（キコ）ヘケレバ、急御迎ヲ被レ下（クダサレ）、都へ帰上ラセ給フ。」↓この後、一宮は新田義貞とともに越前金崎（かねがさき）城（敦賀市）にあったが、延元二年（一三三七）足利方の高師泰に攻められ自害。

資料30御伽草子『中書王物語』

（後醍醐天皇皇子一宮尊良（たかよし）親王は、関白左大臣家の絵合わせで描かれた源氏絵の女性に憧れる。下鴨社参詣の帰途、源氏物語絵そっくりの女性を垣間見、恋に陥ちる。今出川公顕の姫君とわかり、二人は結婚して姫君は一の宮の御息所となる。元弘の乱が興り、一宮は土佐に流される。）

御警固に候ける有井の庄司なにかしといふ者、心ある物にて、なにかくるしくさふらふへき、しのひやかに、御やす所をこれへくたしまいらせたまひて、御心をもなくさめられ候へかしとて、御きぬ一かさねてうして、みちのほとの、よういまてさたしけれは、宮はかきりなくうれしくおほしめされて、只一人めしつかはれける右衛門府生秦武文といふ御随身を、都へのほせられけり…（略）…

（上洛した武文は御息所を尋ねて土佐に向って尼崎で風待ちをする。）

折ふし、肥前の国人松浦五郎といひける武士、これもこの浦に風を待てゐたりけるか、御息所の御姿を垣のひまよりみたてまつりて、こはそも、天人の此土にあまくたりたるか、凡、此世の人とは覚えすと、目もはなたす、まもりゐたりけるか、あまりに妙なる御すかたをみれは、心に染て、しのひかたかりけれは、たとひぬしある人なりとも、又いかなる女院、姫宮にてもましませ、一夜の契をゆるされは、百年の命をかふるとも、なにかは惜かるへき、奪取てくたらはやと、おもふ心のつきしかは、武文か下部の一人、浜の方へ出てゆきけるをよひよせて、酒をのませ、引出物なととらせて、さても御辺の主の、具足したてまつれる女房は、いかなる人にて、ましますそと問けれは、下臈のはかなさは、さけにふけり、引出物にやめてたりけん、事の様をありのまゝにそ、かたりける、松浦五郎、大によろこひて、このころ、いかなる宮にてもましませ、謀反人にて、なかされさせ給へる人のもとへ忍てくたり給はんする女房をうはひ取たらむは、さして罪科あるましと、思ひけれは…

（松浦の郎等が御息所を奪い取らんと宿所に押し入るが武文に切り立てられる。）

松浦か郎等とも、武文一人にきりたてられて、門の外へはつと出たりけるか、さらは、火をかけよとて、かたはらの在家に火をそかけたりける、その間に、武文は御息所を、かき負たてまつりて、奥（沖）なる舟を招きつゝ、何舟にてもあれ、此女性しはらくのせて給候へとよはゝりて、波打きはにそたちたりける、あさましやな、舟もこそおほかるに、せめての事は、松浦か迎に来る舟、これを聞て、一番になきさへさしよせたれは、武文はなにともしらす、よろこひて、屋形の内にうちをきまいらせて、とりのこしたる御具足、御ともの女房なと、船にのせんとて立帰たれは、やとにははや火かゝりて、我かたさまの人も、かたき一人もなかりけり…（略）…

（武文が浜辺に来ると御息所を乗せた松浦の船は沖合に遠ざかる。）

武文、すへきやうなくて、手くりする、海人の小船にのりて、みつから櫓ををし、いかにもして御舟に追付むとをしけれとも、あれは大船なり、これは小舟なり、追付へきやうもなかりしかは、扇を揚て、その舟、とめ給へとよはゝりたるありさまは、松浦さよ姫か妻の別をしたひつゝ、ひれふる山にのほりて、奥ゆく船を招しも、かくやとおほえてあはれなり、松浦か舟のものともは、これをも更に目にかけす、あれ御覧せよ、あふきにて招は、なといひて、一度にとつと笑ける、其声、奥津風にをくられて、はるかに聞えけれは、武文、やすからぬものかな、その儀ならは、たゝいまの程に、海底の龍神となりて、其舟をはやるましき物をと大にいかりて、舟のへさきにたちあかり、腹十文字にかき切て、浪のそこにそしつみける、

（武文の怨霊は荒波を起し、竜神の生贄にため海中に投げ込まれた御息所は淡路の六島（『太平記』では武島）に流れ着く。御息所の着物が土佐に漂着し、一宮は御息所を弔う。乱が治まり、帰洛した一宮は御息所生存を知り、再会を喜ぶ。

そののち尊氏、又都ををひをとされて、つくしまてひかれけるか、五月に又、西国勢をかたらひて、せめのほる、官軍、さゝふるにをよはされは、また山門へ行幸ありけり、そのゝち義貞は東宮、一宮なとひきくしたてまつりて、北国へ下向して、越前の金崎の城にこもり侍しか、十二月のころ、大かた尊氏と、和与の分にてありしか、にはかに都をおちさせ給て、よしの山へいらせ給ひしかは、宮方、日にそへて力をうしなひて、義貞朝臣の運命やきはまりけん、その息、越後守義顕は、一宮の御自害をすゝめ申て、我もつゐに腹きりしかは、金崎の城はやふれにけり、高越後守、金崎の城をせめ落して、頸とも京都へのほせて、大路をわたされしに、一宮の御くひをは南禅寺長老、夢窓国師の方へつかはされて、かたのことくの葬礼ありときこえしかは、御息所はせめての事に、御車にたすけのせられ給て、松林寺の辺まてあくかれいてさせ給て、おなしけふりになりんともたへこかれ給ひしか、つゐに御ねかひのことく、御中陰の日数もいまたすきさるに、はかなくなり給へるとなんきこえ侍りし、

そのゝちは、尊氏将軍の御子孫、いよ〳〵繁昌して、万歳の歌、耳にみちてそきこえける、中務卿尊良親王の事、太平記に見及たりしかは、その詞をあらためて、一巻の物かたりに、かきなし侍り、比興々々、いまた清書に及す、

沙弥御判（兼良公（朱））

文明十五大呂下旬之比（一四八七年一二月）、以二禅閤御筆本一、書写之、一校畢、彼本急之間、為レ中書、卒馳短毫、尤顧他見嘲哢、不可出懐中者也

資料31幸若舞『新曲』（岩波新古典大系59『舞の本』）

つら〳〵惟みるに、古より今に至るまで、朝敵を一時に滅ぼし、太平を四海にいたす事、武略の功に及くはなし。されば、近代は異国襲来の恐れもなく、帝位を争ふ方もましまさず。是併武運の天命に叶はせ給ふによつてなり。爰に元弘、建武の昔を思ふに、戦場にして屍を晒すのみにもあらず、或ひは君臣の儀を守つて、身を蒼海の波に沈め、或ひは妹背の別れを悲しむで、思ひを古郷の月に傷ましむる。中にも哀れなりしは、一の宮の御息所の御事と、右衛門の府生、秦の武文が振舞なり。

（一宮と御息所の婚姻。一宮の土佐配流。御息所を伴って秦武文は尼崎で舟待ち。）

かゝりけるところに、筑紫人に松浦の五郎と云ける武士、京より田舎へ下りけるが、これも同じやうに風を待ちて居たりしが、御息所の御姿を垣の隙より見奉り、「こは、そも天人のこの土に天降れるか。此世の人とも覚えず」と、目離れもせで守り居たりしが、「あな、あぢきなや。たとひ主ある人なり共、又いかなる女院、姫宮にてもおはせよかし。一夜のほどの契りに百年の命に替へむ事、何か惜しからん。奪ひ取つて下らばや」と思ふところに、武文が下部の、浜出して遊びけるを、呼び寄て、酒飲ませ、引出物を取らせ、「さても、御辺が主の具足し奉る上臈は、いか成人ぞ」と問ひければ、下臈の者の悲しさは、酒に耽り、引出物に賞で、事のやうを有のまゝにぞ語りける。松浦、大きに喜ふで、「今日、此頃、いかなる宮にてもおはせよかし。謀叛人にて流されさせ給ふ人の所へ、忍ふで下り給ふ上臈を、道にて奪ひ取りたらんは、さしたる罪科は有まじきものを」と思ひ、郎等どもに宿の案内見せ置かせ、日の暮るゝをぞあひ待ちける。

夜、すでに更けければ、松浦が郎等三十余人、物の具ひしくとさし固め、松明に火を付け、蔀、遣戸を蹴破つて、前後より討つてぞ入りにける。秦の武文は、京家の者とは言ひながら、日比手柄をあらはして、人に勝るゝ者なれば、「強盗入たり」と心得、枕に立たる太刀を取り、中門さして切て出で、進む敵を三人、手の下にて切り伏せ、残る敵を大庭へ一度にばつと追ひ出し、…（略）…

（防戦する武文は浜辺へ御息所を連れ出し、知らずに松浦の舟に御息所を預ける。）

武文、渚に帰て、「船は」と問へば、なかりけり。見れば沖にぞ浮かんだる。「なふ、その船。寄せられ候へ。屋形の内へ乗せ申上藤を上げ申さん」と、声をはかりに呼ばはれ共、順風に帆を上げければ、船は次第に隔

たりぬ。武文、余りの無念さに、海士の小舟に打乗て、自ら櫓を押して急げ共、追風を得たる大船に、追つ付べきやうあらざれば、扇を挙げて、「其船、止まれ〳〵」と招きけるを、松浦が船に是を聞き、どつと笑ふ声しけり。武文、「安からぬものかな。その儀にて有ならば、只今、海底の竜神と成て、その船に追風は遣るまじ物を」と怒つて、船の舳板につつ立て、腹十文字に掻き切て、蒼海の底にぞ入にける。

（武文の怨霊は荒波を起し、竜神の生贄にため海中に投げ込まれた御息所は武島に流れ着く。御息所の着物が土佐に漂着し、一宮は御息所の遭難を知る。乱が治まり、帰洛した一宮は御息所生存を知り、再会を喜び合う。―金崎城での一宮の死、続く御息所の死には触れていない。）

資料32謡曲『武文』（国民文庫刊行会『謡曲全集』下　明治44年）

シテ（武文）一院の御息所を土佐に送って神崎に着く。マツラ松浦某が訴訟で上洛の帰り神崎に停泊。賊が民家に放火。御息所を松浦に預ける。松浦が御息所を略奪。武文が小舟の船頭（ワキ）に頼み松浦を追うが逃げられ、追付くべきかとどつとぞ笑ひける。「悪霊になって忽ちその船を留めん」と腹掻き切って入水。御息所入水。武文の怨霊出現→松浦を引っ提げ、海中に沈む。

村上学氏「「一宮御息所事」・『新曲』・『中書王物語』」『国語と国文学』昭55・5

松岡心平氏「作品研究「武文」」『国立能楽堂上演資料集』1　昭62

伏谷優子氏「英雄伝説と絵画―大物の浦「秦武文」の物語―」尼崎げんき講座レジュメ平14・12・20

他に、絵画資料に**奈良絵巻『一条宮并御息所物語』・奈良絵巻『新曲』**（いずれも平成15年2月臨川書店善本特選目録）、**謡曲『武文』図屏風**（ニューヨーク・バークコレクション）など

（3）芥川氏の悲話

参考33『不問物語』下巻 六 芥河彦太郎并小四郎被討事（前田尊経閣文庫）

六 芥河被討事 上郡住人芥河ハ無実子之間、故薬師寺安藝カ、末子彦太郎ヲ養子ニソシケル。雖在二々所一ニハ是モ六郎澄元ニ志深者也。無其隠有風聞ケル間、恐懼テ高国へ礼ニモ不出ケリ。色々アツカイ共有テ彦太郎ト舎弟左衛門尉堺津へ礼ニソ出タリケル。対面有テ四五日以後、同廿四日彦太郎ハ長塩備前守旅宿ニ来至ス。乃申付テ被討取。左衛門尉ハ高国へ出仕申ヲ馬屋ニテ生害サセラレケリ。其時モ上下十余人被討ニケリ。芥河豊後ハ国中ニテ澄元ニ志有侍共申合、取テノキ、舟二艘ニテ阿州へ下向之処ニ難風ニ逢テ、二艘入海トコソハ聞ヘケレ。

参考34『後法成寺関白記』（陽明叢書7 思文閣出版）永正五年六月二四日条

芥川生涯之由有風聞。六郎依同心之儀也。

（4）大物崩れと細川高国自刃

資料35『細川両家記』

天王寺、今宮、木津、難波に陣取。常桓は中嶋の内うらいに陣取給ふ。浦上は同野田福嶋に陣取也。その勢二万余騎と風聞也。境の町人ぎやうてんし、門々に垣をしたりければ、誠御祓などの日と見ゆる也。

同三月廿五日讃州政之境へ御着津也。其勢八千余騎と申也。此時節より又畠山方の木沢左京亮長政、晴元方へ参られける也。同五年壬辰閏五月十三日に阿波衆境より出張也。典厩、香川、中務丞、築嶋に陣取給ふ。三好筑前守元長衆は住吉の澤の口遠里小野に陣取給ふ。久米、河村、東条、七条、一宮、三好山城守等は吾孫子、苅田堀に陣取。この勢数一万五千余と申也。この外八千余は境に御所様、同御屋形晴元の御番也。毎日天王寺へ取懸矢いくさ有。然処に浦上掃部と申は古赤松殿を誅し申、当赤松殿親のかたきなる間、無念に思召けれ共。とかく打過給候けり。此砌よき時分と恩召。常桓御合力風聞有。摂州神呪寺迄御出張有。境の晴元へ仰合られ御敵にふせられければ、浦上に付従ふ衆我も我もと赤松殿へ参りければ、次第々々にぶぜいに成る也。然ば同享禄四辛卯六月四日に三好方初て諸勢打出。天王寺、木津、今宮へ取かけ、その日責くづす。常桓方和泉守護殿、伊丹兵庫助国扶、河原林日向守、薬師寺三郎左門、波々伯部兵庫介討死也。

この外中嶋の野里川へ入て死する也。同播磨衆に浦上掃部、嶋村弾正初て三百余人討死也。此外五千余人野里川へ入て水におぼれて死也。以上七千余人死すると言なり。誠に〳〵川を死人にてうめて、あたかも塚のごとく見ゆる。昔も今も末代もかかるためしはよもあらじと人々申也。落行勢共いまだ尼崎に在由風聞なれば、三好山城守同あくる五日に追懸申けるに、浦上同名内蔵助、同六郎左衛門、生瀬口へ落行処を赤松殿御馬廻衆渡合候て腹切られける。其外ちり〴〵に成行なり。赤松殿年来の御本意とげ御帰国也。然に常桓何かたへも落行給はずして尼崎町京屋(前カ)に忍て御座候を、三好山城守へ人告申ければ、則取籠、境へ注進申ければ、早々御腹めさせ候へとの御返事有ければ、同六月八日寅刻に尼崎大物の内広徳寺にて御腹めされけり。方々へ御歌共遊ばし遣はされける。

徳様　なしといひ又ありといふ言の葉や　法の誠のこゝろ成らん

逍様　犬追物今一度と思ひこしあらましはたゝいたつらにこそ

御所様　絵に写し石をつくりし海山を　後の世までもめかれすそ見ん

能登の姉上へ　此浦の波より高くうき名のみ　世々に絶えせす立ぬへき哉

珊侍者へ　世中にまよふてふ事なきものを　迷ひといへる言の葉は何

宗碩へ　夕立の雲たのめなるやとりかな

後に宗碩百韻独吟有。此御短冊共住持と山城守を被二召出一て種々御物語ども候て、是を相届候てたび候へと仰られ、其後御行水有て御腹めされける。山城守を初めて皆々涙をながしけるなり。其後御うた共、山城守よりかたがたへ届申さるゝ也。

細川高国　細川氏は将軍足利氏の一族。斯波・畠山氏と三管領。応仁の乱で斯波・畠山氏は内部分裂→細川勝元以後、細川氏の管領独占。

高国は文明一六年（一四八四）生れ、細川政春の子。永正四年（一五〇七）細川政元謀殺→細川氏も分裂→養子の澄之・澄元の家督相続の後、永正五年前将軍足利義稙を擁立し、高国管領就任。大永元年（一五二一）義稙を廃して足利義晴を将軍に擁立。大永五年（一五二五）高国出家→道永、嫡子稙国病没。大永七年（一五二七）高国近江に逃亡、常桓と改名。享禄四年（一五三一）三好之長らに敗北、大物崩れ→尼崎で自刃、四八歳。

『細川両家記』（『群書類従』合戦部）軍記、二巻。生島宗竹の著、上巻執筆は六九歳、下巻執筆は九二歳。上巻＝永正元年（一五〇四）～天文一九年（一五五〇）。細川政元が養子に澄之・澄元を迎え、謀殺→「細川の流れふたつになるべき故…」、以下高国・晴元ら細川氏の内訌、畿内国人の興亡。物語風な文体。下巻＝天文二〇年（一五五一）～元亀元年（一五七〇）。三好長慶・三好三人衆・松永久秀らの台頭。足利義秋（義昭）を擁した織田信長の登場。一旦信長の岐阜帰国→「然ば京坂本も大慶の由候也」。箇条書きの年代記風な文体。

参考36『**重編応仁記**（じゅうへんおうにんき）』（『続応仁後記』巻二）和歌・発句の宛先の相違

辞世

無ト謂ヒ又有ト言……院ノ御所様エ

犬追物今一度ト思ヒコシ……伊勢国司エ

絵ニ写シ石ヲ作リシ海山ヲ……御上様エ

此海ノ波ヨリ高キ浮名ノミ……能登ノ姉上エ

世間ニ迷フテフ事ナキ者ヲ……珊侍者エ

夕立ノ空タノメナル宿リ哉……宗碩

参考37『**実隆公記**』享禄四年六月三〇日

宗碩書状到来、常桓短冊伝之、則遣徳大寺、又自彼有使、毎事如夢、

参考38『**再昌草**』（桂宮本叢書一三　養徳社）実隆の日次歌集

享禄四年（一五三一）六月三〇日

晦日、常桓禅門いまはのきはちかく成て、短冊をかきて、徳大寺、同予にみすへきよしにて、

なしといひありと又いふことの葉や　法のまことの心なるらん　常桓

徳さま、逍さまと歌の上にかゝれたりし

此短冊宗碩書状にて、堺よりをくりたりしをみて、やかて短冊は徳大寺へ遣はし侍し後に念誦のつゐて、おもひつゝけて、書付て廻向し侍し

なしときけとありとのみ猶おもひなす心にたとる水くきの跡
しりにけん法のまことのありなしもたゝそのきはの明くれの夢

参考39『**後法成寺関白記**』（陽明叢書9 思文閣出版）享禄四年七月八日条
宝鏡寺被来、即被依常桓辞世歌授継孝院被見之、
徳殿　なしといひ又ありといふことのはや
逍殿　法のまことの心なるらん　　常桓
如此即返遣之、

徳様　徳大寺実淳 文安二年（一四四五）～天文二年（一五三三）太政大臣
正室が高国の伯母
逍様　三条西実隆 康正元年（一四五五）～天文六年（一五三七）内大臣
近衛尚通　文明四年（一四七二）～天文一三年（一五四四）関白太政大臣
御所様　足利義晴 永正八年（一五一一）～天文一九年（一五五〇）一二代室町幕府将軍、この時朽木谷に逃亡中、
宗碩　生年不明。連歌師。宗祇の弟子。宗祇亡き後、宗長とともに連歌界の重鎮。京都に在住し、宗祇の種玉庵を継ぐ。天文二年（一五三三）没。

参考40高国追悼連歌

底本　静嘉堂文庫連歌集書29
校合　大阪天満宮文庫れ5―14・れ甲―5
享禄五年六月八日　懐旧　（宗碩独吟）
夕立の空たのめなるやとり哉　　常桓
雲隠せし夏の夜の月　　宗碩
通ふらん山郭公声ふけて
誰寝覚にかのこれいにしへ
住人の心しらるゝ浅茅原
霜もおとさぬ道の冬草
さしなから照としも無日は冴て
板まふき入袖の朝風
(う)蜩のまたき声する山近み
雲のゆきかひ秋は来にけり
朝顔(待イ)に空さへみゆる月出て
とはさらめやの露のふりはも
荒にしも君か里を(はイ)も誰しらん
亡き跡迄(もイ)を忍ふ悲しさ
花落るみ山の苔の道とめて
瀬絶し水の仄霞む音
打しめり古江の沢の春雨に
詠寂しくたてる鷺すら
休らひに牛飼むらの日はくれて
かへるときけは笛の音そする
妹にこひ行てはくる夜誰ならん
月にうかるゝけしきとはみし
(二)わひつゝもいらまし秋の閨更て
露をはらへはしくれさへふる
嵐ふく木葉しのきてこす山に
さくらかさせる旅をしそ思ふ
鶯のやとりのかたにゆきくらし
枕かたらふ蝶のはかなさ
人しれぬかけ野の霞色きえて
ふるき垣ねはとふへかりけり
とゝめ置玉のありかはよそならし
をくらす露の跡のたらちね
うき身ゆへ都の月やくもるらん
もゆてふ山を胸の秋風
さしも草さしもかれ行世をしらて
哀ことしも待やくらさん
(う)我かくて遠方人となりぬへし

かりに住きて浦なれにけり
明石かた磯のみるめもあかなくに
ひとり岡（ちかきイ）への松風そふく
草の戸もさゝれぬ花は雪散（のイ）て
春行迄にたれをまつらん
身をつくす声の悲しき呼子鳥
心のやみはむへも晴せし
有とても思ひは光みえぬ世に
わすれてぬとや人のつれなき
独のみいみもあへすとかたれ月
藤のやつれのころも秋なり
山田守かりほ覚る舎（おかふるイ）して
いく夕露に我ぬれにけん
三つれ〳〵の身のうき詠晴かたみ
田舎をとはゝ侘とこたへよ
春されは荒野を道の花咲て
霞に駒の群て行みゆ
けさの朝気雪や消まに成ぬらん
小夜のしくれのいくめくりせし
神無月こゝらの年の夢覚（てイ）ん
身をこからしの老の夕くれ
かはらしとたのみし松も陰絶（ぬイ）て
おもふに祈る千代は何そは
打そはゝ夫もあくこやしらさらん
心もとめ（とゝイ）ぬ程のあた人
まれにあひてみしや時しも有明に
萩かさかりのにほふ宮城野
う小男鹿の寝所しはし我にかせ
道なきうき世いつちいとはん
しめ置もことはしけ山さはりたみ
尾上のさくらひとりちるらし
入相の春に後るゝ鐘なりて
明る霞やおのかきぬ〳〵
妻こふるすそ野の雉子したふ野（よイ）に
ほろ〳〵とふる雨はなみたか
おもひ出る夕は（にイ）さらにかきくれて
去年かも見しは只けふの夢
風のみや跡も難波のこととはん
われ別きとたれ松浦舟
秋の月傾くかたの波まくら
故郷こふる鴈なきて行
ナ色かはる峰の朝風（霧イ）寒からし
衣うつなるかけの山賤
折ふしの哀はもれぬ家ゐ（にイ）して
名たゝる庭につくす夏冬
一度は栄よ人も（ありしさかえよイ）苔の下
百枝の松の朽て寂しき
風あらき（すイ）磯のしき〳〵こす波に
くたくる袖はわれやまさらん
忘れすは同し心のよもすから
見るへき月はめかれたにせし
秋よたゝ人まつ人といはゝいへ
庵露けし打やはらはん
山里とさもことならめ花の陰
道もせにさくつゝ山吹
う石ま行小舟の棹の春の水
流をあさみ魚そたゝよふ
冬の池の底あらはに日は出て
雪のこや野のふりはつる（はるゝイ）空
誰か今わか古寺と帰るらん

声を合する法のあかつき
鹿の蔭(茵)鶴の林の月澄て
秋は草木も愁へかほなり

「空頼み」頼りにならないこと、当てにならない期待
「夕立の空たのめなる…」→『新古今集』夏　西行
よられつる野もせの草もかぎろひて 涼しく曇る夕立の空

静嘉堂文庫連歌集書　静嘉堂文庫は明治二五年（一八九二）岩崎弥太郎の弟弥之助の創立。連歌集書は江戸幕府柳営連歌の連衆烏森神社（東京新橋）神主山田通孝収集の連歌作品の書写。

大阪天満宮文庫　大阪天満宮には神官滋岡長松(ちょうしょう)と岡延宗(のぶむね)がそれぞれ書写収集した二種の連歌叢書がある。中世より天満天神は連歌の神として崇められ、室町時代、連歌界の天神信仰はいっそう盛んになった。

第四章　旧淀川（淀川分派点（毛馬閘門）～大阪湾）

第一節　難波津

（1）難波津

資料41『**能因集**』（角川『新編国歌大観』第三巻）

嘉言対馬になりて下るとて、津の国のほどよりかくいひをこせたり
命あらば今帰りこむ津の国の 難波堀江の蘆の裏葉に
返し
難波江の蘆の裏葉も今よりは たゞ住吉の松としらなむ
嘉言対馬にてなくなりにけりと聞ゝて
哀れ人今日の命を知らませば 難波の蘆に契らざらまし

（2）難波・長柄橋の和歌

資料42「**八代集**」の難波・長柄橋の歌

『**古今和歌集**』
序　難波津に咲くやこの花冬ごもり いまは春べと咲くやこの花
恋二　津の国の難波の葦のめもはるに 茂(しげ)き我が恋(こひ)人知るらめや　貫之
恋三　君が名も我が名も立てじ難波なる 見つともいふな網引(あひき)ともいはじ
読人不知
恋四　津の国の難波思はず山城の 鳥羽に逢ひ見むことをのみこそ　同
恋五　逢ふことを長柄の橋のながらへて 恋ひ渡るまに年ぞ経(へ)にける　是則
雑上　世中にふりぬるものは津の国の 長柄の橋と我となりけり　読人不知
雑上　押し照るや難波の水に焼く塩の からくも我は老いにけるかな　同
雑上　難波潟潮満ち来らし蜑(あま)衣 田簑の島に鶴(たづ)鳴き渡る　同
雑上　難波潟おふる玉藻をかり初の 蜑(あま)とぞ我はなりぬべらなる　貫之
雑下　我をきみ難波の浦にありしかば 憂きめを見つのあま(尼＝海人)となりにき
読人不知
雑下　難波潟恨むべき間(ま)も思ほえず いづこをみつの蜑とかはなる　同
雑体　難波なる長柄の橋もつくるなり 今は我が身を何にたとへん　伊勢

『**後撰和歌集**』
恋一　浦分かずみるめ苅るてふ蜑(あま)の身は 何か難波の方(かた)へしも行く
恋二　難波潟刈り積む葦のあしづゝのひとへも君を我や隔つる　兼輔朝臣
恋三　津の国の難波立たまく惜しみこそ すくも焼く火の下に焦がれる
紀内親王
恋四　難波女の見つとはなし葦の根のよ(節＝夜)の短くて明くる侘びしさ　道風
恋五　あざりする時ぞ侘びしき人知れず 難波の浦に住まふ我が身は
読人不知
恋五　人言(ひとごと)の頼みがたさに難波なる 芦の裏葉の怨みつべしな　同
恋五　侘びぬれば今はた同じ難波なる 身を尽くしても逢はんとぞ思ふ
元良親王
恋六　我ならぬ人住の江の岸に出でて 難波の方を怨みつるかな
恋六　人並にあらぬ我が身は難波なる 葦のね(根＝音)のみぞ下に流がるゝ　読人不知
雑一　難波潟何にもあらず身をつくし 深き心のしるしばかりぞ　大江玉淵女
雑一　人渡す事だになきをなにしかも 長柄の橋と身のなりぬらん

七条后温子

雑一　ふるゝ身は涙の中に見ゆればや　長柄の橋に誤(あやま)たるらん　伊勢

雑二　難波潟汀(みぎは)の葦の追ひ風に　うらみてぞふる人の心を（裏見＝怨み）　読人不知

雑三　世の中を知らずながらも津の国の　難波立(たち)ぬる物にぞありける　同

雑三　難波津を今日こそみつの浦ごとに　是や此の世をうみ渡る舟（海＝憂み）　業平朝臣

『拾遺和歌集』

難波に祓(はらへ)し侍りて、まかりかへりける暁に、森の侍りけるに郭公の鳴きけるを聞きて

別　郭公ねぐらながらの声聞けば　草の枕ぞ露けかりける　伊勢

物名　難波津はくらめ(つばくらめ)にのみぞ舟は着く　朝(あした)の風の定めなければ　輔相(すけみ)

物名　津の国の難波わたりに作る田は　葦が苗(あしがなへ)かとこそ見分かね　同

雑上　芦間より見ゆる長柄の橋柱　昔の跡のしるべなりけり　藤原清正(きよただ)

雑下　難波江の葦の花毛の混じれるは　津の国飼ひの駒にやあるらん　恵慶法師

雑下　難波潟茂(しげ)りあへるは君か代に　葦刈る(悪しかる)わざをせねばなるべし　忠見

難波に祓(はらへ)しある女まかりたりけるに、もと親しく侍りける男の葦を刈りてあやしきさまになりて道にあひて侍りけるに、さりげなくて年ごろはえあはざりつる事など言ひ遣はしたりければ、男の詠み侍りける

雑下　君なくてあしかりけりと思ふにも　いとゞ難波の浦ぞ住み憂き返し　読人不知

雑下　あしからじよからんとてぞ別れけん　何か難波の浦は住み憂き　同

恋四　津の国の堀江の深く思ふとも　我は難波のなにとだに見ず　同

恋四　津の国の難波渡りに作るなる　小屋といはなん行きて見るべく　同

恋四　限りなく思ひ長柄の橋柱　思ひながらに中や絶えなん　同

恋四　難波人葦火焚(た)く屋はすゝたれど　己(おの)が妻こそとこ珍(めづ)らなれ　柿本人麿

恋五　人をとく芥川(飽く)てふ津の国の　難波(名にはば)たがはぬ物にぞありける　承香殿中納言

『後拾遺和歌集』

春上　心あらむ人に見せばや津の国の　難波わたりの春の気色を　能因法師

春上　難波潟浦吹く風に波たてば　つのぐむ葦の見えみ見えずみ　読人不知

春上　花ならで折らまほしきは難波江の　葦の若葉に降れる白雪　藤原範永

冬　難波潟朝みつ潮にたつ千鳥　浦づたひする声聞こゆなり　相模

賀　朽ちもせぬ長柄の橋の橋柱　久しきほどの見えもするかな　平兼盛

別　命あらば今帰り来ん津の国の　難波堀江の葦の裏葉に　大江嘉言

哀傷　古(いにしへ)に難波のことも変はらねど　涙のかゝる旅はなかりき　源信宗朝臣

哀傷　思ひやる哀れ難波の浦さびて　葦のうきねはさぞ泣かれけん　伊勢大輔

恋三　恋しきに難波のことも思ほえず　誰れ住吉の松といひけん　大江匡衡

雑二　しばしこそ思ひも出でめ津の国の　長柄(長柄)へゆかば今忘れなん　中宮内侍

雑四　橋柱なからましかば流れての　名をこそ聞かめ跡を見ましや　公任

雑四　我ばかり長柄の橋は朽ちけり　難波のこともふるゝかなしさ　赤染衛門

雑四　古(いにしへ)にふり行く身こそ哀れなれ　昔ながら(長柄)の橋を見るにも　伊勢大輔

雑六　津の国の難波のことか法(のり)ならぬ　遊び戯(たはぶ)れまでとこそ聞け　遊女宮木

『金葉和歌集』

秋　古(いにしへ)の難波のことを思ひ出でて　高津の宮に月の澄むらん　参議師頼

雑下　難波江の葦の若ね(根＝音)の茂(しげ)ければ　心もゆかぬ舟出をぞする　六条右大臣

補遺　住吉の松か(待つ)ひありて今日よりは　難波のことも知らずばかりぞ　賀茂成助

『詞花和歌集』

夏　五月雨に難波堀江の澪標　見えぬや水の増さるなるらん　源忠季

恋上　忘るとやながら(長柄)へ行けど身に添ひて　恋しきことは後(おく)れざりけり　平兼盛

雑上　難波江の茂(しげ)き葦間(ま)を漕ぐ舟は　棹の音にぞ行く方を知る　大蔵卿行宗

雑上　難波江の葦間(ま)に宿る月見れば　我が身一も沈(しづ)まざりけり　左京大夫顕輔

『千載和歌集』

春下　心なき我が身なれども津の国の　難波の春に絶えずもあるかな　季通

冬　霜枯れの難波の葦のほの〴〵と　明くる湊に千鳥鳴くなり　賀茂成保

冬　難波潟入江をめぐる芦鴨の　玉藻の舟に浮き寝すらしも　左京大夫顕輔

羇旅　宮木引く梓(あづさ)の杣をかき分て　難波の浦を遠ざかりぬる　能因法師

恋一　難波江の藻に埋(うづ)もるゝ玉かしは(堅磐)　あらはれてだに人を恋ひばや　源俊頼朝臣

恋一　難波女のすくも焚く火の下焦がれ 上はつれなき我が身なりけり　清輔
恋三　難波江の芦のかりね（仮寝＝刈り根）の一よゆへ（節＝夜） 澪標てや（身を尽くし）恋わたるべき　皇嘉門院別当
恋四　芦の屋のかりそめぶしは津の国の ながら（長柄）へ行けど忘れざりけり　為貞
雑上　行末を思へばかなし津の国の 長柄の橋も名は残りけり　源俊頼朝臣
雑上　難波潟潮路遥かに見渡せば 霞に浮かぶ沖の釣り舟　円玄法師
雑上　何事も変はり行くめる世の中に 昔ながらの橋柱かな　道命法師
雑上　今日見れば長柄の橋は跡もなし 昔ありきと聞きわたれども　道因法師

『新古今和歌集』

雑下　数ならで世に住の江の澪標 いつを待つともなき身なりけり　源俊頼
春上　夕月夜（ゆふづくよ）潮満ち来らし難波江の 芦の若葉を越ゆる白波　藤原秀能
春上　難波潟かすまぬ波も霞みけり うつるも曇る朧月夜に　源具親
秋上　忘れじな難波の秋の夜半の空 こと浦に澄む月は見るとも
　宜秋門院丹後
秋下　夏草のかりそめにとてこしやども 難波の浦に秋ぞ暮れぬる　能因法師
冬　津の国の難波の春は夢なれや 蘆の枯れ葉に風渡るなり　西行法師
冬　冬深くなりにけらしな難波江の 青葉まじらぬ葦の村立（むらだち）　大納言成通
哀傷　哀れ人今日の命を知らませば 難波の蘆に契（ちぎ）らざらまし　能因法師
羇旅　難波人葦火焚く屋に宿かりて すゞろに袖のしほたるゝかな　俊成
恋一　難波潟短き葦の節の間も 逢はでこの世を過ぐしてよとや　伊勢
恋一　我が恋は言ぬばかりぞ難波なる 蘆のしの屋の下にこそたけ　小弁
恋一　難波人いかなる江にか朽ちはてん 逢ふことなみに身をつくしつゝ
　藤原良経
雑上　難波潟潮干（しほひ）にあさる葦鶴（あしたづ）も 月かたぶけば声の恨むる　俊恵法師
雑中　難波女の衣干すとて刈りて焚く 蘆火の煙たゝぬ日ぞなき　貫之
雑中　年ふれば朽ちこそまされ橋柱 昔ながら（長柄）の名だに変はらで　忠岑
雑中　春の日の長柄の浜に舟とめて いづれか橋と問へど答へぬ　恵慶法師
雑中　朽ちにける長柄の橋を来て見れば 蘆の枯れ葉に秋風ぞ吹く　藤原実定
雑中　沖つ風夜半に吹くらし難波潟 暁かけて波ぞ寄するなる　権中納言定頼
雑下　津の国のながらふべくもあらぬかな 短き芦のよ（節＝世）にこそありけ　花山院

八代集①『古今和歌集』醍醐天皇勅命、延喜一四年（九一四）頃成立。
②『後撰和歌集』村上天皇勅命、天暦七年（九五三）頃成立。
③『拾遺和歌集』花園法皇院宣、寛弘初年（一〇〇六）頃成立。
④『後拾遺和歌集』白河天皇勅命、応徳三年（一〇八六）成立。
⑤『金葉和歌集』白河上皇院宣、大治二年（一一二七）成立。
⑥『詞花和歌集』崇徳上皇院宣、仁平元年（一一五一）頃成立。
⑦『千載和歌集』後白河上皇院宣、文治三年（一一八七）成立。
⑧『新古今和歌集』後鳥羽上皇院宣、元久二年（一二〇五）成立。
この後、勅撰集は、室町時代、後花園天皇勅命、永享一一年（一四三九）成立の『新続古今和歌集（しんしょくこきん）』が最後の二一代。

掛詞　難波＝名には、三津・御津＝見つ、長柄＝～ながら・永らふ
　澪標＝身を尽くし

景物・語彙　難波→葦・澪標、長柄橋→造る

本歌取り　すぐれた古歌の語句・発想などを取り入れる詠歌方法。
『万葉集』巻一一　難波人葦火焚く屋の煤（す）してあれど 己（おの）が妻こそ常（とこ）めづらしき　読人不知 →『新古今和歌集』巻一〇　難波人葦火焚く屋に宿かりてすゞろに袖のしほたるゝかな　俊成

（3）物語・謡曲の難波

資料43『大和物語』一四八段 芦刈

津の国の難波のわたりに家してすむ人ありけり。あひ知りて年ごろありけり。女も男も、いと下種（げす）にはあらざりけれど、年頃わたらひなどもいとわろくなりて、家もこぼれ、使ふ人なども徳ある所にいきつゝ、たゞ二人すみわたるほどに、さすがに下種にしあらねば、人に雇はれ使はれもせず、いとわびしかりけるまゝに、思ひわびて、二人いひけるやう、「なほいとかうわびしうてはえあらじ」、男は「かくはかなくてのみいますかめるをみすてては、いづちも〳〵えいくまじ」、女も「男を捨ててはいづちかいかむ」とのみいひわたりけるを、男、「おのれはとてもかくても経（へ）なむ。女のかく若きほどにかくてあるなむ、いといとほしき。京にのぼりて宮仕へをもせよ。宜（よろ）しきやうにもならば、われをもとぶらへ。おのれも人の如（ごと）もならば、かならずたづねとぶらはむ」など泣く〳〵いひ契（ちぎ）りて、た

よりの人にいひつきて、女は京に来にけり。さしはへいづこともなくて来たれば、このつきて来し人のもとに居て、いとあはれと思ひやりけり。前に荻薄いとおほかる所になむありける。風など吹けるに、かの津の国をおもひやりて、「いかであらむ」など、悲しくてよみける。

ひとりしていかにせましとわびつれば そよとも前の荻ぞ答ふる

となむひとりごちける。

さてとかう女さすらへて、ある人のやむごとなき所に宮たてたり、さて宮仕へしありく程に、装束清げにし、むつかしきことなどもなくてありければ、いと清げに顔容貌もなりにけり。かゝれど、かの津の国をかた時も忘れず、いとあはれと思ひやりけり。たより人に文つけてやりたりければ、「さいふ人も聞こえず」などいとはかなくいひつゝ来けり。わが睦まじう知れる人もなかりければ、心ともえやらず、いとおぼつかなく、「いかゞあらむ」とのみ思ひやりけり。かゝる程に、この宮仕へする所の北の方亡せたまうて、これかれある人を召し使ひたまひなどする中に、この人を思ふたまひけり。思ひつきて妻になりにけり。思ふこともなくめでたげにてゐたるに、たゞ人知れず思ふこと一つなむありける。「いかにしてあらむ。悪しうてやあらむ、よくてやあらむ。わが在り所もえ知らざらむ。人を遣りてたづねさせむとすれど、うたて、わが男聞きて、うたてあるさまにもこそあれ」と念じつゝありわたるに、なほいとあはれにおぼゆれば、男にいひけるやう、「津の国といふ所のいとをかしかなるに、いかで難波に祓しがてらまからむ」といひければ、「いとよきこと。われも諸共に」といひければ、「そこにはな物し給ひそ。おのれ一人まからむ」といひて、いでたちて往にけり。難波に祓して、帰りなむとする時に、「このわたりに見るべきことなむある」とて、「いますこし、とやれ、かくやれ」といひつゝ、この車をやらせつゝ、家のありしわたりをみるに、屋もなし、人もなし。「何方へいにけむ」と悲しう思ひけり。かゝる心ばへにて、ふりはへ来たれど、わが睦まじき従者もなし。尋ねさすべき方もなし。いとあはれなれば、車を立ててながむるに、供の人は、「日も暮れぬべし」とて、「御車うながしてむ」といふに、「しばし」といふほどに、芦になひたる男のかたひのやうなる姿なる、この車の前よりいきけり。これが顔を見るに、その人といふべくもあらず、いみじきさまなれど、わが男に似たり。これを見て、よく見まほしさに、「この芦もちたるをのこ呼ばせよ。かの芦買はむ」といはせける。さりければ、「ようなき物買ひたまふ」とは思ひけれど、主ののたまふことなれば、よびて買はす。「車のもと近くになひ寄せさせよ。見む」といひて、この男の顔をよく見るに、それなりけり。「いとあはれに、かゝる物商ひて世に経る人いかならむ」といひて泣きければ、供の人は、「なほ、おほかたの世をあはれがる」となむ思ひける。かくて「この芦の男に物など食はせよ。物いとおほく芦の値にとらせよ」といひければ、「すゞろなる者に、なにか多く賜ばむ」など、ある人々いひければ、しひてもえ言ひにくゝて、「いかで物をとらせむ」と思ふあひだに、下簾のはざまのあきたるより、この男まもれば、わが妻に似たり。あやしさに心をとゞめて見るに、「顔も声もそれなりけり」と思ふに、思ひあはせて、わがさまのいといらなくなりにたるを思ひけるに、いとはしたなくて、芦もうち捨てて走り逃げにけり。「しばし」といはせけれど、人の家に逃げ入りて、竈のしりへにかゞまりてをりける。この車より「なほこの男たづねて率て来」といひければ、供の人手を分ちてもとめさわぎけり。人「そこなる家になむ侍りける」といへば、この男に「かくおほせごとありて召すなり。なにのうちひかせ給ふべきにもあらず。物をこそはたまはせむとすれ。幼き物なり」といふ時に、硯を乞ひて文をかく。それに、

君なくてあしかりけりと思ふにも いとゞ難波の浦ぞすみ憂き

とかきて封じて、「これを御車に奉れ」といひければ、「あやし」と思ひてもて来て奉る。あけて見るに、悲しきこと物に似ず、よゝとぞ泣きける。さて返しはいかゞしたりけむ知らず。

車に着たりける衣脱ぎて包みて文など書き具してやりける。さてなむ帰りける。後にはいかゞなりにけむ、知らず。

あしからじとてこそ人のわかれけめ なにか難波の浦もすみ憂き

資料44謡曲『芦刈』

1左衛門の妻（ツレ）・妻の従者（ワキ・ワキツレ）登場、難波の浦に到着。

ワキ・ツレ「古き都の道なれや、古き都の道なれや、難波の浦を尋ねん。

ワキ「かやうに候ふ者は都さるおん方に仕へ申す者にて候、またこれにござ候ふおんことは頼み奉り候ふ人の若子のおん乳の人にてござ候、おん里は津の国日下の里にて候ふが、いま一度おん下りありたきよし仰せ候ふほどに、このたびわれらおん供申し、淀より川舟に乗せ申し、只今難波の浦にと急ぎ候。

ワキ・ワキツレ「淀舟や、美豆野の原の曙に、美豆野の原の曙に、影も残りて有明の、山もと霞む水無瀬川、渚の森をよそに見て、なほ行く末も渡辺や、大江の岸も移り行く、波の入り江の里続く、難波の浦に着きにけり、難波の浦に着きにけり。

ワキ「おん急ぎ候ふほどにこれは津の国日下の里におん着きにて候。これに暫らくおん待ち候へ。日下の左衛門殿の御在所を尋ね申さうずるにて候。

2里人（アイ）に左衛門殿の所在を尋ね、里人が芦売りを呼ぶ。

ワキ「このわたりの人のわたり候か。

アイ「たれにてわたり候ふぞ。

ワキ「このあたりに日下の左衛門殿と申す人のわたり候ふか。

アイ「もとはこの所にござ候ひしが、散々の御無力にて、今はこの所にはござなく候。

ワキ「あらなにともなや候。このよしをやがて申さうずるにて候。

ワキ「いかに申し候、左衛門殿を尋ね申して候へば、今はこの所にはござなきよしを申し候。

ツレ「げにや家貧にしては親知少なく、賤しき身には故人疎しとかや申すなれは、身には限らぬ慣らひなれども、あまりにあさましき有様かな。さりながらさまざま契り置きしことあり、この所に暫らく逗留し、かの人の行くへを尋ねばやと思ひ候。

ワキ「げにげに仰せ尤もにて候、この所に暫らくご逗留候へ。なほなほおん行くへを詳しく尋ね申さうずるにて候。

ワキ「いかに以前の人のわたり候ふか。この浦にいかやうなる面白きことは候はぬか。都の人に見せ申したく候ふよ。

アイ「さん候ふ、この浦に浜の市の候ふに、色々の物を売り買ひ候ふ中に、若き男の候ふが、この難波の芦を刈りて売り候ふが、色々に戯れ言を申して面白きものにて候ふ間、名草のことにて候ふほどに、皆々買ひ取り候。暫らく御待ち候ひてかの者を御覧じ候へ。

ワキ「あら嬉しや候、さらばかの者を待つて見うずるにて候。

アイ「いかにこのうちに芦を売る男わたり候ふか。急ぎ立ち出で面白く芦を売られ候へや。

3芦売り（シテ）登場。芦売りに零落した境涯を述懐。

シテ「あしびきの山こそ霞め難波江に、向かふは波の淡路潟、げにや所から異浦々の気色までも、眺めに続く難波舟の、出で浮かみたる朝ぼらけ、心も澄める面白さよ。

地謡「われだに知らぬ面忘れ。

シテ「立ち舞ふ市のなか〳〵に、

地謡「隠れ所はあるものを。

4従者と芦売りの問答、伊勢の浜荻・難波の芦

5笠尽くしの「笠の段」

6芦売りが輿の中の妻に芦を渡そうとして、顔を合わせ物陰に隠れる。芦売りは左衛門、夫婦はの再会を果たす。

7烏帽子直垂を着た左衛門は歌の功徳で夫婦連れ立って上洛

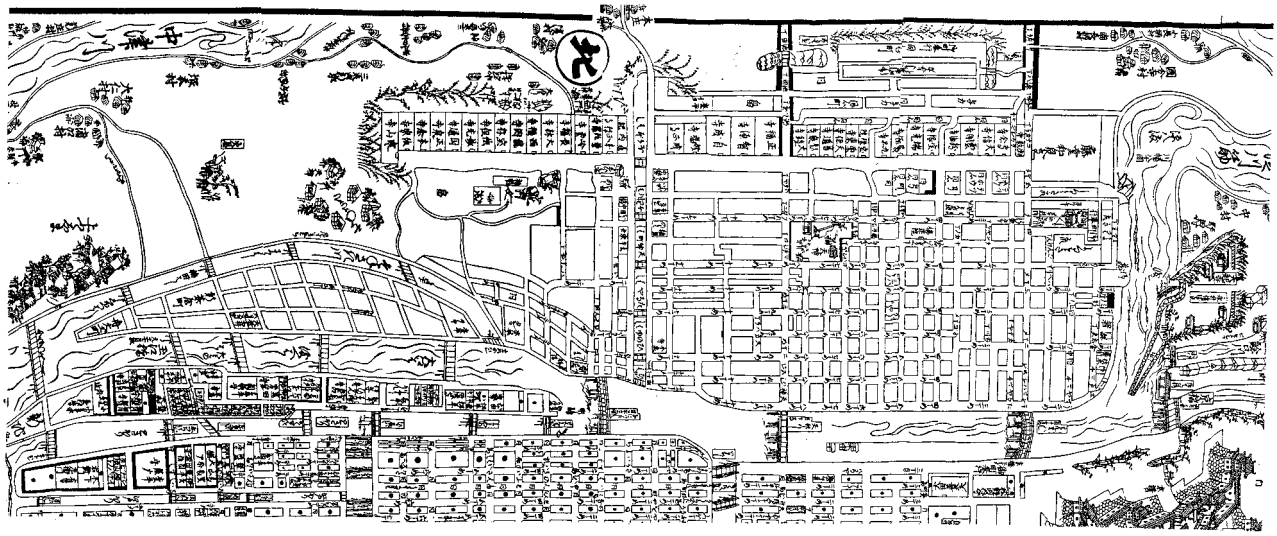
第二節　大　川

（1）近松門左衛門の浄瑠璃

近松門左衛門『心中天の網島』

近松門左衛門、世話物。享保五年（一七二〇）一〇月一四日の心中事件に取材、同年十二月六日大坂竹本座初演。

上巻。大阪天満の紙屋の主人治兵衛には、妻おさんと二人の子供があるが、曽根崎新地紀伊国屋の遊女小春と相思相愛。情死を気遣い、治兵衛の兄粉屋孫右衛門が武士の姿に仮装して小春の心底を探ると、小春は治兵衛に愛想尽かし。丁度、訪ねて来た治兵衛は女の心変りを怒り、格子



『新板摂津大阪東西南北町嶋之図』（部分）元禄17年（宝永元年1704）
佐古慶三氏『古板大坂地図事成』（清文堂）参照
旧淀川の堂島の北に蜆川が流れる。この地図では蜆川を「そねさき川」と記している。

越しに脇差を突き刺すが、相手に怪我はなく、治兵衛は孫右衛門に両手を格子に括られる。そこへ治兵衛の恋敵太兵衛が通りかかり、罵り辱かしめる。孫右衛門は表へ出て太兵衛を懲らしめ、治兵衛を諭す。治兵衛も改心し、小春の起請文を投げ返し、自分の起請文も取り返して兄に渡す。小春から取り返した起請文の中に治兵衛の妻おさんから小春へ宛ての手紙があったが、孫右衛門は他言しないと小春に誓う。

中巻。孫右衛門とおさんの母が治兵衛の家を訪れ、天満の大尽が小春を身請けす噂を聞き、その大尽は治兵衛でないことを確かめる。治兵衛は小春が太兵衛に請け出されることを知り、小春の心変わりを恨む。おさんは始めて、小春の心変りも自分が小春に手紙で愛想尽かしを頼んだことを打明け、小春が自殺するおそれがあると夫を急き立て、身請けの費用に自分の衣類を質入れしようとする。そこへおさんの父五左衛門が訪れ、立腹し、無理におさんを離別させて連れ帰る。

下巻。追いつめられた治兵衛は、網島の大長寺で小春と心中する。

資料45『心中天の網島』下之巻（名残の橋づくし）

小春は内を脱出でて、互に手に手を取交し。北へ行かうか南へか。にしか東か行末も、心の早瀬蜆川、流るゝ月に逆ひて足をはかりに、走書。謡の本は近衛流。野郎帽子は若紫。悪所狂ひの身の果は、かく成行くと定まりし。釈迦の教も有ることか、見たし憂身の因果経。明日は世上の言種に、紙屋治兵衛が心中と、徒名散行く桜木に、根掘り葉掘りを絵草紙の、版摺る紙の其の中に有りとも知らぬ死神に、誘はれ行くも商売に、疎き報いと観念も、とすれば心引かされて、歩み悩むぞ道理なる。

比は十月十五夜の月にも見えぬ身の上は、心の闇の印かや。今置く霜は明日消ゆる、はかなき譬のそれよりも先へ消行く閨の内、いとしかはいと締めて寝し。移香も、何と流れの蜆川。西に見て、朝夕渡る此の橋の天神橋は其の昔、菅丞相と申せし時、筑紫へ流され給ひしに、君を慕ひて太宰府へたった一飛梅田橋、跡追松の緑橋、別れを嘆き悲しみて、跡に焦るゝ桜橋、今に咄を聞渡る。一首の歌の御威徳、かゝる尊き荒神の、氏子と生れし身を持ちて、そなたも殺し我も死ぬ。元はと問へば分別の、あのいた

いけな貝殻に、一杯もなき蜆橋、短きものは我々が、此の世の住(すまひ)、秋の日と、十九と廿八年の、今日の今宵を限にて、二人(ふたり)いのちの捨所、ぢいとばゞとの末までもまめで添はんと契りしに、丸三年も馴染まいで、此の災難に大江(遣ふ)橋、あれ見や難波小橋から、舟入橋の浜伝ひ、是まで来れば来る程は、冥途の道が近付くと、嘆けば女も縋寄り、もう此の道が冥途かと見交す顔も見えぬ程、落つる涙に堀川の、橋も水にや浸るらん。

北へ歩めば、我が宿を一目に見るも見返らず。子供の行方、女房の、哀れも胸に押包み、南へ渡る橋柱、数も限らぬ家々を、いかに名付けて八軒屋、誰と伏見(臥し)の下舟(くだり)、着かぬ内にと道急ぐ。此の世を捨てて行く身には、聞くも恐し、天満(六騰)橋。淀と大和の二川(ふたつ)を、一つ流れの大川や、水と魚とは連れて行く。我も小春と二人連、一つ刃の三瀬川。手向の水に請けたやな。何か嘆かん、此の世でこそは添はずとも未来はいふに及ばず、今度の〳〵、ずっと今度の其の先の世までも夫婦ぞや。一つ蓮の頼みには、一夏に一部、夏書(げがき)せし。大慈大悲の普門品妙法蓮華経(京)橋を、越ゆれば到る彼岸の玉の台(うてな)に乗りをへ(得)て、仏の姿に身を成橋、衆生済度(しゆじやうさいど)がまゝならば、流れの人の此の後は、絶えて心中せぬやうに、守りたいぞと及びなき、願も世上のよまひごと、思ひやられてあはれなり。野田の入江の水煙、山の端白くほの〴〵と、あれ寺々の鐘の声、こう〳〵、かうしていつまでか、とてもながらへ果てぬ身を、最期急がんこなたへと手に百八の玉の緒を、涙の玉にくりまぜて、南無阿弥(阿弥)陀網島の大長寺。薮の外面のいさゝ川、流れみなぎる樋の上を最期所と着きにける。

蜆川　堂島の北を流れ、本来淀川の本流か→川幅を縮めたので縮川(ちぢめ)。明治四二年（一九〇九）火災→一部瓦礫の捨て場→大正一三年（一九二四）全部埋立。東から難波小橋・堂島橋・曾根崎橋・桜橋・緑橋・梅田橋・汐津橋

曽根崎新地　元禄元年（一六八八）堂島新地に新地開発、茶屋に茶汲み女、風呂に髪結い女→遊女。元禄一〇年米市場が移転してきたので蜆川対岸の曾根崎新地に移行。

網島大長寺　都島区中野町　元、網島町（現在藤田美術館）にあり、明治四二年（一九〇九）中野町に移転。寺伝に慶長一〇年（一六〇五）創建。浄土宗、本尊阿弥陀如来。境内に小春・治兵衛の比翼塚。

文楽概観

文楽＝人形浄瑠璃の三要素
①義太夫節　②三味線　③人形

人形浄瑠璃の歴史
室町時代末 琵琶・扇拍子人形操りの「浄瑠璃御前物語（十二段草子）」流行。
同じ頃 三味線（蛇皮線）の渡来
江戸時代初期 人形操りと三味線が結合
元禄期（一六八六～一七〇四）竹本義太夫と近松門左衛門が組み、義太夫節が流行→義太夫の名称（義太夫以前を古浄瑠璃）
元禄一六年（一七〇三）「曽根崎心中」大坂竹本座で初演
→浄瑠璃と歌舞伎の交流
享保一九年（一七三四）「芦屋道満大内鑑」大坂竹本座で初演
→人形の三人遣いが創案
延享三年（一七四五）「菅原伝授手習鑑」大坂竹本座で初演
〃 四年「義経千本桜」大坂竹本座で初演
寛延元年（一七四八）「仮名手本忠臣蔵」大坂竹本座で初演
文化二年（一八〇五）ごろ 植村文楽軒 高津新地で人形操り一座
→文楽の名称
〃 八年 稲荷社（難波神社）文楽座
天保一二年（一八四一）天保の改革→宮地芝居取り壊し→北堀江
安政三年（一八五六）稲荷社文楽座再建
明治四年（一八七一）大阪の松島新地に文楽座
〃 一七年 御霊神社に文楽座→大正一五年 出火焼失
昭和五年（一九三〇）四つ橋東南詰に文楽座
〃 三一年（一九五六）道頓堀弁天座
〃 三八年 朝日座、文楽協会（国・府・市・ＮＨＫ）

〃　五九年（大阪日本橋）国立文楽劇場

近松門左衛門とその時代

慶安四年（一六五一）将軍家光没。慶安事件。家綱将軍就任
承応元年（一六五二）若衆歌舞伎禁止令
〃　二年　野郎歌舞伎始まる。近松　福井に誕生、越前吉江（鯖江市）藩士杉森信義次男、本名杉森信盛
明暦三年（一六五七）江戸に明暦の大火（振り袖火事）
寛文七年（一六六四）頃　父信義浪人、上洛、公家に奉公→古典文化
　正親町公通に奉公、宇治加賀掾に接近→浄瑠璃作者
延宝八年（一六八〇）綱吉将軍就任
天和二年（一六八二）江戸大火（八百屋お七の火事）
貞享元年（一六八四）竹本義太夫竹本座旗揚、近松の『世継曽我』
〃　二年　竹本座に『出世景清』
〃　四年　生類憐み令
元禄六年（一六九三）都万太夫座に歌舞伎『仏母摩耶山開帳』
　→以後一〇年間歌舞伎作家
〃　一五年　赤穂浪士討ち入り
〃　一六年　竹本座に世話浄瑠璃『曽根崎心中』大当り
宝永元年（一七〇四）大和川付け替え
〃　二年　竹本座は義太夫から竹田出雲へ→近松は専属
〃　四年　富士山噴火
〃　六年　将軍綱吉没。生類憐み令廃止。家宣将軍就任
　新井白石登用→正徳の治
正徳二年（一七一二）将軍家宣没
〃　三年　家継将軍就任
〃　四年　義太夫没
〃　五年『国性爺合戦』大当り
享保元年（一七一六）将軍家継没。吉宗将軍就任→享保の改革
〃　九年一一月　近松没、七二歳

近松門左衛門の作品

浄瑠璃　時代物　約六六編→時代物の方が多い事に注目
　『用明天皇職人鑑』『傾城反魂香』『碁盤太平記』『平家女護島』
世話物　二四編
　『心中万年草』『冥土の飛脚』『心中天の網島』『女殺油地獄』
歌舞伎　約三〇編
　『傾城阿波の鳴門』『百夜小町』『夕霧七年忌』『傾城仏の原』
　姦通物　それぞれ偶発的な原因　『堀川波の鼓』→酒、
　『大経師昔暦』→身代り、『鑓の権三重帷子』→嫌疑

（2）西鶴の浮世草子

資料46西鶴『世間胸算用』巻二、一銀一匁の講中

　人の分限になる事、仕合といふは言葉、まことは面々の智恵才覚を以てかせぎ出し、其家栄ゆる事ぞかし。是福の神のゑびす殿のまゝにもならぬ事也。大黒講をむすび、当地の手前よろしき者共集り、諸国の大名衆への御用銀の借り入内談を、酒宴遊興よりは増たる世の慰みとおもひ定めて、寄合座敷も色ちかき所をさつて、生玉・下寺町の客庵を借りて、毎月身体詮議にくれて、命の入日かたぶく老体ども、後世の事はわすれて、只利銀のかさなり、富貴になる事を楽しみける。

　世に金銀の余慶有ほど、万に付て目出たき事外になけれ共、それは二十五の若盛より油断なく、三十五の男盛りにかせぎ、五十の分別ざかりに家を納め、惣領に万事をわたし、六十の前年より楽隠居して、寺道場へまいり下向して、世間むきのよき時分なるに、仏とも法ともわきまへず、欲の世の中に住り。死ば万貫目持てもかたびら一ッより、皆うき世に残るぞかし。此寄合の親仁共、弐千貫目より内の分限壱人もなし。又近年我々がはたらきにて、わづかなる身体の者共金銀を仕出し、弐百貫目三百貫目、あるひは五百貫目までの銀持二十八人かたらひ、壱匁講といふ事をむすび、毎月宿も定めず、一匁の仕出し食をあつらへ、下戸も上戸も酒なしに、あそび事にも始末第一、気のつまるせんさく也。朝から日のくるゝまで、よの事なしに身過の沙汰、中にも借銀の慥かなる借手を吟味して、一

日も銀をあそばさぬ思案をめぐらしける。

　此者共が手前よろしく成けるはじめ、利銀取込ての分限なれば、今の世の商売に、銀かし屋より外によき事はなし。然れども今程は、見せかけのよき内證の不埒なる商人、大分かりこみこしらへてたふれければ、思ひもよらぬ損をする事たび〳〵也。されども人を気づかひして、金銀借ずにも置れず。「随分内證を聞合せ、此中間はたがひに様子をしらせ、向後は借入をいたすべし。いづれもかく云合すからは、出しぬきにあはし給ふな。さあらば各々心得のために、当地で定まつて銀かる人をひとり〳〵書出し、こまかに詮議して見るべし」「これ尤なり」「先北浜で何屋の誰、財宝諸色かけて七百貫目の身体」といひ出れば、其見立は各別、八百五十貫目の借銀」といふ。此有なしの相違に、一座の衆中肝をつぶし、「爰が大事のせんさく、両方のおぼしめし入とくと承はり、人々の心得のため」とぞ聞ける。

「先分限と見たる所は、去々年の霜月に娘を堺へ縁組せしに、諸道具今宮から長町の藤の丸のかうやく（膏薬）屋の門までつゞきし跡（後）から、拾貫目入五ッ青竹にて揃への大男にさし荷はせ、其まゝ御祓の渡るごとし。外にもあまたの男子あれば、余慶なくて娘に五十貫目は付まいと思ひまして、いやといふものを無理に、此三月過に弐拾貫目預けました」といはるゝ。「扨々お笑止や、其二十貫目が壱貫六百目ばかりで戻るで御座ろ」といへば、此親仁顔色かはつて、箸もちながら集め汁喉を通らず。「今日の寄合に口おしき事聞ける」と、様子をきかぬ内から泪をこぼされける。「とてもの事に、其内證が聞たし」「されば其聟どのかたも、よく〳〵せはしければこそ、芝居並の利銀にて何程でも借らるゝなり。此利をかきて、芝居の外何商売して、胸算用があふとおぼしめすぞ。十貫目箱壱ッは、かなものまでうつて三匁五分づゝ、拾七匁五分で箱五ッ。中には世間にたくさんなる石瓦。人の心ほどおそろしきものは御座らぬ。両方の外聞、見せかけばかりに内談と存ずる。われらは其箱を明て、正真の丁銀にしてから、まことにはいたさぬ。あの身体の敷銀は弐百枚も過もの、こしらへなしに五貫目。何と各、われらが沙汰する所が違ふたか。先あれには、一両年二貫目ばかり預けて見て、それ別の事なくば、又四貫目程五六年もかして、慥かなる事を見とゞけての二十貫目」といへば、一座「是尤」と同音に申。

　段々利につまつて、此親仁帰りには足腰立ずしてなげき、「我此年までの身体見違へし事のなきに、此たびはふかく（不覚）なる事をいたしました」と男泣にして「何とぞ御分別はないか〳〵」とあれば、時に最前のせちがしこき人のいふは、「千日千夜御思案なされても、此銀子無事に取かへす工夫は、只ひとりより外になし。此伝授、上々の紬一疋ならば、慥かに取かへして進上申」といへば、「それは〳〵、中わたまで添まして御礼申さう、何とぞ頼む」といふ。「然らば、只今迄より念比に仕かけ、天満の舟祭りが見ゆるこそ幸はひなれ、浜にかけたる桟敷へ女房どもをおこして見せたしと、廿五日にお内義をやりて、さきのかゝ（嬶）としみ〴〵と内證をかたらせ、一日あそぶうちに、男子どもが馳走に出るはしれた事じや。時に二番目のむすこが生れつきをほめ出し、「かしこそふなる眼ざし、こなたの御子息にしては、お心に掛さしやるな、鳶が孔雀を産んだとは此子の事、玉のやうなる美人。ちかごろ押付たる所望なれども、わたくしもらひまして聟にいたします。酒ひとつ過しましていふでは御座らぬ。われらが子ながら、これ娘も十人並よ。其うへ親仁のひとり子なれば、五十貫目付てやるとはつね〳〵の覚悟。又われらがわたくしがね三百五十両、長堀の角屋敷、捨うりにしても弐拾五貫目がもの、仕てから袖も通さぬ衣裳六十五、ひとりの娘より外にやるものが御座らぬ。是がこちの聟殿」と思ひ入たる顔つきして、是を言葉のはじめにして、其後折ふし、すこしづゝ物をやればかへしを請、是以（極印）損のいかぬ事。それよりよいほどを見合せ、やとひにつかはし、銀掛るそばに置て数をよませ、こくゑん（黒鉛）をうたせ、内蔵へはこばせなどして、一日つかふて帰し、其のちさきの身になる人を見たて、ひそかによびにつかはし、「其人の二番目の子を、女房どもが何と思ひ入ましたやら、是非にと望みます。いそがぬ事ながら次而もあらば、此方の娘を貰ふてもくださるか、たづねてくだされ。こなたへ取つくろふて申事も御座らぬ、銀千枚は、いづかたへやりますとても、其心得」と云わたし、先へ通じたと思ふ時分に、「内々の預け銀入用」と申つかはせば、欲から才覚して済す事、手にとつたやうなり。此仕かけの外有まじ」と、いひおしへてわかれける。其年の大晦日に、かの親仁門口より笑ひ込、「御

影〳〵、御かげにて右の銀子元利ともにともに二三日前に請取ました。こなたのやうなる知恵袋は銀かし仲間の重宝〳〵」と、あたまをたゝき、「扨其時は紬一疋とは申せしが、是にて御堪忍あれ」と、白石の紙子二(反)たんさし出して、「中わたは春の事」とい捨て帰りける。

西鶴　寛永一九年（一六四二）～元禄六年（一六九三）
芭蕉　寛永二一年（一六四四）～元禄七年（一六九七）
近松門左衛門　貞応二年（一六五三）～享保九年（一七二四）
好色物『好色一代男』『好色五人女』
武家物『武道伝来記』『新可笑記』
町人物『日本永代蔵』『世間胸算用』
『世間胸算用』元禄五年（一六九二）刊、五巻、全二〇編
二〇編中、大部分が大晦日の出来事。一年の最後の収支決算日を過ごす町人の生き様を描く短編集。

（3）堂島蔵屋敷

堂島＝蜆川・堂島川間の中州。蜆川は明治四二年（一九〇九）の火災の瓦礫を捨て、大正一三年（一九二四）には埋め立てた。↓川や橋がないのに「桜橋」。
中之島＝堂島川・土佐堀川間の中州。
大名・大寺社・宮家・公家が領地の米ほか生産物販売のため金融・商業に便利な大坂・江戸・京都・長崎などの天領に設けた屋敷や倉庫。
天領は①市場として開放的、②幕府の管轄下にある。
大坂＝蔵屋敷の最多↑豊臣氏以来の商業都市、大商人の存在、瀬戸内海を通して西日本の交通の便。
延宝年間（一五七三～八一）九一邸、天保年間（一八三〇～四四）一二四邸。
蔵屋敷の職員
蔵役人＝国元派遣の藩士。
留守居役＝蔵役人中の重役、国表を全権委任。
蔵元＝蔵物の保管・販売。初期は蔵役人の運営、寛文年間（一六六一～七三）以降、町人を任用＝町人蔵元。町人の蔵元は士分となり扶持米給与。
掛屋＝蔵物の販売代金の収納・保管・国元送金。扶持米給与、保管金の運用↓金融業務。
町人蔵元と掛屋を兼務、さらに複数の藩を兼務↓鴻池屋・升屋など。
用達＝蔵屋敷に出入りの商人、小藩は蔵元・掛屋を置かず、用達で代行。
蔵物（主に米）の販売方法
①払い下げ量（販売量）と入札日を指定
②蔵名前（入札に参加できる各藩特定の仲買業者）が落札↓帳簿に石数・金額を記入↓敷金（保証金）支払　③七日～一〇日以内に代金支払↓銀切手受け取り↓蔵屋敷から米切手と交換、米切手は蔵屋敷でいつでも現米に交換。
米切手は現物交換の期限に余裕があったので米切手そのものが売買・譲与され、町人間を転売。
米切手のほか、砂糖切手など。
正米商（しょうまいあきない）　現物の裏付けのある米切手の取引。
帳合米商（あきない）　現物未着の米切手＝空手形の取引↓大名貸。未着の現物・未収穫の現物を担保とした借金。

資料47西鶴『**日本永代蔵**』巻一、三　浪風静（しづか）に神通丸
諸大名には、いかなる種を、前生に蒔（まき）給へる事にぞ有（あり）ける。万事の自由を見し時は、目前（もくぜん）の仏といふて又外（ほか）になし。さればとよ、世に大名の御知行、百弐拾万石を五百石どり、釈迦如来入滅此（この）かた、今に永々勘定したて見るに、これを取つくさじといへり。大人小人の違ひ各別、世界は広し。近代泉州に唐かね屋とて、金銀に有徳なる人出来ぬ。世わたる大船をつくりて、其名（その）を神通丸とて、三千七百石つみても足かろく、北国の海を自在に乗（のり）て、難波の入湊に八木（はちぼく）の商売をして、次第に家栄へけるは、諸事につきて、其身調義（てうぎ）のよきゆへぞかし。

惣じて北浜の米市は、日本第一の津なればこそ、一刻の間に、五万貫目のたてり商も有事なり。其米は、蔵々に山をかさね、夕の嵐・朝の雨、日和を見合、雲の立所をかんがへ、夜のうちの思ひ入にて、売人有、買人有。壱分弐分をあらそひ、人の山をなし、互に面を見しりたる人には、千石・万石の米をも売買せしに、両人手打て後は、少も是に相違なかりき。世上に金銀の取やりには、預り手形に請判慥に「何時なりとも御用次第」と相定し事さへ其約束をのばし、出入になる事なりしに、空さだめき雲を印の契約をたがへず、其日切に、損徳をかまはず売買せしは、扶桑第一の大商。人の心も大腹中にして、それ程の世をわたるなる。難波橋より西、見渡しの百景。数千軒の問丸、甍をならべ、白土、雪の曙をうばふ。杉ばへの俵物、山もさながら動きて、人馬に付おくれば、大道轟き地雷のごとし。上荷・茶船、かぎりもなく川浪に浮びしは、秋の柳にことならず。米さしの先をあらそひ、若い者の勢、虎臥竹の林と見へ、大帳、雲を翻し、十露盤、丸雪をはしらせ。天秤、二六時中の鐘にひゞきまさつて、其家の風、暖簾吹かへしぬ。

商人あまた有が、中の嶋に、岡・肥前屋・木屋・深江屋・肥後屋・塩屋・大塚屋・桑名屋・鴻池屋・紙屋・備前屋・宇和嶋屋・塚口屋・淀屋など、此所久しき分限にして、商売やめて多く人を過しぬ。

昔、こゝかしこのわたりにて纔なる人なども、その時にあふて旦那様とよばれて、置頭巾・鐘木杖・替草履取るも、是皆、大和・河内・津の国・和泉近在の、物つくりせし人の子共。惣領残して、すゑ〴〵をでつち奉公に遣し置、鼻垂て手足の土気おちざるうちは、豆腐・花柚の小買物につかはれしが、お仕着二つ・三つ年をかさねけるに、定紋をあらため、髪の結振を吟味仕出し、風俗も人のやうになるにしたがひ、供ばやし・能・舟遊びにもめしつれられ、行水に数かく砂手習、地算も子守の片手に置習ひ、いつとなく角前髪より銀取の袋をかたげ、次第おくりの手代ぶんになつて、見るを見まねに、自分商を仕掛、利徳はだまりて、損は親方にかづけ、肝心の身を持時、親・請人に難義をかけ、遣ひ捨し金銀の出所なく、其なりけりに内證嘆済て、荷ひ商の身の行すゑ、幾人かかぎりなし。おのれが性根によつて、長者にもなる事ぞかし。

惣じて大坂の手前よろしき人、代々つゞきしにはあらず。大かたは吉蔵・三助がなりあがり。銀持になり、其時をえて、詩歌・鞠・楊弓、琴・笛・鼓、香会・茶の湯も、おのづからに覚えてよき人付会、むかしの片言もうさりぬ。菟角に人はならはせ、公家のおとし子、作り花して売まじき物にもあらず。是を思ふに奉公は主取が第一の仕合なり。子細は繁昌の所にはよらず、北浜過書町のほとりにすみけるさし物細工人有しに、此職人にもちいさき弟子二人ありしが新屋・天王寺屋などの十貫目入の銀箱、不断手に懸て寸法は覚えて、其銀はつゐに手に取たる事なし。此弟子、おとなしくなりて、一分見世を出しけるに、親方にかはらず鍋蓋・火燧箱の仕置、是より外をしらず。此者も、同じ所がら大所につかはれなば、それ〴〵の商人になるべき物をと見及び、ふびんなり。

すぎはひは草ばふきの種なるべし。此浜に、西国米水揚の折ふし、こぼれすたれる筒落米をはき集て、其日を暮せる老女有けるが、形ふつゝかなれば、廿三より後家となりしに、後夫となるべき人もなく、ひとり有世倅を行すゑの楽みに、かなしき年をふりしに、いつの比か、諸国改免の世の中すぐれて、八木大分此浦に入舟、昼夜に揚かね、かり蔵せまりて、置べきかたもなく、沢山に取なをし捨れる米を、塵塚まじりにはき集めけるに、朝夕にくひあまして、壱斗四五升たまりけるに、是より欲心出来て、始末をしけるに、はや年中に七石五斗のばして、ひそかに売、明のとし、なをまたのばしける程に、毎年かさみて、二十余年に胞くり金拾弐貫五百目になしぬ。其後、世倅にも九歳の時よりあそばせずして、小口俵のするをひろひ集て、銭ざしをなはせて、両替屋・問屋に売せけるに、人の思ひよらざる銭まふけして、我手よりかせぎ出し、後には、慥成かたへ日借の小判、当座がしのはした銀、是より思ひ付て、今橋の片陰に銭見せ出しけるに、田舎人立寄にひまなく、明がたより暮がたまで、わづかの銀子とりひろげて、丁銀こまがねかへ、小判を大豆板に替、秤にひまなくかけ出し、毎日〳〵つもりて、十年たゝぬうちに、中間商のうはもりになつて、諸方に借帳。我かたへはかる事なく、銀替の手代、これに腰をかゞめ、機嫌をとる程になりぬ。小判市も、此男買出せば俄にあがり、売出せば忽ちさがり口になれり。自、此男の口を窺、みな〳〵手をさげて、旦那〳〵と

申ぬ。中にも先祖をさがして、「なんぞ、あれめに随ひ、世をわたるも口惜き」と、我を立ける人、物の急なる時にさしあたつて迷惑し、是も又御無心申さるゝ。金銀の威勢ぞかし。後は大名衆の掛屋、あなたこなたの御出入もつぱらにしければ、昔の事はいひ出す人もなく、歴々の聟となつて、家蔵数をつくりて、母親の持れし「筒落掃・藁箒子・渋団扇は貧乏まねくといへ共、此家の宝物」とて、乾の隅におさめをかれし。

諸国をめぐりけるに、今もまだ、かせいで見るべき所は大坂、北浜、流れありく銀もありといへり。

西鶴『**日本永代蔵**』貞享二年（一六八八）刊、六巻、全三〇章

京・大坂・江戸三都を中心に紀伊国太地の捕鯨や長崎の貿易商など各地の町人・商人の興亡盛衰の短編集。

資料48落語『**遊山船**』

え〜、夏は夏祭り、これがまたよろし。日本の三大祭ね、え〜、東京は「神田祭」京都は「祇園祭」大阪は「天神祭」……天神祭やなんか「船渡御」いぅて、大阪は水の都、八百八橋。夕涼みもよろしおます。…（略）…橋の上もええやろけど、そら船乗ってウア〜騒いでる人もえぇし、みな上下えぇんやさかい、結構なことでございますが。ここにございましたのが喜六・清八といぅ仲良しの男でございます。東京の方はと言いますと、熊さん・八っつぁんと言いますけど、大阪の方は喜六・清八、喜ぃやん清ぇやんいぅのがね、これがそれぞれの家で行水いたしまして、ほんで待ち合わせしまして、難波橋へかかってまいります。そぉ〜らもぉ、橋の上は行き交う人でもぉい〜ぱいでございます。夜店やなんか出まして賑やか、橋の下も遊行遊山、三味や太鼓で、その賑ぃ〜ぎやかなこと……

喜「せやけどお前、賑やかやがな。なんか嬉しいなつてくるなぁ」

清「ほんに賑やかやなぁ。橋の上も賑やかやけどな、橋の下も賑やかやで」

喜「清ぇやんなにか、橋の下も賑やかか?」

清「賑やかか?て、見たら分かるやないかい」

喜「あぁそおか、ほんなら見してもらお。イヨツとショツと……、ワア〜ッ、清えやんの言うたとおりや、橋の下も昼みたいに明るぅて賑やかや。えらいこつちゃ清えやん、これお前、上の方で水が出よったで」

清「そんなことお前、分かるか?」

喜「分かるがな、見てみぃお前、ぎょ〜さん家が流れて来たがな」

清「んなアホなこと言うねやあれへんがな、これ家やあれへんがな、みな船やないかい」

喜「え?これ、船か?家みたいななぁ。あれ見てみぃな、屋根が付いてあつて、手すりが付いてあつて、障子がはまったぁる。あんなん家といっしょやで」

清「あれ、家やあれへんがな、あれは大屋形っちゆうねん」

喜「あぁあぁ、いつもお前が金借りに行くとこ」

清「いや、そら親方や。わしの言ぅてんのは大屋形や」

喜「大屋形て何やねん?」

清「屋形船の大きなやつで、大屋形ちゆうねん」

喜「あぁなるほど、屋形船の大きなやつで大屋形か。ウワァ〜っ、家みたいやなぁ。ほんなら、あの大屋形の横の小ちやい船な、あれ小屋形か?」

清「んな、小屋形ちゆな船あれへん、あれは茶船いぅてな、あの屋形船へお茶や食べもん積んで売りに行きよる。こつちの船、あれ通船いぅて、岸の方からあの屋形船へお客を通わしたりしよるんやなぁ」

喜「あぁ、なるほどなぁ、ぎょ〜さん船出とおんなぁ、清えやんなにか、今日はこれやっぱり船頭の寄り合いか?」

清「んなアホなこと言うねやあれへん、船頭の寄り合いやあれへんがな、わしらといっしよや。わしらはこれ夕涼みに来てんねん。あの人らはあないして船に乗って夕涼みに来たはるねん」

喜「船に乗って夕涼みに来たはんのん?それやったらこの糞暑いのに、障子なんか締めんと、もっと開けた方が風通しがええのんとちがうかえ?」

清「心配せんでもえぇねん。ああいぅな、贅沢な遊びをする人はな、世間へさして顔が差すやろ。せやからあないして締め切ったはんねん。しかし大川、こんだけ広いとこへ出てきたら、もお見ぇへんさかいな、開けはるさかい、心配せんでもえぇ」

喜「もぉここまで出て来はつたら開けはるか。ほんまか……、ああ清ぇやんが言うたとおりや、開けはつた開けはつた。あつちでも開けはつた。なんや、いっぺんに申し合わしたよおに開けはつたなぁ。清えやんの言うたとおりや。わ、わぁ～っ、あの船綺麗なあ、ビャ～ッと開けたら赤い毛氈が敷いてあって、提灯が吊つてあって、綺麗なぁおい。またぎょ～さん別嬪さん乗ってるなぁ」

…（略、芸妓・舞妓・幇間など、種々の料理に羨ましがる）…

ワァワァ言うとぉりますと、向こぉから出てまいりました一艘の船。これもどこぞの稽古屋の船と見えまして、揃いのイカリの模様の浴衣で、三味や太鼓でその陽ぉ気なこと……

清「ほぉら、賑やかな船が出て来よったなぁ。稽古屋の船やなぁ……、皆、揃いのイカリの模様の浴衣や。こぉいぅのんは誉めたらなあかんで。いろいろ船が出てるけど、あれが一番秀逸や。今から誉めるから、黙って聞ぃてぇよ。よッ、さッても綺麗ぇなイカリの模様」

女「風が吹いても、流れんよぉに」

清「粋なこと言ぃよったなぁ。洒落たこと言ぃよったなぁ」

喜「何のこつちや全然分かれへん。何が洒落たぁんねや？」

清「分からんガツキヤなあ、イカリの模様の浴衣やないかい、それを俺が誉めたんや。「さッても綺麗ぇなイカリの模様」言ぅたら「風が吹いても、流れんよぉに」、イカリの模様や、船に乗ってるやろ、せやからそこへ風が吹いてもイカリの模様やから流れんよぉにと掛けとぉるわけや。やっぱり稽古事の一つもしょ～つちゆう女ごや。言ぅことが違うわい。洒落たぁるわい。おい喜ぃ公、お前とこの嫁はんも確か女やなぁ？」

喜「当たり前やないかい。そんなもん、間違いなく女や」

清「せやけど、おんなじ女やけど、えらい違いや。やっぱり稽古事しょっちゅぅねん。言ぅことが違う。お前とこの嫁はんおんなじ女やけどあんな洒落たことよぉ言わへん」

喜「よぉ言うよ、うちの嬶かて、あれぐらいのことよぉ言ぅ」

清「言わへんて」

喜「何を言ぅとんねん。おい、俺の悪口言ぅのんえぇけど、嫁はんの悪口言ぅな。うちの嫁はんはもお、雀のお松いぅて有名やで。あれぐらいのこと言わいでか」

清「言わへんちゆぅねん」

喜「おら言わしてみせたら、馬鹿にしやがつて」……

（喜六は帰宅して妻の松との会話）

喜「おい嬶、今戻った」

松「どこ行てたんや？」

喜「清ぇやんと難波橋行てたんや」

松「賑やかやったやろ」

喜「あぁ、橋の上も賑やかやったけどな、橋の下も船やなんかぎょ～さん出てて賑やかや。清ぇやんと「えぇなぁ」言うて見てたんや。一艘な、稽古屋の船や、出て来よったんや。揃いのイカリの模様の浴衣や。清ぇやん「こんなん誉めたらないかん」言ぅてな、橋の上から「さッても綺麗ぇなイカリの模様」言ぅたら、中から一人が「風が吹いても流れんよぉに」言いよったんや。ほな、清ぇやん「洒落たぁる、粋ななぁ。お前とこの嫁はんも女ごや、おんなじ女ごやけど、あんなことよぉ言わへん」いぅて馬鹿にしとんねん。嬶、それぐらいのこと言えんなぁ？」

松「当たり前やないかいな。わたいかてそれぐらいのことよぉ言うわ」

喜「せやろ。せやから、言ぅてくれ、言ぅてくれ。確かイカリの模様の浴衣あったなぁ？ あれ出して来て着ぃ着ぃ。イカリの模様の浴衣着ぃ」

松「あんなもん、もぉ着られへんがな。押入れの中へ雑巾にしょ～思て入ったぁる。もお汚のぉて着られへん」

喜「汚のぉても何でもえぇ。イカリの模様のんやないとあかんねん。着ぃ着ぃ。……着たか？ 着たらお前、船に乗れ、船に乗れ」

松「あんた、ここ、長屋やで。そんなもん船なんかあれへんがな」

喜「そぉか、船あれへんなぁ。せやせや、最前俺が行水したタライあったやろ、あれ湯ぅダ～ツと放ってな、タライを船のつもりでバ～ツと浸かれ。俺今から難波橋行て来るさかい」

松「そんなとこ行て、見えんのか？」

喜「違うがな、今から天窓へ上がるからな、この天窓の上が橋の上のつも

りやがな。……嬶、その気になつて浸かつとおるやないか、タライの中へ。嫁はん、こんな上から見るのん初めてや」

松「あんた、早いこと言ぃなはれ。」

喜「よっしゃ。ほんならうまいこと言うさかい、言ぃ返せよ。いくぞ、ええか、言ぅぞ……あ、さッても綺麗ぇな……、さッても綺麗ぇ……うわぁ～ッ汚いなぁ。こんなもん、冗談でも綺麗ぇとは言われんで……、もおえぇわ、思たとおり言ぅたろ。あ、さッても汚い、イカリの模様！」

と言いますと、嫁さんも粋なもんで、

松「質に置いても、流れんよぉに」

上方落語　大阪を中心とした落語。見台・小拍子を使い、鳴り物がはいる。川を扱った上方落語には、このほか『三十石船』『舟弁慶』などがある。

第三節　東横堀・道頓堀

（1）東横堀川（土佐堀川分派点～道頓堀川合流点）

地下鉄堺筋線北浜駅→難波橋→中之島公園→天神橋→大川から東横堀へ
葭屋橋→今橋→高麗橋、里程元標跡、高麗橋櫓番所屋敷川沿→平野橋→大手橋（思案橋とも）→マイドームおおさか前、天野屋利兵衛之碑→西鶴文学碑（『日本永代蔵』水間観音の冒頭部分）
本町橋→農人橋（歩道橋の上、ゴミ捨て場）→久宝寺橋→安堂寺橋→末吉橋
住友銅吹所跡→九之助橋→東堀橋→瓦屋橋→上大和橋→下大和橋
高麗橋　公儀橋の一、大坂から各地への里程基準
公儀橋　直轄領の都市で幕府公儀の経費で普請する橋。町橋は地元町人の経費負担。公儀橋には江戸は大手橋・両国橋・永代橋・日本橋など百二〇余箇所、京都は三条大橋・五条大橋など百七箇所、大坂は天神橋・天満橋・難波橋・京橋・高麗橋・日本橋など僅か一二箇所。
里程元標　里数で距離を測る基準となる所に立てる標識。江戸時代、日本橋架橋完成後、慶長九年（一六〇四）日本橋を基点に一里塚建設。
三井家　伊勢出身、延宝元年（一六七三）初代高利、京都・江戸に進出、元禄二年（一五八九）幕府御納戸御用、同三年大坂高麗橋西詰（高麗橋一丁目）屋敷地購入、同四年金銀御為替御用達→呉服商越後屋大坂本店・大坂両替店開店。明治五年（一八七二）呉服店を分離→三越百貨店
大手橋（思案橋）西詰の淡路町・瓦町は行詰
天野屋利兵衛　赤穂藩出入りの大坂商人、赤穂義士討ち入りに武器調達、実在は疑問。
西鶴文学碑『日本永代蔵』水間観音の冒頭部分
巻一「初午は乗てくる仕合」
折ふしは春の山、二月初午の日。泉州に立せ給ふ水間寺の観音に貴賤男女参詣ける。皆信心にはあらず。欲の道づれ。はるかなる苔路、姫萩・荻の焼原を踏分、いまだ花もなき片里に来て、此の仏に祈誓をかけしは其分際程に富めるを願へり。……
本町橋　東橋詰（内本町）に享保九年（一七二四）以後西奉行所。
本町通　北＝北組、南＝南組、天満組→大坂三郷
末吉橋　平野郷の豪商末吉孫左衛門開発の町名
住友銅吹所跡　三井住友銀行事務センター
住友家　戦国期、近江出身の初代政友、銅に含有する銀の分離法南蛮吹の創始者蘇我理右衛門の子友以が婿養子二代目→元和九年（一六二三）銅精錬・銅貿易業泉屋大坂進出、寛永七年（一六三〇）長堀に銅吹所（精錬所）開設。延享三年（一七四六）江戸で札差、文化二年（一八〇五）両替開業→金融業に進出。

（2）道頓堀川（東横堀川分派点～木津川合流点）

津の清二つ井の粟おこし屋跡→日本橋、安井道頓碑→相生橋→太左衛門橋→戎橋→道頓堀橋
新戎橋→九郎右衛門橋→大黒橋→金屋橋→深里橋→なんばHatch→住吉橋→西道頓堀橋
幸橋→幸西橋→汐見橋→日吉橋→大正橋→ＪＲ環状線大正橋駅
津の清二つ井の粟おこし屋跡＝大阪の銘菓の一つ。二つ井戸は元、横堀川堀詰（高津二丁目）にあった二つ並んだ銘水の井戸。明治初年道路拡

張で埋立→井戸枠を津の清店前に移築、平成一五年津の清倒産。
日本橋、安井道頓碑＝『大阪市史』の誤解・混同
慶長一七年（一六一二）開削開始→慶長一九年大坂冬の陣→元和元年（一六一五）大坂夏の陣→同年開削再開→完成
平野藤次・成安道頓・安井治兵衛・九兵衛（安井家文書）
安井家文書の四人の他、平野次郎兵衛（東末吉家文書）「道頓堀組合支配由緒書上」ほか
安井治兵衛・九兵衛は徳川方に味方、成安道頓は大坂城籠城→戦死→二人の名前を混同
戎橋＝古くは操橋（あやつりばし）、今宮戎参詣の道筋の名称、現在「引っかけ橋」と俗称
湊町リバープレイス＝平成一四年（二〇〇二）地上七階地下二階大阪市建設局市街地整備本部　旧国鉄貨物駅跡　5FなんばHatch　7Fm osaka

第四節　木津川

藤永田造船所の変遷

元禄二年（一六八九）堂島船大工町に「兵庫屋」創業
幕末木津川下流の江ノ子島屋敷町に移転
明治二年（一八五九）九代目永田三十郎 ドイツ人技師カーゼン招聘→民間造船所最初の洋式木造外輪汽船「神速丸」建造
明治七年さらに下流の岩崎新田（西区岩崎町）に移転、三本マストの洋式帆船（はんせん）「十八丸」藤の花房→大阪府知事渡辺昇の命名「藤永田造船所」改称
明治三三年（一九〇〇）最初の鋼製貨物船「第二永田丸」建造
大正六年（一九一七）住吉区柴谷町に敷津工場開設
大正八年海軍指定工場、駆逐艦「藤」起工→大正一〇年竣工、以後海軍艦船（主に駆逐艦）六九艘建造
大正一〇年藤永田造船所争議、不況対策に三〇人解雇、一方労働組合組織化、五月全職工三千人団体交渉権確立→解雇者復職を交渉→警官隊に警備されて回答延期→六月ストライキ突入、数十人検挙、西尾末広ら七人起訴、争議の長期化→騒擾罪・暴行罪など続出→弁護士調停で団体交渉権承認→組合運動の発展
大正一二年株式会社の改組、資本金九〇〇万円、造船のほか鉄道車両・鉄管製造に進出
昭和四年（一九二九）永田三十郎（兵庫屋一〇代目）社長辞任→海軍中将池田岩三郎就任
昭和七年池田社長辞任→海軍中将岸本新太就任
昭和一四年（一九三九）資本金一六〇〇万円→生産力拡大
昭和一五年海軍管理工場に指定＝海軍艦艇のみ建造
昭和一八年資本金四八〇〇万円、従業員一六五〇〇人、内、朝鮮人六千～八千人、中国人一六〇人ほか
昭和二〇年（一九四五）終戦、食糧難打開策→連合軍司令部の漁船建造許可
昭和二一年司令部より賠償工場指定、岸本社長辞任→梅村栄の社長就任
昭和二九年海外から注文殺到、造船ブーム
昭和三六年岩戸景気、資本金一六億円に増資
昭和四〇年（一九六五）一〇月三井造船株式会社に合併

藤永田造船所建造の駆逐艦（無作為に抽出）

竣工年	艦名	終焉事情
大正10	「藤」	復員船→後、賠償艦としてオランダへ
大正12	「芙蓉」	昭和18年12月米潜水艦により沈没
大正13	「朝凪」	昭和19年2月米潜水艦により沈没
大正14	「皐月」	昭和19年5月マニラ湾で沈没
大正15	「文月」	昭和19年2月トラック島で沈没
昭和2	「夕月」	昭和19年12月オルモック島で沈没
昭和4	「叢雲」	昭和17年10月米機により沈没
昭和7	「電」	昭和19年5月米潜水艦により沈没
昭和12	「村雨」	昭和18年3月米機により沈没
昭和13	「山雲」	昭和19年10月米艦によりレイテ湾で沈没
昭和15	「黒潮」	昭和18年5月米艦によりソロモンで沈没

昭和15「夏潮」昭和17年2月マカッサル沖で沈没
昭和15「浦風」昭和19年11月台湾海峡で沈没
昭和18「朝霧」昭和20年4月米機により九州南方で沈没
昭和19「秋霧」昭和19年11月米機によりマニラ湾で沈没
昭和20「柳」昭和20年8月米機により座礁→終戦
昭和20「樺」復員船→後、賠償艦としてアメリカ

谷崎潤一郎略年譜

明治一九年（一八八五）東京日本橋で誕生
明治四一年九月 東京帝国大学文科大学国文科に入学
明治四四年 月謝滞納で大学退学、『刺青』
大正四年（一九一五 29歳）石川千代子（20歳）と結婚、『お艶殺し』
大正八年 佐藤春夫と交遊
大正一二年 関東大震災→家族とともに関西移住
大正一三年『痴人の愛』
昭和二年（一九二六）来阪の芥川龍之介を訪ねた根津松子（藤永田造船所重役 森田安松次女、大阪綿布問屋根津清太郎夫人）を知る
昭和三年『卍』『蓼喰う虫』
昭和五年 千代子と離婚→千代子と佐藤春夫結婚の挨拶状、『乱菊物語』『谷崎潤一郎全集』全十二巻
昭和六年（45歳）古川丁未子（23歳）と結婚、『吉野葛』『盲目物語』
昭和七年 魚崎の松子の隣家に居住、『蘆刈』
昭和八年 丁未子と別居、『春琴抄』
昭和九年 根津松子と同棲、『夏菊』新聞に連載→根津家の抗議により中止
昭和一〇年（50歳）丁未子と離婚→根津松子（33歳）と結婚
昭和一七年（56歳）『細雪』起稿
昭和一八年 陸軍省『細雪』の「中央公論」掲載を禁止
昭和一九年 陸軍省『細雪』自費出版の頒布を禁止
昭和二一～二三年 中央公論社より『細雪』刊行
昭和二四年 文化勲章を授与、『少将滋幹の母』
昭和三一年 根津清太郎没（56歳）、『鍵』
昭和三六年『瘋癲老人日記』
昭和四〇年（一九六五）没（79歳）

資料49谷崎松子『蘆辺の夢』「季刊中央公論文芸特集号」連載

森田安松（父）と永田の長女の娘（母）結婚→松子誕生

進水式で思い起したが、私自身、そのテープカットをと名指しをされたことがあった。娘ざかりの、結婚の一、二年前で、藤永田造船所で、初めて海軍の御用で駆逐艦を造らせていただける機会を得た時であった。

父の従弟の社長の再婚の夫人の実家が、政界の方であったのを幸いに、若かった社長の補佐役であった父が、東京へあまた足をはこんだがゆえの賜物であったといえるであろう。……当日の私の着物は、青海波の文様を染めた。父は波は好んだが、荒波はさけるようにといった。

第五章 住吉津

住吉・住之江 住吉津 細江川（細井川）河口
住吉神社 海神 底筒男・中筒男・表筒男・神宮皇后、軍神・歌神
和歌三神 住吉明神・玉津島明神・柿本人麿（人丸）

第一節 住吉・住之江の和歌

資料50「八代集」の住吉・住の江の歌

『古今和歌集』

賀 住江の松を秋風吹からに 声うちそふる沖つ白波 躬恒
恋二 住江の岸に寄る波よるさへや 夢の通ひ路人目よくらん 敏行
恋五 久敷もなりにけるかな住の江の 松は苦しき物にぞありける 読人不知
恋五 住江の松ほど久になりぬれば 芦鶴のねになかぬ日はなし 兼覧王
雑上 われ見ても久しくなりぬ住の江の 岸の姫松幾世経ぬらん 読人不知
雑上 住吉の岸の姫松人ならば 幾世か経しと問はまし物を 同
雑上 住吉と海人は告ぐとも長居すな 人忘草おふといふなり 忠岑

墨　道知らば摘みにもゆかん住の江の 岸に生てふ恋忘草　貫之

『後撰和歌集』

春下 春深き色にもあるかな住の江の 底も緑に見ゆる浜松　読人不知
恋一 住吉の岸の白波よる〳〵(夜々＝寄る々々)は 海人のよそめに見るぞ悲しき　同
恋一 住吉の我が身なりせば年ふとも 松より外(ほか)の色を見ましや　同
恋一 白波のよる〳〵岸に立ち寄て ねも見し物を住吉の松　同
恋二 住の江の波にはあらねど世とともに 心を君に寄せ渡る哉　貫之
恋二 外(よそ)にのみ松ははかなき住の江の 行てさへこそ見まくほしけれ　延喜御製(醍醐天皇)
恋二 住吉の松に立ち寄る白波の 帰る折にやね(根＝音)はなかるらん　忠岑
恋二 久しくも恋わたるかな住の江の 岸に年ふる松ならなくに　源俊(すぐる)
恋三 住吉の岸に来寄(きよ)する沖つ波 間(ま)なくかけても思ほゆるかな　読人不知
恋三 住江の目に近(ちか)からば岸にゐて 波の数をもよむべき物を　伊勢
恋六 我ならぬ人住の江の岸に出でて 難波の方を怨みつるかな　源整(とのふ)
ひたゝ(直)れ乞(こ)ひにつかは(遣)したるに「裏なんなき、それは着じとや、いかゞ」ちいひたれば

雑一 住吉の岸ともいはじ沖つ波 なほ打ちかけよ浦はなくとも　源元輔
雑三 波数にあらぬ身なれば住吉の 岸にも寄らずなりや果(は)てなん　読人不知

『拾遺和歌集』

夏　住吉の岸の藤波わが宿の 松の梢に色はまさらじ　平兼盛
物名 住吉の岡の松笠さしつれば 雨は降るともいな蓑は着じ　輔相(すけみ)
雑上 音にのみ聞き渡りつる住吉の 松の千年を今日見つるかな　貫之
雑上 世中を住吉としも思はぬに 何をまつとてわが身へぬらん　読人不知
雑上 うちしのびいざ住の江の忘れ草 忘れて人の又や摘まぬと　同
雑下 都には住み侘びはて、津国の 住吉と聞く里にこそ行け　忠見
神楽 住吉の岸もせざらん物故に ねたくや人に松といはれん　住吉明神
神楽 天下るあら人神のあひ生を 思へば久し住吉の松　安法法師
神楽 我問はば神代の事も答へなん 昔を知れる住吉の松　恵慶法師
恋一 逢ふ事を松にて年の経(へ)ぬるかな 身は住の江に生(お)ひぬ物ゆへ　読人不知
恋二 忍ひつゝ思へば苦し住の江の 松の根ながらあらはれなばや　同
恋二 住吉の松ならねども久しくも 君と寝ぬ夜の成にけるかな　清蔭
恋二 久しくも思ほえねども住吉の 松や二度(ふたたび)生(お)ひかはるらん　忠房女(むすめ)
恋三 住吉の岸を田に掘り蒔きし稲(いね)の 刈るほど迄も逢はぬ君かな　人麿
恋四 住吉のあら人神に誓ひても 忘るゝ君が心とぞ聞く　読人不知
恋四 住吉の岸に生(お)ひたる忘草 見ずやあらまし恋ひは死ぬとも　同
恋五 住吉の岸に向かへる淡路嶋 哀れと君をいはぬ日ぞなき　人麿

『後拾遺和歌集』

春下 住の江の松の緑も紫の 色にぞかくる岸の藤波　読人不知
賀　住吉の浦の玉藻を結びあげて 渚の松の蔭をこそ見め　元輔
恋三 恋しきに難波のことも思ほえず 誰れ住吉の松といひけん　大江匡衡
恋三 住吉の岸ならねども人しれぬ 心のうちのまつ(待つ・松)ぞ侘びしき　相模
雑三 紅葉する桂の中に住吉の 松のみひとり緑なるらん　津守国基
雑四 住吉の神は哀れと思ふらむ むなしき舟をさして来たれば　後三条院
雑四 沖つ風吹きにけらしな住吉の 松のしづ枝(え)を洗ふ白波　民部卿経信
雑四 住吉の浦風いたく吹きぬらし きし打つ波の声しきるなり　兼経法師
雑四 松見れば立ちうき物を住の江の いかなる波かしづ心なき　藤原為長
雑四 忘れ草摘みて帰らむ住吉の 岸かたの世は思ひ出(い)でもなし　平棟仲
雑四 思ふこと神は知るらむ住吉の 岸の白波たよりなりとも　源頼実
雑四 ときかけつ衣の玉は住の江の 神さびにける松の梢に　増基法師
雑四 頼みては久しくなりぬ住吉の まづ(松＝先づ)このたび(度＝旅)の験見せなん　赤染衛門
雑六 住吉の松さへかはる物ならば 何か昔のしるしならまし　山口重如(しげゆき)
雑六 住吉の松のしづ枝(え)に神さびて 緑に見ゆる朱(あけ)の玉垣　蓮仲法師
石清水にまい(詣)りて侍りける女の、杉の木のもとに住吉のかみの社をいはひて侍ければ、社の柱に書き付けて侍りける

雑六 さもこそは宿はかはらめ住吉の 松さへ杉になりにけるかな　読人不知

『金葉和歌集』

春　住吉の松にかゝれる藤の花 風の便りに波やおるらん　顕季
賀　君が代の程をば知らで住吉の 松を久しと思けるかな　経信
神楽 我問はば神代の事も答へなん 昔を知れる住吉の松　恵慶法師
雑上 いく返(かへ)り花咲きぬらん住吉の 松も神代のものとこそきけ　源俊頼

補遺　住吉のまつかひありて今日よりは難波のことも知らずばかりぞ　賀茂成助
補遺　洗(荒)うとみれど黒き鳥かな　さもこそは住の江ならめよとともに　頼算法師
　　読人不知

『詞花和歌集』

賀　過ぎききにし程をば捨てつ今年より千代はかずつむ住吉の松　大中臣能宣
賀　君が代の久しかるべきためしにや神も植ゑけん住吉の松　読人不知
賀　住吉の現人神(あらひとがみ)の久しさに松も幾度生(お)ひ替(か)はるらん　経信
別　六年(むとせ)にぞ君は来(き)まさん住吉の待つべき身こそいたく老いぬれ　津守国基
雑一　住吉の細江にさせる澪標深きにまけぬ人はあらじな　相模
雑一　住吉の波にひたれる松よりも神のしるしぞ顕(洗はれ)れにける　式部大輔資業
雑下　とゞこほることはなけれど住吉の(松＝待つ)まつ心にや久しかるらん　顕輔

『千載和歌集』

賀　住江の松を秋風吹からに声うちそふる沖つ白波　躬恒
羇旅　住の江に待つらんとのみ嘆きつゝ心づくしに年をふるかな　津守有基
雑上　人の心あらずなれども住吉の松の気色(けしき)は変はらざりけり　津守景基
神祇　住吉の波も心を寄せければ　むべぞ汀に立ちまさりける　大納言経輔
神祇　徒(いたづら)に古(ふ)りぬる身をも住吉の松はさりとも哀(あは)れ知るらん　俊成
神祇　古りにける松物いはゞ問ひてまし昔もかくや住の江の月　右大臣実定
神祇　住吉の松の行きあひの隙よりも月さえぬれば霜は置きけり　俊恵法師

『新古今和歌集』

秋上　月はなほ漏らぬ木の間も住吉の松をつくして秋風ぞ吹く　寂蓮
賀　住の江の浜の真砂(まさご)を踏むたづは久しき跡をとむるなりけり　伊勢
賀　住の江に生(お)ひ添(そ)ふ松の枝ごとに君か千年の数ぞこもれる　隆国
賀　我が道を守らば君を守るらん齢(よはひ)はゆづれ住吉の松　定家
恋五　住吉の恋忘草(こひわすれぐさ)種絶えて　なき世に逢へる我ぞ悲しき　藤原元真(もとざね)
雑中　待つ人は心行くとも住吉の里にとのみは思はざらなん　後冷泉院
雑中　住吉の松はまつとも思ほえで君が千歳の陰ぞ恋しき　大弐三位
雑下　数ならで世に住の江の澪標いつを待つともなき身なりけり　源俊頼
雑下　憂きながら久しくぞ世を過ぎにける哀れやかけし住吉の松　俊成
神祇　夜(よ)や寒き衣や薄き片そぎの行き合ひの間より霜や置くらん　住吉御歌
神祇　いかばかり年は経ねども住吉の松ぞ二度(ふたたび)生(お)ひ変はりぬる
　　この歌は、ある人住吉に詣でて「人ならば問はまし物を住の江の松は幾たび生かはるらん」と詠みて奉りける御返(おほんかへ)しとなんいへる
神祇　むつまじと君は白波瑞垣(みづがき)の久しき世より祝ひ初てき　住吉御歌
　　伊勢物語に「住吉に行幸の時、御神現形(げぎやう)し給ひて」と記せり
神祇　住吉の浜松が枝に風吹けば波の白木綿(しらゆふ)かけぬ間そなき　藤原道経
神祇　住吉と思ひし宿は荒れにけり神のしるしを待とせしまに　津守有基

掛詞　住吉＝住み良し
景物　松（＝待つ）・岸の姫松・忘れ草
本歌取り　『栄華物語』巻三八「松のしづえ」天降(あまくだ)る神の験(しるし)に君に皆齢(よはひ)は譲(ゆづ)れ住吉の松　一品宮女房→『新古今和歌集』巻七　我が道を守らば君を守るらん齢(よはひ)はゆづれ住吉の松　定家

第二節　住吉・住之江の物語（散文）

資料51『源氏物語』澪標（岩波古典文学大系15）

御社立ちたまて、所どころに逍遙を尽くしたまふ。難波の御祓(はらへ)、七瀬(ななせ)によそほしう仕(つか)まつる。堀江のわたりを御覧じて、「今はた同じ難波なる」①と、御心にもあらでうち誦(ず)じたまへるを、御車のもと近き惟光、承りやしつらむ、さる召しもや、と例にならひて、懐(ふところ)に設(まう)けたる、柄(つか)短き筆など、御車とどむる所にて奉れり。をかしと思して、畳紙(たたうがみ)に、

　源氏　みをつくし恋ふるしるしにここまでも　巡り逢ひけるえ(縁＝江)には深しなとてたまへれば、かしこの心知れる下人(しもびと)してやりけり。駒並(こまな)めてうち過ぎたまふにも心のみ動くに、露ばかりなれど、いとあはれにかたじけなくおぼえて、うち泣きぬ。

　明石　数ならでなにはのこともかひなきに　なげみをつくし思ひそめけむ

田蓑(たみの)の島に禊仕(みそぎつかう)まつる、御祓(はらへ)のものにつけて奉る。日暮れ方になりゆ

く。夕潮満ち来て、入江の鶴も声惜しまぬほどのあはれなるをりからなればにや、人目もつつまずあひ見まほしくさへ思さる。

源氏 露けさのむかしに似たる旅ごろも 田蓑の島の名にはかくれず

①わびぬれば今はた同じ難波なる 身を尽くしても逢はんとぞ思ふ
元良親王 『後撰和歌集』恋五

②難波潟潮満ち来らしあまごろも 田蓑の島に鶴鳴き渡る
読人不知 『古今和歌集』雑上

第六章　旧大和川

第一節　寝屋川・深野池

寝屋川　交野市の生駒山地に水源、寝屋川市寝屋地区の西で北谷川と合流、京阪線西側を南流し、西流する讃良川・清滝川・権現川と合流、大東市に入って住道で北流する恩智川と合流、片町線北側を西流して鶴見区徳庵で西流する五箇井路・南流する古川と合流、さらに南流する西三荘水路に合流、城東区で北流する城東運河・南流する城北運河と合流、中央区の大阪城北詰で西流する第二寝屋川と合流、旧淀川（大川）に合流。寝屋川周辺では、農作物を害する溜り水を抜くための井路（悪水堀）が発達。

資料52『**鉢かづき**』（小学館 古典文学全集『御伽草子』）

中昔のことにやありけん、河内国交野の辺に、備中守さねたかといふ人ましましける。数の宝を持ち給ふ。飽き満ちて、乏しきこともましまさず。詩歌管絃に心を寄せけるが、花の下にては散りなんことを悲しみ、歌を詠み詩を作り、のどけき空をながめ暮し給ひける。北の御方は、古今、万葉、伊勢物語、数の草子を御覧じて、月の前にて夜を明し、入りなんことを悲しみ、明し暮し給ひつつ、心に残ることもなし。鴛鴦の結び、隔つこともましまさず、思ふままなる御仲なるに、御子一人もなし。朝夕悲しみ給ひしに、いかなることにや、姫君一人まうけ給ひて、父母の御喜び、申すはかりはなかりけり。かくて、いつきかしづき給ふこと限りなし。明け暮れ観音を信じ申されけるほどに、長谷の観音に参りては、かの姫君の末繁昌の果報あらせ給へとぞ祈り給ふ。

かくて年月を経るほどに、姫君十三と申せし年、母上例ならずかぜのこちとのたまひて、一日二日と申せしほどに、今を限りに見えければ、姫君を近づけて、緑のかんざしを撫であげ、「あらむざんやな、十七八にもなし、いかなる縁にもつけおき、心安く見おき、とにもかくにもならずして、いとけなき有様を捨ておかんこと、あさましさよ」と、涙を流し給ふ。姫君も、もろともに涙を流し給ひける。母上は流るる涙をおしとどめ、そばなる手箱を取り出し、中には何をか入れられけん、世に重げなるを姫君の御髪にいただかせ、その上に肩の隠るるほどの鉢きせ参らせて、母上、かくこそ詠じ給ひける。

さしも草深くぞ頼む観世音 誓ひのままにいただかせぬる

かやうにうちながめ給ひて、つひにむなしくなり給ふ。父おほきに驚き泣き給ひて、「いとけなき姫をば何とて捨ておき、いづくとも知らずかくなり給ふ」と泣き給へど、かひぞなき。かくて、さしてあるべきならねば、名残尽きせず思へども、むなしき野辺に送り捨て、華の姿も煙となる、月のかたちは風となり、散りはつるこそいたはしけれ。かくて、父御前、姫君を近づけ参らせて、いただき給ひたる鉢取らんとしけれども、吸ひつきてさらに取られず。父おほきに驚きて、「いかがはせん、母上にこそは離れ参らせめ、かかる片端のつきぬることのあさましさよ」と、歎き給ふこと限りなし。…（略）…

さるほどに、父御前の一族、親しき人々寄りあひて、いつまで男のひとり住みがたしと、「この袖枕、歎きくどき給ふとも、そのかひよもあらじ。いかなる人をも語らひて、憂きに別れし名残をも慰め給へ」と勧められ、先立つ人はとにかくに、残る憂き身の悲しさよと、思ひごともよしなしとて、「ともかくも御はからひ」とありければ、一門の人々喜びて、さるべき人をと尋ね、もとのごとく迎ひ取り、移れば変る、世の中の心は花ぞかし。秋の紅葉の散り過ぎて、そのおもかげは、姫君ばかりぞ歎かるる。

かくて、かの継母、この姫君を見奉りて、かかる不思議の片端者、うき

世にはありけることよとて、憎み給ふこと限りなし。さて、継母の御腹に御子一人出で来給へば、いよいよこの鉢かづきを見じ聞かじと、なみの立居のことまでも、虚言のみばかりのたまひて、常には父にざんそう申す。鉢かづきは、あまりやるかたなきままに、母の御墓へ参りて、泣く泣く申させ給ふ…（略）…

継母、このよし聞き給ひて、鉢かづきが母の墓へ参りて、殿をもみづから親子をも呪ふことこそ恐ろしけれと、まことをば一つも言ひ給はず、虚言ばかりを父に度々言ひければ、男の心のはかなきは、まことと思ひ、鉢かづき呼び出し、「無道の者の心やな。あらぬ片端のつきぬるを、世にいたはしく思ひしに、咎もなき母御前、兄弟を呪ふことこそ不思議なれ。片端者を内に置きては何かせん。いづかたへも追ひ出し給へ」とのたまへば、継母、これを聞きて、そばへうち向きて、さも嬉しげなる風情して笑ひける。

さて、いたはしや、鉢かづきを引き寄せて、召したるものを剥ぎ取りて、あさましげなる帷子一つ着せ参らせ、ある野の中の四辻へ捨てられけるこそあはれなれ。…（略）…

足に任せて迷ひ歩き給ひけるに、大きなる川の端へうち着き給ふ。ここに立ちどまりて、いづくをさして行くともなく迷ひ歩かんより、この河の水屑となり、母上のおはします所へ参りなんとおぼしめして、河の端へのぞき給へば、さすが幼き心のはかなさは、岸うつ波も恐ろしや、瀬々の白波激しくて、そこはかとなき水の面すさまじければ、いかがあらんと思へども、これを心の種として、すでに思ひきり、河へ身をこそ投げんとし給ふ時、かくこそ一首つらねけり。

河岸の柳の糸の一筋に　思ひきる身を神も助けよ

かやうにうちながめ、御身を投げ沈みけれども、鉢にひかれて、御顔ばかりさし出でて流れけるほどに、漁する舟の通りけるが、「ここに鉢の流れける、何ものぞ」と言ひて上げ見れば、頭は鉢にて、下は人なり。舟人、これを見て、「あらおもしろや、いかなるものやらん」とて、河の岸へ投げ上ぐる。ややしばらくありて、起き直る。つくづくと案じ、かくばかり、

河波の底にこの身のとまれかし　などふたたびは浮きあがりけん

などとうちながめ、あるにあられぬ風情して、たどりかねてぞ立ち給ふ。…（略）…

さるほどに、その所の国司にてまします人の御名をば山蔭の三位中将とこそ申しける。折節、縁行道して、四方の梢をながめつつ、霞に遠里の、賤が蚊遣火、さしも草、そこひにくゆるうす煙、上の空にてたちなびき、おもしろかりける夕暮は、恋する人に見せばやと、ながめ出して立ち給ふところに、かの鉢かづき歩み寄る。中将殿は御覧じて、「あれ呼び寄せよ」とのたまへば、若侍ども二三人走り出で、かの鉢かづきを連れて参る。「いづくの浦、いかなる者ぞ」とのたまへば、鉢かづき申すやう、「われは交野の辺の者にて候ふ。母に程なくおくれ、思ひのあまりに、かかる片端さへつきて候へば、あはれむ者もなきままに、難波の浦によしなしと、足に任せて迷ひ歩き候ふ」と申しければ、さてさて不便とおぼしめし、「いただきたる鉢を取りのけてとらせよ」とて、みなみな寄りて取りけれども、しかと吸ひつきて、なかなか取るべきやうもなし。これを人々御覧じて、「いかなるくせものぞや」とて笑ひける。

中将殿は御覧じて、「鉢かづきはいづくへぞ」とのたまへば、「いづくともさして行くべき方もなし。母に離れ候うて、結句、かかる片端さへつき候へば、見る人ごとにおぢ恐れ、憎がる人は候へども、あはれむ人はなし」と申しければ、中将殿きこしめして「人のもとには不思議なる者のあるも、よきものにて候ふ」とのたまへば、仰せに従ひて置かれける。…（略、鉢かづきは中将殿の湯殿の世話係となって奉公する）…

さるほどに、この中将殿は御子四人持ち給ふ。三人は、みなみなありつき給ふ。四番目の御子、宰相殿御曹子と申すは、みめかたち世にすぐれ、優にやさしき御姿、昔を申さば、源氏の大将、在原業平かとぞ申すばかりなり。春は花の下に日を暮し、散りなんことを悲しみ、夏は涼しき泉の底、玉藻に心を入れ、秋は紅葉落葉の散りしく庭の紅葉をながめ、月の前にて夜を明し、冬は蘆間の薄氷、池の端に羽を閉ぢて、鴛鴦の浮寝ものさびし。重ぬる褄もあらばこそ、ひとりすさみて立ち給ふ。御兄たちも殿上も、御湯殿へ入らせ給へども、かの御曹子ばかり残らせ給ひ、さ夜ふけ

てはるかになりて、ひとり湯殿に入らせ給ふ。かの鉢かづき、「御湯移し候ふ」と申す声、やさしく聞えける。「御行水」とてさし出す、手足のうつくしさ、尋常げに見えければ、世に不思議におぼしめし、「やあ鉢かづき、人もなきに、何かは苦しかるべき、御湯殿して参らせよ」とのたまへば、今さら昔を思ひ出して、人にこそ湯殿させつれ、人の湯殿をばいかがするやらんと思へども、主命なれば力なし、御湯殿へこそ参りける。

御曹子は御覧じて、河内国は狭しといへども、いかほどの人をも見てあれども、かほどにもの弱く、愛敬世にすぐれ、うつくしき人はいまだ見ず、一年、花の都へ上りし時、御室の院の花見のありし時、貴賤群集して、門前に市をなしつれども、その時にも、この鉢かづきほどの人はなし、いかに思ふとも、この人を見捨てがたくや思はれける。「いかに鉢かづき、思ひそめにし紅の、色は移ろふことなりと、君とわが中変らじ」と、千秋の松に契りをはるかにかけ、松の浦の亀に久しく結ばれける。…（略）…

包むとすれど紅の、洩れてや人の知りぬらん、「宰相殿こそ、鉢かづきがもとへ通はせ給ふ、あさましさよ。もとより高きも賤しきも、男はあるならひ、立ち寄り給ふとも、あの鉢かづきめが、近づき参らせんと思ふ心の不得心さよ」と、憎まぬ人はなかりけり。ある時、よそより客人来り、夜ふけ方まで隙入り、遅く入らせ給ひければ、鉢かづき、おぼつかなく思ひて、かくばかり、

人待ちて上の空のみながむれば露けき袖に月ぞ宿れる

と、かやうにうちながめければ、いよいよやさしくおぼしめし、契り深くはなりけれども、捨つべきやうはましまさず。昔が今に至るまで、わが身にかからぬことまでも、人の言ふならひにて、「宰相殿は、世にも人なきやうに、かかる御ふるまひかな。をかしき御心かな」と笑ひけるほどに、母上きこしめし、「みなみな僻事をや申すらんに、乳母に見せよ」とのたまへば、乳母見て、「まことにて候ふ」と申しける。父母あきれ、しばしものをものたまはず、ややあつて、「いかに乳母、聞け。とかく宰相の君を諫め、鉢かづきに近づかぬやうにはからへ」とのたまへば、乳母、若君の御前に参り、何となく、御物語申し慰めて、「いかに若君様、まことしくは候はねども、湯殿の湯沸し鉢かづきがもとへ通はせ給ふよし、母上きこしめして、よもさやうにはあるまじけれども、もしまことならば、父の耳に入らぬさきに、鉢かづきを出すべしとの仰せにて候ふ」と申しければ、若君のたまふやうは、「思ひまうけたる仰せかな。一樹の蔭、一河の流れを汲むことも、他生の縁とこそ聞け。古も、さることあればこそ、主の勘当かうぶり、千尋の底に沈むとも、妹背の中はさもあらず。親の御不審かうぶりて、たちまち無間に沈むとも、思ふ夫婦の中ならば、何か苦しかるべきぞ。殿上の御耳に入り、たちまち御手にかかるとも、かの鉢かづき故ならば、捨つる命は、露塵ほども惜しからず。かの人を捨てんこと思ひもよらず。このこと用ひ申さぬとて、鉢かづきもろともに追ひ出し給ひなば、いかなる野の末、山の奥に住むとても、思ふ人に添ふならば、ゆめゆめ悲しかるまじ」とて、わが御方を御出でありて、柴積むとぼそに入り給ふ。日ごろは、人目を包ませ給ひしが、乳母参りて申してより後は、ひめもす鉢かづきがもとにこそゐ給ひける。さるほどに、御兄たちも、一門座敷にかなふまじとありけれども、厭ふ気色もましまさず。いよいよ人目をも憚らず、朝夕通はせ給ひける。

母上仰せけるやうは、「さもあれ、鉢かづきは、いかさま変化の者にて、若君を失はんと思ふやらん、いかがせん、冷泉（乳母カ）」と仰せける。冷泉申されけるは、「かの君は、さならぬことさへ色深くもの恥ぢをし給ひて、おぼろけごとまでもつつましげなるみたちにてわたらせ候へども、このことにおいては、恥ぢ給ふ気色も候はず。さあらば、公達の嫁くらべをし給ひて御覧候へ。さやうに候はば、かの鉢かづき恥づかしく思ひて、いづくへも出でゆくこと候はん」と申されければ、げにもとおぼしめし、「いついつ、公達の嫁くらべあるべし」と、口々にふれさせける。…（略）…

さて、とかく過ぎゆくほどに、嫁合の日にもなりぬれば、宰相殿、鉢かづきと二人、いづくへも立ち出でんとおぼしめしけるこそあはれなり。さるほどに、夜も明け方になりぬれば、召しもならはぬ草鞋しめはき給ひて、さすが父母住みなれ給ふことなれば、御名残惜しくおぼしめし、落つる涙にかき曇り、…（略）…

かくて、とどまるべきにもあらざれば、夜もやうやう明け方になりぬれ

ば、急ぎ出でんとて、涙とともに、二人ながら出でんとし給ふ時に、いただき給ふ鉢、かつぱと前に落ちにけり。

宰相殿驚き給ひて、姫君の御顔をつくづくと見給へば、十五夜の月の雲間を出づるに異らず、髪のかかり、姿かたち、何に譬へん方もなし。若君嬉しくおぼしめし、落ちたる鉢を上げて見給へば、二つ懸子のその下に、金の丸かせ、金の盃、銀の小提、砂金にて作りたる三つなりの橘、銀にて作りたけんぽの梨、十二単の御小袖、紅の千入の袴、数の宝物を入れられたり。姫君、これを見給ひて、わが母長谷の観音を信じ給ひし御利生とおぼしめして、嬉しきにも悲しきにも、先立つものは涙なり。さて、宰相殿、これを見給ひて、「これほどいみじき果報にてましますことのうれしさよ。今はいづくへも行くべきにあらず」とて、嫁合の座敷へ出でんとこしらへ給ふ。すでにはや夜も明けければ、世間ざざめきける。人々言ひけるは、「これほどの御座敷へ、あの鉢かづきが出でんと思ひ、いづくへも行かぬことの不得心さよ」と笑ひける。…（略）…

さるほどに、鉢かづき遅しと、度々使ひたちければ、宰相殿きこしめし、「ただ今それへ参る」と仰せければ、人々、見て笑はんとぞじじめきける。出でさせ給ふ有様、ものによくよく譬ふれば、ほのかに出でんとする月に雲のかかる風情にて、御かほばせ、気高くいつくしく、御姿は、春の初めの糸桜の、露の隙よりもほの見えて、朝日のうつろふ風情に異らず、霞の眉墨ほのぼのと、婵娟たる両鬢は、秋の蝉の羽にたぐへ、宛転たる御かほばせは、春は花に妬まれ、秋は月にぞ妬まれ給ふ御風情なり。御年の齢十五六ほどに見えさせ給ふ。…（略）…

さるほどに、御座敷一段下りて、こしらへたる所に直らんとし給ふ時に、舅三位の中将殿「いかで天人の影向を下座に置くべき」とて請じさせ給ふ。あまりのいとほしきに、母御前の左の膝もとへ呼び参らせ給ひける。さて、舅殿への御引出物には、銀の台に金の盃据ゑ、金にて作りたる三つなり橘、金十両、唐綾、織物の御小袖三十かさね、唐錦十反、巻絹五十疋、広蓋に積ませ参らせる。姑御前への御引出物には、染物百反、金の丸かせ、銀にて作りたる…（略）…

さて、御盃参りければ、姑御前きこしめし、やがて姫君にさし給ふ。その後、献々廻りければ、三人の兄嫁御前たち、談合あるやうは、「みめは下臈によらぬなり。管弦を始め、和琴を調べさすべし。和琴は、ことにその源を知らせざれば、左右なく弾かれぬものなり。宰相殿は、その源をもあきらめ給へば、後には教へ給ふとも、今夜のうちには、教へ給ふことなるまじき。いざや始めん」とて、兄嫁御前は琵琶の役、次郎嫁御は笙を吹き給ふ。殿上は鼓打ち、姫君は、和琴御調べ候へと責められける。その時、姫君仰せけるやうは、「かやうのことは、いまだ聞き始めにて候へば、少しも存ぜず候ふ」と御辞退あり。宰相殿御覧じて、わが身を姫君と見よかし、行きて弾かんものをとおぼしめしける。その時、姫君御心の中におぼすやうは、われを賤しき者と思ひ、かやうにして笑はんためとおぼしめし、われも、昔、母にかしづかれし時には、朝夕手馴れし楽の道なれば、弾かうずものとおぼしめし、「さらば、弾きてみ申し候はん」とて、そばなる和琴引き寄せ、三べん調べ給ひける。宰相殿御覧じて、嬉しきこと限りなし。御前たち御覧じて、歌を詠み手書くことも、後には宰相殿御教へあるべし、ただ今のうちには、教ゆることもなるまじ、さらば、歌を詠ませ、笑はむと談合なされ、「これ御覧ぜよ、姫君。桜が枝に藤の花、春と夏とは隣なり、秋はことさら菊の花、これにつき、姫君、一首あそばし候へ」と仰せければ、姫君きこしめし、「あらむつかしのことを仰せ候ふものかな。われわれが能には、このほど湯殿に候ひて、朝夕手馴れし水車、汲み上げしよりほかのことはなし。歌といふことは、いかやうなるものやらん、少しも存ぜず候ふ。まづまづ御前たちあそばされ候へ。その後は、ともかくも申してみん」とありければ、御前たち仰せけるは、「姫君は、今日の御客もじにてましませば、まづまづ一首あそばし候へ」と責められける。その時、姫君、一首とりあへず、

春は花夏は橘秋は菊 いづれの露に置くものぞ憂き

と、かやうにあそばしける。御筆のすさび、道風がふるひ筆もかくやらんと、目を驚かすばかりなり。…（略）…さるほどに、また御盃出でければ、舅御前きこしめし、姫君に御さしありて、「御さかな申さん」とて、「わが所領七百町とは申せども、二千三百町の所なり。一千町をば姫君に参らする。また一千町をば宰相の君に取らすべし。残る三百町をば三人の

子どもに取らするなり。百町づつ分けて取れ。これを不足に思ふ者あらば、親とも子とも思ふべからず」と仰せければ、兄御たちきこしめし、合はぬこととは思へども、貴命なれば力なし。今よりしては、宰相の君を総領と思ふべしと、三人同心し給ひけり。…（略）…

その後、姫君は、母上の御菩提ねんごろに弔ひ給ふ。かくて過ぎゆくほどに、公達あまたまうけ給ひて、御喜び限りなし。これにつけても、捨てられし故里の父御前を恋しく、御公達をも見せ参らせたくおぼしめしける。

さるほどに、故里の継母御前は、慳貪者なる故に、召し使はるる者も、かなたこなたへ逃げ走り、後には貧しくなり、一人持ちたる姫をも問ふ人もなし。御二人の中も悪しくなりければ、貧しき住居何かせん、心に残ることもなしとて、父御前は、いづくとも知らず、修行に立ち出で給ふ。…（略）…

その後、宰相殿、帝の御意に入らせ給ひ、帝より大和、河内、伊賀三か国を下されければ、御よろこびのために、長谷の観音へ御参りある。御一門御公達、花を飾り、金銀をちりばめ、ざざめき給ふ。さるほどに、姫君の父御前は、観音の御前に念誦してゐ給ひけるを…（略）…姫君御覧じて、御年より面痩せ給へども、さすが親子の御ことなれば、人目も憚らず、「これこそ古の鉢かづきの姫にて候へ」とて、御出でありければ、父御前きこしめし、「これは夢か現か、ひとへに観音の御利生なり」とのたまひければ、宰相殿きこしめし、「さては、姫君は、河内の交野の人にましますか。さればこそ、ただ人とは思はぬものを」とのたまひて、御公達一人と、姫君の父御前とをば、河内国の主になし参らせ、末繁昌に住ませ給ふ。…（略）…これただ、長谷の観音の御利生とぞ聞えける。今に至るまで、観音を信じ申せば、あらたに御利生ありと申し伝へ侍りける。この物語を聞く人は、つねに観音の名号を十返づつ御唱へあるべきものなり。

南無大慈大悲観世音菩薩

頼みてもなほかひありや観世音　二世安楽の誓ひ聞くにも

御伽草子　室町時代から江戸時代初期、短編物語。婦女・幼児向き、空想的・教訓的・啓蒙的内容。三〇〇編以上が写本・絵巻・奈良本形式で伝来。内、享保年間（一七一六～三六）大坂の書店渋川清右衛門が次の二三編を刊行→渋川本『文正草子』『鉢かづき』『小町草紙』『御曹子島渡』『唐糸草子』『木幡狐』『七草　草紙』『猿源氏草紙』『ものくさ太郎』『さざれ石』『蛤の草紙』『小敦盛』『二十四孝』『梵天国』『のせ猿草子』『猫の草子』『浜出草紙』『和泉式部』『一寸法師』『さいき』『浦島太郎』『横笛草紙』『酒呑童子』、他に『をこぜ』『瓜姫物語』『鼠の草子』『西行』『猿の草子』『弁慶物語』『俵藤太物語』など

深野池　寝屋川市南端の河北から大東市深野南まで、河内低地に残った池沼。池中には三箇村の島々が存在。大和川の付け替え→干拓地→東本願寺による新田開発。昭和四七年（一九七二）水害。現在、遊水池。

資料53貝原益軒『南遊紀行』（『日本紀行文集成』一）元禄二年（一六八九）

ふかうの池は、深野池とかくと云。本名は茨田の池と云。池の広さ南北二里、東西一里、所により東西半里許有。湖に似たり。其中に島あり。三ケと云村有。故に此池を三ケのおき共云。三ケの島に漁家七、八十戸あり。田畠も有。此島南北廿町、東西五、六町有と云。此池に鯉、鮒、鯰、はす、わたか、ゑび、鰻鱺、つがに等多し。漁舟多し。日々舟に乗て漁し、魚を大坂にうる。又蓮多し。芡実多く、葦多し。皆取用てたすけとす。殊に菱尤多し。是を採て飯にし、餻にし、粥にして粮とす。或は菓子にもする。又売て資とす。菱を取日は定日あり。里民云合せて群出。一人にて妄に取事を禁ず。菱に賦税はなし。又此島より漁人共舟にのり、陸に渡りて田も作なり。

（御供田＝ごくでん）御供村は池の東に在。島にはあらず。漁人多し。ふかうの池のまはり、凡四十二村ありと云。此池水の流れの末、大和河に出づ。河下より商舟毎日往来す。是より大坂へ二里あり。

貝原益軒　寛永七年（一六三〇）生、儒者、朱子学・陽明学を学び、福岡藩医師。『養生訓』『大和本草』など（『女大学』の益軒著といわれた）。承徳四年（一七一四）没、八五歳。

第二節　第二寝屋川にまとめられた旧大和川

旧大和川の景観　宝永元年（一七〇四）大和川の川違え以前、中河内の村々を荒らし回った旧大和川の玉櫛川・吉田川・菱江川・長瀬川（久宝寺川）・平野川は、現在、第二寝屋川にまとめられ、かっての面影はまったく留めていない。

大和川上流の源流は初瀬川（泊瀬川）にはじまる。奈良盆地の諸川、北東から佐保川・秋篠川・布留川・初瀬川・飛鳥川・蘇我川・高田川・富雄川・竜田川を集め、奈良県王寺町の亀ノ瀬を経て大阪府柏原市に入る。現在は西進して堺市の北辺で大阪湾に流入する。

古代、外来文化を瀬戸内海から大和の都へ導入。

河内平野で支流の石川と合流する地帯＝「王陵の谷」応神天皇陵はじめ前方後円墳群、欽明朝に大和川水運を司った船氏の墳墓→古代文化・水運の水路。

古くは大阪府柏原市から生駒山西側を北流→多数の分流となり河内平野に乱流・滞流→沼池を作り、上町台地の北辺から淀川に合流→河内国茨田（まんだ）・讃良（さざら）・高安・若江四郡は低湿地帯、淀川や大和川の洪水のたびに長期間の浸水。

大和川→東に玉櫛（玉串）川→吉田川→深野池→新開池、玉櫛川・吉田川の東に平行して恩智川→深野池。北より寝屋川→深野池。

吉田川に分かれて菱江川→新開池。

玉櫛川に分かれて久宝寺（長瀬）川→森河内（東大阪市森河内）で新開池を出た川と楠根川が合流→上町台地東北の鳴野（大阪市城東区）で大乗川・東除川・西除川を合流した平野川と合流→上町台地の北で淀川と合流→海。

近世、柏原から西に川筋の付け替え、瓜破台地・浅香山を削り住吉の浦へ新川を開通→今米（いまごめ）村（東大阪市）庄屋中甚兵衛ら河内四郡の農民の幕府に陳情。一方、新川筋予定地の志紀・丹北・住吉三郡の農民は反対。幕府の調査結果、元禄一六年（一七〇三）一〇月、川違え（川筋付替工事）を決定。翌宝永元年（一七〇四）二月工事着工、一〇月竣工。

川筋付替により甚大な影響→流末の堺港、河口に砂州が発達→新田開発、一方、新大和川の土砂により堺港は次第に浅くなり室町時代の勘合貿易以来の港湾都市堺の衰退。

古来の大和川の水運は亀ノ瀬を境に、上下二つの区域に分立。亀ノ瀬から上流の大和では立野（奈良県三郷町）の魚梁（やな）船。下流の河内では剣先（けんさき）船。大和川付替以後も同様。明治の鉄道開通とともに大和川の水運も衰退。

資料54『フロイス 日本史』第二〇章（第一部五九章）
『フロイス 日本史』松田毅一・川崎桃太訳 中央公論社

永禄八年（一五六五）アルメイダ修道士が堺より飯盛城へ行く記事

ここを出発し、私たちは午後三時にはある川に達しました。そこで私は堺から六里離れた飯盛に行くために乗船せねばなりませんでした。同所にはすでに二艘の船が私たちを待っていました。三ケサンチョ（頼照）殿という（三ケの）城の重立ったキリシタンの一人は、私たちがその時刻にそこに着くことをすでに前から聞き知っていましたので、（船を）遣わしてくれていたのです。（二艘のうちの）一艘で、その貴人（三ケ殿）の息子で十二歳くらいと思われるマンショ（という教）名（の少年）が来ました。彼は私に（船に）乗るように乞うた後、父の伝言を（次のように）述べました。『自ら御身をお出迎えに参らぬことをどうかお許しいただきたい。そうするだけの好意を欠いているわけではなく、数日来、ガスパル・ヴィレラ伴天連様がお客（として当地におられるので）、お一人で残しておきたくないのです。その代りに、当家までお伴をするように（息子のマンショ）を遣わします』と。この少年は肩に火縄銃を担って来ており、大小（両）刀を帯び、非常に鄭重で風采も優れ、二十五歳くらいにも思われました。他の一艘では料理が（運ばれて）来ました。と申しますのは、（マンショ）は途中で私を楽しませようと決めていたからでした。そして（折から）寒さが厳しかったものですから、彼はその別の船に私たちの（乗船）に近寄るように命じました。それから彼は私たちに、少なくともすべて十分温かく、一同に満ち足りるだけの立派な食事を与えてくれまし

た。そしてさらに、良くたてられた茶（も出されました）。

かくて私たちは川を遡って（飯盛）城の麓に至りました。陽はすでにほとんど沈みかけており、私たちは（実は）非常に嶮しく難儀な道を半里ほど城まで登って行かねばならぬ（ところでした）。（ところが）上陸しますと、すでに一丁の駕籠が私を待っていました。ところで駕籠舁（かき）は途中大いに急いだのですが、高い杉や松の繁みで一面掩われた山中で夜に入りかけてしまいました。（すると）さっそく、（頂）上から私たちの方へ燃（さかる）松明が運ばれて来ましたので、私を（担いでいた）六人の（駕籠）舁（かき）は途次難渋することが少なくなりました。私たちが目的地に到着したのは、すでに夜も更けた頃でしたが、そこで（ガスパル・ヴィレラ）師、ならびにかの貴人とその家族らから、私たちは非常な喜びと満足をもって迎えられました。

第三節　鴻池新田と新田開発

近世の新田開発　新田開発による近世の全国総石高の増加

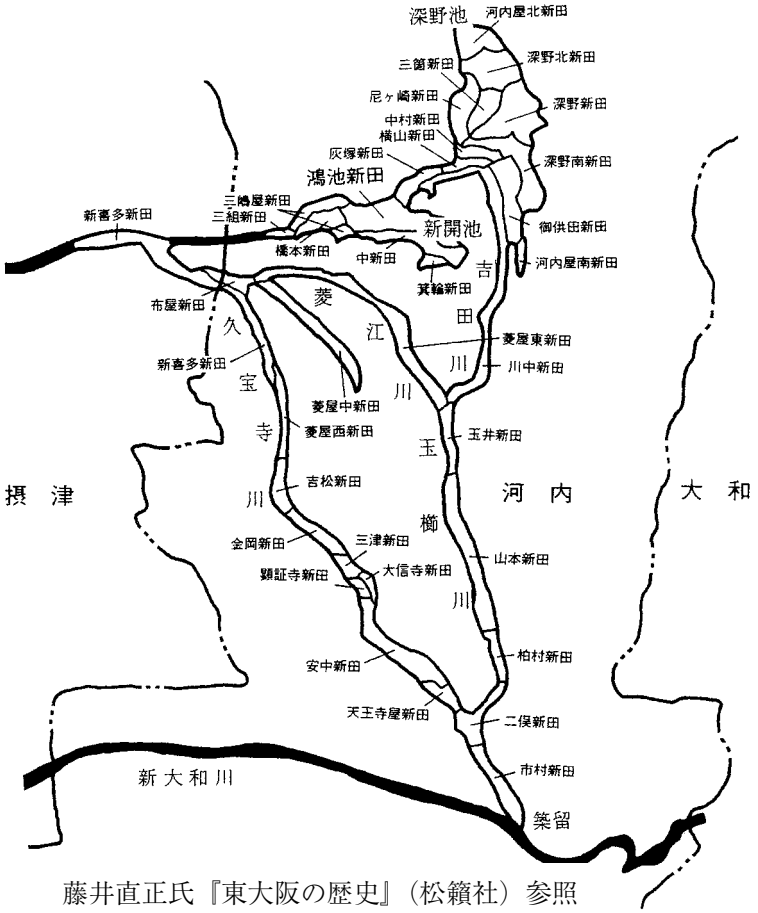
慶長三年（一五九八）　一八五一万石　一〇〇％
正保二年（一六四五）　二四五五万石　一三三％
元禄一〇年（一六九七）二五八八万石　一四〇％
天保元年（一八三〇）　三〇五六万石　一六五％
明治六年（一八七三）　三二〇一万石　一七三％

大規模な水田開発は近世前期に多い

畿内周辺の開発は中世末までに限界に到達、近世の水田開発は少ない。

利根川　寛永一二年（一六三五）～承応三年（一六五四）銚子で太平洋へ
美濃大吉輪（おおよしわじゅう）中・福束輪中　江戸時代度々の治水・開発
①川筋付替　②築堤による干拓　③長距離用水路

鴻池家　山中鹿之助息新六（鴻池新右衛門）が天正六（一五七八）年摂津国鴻池村（兵庫県宝塚市）に居住、清酒醸造に成功、江戸に出荷、元和五年（一六一九）大坂久宝寺町に出店。八男初代善右衛門正成、江戸出



藤井直正氏『東大阪の歴史』（松籟社）参照

荷の復路を利用して海運業開始→諸大名領国の米穀など運送。明暦二年（一六五六）両替業開始。延宝二年（一六七四）二代之宗、今橋に本店移動。宝永二年三代宗利、新開新田（鴻池新田）経営。筑前福岡・安芸広島・備前岡山藩の蔵元・掛屋、加賀金沢・阿波徳島・筑後柳川藩の掛屋を勤務→計一万石扶持。明治一〇年（一八七七）第十三銀行設立→鴻池銀行、昭和八年（一九三三）三十四銀行・山口銀行と合併→三和銀行、明治四十年十一代幸方に男爵。

鴻池新田会所　東大阪市鴻池元町（ＪＲ片町線鴻池新田）

旧大和川筋新田　幕府直轄地→大坂東町奉行の管轄　村方三役　庄屋・年寄・百姓代は置かず開発者の直営（→第八章堺と大和川　第二節　新大和川の開削　**大和川川違と鴻池新田略年譜**　参照）

河内木綿　旧大和川筋新田を利用

繊維　植物繊維　麻　木綿

　動物繊維　絹　羊毛

　化学繊維　人絹　ナイロン　テトロン

木綿　一三世紀日宋貿易の輸入品

　一五世紀日明貿易の大量輸入→唐木綿

　戦国時代　国内生産の発展

　衣料のほか軍需品として需要↑火縄銃

　船舶の帆布→航海の速度・安全→商品流通の発展

河内木綿　綿作の隆盛↑旧河川跡の新田開発

　①掻揚田（半田）湿田に交互に畝を作り綿と稲を栽培

　②田方綿作　綿と稲の隔年栽培、裏作は麦

　大坂・京都など消費地

　綿作の高収入↑金肥（干鰯）使用

　明治以降の大阪の紡績産業の世界的発展の基盤

第七章　堺と大和川

第一節　堺　津

応仁の乱による京都の混乱に引き替え、堺の安定・繁栄→僧侶・武士・文化人・商人の堺来往・居住。

堺・博多は遣明貿易で繁栄、応仁の乱以後、堺の独占

堺に和泉守護所＝細川一族の守護所

三好氏の阿波・堺・兵庫の三角ライン

資料55尋尊『大乗院寺社雑事記』文明一五年（一四八三）六月二日条

和泉堺福天十六七人、各女房也、入上京之由申云々。真実拝見者在之云々。又京都之賓法神五六十人男也、各鶯・ニワ鳥ヲ頭ニイタヽク、和泉堺へ行向之由申下向云々

遣明船一覧（『国史大辞典』５（吉川弘文館）による）

出発年	帰国年	
一一年（一四〇四）	一二年（一四〇五）	第一次勘合船
一二年（一四〇五）	一三年（一四〇六）	
一三年（一四〇六）	一四年（一四〇七）	
一五年（一四〇八）	一六年（一四〇九）	甘露寺親長弟取龍首座乗船
（不明）	一八年（一四一一）	
永享四年（一四三二）	永享六年（一四三四）	
六年（一四三四）	八年（一四三六）	
宝徳三年（一四五一）	享徳三年（一四五四）	
寛正六年（一四六五）	文明元年（一四六九）	
文明八年（一四七六）	一〇年（一四七八）	応仁乱以後、瀬戸内海を避け、

堺より土佐沖迂回、この時、堺の湯川宣阿の請負

一五年（一四八三）　一七年（一四八五）
明応二年（一四九三）　明応五年（一四九六）
永正三年（一五〇六）　永正一〇年（一五一三）大内船と細川船が寧波（ニンポー）で抗争
一七年（一五二〇）　（不明）
天文七年（一五三八）　天文一〇年（一五四一）大内船
一六年（一五四三）　一九年（一五五〇）大内船
遣明船渡航は一九回、勘合船は一七回（ともに内一回は出発帰朝年次未詳→中国の記録による）

資料56甘露寺親長『親長卿記』（増補史料大成42）

（文明一五年（一四八三）二月二七日条～四月二四日条、遣明船に乗る弟取龍首座の見送りのため堺下向。日本の品物を交易すると二倍の利益があった）

二月

廿五日　……罷下泉州境（堺）之由申暇了、龍首座入唐之暇乞也、
廿七日　晴、午後出立、下向境也、晩頭着淀宿、入夜乗船、暁更着渡部宿、
廿八日　晴、早旦自渡部詣天王寺并住吉等、次詣泉州境南庄南昌庵、晩有鞠、
廿九日　晴、聞久世舞. 次詣正法寺、及晩正法寺上人来、次有鞠. 入夜入風呂、

三月

一日　晴、有鞠、
二日　陰、
三日　陰、詣住吉乗船、遊覧、依塩干也、……
四日・五日　（省略）
六日　陰、時々晴、有鞠、依地混早止了、今日予書付太刀十二振、分書付渡鎮蔵主・本蔵主了、用脚千疋借用、龍首座令用意太刀、令渡唐也帰朝時一陪用脚可返遣也、
七日　晴、……今夕有鞠、朝間入薬風呂.
八日　晴、早旦入薬風呂、
九日　晴、詣桟敷、金剛大夫勧進猿楽（猿楽）等也、常行寺勧進也、藤右衛門振舞也、及晩雨下、
十日～十四日　（省略）
十五日　細雨下、今日新黄門永継、松殿少将忠顕朝臣等来臨、
十六日　（省略）
十七日　晴、詣庄筑後守宿所、依招請也、有朝飯、新黄門・松殿少将等同道、帰宅之後有鞠.
十八日・十九日　（省略）
廿日　晴、及晩雨下、新黄門・松殿今日帰京、
廿一日・廿四日　（省略）
廿五日　晴、参詣南庄天神、又参詣三村并子亥御前等、次詣吉祥院法印坊、度々来臨礼也、及晩有鞠、入夜吉祥院来、又小嶋三宅弥三郎来、尋鞠故実、
廿六日～卅日　（省略）

四月

一日　晴、有鞠、
二日～四日　（省略）
五日　晴陰、入夜雨下、自小嶋二号船着岸之由注進之、予遣唐太刀十二振、今日出来、渡本蔵主了、
六日～十日　（省略）
十一日　晴、南庄柚川千阿死去、七十七云々、希代之徳人也、
十二日　晴、千阿今日荼毘、貴賤見物成市、
十三日　晴、自肥前、小嶋二号船着岸境津、
十四日　晴、新黄門室家并息女三四人、中内侍衆等参天王寺之次、此辺経廻、今日唐船見物了、
十五日　晴、詣新黄門室家宿、有酒、及晩有鞠、
十六日　晴、女中今日帰京、有鞠……、

十七日　於山城有合戦云々、
十八日　晴、詣庄筑後守宿所、依招請也、有晩食、帰畢之後有鞠、
十九日　晴、有鞠、数勝負也、左方次第不同、庄筑後守・下内宰相房・蔵六・孫三郎・興三・源次郎・六郎五郎、右方、予・南昌・藤右衛門・小次郎・左衛門五郎・弥四郎・又四郎・弥六、左五度上鞠之内、悉皆数百八十余足、右五度上鞠之内、悉皆数三百十余足、本蔵主書付之、
廿日～廿二日　（省略）
廿三日　晴、早旦帰京、自渡部乗船、及晩雨下、宿宇殿、
廿四日　陰、自宇殿乗船、着淀、午後帰畢、
廿五日　晴、参内、御月次御連歌也、

甘露寺親長　応永三一年（一四七〇）～明応九年（一五〇〇）、文明一五年は中納言、後に大納言、後花園・後土御門天皇に近侍

『親長卿記』文明二年（一四七〇）～明応七年（一四九八）応仁乱後の記録

取龍首座　甘露寺親長の弟、既に文明八年の遣明船に乗船

柚川千阿　湯川宣阿。応永一三年（一四〇六）生、納屋衆、遣明船の抽分銭（ちゅうぶんせん）を請負い巨額の富を得る。抽分銭とは帰国後の貨物評価の抽分銭を請負って出発前に支払。文明一五年（一四八三）没

資料57『松下集』（『私家集大成』6　明治書院　①～⑤は『松下集』の冊番号）
『松下集』詞書に見える堺
①応永三一年（一四二四）～文明一四年（一四八二）
文明十一年の秋の比より、智恵光院を人にあづけ置て、泉州堺北庄網道場金光寺といへるそのうちに、あきたる寮にすみ侍る。歌などたび〳〵人の興行よみ侍るを、取ちらしれて書とゞめず。次年の七月すゑ、能州府中左衛門佐状を給て下て……
④文明一五年～延徳元年（一四八九）
（文明一八年）八月、泉州堺へくだりて同十五夜引摂寺（以下、引摂寺・引接寺とも）にて十五夜
君がため龍の捧ぐる玉やこれ　最中に浮かぶ秋の夜の月
廿六日、引接寺にて一座ありしに
九月十日、永昌院にて、人々うた合せしに
十月四日、河州誉田にて…
九日夜、太子叡福寺中尾正春法師すゝめにて一続中に
廿四日、堺の草庵にかへり侍る。同廿六日、藤原家定すゝめにて、続歌ありしに
十二月の比、海会寺の喝食、扇に梅を描きたるに、季弘和尚賛をし侍る
　不意寒村野水渥　梅梢繊月照横斜
　上林千朶万枝裏　清態更無似此花
うらのかたには蘆の里をかきたるに、予に又賛を所望あり、否みがたくて筆を染侍る
　蘆の葉をなにと分けてか咲くやこの　花をうらなる小屋の里人
長享元年（一四八七）正月朔日、泉州堺草庵にて…
十三日、引摂寺にて一座ありしに
（二月）十六日、宗椿すゝめにて
三月六日、南庄小林寺の花のもとにて一座ありしに
十日、引接寺のうた合に
三月尽とて、草庵へ人々来て一座ありしに
同比（ころ）、泉州細川阿波入道常泰より、百首をよみたまひて点を所望あるに…
六月十日、引摂寺三首歌合に
八月十日、引摂寺三首うた合に
十二月十日、引摂寺三首歌合に
（長享二年二月）廿七日、引摂寺但阿寮にて
三月三日、人々にさそはれて、浦のしほひを見侍て、かへさに観乗と云人のところにて一座ありしに
二十二日、引摂寺月次三首に
卯月廿日、細川阿州よりすゝめ給ふ
五月十三日、引摂寺のうた合に
廿九日、本国寺住持日円、堺の末寺成就寺へ下られ侍に見参し、短冊を出

し、一首所望に
（七月）廿三日に、さかいの草庵へかへり侍る。
八月十五夜、人々来て一座ありしに
廿日、草庵月次に
十月六日、引摂寺月次六月分歌合沙汰有に
十四日、宗椿すゝめにて
廿四日、草庵へかへり侍る
十一月七日、引摂寺月次当座褒貶
八日、細川阿州より法楽とて題を給はる
廿八日、草庵月次当座褒貶のうたに
十二月十日、引摂寺月次うた合に
（長享三年正月）八日、草庵月次に
十日、引摂寺会三十六首中に
十六日、住吉社参詣、宝前にてよみ侍る
二月四日、引摂寺月次歌合
（三月）廿九日、池田へ下、それより堺へくだりぬ
卯月十日、引摂寺月次歌合に
五月十日、引摂寺月次歌合に
七夕日、引摂寺にて一座中に
十日、引摂寺歌合に
（延徳元年（一四八九）十月）六日、堺小庵へくだり侍るに、同廿七日、
引摂寺の月次に
十一月十日、引摂寺月次歌合に
十二月十五日、引摂寺にて住吉法楽とて続歌ありし中に
⑤延徳二年～明応二年（一四九三）
（延徳二年正月）同十日、引摂寺月次会始
十一日、常楽寺月次始、三首の歌合に
二月十一日、常楽寺歌合に
十二日、隆珍の庵にて、十首の中に
廿日、引摂寺三首のうた合に
三月十日、引摂寺月次歌合に
廿四日、常楽寺いつもの歌合に
四月十日、引摂寺いつもの歌合に
十一日、常楽寺いつもの歌合に
十二日、隆珍の庵にて清賀と云人、二十首続歌
五月八日、常楽寺いつもの歌合に
十日、引摂寺月次歌合に
十八日、越前国一乗へくだらむと思たち侍るに、先堺より池田へこえ、京
へのぼり……
（以下、十月まで京・越前・若狭・丹後に逗留）
十月九日、常楽寺月次、予田舎へ下侍るによりてなきを、再興ありて三首
歌合に
十日、引摂寺月次再興三首歌合に
廿五日、藤原忠誠、常楽寺の鎮守天神にてまします、一七日参籠法楽とて
同題にて、五首づゝよみ侍る
廿七日、山の口の草庵へうつりて、藤原忠誠をよひ侍て、三十首続歌よみ
し中に
十一月三日、草庵へ引摂寺出給時、一座ありし中に
八日、常楽寺いつもの歌合に
九日、金光寺住持、引摂寺を招請有て、当座褒貶廿五首
十日、引摂寺月次歌合に
十一日、通玄庵にて、人々歌合せしに
十二日、草庵へ人々来て一座ありしに
十四日、金光寺覚阿寮にて、当座褒貶ありしに
十二月四日、常楽寺の聖道達よびて、二十首続歌
九日、常楽寺月次うた合に
十日、引摂寺いつものうた合に
おなじき廿七日、堺の草庵にかへり侍り、
（延徳三年正月）五日、通玄庵月次始、一首懐紙ありしに
六日、藤原忠誠所にて、十五首続歌の中に

十日、引摂寺月次始、一首懐紙に
十八日、通玄庵月次歌合に
廿日、金光寺月次三首歌合に
廿七日、宗椿すゝめにて一座中に
（二月）十七日、引摂寺月次、十日延引ありてさたありし
四月十日、引摂寺月次歌合に
廿七日、常楽寺月次のうた合に
（六月）廿五日、金光寺月次、五月分ありし歌合に
（八月）廿二日、金光寺七月分月次歌合沙汰ありしに
廿三日、常楽寺月次のうた合に
九月十日、通玄庵月次歌合に
廿四日、通玄庵月次歌合に
（十月）七日、金光寺にて人々のすゝめ当座五十首中に
九日、通玄庵いつもの歌合に
十一月六日、宗椿すゝめにて当座褒貶廿首中に
十五日、隆珍の庵にて三首の歌合に
廿日、金光寺月次歌合に
廿五日、通玄庵月次歌合に
（十二月）おなじき十一日、さかいの草庵にかへりぬ
廿二日、通玄庵にて褒貶ありし三首に
廿五日、おなじ庵にて月次三首の歌合に
（延徳四年正月）通玄庵月次始、一首懐紙ありしに
同当座中に
八日、弾正左衛門尉平忠誠所にて十五首中に
十二日、人々廻て褒貶のうた合せし。余寒によりていづかたへも出ざるに、草庵にて興行有し中に
廿五日、通玄庵月次三首うた合に
五月廿日、常楽寺東房法印珍盛死去、五七日の追善のために品経のありしに
廿四日、宗桂すゝめにて各六首うた合ありしに
九月廿五日、通玄庵三首歌合に
十一月十八日、通玄庵歌合に
十二月十八日、通玄庵歌合三首に
（明応二年正月）十九日、常楽寺のうちの坊にて人々会
廿三日、宗椿ところにて三十首中に
（二月）十日、引摂寺さそひ侍りて堺南の政所小坂所にて一座ありし中に
（三月）同十七日、堺の小庵へ帰侍る
四月二日、常楽寺の梅中坊に河州御動座に付、大内周防権介の衆宿に取て人歌数寄にて一座興行せし中に
六日、浦上美作守則宗、是も御動座につき、泉州堺正法寺と云寺にありし草庵へ尋侍るに、盃の次に一首と所望あるに、任筆はべる
同九日、美作守則宗正法寺にて一座興行ありし中に

招月庵正広　応永一九年（一四一二）生。正徹の弟子。一条兼良・細川勝元・畠山義忠（能登守護）らと交流、長享三年（一四五九）正徹没後、招月庵を継承、寛正五年（一四六四）大内教弘に招かれ周防・筑紫下向、応仁元年（一四五七）応仁の乱勃発後、南都不退寺・大和長谷寺に居住、美濃斎藤妙椿訪問、遠江・駿河へ摂津之親に同行、文明一一年（一四七九）和泉堺北庄金光寺に居住、長享年間（一四八七～八九）池田に晴雲庵建立。堺・池田・京都往復、明応三年（一四九四）四月没、八二歳

『松下集』　全六冊（国会図書館本）。日次詠草①応永三一年（一四二四）～文明一四年（一四八二）、④文明一五年～延徳元年（一四八九）、⑤延徳二年～明応二年（一四九三）、②③⑥四季・恋・雑の部立詠草。日次詠草によって正広の行動がわかる。特に公家・武士との文化的交流。

詞書→池田と堺の歌会の比較
池田よりも堺の方が歌会の回数が多い。歌会の参加者、池田では池田氏一族、池田の同名衆に限定。堺では武士や僧侶や商人→様々な人々の歌会に出座→自由な中世都市堺。

資料58三条西実隆『高野参詣日記』大永四年（一五二四）

高野参詣日記　　逍遙院内府実隆公

四月の頃、住吉天王寺にまうづべきこゝろざしありて、十九日、伏見へまかりて、般舟院にしばらくやすみて、船のことなどもよほしおほせて、この津より船出して、爰かしこ逍遙し侍るに、鵜殿三嶋江などいふ所などいとおかしく見え侍り。えなみとかやいふわたりにて、夕立一とをりして、かいの雫もいとたえがたくなん。船のうちかくはるかなるべしとおぼえず。なにのまうけもなくさう〴〵しかりしに、天昭庵とかやいふ所よりさかづき求出てもてきたれる。興あることになむ。かくてふしまちの月さしあがりて、みじか夜ものこりなきほどに、おさかといふところにいたりて、かねてたのめをきし人たづね侍りしにいとかひ〴〵しくしるべして、よしあるやどりにみちびきいれて、とかくいたはり侍りしに、をの〳〵舟のうちのくるしさをも忘れはてぬ。つとめてこのところの本堂みるべきよし申せしかば、こゝかしこみめぐらすに、心ことばもをよばざる荘厳美麗のさまになむ侍りし。

かくて和泉の堺南庄の光明院よりむかへの輿などをくられしかば、やどりを出てまかりたちしに、堺のものとて人々光明院檀那あまたむかへにきたれり。まづ天王寺にまうでたりしに、石のとりゐのもとに光明院・阿弥陀寺などむかへにとて出きたれり。……これより住吉社にまうでて御神楽まいらする。十首歌奉納せしめ、ところどころふしおがみて、神宮寺にまうでて、さらに御前の橋より松原に出て、浜のわたり逍遙して、

このまゝに住吉といひて故郷は　忘れ貝をもいざや拾はむ

和泉の堺にまかりこゆとて、みちずがらの名ある所どもいひつくすべくもあらぬ見ものなり。霰松原といふ所をすぐとてみれば世のつねの松のはにも似ず、吹きからししたるやうに見え侍れば、

木枯らしの吹きしほる色と見るばかり　なにあらはるゝあられ松原

南庄光明院にいたりて、さま〴〵のいたはりもてなされ侍り。夢庵にをとづれしかば、やがて尋ねきたり。夕つけてまたかの寄宿の寺へもまかり侍り。明る日は光明院より夢庵をも招請して斎をまうけらる。

廿二日、高野に参詣のことおもひ立て、宗珀といふものをしるべとたのみてまかりたち侍り。

……（中略　高野山・粉川寺・根来寺）……

（廿六日）高師浜の松原の下、天神の社の前に輿をたてて、

袖のうへに松吹く風やあだなみの　たかしの浜のなをも立つらん

くれにせまり堺にかへりつきぬ。

廿七日はすこしうちやすみぬれば、宗仲が寮にて一盞など侍りき。

廿八日は阿弥陀寺へ招請ありしかば、まかり向あひて大師の御作の弁才天など拝見、たうとくなん。近き寺の風呂に入りて、夕つけて帰るほど、堺の浜見めぐりて、光明院にかへりしかば、宗碩、京よりまうできて、帰京のことども申しとゝのへぬるよし申し侍る。いとうれしくなむ。

廿九日、高野参詣の前より廿首題をくばりたりしを、けふ夢庵にてとりかさぬべきよしありしかば、かしこにまかりて侍りしに、歌舞にをよびてその興あさからず。

旅宿郭公

いざといひて都のつとに草枕　さそはまほしき子規かな

江上眺望

漕ぎかへり入江の船の夕波に　さかひしらるゝをのがうら〳〵

寄二杣木一恋　但この歌宗碩に遣会書之了。

みや木引く声に答ふる山ひこも　我うちわびてなくはしらずや

五月朔日、光鎮といふもの連歌興行すべきよししきりに申し侍しかば、光明院にて一座ありしに、

浜松の名にやこたへしほと、ぎす

みじか夜おしき浦なみのこゑ　　牡丹花

すゝしきを光に月は秋立ちて　　宗碩

二日。堺をたちて住吉にまうでて、御神楽まいらせておもひつゞけし。

神も又まつとしぞ思ふすみのえや　立ち返るけふの浪の白ゆふ

天王寺にまうでて、いさゝか心ざしの御あかしなど又たてまつらせ侍りし。亀井の水にて、

後前の契りもしるしむすびあぐる　亀井の水の深き心は

……爰にて堺よりの衆みないとまごひし侍りしを、なをかう津といふとこ

ろまでをの〳〵したひまうでて、かしこにて光明院ひるのかれいひなどまうけて、これよりかへられ侍りき。

渡辺より能勢源五郎、輿馬などむかへにをこせてこゝより船にのりうつりて漕ぎ出るほど、能因法師が雲ゐにみゆる伊駒山もおもひいでられ侍り。楼の岸などいふもこゝといふ所なり。大江殿のあととて今も松のみどりに見え侍り。

名にたてるその世のまゝか尋ねばや 大江の松のしる人も哉

ながらのわたりすぎぬる程、心地わびしくてたづねもみず。過ぎてのちなむかし。(かしこにとゞ)そこと申せしかば。

橋柱ふりぬる跡もとふべきを 過ぎしながらにそれと見ざりき

暮れかゝるほど芥川の善住寺といふ所の塔頭につきて、明くる日出でたちしに、雨ふりていとわびし。水無瀬にまかり御影堂に参りて、しばらく念誦して、それより都へをもむきて、さるのをはりばかにりにこの蓬屋にかへりつきぬ。

三条西実隆　康正元（一四五五）生。後土御門天皇・後柏原天皇に近侍。内大臣。『実隆公記』『再昌草』。天文六年（一五三七）没、八三歳。

光明院　天台宗。創建当時は堺南庄、文明十年に櫛屋寺町（櫛屋町東四丁）移転、現、廃寺

阿弥陀寺　大阿弥陀経寺、旭蓮社、浄土宗。正中元年（一三二四）入宋した澄円が開山、廬山の白蓮社を模す。伝弘法大師作毘沙門天、寺地町寺町（寺地町東四丁）に現存。

宗珀　生没年未詳。堺衆、伊豫屋、津田宗達の父。肖柏から古今伝授授与。

宗碩　文明六年（一四七四）生。宗祇の弟子、宗祇の種玉庵を継承、宗長と連歌界の重鎮、『佐野のわたり』天文二年（一五三三）没。

廿首題を配り　続歌（つゞうた）　二十・三十・五十・百等一定数の歌題によって詠む歌会。当座・兼題。高野山出発前に実隆の出題、旅宿郭公・江上眺望・寄杣木恋→写実ではなく題による想像

参考59連歌『何船百韻』（初折表八句）

何　船

浜松の名にやこたへし郭公　雪（実隆）
みじか夜おしき浦波の声　肖柏
涼しさをひかるゝ月に秋立ちて　宗碩
夕露わくる片岡の末　光鎮
虫の音に野辺の宿りや頼るらん　周桂
薄うちちる風の寒けさ　重吟
残る日は衣手薄み移ろひて　宗碩
結ぼゝれ行く庭の初霜　雪

（以下略）

資料60『耶蘇会士日本通信』（山川出版『詳説日本史』→新異国叢書『イエズス会士日本通信』）

永禄五年（一五五二）イエズス会宣教師『耶蘇会士日本通信』日本全国、当堺の町より安全なる所はなく、他の諸国において動乱あるも、此の町にはかつてなく、敗者も勝者も、此の町に来往すれば皆平和に生活し、諸人相和し、他人に害を加ふる者なし

資料61『日本永代蔵』（岩波古典文学大系48『西鶴集』上）

貞享五年（一六八八）

巻四　五　伊勢海老の高買

爰（ここ）に摂泉境（せつせんさかひ）大小路（おほせうぢ）の辺りに樋口屋（ひのくち）といふ人、世渡りに油断なく、一生物の費（つひえ）になる事せざり。されば「蓬莱（ほうらい）は、神代（かみよ）この方の習はしなればとて、高直（かうぢき）なる物を買ひ調へ、これを飾る事何の益なし。天照太神も咎めさせ給ふまじ」と、伊勢海老の代りに車海老、代々の替（かへ）へに九年母（くねんぼ）を積みて……その年は堺中に伊勢海老・代々一つ買はずに済ましぬ。

ある時、夜更けて、樋口屋の門をたゝきて、酢を買ひにくる人あり。中戸を奥へは幽（かすか）かに聞えける。下男目を覚し、……空寝入（そらねい）りして、……夜明けて亭主は、かの男よび付けて、何の用もなきに「門口三尺掘れ」と云

ふ。……「それ程にしても、銭が一文ない事、よく心得て、かさねては一文商ひも大事にすべし。……」

堺といふ所は俄分限者稀なり。親より二代三代つゞきて、古代の買置物、今に売らずして時節を待つは、根づよき所なり。朱座落着き、鉄砲屋は御用人、薬屋仲間は、慥に長崎へ取りやり銀、余所より借る事なし。世間うちばにかまへ、又ある時は、ならぬ事をもする也。南宗寺の本堂・庫裏に至る迄、一人しての建立、殊勝なる事なり。心はともあれ、風俗は都めきたり。…

巻六　三　買置は世の心やすい時

毎年元日に書置して、四十以後死をわきまへ、正直に世渡りするに、自然と分限になつて、泉州堺に小刀屋とて、長崎商人有り。この津は長者の隠れ里、根のしれぬ大金持、その数をしらず。ことさら名物の諸道具・唐物・唐織、先祖より五代このかた買ひ置きして、内蔵に収め置く人もあり。……只ひとりの男子、万事かぎりに煩ひける。身代にかへて養生するに験気なく、……「歩行医者ながら、療治よくせらるゝ」とて引き合はされ……半年あまりに鬼のごとく達者になし……「薬代をみやうがのためにつかはしたし。」……銀百枚・真綿二十把、斗樽壱荷に箱肴。思ひの外なる薬代、薬師も再三の斟酌、取次の人も力を添へ、銀百枚借りて、この医者に家屋敷をもとめさせ、次第に時花り出で、程なく乗物に乗られける。申せばわづかの事ながら、四十貫目にたらぬ身代にて銀百枚の薬代せしは、堺はじまつて町人にはない事なり。この気、大分仕出し、家栄えしとなり。

近年の堺の歴史研究については、吉田豊氏「堺のまちの歴史像―名著堺市史から75年―」『堺市博物館報』23　平16・3　を参照した。

第二節　新大和川の開削

大和川川違えと鴻池新田略年譜

寛永一六年（一六三九）今米村（東大阪市今米）に中甚兵衛誕生。
慶安四年（一六五一）将軍家綱
明暦元年（一六五五）新開池より徳庵井路開削
〃　二　鴻池両替業開始
〃　三　江戸大火、振り袖火事。甚兵衛ら幕府に初訴訟か→毎年のように洪水
万治三（一六六〇）大和小泉藩主片桐貞昌、付替地検分
〃　四　新開池内に六郷井路開削
寛文六（一六六六）諸国山川掟発布
〃　一一　付替地検分
延宝二（一六七四）寅年の大雨洪水→玉櫛川二重堤決壊
鴻池今橋に本店移動
〃　三　卯年の洪水→寅卯洪水
〃　四　大坂町奉行付替検分→反対派訴訟
〃　八　将軍綱吉
天和三（一六八三）幕府若年寄稲葉正休ら畿内河川巡見
〃　四　河村瑞賢、九条島（安治川）開削
貞享元（一六八四）安治川開通、河口改修
稲葉正休、江戸城で大老堀田正俊殺害
〃　三　玉櫛川・菱江川・久宝寺川堤決壊→水害多発
〃　四　生類憐れみ令。川奉行設置
訴訟嘆願→応急治水工事に変更
元禄二（一六八九）貝原益軒『南遊紀行』
〃　一二　瑞賢の堀江開削など二期工事完成、瑞賢没
〃　一四　二年続きの洪水で今米村ほか年貢免除
〃　一五　赤穂浪士吉良邸討ち入り
〃　一六　堤奉行万年長十郎付替地検分、甚兵衛随行
幕府、大和川付替決定
宝永元（一七〇四）二月二七日工事開始、三月二一日助役姫路藩主本多忠国没、岸和田藩主岡部長泰らに助役、一〇月一三日新大和川開通
大坂京橋土木請負大和屋六兵衛・中垣内村長兵衛新開池開発権落札
〃　二　鴻池善右衛門宗利・息宗貞、新開池開発権入手、幕府に一二、七三三

両上納。三年間年貢免除

〃　五　万年長十郎の検知、「新開新田」→「鴻池新田」

〃　六　将軍家宣就任

〃　七　中新田前島取得→以下、三島屋新田ほか取得

平成一六（二〇〇四）大和川付替三〇〇年記念

河村瑞賢　元和三年（一六一七）伊勢の貧農出身。江戸で苦労を重ね、材木商を営み、明暦大火で富豪。東廻り・西廻り海運開発、大坂の治水のため安治川開削。元禄一二年（一六八九）没、八二歳。

資料62『**徳川実紀**』寛文六年（一六六六）二月二日条

老臣連書して諸代官に山川の令を下さる。近年草木の根まで掘り取るにより、風雨の時、川中に泥砂流れ、出水路渋滞すれば、今より後、草木の根堀り取るべからず。上流左右の山樹木なきは、今春より苗木をうへ、泥土流れ落ざるやうにすべし。さき〴〵より水涯の田畝をひらき、竹木あるは葭茨をうへ、新に築出し水路を迂廻せしめむる事すべからず。山中焼畑すべからず。これらの事かたく守るべし。明年検使つかはされ、そのさま見せらるべしとなり。

資料63『**柏原文書**』八尾市史（史料編）昭和35年

乍恐言上仕候

河州志紀郡舟橋村柏原村より西者住吉郡手水橋迄村々百姓共ニて御座候

一　今度御見分被為成候通ニ川違被為仰付候へハ往古よりの御田地川床ニ罷成普百姓渇命ニ及迷惑仕候御事。

一　河内国者惣而地形南高ニ御座候ニ付、往古よりも川共大小共ニ自然ニ北へ流来申候。然処ニ柏原村・舟橋村より西へ狭山東井路迄は一里半計御座候処ニ、地形次第ニ高く、東井路川床は柏原村舟橋村地形とは一丈余も高く御座候。右狭山東井路迄一里半之内南山より悪水小川ども数多御座候得共、大雨の時分ハ井路川余り、田地一面ニ水押下り、人馬の通も無御座候事、年中ニ必二三度御座候。然処新川にせかれ申候ハヽ、中々大分之水損場出来可仕候御事。

一　狭山東井路より同西井路迄、猶以次第ニ地形高く御座候処、西井路へは弥悪水（おびただしく）夥敷押下り申候ニ付、新川出来仕候へハ四五万石も水損場ニ可罷成候、就中拾三ケ村は水底ニ罷成、住居も不成申、迷惑可仕と奉存候御事。

一　瓜破村領内弐拾町計山之内村・杉本村領之内拾四五町合三十四五町ハ新川被為仰付は二丈余も御堀不被成候ては水落申間敷と奉存候、然処ニ地形はかんせき（岩石）ニて御座候ニ付、中々御普請莫大之御失墜ニて御座候。其上堀土之捨場ニも本田大分損し可申と奉存候御事。

一　川違被為成候得は古川床并深野・新開ニ新田大分出来仕候様ニ申上候由承候。然とも新田は纔之儀ニ御座候。其上井路川道筋ニ引申候へは弥小分之儀ニ御座候御事。

一　堤御用害之儀も古川は順々に流下り申、其上道法遠く御座候ニ付、水当りくろ堤多く痛不申候。新川堤は横川ニて其上道法近く御座候ニ付、水当り強く堤多痛御用害ニ大分御失墜可参と奉存候御事。

一　新川出来仕候へハ、古川へは用水ながれ申間敷と奉存候。然者若江郡・渋川郡日損可仕と乍憚奉存候御事。

一　新川より北之方村々は、狭山池其外南山より之悪水を以御田地養来申し候所、々狭山東井路より西地形高分ハ川床弐丈も低く罷成候ニ付、用水取可申様無御座、日損ニ相成可申と奉存候御事。

一　新川御堀立被為成候得は、柏原村より手水橋迄之内往還六筋御座候。其外ニも有之道筋数多御座候。然は往来之諸人難儀可仕と奉存候御事。

一　寅卯両年洪水ニて大和川堤所々破損仕。川下百姓迷惑仕候旨御訴訟申上候由承候。寅卯両年之洪水は古今稀成大洪水ニて御座候ニ付、大和川ニ不限所々堤とも夥敷破損仕候。大和川堤御用害ニは乍恐川さらへ被為仰付、堤外かわニて□堤高く罷成候ハヽ、以来別条御座有間敷様ニ奉存候。若又川違被為仰付、新川堤破損仕候ハヽ、御田地損毛ハ不及申上ニ人命も助かたき村々大分可有御座と迷惑ニ奉存候御事。

右之通少も偽不申上候。南山より之悪水之儀は乍恐悪水出申候時分、御見使被遣御見分被為成被下候得は無紛儀ニ御座候。兎角川違御座候てハ

数郡普百姓迷惑仕候。御慈悲ニ如先規被為仰付被下候ハヽ難有奉存候。

以　上

延宝四年辰三月

舟橋村
柏原村
北条村
大井村
沼　村
太田村
東木本村
西木本村
川辺（かわなべ）村
若林村
長原村
辰巳村
瓜破村
西川村
別所村
三宅村
住道（すんじ）村
城連寺村
矢田部村
北枯木村
南枯木村
油上村
芝　村
庭井村
我孫子村
杉本村
山之内村
遠里小野村

資料64『**中文書**』八尾市史（史料編）昭和35年

乍恐御訴訟言上

私共ハ河州水所村々百姓共ニて御座候

一　摂州河州水所拾五万石余之百姓、永々御助大川違数年奉願候へ共御延引、近年大坂川口より鳴野村辺迄御普請被為成被下候ニ付、水能引候へ共、鳴野村より川上ニて水滞、河州七万石余之百姓御助ニ難成ニ付、去春夏之時分御助御普請度々奉願候へハ、瑞賢方へ申候へと御定意難有奉存、則瑞賢老方へ度々申上候。其後瑞賢老江戸へ御下被成、此頃御登ニ付、御普請も早速御助かけ被為成可被下と奉待居申処ニ、此頃何之御沙汰も無御座候、最早耕作仕時分ニ御座候へ共、悪水引不申迷惑仕候、右奉願御普請共御大増御延引にも被為思召候ハヽ、先讒之御普請成共、早速御助奉願候御事。

一　深野・新開水落口大分埋り申ニ付、悪水落不申迷惑仕候。新開・嶋中幅形五間ニ堀抜水通しニ奉願候御事。

一　稲田観音前中堤、かわた村前迄御延、楠根川中堤も相応ニ御延被為成被下候へハ、両処共悪水能引申候御事。

一　法善寺前弐重堤、先年御座候通ニ被為成被下候て久宝寺川・玉櫛川へ先規之通相応ニ水参候様ニ奉願候御事。

右三ケ所之御普請之内、新開・嶋中掘抜之儀ハ百姓自分ニて成共仕立可申上候、中堤と法善寺前二重堤ハ百姓ニハ及難奉存候、御公儀様より乍憚早速被為成被下候ハヽ当年より御助ニ罷成申候御事。

一　前々より奉願候通菱江川・吉田川・禰屋川・恩知川・久宝寺川と放出村之前ニて大分之水共壱所ニ出合申故、洪水ニ水もミ合、込水ニて新開・深野ニ水□洪水之節、所々堤又々切所ニ及可申と迷惑ニ奉存候。尤今度□□□被為成被下候ニ付、中水ハよくわかれ候へ共、洪水ニ一面ニ罷成候。右より奉願候通り今津村西ノ方より放出村田地之戌亥之角迄新川御堀、久宝寺川と菱江川別ニ流、鳴野村前ニて落合申様ニ被為成被下候へハ、それより下は近年之御普請ニて能引落し申候。然ハ右川々ノ水

能引落し、洪水の御助ニ罷成　候御事。

一　菱江川筋稲田新田之内川、殊外狭ク御座候、此所川幅御広ケ其外堤出張候所少ヅヽ御取込被為成候て、吉田前今浄前御関留、深野・新開へ大和川之水入不申様ニ被為成、徳庵井路を切抜、禰屋川・恩知川之水通シニ被為成、田地之悪水共ハ徳庵井路北ノ方ニ新井路へ落シ申様ニ奉願候。第一法善寺前二重堤と放出村新川奉願候。此御普請被成不被下候てハ洪水ノ御助ニ難成奉存候御事。

右之通御慈悲を以被為聞召上、御普請被成下候へハ、高米七万石余之百姓永々御助ニ罷成候。若御延引被遊候ハヽ、近年御大増成御普請被為成被下候様ニ今少之御普請ニて河州水所之百姓御助ニもれ残念迷惑ニ奉存候。尤新川ニ罷成候様川床敷地ニも少ハ成可申候共、深野・新開大分之新田場も出来仕可申候。其上年々水損に逢迷惑仕候百姓共普御助ニ罷成難有可奉存候。以上

貞享四年卯三月七日

河内郡
若江郡
讃良郡
茨田郡
高安郡

御奉行様

川違え略年譜

元禄一六年一〇月二八日
こたび大和川水路修治あれば、本多中務大輔忠国助役仰せ付けられ、少老稲葉対馬守重富かねて其地理熟知たれば、これを沙汰すべしと命ぜられ、勘定奉行萩原近江守重秀、中山出雲守時春同じく奉り、目付大久保甚兵衛忠香、小姓組伏見主水為信その奉行を仰せ付けらる。

宝永元年四月一日
松平左兵衛佐直常、九鬼大和守隆方、岡部美濃守長泰大和川浚利の助役を仰付らる。

宝永元年四月二日
本多中務大輔忠国卒ければ、其子吉十郎忠孝のもとに使番杉浦兵九郎政盛もて弔せらる（三月二一日没）。

宝永元年六月二八日
植村右衛門佐家敬、織田山城守信休は大和川浚治の助役命ぜらる。

宝永元年一一月一三日
目付大久保甚兵衛忠香、小姓組伏見主水為信大坂河功はてヽかへる、謁し共に金時服を給ふ。

宝永元年一一月二九日
けふ大和川浚利助役の賞行はれ、松平左兵衛督直常、岡部美濃守長泰、植村右衛門佐家敬、九鬼大和守隆方、織田山城守信休共に時服廿づヽ給ふ。

本多中務大輔忠国　播磨姫路藩　一五万石
岡部美濃守長泰（ながやす）　和泉岸和田藩　五万三千石
九鬼大和守隆方（たかみち）　摂津三田藩　三万六千石
松平左兵衛佐直常（なおつね）　播磨明石藩　六万石
植村右衛門佐家敬（いえゆき）　大和高取藩　二万五千石
織田山城守信休（のぶやす）　丹波柏原（かいばら）藩　二万石

平成一六（二〇〇四）大和川付替三〇〇年記念

『徳川実紀』　初代家康～一〇代家治の幕府編纂の歴史（『続徳川実紀』一一代家斉～一五代慶喜）史料により史実を客観的に記述する特色

中甚兵衛　寛永一六年（一六三九）河内今米村庄屋出身。治水のため新大和川付替を幕府に嘆願。元禄一六年（一七三〇）付替決定。目付大久保甚兵衛に憚り甚助と改名。宝永元年（一七〇四）付替完成。同二年剃髪↓乗久。享保一五年（一七三〇）没、九二歳。

千両曲　余計な工事に千両出費、千両の賄賂などという噂の伝承。太田の千両曲↑大乗川・東除川・西除川の新大和川流入のため川底を低くする↓瓜破台地を回避。
浅香の千両曲↑依羅池（よさみいけ）（味右衛門池（みえもんいけ））を通し、依羅池から流れる浅香谷を利用↓土砂捨て場の縮小。

終章　大阪の特徴を探って ―反省と希望―

地域の相違、地域の特徴を探って、大阪の河川と港湾に関わる文学作品を資料として集めた。しかし集めたといっても完全なものではなく、『万葉集』にはほとんど触れていないし、近現代文学は取り上げることができなかった。どうしても私の専門とする中世文学に偏ってしまったことを反省している。

それ以上に反省すべきことは、扱った河川や港湾が、序章第二節に、一応、大阪府下の主な河川を掲げたのであるが、その内、淀川水系と大和川水系のゴシックで示した河川を取り上げただけであって、資料収集に都合の良い、私意によるかなり大ざっぱな選出で、恣意的という誹りは免れないであろう。堺市以南の河川、『大阪府管内河川指定状況調書』（大阪府土木部河川室）でいう二級河川単独水系の近木川や樫井川（それは天正一三年（一五八五）秀吉の紀州攻めの戦場であり、室町時代の特異な古記録『政基公旅引付』の日根荘であり、元和元年（一六一五）大阪夏の陣の緒戦で塙団右衛門が討ち死にの場所である）などは省いてしまった。ほかにも、呉服・漢服の伝承があり、江戸時代、江戸で事件を起こした田中桐江が釣り糸を垂れて晩年を送った北摂の猪名川、後鳥羽上皇の別荘があり、連歌『水無瀬三吟』が詠まれた水無瀬川、河南地域を縦断する石川、その上流の、観心寺七郷を流れる石見川など、はじめは扱おうと意気込んでいたのであるが、今回は見送り、次の機会を期することとした。

このように資料収集の作業を続けると、大阪、というより摂河泉は「水の国」であったことを改めて認識する。現在でこそ、淀川水系と大和川水系に分かれているが、宝永元年（一七〇四）の大和川川違え以前は一つの水系で、上町台地の舌端で落ち合い、大阪湾に流出した。大阪の町はこの大河のデルタ地帯に形成され、今は消えてしまったが、土佐堀川と道頓堀を南北に結ぶ西横堀があり、土佐堀川と道頓堀の間に東西に平行して、北から江戸堀・京町堀・海部堀・阿波座堀・立売堀・長堀・堀江があった。ほかにも蜆川があり、天満堀川があった。これらに架かる橋々を「難波八百八橋」といい、大阪を「水の都」と称したのである。

しかし淀川・大和川の合流点、特にその上流で、かっての河内湾の跡の河内低地は毎年のように洪水に見舞われた。各時代の為政者たちは、大なり小なり淀川・大和川の水難防止に力を注いだ。資料の中で、的確に淀川・大和川の地形を述べたものは新井白石の『畿内治河記』であると思う。尤も資料に引用した最後の「……熟二視大坂河口一沿海斥鹵之地、蘆葦鋪生、日以蕃茂、令下河水失中宣二洩于一レ海之便上、兼レ之近年就二其地一開レ田築レ堤、下流益為二壅塞一、斯治レ水之最所レ可レ急也。……」については賛否両論があって、さしあたり河村瑞賢は賛成意見、万年長十郎・中甚兵衛は反対意見であった。

淀川・大和川の二大工事は宝永元年（一七〇四）の新大和川開削と、明治二九年（一八九六）着工、四三年完成の新淀川開削であり、この二大工事の地域文化への影響、文学鑑賞の変容などに注目したい。

現地調査に当たり、寝屋川では尾崎安啓氏・美川圭氏、旧大和川（玉櫛川・長瀬川ほか）では村田隆志氏、神崎川では湯川敏治氏・瀬戸祐規氏にご案内・ご同行いただいた。また資料についても多くの方々から、特に第三章の神崎・大物については楞野一裕氏・伏谷優子氏のお世話になり、お教えをいただいた。感謝する次第である。

資料紹介

横山桂子『露の朝顔』
――江戸の武家女性が見た大坂と上方――

藪田　貫

はしがき

ここに紹介する史料は、国会図書館に所蔵されている、ひとりの武家女性の日記である。日記には、江戸から大坂へ上る道中が綴られ、その点ではひとつの旅日記ということもできる。近世の女旅日記の研究に新生面を切り拓いた柴桂子氏がすでに、労作『女旅日記事典』（二〇〇五）のなかで、本史料「露の朝顔」の一部引用し、「横山桂子は大坂町奉行の家族とともに江戸より中山道を通り、大坂へ向かう。道中木曽路が最も印象深かったのか、その旅日記には木曽路の描写が詳しい」と紹介している。

ところが後に詳しく見るように、本史料は五集からなり、最後の集には、大坂から江戸への東海道を通る帰路を描いた部分がある。また十二年近く暮らし、見聞した大坂の諸名所や年中行事を記した集もあり、さらに大坂滞在中に著者は、京都・奈良など近隣の名所を訪ね歩いており、それら「上方名所探訪記」と称することのできる集もある。それほどに本史料は多彩な内容をもつ。みずから「遠き東に生れ、ことにをみなの身」と述べるように近世の女性が書き残した第一級の史料といえる。ここに全文を翻刻しようとする理由のひとつである。あわせて本史料には、武家女性の目からみた大坂論、あるいは上方論としての面白さがある。随所に「東とかはり」「東にまして」「東にても難波にても」という言葉がみられ、意識するとなく、江戸と大坂を比較しているのである。

本史料は縦二五センチ、横一七センチの横帳で、表紙に『露の朝顔　一』の題箋が付けられ、最後が『露の朝顔　五止』とされている。ところが内表紙をみれば、第一集はたしかに「露の朝顔　一」であるが、第二集は「旅路の花　二」とあり、さらに『露の朝顔　五』の内表紙には「東のつと　六」とある。したがって連続した作品でありながら、それぞれ独立した作品で、しかももともとあった「五」が欠けていることが分かる。欠本が逸生じたか不明だが、大正四年に、現所蔵先の国会図書館が購求した時点ではすでに失われ、整理の過程で『露の朝顔』五冊とされたのではないかと思われる（『国書総目録』も、それを踏襲し、『露の朝顔』五冊としている）。したがって本紹介でも、タイトルとしてはそれを尊重し、内容紹介でそれぞれの五集の表題を用いることとする（写真参照）。

さて本史料の筆者を、『国書分類目録』は「横山桂子」としているが、史料そのものにその自署があるわけではない。わずかに第六集「東のつと」の末尾に、「玉の横山はむさし野の名処也、そをわか氏にかけ給へるなるへし」とあり、姓としての横山氏を証明している。

名前の手がかりは、本文よりも別のところにある。それは、達筆で書かれた「露の朝顔」を初めとする表題の下部に、月の屋の押印があること、第五集「東のつと」の末尾に付けた歌に「路子」の署名があることである。『大日本人名辞書』に横山桂子を紹介して、つぎのように述べている。

閨秀歌人、横山平馬の女、通称はみち、月屋と称す、本間遊清に学び、

歌を能くす

「月前紅葉　あかぬかな月すむ夜半に散る紅葉かつらの花のここちのみして」の歌、畏き辺の御聴に達し、自今月の桂子と称すべき由仰せ下だされたりと言ふ、安政二年八月二十日没す、五十六歳

これによって、本作品の著者が「横山桂子」であることは疑いないが、この作品の段階ではまだ、「横山路子」というのが適切であろう。さらに路子の歌に返す形で末尾に、異筆で歌が書かれているが、それには「遊清」の名が見える。これこそ、本間遊清である。したがって本史料の著者を、横山桂子とすることは十分に説得的である。ならばつぎに、この作品がどういう契機で書かれ、何が書かれているかを解き明かすべきであるが、それは各集を紹介する中で明らかにしたい。

さて、本史料は前述のように五集からなり、原題とそれに付けられた番号を列記するとつぎのようになる。

「露の朝顔　一」「旅路の花　二」「蘆の葉風　三」「有明の月　四」「東のつと　六」

以下、それぞれについて概要を述べる。

第一集「露の朝顔」は、筆者桂子が「敷島の道」「和歌の道」に入門するに至った経過を述べた部分と、江戸を立ち、大坂に到着するまでの道中を記した部分からなっている。

桂子が和歌の道に入るきっかけは、二十歳前に伊予国吉田藩伊達家（知行高三万石）の江戸屋敷に、伊達候の姫君の琴の師匠として「宮仕」に入ったことにあった。和歌好きの姫君の母から詠草を勧められて学び始め、同家の「おもとくすし」、すなわち医者であった「師の君」の導きを得て、本格的に始めたと回想している。この「師の君」こそ、本間遊清である。『和学者総覧』は、本間を紹介して、

村田春海門、伊予吉田藩医、嘉永三年八月十六日没、享年七五歳

と記している。

桂子は没年から計算すると寛政十二（一八〇〇）年の生まれで、二〇歳前というと文政元（一八一八）年か二（一八一九）年になる。当時、本間は四二、四三歳である。

歌の指導を受けた桂子はある日、生家のある深川に帰った折、朝顔をたくさん作り、見せる人がいるとして訪ね、そこで詠んだ歌「とくおそく来てみる人のあまたあれは　露のひるまも咲る朝顔」を「師の君」に見せるが、賞賛され、それを機縁に歌詠みを始めたと記している。第一集の原題「露の朝顔」が、この歌に因んでいることはいうまでもない。こうして「師の君」本間遊清との歌を介した交流が始まったが、さらに江戸と大坂で離れ離れになることで桂子は、各地各地で歌を詠み、それを「師の君」に送るという動機を得たものと思われる。その意味で本史料には、桂子自身の日記という側面とともに、「師の君」との和歌の交換という側面もある。

吉田藩伊達家の江戸屋敷は八丁堀にあり、「宮仕」の間、桂子は深川の生家を出て、そこに暮らしたと思われるが、その奥勤めの間に、「かめ子といへるおもと」と出会い、深い友情を育てる。「たらちねのはやくもわらはか身のよすかもとめ給へりとて、よしあししらぬ難波へおもむかん事を言しらし給ふ」との一節は、のちに難波に行くきっかけを示していると思われるが、それは親友かめ子によってもたらされた。その後、その話は姫君の耳に入り、「身の落付とて速に御暇給はり」、桂子は「年比なれにしみたち」を辞し、生家に帰ることとなった。

桂子が生家に帰ったのは、文政三年四月の初めと記しているので、伊達家への奥勤めは一年か二年と思われる。興味深いことに、主人である内藤矩佳に大坂町奉行補職の命令があったのも、文政三年四月の初めである。しかし桂子はなお江戸におり、幼少のときから教えを受けた琴の師匠を訪ね、内藤の屋敷に入ったのは、六月半ばである。この時に触れて、「こはこたひ難波の町のにひ司にならせ給へる君なれは」とある。内藤が大坂町奉行に任じられたことを指すのは、いうまでもない。

しかしながら父である横山平馬が、町奉行内藤矩佳とどういう関係かは、これでは分からない。幸い大坂町奉行をはじめとする在坂役人については、「大坂武鑑」と総称されるものがあり、そのひとつ『浪華御役録』の文政七年年頭版に、西町奉行内藤矩佳の公用人として「横山平馬」の名

が見える。こうして桂子は、「我仕へます君」と同道して母とともに大坂に上ることとなる。

七月五日に江戸を立った桂子は、奉行の一行とともに中山道を行き、二十日の深夜に大坂に到着、西町奉行屋敷に入った。父が上坂するのは、八月のことである。

第二集「旅路の花」は、冒頭、「はやくも年かわりて、春のはしめのまうけ、何くれと我なる郷とハかわり、みたこと聞ことにをかしきふしもいとおほかり」と、異邦人として大坂の町を体感していく様を記す。このような江戸人としての大坂観が、じつは本史料が大坂研究にとって価値をもつ点である。

西町奉行所は、東横堀を渡った本町橋のたもとにあったが、「我住いの前は松屋町すちとて右の方は天王寺道、左のかたは天満の行末なれハ、ひねもす行かふ人引もきらす、賑はしたいふ斗なし」と桂子は証言する。

ところが第二集は「旅路の花」は、その表題から伺われるように、旅日記が主題である。したがって大坂を起点とする旅が描かれるが、それは京都・奈良への旅である。しかもそれには伏線があった。遅れて大坂やって着た両親が文政三年の十月、「紅葉の比をたたにや過む」として京都に紅葉見物に出かけたが、自分は行けず、翌年の「春にも成なは、わらはもともなわせ給へ」との希望を抱いていたのである。

文政四年春三月十一日、桂子は母を伴い、京都へと旅立つ。八幡・伏見をへて向かったのは嵐山。そこでは藤原定家の名が頻繁に出る。その後、松尾をへて市中に入り、知恩院・平野社・北野社・御室社の桜見物が続き、三月末まで京都にいる。翌四月一日早朝、「都も大かた見へつるに」と、粟田口から山科をへて近江に入り、三井寺・膳所・石山寺を廻る。そして京都に戻るが、帰路につくのは四月十二日。ところが帰路は東福寺から宇治をへ、さらに木津川を渡り、一路、大和に入るというもので、奈良でも見物を楽しむ。その結果、法隆寺・信貴山を通過し、河内若江から玉造をへて、役宅に戻ったのは四月十六日である。じつに一ヶ月を超える長旅である。

第三集「蘆の葉風」は、そのタイトルからも伺えるように、大坂生活を詠んだものである。「おし照難波の里に十とせばかりの春秋をおくりつれは」とある冒頭の一節からすれば、十年余の大坂暮らしを経て、書かれたものであることが分かる。正月二日早朝の水菜売りから始まり、以後十二月までの大坂の年中行事の紹介というスタイルを取るが、「一とせ睦月二十日に西宮の御神のまうてぬ」のように、大坂近辺の地への小旅行記を随所に嵌め込んでいるのが面白い。一月二十日出発の西宮参詣は、役宅門前から船に乗り、大阪湾を渡り尼崎で上陸、帰路もまた船というものである。そして二月の初午、四天王寺の聖霊会、三月の雛祭りにつづき、三月初めには住吉大社詣でが来る。さらに「一とせ弥生半はかり河内の国なる葛井寺より処処にまうてん」と、西国五番の葛井寺を皮切りに、誉田八幡・壺井八幡・通法寺・叡福寺・西方院・玉手山・八尾勝軍寺の諸寺社を廻っている。そして四月の初めには、野崎観音詣でが来る。春の到来を待って、大坂近辺の名所に足しげく通っている様が目に浮かぶ。また、『河内名所図会』を手にしての旅行であったことを伺わせる記述もある。

その後、小旅行はさらに六月一日の愛染堂から新清水寺・一心寺への参詣、九月半ばの住吉大社参詣があるが、いずれも日帰りの旅である。「一とせどこそこ」とあるように、十年の間に楽しんだ小旅行を巧みに配することで、大坂市中の年中行事と自らの名所紀行の合作となっている。

大坂市中の紹介では、桜ノ宮を初めとする桜の名所を紹介した三月にひとつのピークがあるが、四月の花供養と東照宮祭礼、五月節句につづく六月の夏祭りに紙数が割かれている。「大舟小ふねさしつとひ、ともしつれたる其の影は星よりも猶しけく、天にかかやき名をてらし、さなから昼にことならす」とその情景を描きながら、「花火の目さましさ東なるふた国かけし橋のもとにもはるかにまさりぬ」と、淀川の花火を両国の花火と比較する。ほかにも「霜月道頓堀歌舞伎の賑はい東にましていと目覚し」など、大坂市中の叙述となるといやがうえにも、江戸との比較熱が高まっている。

また四月十七日の東照宮祭礼や八朔の惣年寄以下町人たちによる奉行所詣など、武家女性として正確に観察している情報にも得がたい価値がある。

第四集「有明の月」も、「一とせ此御寺にもうてんとて」とあるように、西摂の名刹中山寺を参詣したときの旅行記であるが、三月二十一日から二十六日という、かなりの日数を要した旅であった。それが同じスタイルをとり、かつ丁数も少ないながら、第三集の一部とするのではなく、独立して第四集とした理由であろう。

三月二十一日に出発した桂子らは、十三・神崎の橋を渡り、陸路、伊丹・昆陽を経て中山寺に向かう。この時も弥生三月は桜の花盛りで、「八重はまたしきほとにひとへハ今はさかりと咲みたれ」、「朝日ほのほのとさし出るにも花も一きはの匂ひ」などとその様子が名文で描かれる。「中々に画にも移しかたからんとそおほえぬる」とは桂子の言であるが、いまならさしずめカメラというところだろう。

二十一日中山寺近くの旅宿に泊まり、翌二十二日は西国街道の宿駅生瀬をへて有馬へと向かう。翌二十三日には湯女を伴い、つつみの瀧・有明さくらを目指す。そこで詠んだ歌「有明の月と名におふ山さくら…」に、第四集「有明の月」が由来しているのは間違いないだろう。そして二十四日には常喜山に参り、二十五日中山に戻り、二十六日帰阪となる。「石道のけはしきは乗物の中すら安からぬ」「人すくなにて行」との記述は、彼女たちの旅の姿を描いて貴重である。

最後の**第五集「東のつと」**は、文字通り、江戸への帰路を綴ったものであるが、冒頭に記されている出府事情が注目される。その発端は文政十二年三月七日、江戸から内藤の許に届いた「めしふみ」にある。出府の命令を受け、役宅はただちに準備に取り掛かり、「上下こそりてそのまうけいしかし」。九日には出府の町触、十一日は出入り人との別れを済ませ、十三日早朝の出発となった。ところが桂子らは「残らせた給ふ女君」らとともに後続部隊となる。準備を終えると、「いさや難波の名残とて」三月末、鶴満寺と崇禅寺への参拝と桜見物となった。さらに四月二日には難波村の酒楼「松の尾」と「大津湯」に上がり、瑞龍寺に寄り、道頓堀から船で帰っている。

その後、四月六日には内藤が「大うへのいとこよなき司」勘定奉行を任ぜられたとの報が届き、十一日に出発となった。「家の隅々見めくりはた庭の木草にまて名残をしむ」とは十二年の長住まいを考えると正直な感想であろう。

帰路は役宅を出て、松屋町筋を北上、天神橋の畔を右に折れ、京橋・片町をへて京街道に入る。以後東海道を通り、江戸には四月二十四日の着となるが、その間の紀行文については史料に直接、当たられたい。しかしながら記述は江戸帰着で終わっていない。その後、「師の君」である本間遊清との再会が記されているが、さらに注目すべきことに、十二年十一月、人を介して、「都なるやんことなくわたりにしるへ有は歌書いてささけよ」との誘いがあった。さらに翌十三年一月、「都なる彼わたりよりわらはか歌愛させ給ふよし」との知らせが入っている。それはすべて「師の君」の導きのよろしきためであると桂子はいうが、これによれば在坂中に、和歌の才が京都の知れ渡っていたということであろうか。「路子」が「桂子」となるきっかけは、十二年に及ぶ大坂暮らしにあったと推測されるのである。

（付記）翻刻に当たっては、原文を尊重し、①改行は和歌を含め原文通りとすること、②正字・旧字を含めできるだけ原文とおりとすることを基本としたが、読みやすさのために適宜、読点を入れた。抹消部分は、見せ消しであってもすべて抹消として扱った。

なお、日記の解読については、橋本猛氏のお世話になった。付記し、あわせて深甚なる謝意を表したいと思う。

露の朝顔　一

はやう敷嶌の道ふみ分みんと思ひ立し其
はしめは、いまたはたちにたらぬ年の春
ききらきの比、伊豫の国吉田の里しろし
めす君の姫うへの糸竹の御あそひかた
きにとて、めさせ給へりしか、彼姫君の
御母公、和歌をこのませ給ふ事こよなく
まし〳〵て、御まへちかき人々はさら也、姫君
の御もと人たち、わらはことき物にまても
よましめ給ふ、され共わらはいとけなき比より
糸竹の道のみまねひて、手かく業に
うとけれは、かゝる事まなはんハいとかたき業
にこそとおもへとも、おなし御もと人たちも
いとねもころに聞えけるまてに、いさゝか
まなはん事をおもひ立しに、師の君もいと
いたううつくしませ給ひて、うらなくをしへ
道引給へるそかしこくも嬉しき事也ける、師の
君と申は此みちに仕へ給ふおもとくす
しにおはしゝか、和歌の道にこよなうひいて
給へりける、其比我里なる深河に朝顔
おほく作りてみする處ありと人ニいひあへり
しかは、ひと日里にまかりおりしころ
かの花見に行んと其まうけせしか、何くれと
かゝつらふ事侍りて時のおくれしに、早朝顔ハ
さかり過つらむなと人の言にいそきて
かの處へおもむきしに、いまた色よく咲たり
しかは

とくおそく来てみる人のあまたあれは
露のひるまも咲る朝かほ

とよみて、師ノ君に見せ参らせしに
こよなうめてさせ給ひき、是なむ我おもふ
ふしをみるまゝによみ出し始なりける
其後、墨田河の花屋しきに、世に
聞えし秋の七艸みむとて師の君も共に
行せ給はんとの給へり、しかとさはる事の
おはして行せ給はす、わらは里なる母と共ニ
まかりて帰て後、師ノ君に参らせける

七艸の数ハみつれといつくにか
ひと花たらぬこゝちこそすれ

師の君より御返し

花数にあらぬ此身を花数に
かすまへにけることそうれしき

七艸の花より外に今ひとつ
匂ひ出たる君かことの葉

とよませ給へりしそいと嬉しかりける、かゝる
をさなき我歌を書とめんハおもなけれと
はしめてよみつる哥とて師の君のめて
させ給へりしうれしさにこゝにしるしぬ
かくて秋も末つかた、みそのなるなへて
の木々のいとうるはしく流なしたる中ニ
殊に師の君の愛させ給へる楓の落
ちりたるをひろひて

みせはやな一葉なりとも散まゝに
くちなはをしき園のもみち葉

たゝ一葉おくるもみちの色をたに
ふかしといはゝ嬉しからまし

と書て参らせけれは

一葉とはおもはさりけり紅のちし
ほの色を底にふくミて
君の手にひろひとらすハいたつらに
散てくちなむ園の紅葉

と御かへし給はりける、其後一とせ餘り
を經て、かめ子といへるおもとをめさせ給ひ
けるか、いかなるえにしにや有けむ、其始
よりかたみにむつひかたらふ事古き
おもとたちにまさりけり、かめ子ハ我より
年ふたつミつまされるに、其さえはた
かしこく萬の業にたけ給へれは、何
くれとかの人に随ひて、只はら
からのおもひをなしてむつひかはしつるに
たらちねのはやくもわらはか身の
よすかもとめ給へりとて、よしあししらぬ難波へ
おもむかん事を言しらし給ふ、わらはいま
しはし宮仕へし　彼敷しまの道の
奥をも分ミむとおもひをりけれは、かゝるえにし
もとめん事軒のすたれのさら〳〵におもひ
かけねはと、みにいらへもせさりしを、信野
なるそのはらからもうちつとひとき聞え
給ふを、稲舟のいなともさすかいひかねて、そか
まに〳〵女君へ聞え上奉りしに
身の落付とて速に御暇給はり、猶数々
の物なとめくませ給ふそいともかしこき
わさなりける、かくてみたちをまかりおりんと
するほとに、かめ子をはしめおなし
おもとたちのひと日ふつかとめけるに
心ならすも日をおくるほと、比は弥生の末
つかたなれは御園の山吹いとうるはしく
咲たるを、さすかに見捨かたくおもひて

とく暮て行へき春を山吹の花の

なさけそうれしかりける
かめ子のととめ給ふ心をうれしみかくいひ
出けれはかめ子
をしめとも暮行春は山吹の色に
出つゝくちなしにして
と有けれハ、亦かへし
口なしと君はみるらめ山吹のいはぬ
こゝろをおもひやりてよ
なといひて有しに、かめ子よりすみれのいと
うるはしく咲たるをおこせけれは
すみれ艸別て後もしのへとや
ゆかりおぼゆる色に咲らん
かめ子返し
むらさきの露のゆかりのかひあらハ
君と野もせにすみれつまゝし
また是より
諸共に野邊にすみれと聞えたる
君か言葉の花そうれしき
なと言出つゝ有けるに、里よりハせちニ
むかへをおこせ給へは、さのみハとてまかり
おりんとするほとかしこくも、年比おほん
めくみあつかりしあたりの御別の
をしさはいへはさら也、はらからとも思ひし
かめ子にわかれん事今さらかなしさ
やる方なく、かたみに袖をしほりつゝ
末の松山猶行末をちきりつゝ物思ひける
花になれし春に別てなく〳〵も
ふるすへ帰る谷のうくひす
はかなき事とも言出つゝ、やかてまかり出に
けり時は文政三といへるとしの卯月の始也、
里なるたらちねはらからは待喜ひ給ひ、
只まらうとのあつかひし給ひ、はた年比の
宮仕の労を言なくさめ給ふ、ミかよか過て
かめ子のもとより消息して
別てはおなしあつまのうちなから
草の心にまかせさりけり
難波へ行せ給はゝいかに、なといひおこされ
けれは
心にはまかせされともとる草に
かはらしと思ふ君かためには
其比、師の君の御もとへ惜春更衣といふ
事をよみて参らせけるに、年比なれし
みたちの事のわすれかたけれは
過しつる日数は夢のこゝちして
さめてかひなくをしむ春哉
とめきつるきのふの花のなれ衣
心に染てかへうかりけり
卯月半の比、我をさなきころよりをしへを
うけし琴の師のとひけれは、人々
うちつとひあはせ物なとし侍りけるに
時鳥の鳴けれは
我ことく人もまては歟ほとゝきす
けふのまとゐにもらすはつ聲
琴の音になれも心やひくならん
あはれをそへて鳴ほとゝきす
はやくも日数帰りて水無月半の比ニ
此みたちへはうつりぬ、こはこたひ、難波
の町のにひ司にならせ給へる君なれは
其御まうけいみしう、目おとろくはかり也
はた下かしもまておなしまうけに
いとけなけれと、わらは久しく宮仕にのみ
ありけれは、世の業にうとくしてせん
すへなし、かくうたてきまて思ひまとへる
中に、かしこくも師ノ君より御消息給はり
うまのはなむけとて数々のしな給はり
とく行てとく帰る日を住よしの
岸に生てふ松としれ君
浦の名のすみよしとてもふるさとを
わすれ貝をはひろふなよ君
とよみて給はりしそ、いと嬉しくも有難かり
しされとも、かゝる中なれは御返しもし
侍らす、難波へ参りて後こそとまうしてやみぬ
扨ことゝ、のひて、木曽路より難波へとて
束をうちたちしは、文月はしめの
いつかになむありける
難波江のよしあししらて立出る
旅のころもそいとゝ露けき
帰るへきほともさためぬ旅ころも
立わかれうき氣ふにもある哉
里なる母も共に行けるに、うひ旅の
ことにしあれは、いかにともせんとすへしらす
只人々の物し給ふまに〳〵うちつと
ひて行ほとに、残るあつさ絶かたし
行ゝて戸田てふ河のほとりにいたれは
河風いと涼しく、かなたこなたの野邊に
虫の聲ひまなく聞ゆるもけにや秋の
けしきしるく、旅のあはれもいとゝそひて
河風の音あはれなる夕暮を
いかにせよと歟虫の鳴らむ
梢に蝉の鳴けれは

かしましく梢に蝉の鳴聲に
　旅ちのうさもかつまきれけり
文月なぬかに、何てふ處に歟有けむ
いともあやしき賤か家に七夕まつり
たる、いとあはれにおほえけれは
　心なき身にさへあはれ星まつる
　賤か手わさのにくからぬ哉
ふる郷にあらは、今宵星まつらんにと
おもへは、いとゝ東の空なつかしくて
　家にあらは星に手向むもゝ草を
　旅の枕にかるそわひしき
桔梗か原てふ處を行に、いとひろき
野にて撫子をみなへしなと目もあやに
咲みたれたり、かゝるけしきをふる郷なる
師ノ君かめ子諸共に見もし分もせし
んにはなと思ひ出て、かたはらなる人して
此花をゝらせて
　手折つる千艸の花の露ほとも
　ふる郷人にみせんよしもか
別路のかわかぬ袖に露そへて
　手折にもろき女郎花かな
手折つる小荻か露に袖ぬれて
　ふる郷人そいとゝ恋しき
　心ある色歟あらぬ歟旅ころも
　やつれし袖にすれる月艸
木曽の山路のいとけはしき中に
藤はかま薄なと、をりえ顔に咲たる
いとあはれにみえけれは
　秋風の吹立ぬれはふちはかま
　たれきてみねとほころひにけり
秋風に何まねくらん旅人も
　まれに木曽路の山の薄は
なといへるを母の聞て
　藤はかまほころひにけり色もかも
　名におふ山のはつ秋の比
ともなはせ給ふ君の北うへは千勢子の
君と申奉り、和歌をこのませ給ひけるか
なかき旅ちの御つれくに、御かたはら
にさふらふ人して御消息たまはり
寄道祝いといへる事をよみてよとおほせ
言あるに、今此君につかへ奉る
はしめなれは、青柳のいとなかき
御めくみをねき奉らむとて
　動なき道のさかえと此君の
　めくみハ千代も尽せさらまし
とよみて奉りけれは
　幾千代を松の常盤にちきり
　つゝおなしみきはの和歌の浦人
と御返し給はり、道にてをらせ給へる
菊の花給はるとて
　おく露のそむるは秋のしるしにて
　みねにもかをる菊の一もと
とよませ給ひけれは
　色も香も深き山路の菊の花
　手折し君か袖そゆかしき
雨そほふる日、みたけてふ山の中にて
　つくくとふる郷をしもおもひ出て
　旅ちのうさもはれぬ雨かな
つとめてやとりを立出て、空やう〳〵しらみ
行ころ、遠こちの山あひより朝けの烟
立のほるを見て
　遠こちの朝けのけふり立みれは
　人すみけりな木曽の山中
野中に一本たてる松を人のゆび
さして、こは相生の松とて其
名高しとをしへけれは
　年を経てふる郷人にあひ生の
　名もむつましき松の一本
西行上人の塚也とて、いとふりたる碑の
ありけれは
　古しへの人の心のおのつから
　ふかさしらるゝ有る塚そ是
山より山に日をかさねて行ほとに
右のかたは、木曽河の流れいとはやく
名すみ、石さへなかるゝさまいとすさまし
左は山より山のかさなりて、蔦かつらはひ
まつはりたる中にことに、高き山の
いたゝきより藤もてなひたるにや、ふりたる
縄のなかはよりきれてあり、是なむ其
昔より言傳ふるかけ橋の跡なりと人
のいひけれは
　かけ橋や其名はかりは蔦かつら
　今もしからむ木曽の山中
此處にはせを翁の碑あり
　かけ橋や命をからむ蔦かつら
寝覚の床といへるは、臨川寺てふみてら
の庭より見おろす處にて、大なる岩
あり、其色青々としていとなたらか也
したなる谷河ハ其流れはやくして
音は只耳をつらぬく斗也、向ひは山々

かさなりて、そのなかめまたいはんかたなし
　ふる郷の夢も中々谷河の
　　音に寝覚の床といふらむ
小野の瀧は、山より流れ出て谷河へ落るニ
只しら糸をうちみたせしかと思ふ斗なり
　なかれてもかく斗とはしら糸を
　　くり返したるをの、瀧川
猫山つゝき行ほとに、山のすかたの
ひとしからす、あるは青く或はくろく
けはしきあり、またなたらかなるあり
をさなき比より、画なとにてみたる
とはことなるさまにおほえけれは
　朝夕になれてしみれと遠こち
　　の山のすかたはことにそ有ける
大ゐてふ處にやとりける夜、文月中の
五日なりしか、軒ちかき山のはよりほの〳〵と
さし出る月いとあかゝりけるに、木曽路は
月の影そみしかきとよませ給へりしも此
あたりにやと、いにしへ人の言の葉をすゝろ
におもひ出て
　山ちかみ其いにしへの言の葉も
　　こゝろにうかふ秋のよの月
　澄月もすめるこゝろもかはらぬを
　　東の空の恋しきやなそ
十六日は加納といへるうまやにやとりぬ、爰は
永井の殿の御城下にていと賑はへり
十七日またきにこゝを立出、河渡といへる
駅に至る比は巳の半成へし、しはし爰ニ
いこふほと、今行へきなまず縄手てふ處
此比の雨にて水あふれたりといふに、ふた時
あまりを経て、からうして水おちてこゝを過つ
れは、其夜の夜中過る比に柏原へは
着ぬ、夜に入て山ふたつミつこえつるか
昼たにすさましけなる山路を、あやめも
わかぬ夜に松ともして行其物すこさ
亦たとへんかたなし、かくおほやけの
おきてさせ給へるたに夜の道はおそろ
しきを、まして只人の行暮せるさま思ひ
やられぬ、爰に美濃路とあふみ路との
境に寝物語としるしたる枕立たれと
夜ハにしあれはさたかにみえすいと口
をし、其外車返し坂不破の関なむと
道の行手ならねと、よそなからたに聞
へきを夜の道は、只人々の行なやむのみ
にて何てふ事もしらす、とのみこたふる
はせんすへなし
十八日朝またきに柏原を立出て行に
醒か井の清水とていと清き水有、行々て
磨針てふ嶺に登るに湖はるかに
見おろし、其けしきたとふるに物なし
爰にしはしいこひて、夫より鳥居本
てふ駅を過る、こゝに多賀の社の一ノ鳥
居有、けふは武佐てふ駅にやとる
十九日またきこゝを立出、鏡の宿なと過る
に鏡山三上山はるかにみゆ
草津のすくには難波より迎ひの人々おほ
く来ル、玉河の跡なと過て大津ニやとる
廿日爰を立出、行々て関の清水のほとりニ
しはしいこひ、右に関明神の御社を
拝し、追分より伏見に至る、夕舟に
うち乗て難波におもむくに、音に聞し
淀川の流れいと清くして、長き旅ちの
うさも爰にうちなかしぬる心ち
せられける、夜更るまゝに山のはの月
いとさやかにさし出けれは
　ふしなれぬ淀の河せを舟の中に
　　あふきてそみる山のはの月
ふる郷を立出しよりいくはくもあらぬに
はやくも難波に来にけるよとおもへは
すゝろ涙さへ落る斗におほえけれは
　行舟の棹のしつかやかゝりけむ
　　いつしか袖に月そやとれる
　十あまりなゝつの日数ふる郷をおもへハ
　　遠くへたてゝそ来し
子過る比、舟難波に着ぬ、爰のみたちハ
おもふにましていときらやかなり
大君はきのふ大津より都へまはらせ給ひ
しに、けふひつし斗に此みたちに
着せ給ふ、大君つかせ給ふを待奉りて遠こち
人のうちつとひはせ参るさまいとかまひ
すし、こは長き旅路にことなく来ま
しゝことふき申さむ為来へし、猶我
とちの家々にも人おほくむれ来る
さまいと目覚しされとも、東にことかはり
人の物いひさまなと耳なれぬ事のみ
なれは只うちまもるのみにて、せんすへしらす
そもく東を旅立てより爰に来着まて
道すから名におへる處々のさま見もし
聞もしつる事はたしのひかたかりし
有しなとおもふかまゝにあやなき事共

言出たるを、難波に着し後、かいつらねて
東なる師ノ君の御もとに参らせて御筆
くはへさせ給へよ、こは我復々まて持侍らん
と申し、に、師の君の我も後の思ひ出ニ
せまほしけれは、此ま、我にえさせよ
とて返し給はす、筆そへさせんとならは
外に書て来せよと有つれと、旅にて
かいつけしは、いつちいにけむみえす成
たれはせんすへなくてやみぬ、おもふに
こは我つたなき事ともかいつけて、いか
なるひまにも人の見給ふ事あらは
中々にはぢかゝやしき業也とて
師ノ君のいましめ給ふにや有えむ、そは
心もつかずして雁の行来のをり〳〵ニ
難波の浦のうらみこち参らせつるそ
おもなき業也ける、されと猶こりすまに
思ひ出るかまに〳〵爰にしるしぬれは
遠こちのさまもはた名處もおほくは
わすれて跡さきにや成ぬらんかし、其後
師の君の御もとに旅中にてつめる
草の花をおくり参らすとて

みせはやよおもふ心はかはらねと
移ろひにけり花の千草ハ

長月半の比、師ノ君より御消息給はりて

日をへたる色こそ今はあせに
けれ心の花の香は深くして

其比、庭の梢の紅葉しけるにこその此比
東なるかのみたちの御園へ楓の若はへを
うゑおきつるか、此ころハ染初つらんなと思ひ
出るまゝに

こかれてもみるよしもなきふる郷の
紅葉吹こす秋風もかな

とおもふ有しを書つけて師の君に
参らせしに、かのみその、紅葉也とて
いとよく染たるをおくり給はすとて

ふる郷をわすれ艸には是をみよ
君かうゑつるその、紅葉

とよせ給へりしはいとうれしくも、また
涙落る斗にふる郷のなつかしさも
いやまさりてそおほえける、いぬる葉月の
ころ、里なる父も此難波へ来給ひて、母
諸ともにおはしゝか、此紅葉の比を
たゝにや過む、いさ名におへるあらし山
通天なと行てみはやとて、神無月始に
母刀自をそゝのかして、都へとてうちたゝせ
給ひしかは、日を經て父参らすなへに

露しくれかる紅葉を手折
つと帰てみせむ君をこそまて

御返し

露時両袖にかけつゝ我を待
人のためにとをれる紅葉

霜月末つかた難波へ帰せ給ひて、都の
さま何くれとかたらせ給ふに、いと
めつらかなる事のおほけれは、春にも
成なは、わらはもともなはせ給へなといふ
ほと、ひと日雪のふりけれは

こそ待し心には似す初み雪
ふる郷をのみおもひつゝけて

其としもはや暮に成しかは

玉ほこの道行人のおとなひも

いとなくみゆる年の暮哉

露の朝顔　終

旅路の花　二

旅路の花

はやくも年かへりて、春のはしめのまうけ、何くれと我なる郷とハかはり、みたこと聞ことにをかしきふしもいとおほかり、されと人のいさましけに行かふさま、はたわらはべうちつどひ、手まりなんどもてあそひさも嬉しけなるさまなとは、異なる事なくみゆるもいとをかし

誰里もかはらさりけりあら玉の
年のはしめの人のこゝろは

睦月十日、今宮の夷の御社いと賑はしちかきあたりの舞びめらいときらやかによそほひて、出るをみむとてつどふ人いとおほし

おなし月の末のいつかには、天満てふ處にたゝせ給ふあまみつ御神のみやしろにまうつるもおなしさま也

中のむゆか天王寺にまうつ、爰もいと賑はし、我住ゐの前は松屋町すちとて右の方は天王寺道、左のかたは天満の行末の道なれハ、ひねもす行かふ人引もきらす、賑はしさいふ斗なしきさらきはしめの午の日には、みたちなる稲荷の御社に諸人詣ることをゆるし給ひて御園の中を過て、からめてよりおもてのみもんにいづ、はたみそゝの中には花やかなる物ともつくりおかせてみせ給へれは、遠こちよりむれ来る人いと目覚る斗なむ、猶ことのおほけれとおろかなる筆もて尽すへきにあらすかし

弥生半はかり、いさ都へとて母のともなはせ給へは、彼淀川を朝舟にうち乗て行ほと河のほとりにたてる柳は、只緑の糸をうち懸たるかとみゆるまてかなたこなたに打みたれ、水に移ろふさまいとをかし、遠くのそめは廣き野に咲みたれたる菜の花の河風のさと吹、ことに匂ひ来るもまたこよなく、おなしさまなる舟にて行もすくなからぬはこは皆ちかき国々より花の都の花みむとて行にそあるらしとおもへは、むつましき心ちせらるゝも旅のならひならむかし

申のさかりに橋もとてふ所に舟はつ爰は八幡の御山の麓也、

十二日またきに御山にまうづ、いとけはしき坂路をからうして登り、いともかしこきみやしろを拝し奉りて

男山さか行嶺の松風に
高き恵のほとそしらるゝ

爰をくたりて淀のまちを過、小橋をわたり行に、左の方はるかに水草みゆ淀つゝみを右にそひ行々て、ふし見の町なる御幸の宮にまうづ、いとふりたるみやしろ也、右の方なる小門より桃山にいづ、爰は昔の御城跡なるよし道の行手に咲つゝきたる桃のいとまはゆきまてうるはしきに、しはしいこひてたにみむとおもへと、さるへき家居もあらねはせんすべなくて

立てみつゐてみつあらぬ花なれハ
ふしみの桃と世にはいふらむ

夫より伏見の駅を過て稲荷の御社藤の杜東福寺なと打めくり、五条橋より境町なる亀屋といへるやとりに着ぬ

十三日またきにこゝを立出、あらし山の花みむとまかりしに、をちこち人の群行さまげに花の都ぞかし、三条通りをすぐに行々てあらし山の麓に至る、前に大ゐ河てふ川にそひて向ひなる山のさくらは今をさかりと咲みたれたり

大ゐ河花のしら波立るとも
みきはのさくら咲みたれけり
ちらぬまの影を移して大ゐ河
いかたにかゝる花のしら波
其名さへいとはるゝ哉あかす思ふ
あらしの山の山さくら花
いかたしよ心してさせ大井河
流るゝ水も花になる比

こゝにわたせる橋を渡月橋と言けれは

あらし山花にも人の行橋を
なと月とのみ立渡しけむ

山のなから斗にいとさゝやかなる流れあり、こは戸無瀬の瀧といへると聞て

絶す落る戸無瀬の瀧ハ山の名の
あらしとゝもに世にひゝく也

おなし所に水無瀬の瀧とてありしか今は名のみ残れりと人語けれハ

其名のみ水無世の瀧も春はたゝ

絶す流るゝ花のしら波

大ゐ川の右の方いと広く、竹垣ゆひめくらせる藪の中に、小督仲国のおくつきといへる有、こは昔いともかしこき大内につかへし人と聞つるに、世をそむきて後此野邊の露としも消つるにやいと哀になむ

古しへの其糸竹のしらへまで
思ひあはせて過るさか野路

此處より右にをれ、小倉山におもむきて麓の茶亭にしはしいこひてあふきみるに、山は皆楓の木どもいとおほし、今弥生の半なれハやう〳〵春めるもいとゆかしく、おのつから秋おもほゆる斗になむ、いさ山へのほりてみむといふほとに、此茶亭のあるしにやいとむくつけき婆々出来りて、山へ登り給はゝ、右の方にハ法然上人のおくつきあり、左のかたにハ其かみ定家郷の百人一首撰はせ給ひし時雨の亭といへる有かならす行て見捨へなと、ほこらしけなるおもゝちにてをしふるもいとにくからすやかてかたはらなるわらはしてあないさせけれハをしへのまゝに登る、いとけはしき道をからうして山の頂に至るにけに時雨の亭の名残にやとおもふ斗かたはかりなる亭の残れるもいとゆかしくおほえける、彼あないせしわらはに物とらせて爰よりかへし、猶いこふほと目もはるけき山々、画に書たらむかことくえもいはぬけしきに、またなき心ちそせられける

をくら山思ひ入てそ中々に
みね古しへの思はれにける

夫よりもとの坂路をくたりて麓に至る左のかた野中ニ為家郷のおくつき有すこし引入たる處に厭離庵といへるありて、其中に定家郷のおくつき有とをしふるにまかせおとなひけるに、内より尼立出て案内す、入てみれはいとふりたるおくつき也、かたへに御の水と名つけし井戸有、めくり草いたくしけりたるいとあはれにて

幾とせをふるゐの水も青柳の
名にしおへはる緑にそみゆ

庵にしはしいこふほと、彼尼いとねもころにもてあつかひ、何くれと物かたらふなへに抑定家卿は貞永元年十一月出家し給ひ、法名明静と申奉る、御歌に

露霜のをくらの山に家ゐして
ほさても袖の朽ちぬへき哉

十とせあまり爰に閑居まし〳〵て

忍はれむ物とはなしに小倉山
軒はの松のなれて久しき

其比昔今の歌を撰はせ給ひ、みつから書集障子に押せおき給ひしを小倉山荘色紙の和歌といふ、則百人一首是也、御齢八十歳にして仁治二年八月廿日にかくれさせ給ふ、其後また為家卿も爰にすませ給ふ、御歌に住そめし跡なかりせはをくら山
いつこに老の身をかくさまし

此御歌を色紙にかゝせ給ふとき柳の井の水にて御筆染させ給ひしとそ、彼卿の此名をことに愛させ給ひて

小倉山陰の庵はむすへとも
せく谷水のすまれやはする

と詠し給ひぬ、いつしか両卿のしるしの石も苔にうつもれ、軒はの松もおひかはり、庵の名のみ残りしか、元文のころ冷泉家の御いとなみありしより、いまはこみちをなす所となれり、かくいちしるき跡とはいへと、五百とせあまりの星霜を経ぬれは、纔に残れる礎をもとめ、麓の野邊の草をかりふき、此庵をむすふ折ふし、南都圓照寺の宮より其かみ為家卿の念し給ひしと、世に言もて傳へし圓通のみ佛を寄附し給はりけるを、かしこくも爰にすゑ奉り、古き跡とふしるへとも、かつハ後のわさする露の身のおき處とはなしぬ、さハれ年月立ての後は、此ことわりをうしなはむいともかひなき業也、かしこは彼尼の物かたりしまゝをしるす扨爰を立出、清涼寺へまうす、此御佛は此ころ、難波なる一心寺にて御帳ひらきてをかまれ給ふ

いかならむ罪もけぬへしおのつから
清く涼しき法のをしへに

こゝにもふりたるおくつきあまた有け

れは、何人のしるしやらんといとゆかしきこゝちせられて

何となく行過かてにおもふかな
ふりにし人の引もとめねと

こゝより向ひなるほそき道の左右より竹生たる處を三四丁行に、野の宮といとふりたる宮あり、小柴垣結めくらし黒木の鳥居のさまいと物さひたり

年ふりし宮居なからの小柴垣
しは〳〵人のとふかゝしこさ

夫よりしはし都に足をとめ遠こち見めくるほと、けに名におへる花の数々いひしらぬ筆もて尽すへきにあらねハ只おほよそしるすのみ

梅の宮にまうてしに御社のほとり梅いとおほかれと、弥生半も過たれは只青葉のみ繁れとも、何とやらむ匂ふはかりのこゝちになむ

神垣に匂ひし花の名残とて
青葉の梅のなつかしき哉

こゝより松尾にまからんとて梅津河てふ渡しをわたらむとするほと、かたへの森の中にて鶯の鳴けれは

花に咲名をなつかしみ鶯ハ
梅津かはらに木津を鳴也

桂河をかたへにみて松の尾に至る、いとふりたるみやしろたふとさ言へくもあらす

世々経ても神の恵そいやたかき
松の尾山の松のみとりは

とかくするほと空くもりけれハ、いさやとりへとてあへき〳〵くるほと小雨障出たり、爰はうつまさてふ里と聞て

あかつきし旅の衣をうつまさの
さとふりかゝるけふのむら雨

こゝにしはしいこひ、駕籠をやとひてやとりへ帰りぬ、

またの日は藤の杜のみやしろハ稲荷の御やしろにまうてゝ

神の世にうゑけむ藤の花ハ猶
なかくさかえむためしとそみる

あふけ猶かさしの松のなをしけみ
いやさかえます神のみやしろ

ちかきあたりの花みむとて清水寺にまうて、いとたふときみ佛を拝し奉りて

おのつから人の心も清水の
清き道にとおもひ入かな

音にのみ聞し音羽のまし水に
ちかひを結ふ今日を嬉しき

音羽の瀧のほとりニ桜のいとおほかりけれは

あや錦おるかとそみるしら糸の
瀧に移ろふ花さくら花

双林寺といへるは其昔、西行上人爰に住給へるよし、いとふりたる桜を今も西行さくらと世に言あへるもあはれにゆかしくおほえけれは

古しへの人の心をたねとして
今も匂へるさくらはなかも

頓阿法師の跡とめてみぬ世の春とよみしも爰也と聞て跡とめて住けむ人の心まで
猶しのはるゝ花の陰かな

知恩院の桜いとおほかりけるに

目もあやに咲る桜の花は只
雲歟匂へる雪かかをれる

雲林院てふ御寺は昔はいと廣々して花もおほかりけるか、今は纔に残れりと聞もいと哀にて

今も猶其おも影はしら雲の
林にまかふ花さかりかな

紫野の大徳寺はいとふりたる御寺也、爰ニ其昔茶に名高かりし利休の人かたありけれは

紫の色も其名もあせすして
今もゆかりを残す大寺

加茂のみやしろへまうてしに、ふりたるさまいとたふとし、かたへの流れいと清らかなりけれは

今も猶神代のまゝの流れかも
河せの水のさも清くして

たゝすの杜といへるは、下加茂のかたつかたなり

神垣に懸しちかひの数々を
たゝすの杜のたゝに過めや

平野の御社は桜いとおほかれと、遠こちのうたひめなとつとひて、中々に花のなかめけおされたるもいと口をし

神垣の桜はさらによそほへる
里のをとめの花やかにして

北野の御社にまうてけるに、こは

我ふる郷なる亀井戸の御神と同し
けれハ、わきてたふとき心ちせられて
　宮はしらたてし心の直からは
　　いかてしるしをあま満の神
小室の桜は根本より花咲たり、爰は
山風いとつよくしてかく枝の横たはれ
るとなむ、くねりたるさまいとをかし、其
数もまたおほけれはかなたこなた見め
くるに、只花と共にあゆむかと
おもふ斗なれは
　　物いへは物いふかことゑめはまた
　　恵むかとみゆる花さくら哉
夫より日に〳〵をちこちとみめくるほと
いつくも目おとろく斗花ならぬハあら
されと、かくつたなき心には只おもふのみ
せんすへしらす、あはれ東なる師ノ君
にとおもひ出ぬ日もなかりける、今は
都も大かた見をへつるに、いさや爰より
ほとちかき彼石山にまうてゝ、名たゝ
る八ツのなかめの其ひとつをたにたとり
て、ふる郷のつとにせはやと思ひ立ぬ、
彼御山は都より道のほと五里に餘れり
とそ、卯月朔日といへるに朝またき
都を立出しに、白河てふ橋のほとり
にて夜はやう〳〵明はてたり、粟田くち
日の岡なとうちこえ行、左右山々に
つゝしいとうるはしく咲みたれたる、かたへに
めなれぬ草の花色をあらそひ、都に咲
ましりたるあはれにもいとをかし、山科
てふ處に至れは、道もなたらかにして家ゐ
もまたすくなからす、かたへの石の道しるへニ
花山小野寺なと彫たるいとゆかし、めてに
諸羽の社と書る額うちたるふるき石の鳥居
立たるは、何てふ御神にやいとたふとくおほ
ゆれは、まうてまほしと思ふ物から、爰より
道いとはるけしと聞て、本意なくもぬか
つきまつりて打過ぬ、猶行々て追分てふ
駅に至る、是なむ京と伏見の別にして
道しるへの石たてり、此石のうしろの
方に柳は緑花は紅の文字彫たるハ
故有さまにおほえてゆかし、爰に
大きなる茶亭有、走井とて庭の入口
なる井の水絶すたふ〳〵と流れ出るいと
清ら也、のほりくたる旅人おほく爰ニ
いこへり、此あたり大津画はた物ひさく家多し
　　古しへの人の心を移し画に
　　今も残せる世々の家つと
左の方にいとゝ高き石階、有上なる
さゝやかなるみやしろは関明神とて蝉丸と
いへりし人をいはひまつるとそ、おなし
さまなる御宮少し隔てみつ並たてるは
いかなる故にやあるらむ、心ある人にとはまく
おもへと、此あたりにつとへるはゐなかひ
たる人のみにて、何とふへくもあらぬそいと
口をしき、猶行々てめての方なるほそき
野道をたとるに、是なむ小関越
とて古しへの関の名残とそ、今はさる
へき家居もなくはにふの小家處々に
たてるもいとあはれにして
　守人も今は中々花鳥の
　　色ねにまかす逢坂の関
此うへなる御山は三井寺とて、西の国々
に敬まへられ給ふみ佛のたゝせ給へ
れは、いとたふとくそおもほゆる、麓にハ
茶亭おほく立つらねていと賑はへり、高く
作りなしたる石階を登りて少しなたら
かなる處に天てらす御神の神社
あり、其かたつ方にふりたる井ありて
何とやらむゆかしけにみゆるに、かたへに
ある人此井は其昔帝の御うふ湯
あみさせ給へりし水也、よて爰は三井に
あらす御井寺なりと語しは誠にや、
おなしさまなる石階また登れハ向ひに
圓通菩薩のたゝせ給へる御堂有、かたへなる
さゝやかなる御堂には秩父西国坂東の
み佛たゝせ給へる、そか中に我ふる郷なる
保艸寺としるし有しはわきてたふ
とくおほえつゝ、またさらに東のそら
なつかしう成ぬ、右の方には名におへる
湖はるかにみわたされ、水の面は只
藍をうち流したるにことならす、遠
こちにたゝよふ舟はさなから木の葉
の散てうかふかとみゆ、爰に大きなる遠目
かねてふ物懸あるをのそきみれは、唐崎の松
堅田の御堂なとさしもはるかにみゆるは
画に書たらんより猶かすか也ことわりや
爰より唐崎へは道のほと三里隔、堅田
へは五里も有とかや、さもあるへきことに
こそ、爰よりすこし左の方に垣結まはし
猶行へき道有、此奥に昔龍の宮古

よりあかりしと聞鐘のをさまれるなるか
爰は女人をゆるし給はねは入こと叶かた
しと聞は、只うちあふくのみせんすへ無
し、はしたゝすみてよく〳〵思ひめくらすに
遠き東に生れことにをみなの身
としてかゝる御山にまうつるすら
わたつ海のふかき故あることにこそ、世に
も稀なるさちとやいふへき、か斗の事
嘆くへきやはと心にいさめ思ひかへし
て過ぬるも、いと本意なき業そかし

罪深き身のかひなくも音にのみ
聞て過ぬる三井寺の鐘

しはし拝して御山をおり、たとり〳〵て
大津の駅に至る、左のかたハ湖にそひ、
右の方ハ家居立つらなりていと賑はへり、町
のなから斗に義仲寺といへるあり
こは木曽よし仲ぬしのおくつき也と
聞もいと哀にこそ

みなもとはおなし流れと傳へ聞
いさをも今はあはつのの露

膳所の町を過るに、明日なむ此處に
鎮ります御神の御祭とて人つとひ
山鉾てふ物引もてあるきいと賑はへり、御
城の前を過て粟津の原にいたれは、
木曽のみうち人今井何かしのおくつき
處と彫たるしるへに石立るもいと哀也
左の方はるかに三上山鏡山なと
みゆるに、古しへ人の言のはを今まの
あたりむへとこそ思ひ出ぬれ、猶行々て
東へのうまやちと石山へのわかれ道あり
右の方石山へとておもむくに左の方ハ
湖也、御山まて道のほと十あまり八町
有とかや、なから斗にさゝやかなる石の橋
かゝれり、是を夢の浮はしといへるとなむ
御山のふもとにハ旅亭軒をつらねて
たてる中に、松屋といへるはことに目とまる
家のさまなれは爰にいこふほと、處に
名たる瀬田蛤若鮎なと調して出せる
いとめつらか也、しはし有て御山へまう
てしに、けにや名高き石山の御堂ハ
山より山にそひて作りまうけたれはいと
高く、御堂の下なる立横の柱の数ハいく
はく歟あらむ、いとしけくうちなしたり
御堂へ登りてみれは麓にてはいとゝ高しと
おもへる木とも、只目の下に成ぬ御堂の前も
いと廣くして、またたふとさも聞しに
まさりておほえけれは、あまたゝひぬかつき
奉りぬ、はたみ佛のおましより左の方なる
源氏の間といへるは、彼式部のおもとの世に
名高き物語作らせ給へるゝ處成とそ、爰
を守れる僧にあないをこひて内に
入に、彼式部のおもとの手ならし給へる
硯、はたみつから書て納給へりし大般若
経なと五巻六巻ととり出てみせ、爰に
こもらせ給へりしこと何くれとこうせちせるは
けに人の世の事とはさらにおもほえ
す、此源氏の間といへるはさまて廣から
ねと、式部のおもとのみこゝろは爰よりみゆる
湖すらいとせまし、いとほしとや見給ひ
けむ、はた遠こちの山々をも高しとたに
おほさゝらましなとおろかなる心に
おもふもいとはかなしや、こゝを立出、左の方へ
行は蓮花石とていと大きやかなる石立り、
そも此御山を石山と唱ふるも此石ゆゑ
成とかや、其色紫にしてさなから蓮花の
さまなしたり、其ひま〳〵に名もしらぬ
艸なと生出たるえもいはす、けに世に
ニなき物とは是ならむかし、いかなる画工
も移しえむ事いとかたかるへしとそ思は
れぬる、爰よりまた一きは高き山に
登れは、月見亭と書し額うちたる處
有、こゝより瀬田の橋はるかにみえ
遠こちの目もおよはぬ山々湖にそひて
みわたさるゝなと、猶見處もおほかれと
心なき身ハ只いたつらに口こもるのみ
すこしおくまりたる處に彼式部のおく
つき有、すへて此あたりは、いにしへの
かしこき人々作りおかせ給ふ道の記なと
いへる文あまた有て、世にしるる處なる
を、山の井の底もくみゝぬ心もて何事をか
立出へき、中々に人わらへなる業に
こそとてやみぬ、猶をちこち見めくり、やかて御
山をおり松屋かもとにやとりぬ、あはれ
秋の月の比ならむにハとおもへと、空
いとくらくして只はるけき山々ほのかに
みえ、湖の音おとろ〳〵しく聞ゆるのみ
しく聞ゆるのみいと口をし

山の端に月もやさすと夜もすから
心にかゝる志賀のうら浪

明れハこゝを立出て、きのふのまゝの道を

たとり都のやとりに帰りぬ
都にあまた日をかさねつれは、今は
難波へ帰らむとて其まうけをなし、卯月
中の二日に都を立出ける
　やつれても都の花になれ衣
　　たゝまくをしき旅の宿かな
大佛殿より東福寺なとまうてつゝ
おほかめ谷といへる處を過に、爰は
左右梅おほく並たてり、今卯月の半なれ
青々とひろこりたる葉のひま〳〵になれる
実のみゆるもいとをかしとおもふ物から、此梅
花咲たらむ比はいかにといとゆかし
くそおもはるゝ、かくて行ほとあやしの小
家だにあらて、人はなれいと物すこき
所に至るに、かなたこなたの木くれにをり〳〵
鴬の鳴けれは
　　行さきも猶しるへせようくひすの
　　聲より外はしらぬ旅路を
なと思ひて、行ほとにはやくも宇治の
里に至ぬ、爰は家ゐもおほくいと賑はし
はた家々に茶園つくりてめのわらは
うちつとひ茶つめるさまいとめつらか也
何やら舞柏子とりて歌うたふ聲またをかし
　　世にかをる木のめと聞は里人に
　　まちりて我もつまむとそ思ふ
右の方すこし引入たる處に東屋の
観音とて石のみ佛たゝせ給ふ、夫よりまた
行て宇治橋のもとに至る、爰ニ通圓てふ
茶亭ありしはしいこひて、かたはらなるいと
きらやかに作りまうけし酒楼に入て
昼の物なと出させぬ、爰よりめてにつゝきて
黄檗山萬福寺てふいと大きなる御寺有
こゝにまうつるに其廣やかなることまた
たとむ方なし、猶爰より河にそひて
朝日山恵心院興聖寺なといへる御寺ニ
まうつるに、こゝより向ひなるいと高き山
は喜撰か嶽とかや、弓手につゝきし山を
早蕨の杜椎か本の社とよへるとなむ、
はるかにぬかつきつゝめてなるかなかたを
返りみれは、蛍見の亭と書たる額うちて
いとみやひたる楼あり、五月の比京難波より
宇治の蛍狩とてまらうとこゝにつとへると
なむ、（この間四行抹消）――――
宇治橋を向ひへ
渡らむとてかなたこなた返りみるに、げに
宇治川の流れいとけはしくもまた清け也、
柴つむ舟の遠こちに行かふに
棹とる人の物おもひなげにみゆる
なといとをかし
　　こと、はむ柴つむ舟のふな人は
　　うき事しらて世をや渡ると
橋の向ひ右の方に橋姫の社とていと
さゝやかなるみやしろ有、しはしぬかつき奉て
めての方河にそひて壱町あまり行は、
平等院とていとふりたる御寺有、諸堂ハ
大かた絶はてゝ、かた斗なるにおくまりたる
處に釣殿めきていたくあれたる御
堂のみ残れり、其かたはらに　扇の芝といへ
るあり、こは昔源三位頼政卿、爰にて
うせ給へりし處よと聞もいとあはれに
おほえて、みぬ古しへのことにしあれとすゝろ
流落る斗になむ、此君は和歌に
こよなうひいて給へると聞て
　　道芝の露と消てもみかきおく
　　言葉を玉と誰かあふかぬ
爰よりまた宇治橋のもとに至りはしを
そかひに猶行に、いといかめしう作り
なしたる家居あり、こはおほやけよりおきて
させ給ふ御茶處となむ、夫より新田と
いへる所に至れは、茶ひさく家おほく
並たてり、此あたりのめての方にいとほそき
流れ有てかきつはたうるはしう咲たり
壱里あまり行て、長池てふすくのなから
なる松屋といへる家にやとりぬ
十三日またきに爰を立出、一里あまり
行て玉水てふ里に至る、此處よりめての
方なる山一里あまり奥まりし處に
井出の玉河の名残ありとそ
　　玉水の里とし聞は名におへる
　　井出の流れとくみてしる哉
右の方なる畑中にいとさゝやかなる井有
こは玉のゐとて昔より名におへる井成とそ
　　道のへに今も残りて旅人の
　　玉とくみゝる玉のゐの水
夫よりしはし行て、木津河てふ舟渡し有
此川古しへは泉河といへりしとそ、河より
こなたハいと廣き堤に、してみかの原こまの
里なと打過行に、向ひはるかに加勢山
みゆ、いにしへ人の衣かせ山とよませ給ひしハ
此あたりにや、其言の葉に似もやらて、きのふ

今日はていけいとよく、また深からぬ夏の日に
ひとへの衣すら暑さとほりていと絶かたく
さと吹河風にいさゝかいきいてゝ渡しに
至る、是より奈良までの道の行手左右
いとなたらかなる山々につゝし色よく
咲みたれ、あやしの賤か軒はに
紫の色ふかくかゝれるは藤の猶咲残れると
みれは、さにあらてあふちのいみしう咲たる
なといとをかし、猶行て奈ら坂てふ處に
いたる、さまてさかしらぬ坂路を登るに
般若寺てふ御寺有、爰へまうて夫より佐保寺
薬師寺へまうて法花寺に至る、爰に
横笛姫の人かたあり、此横ふえてふ人は
大内につかへまつりて、瀧口の何かしと
ひそかに過せし事あらはれしより、頭を
そりて爰に住しとそ、此人かたハをり〳〵
かきかはせしふみもて張たるよしいとふり
たり、爰を立出て佐保河をうち渡り、
行々て大佛前なるいとくゐてふ家にいこふ

　打わたすさほの河原の川風の
　　吹来るほとは夏としもなし

しはしいこひて大佛殿にまうつ、此み佛
の大きやかなる、いかなるますらをにても始て
拝せはあなやと言つへし、ましてかひ
無をみなわらはへなんとは只きもつぶるゝ
斗になむ、爰より山つゝき東大寺に
まうつ、おく霜の花いつくしみとやらむ
世に聞えし鐘は、此御寺のおくまりし
いと高き處に有、爰を出て向ひなる
春日の御社にまうつ、そも此みやしろの
廣やかさはた物さひたるいとたふとさまた
たとしへなし、左右に並立る石燈籠
其数いくはくかあらむ目もおよはぬまて多
かり、はた年ふりし松柏の生しけれる
さまいとすさまし、うしろのかたに杉おほく
生たるは三笠山といへりとそ

　三笠山さしていそかぬ旅ならは
　　道の隈々尋みましを

御社を拝し奉りて

　みやしろに繁れる杉のすきかてに
　　返りみせらるあけの玉かき

三笠山につゝきてめてなる山は手向山
とよへるとそ、昔菅公紅葉の錦とよませ給
へりし時、御こし懸させ給へる石なりとて、
さゝやかなる石にしめはへてあり

　若楓しける緑の春にきて
　　ぬさと手向む神のいかきに

二月堂はいとたふとき圓通菩薩たゝせ給へり
おましの下なる石階のもとに若狭井
といへるあり、爰は常には水かれてなし
二月中のふつかに若狭の國より水来り
其夜の中に若狭に帰るとそ、こは
いと深き故よし有事となむ

　御佛の恵もふかき若狭ゐに
　　なかれ絶せぬ法の玉水

若艸山といへるはいとなたらかにして艸
生たり、いたゝきに松三もとたてり、此あた
り鹿おほくむれゐて旅人に食を
こふことさもなれたり、夫より興福寺に
まうつ、爰に南圓堂とて西國八番
にあたらせ給ふ圓通菩薩の御堂有、いと
たふとく拝し奉る、かたへにさゝやかなる
藤棚あり、こは八ツのなかめの其ひとつとかや
爰を立出、猿澤の池のほとりにいたるニ
うねめの宮とていとさゝやかなるみやしろ有
昔大内に仕へまつりしうねめなる人
こゝに身をなけしよし、かたへに衣
懸の柳といへるあり、彼うねめ此柳へ衣を
懸おきしとそ、はた上なる堤には八重桜
てふさくらあれと、こは誠の八重桜ならす
興福寺の僧玄宗といへりし人愛
せしによて楊貴妃さくらと名つくとそ
さるをいつの比よりか八重桜と世に言
あやまれるとなむ

　猿澤の池の心に澄えつゝ
　　あそへる魚の安らかにみゆ

　青柳のいともかひなし宮姫の
　　もすそをいかて引もとゝめぬ

元興寺児の観音なと猶かなたこなた
まうて、夕つかたいとゝ井へ帰りてやとりぬ
十四日またきに爰を立出て招提寺に
まうつ、いと廣やかにしてふりたるさまたふ
とさたとへむかたなし、夫より伏見の
野邊を過て菅原の里なる天満御神
にまうつ、御社はさゝやかなれとふりたる
さまいとたふとし

　みつかきにかゝるしめ縄打はへて
　　祈るこゝろもすか原の神

西大寺にまうつるに爰もいと廣
やかにしてふりたり

契りありてけふそふみゝる法の庭

さらに心もにしの大寺

行々て法隆寺てふ御寺のほとりにやとる
十五日またきに此御寺にまうつ、こは
古き宮居の跡とかや諸堂共に千
ふたもゝとせにあまれりとそ、御寺の
中にまうつへき處八十あまり八處
あり、わけてたふときは嶺の薬師佛とて
いと高き所にたゝせ給ふ、いにしへより
名高き人々の太刀物の具なとをさめ有
事おひたゝし、はた夢殿といへる處ニハ
管弦の戸ひらといへるあり、其戸ひらくこと
に物の音有、表の御門にたゝせ
給へる赤黒の仁王尊は鳥佛師とて
異國より来れる人作りしと、そこは日
の本に仁王門の始也とかや、此御寺
なる御佛はなへて此佛師作れるに
三國の土をよせあつめて作りしとなむ、
いとたふとくてあまたゝひぬかつきまつりて
まかてぬ、扨行々て立田の御社にまうつ
いとふりたるみやしろのさまたたふとし
めくりに楓いとおほくして秋ゆか
しくそおほゆる、爰を立出てすこし左ニ
信貴の御山に行へき道有、かたへに
大きなる道しるへ石たてり、立よりてみるに
信貴山道江戸新吉原何かしと彫たり、
こは彼御神にねき奉りしことありしニ
懸まくもかしこき御恵を蒙り奉りしニ
よてかく道しるへの石を三處にたてける
となむ、右の方立田河のなかれにそひ
行に、河のほとり楓いとおほくして
青みわたれるいとをかし

こむ秋のおも影うかふ龍田河
緑をくゝる瀬々のさゝ波

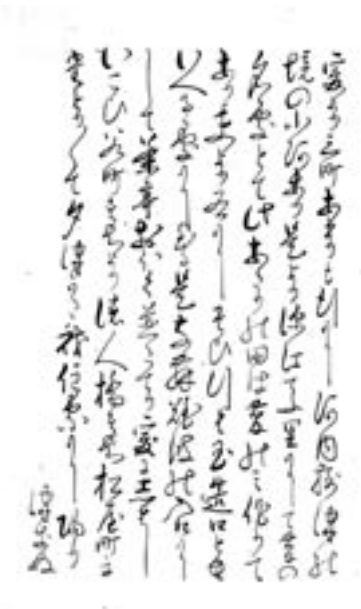
夫より十三嶺といへる山に登り行に、
いとさかしき道なれとかなたこなたに
つゝしの色よく咲くるは、山のすかたに似も
やらていとうるはし、いたゝきに登れは
さゝやかなる茶亭ありしはしいこふほとに
かゝる深山のならひとしていと晴やか
なる空俄にかきくもり、遠こちの山々より
雲むらかりていといたうくらかりしに
時鳥しは〳〵鳴て過るは、今休らふ山の下
にやあるらむ、いとちかゝり

五百重山かさなる雲の彼方此方
なのりかはせるほとゝきすかな
をち返り啼音ひまなきほとゝきす

分入山のかひとこそきけ

すこしおりむとする頃、一きは高き山の
なから斗にいと大きなる岩有、其色
紫にしていとうるはしきに、處〳〵に
つゝしの咲たるは画に書たらむより
うるはしかりぬへし、此岩は業平衣
懸の岩といへりとそ、此山は昔業平卿
奈良の京より河内の高安てふさとへ
かよはせ給ひし道なるによて此岩
有とかや、かゝるけはしき山をはいかに
して通はせ給ひけむ、はた此高き岩の
うへになとて御衣を懸給ひけむ
昔の人はいかなる術の有てかゝるふしき
を残し給ひけむなとおろかなる心にハ
いといふかしとおもへと、心ある人々ハいかに
をかしと見給ふらむなと思ふ〳〵打過ぬ
此山向ひへ下りつれハ河内の若江てふ里
なり、爰なる野中壱町斗右の方に
木村何かしのおくつき有、すこし隔て
山口何かしのおくつき有、こは世に其名
聞えし人々なるにかゝる野中にしるしを
残せるはいとあはれにおほえてすゝろに
袿をうるほし、しはしぬかつきて打過ぬ
爰より三町あまりも行に河内摂津の
境の小河、あり是より深江てふ里にて昔の
名處とて、此あたりの田は菅のみ作りて
あり、夫より右にそひ行は玉造口と
いへる處に至る、是なむ難波の入口に
して茶亭おほく並たてり、爰にしはし
いこひ、谷町すちより濃人橋すち松屋町を
たとり〳〵て、夕つかた我住家に帰りつきぬ

旅路の花　終



蘆の葉風

おし照難波の里に十とせはかりの
春秋をおくりつれは、くれ竹のよの
うきふしも数かりつれと、さわらひのをり
〳〵に行てみし名處もまたすく
なからぬを、思ひ出るまに〳〵あやむしろ
あやなき筆に書しるしぬ
難波の里にめつらかなるハ琵琶法
師女商人、をみなの錦頭布かつき
たる、處々の夜みせのにきはひ、月毎の
大師めくり、宮芝居の上るり囲太夫ふし
新町の赤前たれ、難波新地のをり〳〵
の作り物、睦月二日の朝またき水菜
うる聲いとをかし
此日、鯨と水菜をあつものにして食
すれは年中の邪をはらふといひなら
はせり、さなからにけふ水菜うる
事いとおひたゝし
一とせ睦月廿日に西の宮の御神に
まうてぬ、御もん前なる濱より舟に
打乗て出るに、まだ河風はいと寒け
れと、水の面はおのつから清けに
すみわたれるもいとのとけし、岸の柳の
やう〳〵萌出るもいとをかし、河口に至れは
はるかに海の面みわたさるに
かなたこなたにいかりおろせる大
ふねの、霜のひまにみゆるなとえも
いひかたし、はた物ひさく舟おほく
こき行に、たそかれ過れは此わたり
に舟にてつとふうかれめも有とかや
けに流れの身とは是をやいふら
む、いとあはれにこそ

みたれ髪けつるをくしのはつかなる
流れわたりに世をやおくれる

此あたりに、かた葉の蘆とてさるやかなる
蘆の片方にのみ葉生たる有とそ、昔ハ
此あたり蘆のみ生たる處成と聞に枯立、
あしかなたこなたに残れる、いと
あはれにて

難波江の片葉の蘆のかたはかり
昔のことのおも影にみゆ

難波より舟路三里、尼ヶ崎遠州の殿の
御城前にて舟よりおりてしはしいこひ
尼か崎なる町を過て野道に出、人々
舟の中にて物しつるかこゝちにて酔出て
おのかしじうちたはむれつゝ二里餘
の道をはやくも西の宮の町に至る、家の
作りさま人のさまもいと鄙めけと、其
にきはしさはけに御神の御威徳
いみしうこそたふとけれ、三四町斗行て
御社の前なる町中に大きなる鳥居
あり、御門を入に道いと廣くはた年
ふる木共あまた陰くらきまてうゑ並た
り、御神のおましハさまて広からねと
其作りさまは他に異にしてたふ
とさたとしへなし、しはし拝みてかなた
こなたみもて行に、いとふりたる御池に
亀ともおほくすみゐて、おのつからこゝろ
のとかにみゆるもをかし、かたへに
かゝれる土橋をわたれは、さゝやかなる御やしろ
あり、いとふりたれはさたかならねと弁才天
にやおはしますらん、左の方にをれて
馬場ともいふへきいと長き處には木共
おほく並たてり、猶かなたこなたをかみめ
くりてもとの御門に出、前なる町のなから
なる加納屋てふ家にいこひ昼の物なと
出させぬ、爰は名におへる濱なれ
は魚いとあさらけしくはし有て
御前の濱見にとて立出、三四町斗
もあるへくいと賑はへり、また酒つくる家
おほく立並たる、いと大きやかなり濱邊に
至れは、はるかなる海の面只一目に見
わたされ、其廣やかさまたたとへん方な
し、猶遠くみわたせは空も海もひ
とつにみゆる物から、かなたこなた
にうこめくは釣するふねにや
あらむいとをかし、左右にはいと
さゝやかなる家ゐ處々にたてるハ
蜑の住家にや、またかたへにはいとゝ高
く網なとほしたるもいとめつらか也、右
の方にそひ行は、海の面にさし出
たる筑嶌あり、爰へ渡らんとて小舟に
乗て行に、此嶌の岸に目馴ぬ
海草あまた生たる中にちひなき
蛎貝おほくつきたるを、あないする男
小刀にて取打、くたきうしほにて
さら〳〵とそゝきたるを、いさまゐり給へと
さし出すに、いとめつらかなれは手

にうけてたうへぬるに、其
味はひたとふる物なくさらにあくこと
なし、かく海の中なから海の物をくふ
もまたをかし

楽しさのたくひ渚におり立て
家つとにせむ磯菜濱貝

やかて筑しまに登りてみれは、其はゞいと
廣くはた長く海中にさし出たり、
そこひなき海の面は只藍を打流せる
如くみゆれと、浪の高くうち上たるは
雲とあやまたるゝまていとしろし、
筑嶌ちかく打よするしら浪は、今もや爰
にうちあけん心さしてさもすさま
しきに、岩うつ音のとゝろ〳〵と
耳をつらぬく斗におほえて、長ゐ
ハえたへぬこゝちせられぬ

四方の海開はしめし昔より
かけて幾世そ浪の白ゆふ

蜑小舟さして行へもしら浪の
霞て遠き沖つ海はら

此筑しまはちかきころことなれりとそ
抑爰は海いと廣やかにして風あらく
波高き折は行かふ舟の愁大かた
ならす、されは七十年あまりの昔より
おほやけに聞え上奉り嶌つか
むとすれとも、浪風あらくしてやゝつみ
あけし岩とも打なかさるゝことあま
たゝひにしてことならさりしに、我仕へ
ます君難波の司に備り給ひし
比、またおもひおこしてねき聞え奉り
しに、さしもあらゝかなる波風に
打流されし石も土も、今此君の補
佐し給ふ御代にあたりていさゝ
かの愁なく、おもふかまゝにこと成ぬと
かや、されは爰を過る舟のさはりなく
此濱の賑はひ大方ならぬもとこし
へに、御いさを残し給ふ御徳いみ
しうかしこみ奉り、里人ハ藤の御神
とあふきまつりてさゝやかなる御やしろ
をたてゝたふとみあへるもむへ成哉

よる波の音に聞たにかしこきを
あふかさらめや里の蜑人

猶をちこち見めくりてもとの酒楼に立
帰、やかて爰を立出て、尼か崎に来る
ころは申の半も過たり、爰に人おほく
むれゐていとかしましきを何事にや
ととふに、夕網の魚市成とそ、こな
たの岸に魚舟おほく着たるを
のそきみれは鯛はも鰈なと其数不知
目覚しきまておほかり、いとめつらか
なれはかなたこなたの舟もみて行き、扨
帰りてもとのふねにうち乗り、そや過る
比難波に帰りぬ
睦月中のよか子過る比より、處々に
鎮ます御神の御社いと賑はへり、こは
其町々氏神とあふき奉る御神ニまう
てゝ、みあかしの火を火縄に移し
暁比に帰りて其家〳〵の御神に
みあかしさゝけて後、今日の節會の粥
焚そむるとそ、東にてかゝること聞も
ならはねは、めつらかにおほえてをかし
きさらき始の午の日に御城前なる
馬場といへる處に、人のつとへること
おひたゝし、こはいとゝ廣き芝原に
てぬひるよめななといといおほかれは
ひねもす指もてあそふ也、はたをの
わらはは爰につとひていかのほりもて
あそふ、東にかはり初春のころハさるわさ
えせてけふなむこゝにあくるをもて
ならはしとせり、すへて此あたり春の
賑はひたとへんかたなし
難波の町に常にはやらせ給ふハ天満
御神也、御社のめくり梅いとおほかれハ
きさらきの比、爰にまうつる人絶
間なし

さかりとはとはねとしるし諸人の
梅かかならぬ袖のなけれは

御社のうしろ奥まれる處に宇賀の
御神のみやしろ有、御前にいと
ふりたる池有て、めくりに梅いとおほし

咲梅の香にや浸ると立よりて
結ひてそみる春の池水

池のめくりに大きなる藤棚あり
花のさかりはことに賑はし

おのつから年ふる池も春くれは
若むら咲に匂ふ藤浪

高津の御社も梅いとおほし、はた昔
の名残とてさゝやかなる高臺残れるも
いとゆかし

難波津の昔をかけて思へとや

いかきの梅の咲匂ふらむ
きさらきの末のふつか、天王寺の舞楽こそ
昔おほえていとたふとけれ、此舞楽
てふことは大方ならぬ存よし有ことと
なむ、物よくわきまへぬ心には今日
爰につとへる人をすさましと
おもふのみ、只たふとさとかしこさに
いふへき事もあらすかし、はた亀井
の水のいと清きに、おのつから心も
すめる斗になむ

あなたふと心の塵も餘波なく
そゝきて行む法のまし水

幾度歟結ふ亀井のまし水を
深きちきりと思ふへきかは

弥生のひゐなまつりハ東とは様かはれり、
紫宸殿のさまさゝやかなれと、おのつから
大内のみありさまかくやとおほえていと
かしこし、はた紙もてつくれる左右の
桜立花も匂ふ斗の心ちになむ

かくなから幾世さくらも立花も
心のとかにみるかかしこさ

弥生はしめつかた、住よしの汐干いと賑
はし、堺すちより長町を過れは左右
いと廣やかなる野道にして、右の方はる
かに紀伊国に名高き山々みゆ
左のかたには清水の御山はた、浮瀬
の酒楼なとみゆ、猶行は天下茶屋と
いへるあり、爰も打過行に御社にちかき
あたりには茶亭はた酒楼もおほかり、
中にも伊丹屋三文字屋いと賑
はへり、反橋の向ひはいとさゝやかなる松並
たり、其ひま〳〵に桜の咲たるは波
こえたらんかとうたかはる
郷の御社いとたふとし、御社の右の方
に御田有、五月末の八日ハ御田祭
いと賑はし、爰より左の方弐町餘り行て
浅澤をのの名残有、杜若いとおほし

浅からぬ色にそ匂ふかきつはた
あさしはをのゝの水にさけとも

爰より壱町餘り右なる小橋をわたりて
左の方なる難波屋てふ茶亭の庭に
いとふりたる大木の松あり、此あたりは
遠里小野とよへるとそ

住よしの遠里をのゝ遠けれと
松は難波の名に聞えけり

扨濱のかたに至らむと右の方なる松の
並たるいと廣き處を過、高燈籠のもとに
至る、こはかゝる浦々にたつる物也とそ、
其さまなからまて石もてたゝみ上は目も
およはぬまていとと高かり、向ひなる堤に
登れは海の面只一目にみわたされすゝ
たるひま〳〵に高く打あけたる浪は
さなから雲と散玉とくたくるなとえも
いひかたきに、向ひはるかに淡路しま
みゆるもまたたとへん方なし

住よしと名にしおへれは浦波の
立帰るへき心ちこそせね

わすれ草生とし聞はすみよしの
浦山しくもなかめつる哉

おりたちてあさりてをみむわすれ貝
しはし東のかたやわすると
一とせ弥生半はかり、河内の國なる葛井
寺より處々にまうてんとて朝またき
難波を立出けるに、天王寺村にて
夜はやう〳〵明はてぬ、爰に茶亭めく
處みゆれとまた人有としもみえねは
其うちとう出て、しはしいこひ行々て
平野の大念佛てふ御寺にまうつ
僧おほく立並て朝のつとめ聲澄て
いとたふとし、御門の前なる茶亭に
いこふほと、今はしめておき出たるにやあらん、
めのわらは目をすり帯もゆひあへす茶な
と出すさまいとをかし、平野のまちを
過れは摂津河内の境川あり、小橋を
わたり行々て大和河に至る、なかれいと
清くかなたこなたに生る水艸の緑は
水にもまして清らか也、板はしを
渡れは堤に草おほく生たる中に
引捨たる牛みつよつおのかまゝに
あゆみめくりて草はむなと画にもかゝま
ほしけ也、左にそひゆけは小山てふ
村里に出、此里より團扇おほく作り
出して京難波にてもてはやせり、爰を過
右にをれ行はしはし町つゝきて賑はし
こゝを過、野を過て御寺のもとに至る
かたへの北門より入に右の方に藤棚
あり、下に石もて作れるいと大きなる井有、
藤の花やう〳〵咲出たるも御寺のみ名
おほえていとたふとし

紫の雲歟あらぬ歟藤のはな

はひもてかゝる法の道芝

御堂もいと廣やかなり、西國五番にあたらせ給ふ、圓通菩薩いとたふとく拝し奉ぬ御堂のうしろなる御園に紫雲石の燈籠あり、其色いとうるはし、こはいつのみ代にか帝の納め給へりしとそ、前なる御門を出れは旅舎おほく立並ていと賑はし、爰にいこひて左のかたなる畑のあはひなるいとせはき道を行々て道明寺に至る、此寺は都なるやんことなきあたりより女僧たゝせ給へりとそ、御寺いときらやか也御堂は圓通のみ佛たゝせ給ひかたへに天みつ御神の御宮あり、こは此神の御手つからつくらせ給ふとそ、鳴はこそわかれもうけれとよみ給へりしによて此里は今に鶏をかはすとなむ、覚寿尼公の人かた御堂に有、坊中に三宝の梅といへるあり、此梅の実、年中落ることなくあからむことなしとそ、坊のうしろに木槵樹といへる名木有いと大木也、爰を立出て誉田の御社にまうつ、いとふりたる御社ことにたふとし左のかたに車楽堂といへる有、難波の處々の神ゝの御まつりは此車楽也、其作りさまはた物の音も東とかはりていとひなひたり、此みやしろ成車楽は日の本に始て作れるとそ、難波にて常に目馴しよりハいと大き也、右の方石の反橋をわたれは、奥の院地蔵菩薩たゝせ給へりかたへに龍の池閼伽井なといとふりたるあり、またかたはらに綾杉とて大木のすぎ有、うしろなる高き御山には帝のみさゝきあり、石階段いと高くして左右より草生たり、苔むしたる石の燈籠数おほく並立、其ひま〳〵に松桜並立、おのつからふりたるさまいととふとけ也、御廟のめくりあまたゝひ拝し奉てまかてぬ夫より大黒村てふ處に至る、いと清らなる河原をわたり大こく寺てふ御寺にまうつこゝにしつまります大黒天ハ日の本に始て渡らせ給ふ御神也とそ、前なる河原に日毎に壱つつゝ此御神のみかたちしたる石なかるゝといへとも是をひろふ者いと稀なりとかや、猶行て壷井村に至る、いと大きなる石の鳥居をすこし隔て石階のもとに井あり、是なむ壷井と唱へてゆゑよしある井也とそ、水いと清け也

くみてしる壷井の水の深からぬ
恵になひくよもの民艸

石階を登れは御社いときらやかなり八幡の御宮居いとゝふとし、うしろなる高き山々には松杉陰くらきまて生しけりたるいと物すこし、かなたこなた拝しめくりて爰を立出、通法寺に至るいとふりたる御寺のさまたふとけなり御堂はいとさゝやかにて阿弥陀佛たゝせ給ふ、かたへに頼義公のおくつきとて圓通菩薩の御堂有、左の方ほそき道を壱町あまり行てすこし高き處に頼信公のおくつきとてさゝやかなる山の上に松一本たてるのみ、またすこし左の方におなしさまなる山に松のみ立たる、爰は義家公のおくつき也とそ、あまたの星霜かさなれるゆゑにや苔むせる石さへなし、いとたふとくもまた哀にこそ

ふみゝるも猶かしこしな跡たれて
絶す通へる法の道しは

夫より磯長山叡福寺にまうつ、こは世に上ノ太子と唱ふいと廣やかにしてふりたるさまたふとさたとへなし、山門中門うち過て左の方に聖徳太子の御堂有、こはみ手つから作らせ給ふ尊影也とそ、其御顔はせさなから生るにことならす、物もの給ふへき、みありさまいとたふとくて、おそる〳〵拝しまつりてまかてぬ、向ひなる御墓山は太子の御廟なりとかや、其めくりいと高き石の玉垣立たり、手のとゝくへきあたりにさま〳〵の艸生たる、かかゝる御山に生し草とおもへれは心なき小草すらたふとけにみゆるもをかし、御山の中よりはいと大きなる木ともさし出て陰くらきまて繁りたり、此石の玉垣は弘法大師たて給ふとかや、其数いとおほくしてかそふる度におなしからすといへるにいといふかしけれはともなへる人々かそふるに其数みついつゝほともたかへり、おなし人弐度よみゝ

れは弐度共にたかへり、いとふしきの
ことよと人々言あへり
　御墓山石の玉垣代々遠く
　　たてしやいつの昔なるらむ
御山の中より左の方にいと高くさし
出たる楠あり、大乗木と名つくとそ、こは
太子の御母公かくれさせ給へりし御から
納し御車の轅をこゝに太子の
御手つからさゝせ給へりしに、かく枝葉
しけりたるとなむ、右の方なる一きは
高き山ハ五字か嶺とかや、よへり登りて
みれは所々の田畑また山々まて隈なく
み渡され、其なかめたとへん方なし
此御山は昔、紫の雲棚引し處也
とそ、かくみること聞こと〳〵に目も心
も驚るゝ斗たふとさ限り無て、すゝろに
袂をうるほしける、御門を出て向ひなる
坂路を登れは西方院といへる尼寺有
御門の前に三姫の墓とてみつ
並ていとふりたる有、此御寺の尼君には
故有て難波にてまみへしことあれは
あないを乞て入けるに、大方ならす
もてなし給ふ、しはし物語て爰を立
出やかて家路におもむきぬ、難波
より爰まて五里にあまりぬへし、弐里
餘り難波ちかくなりて玉手山といへる
御山にまうつ、いと高き坂路を登れ
は左の方に御堂あり、きらやかに
していとたふとけ也、また一きは登れハ
右の方を國見の岡といへり、いつゝの國は
只目の下にみえ、西の國々山々浦々まて
みわたされ、其詠さらにたとふる物なし
かたへに舟形の松とていと大きなる
舟のかたちしたる松あり、此松の上に
登らんには猶遠き國々のみえもや
せむといとめつらかにおほえて
　　うち乗て行てみよとや舟かたの
　　松は國見の岡に立らむ
　山の名の玉ひろふてふ蜑ならハ
　　乗てみましを舟かたの松
こゝをおりてすこしなたらかなる處に
いとをかしうつくりなしたる庵あり
筑垣の中に龍眼肉てふ木有、こは
尾州の殿よりをさめ給へるとそ目馴ぬ
木のさまなれは人してとはせけるに
かくこたへぬ、猶左にそひ行は小草
いたくしけれる中にわらひおほくおひ
出たるを見捨かたくていさゝか摘もて帰り
ぬ、爰より右の方に尾州の殿代々
の御墓立並たり、其めくり朱の玉垣
にしていときらやかなり、爰よりもとの坂
路を麓におりぬ、また壱里あまり
難波ちかくに椋樹山勝軍寺てふ
御寺にまうつ、こは世に下の
太子と唱ふ御堂はいとさゝやかなれと
聖徳太子植髪の尊影みてつから
作らせ給ふとそ、御堂の向ひに垣結め
くらしていと大きなる椋の木有、こは
大かたならぬ故有木にして御寺の名
にもよへるとなむ、昔ハ御寺も大きやか
成しか今ハ只かた斗残れとも、椋の木は
猶くちすしていさを世々に傳へける
とそ、御門の外に守屋の連のおく
つき、はた首洗の池なといへる有、いと
さゝやかなれといと物すこき心ちす、爰を過
て平野の里に至りし比は申の
半も過たり、こゝより難波へ弐里餘り、駕籠
をやとひてそやの比帰つきぬ、けふの道ハ
行来山坂にていとこうしぬれは
やかてうちふしぬ
弥生中はの比、桜の宮の賑はひ大かた
ならす、淀川にそひて弐丁餘り桜
うゑ並たれは、舟にて行もあり陸より
行も、おのかしゝ花の本に氈引て
うたふ有まふあり、いと目覚る斗になむ、
御社の中には大木の桜ありて
ことにうるはし
　　春ことにとひ来る人は神垣の
　　さくらかもとに絶すさりける
　　名におへる神のいかきに咲出て
　　よしにかをれるさくらはなかな
生玉の御社も桜いとおほし、安井の
天神のみやしろもまたおなし、降専寺の
糸さくら桃谷の花さかり其にきはひ
大方ならす、桃の畑中に梅の家と
唱ふる茶亭あり、爰は東なる梅か家に
まねひいとみやひたる作りさまにて庭
いと廣やか也、此庭の山より桃山四方に
みわたされ、只一よふに紅なるひま〳〵に
菜の花の黄なる、麦の所々に青々たる

さらに錦敷たらんかとおほゆと、爰よりすこし隔て野中の観音堂といへる有、こゝにも糸さくらおほし

野田の藤、浦江の杜若、茨住吉の杜若藤、小堀口の杜若、赤河のかきつはた、月江寺の藤、十三の藤、浮瀬西照庵の花見なと、其處々の賑はひおろかなる筆もて尽すへからす

卯月はしめのふつかより八日まて、河内の國なる野崎の圓通のみ佛無縁経とていと賑はし、難波より三里河舟にて行もあり、あるは陸にて行かひさまに物言かはしまた歌うたふも有、いとむつましけに高き賤しき隔なきさま実に御佛の霊験いちしるき故ならむかし、一とせみつといへるに舟にてまうてけるに、咲残りたる花の水に散菜の花のかなたこなたに咲たる、えもいひかたきに行かふ人の物思ひなけにみゆるもをかし

恵みかはし袖引つれてしるしらぬ
春の野崎にあそふ諸人

水の面に散うく花はおのつから
春せきとめし心ちこそすれ

卯月八日にはつゝしの花を竹に結付、軒はに高くさし出して花供養と唱ふ

おなしこゝぬかには、和國寺てふ御寺に植木市とて諸國より

さま〴〵の大木をあつめ持寄て、ひさくこと其賑ひ大方ならす、またこと國に有へくもあらす

中のなぬかは東照の御神御まつりいと賑はし、こは高き司々のかた〴〵もまうてさせ給ひおほやけのおきておろそかならす、たふとくもまた目覚しきまてになむ

五月いつか軒はにざうふとせん檀の葉をかくる、遠きむかしはなへてかくせんたんをかけしと古き文にもありとかや、めつらかにおほえていとをかし

軒のつまにさせるあやめのあやなくも
昔のことそ思はれにける

水無月朔日勝鬘院毘沙門堂愛染堂いと賑はへり、此山の奥に家隆卿のおくつき有、すへて此あたりはふりたる碑いとおほし、此坂下をすくに行は新清水寺とて高き石階を登りて圓通菩薩の御堂有、石階のもとに逢坂の清水とていと清き流れありこゝより野道をすくに一町あまり行は一心寺といへる御寺の坂下に増井の清水といへる有、いときよくして行来の人絶すこゝにいこへり、爰より天王寺にいとちかし亀井増井逢坂の三名水とていと名高しとそ、此坂を登れは一心寺てふ御寺也、昔はいと大きやかにして大方ならぬ故よし有御寺とかや

今はさまて廣からねと昔おほえていとたふとし、御堂の左の方に茶臼山みゆ、御堂に向ひて右の方に本田何かしのおくつき有、こは元和のみたれに此あたりにてをはりし人成とかや、今の世にうつくしき名を残せるもいと哀にこそ、かたへに家臣の名々のおくつきも有、御門の向ひに福屋といへる名高き酒楼有てまらうと絶すいと賑はし水無月半の比より難波橋のすゝみいと賑はへり、橋の向ひなる肥前の殿の御屋敷前に茶亭おほく並立て爰ニいこふ人引もきらす、はた水のおもはさしもに廣き淀河處せきまて大舟小ふねさしつとひ、ともしつれたる其の影は星よりも猶しけく、天にかゝやき水をてらし、さなから昼にことならす、はた花火の目さましさ東なるふた國かけし橋のもとにもはるかにまさりぬへくそおもほえぬる

涼する人のこゝろもいとと広き
淀の河せの舟そにきはふ

おなし日の中のよかには住よし御輿洗の神事いと賑はし、此日うしほに身をひたせはもゝのやまひをいやすとかや、遠き國々よりもつとひ来て爰にしほあみする人いと目覚しきまておほかり、はた舟にてもうつるもすくなからねハ

濱邊の賑はひたとへん方なし
十五日は嶌の内三津八幡宮御祭
十七日御堂の宮
十九日高津の宮
廿一日博労稲荷
廿二日座摩ノ宮
廿五日天満ノ宮
廿六日豊津稲荷
廿八日生玉ノ宮
晦日住吉名越の御祭
住よしの御神は月毎に御祭
にきはしく、年に七十五日度御祭
有とかや、されとも水無月つこもりを
大まつりと唱へ其賑はひ大方ならす、
はた所々の御神もいとにきはしく、町々を
引もてあるく車楽のはやしたつる音は
日々天地にとゝろきかしましきまて
目覚しくなむことに、天み津御神
ハ難波橋より安治河まて舟にてわたらせ
給ふ、御送りふね迎ひ舟篝ふねなとこそり
て、さらに水の色もわかぬまて其
賑はしさあけてかそへ盡すへからす、
東とかはり美々しからねと賑はし
さは亦こと處に有ともおほえす
文月の燈籠七夕まつり東に異
なることなし、おんごくおとりとてめのわら
はうちつとひ歌うたひ町々をありく
さまいと鄙めきたり
中のいつか亥の比ほひより七墓参り
とて男女うちましはり、さま〴〵の出立
してうかれあるくいとめつらか也、暁
比には聲しつかにねほれる
顔して帰行さまいとをかし
十六日ハ千日参りとて天王寺いと賑はし
此日まうつれは千日まうつるにおなし
といひならはせり、
八月朔日町の長たる人々、此たちに
ゐやのへんとて暁ころよりうちつとふ
こと目覚しきまて、御もんの前市をなせり
中の五日、月見のさまは東におなし、
萩は今宮三番てふ所いとおほし、
重陽はた後の月見も東におなし、
一とせ長月半はかり住よしにまうてん
とて阿倍野を過けるに、左の方ニ
晴明の宮とていとふりたる御社有、其ほとり
艸の花色々咲みたれたるに虫の聲
ひまなく聞ゆる、いと哀にて

ふりすてゝ行もやられす名におへる
阿部のゝ原にすゝむしの聲

虫の音はつゝりさせてふ秋のゝに
いかてほころふ花の色々

爰の里長何かしのもとに葛の葉の
額ありと聞ゆ、いとゆかしくてあないを乞
彼額みむ事を人していはせけれは、いと
いと廣やかなる出ゐをかきはらひ、やかて
いたくふるひたる箱に錠おろし
たるを持出けるか、いと長々と其存よしを
かたりつゝとり出てみせけるか、いたく年
ふりて其文字すら處々墨消てよむへ
からす、皆うちこそりて見てやかて爰を立
出ける

尋来てさらに昔を思ふ哉
しのたの杜の世々のふること

夫より住よしへとておもむくに、野中ニ
小町塚松虫塚顕家卿の塚なといへるいと
ふりたる碑おほく立たるは、ことのよしを
定かに聞もあきらめねといとあはれ
になむ、やかて御社に至るころ
雨ふり出けれは

さためなき空さへ嬉し住吉の
松の木陰に雨やとりして

村雨もよしいとはしな立よらむ
松陰おほき住よしの浦

夕附て家に帰りぬ、
神無月ハ難波もさせる賑はひなし、只
寺々に十夜と歟唱へて老たる人の
つとふのみ、末の一日より八日まて東西
の御堂参りいとにきはし、
霜月道頓堀歌舞伎の賑はひ東に
ましていと目覚し、およそ歌舞伎の
年中の賑はひまた外に有へか
らすとそ、
中の五日わらはへの神まうて東に
おなし、
廿日比より都六条参りとて遠き國々より
まう来る人いとおほく、淀川の舟引も
きらす其にきはひ大かたならす
十二月年のをはりは何國もおなし、
いさましさなるをまして人さはかしき
所のならはしなれは其かしましさ

おしはかりぬへし、さハれ世のわさ
しけき中にしも年わすれと歟
唱へてをちこちの酒楼にまらうと
絶間なくいと賑はし、されは花紅葉の
をり〳〵に袖をつらね老たる若きの
わいためなくうかれ出る其賑はひ、中々
におろかなる筆に尽すへから
す、いとかしましうはしたなきさま
にみゆる物から、かく物めつるも
おのつから人の心なこくみやひたらむ
かとおもへれは、いとをかしうなむ

蘆の葉風　終

在明の月　月の屋

弥生中のいつより末の一日まで中山寺
無縁経とていと賑はへり、難波より此
御寺まて道のほと五里に餘りぬ
へし、一とせ此御寺にまうてんとて
此月の廿一日といへるに難波を立出
十三神崎(さう)なといへる渡シうちわたり、行
〳〵て伊丹の町に至る、入口右の方に
猪名のさゝ原とていとさゝやかなる藪
有、此あたりより有馬のあたり迄を古し
へは、すへて猪名の里といへりしとそ
こは定かにしるよしあらねと、伊
丹の里をさ何かしのいひをしへしに
よてかう物しぬ、伊丹の町はいと廣
やかにして其賑はひ大方ならす、家々も
いとうるはし、酒蔵のおほきやかさ菰包
の樽つみ上たる、其香巷に満々て
酔へる斗也、かゝるさまは東にて見も
ならはねは心驚く斗ニなむ、此町を過れ
ハいと廣き野にてはるかに山々みえ
けしきよしはたまち(廿丁)餘り行に、左の
かたに昆陽の池みゆ、此池
なる魚はかたつかた焼たることしとかや
昔たふときひしりやきたる魚を
爰にはなち給ひしに其魚生かへ
りしとそ、されは今の世までも焼た
る跡残り、はた此魚とり食すれはあしき
やまひをうくるとなむ、菩薩の應験
いちしるきをしへを爰に残さし給ふ
いとたふとし

住なるゝ魚の心もおのつから
　のとかにみゆる昆陽の池水

三十町斗も行て御山の麓に至る、
こゝは鄙に似けなく、旅舎もいと
きらひやかに軒をならふる中にも
若夷といへるは殊に其名高く聞えれは
まらうとおほく爰につとへり、けふ
こゝに着しは申の半も過たるへし
左の方なる小門より入に、いとほそき
河に土橋かゝれり、此河ハ中山の
御寺の中よりつゝきて勅使川と
名つく、こは大方ならぬ故よし有とそ、
しはしいこひて扨庭へとておりたつ、右の
かたにいと広き池ありてかきつはた
やう〳〵咲出たるに、うしろの高き
芝山に三もと斗並たる桜、をり〳〵
水に散うくもいとをかし、山の頂に
いとみやひたる亭有、かゝる所にすまく
ほしくそおほゆ、其かたへに高楼有
登りて見れは向ひはるかに武庫山
みゆ、うしろの方を返りみれハ甲山、はた
和田のみさき其外名高き山々浦々
只一目にみわたさるゝなと、さらに
言んかたなし、爰をおりて左にをれ
行はいと廣き處に桜おほく並
たる八重はまたしきほと成に、ひとへハ
今をさかりと咲みたれをり〳〵にちる
花の袖にかゝれるは匂へる雪かとあや
またるゝもいとをかし、向ひなる竹の
網戸をひらきて外に出れハ、すこし
高き所に李おほくうゑ並たる
しろ妙に咲みたれたる花は雪とも
おほめかるゝ物から、かたへ成さくらに
たくふれハいと見おとりせらるゝに
其匂ひはたゆかしけなきそ口をし
きや、かたへなる畑には茶萩なとくさ〳〵
の若はえおほくおひたるは、秋いとゆか
しくおもほえて、中々に匂ひなき
花の咲たらむにはまさりていとをかし
此うしろはいと高き山也、登りてみむ
とおもへと、はやたそかれ成にいと物
すこくてやみぬ、もとのあみ戸を入て右に
そひ行は、いとさゝやかなる瀧有、下は清
き流れ也、こはおのつからなる山水
をたゝへたれは、其清さまた異也、かたへ
の杜の中には稲荷のみやしろあり
此あたりはさらに旅舎なとの庭
としもみえす、人はなれし山路を分
まとひしかとおもふまていと物すこし、左の
方には塩風呂とやらむ其作りさまいとをかし
はたかたへは木共おほくうゑ並石の燈籠
敷石なといとをかしうすゑなしたり
かなたこなたに亭有つれと、こゝなる
龍ノ間と名つけしハいと詠よけれは
かりまうけて一夜の居處とさたむ、日暮
ぬれハ、あるしのもてなしとておほくの
花のもとにあかしともしたるに
さきに一わたりみめくりつる庭を爰にて

みれハ、また一きはのなかめそひて、木の本に
立ましれるほとはさも思はさりし、かなた
こなたの花は只雪歟雲かとうたかはれ
さと吹風ハ寒からて、其匂ひまたこよなし
しはしうち興し、かゝるさまは世に
おほかるましく、さらにめかれぬ物
から、いたく夜も更ぬるにまたあす
こそとてうちふしぬ
廿二日またきにおき出て、夜桜のなかめ
はよへにてたりぬへし、いさ朝さくらを
とて立出るに、いつかおほくのまらうと
こゝかしこにむれぬつゝ、おのかしゝ花
めつる心はいかなるふしをやおもふらむ
いとをかし、うしろの高き山の端より
朝日ほの〳〵とさし出るに、花も一きはの
匂ひそひたらん心ちして、さらに似る
物なくそおほえける

諸人の心も共にさし出る
朝日に匂ふ花の中山

あるしあないして御山にまうつ、御門
の前にハいとふりたる松左右にたてり
しはし行て向ひなる高き石階を登れハ
御堂いと大きやかにしていとたふとし
こは西國廿四番にあたらせ給ふ圓
通のみ佛也、しはし拝し奉りて
御堂のうしろなる一きは高き石階を
登れは、桜おほく並て今をさかりと
咲みたれたり、はた楓もおほく若葉
春めきたるもいとをかし、こゝよりも遠き
山々浦々みえわたりいとなかめよし、左の
方なるほそい石階をおりて猶、かなた
こなたをかみめくりてもとの石階をおるれハ
右のかたにいと大きなる石の祠あり、
中はいと廣やかなれともくらくして
さも物すこし、此處は其かみ、いとたけき
王子の水におほれてうせ給へりし
みたまを爰に鎮まつりしとなむ
爰よりすこし左のかたに奥ノ院道
とていとけはしけ成坂路あり、登りて
まうてんとおもへと、けふ有馬に
おもむかむことを人々そゝのかせは、さらハ
帰りにこそとてやみぬ、扨若夷に
立かへりて、ことよくとゝのへ立出むとするに
あるしのもてなしいとあつかりけれは
また帰を契りて立出ぬ、御寺を右に
見つゝすくに行は、左右いと廣々たる
野道にてけしきいとよし、壱里餘り
行て生瀬といへる駅にいこひ、猶
ゆけは有馬と三田(サンダ)トのわかれ道あり
三田の里は九鬼の殿のしらし給ふ處
とそ、向ひに土橋かゝれり、かたへハいと
高き山にて下は清き石河也、左のかた
河原にそひゆくに、其なかめまた
たとへんかたなし、およそ遠こちの山々
河々見めくりたるはおほけれと、こゝは
常に人の物語しこともあらねは
心驚斗、えもいはれぬさま中々に
画にも移しかたからんとそおほえぬる
さはあれと心なき身のさかなれは、たゞ
うちあふきみもて行のみせんすへなし
爰より五十町あまり河原にて人家一軒
たにあらす、左右いと高き山々そひへ
見あるく斗の大岩並たるいとすさまし
河原には大なる石ともまろひて道いと
けはし、四五ひろまた七八ひろも間を隔
てほそき流の数しらぬまておほかり
されと板橋たになくうちまたけて
行に、常は水いとほそけれと、いさゝ
かにても雨ふれは、山水あふれてこえ
かたしとそ、爰を四十八瀬と名つくる
此ゆゑとかや、乗物にてわたるすら其
おそろしさ言へうもあらぬに、かち
にて行人のわつらはしさおもひやられぬ
木曽の山路にましておそろしき
心ちせらるゝもかく人すくなにて行故
成へし、からうして爰を過ぬれは
またむねつく斗いとけはしき坂路
也、こゝも壱里あまりの山みちに
あやしの小家たになけれハ、行
なつみては木の根はた石なとにこし
うちかえていこひつゝ、からうして
有馬の町の入口に至る、いとほそき坂
路をおりつれは、旅亭軒をつらねていと
賑はへり、爰も山より山に家をつくり
懸たれは、前よりはさもあらぬ家のうしろ
のかたは二階三階ともみゆ、外にては
目馴ぬさま也、かく山ふところなれとも
薬師佛の霊験あらたに出湯の
きとくいちしるく、こゝにつとへるまらう
と絶間なく、はた所に名たる竹

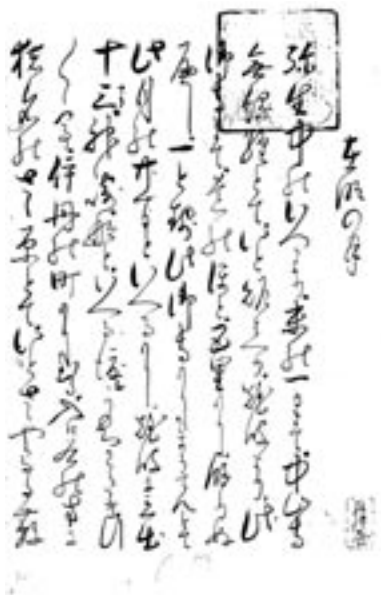
さいく糸さいくひさく家々軒をならへ
また酒楼の賑はひ大方ならす
温泉は町のなからにたてり、室の
中を隔て南北に入口ありて一ノ湯二ノ
湯と唱ふ、二ノ湯の向ひなる池の坊に
やとりを定む、爰に着しは申のさかり
成へし、おちゐて後幕湯てふこと
せさせて入ぬ、暮はて、湯女をつとへ
つるに、其さまいとゐなかひたれと
まらうとのあつかひになれたるは
いとにくからす、しはしうち興して
そや過る比うちふしぬ
廿三日ていけいとよく、今日なむ音にきく
つゝみの瀧有明さくらみむとて、湯女二人
つれて立いつ、此町はいと賑はしけれと
其道直からす、あるは登りあるはくたり
て十丁あまり行は、左のかたにいと廣き
藪あり、こゝを左にをれ行はいとほそき
道にして左右より竹おひたり、處々に
さし出たる桜は皆一重にて花
ちいさし、こゝは山の中なれはいとひや、
かにして、今弥生の末なれと八重は中々
ほころふへくもあらす、しはし行は左右
山にていと廣き處に至る、桜おほく
並立て咲みたれるさまいとうるはし
爰に昔は有明てふ名高きさくら
ありしか、いつの比に歟枯て今ハなへ
て、此あたりの桜をあり明とよへるとそ
左のかた山のなからなるつゝみか瀧とい
へるは、さまて高からねは打わたすしら
糸としもみえねと、其流れいとけは
しく目くるめく斗になむ、花の
本にはおほくのまらうと打つとひ
氈引まうけさゝへなととり出ていこへり
爰につとへる人々は、皆軒を並し
家にやとれる人々なれは、かたみにみなれ
し顔なるを、こゝにつとひかしこに
うちむれはた袖引追まはし物あら
そへるなと、年比したしき友にことならす
咲みたれたる花は猶高き賤しき隔なく
袖にかをり桂に匂へるもえならぬに
をり〳〵に散花は蝶のむつれ飛か
ともあやまたるゝいとをかし
旅のうさもうち流しけり名におへる
つゝみの瀧の今日のまとゐに
打よするつゝみの瀧のしら糸に
あやおりかくる花さくら哉
有明の月と名におふ山さくら
いさみはやさむ花の下陰
あかぬ詠に時移りぬれは、こを立て
もとの道にと帰り来る、町のはつれに
清水てふ酒楼あり、家のさまは心ある
へくもあらす、はた前栽も廣からねと
向ひにおのつからなるいと高き山を
みわたし、下なる流れハせきも入ねと絶す
なかるゝさまいと清け也、庭のかたへに
咲みたれたるつゝしの前なる水に移ろふハ
立田河の秋もかくやとおもほゆるまていと
をかし、はるかなる山郷より薪おひ下る
柴人あれは、麓より牛引わらは登り行
有、こなたの谷河にははだへいとくろみ
あかきかしら髪ふりみたししわらはへみたり
よたりうちつとひゐて魚なと取にや、かなた
こなたかけめくるなと、東にても難波にて
もかゝるさまは見も馴ねはいとめつらかに
おほえてをかし、かく物おもひなきなかめニ
日を過さむにはいかなるやまひもとみに
いゆへく、けに有馬の温泉と世に
言もてはやすもむへ也けり
有馬山嶺に麓に咲花の
匂ひ出湯の末もなつかし
いささらはあみてを行む塩の湯に
からき浮世のことやわする、
廿四日こゝに名高き常喜山に
たゝせ給ふ、いとたふとき薬師寺にまう
てんとて供の人々つとひて出ぬ、町のなから
なる石階を登れは御堂いと廣やか也、
御帳のかたへに黄かねの如き石を
臺のうへにすゑたり、此ことき石地中
におほく有て、其勢いて温泉
出るとかや、御堂の向ひに落葉山
みゆ、いとはるかなれと木々の青々たる其
ひま〳〵に、しら雲のかゝるとみゆるは
桜にやあらむいとをかし
落葉山秋の梢のいかならむ
春の緑のさもふかくして
返りみる落はの山の山風に
匂へる雲やさくらなるらむ
かくてかなたこなたみもて行に、空いたう
くもりたれはやとりに帰りぬ、夕つ方

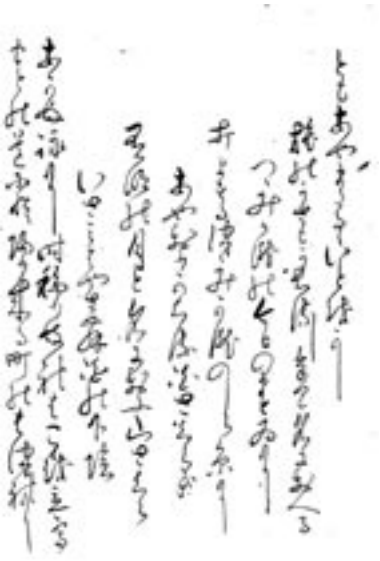
より雨降出ぬ、くしたる人々うちこそりて明日一日雨ふらは四十八瀬いとむつかしからん、あすハつとめてこゝを立出むなと言あへるに、あわてまとひてそのまうけをなしぬ

廿五日雨もさまてつよからねは四十八瀬たにこえたらんにはうれへなし、けふは中山にやとりてあすゆるやかに難波に帰らむとて巳の比ほひニ笈を立出ぬ、四十八瀬に至るころは雨もをやみかちなれと、よへつよくふれるにや、さきつ日とはやうかはり水いと高かり、石道のけはしきは乗物の中すら安からぬに、供人等は笠うちかふり桐油引懸竹杖つきて水おほかる處をは、あなやといひて飛こゆるさまはさなから猿にことならねは獨りうちゑまるゝ物から、行なつめる人々の心いかならむと、わらひをしのひて打過行に、ひつしさかる比中山につきぬ

廿六日空いとよく晴たれは、心のとかにこゝを立出、伊丹より久々地の妙見宮にまうて、神崎十三のわたしもはやく打わたり、申の半斗難波に帰りぬ

在明の月　終





東のつと　六

あつまのつと

文政十とせあまりふたとせといふとしの弥生はしめのなぬかの夕つかた、おほやけよりめしふみ着たりとて上下こそりてそのまうけいといそかしこゝぬかといへるに町々にふれしらし給へは、まゐ来る人いとかしましき十一日にみたちへ常に出入せし人々めさせ給ひて御わかれをつけ給ふおなし三日といへるに難波をかしま立せさせ給ふ、朝またきにみたちの前なる濱よりみふねにのらせ給ふに、日比御恵をかうふり奉りし人々はいへはさら也、しるしらぬ老も若きも御わかれをゝしみ奉りてうちむれまゐりぬ、ましておいたるなとは目をすりはなうちかみて、かく御恵ふかき君にまた逢奉らんやはなといひ〳〵みふねみゆるまて見送り奉る、いと目覚るまてになむ、けに下をあはれみうつくしみ給へりし事よのつねならさりしかは、かゝるもむへ成かな、さるは残らせ給ふ女君にけふのことふき申はてゝ後、おのかとち跡よりまかるへきまうけにいとなく日をおくり、大かたにことゝ、のひて、いさや難波の名残とて、遠こち見めくれとみたちにのこれる人のおほからぬに、いと物たらぬ事のみにて、只東の音つれをのみ待けるに、おなし弥生の末つかた、ある人のそゝのかして長柄の鶴満寺より宗せん寺の花見にとておもむきぬ、天満橋をすくにふたまち斗を過て野道に出、左右なのはないみしう咲たり、しはし行は鶴満てふ御寺也、爰に名におふ系桜さかりハはや過たれと、木の本にむれゐたるもすくなからす、かなたこなたにさくなとう出たるもいとをかし

おもふことなからの寺の糸さくら

絶すよりくる春の諸人

くり返し見てを帰む糸桜

いとなかき日もあかぬ心に

爰を立出、よまちあまり行てなからのふねにのるに、左の方向ひはるかに長柄の桃はやしみわたされいとよきなかめ也、されとも今は難波の名残とおもへはみる物聞物にむねふたかる心ちしてさらに目うつるへくもあらす、うまれ出し處ならねとやゝ物のこゝろしるらむ年のころより、爰にあまたの年月をかさねし心はたれもかく有へきにや、はるか行て左の方なる野中ニ鴬塚と彫ていとふりたる塚あり、めくりにみもと斗たてる梅は幾とせをかふりぬらんいとゆかし

咲き匂ふ梅の梢に鴬は

昔なからの音をや鳴らん

行々て宗禅寺の馬場に至る、いとゝ廣やかにて松おほくたてる中に桜の處々に咲たるいとをかし、かなたこなたの木陰に氈引まうけさゝへなととり出てうちたはれ花みる人の心は高きいやしき隔なくみゆるもをかし

立ならふ松もさくらもとり〳〵に

くみかはす也春のさかつき

右の方に竹垣経めくらしたるは宗禅寺といへる御寺とかや、御堂はいとゝたふとき圓通のみ佛たゝせ給ふに此ころみてふひらきてをかまれさせ給へハまうつる人の殊におほし、此處にいつの比にか有けむ弟のかたきうたんとせしはらからの者かたきの為にあさむかれあへなく返りうたれしとなむ、其相持しはらからの者の太刀長刀着たる物なと御寺にをさまれるを、み佛をかませ給ふ寺邊に人々にみするいとあはれに酔も覚ぬへき心ちして立出むとするにも、只み佛おみ名唱へまつるもいとはかなし

中々に共に消なてよゝ遠く

残る其名やわひしかるらむ

東に帰てはけふのまとゐも昔語にこそなと人々いひくてひめもすあそひ暮して、やかて爰を跡になし家路をさして帰むとなからのわたしもはやく打わたり、けふともなひつる何かしかり立よりて家とちはしめ人々に長き旅ゐに大方ならぬ恵を喜ひ聞えなと

かたみに盡ぬ名残をゝしみて爰を立出
淀川のほとりに至る比、都登りの夕舟
あまた引つれ行もいとをかし
　淀河のよとみもやらて行舟に
　　やかてかゝれる夕かすみ哉
暮過る比家に帰ぬ、卯月ふつかと
いへるに人々ともなひ難波村のほとり
見ありくほと、松の尾といへる酒楼にいこひぬ
爰はさもあらぬ茶亭成しか、さきつとし
火にあひて後いとよく家作り庭の
さまいとをかしう、池のほとりの芝山なと
みめくるに桜ははや過たれとあやめと
いへる草のやう〳〵咲出たるいとをかし
　　葉かくれに咲る汀のあやめ草
　　あやなく水に影匂ふ也
こは今の世にあやめといへる花にて
昔のにはあらすしはしうち興して
こゝを立出、河向ひなる大津湯に至る
爰は温泉をまねひたる酒楼にて
まらうと絶すいと賑はし、高楼に登れは
難波の村里一目にみわたされいとよき
なかめなり、しはしいこひて爰をたち出
少し左の方なる瑞龍寺てふ御寺に
まうて、夫より道頓堀の濱より舟に
うち乗夕つかた家に帰ぬ、日の
ちかきあたりをみもて行ほと、此月の
六日といへるに東より消息して
大うへのいとこよなき司にならせ
給へりしをいひおこせぬるに、夏野の
草の露待えたる心さしていとも
かしこきおほやけのおほん恵をあふき
奉りかたみに喜ひ聞えあひぬる、其
うれしさはたとしへなし、されハ
十一日といへるに爰をうち立事とは成ぬ、
十日雨いたう降風あらかり朝またきより
人々まう来て旅の調度何くれと物する
ほとはやく事よくとゝのひぬ、夕つかたより
みきとう出て人々に長きわかれを
告るに、亦逢みん事のかたけれは
はかなきこと共いひ〳〵て夜もすからかたり
あかしつゝ、はや明ちかく成ぬれは家の
隅々見めくりはた庭の木草にまて
名残をしむに心つからか暁の露
さへ常よりいとふかうおほえぬ、しのゝめ
つくる比いさとて人とのそゝのかすに今は
かたみにむねのみふたかりいふへき
こともあらす、かくてやむへき事なら
ねはかたみにいさめいさめくれつゝ袂を
わかちしは只夢とのみたとられて
　またとしもかたみにいはすいはれぬ
　　はいやはかなゝるけふの別路
十一日雨はやみたれと風いとあらし、
六ツ過る比なれしみたちを立出る、名残
をしささらにもいはす、只かなたこなたと
返りみらるゝのみせんすへなし、松屋町
すちを北に向ひ、天神橋のほとりより
左にをれ八軒家もうち過京橋に至る、
爰より送りの人々半斗いとまをつけて
立別ぬ、片町といへるを過て野道に至る、
爰は京街道となむよへり、かなたこなた
の小田にはきのふの雨に水まして
蛙の聲ひまなく聞ゆる、いと哀にて
　わかれこし心を水の下にしも
　　しる歟蛙のもろ聲に鳴
行々て守口てふ處に至る、難波より三里、
爰にて人々いとねもころに別を告て
袂をわかちぬ、弐里あまり行て枚方に
いこふほと風やゝしつまりぬ、此すくのなか
ら斗に天の河てふ河有て名いと
高しけに、秋ならねとも別の袖の
露よりや、かく名まさりけむいとをかし
　天の河秋ならなくに別ちを
　　せきとめよとや名まさりけん
此河の上は大和につゝきて下は淀河
に入に、其流れいとはけしくめくるめく
斗になむ、常はさもあらぬにや、きのふ
の雨いとつよき故成へし、猶行々て
八わたの御山の麓にいこふ、空いとよく
晴ぬ右の方はるかに御山を拝し、左に
行々て淀の大橋をうち渡り、いと長
き淀つゝみを伏見へとていそく、ほとはやく
も申の半はかりふし見の駅なる北國や
てふ家に着ぬ、よへ一夜いねされは
いたくこらしてはやくうちふしぬ
　里の名のふしみても猶難波江の
　　わかれの袖はかわかさりけり
十二日ていけいとよく、またきにふし見を立
出て大津の駅に至る、呼次のはま
膳所をもうち過瀬田の橋のほとりにて
昼の物なととゝのへ、瀬田のはしを

わたるとて

　渡行瀬田の長橋なからへハ
　またも都の花をみてまし

右に石山をはるかにふしをかみて行、左のかたに三上山いとちかうみゆ、猶行々て草津のすくのはしつ方なる梅の木和中散てふ家にしはしいこひて、七ツにはまたしき比石部の駅につきぬ

十三日ていけいとよくまたきにこゝを立出るに、空やう〳〵しらむ比、よもの梢の縁いとふかうわたさるゝえもいひかたきに、時鳥のをり〳〵おとつるゝいとをかし

　啼すてゝ行時鳥わかれ来し
　心を空になくさめよとか

横田河を渡る比ハ空いと晴々として日の影水に移りていと清らか也、河向ひなる茶亭にいこひて水口のうまやに至る、爰は加藤の殿の御城下にていと賑はし、猶行は水口と土山のすくのあはひなる野道のかたへニ松尾河てふ小川有、其流れいと清くしてさらにめかれぬ物から、空いとくもりて小雨降出たれは、いそきて爰を過土山のうまやにいこふ、しはしいこへるほと雨やみたれと風いとあらし、鈴か山ニ登る比風いよくつよく吹出て木立の音おとろくしう、身もすくむはかりいと物すこし、左のかたにいとふりたる御社は田村明神とかや、乗物なから拝し参りて

　鈴鹿山神のいかきにふりはへ
　てぬさと手向む言葉もかな

　吹すさふ風心せよさらてたに
　物すさましきけふの山道

なとおもひつゝ行程、左右松並たちて風いとあらく吹すさふ、向ひよりみたり斗の旅人来かゝり、こなたの乗物そこ〳〵とさしのそくをみれは難波にて茶のをしへの親とたのみし何かし也、こは弥生の末つかた、あまてらすおほん神ニまうてんとて立出しに、けふなむ其かへさなるゆくりなき對面を喜ひ聞えぬる物から、言へき事もなかはえいはて立わかれしは中々に名残をし

　すゝか山思ひもかけす逢みしは
　人の心の誠なるらむ

山のいたゝきなるいとあやしの家にいこひ、やかて山をおりむとするに、其けはしきまたいふ斗なし、からうして山をおり坂ノ下てふすくにいこひ、猶山路をたとるほと、左の方に筆捨山とかやいとをかしき山のすかた成に、つゝしの處々に咲たる其うるはしさたとしくなし、爰の茶亭に豊前の小倉の殿いこはせ給へりとて人おほく立たれはむなしく此を過行ぬ、むかし名高き画たくみの此山のすかたえ移さすして筆をこゝに捨しより

おへる山の名なりと聞つるに、けふかゝるさはりありて見捨て過ぬるいと本意なし、猶行に左の方ハいと高き山々そひえ、右の方はなたらかなる山のすその草いとしけりたる中にわらひのもえ出たる見捨かたくていさゝか打とらせぬ

　末遠き東のつとにをりてまし
　をり〳〵みゆる山のわらひを

夕つかた関のうまやにやとりぬ、此駅のはしつかたにいとあらたなる地蔵尊たゝせ給ふ、夜に入てまうてけるにいと廣やかなる御堂にみあかしの影いとかすかにて、物すこく久しくハえたへぬ心さして、しはし拝して帰りぬ

十四日ていけよし、またきに立出るかなたこなたの茶亭の軒に藤の花いみしう咲かりたるに、やう〳〵目覚るいとをかし

　賤か家の軒はにかゝるふち波の
　なみ〳〵ならぬ明ほのゝ空

行々て亀山の駅に至る、いと高き坂路をからうして登り、石川の殿の御城前なる町を過れは、左右に並たてる松かねにつゝしいとうるはしく咲たり、右の方に庄野河てふ流れいと清ら也、庄野のすくを過、山邊の里とかやいへる處をも過行は左の方ニ薬師佛の御堂いととふとけ也、空いとくもりたれは乗物なから拝しまつりて

坂路を登り行に、俄に雨降出たれ
は、石薬師てふ駅のはしつかたにて
雨よそひなしていそくほと、雨やみ空いと
晴やかに成ぬ、杖つき坂なといへるを
うち過はやく四日市のうまやに至る、
しはしいこひて行ニいと清き小河あり
四日市河とよふとかや、猶行はおなしさま
なる小河ふたつみつ有、何れも石河にて
流れいときよらかなり
　おもふことうち流せとやこゝかしこ(て)
　清けに水の行にや有らむ
富田といへる駅にては家々にて焼はまくり
ひさけり、爰にしはしいこひて行に、
此あたりの賤か家々もめんの打ひもを賣る、
色々の糸してなひたるを軒に懸
たるいとうるはしくみゆ、夕つかた桑名
のすくに着そや、過る比より雨いたく
降出風さへあらけれは、あすの舟出は
いかになといひくうちふしぬ
十五日雨風やみたれと空いとくらし
明はてゝ舟出するに、よものけしきも
みもわかす、雲いとふかし、されハ風いと
あらくして岸をはなれて行こと、矢の
如し
　時のまた國を隔て行舟の
　　さしもはるけき東路の空
舟の中くらくしていとつれくなれハ
さゝへなととう出て何くれと物かたらひ
はては人々せんすへなくてうちふすに
まとろむともなくはやく三里の河を
渡りて向に着、こゝは佐屋てふ駅にて
いと賑はし、しはしいこひて行に此
縄手道いとなかし、松のはやしのひま〳〵ニ
紅はた黄なるさまくの草の花咲乱、
うるはしさいふ斗なし、されとをり〳〵
雨降出ていとわひし、左の方はるかに
名古屋の御城みゆ、空晴やかならね
ば薄墨に画かけたるかとおもふ斗
いとかすか也、猶行々て名古やと宮
のわかれ道あり、右にそひ宮の駅
に至る、其賑はしさ大方ならす、けに
鄙の中なる都とも言つへく町の
なから斗に立たる熱田の宮の
一ノ鳥居いと大き也、すこし隔て二の
鳥居もおなしさま也、猶行は左
の方なる御社いとたふとけなれと、
爰を過る比雨いたくふり出てさらに
顔むくへくもあらねは、乗物なから
をかみて過けるこそいと口をし、はるか
過て雨やみぬ、笠寺てふ観音堂の
ほとりにしはしいこひて夕つかた
鳴海の駅にやとりぬ、夜に入て爰の
名におへるしほり木綿ひさく人おほ
くむれ来て、我さきと人々にすゝむる
いとかしまし
　かそふれは東の空もやゝちかく
　　なるみの里の旅ね嬉しも
十六日ていけよし、六つ過る比爰を立出
すこし行は有松といへる町也、よへつと
へりししほりやは皆爰にや、おなしみせ
いとおほく軒を並たる其家いときら
やか也、猶行々て尾張と三河の境の
小川あり、うちわたりていも河てふあひの
駅にしはしいこふ、はるか行て
池鯉鮒明神の御社有おりたちて
まうつ、いとふりたる御やしろたふとさ
言へくもあらす、苔おひたる御池に
おほくあそへる魚もおのつから御神
のみ名おへれはかたふとけにみゆ、かなた
こなた拝して立出、池鯉鮒のうまやを
過れはいと長き松のはやし也、此あたり
にをのわらはおほくつとひゐて、よつ
竹と歟いへる物ならし聲をかしう
歌うたひて物こふあり、猶行て左の方ニ
業平八橋の跡と彫たる碑あり
すこし隔て業平の観音彫たる
碑たちて、いとさゝやかなる御堂あり、
此あたりは其かみ彼卿東下りとかや、
世のことわさに言傳ふる跡なりと
聞もいとゆかし
　から衣着つゝなれにし言のはハ
　　昔を忍ふつまとこそなれ
行々て岡崎の駅に至る、爰はいぬる
水無月はしめつかた俄に水
あふれて田はたハさら也、家居残り無
おし流されしとかや、物おそろし
けに廣々せる野らと成、草一本
たにあらて、爰かしこに木共横
たはり、家のはしらうつはりなとまろ
はりたるいとおそろし、其折のさま

はた思ひやるたに身の毛いよたつ
斗になむ、橋のこなたに長者
屋鋪の跡上るり姫の跡なと彫たる
碑は残れとも、夫かとおもふ處もなし
矢はき橋もなかはくつれ落て
岸につなきたるなと、おそろ
しさいふ斗なし、舟にて渡りすこし
行は本田の殿の御城有、大手の御門
はた石の筑垣もくつれ落、別なる
町の家々も流れたるまゝくちたるあり、
あらたにみへたるも有、わつかに流れ
残りし古家のなかはゆかみたるなと
いとあはれになむ

　もの、ふの矢はきの橋もさはかりの
　たけき水にはあへすや有けん

行々て藤河駅も過れは、左右山々つら
なりたる松のはやしなり、右のかたなる
山の間におほくのおくつき並立
たるは、其昔今川何かしたゝかひうたれし
跡成とかや

　つるき大刀まちえし跡と聞からに
　すゝろ寒けき松風の聲

夫より赤坂の駅も過、夕つかた御油
のうまやにやとりぬ
十七日ていけよし、またきに笈を立出
吉田のすくもうち過れは、左右いと高き
岩山そひえ物すこけなるに、右の方
なる山のいたゝきにたゝせ給ふみ佛ハ
岩屋の観世音と唱へていとあらた成
とそ、いにしへ何かしの殿とかや此わたり
にやとらせ給ひし比、とみの難を
夢中に告させ給ひしによりて
其難をまぬかれ給ひしとそ、されは
今に彼殿より年々人してもうて
させ給へるとなむ、いつの比成にや其折
荒井の海ハ俄に切入たれは、今切
と名つくと人かたりぬ、此みほとけの
いとたふとさをはるかに拝して
うち過ぬ、二川のうまやにしはしいこひ
猶行て参河と遠江の境の小河うち
わたり、向ひなるいと高き坂路に登る
笈はさるか馬場とかや物すこけなる山路
をたとり〳〵て行ほとに、やかておるゝ
比いさゝか家並たり、こゝにいこひ猶行々て
白須賀の駅に出、またはるか行は
汐見坂てふいとけはしき坂路をおるゝ
に、はるか向ひに遠江なたと歟
いへる海みゆ、からうして荒井の駅に
行着しはしいこふほと、本陣何かし
あないして御関處に至る、乗物
のうちよりのそきみれは、関守人のいと
いかめしさ身もわなゝかれぬるに、やかて
老女みへ出てあらたむ、すみて乗物を
海邊にかき出るに、いきのほと
出るもをかし、笈は吉田の殿より守らせ
給へりとそ、されは別にみつかひ人
して何くれとあつかひ給ひ、舟なと
いとよく物せさせ給ふそかしこきや
やゝ舟にうち乗沖はるかに
こき出るに、波いとしつか、日の影
きら〳〵とまはゆきまて照わたり、遠き
山々みわたされ其なかめはたたとへん
かたなし、はやく一里の舟路を過て
舞坂のすくに着ぬ、笈にいこひて
おくれし人々を待つとへ、猶行々て
暮過る比濱松にやとりぬ
十八日ていけよし、またきに笈を立出
天龍河舟にて渡る、しはし行て池田
てふ郷のうまやに至る、笈に昔都に
めさせ給ひたる熊野と歟いへる女の
おくつきなりとていと大なる碑有、
かたへなる桜は彼人のうゑおきける
となむいとゆかし

　都人をしみしもむへ世に匂ふ
　なれし東の花の言のは

夫より見附懸河袋井の駅もはやく
過て、夕つかた日坂の駅にやとる
十九日空くもりぬ、またきに立出て
いとけはしき坂路を登り、行道の
なからに庭注石と歟いへる有、かたち
まろらかにて東の方に向ひ南無
阿弥の文字あり、こは昔たふときひし
りの彫給ふとなむ、猶行々て左の方
に小夜の中山てふ観音の御
堂あり、世に聞えたるたふとさおり
たちてまうてぬ、山をおり行はいと
清き小河、こは菊河といへる川の
末也と人をしへける、右の方に宗行郷
古跡とゑりたる碑あり、此郷ハ大方なら
ぬ、故ありてこゝらわたりをさすらへ給へりし

なと人の言あへるに、其存よしは
さたかにわきまへねといと、あはれに
おほえて
　心なき人もあはれと菊河の
　　なかれて世々に残る言のは
夫より金谷の駅に至る、扨大井川
わたらんとて板はしふたつみつわたり
行は、けに名におへる早河のなかれ
いとはけしく、さらに目をとろく斗なり、
蓮臺にて渡るに風すさましく
顔むくへくもあらす、からうして渡り
をへて嶋田の駅にいこふ、また行々て
瀬戸河をうちわたり、藤枝のうまやも過
岡部の駅にいこひ、夫より坂路いと
けはし、袮は宇都のや嶺とかや名に
おへる鴬かつらはひまつはり、青々せる
いとをかし、山をおりまりこの駅も過行ニ
此あたりニ木枯のもりしつはた山なと
いへる名處ありとは聞つれと、いつくを
さして歟いふならん、かきりある旅はくま
なく尋へくもあらすいと口をし、夫より
阿部河もうちわたり、行々て府中の
うまやにやとる
廿日空くもり風はけし江尻の駅に
至る、右の方海にて高き堤也、登りて
みるに三保の松原と歟いへる海に
さし出て、いとかすかにみゆ、袮は清見か
関の跡なるよし、猶くさ〴〵の見處も
有へけれと、今朝より風あらゝかなるに
此あたりは汐風いとはけしくいさこ
吹たて顔むくへくもあらす、浪の音
いとおとろ〴〵しあはれ、空晴やかにて
此海のおもてなかめたらんにはとかおもふ
に、いと名残をし
　はるかなる三保の松原みもわかす
　　沖つ汐風あらゝかにして
　清見かた浪のせき守幾かへり
　　人のこゝろをとゝめたりけむ
からうして袮をうち過、興津河渡
るころ風すこししつまりぬ、しはし行
ていとけはしき坂路に登る、袮は
さつた嶺とかやよへるとを登り、行まゝ
右の方に海みわたされいとよき
なかめ也、いたゝきに至れはさも廣
やかなる海の面真帆にみえ、遠こち
のはるけき山々一目にみゆるに、左の
かたに一きは高き山は明日なむ
こゆへき箱根の嶺也とそ、遠くみる
たにいとすさましき山のすかた
なるをこゆへきほと思ひやらぬ、しはし
いこひて山をおり、ふもとの茶亭にて
昼の物なと出させぬ、袮を立出て行に
右は海にして左は家並ていと賑し、
由井河を渡り行は此あたりハ海をうし
ろに家並たり、此家居のうしろを
田子の浦とよふとかや、蒲原のうまやも過
て不二河の渡しに至る、袮よりふし
のねいと高やかにみゆ、けふハそら
くもりたれは其いたゝきハ定かならねと、
こと山にぬけ出たるすかたはさら
にたとへん方なし
　か斗と思ひ懸きやふしの峯は
　　世にたくひなき山と聞しか
　何に我たくへていはしふしのねを
　　またみぬ人の誠とはせむ
ふし河のなかれいとはやきを
　幾とせをふるきみゆきの舞そめて
　　なかれハすらむふし河の水
猶行々て吉原の駅にやとる
廿一日けふも空晴やかなれと袮を立
出並松のほとり過る比、不二山いとあさ
やかにみゆ
　きのふけふ返りみしつゝ幾度か
　　とへとこたへはふいの芝山
浮しまか原とかやうち過、原の駅に
いたる、沼津のすくも過て三嶌のうまやに
いこふほと雨降出ぬ、袮を立出三しま
の御神にまうて、夫よりしはし
行は名に高き箱根の山へにさし
かゝりぬ、いとけはしき坂路を登り行ニ
をり〴〵雨降て、かなたこなたより雲おこり
いとくらく成、またすこし雨やみ空はれ
たる折々に駕籠よりのそけは、目も
およはぬまて高き杉ともおほひかさなれ
るさまいとおそろし、石わり坂と歟いへ
る處に至るニまろやかなる石並たる
坂なれは、駕籠かく者の杖するにも
其石にあたりてつとすへるなと、乗
物なから身もひるかへる斗わひしさ
いはん方なし、しはし登りてすこし

なたらかなる道のなからに甲石と
いへる有、其かたちによりて名つくにや
からうして行程、伊豆と相模の境と
いへるすくの本陣、亦原てふ家にやとりぬ
家のめくりは山より山そひえたれは、
梢に絶ぬ風の音、夜もすからひゝ
きわたりていもねられす、いとわひし
　こゝしさの行手のみかは箱根ち
　　は枕もやすくとられさりけり
廿二日ていけいとよし、五ツ過る比あるし
あないして御関處に至る、御あらため
ことなくすみて過行そいとうれしき、夫より
坂路猶けはしくおり登り行ほとに、
さいの河原と歟いへる處のいとさゝやか
なる御堂にてうちならす鉦の音
澄わたりて物あはれ也、権現坂なと
いとけはしきをうち過れは左の方の
山のなからに湖有、水清み渡り
て物すこして、うしの口かしの木坂
なと登りつおりつ、からうして畑
てふ處にいこふ、亦ふたつみつおり
登りて湯本といへる處に至る、爰は山中に
似けなく賑はしさ大方ならす、さま
〳〵のうるはしき挽物なとひさけり、爰
を立出いと水はやき河の板橋打渡る、
是なむ此山の麓にて小田原の駅
に至る、しはし行て酒匂川蓮臺
にてうちわたる、汐見橋は右のかたに
海みえなかめよし、鴫立澤の西行上
人の庵のほとり過る比は、軒はに
あさる雀色時とかやいふころなれハよくも
みす、きのふけふの山路にこうし
はて、からうして大磯の駅にやとる
廿三日ていけよし、朝とく爰を立出
もろこしか原うち過、花水橋渡る比
朝日花やかにさし出てけしきいと
よし、平塚の駅も過、馬入河うちわたり
て藤澤の駅に至る、遊行寺のほとり
にしはしいこふ、戸塚の駅もうち過
行々て、相模武蔵の境といへる坂を
こえ、ひつしの半とおもふ比程谷の
駅にやとりぬ
廿四日、空くもりぬまたいに立出て
金河の駅も過、新宿生麦なといへる
村々を過、川崎にしはしいこひ
夫より六郷河わたり、大森鮫津も過
品川の駅にいこふ、かくてむかへの為
よへよりこゝにまたせ給へりとて
母刀自はしめはらからなと、まうきま
しゝ其うれしさ、中々言尽す
へきにあらす、うちくつろきて
みきなと出させ絶て、久しきたいめを
かたみに喜ひ聞えつゝ、尽ぬ物語
に時うつりぬれは、爰を立出、海辺を
たとり〳〵て高なわも打過、芝口と歟いへる
處にて迎への人々ハこゝにて別を告、
家に帰もあり、猶送るもあり、扨みたちへ
といそくほとけに、大江戸の賑は
しさ、鄙の長路に引かへていと目覚し
生出し處といへとあまたの年月立
ては、何くれと其さまかはり、みる物聞物
いとめつらかにおほえて、只うひなる
心地するもをかし、扨夕つかた此みたち
に帰り着しに、爰にも人々うち
つとひ待喜ひ聞えつゝ、長き旅ねに
つゝみなかりしを、かたみいはひいは、
れていつはつへくもあらぬそなへての
心ならんかし、難波にて人々に別れ
しはきのふけふとおもふにはやくも
東に帰、かく人々に絶てひさ
しき物かたりにかたみいおもかはり
ぬるよなと、おなし事のみいひて日を送る
も只夢のことくになむ、かゝる嬉しき
中にもさきつとし父はた兄さへに
はかなくならせ給へりしそあかすかな
しき、けに常なきは人の世の習
とおもふ物から、何くれと思ひ出る事のみ
おほくして今さらに袖しほり、
あへねもかひなき業そかし
　ありしにもあらぬ古巣に帰り
　　来ていとゝ音に鳴谷のうくひす
　さためなき世とはしる〳〵ふる郷へ
　　帰て物をおもふ今日かな
かくて後は世のことわさのしけさまさりて
すける道すら捨るとにはあらて
いつしか師の君の御もとへ松吹風の
音つれさへ絶々に成にしそかひ
なきや、されはあつめし文もいたつらに、
しみてふ虫の往家とや成ぬらむかし、
こその神無月斗、師の君の御もとに

此年比音つれ参らせさりしおこたり
をわひ聞え参らせけれは、ありしに
かはらぬみこゝろはえをいとこま〴〵と
書つゝけ給て
　海山を隔しほとはかく斗
　　おほつかなくは過ささりしを
おなし年の霜月半、ある人の
もとより都なるやんことなきわたりに
しるへ有は歌書てさゝけよ、かならす
御草そへさせ給ふへしなと人していひ
おこせぬあれと、わらはもとより文まなひ
しとにあらねはいかてさることの
侍らんや、よきにまうしてよと
すまひぬれと、猶せちにいはせける
ま、、さのみはとて書ぬ、其としも暮て
今年睦月の半斗、都なる彼わたり
より、わらはか歌愛させ給ふのよしおほ
せ給はりて
　むさし野のいかなる種そをみなへし
　　遠き都に匂ひ来ぬるは
　一すちに分こし人をしるへにて
　　まよはすたとれ敷篤の道
かくなむおほせ給へりし、いとおほけな
き身のめいほく、何にかはたとへつ
へき、さはあれつたなき心には言へき
事もえわきまへねと
　おもひきや遠き雲井の花の香を
　　かゝる袂にとゝむへしとは
是ひとへに、師の君の年ころをしへ
道引給ひしことの保からねは、かゝる
こととそとあるにもあられぬ、かしこ
さにかくと告参らせしに
師の君もこよなうよろこはせ給ひて
おなし月の末のみかといへるに、ゆくり無
とはせ給ひて
　雲ゐよりもりくる月にみかゝれて
　　ひかりそはれる玉の横山
玉の横山はむさし野の名處也、そを
わか氏にかけ給へるなるへし、
十とせあまりの昔物かたりに春の日も
みしかう暮て帰り給ひぬ、夫より後は
をりくの御題なとも給はれは、いさゝ村竹
ふしなき事共いひ出つる物から
ぬは玉のやみちをたとるはかなき身
に、言の葉竹のいやしけなるをも
をしへさとし給ひなは、我世に
いけるさちなりとおもふまに〴〵かひ
つけし、草のはこひも言の葉も、いと
つたなさを返り見なきをこなるわさよ
と、人々わらはせ給ひなむかし
　かきつめし磯のもくつに言のは
　　のひかりをそへよ和歌の浦浪
　いさやみむ和歌のうら波
　　かきわけて藤に
　　ましはれる
　　玉の光を　　湘清
わさよと人ニ笑はせ給ひなむかし
　かきつめし磯のもくつに言のはの
　　ひかりをそへよ和歌のうら濱
　　路子
歌よみ習ひしに、始めてやんことなき
あたりに名誉ありしに、をはれる事
いとをかしくとりなされたり、いかて
右の巻々はやく書あらたまへ
この寺の殿にもいみしうゆかしからせ
給へはとくまゐらせてん
（異筆）
〳〵いてやみむ
　和歌のうら波
　　かきわけて
　藤にましはれる
　　玉の光を　　湘清

あつまのつと　終

研究員名簿

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター研究員

（あいうえお順）

センター長

髙　橋　隆　博

総括プロジェクト・リーダー

藪　田　　貫

研究者・研究協力者

明　尾　圭　造	妻　木　宣　嗣
※尼　子　奈美枝	西　本　昌　弘
有　坂　道　子	長　谷　洋　一
市　川　秀　之	浜　野　　潔
※伊　藤　健　司	原　田　正　俊
近　江　晴　子	藤　井　裕　之
大　谷　　渡	藤　田　真　一
小　野　功　龍	前　田　成　雄
※川　本　耕　三	南　谷　恵　敬
北　川　博　子	南坊城　充　興
北　川　　央	森　　隆　男
黒　田　一　充	藪　田　　貫
小　谷　利　明	山　本　　卓
※木　庭　元　晴	吉　井　克　信
酒　井　亮　介	吉　田　晶　子
髙　橋　隆　博	米　田　文　孝
鶴　崎　裕　雄	

P.D.（ポスト・ドクトラル・フェロー）

森　本　幾　子

R.A.（リサーチ・アシスタント）

内　田　吉　哉	祭礼遺産研究プロジェクト
内　海　寧　子	祭礼遺産研究プロジェクト
宮　元　正　博	生活文化遺産研究プロジェクト
千　葉　太　朗	生活文化遺産研究プロジェクト
松　本　　望	学芸遺産研究プロジェクト
櫻　木　　潤	歴史資料遺産研究プロジェクト

※2006年度より、新たに研究協力者として加わる

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業
オープン・リサーチ・センター整備事業（平成17年度～平成21年度）
なにわ・大阪文化遺産の総合人文学的研究

なにわ･大阪文化遺産学研究センター 2006

発行日　2007年 3 月31日
発行所　関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター
発行者　髙橋　隆博
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 関西大学博物館内
TEL 06(6368)0095　FAX 06(6368)0092
http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/home.htm
E-mail：naniwa@jm.kansai-u.ac.jp
印刷所　(株)NPCコーポレーション